

# GATE:MW 外伝集

ゼミル

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

<https://syosetu.org/novel/9235>  
9／の外伝集になります

基本的に本編後の時系列中心のお話になります。

※本編登場作以外の作品とのクロスオーバーも予定しています。

# 目次

Knockin,	on	Warfare Gate	6		185
Knockin,	on	Warfare Gate	5		174
Knockin,	on	Warfare Gate	4		165
Knockin,	on	Warfare Gate	3		156
Knockin,	on	Warfare Gate	2		146
Knockin,	on	Warfare Gate	1		137
Warfare Gate					
BLACK LAGOON		クロスオーバー: Knockin,			
GATE		自衛隊かの地にて、			
		平行世界と遭遇せり	15		128
GATE		自衛隊かの地にて、			
		平行世界と遭遇せり	14		118
GATE		自衛隊かの地にて、			
		平行世界と遭遇せり	13		107
GATE		自衛隊かの地にて、			
		平行世界と遭遇せり	12		96
GATE		自衛隊かの地にて、			
		平行世界と遭遇せり	11		90
GATE		自衛隊かの地にて、			
		平行世界と遭遇せり	10		80
GATE		自衛隊かの地にて、			
		平行世界と遭遇せり	9		68
GATE		自衛隊かの地にて、			
		平行世界と遭遇せり	8		60
GATE		自衛隊かの地にて、			
		平行世界と遭遇せり	7		52
GATE		自衛隊かの地にて、			
		平行世界と遭遇せり	6		43
GATE		自衛隊かの地にて、			
		平行世界と遭遇せり	5		35
GATE		自衛隊かの地にて、			
		平行世界と遭遇せり	4		26
GATE		自衛隊かの地にて、			
		平行世界と遭遇せり	3		17
GATE		自衛隊かの地にて、			
		平行世界と遭遇せり	2		9
GATE		自衛隊かの地にて、			
		平行世界と遭遇せり	1		1

K n o c k i n ,	K n o c k i n ,	K n o c k i n ,	K n o c k i n ,	K n o c k i n ,	K n o c k i n ,	K n o c k i n ,	K n o c k i n ,	K n o c k i n ,	K n o c k i n ,	K n o c k i n ,	K n o c k i n ,	K n o c k i n ,	K n o c k i n ,	K n o c k i n ,	K n o c k i n ,	K n o c k i n ,	K n o c k i n ,	K n o c k i n ,	K n o c k i n ,	K n o c k i n ,	K n o c k i n ,	K n o c k i n ,		
o n	o n	o n	o n	o n	o n	o n	o n	o n	o n	o n	o n	o n	o n	o n	o n	o n	o n	o n	o n	o n	o n	o n		
W a r f a r e	W a r f a r e	W a r f a r e	W a r f a r e	W a r f a r e	W a r f a r e	W a r f a r e	W a r f a r e	W a r f a r e	W a r f a r e	W a r f a r e	W a r f a r e	W a r f a r e	W a r f a r e	W a r f a r e	W a r f a r e	W a r f a r e	W a r f a r e	W a r f a r e	W a r f a r e	W a r f a r e	W a r f a r e	W a r f a r e		
G a t t e 3 1	G a t t e 3 0	G a t t e 2 9	G a t t e 2 8	G a t t e 2 7	G a t t e 2 6	G a t t e 2 5	G a t t e 2 4	G a t t e 2 3	G a t t e 2 2	G a t t e 2 1	G a t t e 2 0	G a t t e 1 9	G a t t e 1 8	G a t t e 1 7	G a t t e 1 6	G a t t e 1 5	G a t t e 1 4	G a t t e 1 3	G a t t e 1 2	G a t t e 1 1	G a t t e 1 0	G a t t e 9	G a t t e 8	G a t t e 7
443	433	425	412	402	394	385	374	363	351	340	328	315	302	292	281	270	261	251	243	234	223	214	206	197

K	K	K	K	K	K	K	508	K	K	K	K	K	K	K
n	n	n	n	n	n	n		n	n	n	n	n	n	n
o	o	o	o	o	o	o		o	o	o	o	o	o	o
c	c	c	c	c	c	c		c	c	c	c	c	c	c
k	k	k	k	k	k	k		k	k	k	k	k	k	k
i	i	i	i	i	i	i		i	i	i	i	i	i	i
n	n	n	n	n	n	n		n	n	n	n	n	n	n
o	o	o	o	o	o	o		o	o	o	o	o	o	o
n	n	n	n	n	n	n		n	n	n	n	n	n	n
W	W	W	W	W	W	W		W	W	W	W	W	W	W
a	a	a	a	a	a	a		a	a	a	a	a	a	a
r	r	r	r	r	r	r		r	r	r	r	r	r	r
f	f	f	f	f	f	f		f	f	f	f	f	f	f
a	a	a	a	a	a	a		a	a	a	a	a	a	a
r	r	r	r	r	r	r		r	r	r	r	r	r	r
e	e	e	e	e	e	e		e	e	e	e	e	e	e
G	G	G	G	G	G	G		G	G	G	G	G	G	G
a	a	a	a	a	a	a		a	a	a	a	a	a	a
t	t	t	t	t	t	t		t	t	t	t	t	t	t
e	e	e	e	e	e	e		e	e	e	e	e	e	e
4	4	4	4	4	4	3		3	3	3	3	3	3	3
4	3	2	1	0	9	8		7	7	6	5	4	3	2
								5						
575	566	554	544	535	525	515			501	493	485	474	464	454

## GATE 自衛隊かの地にて、平行世界と遭遇せり1

ある神は言った。

世界とは、宇宙開闢の瞬間を源泉とする川のようなものであると。時空の地へ至る混沌に向けて流れていく過程で山や谷の影響を受け、蛇行し、細くなり、狭くなり——時には別の川と合流する程に近づく時もある。

ある神は言った。最も近くなった時、ほんの少しだけ力を加えてやれば川と川、2つの世界が接する事になると。

2つの世界が接した時に開いた合流部を神も人も『門』と呼称した。

ところで。

それぞれの世界を川に例えた場合、それらを視覚化しようとしたら、大抵の人は簡単で分かり易い平面的な河川図を思い浮かべるだろう。

だが実際の川というものは平面状の変化だけでなく、高さから低きに向かって流れるように高低差というものがある。二次元では一見並行して流れるように見えても、三次元で見ると大きな高低差があつて合流しようがない、そんな川も決して珍しくないのだ。

他には地下水脈。もしくは人工的な下水道か。

平面状では1本の川に見えて、その真下の奥深くに別の川が流れている場合もある訳で。左右に曲がりくねるだけでなく折れ線グラフよろしく高さが上下動する、そんな流れの川だってありえる訳で。

そう、例えばの話。

縦軸以外は全く同じ軌道を描きながら平行に流れていたそれぞれ  
の川が、何かの拍子に接触してしまう場合だって起こりうる訳で。

……というか。  
起きちゃったのである。

〈閉門騒動より数か月後〉

伊丹耀司 特地派遣部隊現地残存組・二等陸尉  
日本国アルヌス州／アルヌス駐屯地

地球とを繋ぐ『門』が閉じて尚、4672名もの自衛隊員が未だ残  
存するアルヌス駐屯地は今、閉門騒動以降最大の緊迫した空気に包ま  
れていた。

「あれって、アレだよなあ？」  
「ええ、アレだと思います」

緊急呼集を受けて押っ取り刀で駆け付けた伊丹と富田は視線を合  
わせぬまま、そんなやりとりをした。

駐屯地の中心部に位置する巨大なドーム——かつて銀座と特地を繋ぎ、中国とアメリカその他各国の作業員による破壊工作を受けて異世界間を繋ぐ役目を停止した『門』の残骸がある、その空間。

水溜まりの水面のような、ガラス窓のようなものが垂直に空中で浮かんでいた。

帝国が銀座へ通じる異世界への入り口を強引に固定すべく、水晶や建材を用いてアルヌスの丘に拵えた魔法装置を用いるその手前の状態……

異世界と繋がった直後、云わば素の状態の『門』に間違いなかった。伊丹は日本でレイが『門』を開く魔法の実験に立ち会っていたし、富田も閉門騒動の際に暴走した『門』が複数の異世界に同時接続された瞬間に出くわしていたから見覚えがあった。

「またあの時みたいなの蟲の化け物がウジャウジャは勘弁して欲しいなあ」

伊丹を挟んで富田とは逆の位置に立つ栗林が嫌そうに愚痴った。伊丹も心から同意見である。

チラリと同じく異常事態の対処に召集された専門家、すなわち現状で唯一異世界の『門』を繋げる魔法こと穿門法の使い手である魔導師の少女を伊丹は見やった。富田もそれに倣った。

レイは、プラチナブロンドの頭を横に振った。

「違う。あの『門』の出現に私は一切関わっていないし、心当たりも無い」

「だよなあ。じゃあさレイ、勝手に『門』が出現したと仮定した場合、その原因はどんなのが考えられそう？」

「またハーディが引つ掻き回そうとしてやらかしたんじゃないの？」

異世界の入り口から以前の蟲獣や触手みたいな危険生物が出現しても即討伐できるよう、剥き身のハルバードを手に身構えながら口ウ



リイが口を挟む。

「ロウリイが述べた内容の可能性も前例がある以上当然考慮すべき。もしくは何らかの干渉も受けず本当に偶然、別の世界と接触してしまいい自然に『門』が開いてしまった場合も考えられる。あの程度の規模であれば自然に生じたものでもおかしくないとと思われる」

機甲部隊も通行可能な規模だったアルヌスの『門』とは比べ物にならない、人が1人潜り抜けられる程度のサイズだ。

「或いは、こういう理由も考えられる」

「それってなあに？」

小首を傾げてのテユカの問いに、レイは少しの間考え込む素振りを見せてから重々しく口を開いた。

少女の顔は、珍しく緊張で張りつめていて。

周りの伊丹達もレイが告げた別の推測を聞かされるや、揃って顔を固くさせざるを得ないだけの深刻さがその内容には存在していた。

「私やハーディのような<sup>特</sup><sub>地</sub>の存在ではなく——・向<sup>こ</sup>う<sup>側</sup>の何者が穿門法と同等の技術を用いて『門』を開けた可能性がある」

マジか、と呻くので伊丹には精一杯だった。

直後、水面に似た『門』の表面に波紋が生じたからだ。それは水底の魚が水面に飛び出そうという前兆を思わせた。

閉門騒動で猛威を振るった大小様々な蟲獣に大いに苦しめられた記憶も生々しいだけに、『門』を包囲する自衛隊員達の緊張感も半端ではない。

何時でも射撃出来るよう小銃の安全装置は解除済みだし、銃以外に

も火炎放射器や対戦車兵器を構えた隊員のみならず、燃料不足で稼働制限が課せられた74式戦車までも砲口を『門』へ向けてスタンバっている辺り、部隊を集結させた司令部まで揃いも揃って本気の対応である。それだけ蟲獣の軍勢が凄まじく恐ろしい存在だったという証左とも言えた。

とうとう向<sup>異</sup>こ<sup>世</sup>う側の生命体が、『門』を潜り抜けてその姿を現した。

現れた存在は2足歩行の人型をしていた。

自衛隊員達と同じヒト種なのか、特地の亜人に近い存在なのかまでは判別出来ない。何故なら顔を含め全身を装甲で固めていたからである。

それはまるでSF映画かゲーム、もしくは特撮に出てきても違和感がないだろう、レーシングスーツの上に装甲を貼り合わせていったような赤と黒の全身鎧だ。

デザイン的には顔部分が古代や中世より現代的なスタイリッシュ感を漂わせている。

隊員達の間には警戒心と同時に、僅かな困惑も広がっていく。

出現した相手が武装しているのも一目で判別出来た——鎧以外の装備が全て見覚えのある地球製の武器だったからだ。

両手には限界までカスタマイズされたグレネードランチャー装着のM4カービン。背中にはM14EBR、おまけにホルスターの拳銃は詳細は不明だがおそらくグロックだ。

どれも自衛隊の採用品ではないが地球世界で誕生した銃火器である。鎧の上からこれまた戦場で戦う兵士の定番装備である弾薬携行用のチェストリグを身に着け、それぞれの予備マガジンも持てるだけポーチに詰め込んで携行しているのが一目瞭然。

「……んんん？」

その時、何かに気付いた様子で伊丹が唸った。

「なあ、あのプロ○クトギアっぽいものの表面覆ってるのってどっかで見たのに似てないか？」

伊丹の疑問に答えたのは、目を細めて人型物体を観察していたレイだった。

細めていた目が不意に開かれる。そこには驚きが宿っていた。

「……あれは、炎龍の鱗？」

「へえっ？」

レイから飛び出した意外な言葉に栗林から素っ頓狂な声を漏れた瞬間、人型が動いた。

全身装甲で身を固めた完全武装の存在が身動ぎした事で緊迫していた自衛隊員達も一斉に反応する。各々の銃を人型へと再照準し、人型の一挙一動に目を光らせる彼らの多くは緊張による発汗で迷彩服の内側をジトリと湿らせている。

対して人型は………M4カービンから両手を離れたかと思うと、頭の高さにまで掲げてみせた。

異世界含め万国共通、敵意が無い事を示すジェスチャーである。

両手に何も持っていない事を示してから人型は手を頭部へと移動させ、髑髏マークがペイントされた兜を外した。中身が露わにされる。

瞬間、集結した隊員達の間広がったのは………果てしない困惑だった。一部は目を見開き、口をポカーンと開けて銃口を下げてしまい、そのまま硬直すらしてしまった。

そして何より、集結した隊員達を驚愕させたのは。

「あー、えー、いやあどうもどうも……もしかしてここ、アルヌスの丘  
だったりますか?」

どっかのオタクでグータラで、そのくせ妙に特地の少女達からモテ  
てる二等陸尉とそっくりな(でも彼らが知ってるそれよりも心なしか  
ちよつとだけ精悍さをにじませた)顔が、兜の中から出現したからで  
ある。

ついでに声もそっくりだった。

どう考えても伊丹耀司その人だった。

「え? え? もしかしてあれって、俺え!?!」

「はあ? いや、えつ、いやいやいやいや何それ嘘でしょ隊長が2人い  
!?!」

「あらあらあらあ?」

「お父さんがもう1人……?」

「これは………理論的にはあり得るとはいえ、流石に予想外」

栗林に何時もの3人娘も目を見開いて大なり小なり驚きを露わに  
する。当然もう1人の自分が突然現れた伊丹も困惑して、指先を『門』  
から出てきた同じ顔と自分の間を行ったり来たりさせざるばかりだ。

そこへ更なる爆弾が『門』が投入、というか出現。

「ちよつとお呼んでるんだから無事ならさっさと返事しなさいよお  
……あらあ、もしかしてこれってえ、もしかしちやうう?」

「こ、今度はロウリイがもう1人!?!」

「テユカにレレイ、ヤオまで出てきた!!？」

そう、別世界のロウリイにテユカにレレイまで『門』から出現したのだ。悉く見慣れた人物が次々と増えただけに、取り囲んでいた隊員達も警戒を忘れてざわめいてしまっている。

「もしかして、あの『門』の向こう側って異世界じゃなくて……」  
「同じ顔の同じ名前が住んでる、平行世界だったみたいだねえ」

2人の伊丹は鏡に映したような、全く同じ苦笑いを浮かべたのであった……

## GATE 自衛隊かの地にて、平行世界と遭遇せり2

——事の発端はこうだ。

何やかんやでピニヤを新たな帝国の皇帝改め女帝の地位へ祭り上げる事に成功した自衛隊は、そんなこんなで働くと引き換えに無事アルヌスを中心とした生存圏の確保に成功した。

その後もピニヤや政変後牢獄に収監されていた講和派議員の後ろ盾として存在感をアピールしつつ、皇宮掌握によってピニヤから受けられるようになった支援の下、あれやこれやと試行錯誤して今後の目標達成に必要なタスクを行い始めてから早数ヶ月。

ゾルザル派によって受けた被害からの復旧の目途が立ち、生き残った住民や商人に協力してもらった他に帝都中に公開された自衛隊の暴れっぷりを聞きつけた有象無象の商売人達が媚を売ろうと行動した結果、アルヌスでは再び人と物資と経済活動が活発に行われるようになっていた。

復活したアルヌスの経済活動に、自衛隊特地域残留部隊は『門』が存在していた頃以上により積極的に加わるようになった。

活動資金も物資も潤沢に注ぎ込んでくれた日本との接続が途絶えてしまったのだから当然である。今の彼らは自分の食扶持は自分で稼がなくてはならない立場なのだ。

ピニヤからの支援に加え彼女個人税金や出店の売り上げの半ば雇われ兵としての報酬、復活したアルヌスの街からの上税金や出店の売り上げがりが今の自衛隊の資金源である。

ここまでが前置き。

さて、日々すり減っていく備蓄物資に戦々恐々としつつ地球の知識やその産物（一部のオタク趣味な隊員達が持っていた妙な知識含む）を切り売りし、幾度かのイベントをくぐり抜け、そうして幾何かの余裕を得た自衛隊残存部隊は本格的に現状解決への行動を開始した。すなわち『門』の再開だ。

ここで鍵となるのはハーデイから門の開通法、所謂穿門法を授かったレレイである。

レレイ自身が復活したアルヌスの街の生活組合幹部としての役割やら、最年少導師号の榮譽を手にした彼女やその師のカトーに教えを請おうと押し掛けたロンデルの学徒達の相手やらで忙しかったのだが、それでもレレイは穿門法の研究自体は細々と、だが着実に進めていた。

特地残存部隊が『門』の再開通へ本格的に乗り出すと、レレイもまた穿門法の研究を次のステージに進める事にした。

……むしろ初心に帰る、と言った方が正しいか。

皇宮での一大決戦で大いに多用した事もあり、同じ世界に繋がる『門』を生み出す技術についてレレイは既に熟練してはいたが、本来こちらはあくまで応用の産物であり穿門法の正しい使い方ではない。云わば習得した内容があべこべになってしまっている状況なのだ。

だから初心に戻る。

その日、レレイは記録やら監視やら見物に集まった伊丹達自衛隊員の前で初の異世界間『門』の開門実験に挑んだ。

最初から最終目標である銀座へ繋ごうとは考えなかった。何事もまずは慣らしを重ねて経験値を稼ぐべきだとレレイも自衛隊側も意見は一致していた。

そんな訳でとりあえずまずは最も近い異世界に繋いでみたレレイである。

……そしたら何か、異世界ではなく並行世界に繋がってしまった。繋がっちゃったのである。

「——そんな訳で改めまして、『門』の向こうで自衛隊員をやっております伊丹耀司二等陸尉であります」

「ロウリイ・マーキュリーよお。『門』の向こうでは主神エムロイの使徒を務めているわあ」

「テユカ・ルナ・マルソーよ」

「……レレイ・ラ・レレーナ」

「ヤオ・ロウ・デュツシだ。我が方の世界でもヨウジ殿に此の身を捧げている」

厳戒状態から一転、啞然茫然で銃を構える事も忘れた自衛隊員へ向けて兜を外した伊丹はペコリと一礼した。

その隣のロウリイは優雅なカーテシーを決めて挨拶してみせる。鎧姿の伊丹と一緒に現れた残りの少女達も各々名乗りを上げたり、小さく会釈したりとそれぞれのやり方で挨拶を行った。

平行世界を繋ぐ『門』から出現したのは人々だけではない。水面の様な『門』越しに有線で操作と映像送信を行う爆発物処理用の小型無人地上車両 UGVも同伴している。

中継用カメラだけでなく伊丹が携行する無線機とWi-Fi機能付きアクションカムの電波をやり取りする為の小型アンテナも搭載しているので、UGVの有線が繋がっている限り音声通信や伊丹視点の動画も『門』の向こうへ届ける事が可能だ。

「あーこれはご丁寧にどうも。自分も伊丹耀司二等陸尉であります。こっち側でも自衛隊員やっています」

真っ先に立ち直って返礼したのは迷彩服を着た方の伊丹だった。



それどころかつい流れで握手まで交わしちゃったりしている。  
どの世界でも伊丹という人物は、如何なる状況下に置かれようと我を保つ事に特化した精神性が共通しているのかもしれない。

「どっかのSFでもう1人の自分と接触すると消滅するなんて見た記憶があるけど、実際は違ったみたいだねえ」

「だねえ」

「あっはっは」

等と格好を除けば鏡合わせのように笑い合う始末だ。

一方で女性陣はと言うと。

(じ〜〜〜〜〜〜〜)

向こう側の女性陣をこちら側のロウリイ達は上から下まで眺め回したかと思うと、徐に額を寄せ合って小声を交わし始めた。訝しげにその様子を眺める向こう側組。

「ねえ皆、気付いてる?」

「やはりテユカ達も鏡合わせの世界から現れた己に違和感を感じている?」

「そうなのよねえ。何だかあ妙に気になるのよお」

顔を見合わせた少女達はセーの、と同時に口を開いた。

「「向こう側のロウリイ・テユカ・レイ私達、妙に色っぽくない?」」

そうなのであった。

一見すれば平行世界から現れた自分達はまるでそっくりそのままコピーしたかのようだ。服装の趣味も共通しているようで、何の偶然かそれぞれゴスロリ神官服・Tシャツ&ジーンズ・導師服とやはり同じ衣装姿をしている。

にもかかわらず、3人娘は平行世界の友人達に対し微妙な差異を抱かずにはいられなかった。

それは例えばチラチラと意中の男性へ送る視線に含まれる温度だとか、同じ服装にもかかわらず微妙に自分達よりも色香を漂わせる着こなし方だとか、着替えや入浴の度に見かける自分達のそれよりも何だか曲線が強くなったりボリウムアップしていたり妙に充実していたりする体の一部部位だとか、そんな感じである。

伊丹との出会いをきっかけに知り合って早数年。年中ほぼ毎日寝食を共にしてきた仲だからこそ、ロウリイとテユカとレイは互いに平行世界の己達との僅かな違いを敏感に見抜く事が出来たのである。

そこへ決定的な一言を投下したのはヤオであった。比較的におらかな種族であるダークエルフもまた、そこら辺の機微には割と敏感なのだ。

「もしや向こう側の世界の御身らとイタミ殿は我々よりもより親しい関係にあるのではないですか？ その、既に同衾を済ませて男女の仲として成立しているとか」

「それよ!!!」

こちら側の3人娘は一斉に声を上げた。向こう側の3人娘とヤオ、2人の伊丹はいきなり大声を上げた彼女らを驚いた様子で見た。

「そういえばあ、向こうのヤオってばヨウジイの事名前前で呼んでたわよねえ?」

「それってつまり向こうのヤオもお父さんと……?!」

「あちらのヨウジは性豪?」

「な、何て破廉恥……!」

赤裸々トークが耳に入ってしまった栗林の頬が赤く染まった。脳筋爆乳娘は耳年増でもあった。

「すまないが道を開けてくれ！」

その時、彼らを包囲する自衛隊員達が俄かにざわつき始めた。迷彩柄の人の壁が割れる。

現れたのは司令部から直接現場の状況を把握しようと自ら出向いてきた狭間達幕僚幹部の団体だった。その中にはデリラに車椅子を押される柳田の姿もあった。

伊丹達の前まで出てくるなり、柳田は呆れたような、頭痛を堪えるかのような、或いはその両方か、眉間に盛大な皺を作って頭を抱えながら苦々しい声を漏らす。その背後ではデリラが迷彩服の伊丹と鎧姿の伊丹を交互に見ては目を瞬かせた。

「異世界の『門』の次は平行世界かよ……おまけによりにもよってお前が2人に増えるとかどうなってんだよ。なあおい伊丹よお。お前一体全体どういう星の下に生まれてきたんだよ？」

「夢じゃないんだよね？ 本当にイタミの旦那が2人居るのかいこりやあ？」

伊丹も伊丹で、鎧を着た方の伊丹は車椅子にさせられた柳田を見て目を丸くしていた。

「どしたの柳田さんそれ？ こっちの柳田さんに何が遭ったんだ？」

この反応に柳田と迷彩服の伊丹は眉を顰めた——言動からしてあちら側の柳田自分はデリラと争って負傷していないのか？

平行世界の『門』から出現した伊丹がこちら側の箱根にて海外の工員から回収した中に含まれていなかった銃火器で武装していた事

といい、こちら側では未だ作られていない龍麟の鎧を装備している事  
といい、どうやら平行世界は自分達が思っていた以上に様々な差異が  
存在しているのかもしれない。

近寄ってからこちら側の伊丹も気付いたのだが、向こう側の伊丹が  
纏う鎧はよく手入れされていて尚消えぬ硝煙と血の残り香を微か  
に漂わせていた。どれだけの硝煙に燻され、どんな戦場に身を投じれ  
ばこうなってしまうのか想像もつかない。

目の前に並んでいる自分は自分であって自分ではない……冷たさ  
を伴う奇妙な感覚に囚われた迷彩服姿の伊丹の顔から曖昧な笑みが  
薄れ、所属不明の存在と相對したかのように思考が次第に警戒モード  
へと塗り替えられていく。

極めつけは何時の間にか迷彩服の伊丹の傍らにやって来ていた  
ロウリイからの耳打ちだ。

「ところでえ気付いてるヨウジイ？ 向こう側から現れたヨウジイつ  
てばあ、咽返りそうな位に死臭と戦場の臭いいぐさばを纏わりつかせてるわ  
よお」

「……具体的にはどれぐらいのレベル？」

死を司る特地の正神の石柱たるエムロイに仕えるロウリイは、死後  
の魂といった云わばオカルティックな残滓を見抜く事にも長けてい  
ると知っているからこそその質問。

デリラも兎耳をピクピクと揺らして2人のやり取りに耳を傾けて  
いる。拾った内容を柳田にも伝えようというのだろう。

「1000や2000どころか10000でもきかないわねえ。もしかする  
と万を超えてるかもお。」

一国の長や将みたいな軍を率いる立場であれば1度の会戦で大勢  
の死を間接的に生み出すのは珍しくないけどお、向こう側のヨウジイ  
に纏わりついてる死者の気配は自らその手で殺めた者のそれよお。

……下手するとお、エムロイの使徒として私がこの1000年の間

に誅を下した数よりも多いかもしれないわあ。あまりに纏わりついてる死の気配が濃過ぎてえ、まるで向こうのヨウジイそのものが死の概念の集合体みたいになってるものお」

伊丹に囁いた時のロウリイの表情は、直前までレレイ達と姦しくしていたのが嘘のような真顔だった。

迷彩服の伊丹は固まった。ついでにデリラから耳打ちされた柳田も表情を凍りつかせた。

……特地で死神扱いされるロウリイよりもヤバいって、一体向こう側の世界の俺伊丹は何をやらかしたんだ!?

「とりあえずこっちの司令部の皆さんも集まった事ですし、まずはお互いの現状把握について話し合うとしましょうか」

彼らの気配の変化を感じ取った鎧姿の伊丹はしかし、向こう側の現地住民からロウリイに続く新たな死神扱いされている存在とは感じさせぬ緩い笑顔のまま、彼もまた『門』の向こうの司令部と通信を経て泰然自若に提案するのだった。

## GATE 自衛隊かの地にて、平行世界と遭遇せり3

神の炎が、進軍してきた米軍と、防衛していた中東の防衛軍ごと都市を焼き尽くした。

歴史上、極東の島国でたった2回だけ生み出されるに止まっていた筈の3つ目のキノコ雲を、司令部に集まった桜と横線入りの略章を迷彩服の襟元に縫い付けた男達は呆然と見つめるばかりだった。

新たに出現した『門』の先、『向こう側』の特地から連絡員として送り込まれた特地残留部隊の尉官は、己の世界の地球で起きた激動の戦史を語り始める。

「――2011年。中東の独裁者によってロシアから密かに首都へ持ち込まれていた核爆弾により、独裁者捕獲の為首都へ進軍した米軍に3万人の犠牲者が発生」

映像が切り替わる。

多くの利用者と混雑する空港、そこに設置された監視カメラの記録映像。

次の瞬間、どこからともなく出現した完全武装の男達が乱射した銃撃が非武装の人々を薙ぎ払う。空港施設は一瞬にして虐殺の現場と化した。

「5年後の2016年、モスクワのザカエフ国際空港に於いて銃乱射テロが発生。

この時発見された犯人グループの死体の身元がアメリカ人であった事から、当時よりロシア国内で高まっていた反米感情が爆発的に増大。

後の調査により死体となって発見されたアメリカ人は主犯であるウラジミール・R・マカロフ率いる国際的な過激派集団に潜入していたCIA工作員であり、情報漏洩により正体を把握された上で米露間の国際関係悪化を図るスケープゴートとして利用された事が判明したものの、それらが明らかにされたのは全てが手遅れになってからでした」

映像が切り替わる。

アメリカ東海岸の主要都市部。住宅街の空をロシアの軍用機とパラシュートで舞い降りるロシア兵が埋め尽くす。ワシントンDCがロシア軍の機甲部隊に蹂躪されホワイトハウスにロシア兵が立て籠もる。マンハッタンの高層ビルが巡航ミサイルで半ばからへし折られ、ニューヨーク港は艦隊の墓場と化した。

「空港でのテロ事件の報復としてロシア軍はアメリカ本土への軍事侵攻を実行。

アメリカの主要政府機関及び金融街は壊滅的な打撃を負ったものの、直後ロシア本土から発射されたとされる所属不明の核ミサイルが東海岸上空で炸裂。高高度核爆発が引き起こした大規模な電磁パルスによって現地に展開していた兵器の大半が使用不可能となった事がきつかけとなり、一時的にフロリダ半島まで戦線を押し込まれていたアメリカは最終的に国土からロシア軍を撤退させる事に成功します」

「4発目の核だ」と

呆然と、顔色から生気を失った桜と二本線の階級章付きの幹部自衛

官の1人が眩いた。

この場に集まる他の自衛官達も似たような顔色で、吐き気を堪えるかのように口元を手で押さえたり頭を抱えたりといった姿を晒している。最高階級たる陸将の狭間ですら腕組みをして顔を酷く強張らせているぐらいだ。

—— 気持ちは分かるぜ、皆様方。

説明を行う男は同情を覚えると同時に微かに抱いた捻くれた愉快さを押し殺しつつ、淡々と解説を続ける。

「それから約2ヶ月後、西側陣営に属する欧州各国の首都及び政府施設が存在する都市部にて同時多発化学兵器テロが発生」

映像が切り替わる。

民間人のホームビデオだろうか。ロンドンの街並み。親子連れのはしやく声。その背後にチャリティーの広告が描かれたトラックが停まったかと、思うと妙に物々しい姿の運転手が急いで離れていった。

—— 爆発。毒々しい煙が親子連れを、撮影者を、通行人を……

その場に居合わせた不運な人々を街ごと覆い隠していく。

別の映像では軍事回線によるビデオ通話から抜粋したのか、軍人だろう化学戦装備に身を包んだ人物が苦しげな呼吸を繰り返しながら、基地が化学攻撃を受けて壊滅し自分も毒ガスに晒されて助からないと相手へ必死に伝える姿が流れた。

「化学兵器による大規模攻撃と同時にロシア軍が行動を開始。命令系統と戦力を同時に失った欧州各国はロシア軍の電撃侵攻に全く対応出来ず、結果欧州全土がロシア軍の展開を許す事になります」

映像が切り替わる。

死の煙が漂うパリをロシア軍の機甲部隊が闊歩する。プラハではロシア軍兵士によって現地民が次々と処刑され死体の山が積み上げ



られる。ドイツでは反撃に送り込まれた米軍の戦車部隊がハンブルグで目覚ましい活躍を遂げるも、ベルリンではビルを崩落させて進軍ルートを塞ぐというロシア軍の反撃によって多くの米兵が巨大なコンクリート製の墓標の下敷きにされた。

——第3次世界大戦勃発。その規模はほんの少し前のアメリカ本土侵攻とは比べ物にならない。

聴者の間から一斉に、悍ましい物を見たと言わんばかりの呻き声が漏れた。

「この化学兵器攻撃及びヨーロッパ侵攻もまた米露間の軍事衝突を企んだマカロフ率いる過激派集団の暗躍によるものであったと後日判明。

こちらについては欧州各国の残存戦力から補助を受けたアメリカの欧州派遣軍が占領された地域の奪還が進む中、以前より米軍と欧州各国政府とは別ルートでマカロフを追跡していた反マカロフ勢力からの情報提供により当時のロシア大統領が欧州侵攻以前にマカロフにより拉致・監禁されている事が発覚しました」

「何という事だ。これだけの大战を、たった1人の男が引き起こしたというのか？」

信じられないという感情がありありと伝わってくる幹部の質問を彼は無視して続けた。

「欧州派遣軍は反マカロフ勢力と合同でロシア大統領ならびにその息女の救出作戦を実行。参加者に多くの犠牲を出しつつも大統領とその家族の救出に成功しました。

ロシア大統領の証言によればマカロフからロシアに配備されている核の起爆コードを執拗に尋問されたとの事であり、マカロフのこれまでの傾向と経歴を踏まえた結果、もし救出が失敗していた場合には全面核戦争へと悪化していた事は確実だったと結論付けられています」

まさに最悪の悪夢だ。聞かされた幹部の面々は最早顔面蒼白だった。

「救出されたロシア大統領が和平条約に署名し、これによって第3次世界大戦は正式に終結を迎えます。

権力の座を追われたマカロフは後に第3次大戦終結から3ヶ月後、潜伏先のアラビア半島で潜伏していた所を暗殺部隊に襲撃され、死亡が確認されます。

先に述べた北米大陸侵攻を含めた第3次世界大戦終結までの期間は約2ヶ月、最終的な犠牲者数は軍人・民間人合わせて1億人に達しました」

「1億人だとお!?!」

「WW2の犠牲者が多く見積もって6000万ちよつと、それも6年かけての規模だった筈だぞ!?!」

「あの時代と比べて世界人口が数倍に膨れ上がっているとはいえ、たった2ヶ月で……?」

「そうだ日本は、日本はどうなったんだ!?! 日本と国民は大丈夫だったのか!?!」

「我々の世界の日本につきましては幸いにも第3次大戦に於いてはロシア軍による本土攻撃は行われず、海外在住の邦人に若干の犠牲者が出た以外の人的被害は発生しませんでした」

「そうか。それは良かった……!」

説明を一時中断した『向こう側』の柳田は、力無い声で口々に恐れ戦く幹部自衛官らから視線を外した。

聴衆の中には平行世界の彼、『こちら側』の柳田とデリラもまた参加していた。参加者の中で1人車椅子なのもあって、その姿は自然と目

についてしまう。

もう1人の自分もまた他の幹部自衛官同様顔を蒼褪めさせ、これ以上ない位顔を強張らせていた。この場に在っても甲斐甲斐しく寄り添うデリラに至っては、世界大戦という特地の概念から遠くかけ離れるにも限度がある一大戦争の内容と被害規模を見せられて最早精神の許容範囲を超えてしまったのか半ば虚脱状態である。

(それにしてもI Fの可能性が現実になった世界の俺——か)

『向こう側』の周囲——特に伊丹辺り——から性格が悪いだの捻くれ者だのと評されているし自分でも人に好かれないう性分だとは自覚しているが、柳田だって人間なのである。

別世界の自分という存在が気にならない筈がない。片端者になっているとなれば尚更だ。

具体的に本人や周囲からどんな事情で不具になってしまったのか、事情は聞けていないが心当たりはある。何より過剰なまでに献身的に『こちら側』の己へ尽くすもう1人のデリラの存在が雄弁に答えを示していた。

(おそらくターニングポイントは——望月紀子暗殺未遂事件)

きっと『こちら側』の自分も偽指令によって望月紀子の暗殺に送り込まれたデリラに遭遇してしまったのだろう。

『向こう側』のデリラは、たまたま望月紀子と行動を共にしていた同族の説得によって殺意を失い、害を与える前に柳田へ自ら出頭した。

対して『こちら側』のデリラは止まれなかったのか、止めてもらえなかったのかは分からないが、一線を越えてしまい1人の片端者を生み出す結果に終わってしまったのだろう。

(その違いを生み出す結果になったのは……きっとアイツのせいなんだろうな)

説明の場の末席へ視線を移すと、全く違う格好だが冴えない顔つきは一卵性双生児よりも似ている男が2人、横に並んで座っていた。

柳田と同じ世界『向こう側』の伊丹は最初と変わらず装甲服姿のままである（流石に武装は解除済）。

『こちら側』の伊丹と見分けを着ける為に幕僚権限で柳田がその格好を維持しろと命令したのだ。車椅子以上に目立つ格好とあって半ば道化状態だが、散々振り回された者としての意趣返しでもあったりなかったりするのには秘密。

『向こう側』と『こちら側』の伊丹、2人同時に目が合った。

前者は真面目な表情でただまっすぐ目を逸らす事無く、『向こう側』で起きた戦火の記録を見届けていた。

後者は同じ『こちら側』の幹部らほど取り乱してはいないが、やはり衝撃は凄まじかったのか現実味の薄い茫洋とした表情で固まっていた。

それに関しては本来幹部自衛官に限定しての情報共有の場であるにもかかわらず、何故か参加を命じられた伊丹の部下である『こちら側』の富田と栗林も、正直似たり寄ったりな反応なのだが。

柳田は長々と語り続けたせいで舌が渴き回りが悪くなった口を手の元の水で潤すと、ここまで無貌の仮面の如く固定されていた表情をおもむろに崩し、愉悦含みのあくどい笑みを浮かべた。

「さて、ここからが本題になります」

「まだあるのか!？」

これ以上は勘弁してくれとばかりの悲鳴が上がった。

油と刺激物の塊じみた重く衝撃的な情報で集まった幹部自衛官全員が胃もたれを起こささんばかりの心境であろう事は柳田にも分かる。よく分かる。何故なら柳田も通った道だから。

……でも今までが前振り、もしくは予め知っておいて欲しい基礎知識でしかなく、ここからが本題なのもまた事実なのである。

第3次世界大戦を奇跡的に当事者とならずやり過ぎた筈の日本が前代未聞の運命に翻弄されるのはこれからのだから。

「先程の説明に出てきた反マカロフ勢力。これは元々マカロフ排除を作戰目的としたアメリカを中心とした西側諸国の特殊部隊より選抜した精鋭中の精鋭のみで編成された多国籍統合部隊——  
その生き残りを母体として結成された非政府軍事組織でありました」

「待ってくれ。生存者が反マカロフ勢力を結成したというが、その統合部隊自体はどうなったんだ？」

「部隊を分けた上でマカロフの隠れ家と思われる施設を同時に襲撃した際、情報漏れにより敵の待ち伏せを受け、北米大陸侵攻による混乱も重なった結果統合部隊は事実上壊滅しております。」

生存者は部外協力者も含めて4名——その中には我が国の特殊作戦群からスカウトを受けた自衛隊員が1名含まれていました」

映像が切り替わる。

参加者の反応は劇的だった。

「はっ?」

「何い!?!」

「オイオイオイオイオイちよつと待てちよつと待て!?!」

「ええっ!?!」

「うっそお!?!」

映し出された画像を見た瞬間に目を見開き、驚愕の叫びを発して顎も外れんばかりに大口を開いて固まり、中には椅子を蹴飛ばして立ち上がるものまで出たかと思うと、最後はその場の自衛官全員が一斉に同じ方向へと振り返った。富田と栗林も同様だった

最も驚いたのは視線の集中砲火を浴びた張本人だった。

今度こそ呆然自失、何を見ているのか理解出来ないといった表情で、『こちら側』の伊丹はパイプ椅子の上で石像と化した。

「いやあそんなに見られると照れるなあ。あ、アハハ」

画面に大写しにされた張本人——『向こう側』の伊丹は居心地悪そうに頬を引き攣らせて頭を掻いたのだった……

## GATE 自衛隊かの地にて、平行世界と遭遇せり4

——自分が知らない自分が、そこに映っていた。

まず表示されたのは、極寒の雪山を背景に明らかに自衛隊の採用品ではない武器類を背負いピッケルを手にして佇む姿。

「公式に情報公開された作戦参加記録ではタスクフォース141に参加後、各国から同様に選抜された隊員らとの訓練を経てカザフスタンの天山山脈における作戦を皮切りに彼とその仲間はマカロフの手掛かりを追い世界各地を転戦し始めます」

世界地図が表示され、光線が伸び何度か折れ曲がりながら世界地図上を横断していく。

同時に地図の隣には携帯電話による隠し撮りや監視カメラの記録映像からキャプチャーしたと思しき画像も表示され、白人や黒人や髑髏マスクで顔を隠す武装した男達の中に混じる己の顔がクローズアップされる。

南米のリオデジャネイロから極寒のロシア・ペトロパブロフスクを経て線が2本に分かれ、ロシアとグルジアの国境地帯へ延びた一方の線が動きを止めると×マークを刻んだ。

もう1つの線が伸びた先は——アフガニスタン。

「しかしマカロフの隠れ家の候補地を同時に奇襲すべく二手に分かれ

たTF141ですが、情報漏れによりグルジアとの国境へ派遣された隊員は待ち伏せにより全滅。

アフガニスタンへ派遣された部隊も待ち伏せを受けた結果、最終的に部隊に参加していた正規の隊員は2名を残して壊滅状態に陥りません」

衝撃的な解説が『向こう側』の柳田から齎されるが、線は未だ動きを止めていなかった。

「生き残った彼らは当時作戦に同行していた2名の部外協力者と共にマカロフの追跡を続行。

彼らの活動は公的なものではなく、部隊の司令官であった人物の原隊である米軍の指揮系統からも事実上離脱した彼らは、国際指名手配犯として各国から追われる立場となりました」

厳めしい年かさの髭面の白人、それよりも若く屈強さが目立つモヒカン男に続いて『指名手配／最重要目標』と英語で強調されながら出てきた自分の顔を、『こちら側』の伊丹は唾然とした顔で眺める。

指名手配を示す枠の外には更にロシア人らしき顔つきの男の写真が。こちらは先の3人程重要視されていなかった様子。

「アメリカ・ロシアに追っ手を差し向けられますが、それでも目標達成に向けた活動を止めない彼らはアフリカ大陸に於いて傭兵紛いの仕事を行う事で活動資金を調達しつつ、少しずつ物資と仲間を集め戦力を強化していきます。その中にはマカロフに操られた西側陣営への武力闘争を先導する国内の過激派に対抗するべく合流した、旧体制支持派のロシア人も少なからず参加していました」

坊主頭のロシア人がもう1人新たに表示され、先に表示された4人と共に『TF141主要構成員』にカテゴライズされた。

新たに追加されたロシア人と一緒に取られた写真の場所は背後の



風景と『向こう側』の柳田の説明からしてアフリカだろうか。

別の画像ではアフリカ独特の質素な集落らしき場所を舞台に、妙に装備が充実した民兵の死体に囲まれながら戦闘を繰り広げている様子が切り取られていた。

「……それから2ヶ月後、ロシア軍による欧州侵攻が勃発。それに伴い小規模ながら反マカロフ勢力として再誕を遂げた新生TF141も表舞台へ姿を現します」

アフリカから線の動きは一気にほぼ垂直へ転じ、欧州大陸のど真ん中へ。

雨の東欧で市街地戦を繰り広げるもう1人の自分が映し出される。

「正規軍時代のコネクションを用いたTF141はイギリス経由で欧州奪還を目指す米軍派遣部隊の司令部と共闘路線の構築に成功。

互いが入手した情報を元にマカロフとその協力者の所在を掴んだ彼らはマカロフ暗殺の為、当時ロシア軍に占領中だったチェコ・プラハに潜入。

現地のレジスタンスと合流し占領中のロシア軍へ攻撃を実施しつつ、マカロフ暗殺を企てますが失敗。現地協力者他、結成当時のメンバーを失いながらも彼は残りの仲間と追跡を続行します」

モヒカン男の画像に赤色の斜線が上書きされ、主要構成員が4人に戻る。

画像は続く。嵐の中で炎上する古城を脱出する自分。極寒の鉾山で地獄へ続いていると錯覚しそうな大穴へとラペリングで身を投げ出す自分。拷問されていたのか、腫れ上がった顔を血で汚したVIPらしき人物に肩を貸しつつ、敵兵の大群へ応戦している画像もあった。

注釈にはこう付け足されている——救出目標：ロシア大統領。  
自然と参加者の口が『0』の形でほぼ統一された。

浮かんだ思考も同様である——あの伊丹が、世界中を股にかけて戦って、ロシア大統領を救出して、核戦争を阻止して、第3次大戦を終わらせた英雄だつて？

この中で1番驚いていたのは、その英雄とそっくりな顔をした男だった。

思わず彼はこう呟いていた。

「俺、夢でも見てんの？」

「ところがどっこい……夢じゃありません……！ 現実です……！  
これが現実……！」

「ウズダドンドコドーン！」

「ウオツホン！ んんッ！！」

咳払い。突如オタコントをおっぱじめた同じ顔の2人にガンを飛ばしてから、何事も無かったかのように柳田は話を続けた。

「組織の拠点からマカロフによって拉致されたロシア連邦大統領の居場所の情報を入手した彼とTF141は欧州へ派遣されていたデルタフォースと合同で救出作戦を敢行。

結果は先程ご説明した通り大きな犠牲を払いつつも救出に成功、これによって世界は全面核戦争の危機を脱し和平条約が結ばれ、第3次世界大戦も終結を迎えます」

「そして事の元凶であったマカロフも後日排除に成功したわけか」

口を挟んだのは健軍だ。『こちら側』でも元気に第4戦闘団の特地残留者を率いている。

「ええそうです。ここまでが『彼』、我々の世界の伊丹耀司二等陸尉の

海外に於ける戦歴となります。ここまでで何か質問は？」

手が拳がった。諜報活動担当の第二科を率いる『こちら側』の今津だった。

「さっきの話、公式で情報公開されてるっちゃー話やけど、それってもしかして隊内や防衛省だけの内輪やのーて一般にも知れ渡つとるって事かいな？」

「はい、その通りです。一部の機密事項を除き、今お話しした内容は我々の世界に於きましては日本のみでなく、関係各国の公式見解として民間含め世界中に公開されております」

柳田がそう述べた途端、幕僚幹部らから怒号が上がった。

「どうしてそうなったんだ!? 部隊名、活動内容、所属隊員の身元、どれもこれも外に流れてはいけない機密事項だ。そちらの政府は何を考えてるんだ!？」

「それにつきましてはこれからお話する『門』開通後に日本とその英雄殿が直面した事態が大きく関わっております」

「……柳田二尉。どうやら君の世界の日本が直面した事態は、そちら側の世界情勢と同じく我が方の日本が直面した出来事とは大きな差異があるように思える」

ゲン○ウポーズでここまでの話を静聴していた『こちら側』の狭間の声は、眉間に刻まれた皺の深さと同じぐらい深刻な響きを帯びていた。

スクリーンの前に立つ『向こう側』の柳田も狭間の言葉に首肯した。

実の所、『向こう側』の伊丹や柳田達はWW3の説明を始めるよりも

先んじて、『こちら側』の日本や特地の情勢について説明を受けていたのである。

それにより『2010年代前半こちら側』と『10年代後半向こう側』で『門』が開通した年代にも数年のズレがあるといった差異も既に判明していた。

銀座の『門』が開門していた期間も違い、それについては『原こちら側』の方が『向こう側』よりも何ヶ月も長く『門』は通じていた。

閉門時の状況も全く違うが、そちらの詳細はこれから告げる事になる。

「仰る通りです。ハッキリ言ってしまうえば先の情報公開についても含め、我々の側で起きた『門』にまつわる大きな出来事の全てにそこに居る男伊丹とその関係者が深く関わっていると云っても過言ではないでしょう」

「ちよつと柳田さん、それだと何だか俺が全ての騒動の犯人みたいに聞こえない？」

「似たようなもんだらうが——失礼。では続けます」

第3次世界大戦の解説を受けた『こちら側』の自衛隊の反応が驚天動地なら、『銀座事件』以降に『向こう側』の日本が直面した事件に対しては文字通りの阿鼻叫喚であった。

最早軍事侵攻と形容すべき規模の2度に渡る国外武装勢力による大規模な戦闘は、『こちら側』の銀座—特地間を繋ぐ『門』を巡って発生した諸外国工作員相手の攻防戦などチンピラ同士の小競り合いに等しい。それほどの規模と内容と被害だったのである。

参考人招致を発端とする1回目事件の顛末、この時点で『こちら側』の自衛官達はお腹いっぱいを通り越して胸焼けしそうになった。

箱根の山中で砲撃に晒される特殊作戦群。

ロシア製の攻撃ヘリが温泉旅館を瓦礫の山に変え、装甲車とヘリコプターがカーチェイスを繰り広げる。

奮闘虚しく特地からの賓客は護衛の自衛隊員諸共武装集団に拉致されてしまう。

破壊工作と他国からの内政干渉、何より想定を遥かに超える攻撃に晒された自分達自衛隊は動く事が出来ず、その時解決に馳せ参じたのは何と国に属しない伊丹の戦友と傭兵達だった。

伊豆諸島沖と大島に展開した武装勢力相手に陸海空、縦横無尽に苛烈な砲火が飛び交う中、テレビとネットでは前代未聞の拉致された自衛隊員の処刑中継が始まる。

『日本政府よ、次は貴様らが血を流す番だ——これはその第一歩だ』

流された当時の中継映像を見せられて、今度は栗林が椅子から跳び上がる番だった。

「はあ!？」

「クリ!？」

「あれに映ってるのって私い!？」

粗末なパイプ椅子に固定され、血を流し、下着しか身に着けていない痛々しい格好をした己そつくりの人物が、ナイフを喉元に突きつけられ今にもロシア人に処刑されようとしている姿を見せられて誰が動揺せずにいられるだろうか？

画面の中で自分はそれでも抵抗するが、鉄パイプごと巻き付けられた拘束具は肌を切り裂く程に食い込むばかり。

『そこで黙って見ていろー！ 口でどれだけ強がろうとも、無力な貴様達は我々に従うしかないのだという事を！』

(もしかして、向こうの世界の私は、既にもう——?)

思わずそのような考えが浮かんだ栗林が見ている前で血しぶきが舞う。

だがそれは画面の中の己から流れ出たモノではなく、ナイフを振り下ろそうとしたロシア人の体から飛び散ったもので。

「え———？」

直後、拘束された自分の背後に広がるガラス窓を突き破り、救助に馳せ参じたのは『向こう側』の上官だ。

映像は、墜落するヘリからエルフ少女と共に飛び降りながら捕虜になった部下を助けに突入を果たすという、アクション映画でも滅多にお目にかかれないような手段を見事成功させた彼が栗林へと駆け寄るところで切り取る形で静止した。

「武装集団から来賓と部下を救出した彼らは武装集団が脱出用に用意していた輸送機を奪い、脱出に成功。防衛省直轄の立川飛行場に着陸後、来賓と共に無事に特地向の帰路に着きました。

同時刻、日本政府内では本居首相が今回の事件の責任を取る形で辞意を表明。

同時に最後の大仕事としてロシア・イギリスと共同声明を出しTF141の活動内容に関する情報公開、加えて情報漏洩に関わった者達を外患誘致罪及び内乱罪の適用として一斉検挙を命じました。これにより大量の逮捕者が発生しましたが、そちらに関しましてはこれから説明する内容には関わってきませんので、詳しくは割愛します。

この事件によってロシア・イギリスの政治的協力と引き換えに我方の派遣部隊は極秘裏にロシアとイギリスからの観戦武官を受け入れる事となり———……」

話は続く。

第3次大戦が起きなかった世界の自衛隊員達が更なる情報の狂奔に叩き込まれるのはこれからである。

## GATE 自衛隊かの地にて、平行世界と遭遇せり5

どちらからともなくその質問が出てきたのは必然の展開だった。

「ねええ、そっちの世界のヨウジイってどんな感じなのお？」

甘ったるい声に、姦しく言葉を交わしていた3対6つに余り1つ、計7人分の顔が一齐に反応した。

対になった同じ顔が3種類、まったく同じタイミングで振り向いて見つめてくるといふ絵面は異様な迫力を漂わせていたが、発言者である『こちら側』のゴスロリ亜神もまた海千山千なだけに彼女が浮かべる小悪魔チックな薄笑いは毛ほども揺らいでいない。

幕僚幹部が雁首揃えて絶賛公聴中の会議室、そのすぐ外の廊下。特地位民である彼女らは参加許可が出なかった為、暇人同士こうして平行世界の自分達と歓談で時間を潰していたのである。

「どんな感じ——って聞かれても大雑把過ぎて答えに困るんだけど」

笹穂耳をピコピコ揺らして戸惑いを見せる『向こう側』のテユカ。この1年弱でバストとヒップが増量し、曲線が出やすいTシャツとジーンズの布地が豊かさの増した曲線にピッチリと貼り付いて、下着のシルエットすら透けて浮き出る程に彼女のボディラインを強調させている。

「一言で表すなら………凄い」

少し考え込む素振りを見せてから端的過ぎる回答を発したのは『向



こう側』のレレイだ。

露出が少なくゆったりとしたデザインの導師服からは分かり辛いが、若干の成長に伴い最近ブラの着用を開始。

「うむ、我々のヨウジ殿は凄い所が多過ぎて語り切れない位に凄い方だ」

何度も大きく頷いて『向こう側』のヤオが同意を示す。

近頃ダークエルフの民族装束であるボンテージ風衣装が胸やら尻やら太股やらにきつきさを覚えおり、新調を検討中である。

「そうねえ。もし陞神して正神の末席に名を連ねてもお、これを超える存在にはまず2度と出会えないと心から思える位のお、最高の戦士にして眷属よお」

最後に『向こう側』のロウリイがこれ以上ない位のドヤ顔で締めくくった。

肉体的な成長が止まっている彼女だが、にもかかわらずその腰つきや首筋から唇に漂う気配が最近になって妙に艶めかしくなつたともつぱらの評判。

「じゃあ具体的にはどう凄いの？ やつぱりそっちの世界のお父さんも炎龍退治に向かつて龍の巣穴で戦つたりしたんだ？」

興味津々とばかりに身を乗り出して『こちら側』のテユカがそう訊ねれば、返ってきたのは彼女の期待とは若干違う肯定と否定が半々に入り混じる、『向こう側』のレレイによる説明だった。

「『こちら側』のヨウジも確かにテユカとダークエルフを助けるべく炎龍退治に出向きはしたし、実際に戦いもしたが場所が違う。

戦つたのはロルドム溪谷で、炎龍を仕留めたのもまた溪谷だった」

「そうなのか。此の身達はテユカ殿を背負ったイタミ殿とレイレイ殿にロウリイ聖下と共にクロウやノツコ、セルマらを連れてテユパ山麓の火口にて決戦を挑んだのです」

「プライス殿やユーリ殿、シノ殿は一緒ではなかったのか？」

「プライスとユーリって誰の事？ それにシノってクリバヤシの事よね？」

「……『こちら側』にはプライスとユーリが存在しない？」

心から不思議そうな様子の『こちら側』のテユカの反応に、「そこから違うのか」と『向こう側』の一行は顔を見合わせた。

『こちら側』の少女達が知らない人々についてレイが代表して説明してやる。プライスとユーリは『向こう側』の日本とは別の国の軍人であり、『門』が開く以前『向こう側』の地球で起きた大戦争に於いては伊丹と一緒に世界中で戦い続けた戦友達であると。

また『向こう側』の炎龍を最終的に討伐したのは伊丹が龍の巢に仕掛けたC4の爆発ではなく、狙撃手であるプライスが1<sup>l</sup>6<sup>k</sup>m<sup>m</sup>近く離れて飛ぶ炎龍に向けて放ったたつた1発の魔<sup>50口径焼夷徹甲弾</sup>弾であつたと語ると、『こちら側』のテユカとヤオは跳び上がる位驚いたしレイとロウリイすらも目を見開いて驚きを示した。

「嘘、本当に？」

「1リーグも先を飛ぶ炎龍をたつた1発で……？」

「此の身の誇りにかけて嘘偽りない事を保証しよう。如何な優れたエルフの弓の使い手やダークエルフの戦士であっても、たつた一射で古代龍を射落とした彼の方の真似を出来る者は1000年経とうとも現れまい。そう断言出来る程にプライス殿の狙撃の腕はそれは見事なものだつた」

臉を下ろしてそう語る『向こう側』のヤオの脳裏で、生まれて30年以上弓に触れてきたヤオですらも見惚れるほど芸術的な片膝を突いての射撃姿勢を取ったプライスの姿と、轟音から僅か1秒後空中

で一瞬身悶えしたかと思つた次の瞬間には宙から墜ちていく炎龍の姿が身を震わせる程の興奮と共に蘇つた。

あの瞬間はまさにダークエルフの間で子々孫々に語り継がれるに相応しい、新たな神話が生まれた瞬間であつたと、改めて実感する『向こう側』のヤオ。

そこへ『こちら側』のロウリイが口を挟む。

「じゃあジゼルとアイツが連れてたあ新生龍はどうしたのお？ こちらの側 私達

の時はあイタミ達が炎龍と戦つてる間に襲われたせいでえ手古摺つた所をジエイタイに助けてもらつただけだよ」

「こっちは炎龍が卵を残していないか炎龍の巢に確かめに向かつたところで襲われたわねえ。最初の奇襲で持ってきた『ぱんつあーふあうすと』とか『じゃべりん』とかあ、炎龍を撃ち落とした『りんくす』まで失つちやつたからあ、こっちもかなり手古摺らされたわねえ」

その際、荷役兼案内役として同行していたダークエルフもヤオを残して壊滅したと『向こう側』のロウリイが付け加えたせいで、双方の世界のヤオは顔色を曇らせたは仕方のない事だろう。

最終的に伊丹が出した作戦を元に伊丹が囷となつてジゼルと新生龍×2相手の鬼ごっこで時間稼ぎをし、そのお陰で救援に来た自衛隊の力を借りずに新生龍を仲間達の力だけで撃破したと教えてやると、『こちら側』のテユカ達はこれまた驚きを露わにした。

相対した時の状況がかけ離れているし、個としての戦力は炎龍の方が遙かに上だろう。炎龍の巢での激闘直後で『こちら側』の伊丹達はほぼ全ての武器を使い果たしていた事もあり、逃げる以外の選択肢が無かつたというのもある。

それでも新生龍を2頭率いて数と連携を駆使する空飛ぶ亜神を相手に生き延びるところか、たつた数名の戦力で勝利してしまうとは。吟遊詩人が過剰な誇張交じりに語るような英雄譚でも早々耳にすまない、炎龍討伐に匹敵する偉業だ。

「あの時は別行動を取ったからヨウジが具体的にどのようにしてジゼルと新生龍を相手取ったかは私達には知らないが、直前にロウリイがヨウジを眷属にしていなかったら彼が命を落としていた事は間違いない。それは後日ジゼルから聞き出した当時についての内容からも明らか」

「いきなりロウリイの体から血が噴き出したり、凄い音を立てて背中や手足が曲がっちゃいけない方向に折れたりした時は本当に驚いたわ……」

当時を思い出してげんなりとした溜息が『向こう側』のテユカの唇から漏れた。やはりその時を思い出した同じ世界のヤオも引き攣った苦笑いを浮かべる。

「あの時ヨウジ殿はジゼル聖下に組打ちを挑んで、背の翼で跳び上がった聖下に空から岩へ叩きつけられたと仰ってましたね」

「拘束から抜け出す為に彼女ごと火薬を使つて自爆したとも聞いている」

「あれは私いにも中々効いたわあ。ま、ジゼルの方なんかあ下半身丸々吹き飛ばされて再生まで大変だったって愚痴ってたしい、痛み分けよねえ」

「……それって本当に同じお父さんなの……?」

ドン引きであった。

お父さん呼びから未だ抜け出せない方のテユカが思わず発した呻き声は、『こちら側』の少女達の今の心境そのものであった。

ここまでの内容だけでもその果敢で苛烈な戦いぶりだが、『こちら側』の自分達が知る伊丹耀司のイメージから激しく乖離していたからである。

「今度はこちらが聞かせて欲しい。『こちら側』のイタミヨウジとはどのような人物？」

そう『向こう側』のレイに問われたので今度は『こちら側』の少女達が語る番だ。

過酷な環境を避けるに避け、厳しい課題や周囲からの注文にはしよつちゆうお茶を濁して誤魔化しもするせいで一見不真面目に見えるが、だが、常識に囚われない意外な発想で何だかんだと事態を解決に導く時には炎龍に関わる騒動のように男気も見せてくれる、頼りがいがある親しみ易く薄い本を読むのが趣味な——それが自分達の知る『こちら側』の伊丹耀司である。

一通り聞き終えた『向こう側』の少女達の反応は、心からの同意を示す大きな首肯だった。

「うんうんなる程ね。こっち側のヨウジもそういう所は同じなんだ」

「フツツ、それでこそヨウジいつて感じよねえ」

「……それには同意」

「あ、そういう所は『向こう側』のお父さんも変わらないのね。ちよつと安心しちゃった」

『こちら側』のテユカも安心したように小さく息を吐いた。

伊丹IIちよつとだらしない折れず砕けぬスライムメンタルなオタクという認識が別世界でも健在である事に、云わば遠い異国の地で同郷の人物に出会えた時に似た安心感を覚えたテユカである。その辺りは彼女だけでなく『こちら側』のレイとロウリィにヤオも大なり小なり似たようなものだ。

——伊丹耀司のそういう人間性を彼女達は好きになったのだ

から。

「しかしとなれば『こちら側』と『向こう側』のイタミ殿との間にある差異は、如何なる起こりにより生じたものなのだろうか？」

ヤオの疑問に、御年962歳という常人の数倍分に匹敵する人生経験を送っているロウリイが、年長者だからこそその重みを感じさせる含蓄を交えてダークエルフに教えてやった。

「そんなの決まってるわあ。ヒトの有り様は当人がこれまでの生に於いて積んだ経験によって形作られていくものよお。私だってえ最初からエムロイの使徒としてえ肉の躰もお魂もお完成していたわけじゃないものお。」

つまり『こちら側』のおヨウジイが経験していない何かをお『向こう側』の彼はあ経験してえ、それによって『こちら側』よりもより戦士としての側面が強まった別の『イタミヨウジ』として育ったわけねえ」

「『こちら側』とは違う経験によって戦士として……向こうの私達には心当たりはあるだろうか？」

その問いかけに顔を見合わせる『向こう側』の女性陣。彼女達の表情はこの場で言って良いものか、と悩んでいるのが手に取るように分かる、そんな様子。

それを見て『こちら側』のレイ達も、自分達が聞きたいと強請った内容が余程の事であると理解させられた。

「……聞くべきではなかった？」

「そういう訳ではないが、『こちら側』ではあまり言い触らすべきではない内容であるのは認める。」

そちらが聞きたい内容は現在部屋の中で行われている『こちら側』と『向こう側』のジエイタイの責任者による情報交換に於いても触れ

られているだろうから、『こちら側』は『こちら側』の人間だけで改めて彼らから聞く事を提案する。チキユウで起きた出来事が深く関わる為、チキユウ側の知識と認識を理解しているジエイタイから逐一説明を補足して貰うべきであるのがその理由である」

「そういえば結構時間が経つけどお、情報交換はまだ終わらないのかしらあ？」

ロウリイが情報漏洩防止の為防音性能が高く設計された—なので中で何を話しているのか外の彼女達には伝わっていない—会議室の扉を眺めながらぼやいた丁度その時、前触れもなく扉が開いた。

——後にロウリイはその時の事をこう語る。

「あの時は驚いたわあ。会議室で話し合いをしてたジエイタイがあ、レレイが流行り病で倒れた時に見かけた歩く屍よりもお死人みたいな顔をしたものお。」

私達『いちい』のヨウジいまでそうだったしい、後で私達も教えて貰ったけどお、別の世界であつても自分が生まれ育った故郷があんな目に遭つたつて教えられたらあ、そりゃあんな顔色になつてもおかしくないわよねえ……」

## GATE 自衛隊かの地にて、平行世界と遭遇せり6

「今頃隊長達、どんな話してるんだらうなあ」

ぼんやりと空を見上げながら、『こちら側』の倉田はそう呟いた。

今の所新たに出現した平行世界とを繋ぐ『門』に異常は見られないが、大規模な魔術装置―かつて帝国の魔導師が作り上げた、紋様を刻んだ大理石などを積み上げて拵えたあの建造物―による固定を介さない場合の『門』は、近付き合った世界と世界の間隔が広がり始めると時間経過で閉じてしまう為、当然ながら非常時に備え現在『門』は厳重な監視下に置かれている。

それにしても異世界の次は平行世界である。しかも出現したのは別次元の特地で活動する隊長殿の同位体ときたものだ。

彼に負けず劣らずのケモナー好きなオタクを自負する倉田としては、やはり『向こう側』の世界に対する興味は他の隊員達よりも一際強い。

「あつちの世界にももう1人の俺やペルシアさんも居たりするのかな？」

だったら『向こう側』でも恋人同士になれば良いな……等と思いを巡らせていると。

『ああああ……』

「あれっ？ 今何か聞こえなかったっすか？」

「誰かの声に聞こえたが」

同じく『門』の監視に就いていた隊員と聴覚に意識を集中させる。



「どうやら『門』からではなくその外側、基地内部から聞こえてきているようだ。」

「これ近付いてきてるんじゃないか」

『……ああああああああああああ』

「……近付いてきてるっすね」

首を巡らせ音の発生源を探す。

やがて倉田の目に飛び込んできたもの、それは——……

〈十数分前〉

おぼつかない足取りで会議室を出る。

ふらふらと数人掛けのベンチへと向かい、へたり込むように腰を下ろす。

……そこまで終えたところでとうとう耐え切れず、ドサリと音を立てて真横に倒れた。

「お父さん!? ちょっと大丈夫?」

「うゝーあゝー……もうダメ無理。心が死にそう」

完全に死んだ魚の目であった。

ピニヤが一時期狂気に陥った時よりも酷い憔悴具合である。ここまで伊丹―迷彩服姿の方―が精神的に追い詰められている姿を見るのは初めてなだけに、慌てて『こちら側』の特地女性陣は力無くベンチに転がった彼の下へと集まった。

そんな姿を晒しているのは伊丹だけではない。そもそも会議室から出てきた幹部自衛官らほぼ全員が、彼と似たり寄ったりな反応を見せている。

流石に伊丹のように周囲の目も場所も構わずベンチに横になつている者は居ないものの、イイ歳した迷彩服姿のおっさん達が揃いも揃って背中を丸めて文字通り頭を抱えたり、廊下の床にそのまま腰を下ろして項垂れているのだ。

帝国の軍人よりも遥かに洗練され、実直さと頼もしさに溢れるあの自衛隊の指揮官達が、である。今の会議室前はまるで天下分け目の大戦に大敗した拳句、そのまま降伏せざるをえなくなった将達の天幕もかくやな有様であった。

空気が完全に御通夜の状態である。近づく事も声をかける事も憚られて、事態が把握出来ない少女達は思わず後退りたくなつた位だ。

「二体中で何があつたのかというのか」

今や鉄面皮がトレードマーク扱いな『こちら側』のレイですら、あまりにもあんまりな雰囲気驚きを滲ませて呟いたぐらいだった。

一方、会議室で何が幹部自衛官らをあそこまで打ちのめしたのか見当がついた『向こう側』の女性陣は、彼らに同情の視線を向けるばかりだ。

伊丹が転がったベンチへ近づく隊員が居た。彼よりも頭1つ以上縦に小さく、厚みに関してはその驚異的な胸部装甲で伊丹を上回るという体格の栗林である。

彼女もまたゾンビじみた動きで『こちら側』の少女達の間をすり抜けてベンチの下へ向かったかと思うと、ベンチの余剰スペースへ小柄

だが曲線豊かな体を投げ出した。

こちらは俯せに突っ伏す格好だ。豊か過ぎる胸部装甲のお陰で台座部分に顔面を強打は避けられた模様。

「嘘よ嘘よありえないこんなオタクでグータラなダメ人間の癖にレンジャー持ちでSにも参加してその上戦争の英雄なんてブツブツブツブツ……」

「こつちも重症ねえ」

「そのようで……」

漏れ聞こえてくる呪詛めいた栗林の呟き声に、『こちら側』のロウリイは処置無しと言いたげな顔を浮かべ、陰鬱にも程がある栗林の気配にヤオも口元を引き攣らせた。

文句の対象である彼女の上官がすぐ隣に転がっているのだが、今の栗林がそれに気付いているかすらも怪しい。

「オデノココロハボドボドダ」

……伊丹の方も似たようなものなので問題は無さそうだ。

「今回の内容、隊長と栗林は当事者も当事者でしたからその分ダメージも大きかったんでしよう……」

そうフォローの言葉をかけたのは栗林と同じく曹クラスでありながら何故か将校クラス限定である筈の今回の説明会に名指しで参加を命じられた『こちら側』の富田だった。

彼もやはり他の参加者同様、精悍な顔つきから生気が失われていたが、若さと体力の差かどうにか持ち堪えられたようだ。

ちなみに『こちら側』の幹部自衛官らを死屍累々に変えた平行世界の伊丹と柳田達は、『向こう側』とやり取りしに行ったので既にこの場には居ない。

### World Wars 第3次世界大戦。

半世紀ぶりに核が実戦使用され、欧州全土がWW1以来再び化学兵器によって汚染され、たった数ヶ月で1億人が犠牲になった世界。

かのような別時空の地球情勢に於いて平行世界の日本は幸いにもWW3が齎す戦禍に巻き込まれる事は無かった――

これで話が済めばどれだけ良かっただろう。

世界ではWW3が終わり、日本では銀座に『門』が開いてからが平行世界の日本を襲った災禍の幕開けだった。

2度の外国人武装勢力による本土騒乱。市ヶ谷は化学兵器によって汚染され、『門』が存在した銀座駐屯地はドローンによる爆撃を受け破壊され、戦車や戦闘ヘリすら複数台持ち込んだ武装集団によって銀座全体が占領される未曾有の状況が勃発した。

自衛隊員も、市ヶ谷に在った防衛省の職員達も、同様に攻撃を受けた警察官も、当時銀座に居た民間人にも膨大な数の犠牲者が出た。

おまけに武装集団は更なる化学兵器による攻撃を楯に特地から自衛隊の撤退を要求したという。それが成された場合、更に10万人規模の犠牲者が予想された。

敵の攻撃の照準は国会議事堂だけでなくかき御方の住まいにも向けられていた。

話はこれだけではない。同時刻特地側でも政変が勃発し、帝国で軍事クーデターを起こしたゾルザルが送り込んだ工作員によってアルヌスも攻撃を受けたのだった。

これらの情報を公開された『こちら側』の自衛隊幹部らが受けた衝撃は最早異世界からの軍事侵攻に直面したそれすらも軽く上回った。

ヒトとモノ、その被害は第1次銀座事件の比ではない。『こちら側』

の日本政府と自衛隊が経験した、諸外国の工作員による限定的な『門』の占拠などもあらゆる面で桁が違い過ぎたのだから仕方あるまい。

当時特地を視察予定だった海外からの視察団が武装集団の人質にされ、また武装集団の正体がWW3を扇動したロシアの過激派勢力と繋がりを持つ將軍率いるロシア軍からの脱走部隊であった絡みからか、最終的にアメリカ・ロシアと合同での電撃的奪還作戦が行われたという事だが、明確な作戦の成否が出る前に敵首魁の自爆によって『門』が破壊されてしまったのだという。

『門』を失い、基地を含めアルヌス全体に大きな被害を出し、特地側に当時残っていた隊員も多くが犠牲となった。

『こちら側』とは違い暴走した『門』から溢れ出た蟲獣の攻撃は受けなかったようだが、それでも被害は甚大だ。

むしろエイ○アンもどきが介在しなくて尚ここまでの被害が齎されたと考えると、比較すればする程ヒトの悪意と残酷性がより際立って垣間見えるという感想は穿ち過ぎだろうか？ そう伊丹は胸の内です懐する。

そしてそれは『向こう側』の自衛隊にも言える事でもあるのだ。

日本との『門』を失い、基地にも隊員にも多大な犠牲を負って追い詰められた彼らは、自らに強いた枷を説いてしまったのだから。

そうして実行されたのがゾルザルを排除し、ピニヤを帝国の女帝へ祀り上げる事で生存圏を確保するのを作戦目標とした皇都強襲計画。

## 『Operation: Kingslayer』

前代未聞、自衛隊直接参加で行われたカウンターテターの一部始終を収めた記録映像は『向こう側』の狭間達によって嚴重に保管されつつも、篡奪後もピニヤへ旗色を明らかにしない辺境国家に対する分かりやすい交渉手段<sup>脅迫</sup>として度々外部公開に用いられている。

百罰一戒。帝国兵の屍山血河を積み上げ、権力の頂点に立った筈

だったゾルザルを容赦なく追い詰め引きずり下ろし、最後は先帝モルトを謀殺たらしめたゾルザルをピニヤ手ずから弑するまでを分かり易くまとめた編集版を見終えれば、辺境国家の指導者らは心良くピニヤと自衛隊への恭順を示したという。

件の動画もまた『こちら側』への説明の場でお披露目されたのである。

その結果が『こちら側』の参加者全員の歩<sup>リベンゲデッド</sup>く屍化であった。

血の気が引いた顔色とは逆に、情報過多で茹った頭にベンチの冷たさが伊丹には心地良かった。

こうも心と頭が千々に掻き回されたのは彼にとっても初めての経験な気がした。

伊丹は自他共に認めるオタクである。

そんな彼が異世界に続き、今度は平行世界でしかも自分の同位体と遭遇だ。平行世界はどんな歴史を辿ったのか、別事件の自分はどんな人間なのかと少なからず興味を抱かなかったといえば嘘になる。世界観のカルチャーギャップこそ異世界接触物の鉄板ネタなのだから。

けれど。

だけ。

「アレは流石に冗談キツイって……」

平行世界では第3次大戦が勃発して。

その世界の自分<sup>『伊丹耀司』</sup>は核戦争を防いで世界を救った英雄だという。

それだけでもおかしいのに、『門』が出現してからはもっとおかしな

事が続いた。

『向こう側』の世界で『門』が最初に開いた時の記録映像を見せられた。映像の中では伊丹と同じ顔をした人物が手元に有る物だけで工夫と戦術を凝らし、急造の部隊を見事に指揮し、帝国軍の万の軍勢に独り包囲されても尚雄々しく、冷静に、冷徹に敵を処理し続け、とうとう救援の自衛隊が到着するまで数千の避難民を守り抜く姿を彼は呆然と眺める事しか出来なかった。

箱根では何故か旧ソ連の攻撃ヘリMi-24ハインドに乗って誘拐されたレイ達と栗林を救出していた。

特地に戻ってから『向こう側』の自分は大暴れを続けたらしい。ゾルザルから望月紀子を救出した時は『こちら側』の自分とは違って1発ぶん殴った所では済まसानかったそうだし、テユカの心を治す為に炎龍退治に向かったのは同じだったが自分の時とは違って機甲部隊に助けられるよりも先に炎龍も新生龍も（ついでにジゼルも）倒してしまっただとか。

『こちら側』では撮られていない、炎龍と新生龍の首をバックに撮影された集合写真も披露された。

自分とテユカ達に混じって栗林も写っていたがどうやら『向こう側』の炎龍退治には栗林も参加したのだという。平行世界では部下との関係も大分変化している様子。

第2次銀座事件に関しては最早何も言うまい。この件に関してはもう1人の自分も然程関与していないようで、何より『向こう側』の銀座を襲った惨状を考えるだけで伊丹ですらも気が滅入る位なのだから。

だが最後の映像を見せられるに至り、『こちら側』の伊丹はそれすらも気にするどころではなくなつた。

『Operation: King Slayer』——直訳すれば王殺し。

この作戦で『向こう側』の己が与えられた役割と、そこで成した事

を余す事無く伊丹は見せつけられたのだ。

「何なのアレ？ 向こうの俺、どうしてあんなつちやったの？ こんな絶対おかしいよ」

実の所、ラ○ボーとコ○ンドーとセ○ールとジョン・マ○レーンを足して割らなくてもまだ足りない存在と化した平行世界の己に、最もシヨックを受けていたのは伊丹自身であった。

で、この有様である。

彼個人の感想としてはこの一言に尽きる——ガラじゃないにも程があるだろう、平行世界の俺!?

事此処に至り、衝撃的に過ぎる情報の連打にとうとう耐え切れず、他の参加者に続き生きた屍の仲間入りを果たす羽目になった伊丹なのであった……



## GATE 自衛隊かの地にて、平行世界と遭遇せり7

「もう1人の自分がああいう存在である事がそんなに嫌だったのをお？」

虚ろな目で横たわる伊丹の頬をロウリイがツンツンと指で突く。

姿形が同一なので『こちら側』か『向こう側』か一見しただけでは判別がつかない。今頬を突いてくるロウリイは気配と話しぶりから『向こう側』の彼女であると、何となく伊丹は察した。

「そういう問題じゃなくてさあ。こう、どう言えば良いんだろ、自分がこれまでしてきた事を何倍どころか何十倍にも過剰に脚色されて、おまけに本人よりもずっとイケメンの俳優が演じてる映像を延々見せつけられたような感じ……」

「ああ、お父さんが炎龍を討ち取った話が広まった時みたいなの……」

納得した様子で頷くのは『こちら側』のテユカ。

Tシャツの裾を引っ張り、パタパタとKO状態の伊丹に仰いでやっている。その度に余計な脂肪のないほっそりとした腹部と突きたくなるようなおへそがチラチラと覗くのもお構いなしだ。

光を失った目で臥した伊丹の口からそれは深い嘆息が吐き出された。吐息がテユカのへそを擦って「ひゃん」と小さな悲鳴が上がった。

「本当にさ、どうしてあんなだったって感じなわけ。『向こう側』で起きた第3次大戦とか、銀座占拠とか、その話だけでもお腹一杯なのに、よりによってその中心に何時も『向こう側』の俺が居て英雄の真似事をしちやってたらしくてさあ」

「真似事、ではなく文字通り英雄と呼ぶに相応しい偉業。それは間違いない。私が保証する。何故ならこの私、レイ・ラ・レーナ自身もまた彼の行動によって助けられた一人なのだから」

彼から漏れた愚痴は『向こう側』のレイによって一刀両断される。表情は氷のように冷たくとも、しかし彼女から発せられた声と言葉、そして『こちら側』の伊丹を捉える瞳にはハッキリとした熱が込められていて、それは『向こう側』で体験した出来事が彼女の中に深く刻みつけられているという証だった。

「それでも、だよ」

言葉を交わしている間に少しは消耗した気力が回復したようだ。伊丹はゆっくりと気だるげに頭を横に振りながらも体を起こした。

「これが例えばクリとか富田とか、何だったら倉田でも自分以外の他の誰かの話だったなら、俺だって『そういう事もある』で受け入れられたかもしれないよ？」

「『伊丹耀司』自分自身だからこそ受け入れ辛い、って事お？」

「『伊丹耀司』そういう事——俺自身が戦争の英雄扱いされる位あも勇敢に戦い続けられるとは全く思えないからこそ受け止め切れない……そうなるのかな」

それは一時期日本へ帰還した際、自衛隊を退職した後には英雄としての知名度を生かして政治の場に立候補してみないかと提案された時にも抱いた感想であった。

伊丹耀司はオタクであり、自衛隊員であり、趣味に生きる為に仕事をしている人間であると常日頃から自覚していた。

そりゃあ『銀座事件』——『こちら側』で起きた方——では自分から動いて事態収拾に当たりはした。

だがアレは状況があまりに切迫していて、上からの指示を待ってい

ではどんどん状況が悪化してしまうと判断したからこそその独自の判断で動いた結果の事に過ぎないし、やった事だって『向こう側』の自分みたいに先頭指揮を取りながら戦ったのではなく、避難誘導や敵陣偵察その他諸々の雑用程度だ。

テュカを連れて炎龍退治に向かったのも、半分位は自分のトラウマを乗り越える為の自己満足を求めているの代償行為に近く。

それ以降も、ピニヤの救出やら銀座に空挺降下しての『門』奪還やら魔法陣の爆破やらこなしはしたが、どれも上から命じられた任務だったからに過ぎない。

だって自分は自衛官公務員なのである。そういう役回りの稼業稼業なのだから。

——だからこそ。

国からも組織からの庇護も離れ、それどころかお尋ね者として世界中から追われる身となっても尚逃げるのではなく、戦い続ける道を選んだもう1人の自分が成した事を受け止め切れずにいる。

拳句、そうしなければならぬ理由と目的があったとはいえ、その結果が『向こう側』のロウリイと皇宮のど真ん中に飛び込んだのたった2人の軍隊ラ○ボーごっこであり、しかも大殺戮と例えても過言ではないその一部始終をTPS・FPS3人称視点 1人称視点織り交ぜた見事な編集で見せられた後となれば尚更だ。

あれ程までの屍山血河を築くだけの戦意と覚悟を、映像の中の彼と同じように抱ける日など到底訪れはしないだろうし、訪れて欲しいとも思わない。

これこそが紛う事なき『こちら側』の己の本心であった。

「……何？ 何で皆してそんな目で俺を見るの？」

周りから向けられた視線に気付いて伊丹は口を尖らせた。

『こちら側』のロウリイ・テユカ・レレイ・ヤオが浴びせてくる視線が妙に生暖かいというか、社会の窓が全開になっているのに気付いてしまった時の様な気まずさというか、そんな何とも微妙な目をしていたからである。

『こちら側』のお父さんもいざとなったら何だかんだで勇敢に戦いを挑むと思うなあ、私」

「此の身もテユカ殿に同意する。真実、テユパ山脈にて炎龍へと戦いを挑んだ時のイタミ殿は、まさしく英雄と呼ぶに相応しい勇敢さだったではないか」

「そうよそうよお。戦士の素質を持たないヒトをお、この私ロウリイ・マーキュリーが眷属に選ぶわけないじゃない」

「私も3人に同意」

「いやいやいやいやいやいや。皆して俺の事買いかぶり過ぎだつて」

今度はぶんぶんぶん、と風切り音が聞こえそうな勢いで何度も首を左右に振り始めた『こちら側』の伊丹の姿に、とうとう耐え切れないといった風情でレレイを除く『向こう側』の少女達も嘖き出すような笑い声を発した。

「くふふふふつ、やっぱり世界は違ってもヨウジイはヨウジイなのねえ」

「そうそう。凄くて強いのに、変なところで自分に自信がない所なんか本当にそっくり！ おっかしい！」

「不必要な自己評価の低さは欠点ではある。けれどそれは同時に決して驕り高ぶる事無く、傲慢さが齎す失敗や周囲との不和を防ぐ長所と

もなる」

周囲どころか別世界から訪れた少女達からも称賛交じりに言われてしまつては、流石の伊丹も暗い表情を維持する事は難しい。頭を掻きながら照れ臭げに苦笑する他ない。

「シノ殿がヨウジ殿との子を孕んでいるのが判つて旅から離れなければならなくなった時のヨウジ殿もこのような反応をされて不安にされてましたね。あの時はシノ殿のお陰で——」

「……ああ、あん？」

——その瞬間。

一瞬にしてこの場の空気が凍つたのを、発言者である『向こう側』のヤオは確かに感じたのだつた。

そして時間は『門』の監視に就いていた倉田が奇妙な声を聞きつけた瞬間へと戻り——

「……ああああああああああああああああああああ!!!」

「はあ？　ちよ、な、栗林二曹？」

倉田の目に飛び込んできたのは猛烈な勢いでこちらの方へとやって来る栗林の姿であった。

体育学校仕込みの完璧な走行フォームとネコ科の肉食獣を彷彿とさせる瞬発力が融合した彼女の全力疾走はそれはそれは凄まじい速度だった。ついでにコンバットシャツに包まれるメロンかはたまたスイカにも匹敵する双子山脈も大暴れしていた。

オリンピックの陸上選手にも引けを取らない見事に制御されたフォームとは真逆に、栗林の表情は混乱を通り越した錯乱のそれだった。

「iiiiiiiiiiiiいやあああああああああああああああ！」

最早顔面崩壊レベルでグチャグチャになった顔から涙と絶叫を迸らせる栗林。

あまりにもあんまりな光景に呆然と立ち尽くしてしまった倉田達だったが、彼女の進行方向に何が存在するかを思い出し、警備の隊員が確保に動くよりも速くその横をすり抜けてしまうのを目撃するに至って我に返ると、倉田達も慌てて止めようと試みる。

「ちよつと止まって！ 止まって下さい二曹その先はダメっス！」

叫ぶが栗林が止まる気配はない。

俊脚の隊員が咄嗟に彼女の進路上に回り込む事に成功し、確保しようとして身構えた。

——が、栗林と隊員の距離が0となった瞬間生じたのは、倉田が予想したような捕まった栗林が地面に転がる音ではなく。

「おーっ！ぶあ？」

重量級の力士が打ち込み用の柱に強烈なぶちかましを食らわせた

瞬間を思わせる盛大な衝撃音と共に、止めに入った隊員が奇妙な悲鳴を上げて派手に吹っ飛ばされていく光景であった。

胸部の双子山脈以外は筋肉で占めているともっぱら評判の栗林は、その小柄さとは裏腹に質量の密度はかなりのものだ。

それが短距離走のレコードも取れるクラスの速度で激突したともなれば相当な威力と化す。幼稚園児程度の子供でも速度とぶつかり方によっては大の大人を転がす事だって可能なのだ。小柄な女だからと無意識に油断していた隊員を逆に撥ね飛ばすには十分過ぎた。

「ああっ次梁壘ジャン・ルイがやられた！」

「落ち着け！陣ジン、（捕獲の）指揮を引き継げ！」

思わぬ展開に他の隊員達も若干混乱気味だ。

そうこうしている間に、新しく出現した『門』を機材で調べていた調査班の隊員達も事態に気付いて栗林を制止にかかるが、速度と当たり判定の小ささが仇となり彼らの手すらもすり抜けてしまった栗林がどうなったかというところ。

「あっ」

倉田達の見ている前で、とうとう栗林の体は突入を果たしてしまっただ。

……『門』の中へ。

その数秒後、ついさつき通り過ぎた栗林以上に騒がしい声と足音を伴いながら、今度は『こちら側』の伊丹と富田そして同じ顔をした少

女達が慌てた様子で現場へと駆け付けた。

「クリの奴、足速過ぎだろう……!」

「もう! ヤオがクリバヤシの前でいきなり変な事言いだすからあ  
!」

「だ、だって『こちら側』のヨウジ殿とシノ殿は不仲だとは知らなかつ  
たのだ!」

「此の身か? これは此の身が悪いのか!」

「ああ違う違う『こちら側』の私が怒つたのは貴女「テユカ」じゃなくて『向こ  
う側のヤオだから……」

「あーもー同じ顔して一斉に騒がないで欲しいわあ。頭がおかしくな  
りそうよお」

「これは興味深い光景ではあるがロウリイに同意する」

「私に同じ」

「こっちはこっちでマイペースねえ」

「倉田! こっちに栗林が来なかったか!」

こちらも全力疾走で走ってきたせいで汗を浮かべ、やや息を切らせ  
た伊丹が焦り声で詰問すれば、問われた倉田は伸ばした人差し指を  
ゆっくりと持ち上げて、現実味のない表情でこう告げたのだった。

「……栗林二曹、そのまま『門』の中に入ってっちゃいました」

「はあっ!!!」



## GATE 自衛隊かの地にて、平行世界と遭遇せり 8

「成程、原作世界あちら側の『門』はそのような経緯で閉門されたのか……」

視点を移して『向MWこう側』の特地である。

特地に残留した幕僚幹部が集結した『向MWこう側』のアルヌス駐屯地改め日本国アルヌス州暫定自治区・自衛隊基地の司令室にて、一旦『こちら側』の特地から帰還した柳田から彼が入手した『こちら側』の『門』を巡る結末——当然ながら一方側MWだけでなく相手側原作世界の情報も聞き出している——

其処に至るまでの報告を聞き終えた狭間は、デスクに肘を突き口元を組んだ両手で隠すようにしながら重々しい呻き声を発した。

今の司令室に漂う空気はWW3や銀座占拠について聞かされた際の『こちら側』の幹部自衛官らと比べれば格段にマシなもの、それでもこの場の参加者が浮かべる顔色には重苦しさが漂っている。

「折衝役ご苦勞だったな、柳田二尉。今回の『門』が後どれだけの時間開いた状態が維持されるか、具体的な期間は未だ定かではない。しかし繋がっている内は引き続きあちら側との我々との窓口として情報交換を継続してくれ」

「了解しました。ではそのように」

「うむ、頼むぞ」

報告を終えた柳田が退出すると、誰からともなく重い溜息が立て続けに参加者達から発せられた。

「WW3が起こらず、明確な軍事攻撃ではなく各国の政治的暗躍が齎

した混乱によって『門』が失われた世界、ですか」

憤懣やるかたないといった口調で口火を切ったのは健軍であった。自他共にある武闘派で現場主義である彼にとって、明確な方針と対策を打ち出さぬ優柔不断な上政府に縛られ、満足に動けぬまま実質敗北に近い結末を迎えたと言える平行世界の自分達に慙死たるものを感じているのだろう。

同じ感情を抱いているのは彼だけではなく、それは他の幹部自衛官も顔色や目つきを見れば明らかであった。狭間ですら、僅かながらその眉間に不快気な皺を生じさせている位なのだから。

殴られたから殴り返す。シンプルな応酬だ。

だがここに政治が絡むと、一転して自己保身と利権と見当違いな思想が邪魔をし始め、本来被害者でありながら気が付けば加害者扱いされた挙句に自縄自縛のサンドバッグと化す羽目になる。このような経験は日本はかつて何度も経験していた。

WW3がそれを変えた。

力には力を。応報には応報を。力が足りなければ国は焼かれ民は塵殺される。

平和主義は死んだ。ペンの力など何の役にも立たなかった。戦争を止めたのは圧倒的な武の力を秘めた兵士達の献身だった。世界中がそれを思い知った。

最後に生き残った数少ない英雄の1人は、自衛隊員だった。

まず政府が、次に国民がその事を知った。

世界が変わる。日本も変わる。変化を受け入れられない、己の立場を勘違いした愚者は、これまでの愚行のツケを支払う羽目になった。

MW世界の日本は時代遅れの平和主義という軛から解き放たれた。原平行世界の日本はそうならなかった。

本来交わる運命に無い筈の平行線の世界は接触してしまった。

そして知ってしまったのである。

自らを縛る枷を破った側の世界は、悪しきシビリアンコントロールに愚直に縛られ続けた果てに、負け戦も同然の結末に甘んじたI Fの自分達を。

縛られる事に甘んじた側の世界は、自らを律する枷を捨てた果てに、生存の為の虐殺を実行したI Fの自分達を。

当時各々が各々の役割を全力で発揮し尽くす事が出来たと言えるのは枷を捨てた自分達の方だろうと健軍は考える。

政治家の我が身可愛さに悪意持つ第三者による干渉……どちらも現場にとっては最低最悪の理由だ。

そんなくだらない原因によって本来発揮されるべき力が発揮されぬまま事態が收拾を迎えてしまう、そのような結末を不満なく受け入れられる人物など多い筈がない。現場に近ければ近い程その数は減っていくだろう。

あの時あの場で全力で役目を果たしたからこそそうして生き延びられたと考える健軍達からしてみれば、くだらない干渉に雁字搦めにされたせいで『門』を失ってしまった平行世界の自分達に同情を抱いてしまうと同時、かのような干渉を繰り返した当時の平行世界の日本政府に憤りを覚えてしまうのも仕方のない事であった。

銀座奪還という断固とした決断を下したこっちの嘉納総理という、身近な比較対象が存在するだけに尚更である。

だが健軍は、同時に別の感情を抱いてしまっている己を自覚していた。

その感情の名は——羨望。

どちらの世界が正しいのか、どちらが間違っているかまでは分からない。

だがどちらの世界が狂っているかと比するならば、それは間違いない。自分達の方だと健軍ならば認めるだろう。きっとあの伊丹辺りも同意するだろうな、とも健軍は思った。

確かに己が有する武力を發揮出来る出番が巡ってくるのは誉であるし、圧倒的火力で敵を薙ぎ払うのは格別の光景だが……何事も限度というものがある。

それによつて膨大な無辜の人々の、しかも自国民までもが巻き込まれるとならば話は別だ。

我々の世界はあまりに多くの血を流し過ぎた。あまりに多くの死を目の当たりにし過ぎた。

その中には2度の銀座を巡る騒乱の犠牲になつた自衛隊員や日本国民も多数含まれている。惨劇を生み出したのは健軍達の同類、すなわち武力を持つ軍人の一部が狂気を抱いたが故の結果だった。

『門』が開いた先の平行世界<sup>原作世界</sup>では第3次大戦が勃発していない。中東における核爆発もロシアによる弾道核ミサイル演習——真相は超国家主義派によるテロ未遂——も発生していないらしかった。

あちらの世界は我々<sup>原作世界</sup>よりも狂気に蝕まれていない——それが健軍達には羨ましかった。

政治によつて行動を縛られはしても、そもそも民主主義国家の軍隊

とはそう在って当然なのだ。シベリアンコントロールの下、最終的に流れる血の量を抑制出来たのならそれは認めるべき功績だ。

もしピニヤ達帝国講和派と日本政府が進めていた交渉がゾルザルのクーデターによって中断していなければ、特地に流れる血の量はずっと少なく済んだ筈だ。殉職した自衛隊員もより少なかった筈だ。

祖国と分断され、自衛隊員軍人の我々のみで今後を模索しなければならなくなり——結果、皇宮襲撃という屍山血河を生み出す選択をしてしまつて以降、特地に残留する自衛隊員達の中でも階級や立場が上の人間ほど政府に統制される事の必要性を強く再認識する傾向が広がっている。

それは虐殺同然の蛮行を実行した自分達に対する自己嫌悪と、それに対するある種の逃避を求めた結果の発露でもあった。

政府の方針で作戦を命じられたのなら、それによつて発生した犠牲の責任も全て政府のせいだと押し付け責任ける事が出来るのだから。

「しかし不思議なものですねぇ。時代も違う、歴史も違う、『門』が出現し特地に派遣されてから直面した事態も少くない差異が見られる上に、そもそも『門』の出現と消失までの期間すらも我々とあちらではズレがある。

にもかかわらず原作世界あちらとMW世界こちら、双方に存在する人々に関しては特地派遣部隊の主要な人員のみならず、当時の政権を取り仕切っていた先生方の顔ぶれもほぼ一致していたといえます。

類似する平行世界の間は何らかの法則でも働いているのでしょうか？ 気になるところです」

妙に声を張り上げてでそのような疑問を発したのは江田島五郎二等海佐だった。

階級名から分かる通り、特地派遣部隊の中では空自以上の少数派である海上自衛隊から派遣された人物だ……が、その実態は特地における自衛隊の活動がほぼ陸地を占めていたせいで『門』開通中も崩壊後も無聊を困うばかりの、伊丹が聞けば是非俺と代わってくれと懇願するに違いない立場だったりする。

それでも最近ではピニヤが女帝の座に就いた事で辺境の海洋国家相手の外交活動（囁）の護衛という仕事が自衛隊に回ってくるようになった為、江田島もまた海上活動の専門家という少なからず本来の役割を取り戻しつつあった。

会議室に充滿する嫌な空気を入れ替えようという魂胆だろう江田島の言葉に健軍も乗った。

「もう一人の俺か……会ってみたいという気持ちはない事もないが、うーむ」

「あちらの世界でも健軍一佐は第4戦闘団の団長を務めておられるとか。逆にこちらの第1戦闘団は銀座に出撃されてそのまま加茂一佐から彼の副官でおられた柘植二佐が指揮を執られている一方、あちらの世界では引き続き加茂一佐が団長を務められているそうですね」

「我々の側とは違ってあちら側で起きた閉門騒動がこちらの銀座で起こった其れよりも比較的小規模だったというのが大きいのでしよう」

「代わりにあっちじゃゾルザルが率いる敵軍相手に正規軍同士の会戦が行われ、我々自衛隊もそれに加わっていたそうじゃないか」

「向こうの加茂一佐はロシア軍の代わりにオーガーみたいな怪物相手に戦車乗って戦ったのかね？」

「あの人なら間違いなく74式で先陣切って突撃してそうだし、違うない」

指揮官先頭で操縦手の尻を蹴飛ばしながら帝国軍へ戦車砲をぶっ放す姿が容易に想像出来てしまうあまり、加茂の人となりをよく知る戦闘団の指揮官達は思わず苦笑を交わし合った。

「こちらが公開した情報で精神的に打ちのめされてもうたあちらの世界の我々には悪い事をしましたけど、今回こっちのレイ氏が開いた『門』があっちの世界に繋がったのは我々にとっては望外の幸運でしたわ」

第二科の今津がそう言って報告書を広げれば、それを覗き込んだ幹部達も首肯や唸り声を発して同意を示す。

狭間ですら「全くだ」と重々しく頷いてみせる程の報告、それは――

「防衛省科学技術研究所と合同の『門』開通・閉鎖技術の実証実験記録……専門の設備が手元がないせいで満足なデータすら取れていない我々にとっては文字通り値千金の情報だ」

「我々の側では『門』を制御できる技術が発覚したのがあの騒ぎの真っ只中でしたからね……」

もしあの事件が起きていなければ、いやせめて発生が1ヶ月ズレていれば、我々も専門家や設備を集め最低限まともな実験データを集める事が出来ていたでしょう」

当然だがこれは<sup>原作世界</sup>あちら側の自衛隊にとつても極秘情報である。実際穿門法の情報が記載された報告書には『持ち出し・複製を禁ずる』と大きく赤文字の判が1枚目に捺されていた。

「柳田二尉はよくこんな情報まで向こうの我々から引き出せたな」

「第3次大戦やら銀座占拠やらキングス<sup>皇宮</sup>スレイヤー<sup>強襲</sup>作戦やら、こっちの我々が直面してきたアレコレをひたすら捲くし立てて、向こうがノックアウトされた所を上手く説得したらしいで」

「そりゃ詐欺師や悪徳セールスのやり口だぞオイ」

インパクトの強い話題を立て続けに並べ立て、情報の奔流に思考能力が飽和した所で勢いそのまま本命を無理矢理受け入れさせる――

—ありふれた手法だ。

「だがWW3すら経験していない別世界の自衛隊員には効果覲面だろうよ」

心から同情するように溜息をつく幹部達。自分も同じ立場なら、間違ひなく心穏やかとかそういうレベルを通り越した有様になると、確信出来てしまえたが故の意見の一致であった。

それでもあくどい手段を取った柳田を責めるという流れにまでは発展しない。

彼が平行世界の自分達から入手した情報の価値はまさに値千金であり、同時にそのような手段も許容しなければならぬ立場であるところの場に集まる全員が自覚しているのだから。

「しかしあちらを笑う事はできません。何せ彼らはもう1人の私達そのものなのですし、広めてはならない秘密を抱えているのは我々も同じなのですから」

親が子供を諭すような声色でそう言い放つ江田島に、健軍達は反論できずに閉口するのだった。



## GATE 自衛隊かの地にて、平行世界と遭遇せり9

「これがレレイが開いた『門』……かあ」

設定された立ち入り禁止ラインのすぐ外で、この世界<sup>MW</sup>の栗林は積まれた資材ケースを椅子代わりに腰掛けながら宙に浮かぶ水溜まり様の存在を眺めていた。

その隣にはボーゼスも同じように腰かけて同じモノを珍しそうに見ている。

少しの間ジーツと見つめてから、やがて栗林はこう呟いた。

「何て言うか……地味？ 銀座と繋がってた前のよりもずっと小さいし」

「あっちのは『門』が自然と消えちゃわないよう固定する為の魔法装置であって、『門』の本体は今浮かんでるやつなんだってさ。レレイが言ってたよ。

今回の世界同士の間隔がかなり狭くなっていたお陰で、放置しても1日2日はこのまま維持されるだろうとも言ってたぞ」

栗林の疑問混じりの感想に答えたのはあちら側<sup>原作世界</sup>から帰還していた伊丹である。

栗林の隣に立つ伊丹は一時的に自分達の世界の特地へ柳田共々戻ってからは龍鱗の装甲服から解放され、迷彩服のズボンにコンバットシャツのみと『門』の周りを囲む隊員達と比べ比較的ラフな格好だ。繋がった先が平行世界のアルヌス駐屯地であり、まず戦闘は起きないだろうという判断から武装も護身用にレッグホルスターの拳銃とマガジン数本のみと最低限に留まっている。

『門』の監視を行っている他の隊員達は武器も含めフル装備なのだ

が、『門』の向こう側について若干の情報は既に基地内に広まってしまっており、それもあつて用意の物々しさと相反して場の空気は落ち着いていた。

例外は以前からレイ協力の下、『門』の制御技術を調査していた研究班である。少数ながら選抜された専門家である彼らの目は宙に浮かぶ『門』とその周囲に設置された計測機器が拾うデータに釘付けだ。まだあちら<sup>原</sup>作<sup>世</sup>の世界にはこっちのレイ達が滞在したままだ。彼女達には予備の無線を預けてある。

もし研究班が『門』の異常を探知したならば、同じく向こうに残したまま有線式UGVに搭載された通信中継機能を経由してすぐさま帰還を指示する手筈となつているので、彼らの役割は極めて重要だ。

周囲を取り巻く状況上、正式な婚姻手続きは未だ行えていないとはいえ実質栗林の伴侶として自他共に認知されている伊丹がこうして付き添っているように、ボーゼスの隣にも彼女の胎に居る赤子の父親である富田がボーゼスの肩を支えながら寄り添っていた。

「へー、あんな大きくて立派な造りだった『門』が実際の中身はあんなつてたんですかあ」

「ピニヤ殿下と共に私達が『ギンザ』へ参りました時は真つ暗な坑道<sup>トンネル</sup>の中を進んだような感覚でしたわね」

「そうそう私もボーゼスさんと同じ感じだったわー」

最初にバスに乗って『門』を通って特地入りした時は緊張したし、東京の街中からいきなりだっ広い土地に出た時も驚きはしたんだけど、何回も繰り返し返すと段々慣れてきて結局は転地訓練でトンネルを通る時と大差なくなっちゃうのよねえ」

ボーゼスの感想に栗林が乗つかると、そこに富田も遠くを見ながら話に加わった。

「空挺降下も同じだな。最初に身一つで大空に飛び出す恐怖を克服できるかが最大の難関だが、恐怖を乗り越える覚悟さえ決まれば2度目

からは簡単に飛び出せるようになる。俺もそうだったよ」  
「富田ちゃんも空挺徽章持ちだもんねー。いいなあ私も降下課程受けてみたくて志願したんだけど通らなかったのよねえ。復帰したらまた挑戦してみようかな」

そんな事を言い放つと彼には珍しいしかめっ面を浮かべた伊丹がウンザリした様子で首を横に振った。

「だーめだめ。子供が生まれてからもしばらくは育児や産後ののりハビリで大変に決まってるんだから、まずは専念しなきゃ駄目でしょ」  
「えーっ？ 良いじゃないですか私にも受けさせて下さいよ降下課程。育児もリハビリもきっちりこなして以前通りの体に仕上げてみせますからあ。ねー？」

飼い主に甘える愛玩犬か猫を彷彿とさせる甘ったるい声で強請る栗林。

妊娠発覚が比較的同時期であった栗林とボーゼスは既に妊娠後期に突入。両者の胎児は問題もなくすくすくと母親の子宮内で成長する一方で、母体の方も初期はやや不安定な様子が見受けられたものの、ある程度経過してからは妊娠による体内環境の変化が齎す貧血や妊娠性高血圧といった兆候も見られず健康そのものだ。

したがって、基地内では迷彩服やコンバットシャツが普段着であった栗林も妊婦服姿で日中を過ごすようになっていた。

……ちなみに一般にはあまり知られていないが、自衛隊内の服装規定では妊婦の女性自衛官が勤務に携わる場合の服装もちゃんと規程が定められている。モスグリーンのシンプルなデザインの妊婦服がちゃんと支給されるのだ。

「結婚願望強い方なのは自覚してたけど、本当にコレを着る日が来るのまではちよっと想像してなかったわ」

などと初めて妊婦服に袖を通した栗林がそう漏らしたのは余談である。

付け加えるとこれまで着ていた迷彩服はお腹周りだけでなく胸元と臀部にもきつさを覚え始めていたとかなんとか。

ボーゼスも、フリル多めな丈長ワンピース調の上等な仕立てで縫われたマタニティドレスを纏っていた。

栗林がそのまま伊丹の脇腹に抱き着けば、自然と彼女の体は以前から豊かな曲線を描いていたのが妊娠の影響で張り・サイズ共により存在感を増した双丘をマーキングするかの如く擦りつけていて、その度にモスグリーンの布地を内側から大きく持ち上げる膨らみがグネグネと形を変えて弾んだ。

柔らかく、妊娠の影響で高目の熱を帯びた蠱惑的な弾力に思わず頭をもたげそうになった男としての本能を、伊丹は無理矢理押し殺した。

装甲服を脱いで伊丹も薄着だったのもあって破壊力は抜群であったが場所が場所である。栗林を筆頭にヤオやロウリイ、テユカと周囲の女性陣による激しいスキンシップ攻勢を耐え凌いできたのは伊達ではないのだ。

「大体ね、子供がその話聞いて真似するような事になったら危ないでしょーが。俺は許しませんからね」

色香に惑わされる事無く釘を刺しつつ、伊丹の手は脇腹に押し付けてくる栗林の髪を優しく梳いたかと思うと、その手を更に下にずらし人差し指で以って栗林の下顎を擦ってみせる。

栗林はちよつとくすぐったそうに「んっ」と吐息を漏らしつつも、気持ち良さそうに目を細めて伊丹からのアプローチを黙って受け入れた。伊丹と栗林の密着度合いが増した。

「トミタ……」

傍らで見物している間に、羨まし気なまなざしを浮かべたボーゼスが富田へチラチラとサインを送った。

少し熱を帯びた声色で囁かれた富田は若くも厳めしい顔つきをほのかに赤く染めつつも、ボーゼスの肩に手を置くと優しく己の胸板へ引き寄せた。

富田の腕の中でボーゼスの顔が満足そうに綻んだ。富田の行動は彼女基準でもどうやら満点であつたらしい。

「ちよつと技官。このガス計測器故障してるんじゃないか。あそこに漂ってる甘つたるい空気に全く反応しないんだけどこれ」

「残念だがバカツプルの睦み合いによつて発生するイチヤラブ粒子を計測できる機材は今の科学力では未だ開発出来そうにないんだ。諦めてくれ」

「あー俺もペルシアさんとイチヤつきたいなー！」

一方で、2組のバカツプルが放つピンク色の気配を浴びた周囲への被害は甚大であつた。

不意にイチヤつく2組の背後でパンパンと掌を叩く音が鳴った。

「服務規程を違反して部下と現地住民相手に爛れた行為へ及んだ前科をお持ちの其処の殿方2人、そろそろ周囲の目を思い出して職務放棄のお時間を終わられては如何ですか？」

次いで聞こえてきた柔らかな口調の裏に逆らい難い威圧感を感じる声に、野郎2人はギクリと肩を震わせると、恐る恐るといった体で

ゆっくり背後へ振り返る。

女性ながら190センチ超と特地派遣部隊でも屈指の長身を誇る黒川茉莉二曹が、アルカイックスマイルを張り付けて伊丹達の後ろに佇んでいた。

「クロお、何時までその話引つ張るんだよお前え。もうちよつとこう、上官に対して手心と敬意を以ってだな……」

情けない顔で反論する伊丹だが、微笑んでいるのに笑顔に見えないワライを向けられて次第に尻すぼみになる。

富田に至っては顔は黒川の方を向いているが視線の方は彼女の顔を直視しまいと必死に逸らすという、反射的に振り返ってしまったのを後悔しているのがありありと伝わってくる様相を見せていた。伊丹もそうしたくなったが今更もう遅い。

「あら。部下を手籠めにして孕ませるに飽き足らず、現地のそれも幼気いたいけな少女達とも現在進行形で淫らで猥褻な関係を維持しているような節操のない相手のどこに敬意や手心を持てと伊丹元隊長殿は仰られるのでしょうか」

「おうふ」

濃密な毒っ気たっぷりの鋭い舌鋒に流石の伊丹も一撃ノックアウトだ。

何せ黒川の指摘は全て事実なだけに反論のしようもないのである。わざわざ『元』と付け足してきたのも強烈なアクセントとなって威力増だ。伊丹の顔にじつとりと冷や汗が浮かんだ。

其処に助け舟を出したのは件の孕まされた栗林本人である。頬と胸を伊丹に擦りつける行為は止めないまま、頬を膨らませて話に割り込んだ。

「もークロってば人の旦那様の事苛めないでくれるー？　ロウリイ達

の事も本人達と相談し合った結果なんだし私も受け入れてるし、何も問題はないんだからクロがそこまで気にする事ないんだからね？」

「問題大あります。手籠めにされた当の貴女が伊丹隊長を甘やかさないでくださいなまったく」

「手籠めにされたんじゃないやなくて私達が手籠めにしたんですー」

やれやれとばかりに首を横に振って黒川は嘆息した。

「と、ところで黒川はどうしてここに？ お前さん今は診療施設勤めだろ？」

看護資格を持ち派遣部隊入り前の原隊が自衛隊中央病院だった黒川は偵察隊から外され、現在人手不足の診療施設で辣腕を振るっている立場だ。

閉門当時、彼女は帝都悪所街に派遣されており、混乱と回収用ヘリが外交団の救出作戦での運用に割かれた影響から、事態収拾のその時まで当時事務所派遣されてた他の隊員共々悪所街事務所にて待機せねばならなかったのだ。

特地に於いても獣人以外では早々見かけない長身と柔らかな美貌、外見の清楚さとは正反対の猛毒が塗られた刃もかくやな舌鋒が相まって、黒川の手にかかればどんな荒くれ者の入院患者も退院の日まで大人しくなるともっぱらの評判である。

伊丹と富田の目にはメデューサもかくやな気配を放っているように映った恐ろしい笑顔を消し、真面目な表情に切り替えた黒川は栗林とボーゼスへこの場から移動するよう告げた。

「クリにボーゼスさんも今日の定期健康診査はまだ受けられていないでしょう？ 『門』に何事か異変が起きた際に万が一があるかもしれないのですから、お2人も早く移動して大人しく診査を受けて下さいな」

基地の外に屋敷を構えそこで過ごしている筈のボーゼスが基地の中心であるこのドーム跡地に居るのもかのような理由だった。

基地内の診療施設に向かう途中で新婦で妊婦仲間の栗林と合流し、ちよūdそのタイミングで平行世界との『門』が繋がったと騒ぎを聞きつけたものだから、ついつい予定を変更して見物しに2人して足を伸ばしてしまった次第である。

「あの『門』の先にはもう1人のトミタが存在されるのですね」

期待するような、悩むような、複雑な顔色で半透明の『門』を見つめたボーゼスが不意に呟いた。

金髪縦ロールが揺れ、碧眼が『門』の向こうをその目で見てきた伊丹を捉える。

「イタミ殿。つかぬ事を伺わせて頂きますが、あち<sup>原</sup>ら<sup>作</sup>の世界のトミタはどのような様子だったのでしょうか？」

「そうですね。見た目や雰囲気自体はこっち側の富田とほぼ変わりがなかったですね。向こうでも向こう側の俺の指揮下で活動してみたいですよ」

「左様ですか……」

「あつ、じゃああつちの世界の私やクロはどんな感じでした？ やつぱり向こうの私も隊長とデキちゃってたり？」

興味を惹かれた栗林がやはり伊丹に抱き着いたまま、上目遣いに伊丹を見上げて話に加わる。黒川も気になるのか目線で促してくる。

「クロは見かけなかったなあ。でも向こうの世界の志乃は居たぞ。富田と一緒に俺の部下やってたみたいだけど、こっちの俺達とは違ってデキちゃったりとかそういう仲ではなさそうだったぞ」

「えっマジですか!？」



驚きのあまり勢い良く体を持ち上げた栗林の体を、背中に回した腕の力を強める事で伊丹は慌てて支え直した。身重にもかかわらずこれまで通り活力を有り余らせているものだから、逆に周りの方が彼女の変わらぬ活発さに気を遣う立場である。

「向こうじゃ第3次大戦やそれ関連の事件が起きていないみたいだからなあ。多分そのせいじゃないの」

「あーそっかー……私が隊長に惚れたきっかけ自体が起きなかった感じかあー……」

ロシア人のテロリスト集団に誘拐され、公開処刑されそうになったところを文字通り傷だらけになりながら伊丹が助けに飛び込んできた事が栗林の中で伊丹への慕情が急速に開花したきっかけである。

そもそもそのテロ集団は第3次大戦を誘発させた黒幕の残党だった訳で、あんな衝撃的出来事を経験していないならば確かに伊丹と深い関係にはなっていないかっただろうかと、以前の己を客観的に分析した栗林は納得する他無かった。

何だかんだで少なからず慕情を抱くようになっていたかもしれないが、伊丹に助けられた事が彼を一気に男として意識する起爆剤になった事は間違いない。それも自覚している。

「隊長に惚れていない昔の私のままだったら、お付き合いの為に隊長の元同僚の特戦群の人達を紹介してもらおうと隊長にお願いしてそう……」

「あー隊員の結婚問題はリアルで深刻な問題だからなあ」

しみじみ頷く元バツイチ。

「あつても勘違いしないでくださいよ！ 昔は昔今は今、今の私はもう隊長以外考えられないですからね！」

「そっか、サンキューな」

慌てた様子で付け加えた栗林の反応に伊丹が微笑ましそうに口元を緩めたその時。

伊丹の視界の端に見える『門』が突然何かを吐き出した。それが異常な程の勢いだった事で伊丹の中のスイッチが瞬時に切り替わる。

「っ！ 退がれ志乃！」

栗林の体を力強く（同時に母体に触らぬよう繊細に）左手で引き寄せ背に庇う。

同時に最小限の動作で最短の経路へと閃いた伊丹の右手がホルスターへ伸び、ストラップを弾いてグロックをしっかりと掴んで引き抜かれる。

グロックは安全装置が引き金と一体化しており、撃鉄も外部に露出していないストライカー方式だが、自動拳銃の常としてスライドを操作して初弾装填を行わなければ発砲が出来ない。

護身用として携行していた伊丹も、基地内という事で暴発防止の為にグロックへ初弾を装填していなかった。

通常スライド操作には両手を使う。今の伊丹は栗林を庇うのに左手が塞がっている。

その程度の問題はこの伊丹には問題にすらならない。抜いたグロックを少しだけずらして下へ向け突き出すと、スライドのフロントサイト部分がホルスターに引っ掛かった状態で押し込まれる形となりその勢いのままスライドは後退、9ミリパラベラム弾が薬室へと装填された。

次に反応したのは富田だ。伊丹の警告の声に彼もまたボーゼスを庇う形で身構えている。黒川は積まれた資材ケースを遮蔽物に既に身を隠していた。

監視役の自衛隊員も異変に気付くや提げていた64式小銃を『門』へと向けて一気に敵態勢だ。

……尤もその緊迫した空気も、すぐに霧散する事になるのだが。

『門』からの突如出現した存在の正体が自分達と同じ陸自の迷彩服姿で、でもって彼らも見知った人物とそっくり同じ顔に加え自衛隊員とは思えぬちんちくりんな背丈をしていたからである。

ただしこちらのお腹には目に見えて分かる膨らみは見受けられなかった。

「あの隊長、今『門』から出てきてあそこに立ってるのって」

「……お前の想像通り、あっちの世界の栗林……だと思う」

「本当に同じ姿をされていますのね」

話は聞いていても、実際に目の当たりにするとやはり驚きを隠せない様子の富田とボーゼスは目を丸くした。

迷彩服姿の栗林は大きく息を荒げて背中を上下させていたかと思うと、次の瞬間勢い良く顔を上げ、手負いの肉食獣を彷彿とさせる眼光で周囲を睥睨した。口からは「ふしゆるるる……」とこれまた興奮状態の獣じみた呼吸音が聞こえてきていたりいなかったり。

彼女の視線はやがて伊丹とその背に庇われる『こちら側』の栗林を捉えた。

2人の姿と様子を認識した瞬間、平行世界の栗林は限界まで目を見開き、動きを止める。

「目を逸らすなよ。ゆっくり後ろに下がって距離を取るんだ。急に逃げ出そうとしたら襲われるぞ……!」

「それって熊に遭遇した時の対処法じゃありませんの」

黒川のツツコミは聞こえなかったフリをした。

5秒、10秒、15秒と時は過ぎ、その間迷彩服の栗林の視線はずっと伊丹を――

ではなく、身構える彼の後ろから恐るおそる顔を覗かせる、妊婦服を着たもう一人の自分自身に固定されていて。

そして。

彼女はやがて。

「.....ひぐう(ぽろ

ぽろ)」

((((泣いたー!!!?))

# GATE 自衛隊かの地にて、平行世界と遭遇せり1 0

錯乱した栗林が『門』の向こうへ飛び込んでしまった――

その報告を当時『門』の監視を担当していた倉田から聞かされた  
原作世界  
平行世界の伊丹達は、栗林を追いかけて『向こう側』<sup>M</sup><sub>W</sub>の特地へ向かう  
と決めた。

「隊長達まで行っちゃうんすか!?!」

「仕方ないだろ『向こう側』に行っちゃっても走るの止めてなかったら  
すぐに追いかけないと、あの様子じゃそれこそ何処まで行っちゃまうか  
分かんないんだからさ!」

「それはそうっすけど……」

「ならばまず先に我々の『ムセンキ』で『向こう側』に連絡し、『こちら側』のクリバヤシを保護するよう伝えるべきではないだろうか」

ローブの下から携帯無線機を取り出しながら『向こう側』のレレイ  
が提案する。苛立たしげに頭を搔いてから伊丹は頷いた。

「すまないけど頼むよ。でもどちらにせよこっち側の人間の不始末  
を、全部が全部『向こう側』に押し付ける訳にもいかないだろ。」

それにさ考えてみなよ倉田。あそこまで錯乱した栗林が、もし『向  
こう側』の俺やもう1人の自分自身と遭遇した時、更に暴走しないっ  
て保証はないだろ?」

しかも『向こう側』の俺と栗林はくっついてるどころか子供まで出来ちやってるんだぞ？ そんなの見せられて冷静でいられると思うか？ 下手するとち狂って襲い掛かる可能性だって……」

軽自動車のボディにV8エンジンを積んだという表現がまさに当て嵌まる栗林が、格闘徽章すら手にする程鍛え上げたその鉄拳足刀を狂乱がままに行使しようものなら、果たして如何程の被害が出てしまおうやら……

最悪の想定に、脳裏に血生臭い惨劇を幻視してしまった富田や倉田やテユカ達のみならず、発言した伊丹までも顔を蒼褪めさせ、焦りに頬が引き攣った。

「大変じゃない！ 早くクリバヤシを止めないと！」

そんな訳で、『原作世界こちら側』の伊丹は同じ世界の3人娘にヤオ、富田とおまけに倉田も加え、今度は彼らの方から『向こう側』の特地へ向け大慌てで『門』へ突入する事と相成ったのである。

平行世界の少女達もまた彼らを追って自分達の世界へと戻って行くのであった。

……そして栗林の暴走を必ず止めようと決意を固めた彼らを待ち受けていたのは、彼らの誰もが想定していなかった予想外の光景だった。

「ひぐつ、うえつ、ぐしゅつ、うえええええええええええ……」

何と。

あの栗林が！

普通の女の子のように泣きじやくっているのである!!

「何……だと……」

伊丹、これには驚愕。その姿、まるで大技が直撃したにもかかわらず容易く凌がれたのを見せられた、どこぞの死神代行の男子高校生が如き驚き具合である。

「俺は一生、この光景を忘れられないだろう。あの栗林二曹が泣いているぜ……」

倉田もまた普段の口調をブン投げて愕然と呟いた。ネタへの走りっぷりという意味では上官とどっこいどっこいであった。

「よしよし。この際です、貴女がスッキリするまで遠慮なく泣いておしまいなさいな」

「あ、黒川二曹、MW世界こちらでは特地に残ったのか」

意中の男子が別の女子とお付き合いどころか婚約関係まで構築済みと知ってしまった年頃の少女のように泣きじやくる迷彩服姿の栗林の背中を、優しく叩いて慰めている黒川を見て驚き交じりに富田が漏らす。

心を千々に見出し目元を真っ赤にして嗚咽を漏らし続ける栗林のその姿に、ふと伊丹は「そういえば……」とある事を思い出す。

「富田さあ、参考人招致に呼ばれてピニヤ殿下達連れて銀座に行った時の事覚えてる？」

「はい。覚えておりますが」

「その時にさ、駒門さんが俺がS特殊作戦群に居たって聞かされた時もクリの奴、悲鳴上げて泣き出してたよな」

「そういえばそうでしたね」

『クルマ』の中でもクリバヤシってばしばらくの間暗い顔してブツブツ呻いてたわ」

富田とテユカが首肯すると、伊丹は泣き止まない栗林から視線を外し、何とも微妙くそんな顔を浮かべて声を潜め、ある推論を口にした。

「もしかしてクリって、腕つぶしじゃどうにもならない話題にぶち当たってそれを頭が理解しちゃうと、受け入れられずに逃げ出して泣きだしちゃう性分だったりするんじゃないか？」

「子供の頃は偶に見かけましたねそういう子供……」

「なまじ腕つぶしが強過ぎて大抵の事は押し通れちゃう分、心が耐えられないのかもしれないっすね……」

初めて知った部下と同僚の意外な一面に、頭を寄せ合いながら目を丸くする伊丹達であった……

「とりあえずクリについては『向こう側』の黒川に任せるとするか——  
——ん？ どうしたレレイ」

迷彩服の袖を引っ張られる感覚に伊丹が顔を上げる。袖を細い指先で摘まんでいたレレイがどこかを指差した。

「あれを見て欲しい」

目を見開いて何処か呆然とした様子のレレイを訝しく思いながら



指差す先へ伊丹も顔を向けた。

もう1人の自分、龍鱗の鎧姿からコンバットシャツと迷彩服の下という組み合わせに装いを変えたこの世界<sup>MW</sup>の伊丹と、その背後にもう1人。

認識した瞬間、伊丹もまた限界まで目をかつ開いた。富田も倉田も同様だった。テユカは口元を手で押さえながらの絶句を経て、絞り出すように掠れた声で呟いた。

「ヤオが言ってたのって本当だったんだ……」

「や、ヤッホー？」

見慣れぬ自衛官用の妊婦服に大きくお腹を膨らませたこの世界の栗林が、未来の旦那様の背から顔を覗かせて『<sup>原作</sup>あちら側』のテユカ達に小さく手を振っていた。

機材ケースを挟んで2人と同じく様子を伺いながら佇むこの世界の富田とボーゼスらの下へと、平行世界の伊丹達は近付いた。

「こっちでは初めましてになるのかな？ この世界の栗林志乃二等陸曹であります。現在妊娠中につき今は偵察隊から外れて後方での業務に就いてまつす！」

伊丹の背中から横へ1歩離れてその全容を明らかにしたこの世界の栗林が敬礼と共に自己紹介を行うと、平行世界の上官や同僚や少女達は口々に驚嘆の呻きを発する。

特にテユカとレイイの間に走った衝撃は凄まじい。よりにもよってあの栗林が、別の世界線では伊丹との子供を孕む程の深い関係に至っていたというのだから、伊丹に小さくないどころか大分重たい意味での慕情を抱いている少女達が激しく動揺するのも当然だろう。

「本当にこっちのクリバヤシ、お父さんとくつついちゃったんだ。あのクリバヤシがかあ……」

「世界が違えばかのような事もあるという事か……」  
「……驚愕に値する」

原作  
あつちの世界の私は一体隊長にどういう接し方をしているんだ、と妊婦服姿の栗林は頬を引き攣らせた。

同じ感想を抱いたらしいもう1人のテユカが率直にあちら側の栗林と伊丹はどういう関係なのかと尋ねると、

「うーん。仲が悪いとまではいかないけど、お父さんの趣味をクリバヤシが嫌ってるせいでそこまで仲が良いって感じでもないわね」

「上司と部下。それ以上でもそれ以下でもない範疇の関係に留まっている」

「別世界のクリバヤシ殿にこのような事を知らせるといいうのも変な気分だが……此の身らの世界のクリバヤシ殿はトミタ殿に懸想しておられていてな。」

トミタ殿は自分殿はボーゼス殿がいるからと断ったそうなのだが、クリバヤシ殿は諦めきれず横恋慕されていて我々の方のヨウジ殿らも些か心配なされておられるのだ」

テユカ・レイ・ヤオから別世界の自分について教えられた妊婦服姿の栗林は、「あちゃー」と呻きながら額を手で押さえて天を仰いだ。

「そうよねえそうなるわよねえ。うん分かるわー、耀司さんに惚れてなかつたら間違いなく富田ちゃんに惚れてたわよねえ私の事だもん。」

耀司さん以外の周りの居た男の中で、私好みの精強で果敢で一途に強さと戦いを極める男性って富田ちゃん位しか当て嵌まらないもの」

「精強で？」

「果敢で？」

「一途に強さと戦いを極める男性？」

3人の瞳が妊婦服姿の栗林の隣に立つこの世界<sup>M</sup><sub>W</sub>の伊丹を捉え、疑問

符が3つ浮かんだ。

柳田が―杖や車椅子を必要としない、別世界の方―自分達の世界の狭間達と情報交換をしている間、自分達ももう1人のテユカ達から炎龍やジゼルと戦った時、伊丹やその仲間がどれだけ勇猛果敢に戦いを挑んだかを丁寧に関かされはしたものの。

やはりというか何というか、話を聞き終えた直後もそうだったのだが。自分達を知る自分達の世界の伊丹の人柄がまず思い浮かんでしまっせいで、栗林の発言に対し激しい齟齬を彼女達は抱いてしまったのである。

「こっちはこっちで色々あったんだよ。色々、さ」

この世界の伊丹は深くを語ろうとはせず、苦笑を浮かべるにとどめた。

「そうね、本当に色々あったわ」

「あのような経験は2度は遠慮したい」

「此の身も全面的に同意だ……あのような光景、2度と御免こうむる」

同じくこの世界のテユカ達も直面した数々の危地を思い返すと大なり小なりうんざりした表情となり、それを見た別世界の自分達の頭上に更なる疑問符を増やすのであった。

ふと迷彩服を着た<sup>原作世界</sup>あちら側の伊丹が何かに気付いた様子で周囲に視線を巡らせた。

探している人物が見つからず、伊丹は皆に聞こえるようやや声を張り上げて疑問の言葉を発する。

「ところでさつきからロウリイが居ないみたいなんだけど何処行ったか知らないか？」

別世界の栗林が伊丹とくつつくに飽き足らず懐妊までしているという衝撃情報を巡るドタバタのせいで、何時の間にかロウリイの姿が無い事に気付くのが遅れたのだ。

「最後尾は倉田だったな。お前は何か見てないか？」

「すみません。ロウリイが俺の前を走って『門』に入っていていつてこつちの世界に出てくるまでは確かに見ましたけど、そこからあそこで泣いてる栗林二曹の方に気を取られちゃいました……」

<sup>M</sup><sub>W</sub><sup>世界</sup> それは伊丹や富田達も同類なので責めはしない。困惑する彼らにこの世界のレレイが告げる。

<sup>原</sup><sub>作</sub><sup>世界</sup> 「そちら側だけではない。我々側<sup>M</sup><sub>W</sub><sup>世界</sup>のロウリイも共に姿が見受けられない」

「本当だわ何時の間?!」

どうやらゴスロリの亜神は2人仲良く『門』が存在するこの場から離れてしまったようだ。

声を張り上げてロウリイの名前を呼んでみる。伊丹は無線を使つてこの世界の狭間達に繋ぐと、敷地内の監視カメラでロウリイ達の姿を探してもらえないか要請した。

少し経つと、狭間から基地の敷地内を移動する2人のロウリイを発見したと連絡が入った。

それからすぐに伊丹達もこちらへ向かってくるゴスロリ亜神×2の姿を発見した。やはり『門』があるドーム前を離れ基地内の何処かに2人して彷徨っていたようだ。

「心配したぞロウリイ。2人して何処に行っていたんだ？」

ホツと息を吐いてから声をかけたのもつかの間、ロウリイの様子が  
おかしい事に迷彩服姿の伊丹は気付いた。

あちら側原作世界のロウリイは眉を寄せ目を鋭く細め、好ましからざるモ  
ノを目にしたかのような不快と警戒の気配を漂わせてコンバツト  
シャツ姿の伊丹を睨んでいた。この世界MW世界のロウリイは隠し事を知ら  
れてしまつて申し訳なさそうな表情で同じく伊丹を見つめていた。

「あれは一体どういう事なのお？」

ハルバードを突き付けるとまではいかないが、それでも苛立たしげ  
に鋭利な石突で足元のコンクリートを削りながら剣呑なまなざしの  
ロウリイが詰問した。

『『あれ』って何の事なんだロウリイ』

情報が足りず、何がロウリイの癪に障つたのか全く理解出来ない  
い迷彩服姿の伊丹は、率直に彼女へと質問した。

死後の魂に深い関わりを持つ黒ゴス神官服の亜神はあっさりと、何  
も知らない自分と同じ世界の伊丹に教えてやる事にした。

——それはこの世界MW世界の狭間達が平行世界原作世界の己には教えまいと  
隠し通す筈だった、特地に取り残されたこの世界の自衛隊にとつての  
最大の闇。

「この砦の外にい、凄まじい死者の苦しみと怨念が集まつてる気配を

感じたのお。

最初にいアルヌスで起きたジエイタイとの戦いで散っていったあ兵達のそれとは違う……亡くなった者達の数はそっちよりも少ないしい悪い影響が広がらないようにいい処置もされてはいたけどお、気配の濃さと痛ましきではこっちの方がずっとずっと上でえ、ああなったももつと最近の筈よお。

——教えなさい。あれ程の悍ましい気配を帯びるだけの何を、貴方達いこの世界のジエイタイは行ったというのお？

主神エムロイの使徒として嘘や誤魔化しは一切認めないんだからあ、正直に答えなさい」

# GATE 自衛隊かの地にて、平行世界と遭遇せり1

1

——平行世界のロウリイからの詰問に対し伊丹の返答は、狭間へと連絡をつける事だった。

連絡を受けた狭間は深い深い溜息を吐き出すと、回答の場に立ち会ったのは『原作世界あちら側』の伊丹とロウリイのみに限定し他言無用とする事を条件にロウリイの要求を受け入れると告げた。

平行世界の自身こと『あちら側』の司令官と幕僚幹部らには秘匿した情報をどうしてこの2人には伝えるのかといえば、やはり1番の理由はロウリイを敵に回したくなかったからである。

万が一彼女が敵に回つたらどれほどの被害が出る事やら、不死身の巫神のその恐ろしさは『MWこの世界』のロウリイやジゼルとの共闘で自衛隊側は嫌という程理解していた。条件が整ってしまえば主力戦車すら彼女達は生身ひとつで撃破可能である事すら実証済みなのだから。

仮に銀座へ通じる『門』が健在だった時分ならば、狭間達は安易に機密事項を外部の人間に漏らす事は憚られるともっと必死になってロウリイを説得にかかっていただろう。

特地で化学兵器が実戦に使われ現地軍に膨大な犠牲者を出したという結果は、半ば偶発的かつ止むを得ない決断の果てに生じたとしても、それを為した日本と自衛隊の立場は世界的に極めて厳しくなってしまうのは間違いない。

——それがもし元の世界に知られてしまった場合の話だが。

今繋がった『門』の先にあるのは平行世界原作世界であつて元の世界ではない。  
い。

2つの世界を繋ぐ『門』が閉じてしまえば、意図して再接続を試みぬ限り再びの邂逅はまずありえない。

同時に互いの世界にとっての秘密はその価値を完全に失つてしまふのである。

発覚したのが、『あちら側』の伊丹達がこの世界異世界の特地へわざわざ押しかけてきたタイミングだったのも幸いだった。

彼らは分断状態に置かれているのも同然の状況なので、口止めせねばならぬ人数も少なくて済む。避けるべきは平行世界のロウリイとの敵対を回避する事、そして現在の『門』が開通している間に化学兵器使用の情報が平行世界の自衛隊上層部にも知られてしまう事である。

せめて互いが求める情報や物資の交換と共有が最低限完了するまでは良い関係を保ちたい……この世界MW世界の司令部の意見は一致していた。

キングスレイヤ  
皇宮強襲作戦は意図的に帝国軍の人的損害を狙つて行われ、戦時国際法の観点から見てもグレーな内容かもしれないが、完全な黒とまではいかない範疇だろうというのが狭間達の判断だ。

一方で化学兵器の実戦使用は戦時国際法で制定された条約に於いて禁止が定められているので完全に黒である。  
だからこそこの世界MW世界の狭間達は『あちら側』原作世界の自分達には伝えなかつたのだ。

第3次世界大戦とそれにまつわる騒乱を身を以て体験し、世界と周囲を護る為に艱難辛苦と屍山血河を幾度も乗り越えてきた英雄伊丹の決断と献身を目の当たりにしたからこそ、狭間もまたそれに報いようと決断を下せたのだ。



毒には毒を。火には火を。非常手段には非常手段を。

同じ経験をしていない者が、同じように伊丹の決断とその結果を受け入れられるとは、狭間も他の

の幹部も到底思えなかつたのである。

狭間は記録映像やNBC偵察車等により採取された分析記録など、特地で炸裂した化学兵器に関わるあらゆるデータを抹消させていた。

バルコフらロシア軍脱走兵部隊が持ち込んだ化学兵器であるノヴァ6が、水と反応して急速分解される特性を有していたのは事態に関与したあらゆる者にとって最大の幸運だったと言えよう。炸裂直後に悪天候が招いた豪雨によって、アルヌスの土壤は大規模汚染を免れたのだから。

自衛隊の戦闘記録に於いてアルヌス近郊で生じたゾルザル派帝国軍の犠牲者は、『門』崩壊時に発生した地震による二次災害に因るものとのみ記録されている。

犠牲者の亡骸は集められ、念入りに焼却し、それでも尚毒性の残滓が検出されないかの確認を経てから自衛隊が重機を駆使して深く掘った穴へと葬られた。

当時アルヌス攻略の本隊として接近中だった帝国軍は万単位だった事もあり、何が起きたかを全て目撃した帝国軍の生存者も4桁は存在していたのだが、化学兵器を知らぬせいで何が起きたかを正しく理

解した生存者は皆無であり。

特地での化学兵器の炸裂が生み出した惨劇は、その影響の大きさにもかかわらず念入りな処理も相まって残された痕跡は限りなく少ない。

——それでも、恐怖だけは残った。

『アルヌスに居る緑の斑模様の服を着た黒髪黒目の男の怒りには決して触れるな。

さもなければ地獄が生まれるだろう。その地獄を闊歩する者こそ死神である』

帝国軍の生存者から他の特地住民へ。

このような警句が瞬く間に伝播する程に、恐怖という明確な実態を持たぬ概念だけは人々の心と記憶へ永延と刻み込まれたのだ。

——全てを教えられた伊丹とロウリイは無言で司令室を後にした。

何が遭ったのか、何を聞かされたのか訊ねてきたテユカやレイ達に、『あちら側』の伊丹は「知らない方が良い」とだけ告げると、『しばらく1人にして欲しい』とも告げて彼女達の下からから足早に離れたのだった。



ハンカチで顔を拭き、最低限雫が滴らない程度に髪の毛の湿気を拭き取り、ぼんやりと独り言ちながら男子トイレを出る。

だが伊丹の足は彼の意味に反し、休憩用のベンチの前まで達するや勝手に下半身から力が抜け落ち、伊丹は腰を下ろしてしまった。精魂尽き果てたように背もたれへだらしなく背中を預け、天を見上げる。

生憎にも、仰いだ先には無機質な廊下の天版しか広がっていないかった。もう1度、伊丹は息を吐いた。

傍から見ても虚脱状態であった伊丹は、それ故近付いてくる存在の気配も足音にも気付くのが遅れてしまったのである。

「隣いいかな」

「ああどうぞ……んあ？」

反射的に答えてしまったから遅れて認識を果たした伊丹は、ポカんとした顔で隣に腰を下ろした人物へ顔を向ける。

——化学兵器で1万人以上を殺したもう1人の自分がそこに居た。

## GATE 自衛隊かの地にて、平行世界と遭遇せり1 2

己と同じ迷彩服ではなくコンバットシャツを着たこの平行世界<sup>M</sup>の己を、WW<sup>原</sup>3を経験<sup>世</sup>していない世界の伊丹は改めてまじまじと見つめた。

背丈も体格も顔も、鏡を覗き込む度に映る姿と大差は感じられない。ただ迷彩服よりもタイトで体の線が浮かびやすいコンバットシャツを着ているせいか、心持ち筋肉のつき具合が自分より絞り込まれているように見えなくもない。

シャツ姿の伊丹はベンチへ腰を下ろすと、迷彩服姿の伊丹が見ている前で下に履いた迷彩ズボンのポケットをおもむろに探り出した。

其処から取り出したのは太めのサインペンが2本か3本入りそうな掌大のケース。蓋を開けると焦げ茶色の葉巻が顔を覗かせた。

「葉巻だけど吸うかい？」

「あー、すまないけど俺吸わないんだ」

「そうなのか。んじや横で煙草吹かされちや迷惑かな」

「いいや近くで喫われる分には別に気にしないから構わないぞ？」

これが漫画や同人誌のコレクションが置いてある自室なら話はまた別だが、今2人の伊丹が居るのは喫煙も可能な休憩スペースだった。ベンチの近くには吸い殻入れも設置されている。

「んじやお言葉に甘えて」

そう言つて1本を取り出すとオイルライターで火を点け、慣れた様子で葉巻の煙を薫らせ始めた。

周囲どころか日本全体でも中々お目にかからない洋物の葉巻を、自分と同じ顔が銜えているその光景に迷彩服姿の伊丹は何とも言えない驚きと違和感を覚えていた。漫画やアニメに出てくるマフィアの親玉が愛用してそうな嗜好品を別世界の自分が嗜んでいるのを見せつけられるのは非常に奇妙な感覚だった。

「喫煙者なんだな、こつちの俺は」  
『伊丹耀司』

ついそんな言葉すら漏れてしまう。

指摘されたコンバットシャツ姿の伊丹は葉巻を口から外すと、きまり悪そうな苦笑いを浮かべた。

「海外に居た頃覚えたんだ。一緒に活動してた仲間が葉巻好きでさあ、その影響を受けてつていうのもあるし、海外の戦場で活動したり傭兵やよく知らない部隊の兵隊と組んで活動する時なんかはこの手の嗜好品がある程度持つておくと色々やり易かったつてのもあるんだけど、1番の理由は——」

「理由は？」

「——漫画もアニメも同人誌即売会にも行けなかった分、ストレスがね」

「成程。そりゃ辛いよなあ」

納得出来過ぎる理由に迷彩服の伊丹も思わず大きく首肯してしまった。

大好きな好物や趣味を奪われた者が別の嗜好品に手を出すのは定番の展開であった。世界が違おうが第3次世界大戦を経験しようが、伊丹耀司という男にとっての漫画やアニメや薄い本はそれだけの存在だったという事だ。

「戦い抜いた理由の何割かはもう1度生きて同人誌即売会に参加する為だったからなあ……」

と、コンバットシャツ姿の伊丹も述懐するぐらいである。

「まともなテレビすら見れない地域で活動しなきゃならなかったからさあ。アフリカの紛争地帯からヨーロッパに密入国する途中で日本式のコンビニに寄って文明の光や日本語の漫画雑誌見つけた時なんか泣いちやったもん俺。いやホント」

「苦労したんだなあそっちの俺……そうだ、この際だから聞いておきたい事があるんだけど」

「ん？」

ベンチの上で迷彩服姿の伊丹は姿勢を正すと、コンバットシャツ姿の伊丹をまつすぐに見つめ、日ごろ浮かべない極めて真面目な表情で以って重々しく口を開いた。

「そっちの世界では、ハ○ター×ハン○ーは完結したのか!？」

コンバットシャツ姿の伊丹は痛まし気に首を横に振った。迷彩服姿の伊丹はガツクリと肩を落とした。

「やっぱりかあ」

「あ、でもNARUTOとこ○亀は完結したぞ」

「嘘だろ!？」 N○RUTOは分かるけどこ○亀が完結う!？」 完結するもんなのかあれ……」

余程の衝撃だったのか、迷彩服姿の伊丹はベンチから勢い良く立ち上がった。

平行世界ではWW3が起きたとか、その世界の自分はWW3の英雄であるとか、そういうった情報を見せられた時すらも上回る驚きようで

ある。さながら戦国時代にタイムスリップし、のちに後世の時代からやってきた男子高校生に笑って〇いとももの放送終了を知らされた元ヤクザの如き反応であった。

「もしかして、作者が亡くなったから完結とかそういうオチじゃないよなそれ……?」

恐るおそる別世界の自分から投げられた質問に、苦笑を浮かべてコンバットシャツ姿の伊丹が答えてやる。

「違う違う。ちゃんとした形での連載終了だから安心しなつて。時々新しい話も書いてるし、今は青年誌の方でも別の新作が連載されてるぞ。女ガンマンが主人公の西部劇」

「そっかあ、良かったあ。それにしても女ガンマンの西部劇かあ。俺の方の世界でも読めればいいんだけど。」

漫画以外だとどんな感じよ? エ〇アの新劇場版も完結したのか?」

「エヴ。は3作目が公開されたけど完結はまだしてなかったなあ。あ、でも代わりに〇ヴァの監督がゴ〇ラの新作を——」

「マジで!?!」

「ゲームだとF〇t eがソシヤゲに進出して——」

「うおうマジかあ」

しばしの間、2人の伊丹は未来の日本におけるサブカルチャーに話を弾ませた（無論、具体的な作品のネタバレは控えている）。

正確には迷彩服姿の伊丹が訊ねてはコンバットシャツの伊丹が答えてやるのを繰り返すという形だったが、両者が心から会話を楽しんでいるのは鏡合わせのように浮かぶ心から楽し気な笑顔を見れば明らかである。

……無論、数年先の時代を過ごしたコンバットシャツ姿の伊丹が語ったサブカル界隈の発展を、迷彩服姿の伊丹の世界が同様に辿ると



は限らない。

それは2人もわざわざ言葉に出さずとも理解している。互いの世界が辿った歴史にはWW3という最大の相違点が横たわっているのだ。

「そうかあ、いやあ楽しみだなあ」

それでも、迷彩服の伊丹の精神は未来の展望に今から心から浮き立っていた。

同人誌即売会の為に銀座での激戦を、そしてWW3を生き延びたこの2人が示したように、それが他人から見ればどれだけ些細な願いであつたとしても、本人にとっては困難をやり遂げる確固たる理由へとなりえるのである。

「少しは気分はマシになったかい？」

不意にコンバットシャツ姿の伊丹がそう訊ねると、迷彩服姿の伊丹は期待に満ちた笑みを苦笑じみたものに切り替えてから後頭部を掻いた。

「自分自身に氣遣われるのも変な感覚だけど、まあ少しは落ち着いたよ。ありがとう」

「そっか。ま、自分が別の世界じゃ毒ガス使って1万も殺しましたって聞かされたら気分も悪くなるよなあ」

「んー……」

自嘲するように溜息を吐くコンバットシャツ姿の伊丹。

それに対し迷彩服姿の伊丹はベンチに背を預け、両手を後頭部に組

みながら天井を見上げて呻いたかと思うと、ポツリとこう答えた。

「それなんだけどさ。実の所ぶちまけちゃうと自分でも意外なんだけど————敵に毒ガス爆弾突っ込ませた事自体についてはあまりショックは感じてないんだよねえ」

「あれ？ そうだったの？ それにしては陸将の部屋から出てきた時えらい打ちひしがれてたみたいだけど？」

「そりゃあ1度に1万人もの敵を殺したって聞かされた時は驚きはしたけどねえ」

迷彩服姿の伊丹の目が細まり、今此処ではない遠くを見つめる者特有の眼差しに変わる、

「<sup>MW</sup>世界の俺はさ、<sup>原作</sup>世界の俺が銀座での戦いに遭遇した時の話については詳しくは聞いてないでしょ？」

<sup>原作</sup>世界のあちら側のアルヌスにて行われた情報交換の場ではWW3にまつわる情報が主体であった事もあり、『銀座事件』について割かれた時間は少ないものであった。

また内容に<sup>MW</sup>世界の伊丹が行った<sup>ジャ</sup>対爆<sup>ガー</sup>ス<sup>ノー</sup>ーツと改造武器<sup>擬</sup>による単騎呐喊という前代未聞の戦いぶりの記録が目立ってしまい、<sup>原作</sup>世界の伊丹がどのように活躍したかという話題は殆ど触れられなかったのである。

「最初に『門』が開いて帝国軍が銀座を襲った時、<sup>原作</sup>世界の政府はそっちの政府と違って動きが鈍くてねえ。霞が関や麻布まで連中が持ち込んだ怪異が出没して被害が出たり、隊への出動命令が中々出なかったり、総理が行方不明になって代行になった大臣がこれがまたアレだったりで、まあとんでもなく混乱してたわけよ」

「そりゃあ大変だ」

特に、日本の最高権力者である時の総理が攻撃に巻き込まれて行方不明となれば、政府内の混乱はそれ大きかったに違いない。WW3という有事を事前に経験していなかった、悪く言えば平和ボケした世界の日本政府ならば尚更である。

死亡、ではなく行方不明なのが問題だ。内閣大臣クラスともなれば安否確認を放置する訳にはいかず、その分だけリソースや指揮系統を割かねばなくなるのだから。

実際WW3勃発時には欧州訪問中の副大統領を救出すべくアメリカは大規模な戦力を送り込み、そして彼らは現地を占領し陣地を構築中だったロシア軍に直面せねばならず、結果多大な被害を強いられたのである。

生死が関わる状況に政治が絡むと最も割を食うのは現場にいる人間であるという喫緊の例であった。

「逃げ遅れた避難民を回収しながら皇居に籠城したのまでは良かったんだけど、政府が隊と警察合同で銀座奪還と市民救出を実行する為の部隊と計画を立てるまでの数日間、俺は一緒に籠城した警官隊と共に帝国軍の攻撃から皇居と逃げ込んだ避難民を守り抜かなきゃならなくなつた。

警察の多くは日頃の警備の認識から中々抜け出せずだったが、俺にとってあの戦いは戦争だった。

だから戦争らしくやれる事は何でもやったよ。何でもね」

淡々とした口調がにわかに冷たい迫力を帯びる。

それはコンバットシャツ姿の伊丹程の濃密さには及ばぬものの、その手を少なくない血で汚した者にしか醸し出せない類の気配であった。

「敵から奪った短剣で殺したりもしたし、警察の車両を使って何人も轢き殺したりもした。攻め込んできた敵の部隊をわざと引きずり込んで逃げ場を塞いでから、火攻めにかけてまとめて焼き殺したりもし

た。俺がやった事で何百人と敵が死んだよ。

そうやって何とか生き延びて隊舎のベッドに飛び込んで、次に目が覚めた時には人々を救った英雄扱いときたもんだ」

また迷彩服の伊丹が顔を曖昧な笑いに歪める。

死の気配が滲む笑いだった。コンバットシャツ姿の伊丹も何度も目撃し、自身も度々浮かべた表情だった。

だから彼もまた、同じように死の笑みを浮かべた。

『一人を殺せば殺人者だが、百万人を殺せば英雄だ』

世界の映画史に名を残すコメディアンが独裁者の役柄を借りて放った名言を、迷彩服姿の伊丹が諳んじた。

「その台詞にはこう続いたっけ。『殺人は数によって神聖化させられる』」

「百万人どころか、英雄扱いされるには数百人殺すだけで充分だって、あの時思い知らされたよ」

「こっちは毒ガス爆弾で帝国軍を吹っ飛ばしたら何時の間にかロウリイみたいに死神扱いされたし、チャップリンさんは桁を二桁ばかり過大に見積もってたみたいだねえ」

「……侵略してきた敵の意図を刈り取るには、これ以上の損害は割が合わないと思わせる位の血と犠牲を与える事で相手に身を以て教え込まなきゃいけない。あの戦いで俺はそう思った。そしてその通りに、惨たらしい死に様を生み出す戦法を実行した」

だから、と迷彩服姿の伊丹はゆっくりと告げる。

「もしも俺がそちら側の俺と同じ状況に立たされたなら、俺もきつ  
と同じ事をしたと思うよ」

それが別世界の伊丹耀司の結論。

そもそもだ。詳しい話を聞けば聞く程に、当時の状況は詰みも同然  
だったと、迷彩服姿の伊丹も判断せざるを得なかった。

破壊工作によって防御態勢はズタズタで、気密防御のドームは内部  
で発生した直前の自爆で開閉機構が損傷してしまい役目を果たせな  
い。万を超す敵の本隊が迫る中、爆弾は損傷してしまい最早解除不能  
と化し、爆発が起きれば間違いなく基地そのものが死の大地と化す。

銀座の時に背後に居たのは数多の無力な避難民だった。

この世界の己があの日アルヌスで事態に直面した時の場には、大  
事な少女達が居た。この世界の己が選んだ愛する女も居たし、その頃  
には彼女の胎の中には新たな命も芽吹いていたという。

行動しなければ、大切な人達が全て犠牲になる。狂気に堕ちたテユ  
カの心を取り戻したくて部隊を離脱し、炎龍退治に出向いた時よりも  
もっと酷い状況。

だからこそ、己の事だからこそ分かる。

己が護るべきものと定めた存在の為なら、相手が幾千幾万の軍勢や  
空飛ぶ炎龍だろうと同人誌即売会だろうと、無能や卑怯や残虐と罵ら  
れる事も厭わず選択し実行に移すだろう——と。

それは何故か？ 伊丹耀司とはそういう性分に他ならないからだ。

「そっか」

しばらくの間、2人の伊丹の間を沈黙と紫煙が広がった。

紙煙草よりゆつくりと燃える葉巻が半ばまで短くなった頃、口から外して吸い殻入れで葉巻を軽く叩き火を消したコンバツトシャツ姿の伊丹は「俺も小便してくるわ」と立ち上がった。

男子トイレの扉の向こうに背中が消えると、迷彩服姿の伊丹の口からまた吐息が漏れた。強張った肩から力を抜き、迷彩服の襟元を緩める。

「伊丹隊長！ どこにいるんすか、隊長！」

「倉田か？ おうここに居るぞ」

不意に名を呼ぶ声が結構な音量で聞こえた。迷彩服姿の伊丹が声を上げると、妙に焦った様子の倉田が伊丹の姿を見つけるなり猛ダッシュでやってきた。

雰囲気からして何となくだが、一緒に『門』を通過して栗林を追いかけてきた同じ世界<sup>原作世界</sup>の倉田だろうと推測。

「一応確認しておくけどお前が探してるのは俺でいいんだよね？ この世界の方の俺<sup>伊丹羅司</sup>じゃなくて」

「そうですね合ってます！ そんな事よりも俺、大変な事に気付いちやったんス！」

「何だよ、栗林の次はお前かあ？ 一体何に気付いたのか言ってみろよ」

「ゲームですよ！ ゲーム!!」

階級差も忘れた様子で、伊丹の両肩をしつかりと掴んで捲くし立ててくる同世界出身の倉田はえらく動転している様子だった。

「この世界の隊長達が居た地球は、ゲームの出来事とキャラが実在する世界の地球なんですよ！」

「……………へ？」

勢いそのまま倉田がそう叫ぶのと、トイレから出てきたコンバットシャツ姿の伊丹が目を白黒させたのは同時であった……………

### GATE 自衛隊かの地にて、平行世界と遭遇せり1 3

どうしてこうなった——その考えで思考が埋め尽くされた倉田の全身に冷や汗が滲んでいた。

「誰にも見られていないみたいです。近付いてくる気配もありません」

外の様子を窺っていたこの<sup>M</sup>世界<sup>W</sup>世界の富田が報告した。

司令室が存在する駐屯地本部、その近くの倉庫として使われている空き部屋の一室である。その中心にて『門』<sup>原</sup>の向こう<sup>作</sup>の世界<sup>世</sup>から来た方の倉田が、正座の姿勢を取らされた上で取り囲まれていた。

「お願いですから拷問とかマジ勘弁してくださいよ？ 自分が拷問される姿とか見たくないっすからね!？」

もう1人<sup>M</sup>世界<sup>W</sup>世界の倉田が悲鳴同然の懇願を発する。しかし別世界の彼を空き部屋に引きずり込んだ髭面の張本人は、おっかない眼差しで正座中の倉田を見下ろしながら鼻を鳴らすのみであった。

その後ろには坊主頭のロシア人が警戒と困惑の表情で立っており、プライスを挟んで反対側にはコンバットシャツを着た別世界<sup>伊丹</sup>の上官も似たり寄つたりな顔で事態を見守っていた。

加えてこの場では唯一正座中の倉田の同胞である迷彩服姿の伊丹も居た。平行世界の倉田が当てにならない場合、最後の頼みの綱は彼である。



「ならこのもう1人のお前の口が素直な事を祈るんだな——では知ってる事を洗いざらい話してもらおうか、若造」

ジョン・プライス……元SASであり、別世界の伊丹と共に第3次世界大戦を終わらせた英雄の1人。

そして別世界原作世界に於いては創作上の存在である筈の人物から睨みつけられた倉田は、堪らず引き攣った悲鳴を漏らしたのであった。

その十数分前。

失恋と彼氏の不倫とその相手が自分の親友だと同時に知ってしまった少女の如く、嗚咽を未だ漏らし続ける同世界原作世界の栗林を眺めるのに、倉田もそろそろ飽き始めた時分だった。

「若いのに、何かあったのかな?」

地方毎のそれではなく、日本語がネイティブではない外国人独特の訛りを帯びたその呼びかけに2人の倉田が振り返る。

片方は背筋を正してピシリと伸びた右手を頭の右側に添えた。もう片方もそれに倣おうとして、驚きに目を見開き持ち上げようとした右腕が中途半端な位置で止まった。

あちら側原作世界の倉田が驚いたのは相手が自衛隊の迷彩服に身を包んだ、彼が知る特地派遣部隊には存在しない筈の白人だったからである。

人数は3人、特地の現地住民が何らかの事情で迷彩服を借りているとかそういう雰囲気でもない。どれもベテランの兵隊としての雰囲気の色濃い。

声をかけた方もまた、一卵性双生児でもここまで似まい位にそっくりな2人の倉田を前にして目を瞬かせていた。

「……クラタに双子がいるとは聞いていないが」

年かきの、おそらく第3偵察隊最年長だった桑原陸曹長よりも年上であり、同時に兵士としての気配が最も濃密な、白髪交じりのもみあげと一体化した立派な髭を蓄えた男が訝し気な声を漏らした。

「こ、この石塚○昇ボイスは?!」

冷静沈着さと威圧感が同居する独特のバリトンボイスを耳にしたあちら側の倉田は戦慄した。

彼にとっては画面の中でしたか——否、画面の中にしか存在しない筈の人物、それがそっくりそのまま現実に出てきたとしか思えないような存在が目の前に、しかも複数並んでいたからである。

続いてこの世界<sup>MW</sup>世界の倉田が相手の名前を呼んだ事で、更なる衝撃がもう1人の倉田を襲う。

「どうもプライス大尉。大尉達もレレイちゃんが開いた『門』を見に来たんすか?」

「そんなところだ」

(プライス大尉だってえ!?)

坊主頭の、プライスとは微妙に人種的特徴が異なる男も声を上げた。

「プライス、俺の目が変わったのか? クラタ以外にもトミタヤクリバヤシ達も2人居るように見えるんだが」

「俺もそうだ。ユーリ、俺達が見ているのはどうやら幻覚ではなさそうだぞ」

(ユーリ、ってこっちも本物お!?)

驚き過ぎて声すら出せなかったのはあちら側の倉田にとってには幸運だったのか。

白人3人組の中では最年長だろう初老の男性も顎をさすりながら話に加わる。

「なあジョン。俺達は『門』が開通したと聞いて視察に来たつもりだったんだが、あそこに浮いている鏡のようなものはもしかすると異世界を繋ぐ『門』ではなく、クローンや人間のコピーを生み出す為の魔法陣なのかもしれないぞ」

「いやいや合ってますってマクミラン大尉。実は『門』を開くのはちゃんと成功したんですよ。でも繋がっちゃった先がどうやらもう1人の自分達が居る平行世界の特地だったらしくてっすね」

「パラレルワールドというやつか！ フムウン、成程、魔法が存在する異世界がこうして存在するのであればもう1人の自分が存在する平行世界もおかしくはないか……」

マクミランの名前、加えて彼の口から一際渋い菅生○之ボイスが飛び出すに至り、あちら側の倉田は口をパクパクさせながら声も出せず、啞然呆然愕然と3人組を凝視するばかりだ。

コスプレと断じようにも、3人の立ち振る舞いは明らかに訓練と経験を積み重ねた根っからの兵隊のそれである。それぐらい見抜けるだけの目を、WW3を経験していなくとも特地で相応の実戦を重ねたあちら側の倉田は持ち合わせていた。

それでももう1人の自分に尋ねずにはいられなかった。

「ちよつとちよつとこの世界の俺！ こ、この人達はどちらさままで……？」

妙に動転した様子を見せる平行世界の己に首を傾げつつ、この世界

の倉田は素直に答えてやった。

『門』の監視警備に就いていた彼は、こちらの世界で起きたWW3の情報公開が<sup>原作</sup> <sup>世界</sup>側にありに於いては司令部とごく一部の関係者にのみ止まっていた事を知らなかったのである。

「この人はプライス大尉。元SASの所属でイギリスからの観戦武官で、その隣の坊主頭の人がロシアからの観戦武官で元スペツナズのユーリさん、でもって反対側の人がプライス大尉の昔の上官だったて人で——」

<sup>原作</sup> <sup>世界</sup> <sup>側</sup>の倉田は確信した。同時に理解してしまった。そしてとうとう爆発を迎えたのだった。

「ほ、本物かよおおおおおおおおおおおおおおおおっ!!!?」

ゲームの世界じゃんこっちの地球!? と混乱のまま大絶叫を残し、今度は倉田が遁走を試みたのである。

「で、でですね。思わず叫んで走り出しちゃった後に隊長に伝えなきやって思い至ってですね」

言いながら、あちら側の倉田はプライス達からの視線から少しでも逃れようとするかのように身を縮こまらせた。

トイレ前で自分と同じ世界の伊丹を発見した時、倉田の視界には伊丹以外の姿が見当たらなかったもので、扉1枚隔ってトイレから出てこ

ようとしていたもう1人<sup>MW世界</sup>の伊丹に気付かず口走ってしまったのだという。

……互いにとって幸運だったのは、喫煙スペースに3人以外の人間が居合わせなかった事だろう。

それでも突然トイレから現れたもう1人の伊丹、彼の存在に気付いて倉田が固まった所へ、絶叫の内容を怪訝に思い後を追いかけてきたプライス達が合流し——手近な空き部屋に倉田を引き摺り込み、今に至る。

「下らん前置きは良い。さつきと知っている事を全て話せ」  
「アツハイ」

静かに、だが冷たい目で見下ろしてくるプライスの声はそれはそれはおっかない気配を帯びていた。

(怖えーリアル英国紳士まじおっかねえよ！)

震えながらあちら側<sup>原作世界</sup>の倉田は、自分が知る情報を素直に白状し始める。

説明しよう！ 『コールオブデューティー モダンウォーフエア3 (略称COD:MW3)』はFPSゲームであるCODシリーズの8作目であり…… (以下Wiki参照)

「……………」

あちら側の倉田が語り終えた後にまずプライス達が見せた反応は

……形容しがたい空気を帯びた沈黙だった。

当然だろう、と横で話を聞いていたあちら側の伊丹は口をひん曲げた。

自分達が別の世界ではゲームの登場人物だったと告げられ、怒りや悲嘆よりもまず困惑の感情が浮かぶのは当たり前前の反応だろう。

異世界の存在以上に現実味が薄い情報だ。何せ異世界の方は既に現実の存在として実在しているのだから尚更に。伝説的な男達もこれには流石に受け止め、受け入れかねている心境がありありと察せられた。

もう1人の自分、この<sup>MW</sup>世界の伊丹も腕を組み、難しい顔で正座するあちらの世界の倉田と、無言で彼を見下ろし続けるプライスとの間に視線を行ったり来たりさせている。

「若造。お前の言う事が仮に真実だとしたならば、お前はようやくそれを知った？」

「そっそれは俺もそのゲームをプレイしたからですっ！」

曰く、<sup>原作世界</sup>あちら側の銀座の『門』が閉門される直前に発売された日本版を購入しプレイしたのだという。

特にプライス達が登場するMW3部作は全て購入したそうだ。

「つーか伊丹隊長、この世界で起きた事聞かされたんすよね。その時に気付かなかったんすか!？」

「いやあ、俺洋ゲーにはあまり詳しくないから……」

話を振られた迷彩服姿の伊丹はバツが悪そうな顔で頬を掻く。伊丹のオタク趣味は萌えからロボ、昔の名作から最近の話題作まで幅広くはあるが、彼は海外作品にまでアンテナは伸ばさないタイプであった。

情報公開の場に集められたのは<sup>原作世界</sup>あちら側の富田と栗林、それから柳

田や狭間といった司令部の幕僚幹部自衛官も同じなのだが、彼らは彼らでテレビゲームには全く興味が無さそうな面子揃いだっただのも事態が発覚しなかった一因だ。精々戦闘団の隊長クラスが往年の戦争映画を網羅している程度か。

「俺達の戦いがゲームにされてたんならさ、こつちじや機密扱いになつてゐる情報も、この倉田は知つてゐるって事になるよねえ」  
MW世界

コンバットシャツ姿の伊丹の眩きに、WW3を戦った男達の間空気が瞬間的に張りつめた。

情報公開によつて多くの概要が世界中に知れ渡つたものの、タスクフォース141と呼称されたかつての部隊が関わつた数々の戦闘の中には機密扱いなど生温い、関係者が全て墓の下の住民となつても尚知られてはいけない類の情報が複数存在している。それこそ暴露されれば今度は最悪WW4が勃発してもおかしくない、そんなレベルの爆弾だ。

「プライス」

張りつめた表情のユーリがプライスに何かを耳打ちした。ブツシュハットの老兵はまだ正座を説かないあちら側の倉田の襟首を掴み、顔を近付ける。

「俺達の戦いや、俺達がどういう立場だったかを本当に知っているなら答えられる筈だ」

そして倉田にしか聞こえない位ささやかな、それでも自然と背筋が伸びる迫力を帯びた囁き声でプライスは質問したのだ。

「プラハでマカロフの殺害に失敗した後、俺達が逃げ込んだセーフハウスで何があったか答えるんだ」

「……ユーリさんを爆弾から庇ったソープさんが亡くなって、プライス大尉がユーリさんをぶん殴って、ユーリさんがマカロフの元相棒で、中東での核爆発や空港テロの現場にも居たって白状する所までっス。そこから先は山の中の城へ潜入するまで展開が飛んだからその間にあった事は知らないです本当っス！」

「……………」

「……………」

「……………そうか。立って良いぞ」

しばらくの沈黙を経てプライスの手と顔が倉田から離れ、事態を見守っていた戦友達へと振り返った。

ユーリに向けプライスの髭面が縦に動かされると、禿頭のロシア人は「そうか」と天を仰いだ。過去に大罪を背負いそれを悔いながら生きてきた罪人を思わせる表情だった。

「いいだろう。小僧、お前の情報が正しいと認めてやる。だがこれ以上誰かに言い触らすのは止めておけ。間違いなく面倒しか生まんかな」

「りよっ了解しましたっ！」

ようやく立ち上がる事を許された倉田はプライスからの釘刺しに直立不動で応じた。敬礼のおまけつきである。余程詰問してくるプライスがおっかなかったようだ。

続いてプライスは迷彩服姿の伊丹の方を見た。



「そこに突っ立つてるもう一人のイタミ、お前もだ。こいつが余計な事を口走らないようお前が目を光らせておけ」

「分かっていますって。今回の『門』が消えてこの世界と別れるまでは気を付けておきますよ」

そこへここまで口を閉ざして場の流れを見守っていた最後のイギリス人、マクミランがプライスへ問いかける。

「それでどうするかね、ジョン。我々が壮大な舞台で演じる役者と知ってしまった訳だが」

「シエイクスピアは正しかったという事だな。だがなマック、世界なんてものは所詮、其処に生きている人間が役割を果たす事で成り立っている存在だ。違うか？」

「いいや違わんよ。我々が手を汚し、世界は体面を保つ。そういう役割の稼業と割り切ってしまうえば、案外役者としての生き方も気にはならんものだ」

プライスよりも更に老獪な雰囲気を漂わせる、元SASにして『門』崩壊前の世界ではM I 6の長にまで上り詰めた老兵は、欧米人らしく両肩を疎めるジュエスチャーをしながらニヒルな笑みを浮かべた。

それに続いて伊丹も笑った。こちらは男臭さからは程遠い、普段よく浮かべる方の気が抜けるような締まらない笑みだったが。

「そうそう。俺だって喰う寝る遊ぶ、その合間にほんのちよつと人生を送りたくて働いてるようなもんだし、趣味に生きれるならよっぽどガラじゃない役でもない限り何でもいいさ」

「趣味に生きるのは勝手だが所帯を持つなら家族の事も考えて役を選ぶんだな」

「あ、あはは……」

「……強いなあ彼らは」

「そうっスねえ。俺もちよつと憧れます」

有り様を根本から揺さぶられる情報を告げられても尚揺らがぬ、己の中に確固たる芯を持つ伝説的な兵士達のやり取りを、この世界の富田と倉田は眩しそうに眺めるのだった。

# GATE 自衛隊かの地にて、平行世界と遭遇せり1 4

「どーにか丸く収まって命拾いしたな、倉田あ」

事の成り行きを見守っていた<sup>原作世界</sup>あちら側の伊丹は安堵の溜息を吐き出すと正座継続中の部下へ手を差し出した。

あちら側の倉田は上官が差し出した手を借りて立ち上がろうとするも「あ、足があ」と半ば腰砕けになった。それでも痺れた足をどうにか動かし、ぎこちない動作でのっそりと立ち上がる。

「……どうかしたのか」

反射的に伊丹は尋ねていた。圧迫面接ならぬ尋問から解放されたばかりにもかかわらず、倉田が喉に骨が引つ掛かったような腑に落ちない表情をしていたからだ。

倉田はやがて周囲には伝わらない程の嘔き声を発した。

「隊長。俺がプレイしたMWってゲームは、複数人の主人公が出てきてステージごとに時々視点が入れ替わる構成なんですよ」

その声は、普段伊丹に似て軽い態度をとる倉田が滅多に発する事のない、硬さを帯びた張りつめたものだった。

「その視点変更が変わるタイミングは例えば地上で戦う兵士から空を飛ぶヘリのパイロットに切り替わったりだったり、同じタイミングで別の場所で戦う他の兵士と入れ替わったりとか……」

時にはプレイヤーが操作していたキャラクターが死んで、別の主人公が展開を引き継ぐ、そういう展開もあつたんす」

「……それで？」

部下の視線は、ゲームの中の存在だった筈の人物らと男臭い笑みを交わし合う、ロシア人ともう1人<sup>MW世界</sup>の伊丹を捉えていた。

「俺がプレイしたMWシリーズのラスト、マカロフを倒すステージでプレイヤーが操作するのはさつきまで俺を尋問してたプライス大尉で——

その直前まで操作してた今プライス大尉と一緒に居るユーリって人は本来なら最後の戦いでマカロフに撃たれて戦死してる筈なんです」

そもそもおかしいんですよ、と倉田は続けた。押し殺された声の後半は焦りと困惑で上ずってすらいた。

「だって、ゲームには伊丹隊長の存在なんてどこにも登場していなかったんですよ……!?!」

「……倉田」

「は、はい」

「お前、クロスオーバーって分かるか？」

「クロスオーバーってあれっすよね、2次創作でよく見る別作品同士の設定やキャラを組み合わせて——」

そこまで呟いてから倉田はハッと伊丹を見た。

迷彩服姿の伊丹は無関心や無感情とは違う、だが喜びや怒りとも別の感情を滲ませた眼差しで、倉田と同じように異国の兵士達の中に違和感なく混じるもう1人の自分を眺めていた。

「この世界の俺『伊丹羅司』の生きる世界がゲームの舞台で、あそこに居る彼らブライース大尉達もゲームの登場人物だったとして、だ」

呆然となる倉田に迷彩服姿の伊丹が顔を向ける

その口元にはシニカルな笑みが浮かび、茫洋とした印象の目元にはあらゆる現実を直視する覚悟を受け入れた者にしか宿せないだろう、確りとした達観の光を帯びていた。

「——だったらそんな世界に繋がった俺達や俺達原作の世界もまた、別の世界では創作の存在だったりするのかもしれないぞ？」

一方取り残された両世界の女性陣はというと。

「とまあ、ここまでが耀司さんに惹かれるようになるまでの大まかな経緯ね」

妊婦服姿の栗林が締め括れば、聴衆であるあちら側の女性陣から一斉に感嘆の吐息が吹き出された。

別世界のレイやテユカ達もまた愁嘆場から鉄火場まで、様々な経験をあちら側の伊丹と共有してきた仲である。

そんな彼女達からしても妊婦服姿の栗林がこの世界の伊丹と結ば

れるまでに重ねてきた経験は驚くべき内容であったのだ。

少女達の心へ特に響いたのは、この世界の伊丹に恨みを持つという地球側の武装勢力に拉致されてから救出されるまでの件だ。

辱められ、処刑されるその間際。墜落するへりから飛び降り窓を突き破りながら登場し、全身に軽くない傷を負いながらも助けに来たと告げる伊丹――

窮地の際に直面した所へ命を張って駆けつけてくれた相手に大なり小なりときめかずにいられる人物などどれだけいるだろうか？

栗林の経験談はまさにその手本のような内容であった。

気持ちは良く分かる。そう言わんばかりに何度も頷いたのはあちら側のテユカとレイだ。

特にこの2人は同じく追い詰められたり、危険に晒された所を同じ世界の伊丹に救われた経験を持つ。それだけに妊婦服姿の栗林の気持ちもよく理解出来たのである。

以降も炎龍退治に同行し炎龍撃破に直接的な寄与はしなかったもののその後襲ってきたジゼルと新生龍との戦いに関与したり、資源探查名目でレイの導師号審査に同行した時はクレティにてレイ共々疫病を発症してしまい、危うく死に瀕した所を特効薬を持ち帰った伊丹によって再び救われた。

「そこで我慢出来なくなっちゃって、うん、耀司さんの部屋に押しかけてそのまま勢いでガバツと」

「勢いでガバツと」

「あとこの際だから打ち明けちゃうけど、部屋の外で聞き耳立てたこっちの皆が雪崩れ込んできちゃって。結局皆も勢いでそのまま一緒に」

「私達もそのまま一緒に……」

赤裸々な告白からの思わぬ流れ弾に<sup>原作世界</sup>あちら側のテユカとレイはオウム返しを繰り返した。<sup>MW世界</sup>こちら側のテユカとレイは頬を赤らめて顔を逸らした。

薄々察してはいたが、どおりで振舞いの諸所に妙な色気を感じた訳だと改めて理由を知ったあちら側の少女達は、納得すると同時に言いようのない嫉妬を抱いた。

「あらあらあ。そんな気はしてたけどお、改めて言葉にして聞かされるとちよつと妬けちゃうわあ。こっちのヨウジイはどうにもその辺り奥手なのよねえ」

あちら側のロウリイが羨まし気に吐息を漏らした。迷彩服姿の伊丹共々このアルヌスに漂う怨念の真相を聞かされた直後に浮かんでいた深刻な気配は消え失せ、普段の小悪魔系ゴスロリ神官キャラを取り戻していた。

とりあえず、あちら側の少女達は今度別世界の己達に肖って攻勢に出ようと決意した。同時刻、『門』前に戻る途中の迷彩服姿の伊丹は強烈な悪寒に襲われたとかなんとか。

栗林の語りは続き、その後ベルナーゴでハーデイ直々に懐妊宣告をされると、旅の仲間を現地に残し彼女だけが独りアルヌスへ帰還する事になったという。

「私が最初に子供出来ちゃったから一応本妻って扱いにはなってるけど、本妻とかそれ以外とかは一切関係なく、平等に耀司さんに愛してもらおう立場なのは変わらないって皆との話し合いの結論ね」

しかしアルヌスに帰還した栗林を待ち受けていたのは更なる災禍だった。

アルヌスに潜入していたゾルザル派の工作員と大量の擬態型怪異による襲撃を受けたのだ。

折しも銀座でも勃発した武装集団による電撃的侵攻も重なり、アルヌス駐屯地に残っていた戦力は極僅か。栗林が入院していた診療施設にも大量のダーが侵入し、他の入院患者や医官達と一室に立て籠もるも、子を宿して全力で戦えぬ栗林の手元には武器も無い。

押し寄せるダー達。破られそうになる急造のバリケード——  
そこへ突如として乱入するは高らかに吼える偵察用オートバイの嘶  
き！

「ちようど皆と一緒に帰還していた耀司さんが無線が壊される直前に  
流した救援要請を聞きつけて、急いで駆けつけてくれたのよ！

あの時は状況が状況だったから、耀司さんがまるで白馬に乗った王  
子様に見えたのよねえ」

目尻を垂らして頬を緩ませる妊婦服姿の栗林。原作世界あちら側の栗林に  
慣れ親しんだ少女達にとつて、血の気とネコ科の獣っ気が薄れて代わ  
りに女らしさと母性を振りまくその姿はとても新鮮なものであった。

「何と言ったものだろうか……ここまで話を聞いていると、最早この  
世界のイタミ殿とクリバヤシ殿はそのような運命の下に結ばれたか  
のように此の身には思えてくるな」

首を横に振りながらあちら側のヤオが感想を述べた。彼女の声に  
は隠し切れない羨望が籠もっていた。

「その後も『門』が吹き飛んじやったりまあ色々あったけどどうにかこ  
うにかゾルザルをやっつけて、ピニヤ殿下に新しく皇帝になって貰っ  
て……

停戦条約を結んで協力関係を結んでからは大した事件もようやく  
起こらなくなつて、今はこうしてのんびりお腹の子供がすくすくと  
育つてくのを見守るのが今の日課ね。



……だからそんなに打ちひしがれてないで、いい加減受け入れてよ。もう1人の私」  
『栗林志乃』

資材ケースに腰掛けた妊婦服姿の栗林の視線が斜め下へと向いた。周囲の視線も彼女に続く。

……視線に対し背を向ける形で、コンクリートの地面の上で直接膝を抱えて座り込む迷彩服姿の栗林が在った。ようやく泣き止んだかと思えば、今度は膝を抱えて塞ぎ込んでしまったのである。

傍から見れば同じ顔をしていながら勝ち組と負け組が一目瞭然で判る、そんな構図だ。泣きじやくつていた時から引き続き黒川が寄り添ってやっている。

「隊長と子供作るどころかレイ達とも……テユカやロウリイやヤオはまだしもレイなんかまだ子供じゃない……あれでも特地じゃ一応成人……いややっぱりハーレムとか……どうして受け入れて……ブツブツ」

「これは重症ですわね」

ひとしきり怨嗟にも似た譫言<sup>うわごと</sup>を発していた迷彩服姿の栗林は、ようやく黙り込んだかと思うと顔を上げて平行世界の己を見やった。その目も表情も死人より死人じみていた。

「分かったわ、分かったわよええ受け入れてやるわよ」

据わった声で妊婦服を着た己の似姿を、迷彩服姿の栗林は睨みつけるようにして見上げる。

「別の世界の私は隊長とくつついて子供まで作ったしくつつくまでの経緯も理解したわ、ええ理解しましたとも」

続いて次第に険しさを増しつつあった栗林の眼光がこの世界のレイ達へと向いた。

「だけどねえ、ハーレムまで許容しちゃうのはちよつとおかしいでしょうが!？」

分かるわよ？ 分かってるわよこつちの世界のレイもテユカもロウリイも隊長に惚れちゃってるのは見ててわかるから。でもよりにもよつて私<sup>『栗林志乃』</sup>までそこに加わつてしかも馴染んじやつてるのまでは理解出来ないのよお!」

魂からの叫びであった。

あ<sup>原</sup>ち<sup>作</sup>ら<sup>世</sup>の<sup>界</sup>世界の栗林志乃という女は、想いを寄せた相手である同僚の富田が実質ポーズと内縁の仲であり、あまつさえ富田自ら栗林の想いには答えられないと拒否されても尚諦めきれずにいる……

良く言えば一途、悪く言えば往生際の悪い、一歩間違えればストーリーに転じてしまうかもしれない危うい性分の持ち主であった。

別<sup>M</sup>世<sup>W</sup>界<sup>世</sup>の伊丹があ<sup>原</sup>ち<sup>作</sup>ら<sup>世</sup>の<sup>界</sup>世界の彼どころか富田よりもずっとずっと優れた兵士だという点は流石に彼女も理解はしたし、世界を救った英雄であるのも認めてはいる。

そんな伝説的な男に映画のヒロインよろしく助けられたともなれば、惹かれてしまうのも仕方あるまい。これも認めよう。自分も同じ立場なら、少なからずときめきを抱いていただろうから。

しかしだからこそ、富田ではなくオタクな上官に惹かれて拳息子供まで作るにとどまらず、別の女と男を共有する事に何の抵抗も抱いていない（しかも実年齢は1人を除いてずっと年上だが見た目は大半が少女ばかり）別<sup>『栗林志乃』</sup>世界の己の正気を疑わずにはいられなかったのだ。

狂奔にも似た叫びをあげる迷彩服姿の栗林、その隣では同意を示すように黒川が何度も首肯している。

だが同時に彼女の瞳には、諦観と呼ぶには複雑な色合いの感情が宿っていた。

「うーん、そっちの私の言ってる事も分かるんだけど、でもこればかりは仕方ないのよねえ」

必死に拒否を繰り返す別世界原作『栗林志乃』の自分を前にして。

彼女が知らない、幾多の血と闘争の道程を歩んだ果てに女の幸せを手に入れた妊婦服姿の栗林もまた、こちら側の世界の少女達を見回してから。

「一緒に戦って、一緒に死にそんな目に遭って、助けたり助けられたりして、同じように耀司さんに助けられて、そして同じ人を好きになっちゃって」

照れたように、自分の馬鹿さ具合に呆れるように。

「一緒に戦って、助け合って、助けられて、一緒に好きになっちゃった仲間なんだから。」

だったら誰か1人だけ選ばれて他の皆が悲しい思いをするぐらいなら、同じ人を好きになった仲間同士、皆で一緒に愛して貰って皆で幸せになれば良いって、そう思っちゃったのよねえ」

だがどこまでも幸せそうに、母となった栗林は笑ってみせたのだ。そんなもう1人の自分を見上げていた迷彩服姿の栗林は堪らず目を背けた。完膚なき敗北感に襲われての行動であった。

「世界が変わるとここまで変わるものなのか……いかん、俺にはポーズという愛する人が既にいるんだろぅが……！」

姦しい女性陣の集団からやや離れた位置では、恋する女となり母となった別世界の同僚の笑顔原作世界について見とれてしまい、罪悪感から自分の頬を張り飛ばすあちら側の富田の姿があったという……

# GATE 自衛隊かの地にて、平行世界と遭遇せり1 5

——最終的に平行世界を繋いだ『門』はその日の内に閉じられる事となった。

あちら側からこちら側へ提供された『門』の研究資料、その中には『門』の長期的接続が齎す世界的な災害規模の反動についての情報が含まれていたからである。

2つの世界の差異はWW3の有無や年代のズレに留まらない。銀座に『門』が出現していた期間はあちら側とこちら側で比較すると、前者の方が後者より数ヶ月程長かった。

接続期間のズレはあちら側の自衛隊へ『門』関連の研究や情報収集の実施を可能とする猶予を齎したのである。

よって『門』が平行世界と繋がった事で、こちら側の自衛隊は天体の異変や異常気象、ひいてはアポクリフと特地で呼称されるあらゆる生命の死を齎す霧の発生といった、異世界間接続の具体的な代償を初めて知らされたのだった。

「何度か起きてた地震は『門』が原因だったんですね」

「そーいえばハーデイに会いに行った時、そんな感じの事言われた覚えがあるけど、あれがそうだったのか……」

『門』が破壊された直後の揺れもそれだったんでしょか。あれで俺、危うくプライス大尉共々死にかけましたよ」

「俺なんかその時死んでたんだよなあ」

「いや死んでたって何があったのさそつちの俺」<sup>MW世界</sup>

「え？ こつちに逃げてきた敵の親玉の自爆から皆を庇おうとした拍子に飛んできた破片で心臓串刺しにされた」

「うわあおっかねえ」

こちら側の伊丹と栗林は、ベルナーゴを訪れた時に冥府の神と交わした会話を思い出して額に手を当てた。

あ後は栗林の妊娠発覚やら刺客への対処やらレイの導師号案件やら、果ては帝都での政変からのアルヌス襲撃と銀座占拠のダブル騒乱が重なり、すっかり伊丹達の頭からすっ飛んでしまっていたのだ。思った以上に深刻な問題であったと今になって知った彼らの顔には冷や汗が浮かんでいた。

尤もこちら側の『門』も騒乱の果てに爆散してしまったから、諸々の異常現象やアポクリフもとうに収まっているだろう（それでも一応調査はしておくべきだろうとは伊丹も考えてはいるが）。

どちらにせよ、こちら側の自衛隊上層部にとって『門』が齎す反動についての情報は青天の霹靂だった。

故にレイが穿門法を用いて繋いだ『門』もまた再び悪影響が顕在化する前に閉じるべき、そう狭間達が決断したのも当然の帰結であった。

レイも、狭間達の判断に異論はなかった。それどころかこのような意見を出しすらしした。

「あちらやこちらの世界で発生していた『門』の長期的接続による異常現象は、帝国が建造した『門』を固定する魔法装置に『ジユウ』のよくな安全装置が組み込まれていなかったのが原因の可能性が高い。

私達は彼らの二の舞にならぬようそれを踏まえた上で、反動を齎さない為の安全装置や自由に開閉を可能とする術式を組み込んだ、新たな『門』の建設を前提に穿門法の研究を行っていくべき」

トラブルの発生原因が分かっているなら最初から対応した設計を

すればいい。

刃物を剥き出しにしたままでは不必要に誰かを切つてしまうから、人は鞘やそれに準ずる道具を生み出した。銃が勝手に発射されないよう、引き金や撃鉄を動かなくする様々な機構の安全装置が設計された。

自動車が生じた直後は運転手の死亡事故が多発した。技術の進歩の末、乗員を保護するシートベルトやエアバッグが発明され、それらは今や自動車の必須装備として広まっている。

『門』を開く穿門法も同じだ。科学も、魔法も、技術であるならば研究し、発展させ、より高性能により扱いやすくより安全に発展させればいいだけの話——後にレレイは伊丹達にそう語ったのだった。

一旦方針が決まれば後は早かった。

今回に限れば、平行世界同士が繋がっているメリット自体が極めて小さかったのも大きな理由である。

原作世界 M W 世界 あちら側とこちら側、双方の世界に於いて最初に地球と特地が繋がる『門』が出現した時、どうして日本政府は世界中からの干渉を受けなくても『門』の独占を行おうとしたのか。

それは特地が海外との関係悪化が見込まれても尚余りある膨大な価値が眠る、新たなフロンティアに他ならなかったからだ。

日本には足りぬ金からレアメタル迄の鉱物資源、石油資源、農業に適した肥沃で広大な土地、銀座を襲った帝国から日本が手に入れるであろう賠償金、地球よりも技術レベルが遥かに劣る現地住民相手の商売で生み出されるかもしれない新たな市場……

それらは地球の世界経済を一変させかねない規模と推測された。日本政府によって実際に特地の調査が始まる前から地球世界の経済市場は敏感に反応し、暴騰と暴落を繰り返した。市場とは事実ではなく推測によつて変動するものなのである。

ともかく『門』を巡って日本と世界各国が丁々発止表裏入り乱れての謀略戦を繰り広げたのは、それだけ奪い取るに相応しいだけの価値が見込まれたからという理由に尽きた。

今回開いた『門』は違う。

其処に至る経緯は大きく違えど、アルヌスに居座るどちらの自衛隊も日本に繋がる『門』を失い、異世界に孤立している立場なのは共通しているのだから。実の所、情報以外に融通し合える代物も余裕も無い程度には、どちらも追い詰められていた。

だから閉じる。幾つものデメリットを上回るメリットが存在しないのだから。

そんな訳で栗林を追ってこちら側のアルヌスにやって来ていた  
原作世界の伊丹達も、元の世界へ帰還する時が訪れたのである。

「色々大変ではあったけど、別の世界の自分と話せるなんて珍しい経験をさせて貰ったよ。こっちのレイや皆も元気でな」

「当然。研究を重ねて必ず私達のヨウジも故郷のチキユウへと帰れるようにしてみせる」

淡々とだが僅かに熱を籠めた口調でもってこちら側のレイが決意を露わにした。

原作世界のレイもまた全く同じ顔、全く同じ声で以って賛同する。

「我々の世界の実証データがそちらの研究の助けになる事を祈っている」



「有難く参考にさせてもらう……そっちの私も私達レイの例を参考にし  
て、頑張つて」

こちら側のレイが更に励ましの言葉を返す。先程の発言と比べ  
ると心なしか優し気で、僅かに甘い雰囲気も漂う口調であった。

「……………頑張る」

それを受けたあちら側のレイもレイで、白い頬にちよつとだけ  
赤みが差してみせたかと思うと、近くに立っていた迷彩服姿の伊丹の  
服、その裾の端をおもむろにぎこちなく摘まんだ。

「どっかしたの?」

「何でもない。ただこうしてみたくなっただけ」

「お、おう、そっか」

突然人見知りな子供の様に甘えてきた魔導の少女を、迷彩服姿の伊  
丹は戸惑いながらもそのまま受け入れるのだった。

その様子にこちら側のレイはほんの小さく満足げな微笑みを浮  
かべるのだった。

少し離れた位置ではあちら側のテユカとロウリイとヤオが身を乗  
り出し、熱弁を振るう妊婦服姿の栗林へ耳を傾けていた。

「いい? ただ欲情のままにいきなり襲いかかっちゃダメなの。最  
初っからやる気満々だと耀司さんはすぐ逃げ出しちゃうから、まずは  
寄り添ってあげてそこから少しずつ逃げ出せない状態に持ち込むの  
が大事なのよ」

「な、成程」

あちら側のテユカが真摯な表情で頷く。

「例えば耀司さんが非番に自分の部屋で薄い本や小説を読んではくろへ行くとするでしょ。」

そういう時はまず隣に座って耀司さんが見てるのを一緒に読むようにするの。そこから一緒の時間を過ごして警戒が緩んでいくのに合わせて腕を耀司さんの腰に回したり、膝の上に寝転んで甘え倒す体勢に持ち込みながら同時に耀司さんが逃げ出せない状態にしちゃうのよ」

「成程、腰に抱き着かれてしまっただけなら簡単には振り解けなくなるな」

「それにお父さんって純粹にくつつく分には確かに受け入れてくれるわね」

あちら側のヤオも大いに納得している様子だ。テユカも思い当たる節があるようで同意を示す。

「あともう一つ大事なのは逃げ場を残したり、邪魔が入って逃げるチャンスを与えないようきちんとまずは場のお膳立てを整える事。」

ほら耀司さんってそういう周りの警戒が緩んだり気を取られた瞬間の隙を突くのが得意でしょ？ だからそうならないよう皆で協力するのが重要になるのよ。今日は誰が耀司さんに甘える日か予め決めておいて、他の人は邪魔が入らないよう手伝ってあげたりね。

逆に言うと、それぐらいしなきゃ耀司さんの完全攻略は難しいの！ いざその気になったら凄いのには、その気にさせるまでが大変なのよ！

私達が最初に結ばれた時も逃げ出せないよう皆で包囲して、それでようやくだったんだから！」

「うふふふふふふ。流石先達、参考になるわあ。そうねえ邪魔が入らないよう場を整えておく事も重要よねえ」

最後にあちら側のロウリイが妖艶に笑った。獲物を定めた肉食獣にも似た笑みであった。

「な、何だこの寒気は？」

何やら恐ろしい気配を感じて、迷彩服姿の伊丹はブルリと背筋を震わせた。

「……早く帰りたい」

そして独り伊丹攻略講座から体ごと顔を背けながら呻く迷彩服姿の栗林である。黒歴史を人前で開帳されているかのような、虚無の表情だった。

苦手なオタクの上官と結ばれた挙句新たな命まで授かった平行世界の自分が、嬉々として身近な少女達に伊丹攻略法を伝授している様子を間近で見せられている彼女の心境は窺い知れない。

あちら側の富田と倉田は、栗林のあまりのいたたまれなさに無言で目を逸らすのだった。

やがて別れの挨拶も終え、遂に離別の時を迎える。

「敬礼！」

あちら側<sup>原作世界</sup>の伊丹達自衛隊組が横に整列し、こちら側<sup>MW世界</sup>の伊丹達へ敬礼を送った。レイ達現地住民組も大なり小なり頭を下げて礼を送る。

こちら側の伊丹も平行世界の自分達へ敬礼を返した。彼らだけでなく平行世界の伊丹達との別れを見送りに来た狭間ら幹部組も集まってきており、折り目正しく一斉に返礼する様は中々に壮観な光景

だった。

見送りに集まった自衛隊員達に背を向け、あちら側の伊丹一行は自分達の世界へ戻る為に『門』へと向かう。

「ロウリイがいきなりこっちの俺達に食って掛かった時は驚いたけど、落ち着いて話を受け入れてくれて助かったぜ」

短い道のりを歩みながら伊丹が小声でぼやくと、耳ざとく聞きつけたロウリイが唇を尖らせて反論した。

「あのねえ、あれだけの悍ましい怨嗟の気配を感じ取ってしまったらあ、エムロイの使徒としては問い質さない訳にはいかないに決まってるじゃない。」

散った戦士の魂そのものはあ一応エムロイの御許へ召されてはいたけど。むしろ魂が現世に縛られている訳でもないのにいそれでも尚あれほどの残滓が土地に刻まれてるなんてえ、邪教が禁忌の儀式に手を染めてもあそこまで酷くはならないわあ」

「それ程かよ。でもあんなに酷い兵器が使われればそれも仕方ないかあ」

脳裏を過ぎるはこの世界の狭間達に見せられた化学兵器——ノヴァ6の資料。

アルヌスで炸裂した分の記録は抹消されていたので、伊丹とロウリイが見せられたのは無誘導ロケット弾の化学弾頭という形で砲撃を受け、ノヴァ6に汚染されてしまった防衛省市ヶ谷地区の調査記録だ。

伊丹もロウリイも人間の死体には慣れたつもりだったが、ノヴァ6の直撃に晒された死体は2人ですら吐き気を催す程に惨く恐ろしい死に様だった。あんな惨状を生み出す兵器を作り出した人物の果てしない悪意が垣間見えすらしした。

「まあ話を聞いてみたらあ向<sup>MW</sup>世界のジエイタイが持ち込んだものではなかったようだしい、使われたのも殆ど事故みたいなものだからあ向<sup>ロウリイ</sup>この私も許したんでしようけどお。あんな悍ましい残滓を生み出す存在はこの世界に在ってはならないわあ」

「そりや当然だな。俺だつて特地で核や化学兵器が使用されるなんてのは想像したくもないよ」

「……ヨウジイの世界とまた『門』が繋がったらその辺りにも目を光らせないといけないいわねえ」

「その時は俺も手伝うよ」

「頼りにしてるわあ」

次々と宙に浮かぶ半透明の鏡の中へ1人また1人と入り込んで姿を消し、遂にロウリイと伊丹の背中も『門』に呑み込まれた。

それを見届けてこちら側のレイが指を慣らせば、『門』はあっさりと宙に溶けて跡形も無くなった。直後、僅かな揺れがアルヌスを襲う。

———こうして平行世界との接触はその日の内に終幕を迎えたのだった。

BLACK LAGOONクロスオーバー：Knock  
kin, on Warfare Gate  
Knockin, on Warfare Gat  
el

相も変わらずクソ熱い国だ、と照り付ける太陽を忌々し気に見上げながらネクタイを緩めた。

熱帯気候の東南アジア。それも夏真っ盛りの最中に黒のスーツとネクタイをきつちり着込み、おまけに皮手袋まで嵌めてればあつという間に茹蛸の出来上がりだ。

転職したにもかかわらず以前の職場の仕事着を未だに貫いているのは、半分惰性でもう半分は強いて言うなら新しい職場で知り合った人物の影響か。

転職時に世話になったその男はかつてサラリーマンをしていたらしい。

巡り巡ってこのタイの辺鄙な田舎町、どころかゴツサムやヨハネスブルクも真っ青の悪徳の都で新たな稼業に就いた同郷の先輩は、今や平和ボケに定評のある祖国で生まれ育ったとは思えない程に、この街のあらゆるゴロツキ相手に切った張ったの交渉を平然とこなすタフな人物である。

自然と左目を覆う医療用眼帯へ手が伸びた。

左目とかつての職場の同僚を失った、いや自らの意志で切り捨てた果てに、前職場の連中は墓穴ですらないどこぞの地面の下か海の底へ

送り込まれた。

先に見捨てられた意趣返しを果たした後は死を覚悟していた自分は生き延びた。皮肉にも仲間に見捨てられた自分を助けたのは殺し合った筈の相手だった。

生き延びたからには、生かされたからには今度はとことん足掻いてやるつもりだが、それはそれとして借りもきっちり返さなければとぼんやりと思う。

生温い風でスーツの上着がはためく。裾の下からジェリコ941自動拳銃が覗いた。

そこいらのチンピラみたいに露骨に銃をちらつかせるのも性分ではない。小柄な体を覆う上着は武器を隠す為でもある。

この街に住んでいるのは銃を持たない堅気よりも銃をぶら下げたゴロツキの方が多いくらいだ。その中にはこの街に根を張るあらゆるマフィアから札束をかき集めている地元警察も含まれる。

スリから殺し屋、売春婦、ポン引き、葉中、死体専門の掃除屋、元兵隊のマフィア、汚職警官に至るまで見渡す限りロクデナシばかりの悪徳で栄える港町。

そして自分も立派なロクデナシの1人だと自覚はしている。

新たな転職先での身分は何時でも見捨てられる鉄砲玉。食扶持も自分で探さなければならぬが転職までの経緯上、今の飼主の言う事にはちゃんと従うし待遇に文句を言うつもりはない。

容赦なく照らす太陽を隻眼で見上げたまま、今から冷えたビールでも1杯引っかけてやりたい欲求が頭をもたげ始める。

そんな悪徳の都の人々は、この街に不釣り合いな存在にとっても敏感で。

道行く通行人―堅気ゴロツキ問わず―の空気の変化を察知して、反射的にその出所を探ろうと視線を空から地上へと戻す。

すぐに見つけた。十字路の曲がり角に所在なさげに立ち尽くす人影。冴えない顔立ちの、よれたスーツを着た東洋系の男。

「参ったねえ。何処にどう行けばいいのかさっぱりだ」  
「あん？」

けれど彼女が反応したのは、別の理由からであった。

何故なら男の口から漏れたのが、彼女がかつて捨てた故国——  
日本語だったからだ。

思わず彼女が発してしまった声は男にも伝わったらしい。地図らしき紙を広げて唸っていた男が、彼女の方へと顔を向けた。

目と目が合う。反射的に見つめ、いや睨み返す。

改めて見れば見る程冴えなさが滲む凡庸な容姿だった。スーツの安っぽさが尚更印象を補強している。

もし故郷で見かけたなら都会の雑踏に紛れ込んだらあつさり見失った拳句存在すらも忘却してしまいそうな、日本の冴えないサラリーマンのお手本のような平凡さ。

——だからこそ、この悪徳の都では非常に目立つ。

この街の（所属組織の地位という意味で）上澄みに含まれるマフィアの構成員には——自分も含め——スーツを纏う者も少なからず含まれるが、彼らに共通する剣呑な威圧感も目の前の男からは無縁だ。

彼女の飢えた野良犬の様な眼光に射貫かれると、サラリーマン風の男は……にへら、と頬を緩めた。

無造作に彼女へと近付いてくる。彼女の服の下の膨らみにもまるで気付いていないように見えた。

嫌そうな舌打ちが漏れた。小柄な上に相手が油断しやすい、悪く言えば舐められやすい外見をしている自覚はあるし仕事の時は役立ちもするが、こういうひと睨みで相手を追い払いたい場合には逆に足を



引っ張るのが難点だ。

この時、もし彼女に読心能力があつたならば、

(やさぐれ系男装ツインテ眼帯美少女とか何という属性過多)

などという戯けた感想を抱いた目の前の冴えないサラリーマンへの対応を、ガンつけからジェリコ941を使った剣呑なやり方へ即座に切り替えていただろう。

「すみません、お尋ねしたい事があるんですけど」

結局サラリーマン風の男は怯みも躊躇いもせず至近距離まで詰めてからようやく立ち止まると、如何にも困っていますといった様子で彼女に声をかけた。

逆に更なる対応へ移る前に易々と懐まで踏み込まれてしまった彼女はもう1度舌打ちしてから、渋々といった態度を全く隠す事無く相手をしてやる事にした。

「ンだよ一体。売春ツアーで来たんなら商売女が集まつてる区域はこつから東に3ブロック先だからそつちへ行きな」

街の外から来た外国人、それもやさぐれた雰囲気を纏わない堅気の男となれば、大抵は地元風俗店ではまず味わえない過激な体験を求めてはるばる足を伸ばしてきた女狂いの買春ツアーの客である。

「いやいや、そうじゃなくてね。仕事でこの街に来ただけど道に迷ってしまいました……」

「アンタの目は飾り？ 道案内の看板でも探しな」

「……どれも現地の言葉ばかりで読めないんですよ。あ、あはははは」

バツが悪そうに男が笑うと、女は心底めんどくさそうに溜息を吐いた。

屯するチンピラ達の視線を感じる。女は新参者だが、この街に居着く際にひと騒動起こして少しばかり悪党連中の間で噂になった身だ。今はチンピラどもは見に徹しているが、グダグダ相手をしていたら更に面倒が増えるかもしれない。

冴えないサラリーマンを追い払ってさっさと立ち去るか。その場合立ち去った数秒後にはチンピラどもは丸々と肥え太った鶏にしか見えないこのサラリーマンを嬉々として取り囲むに違いない。

「その地図を見せな」

女は男が止める間もなく、彼が見ていた地図をむしり取った。

それを覗き込み、次の瞬間訝し気に眉根を寄せた。彼女が男から取り上げたのは、正確には地図ではなかった。

「ンだよこれ。地図じゃなくて街の航空写真じゃないか」

住所や通りの名前が分からないのも当然だ。所在なさげに頬を掻いていた男は、ふと彼女をまじまじと見つめると「もしかして……」と口を開いた。

「もしかして君、日本人？」

「だったら何だよ。同じ日本人同士助けてくれって寝言ほざくんなら話は終いだよ」

女は地図改め航空写真を半ば突き飛ばすように男の胸に押し付けた。

(あん?)

違和感を覚える。紙と革越しに伝わった男の胸の感触が異様に硬い。

僅かに気を取られて動きを止めた次の瞬間、突き出した彼女の手は意外な程素早く動いた男の手によって捕まっていた。

「そんな事言わないでお願いします！ 報酬はちゃんと出すから、是非ガイド役を頼めないかな!？」

「気色悪いんだよさっさとアタシの手を放しやがれオッサン！ ガイド雇いたきや余所当たりやがれ！」

「そう言わないでさ、そもそも余所当たろうにも住所も文字も分からないから探しようがないんだって。だからどうかこの通り頼んます！」

喚く女ペコペコ頭を下げる男。コメディじみた口論を始めた2人を眺める周囲の見物客はどこか呆れ顔だ。

——そこから少し離れた曲がり角。男が立っていた十字路を通過していく住民が曲がり角に顔を向けた瞬間、ことごとくテイラノサウルスにでも出くわしたような顔を浮かべて足早に去っていくのに、ヒートアップした女はまだ気付かない。

ああもう面倒だ。ノーロープバンジーよりも速く直滑降する機嫌のまま、とうとう女は懐に空いた片手を突っ込んだ。

「いい加減に——しやがれ！」

引き抜いた拳銃を男の額へと押し付けた。  
その瞬間だった。

ゾクリと背中が、そして全身が泡立った。

「……………」

男は動かない。銃口が額に密着していて、引き金にも指が添えられている自動拳銃越しに、変わらず女から視線を外そうとしなかった。

恐怖で固まっている？——違う。

おもちゃと勘違いして命の危機と認識していない？——それも違う。

片腕は男に握られたままでもう片腕で男に銃を突き付けている体勢上、女も自然と男の顔を覗き込む格好になった。

男の顔には恐怖も怯えも戸惑いも敵意も浮かんでいなかった。両の瞳も精神的同様にぶれる事無く、女の一挙一動を観察していた。

ここに来て女は一見日本の三流サラリーマンにしか見えない目の前の男が只者ではないと悟った。

虚無と表現する程無機質ではない、だが冷徹に目の前の脅威を観察し見定めようとするカメラレンズじみた眼差しは、今の彼女の飼い主であるあのアフガン帰還兵どもによく似ていて——

「お前……何モンなんだよ」

睨みながらその実動けずにいると、男が立っていた曲がり角から不意に巨大な影が姿を現す。驚きのあまり、唯一光を宿す女の右目が大きく見開かれた。

其処に出現したのはヴィンテージのマッスルカーから大型トラック、武装ピックアップにトウクトウクまで雑多な乗り物が行き交う、混沌と悪徳の街でもまずお目にかかった事のない鋼鉄の巨獣——  
——紛う事なき装甲車だった。

中古のセダンや4WDに鉄板を溶接しただけのマッドマックスより安っぽい手製装甲車擬きとはレベルが違う。この街の悪徳警官が所有する人員輸送用の装甲バスからもずっと洗練された設計なのが一目見ただけで伝わってくる。

ブッシュマスター装甲車と呼称されるその車両は、現時点のこの世界に於いて東ティモールの紛争に試作型が投入されたばかりだ。

装甲車の屋根に設けられた上部ハッチからライフルを構えた男の上半身が覗いていた。急展開に周囲の野次馬やチンピラは一斉に姿を消した。

サラリーマンを振り払おうにも、気が付くと女が構えた拳銃のサイドヘサラリーマンのもう片方の手が重ねられていた。撃鉄部分に指を挟んだ状態でしつかりとスライドをフレームごと掴まれてしまつては幾ら引き金に力を籠めても鉛玉は飛び出さない。

今やサラリーマンから兵士の目になったスーツ姿の男は、掴んだ拳銃ごとゆっくりと女の腕を下げさせた。

それから手を放す。女は瞬時に銃を掴まれない距離まで飛び退つてから、獲物に跳びかかる寸前の獣よろしく身構えた、だが女が見た事が無いような近未来じみたパーツが幾つも取り付けられたライフルがピタリと照準されるのを察知してそれ以上動けなかった。

「言ったでしょ。俺はこの街には仕事で来たんだつてば。でも街の住所や標識の案内やどの店が何処にあるかも分からないから、街を案内してくれるガイドを探してるの」

改めて女へ向き直りながら男はそう告げると、眼光を兵士のものからそれまでの情けない安サラリーマンのものへと変えた。

雰囲気のアマリの落差に極限まで警戒していた女————ルマジュールですら脱力して危うく腰砕けになりそうな位だった。

「だからさあ……ちゃんと報酬もお支払いしますので、この通りガイ

ド役を引き受けて貰えないでしょーか！ お願いします！」

そう言つて安スーツの男——伊丹耀司はもう1度深々とルマ  
ジュールに平身低頭したのである。

G A T E : M o d e r n   W a r f a r e   m e e t s   B L A C K  
L A G O O N

| K n o c k i n '   o n   W a r f a r e   G a t e |

Knockin' on Warfare Gate  
e 2

クソめんどくさい事になったと苛立たしく胸の内で嘆きながら、装甲車の硬い座席の上でルマジュールは車内を見回した。

軍用の輸送車両独特の向かい合わせに座る形で配置された座席。ルマジュールの向かい側には彼女を面倒事に引きずり込んだ張本人の安サラリーマンこと伊丹が鎮座している。

「ああすみません。自己紹介が遅れました。じぶ——俺は伊丹つています」

差し出される伊丹の手——ルマジュールは思いつきり鼻を鳴らしてそっぽを向いた。困った様子で苦笑いする伊丹。

その拍子に彼女から見て右側、運転席がある車体前部側を横目に捉える。屋根のハッチからルマジュールにライフルを向けていた髭面の男が座っていた。

白人の、おそらくイギリス系だろう。擦り切れた砂色のカーゴジャンズにモスグリーンの使い古されたミリタリーシャツ。頭にはブッシュハット。

シャツの上からライフルと拳銃のマガジンで膨らんだポーチがズラリと並ぶチェストリグ。右太股にはナイフと大型拳銃サイドアームを収めたホルスターのおまけつき。すぐ手元に立てたライフルへ手を添えながら静かに佇んでいる。

ルマジュールよりもずっと年上だろう初老の男は、三流ビジネスマ

ンの装いな伊丹とは別方向でこの掃き溜めの街に相応しくない異様な身なり——兵士の姿をしていた。

四六時中悪党が殺し合うこの悪徳の都……ロアナプラ。此処では拳銃どころかアサルトライフルの様な長物、時には重機関銃やロケット砲すら持ち出してぶつ放す輩も多く、そういう連中は兵隊崩れだったりする事も決して珍しくはない。

だがルマジュールは、ライフルを構えた髭面の男から銃口を据えられた瞬間に感じてしまったのである。

(ゴイツは術が違う)

それこそ今の職場の主だったメンバーである筋金入りのアフガン帰還兵どもに匹敵するか……或いは彼らを凌ぐ歴戦の戦争野郎<sup>ウォーマシン</sup>。

渋々と大人しく装甲車に乗り込んだのはこの髭面の兵隊のせいでもあった。

あの距離、あのタイミングでこの老兵の銃弾から逃れられるイメージが全く湧かなかったのだ。銃を向けられてからの僅かな間にルマジュールの本能へそう刻みつけるだけの迫力を、あの瞬間の老兵は確かに宿していたのである。

髭面のイギリス人の向こう側、運転席と助手席にも兵隊然とした東洋系の男がいる。こっちの2人は伊丹と同じ日本人だ。先程日本語でのやり取りをルマジュールは耳にしていた。

顔を反対側に向ける。後部側にはやはり頑丈そうなアウトドア系の衣類の上に兵隊の装備を着込んだ坊主頭の白人の姿。

こちらはロシア系だろう。運転席組の面子も含め、彼らもまた老兵に負けず劣らず只者ならぬ精兵の雰囲気漂わせている。

観察対象を人から道具に移してみると、やはりこちらも異様で異質だった。



全体的なシルエットから東西の傑作アサルトライフルとして有名なAK47やM16系列なのは見れば分かる。

が、施された改修や銃器に取り付けられた様々な形状の付属品、余りに先鋭的に過ぎるそれらはルマジュールの知識にある各国のコーピー品や派生型と全く一致しない。10年か20年先の未来に誕生する子孫という表現がしつくりくる。

車体後部側、座席と後部ハッチの間に設けられた長期の作戦活動用物資を収納するスペース、そこに並べられたライフルよりも更に物騒な品々も同様の改修が加えられているのが見て取れた。

だからこそ、ロアナプラどころか正規軍ですら持っているかも怪しい代物揃いの武器で武装した凄腕の兵隊に囲まれて、1人身なりも雰囲気もうらぶれたサラリーマンにしか見えないグレーのスーツ姿な伊丹の存在は殊更に異物感が半端ではない。

それでもルマジュールは伊丹に対しこれ以上油断も侮りもするつもりはなかった。

会社勤めなら社内での評価はさしずめ給料泥棒のお気楽社員然とした態度の伊丹が、しかしその顔の下にこの装甲車に乗った男達と同じ兵士としての本性を隠している事は、先程真っ向から伊丹の瞳を覗き込んだ際に見抜いている。

「ええっと、君の事はどう呼べば良いのかな？」

「……ルマジュール。そう呼びな」

「ルマジュール中、か。分かったルマジュール。しばらくの間頼りにさせてもらうよ」

「言つとくけどこいつはあくまでビジネスだ。アンタはアタシに金を払い、アタシはお上りさんのアンタ達に道案内をしてやるが、アタシの仕事はそれだけだ」

苛立ち交じりの口調でルマジュールは己のスタンスを告げてやる。

「何の仕事をしにわざわざこんな掃き溜めにやってきたのかは知らない

いし知ったこつちやもない。

けどね、アンタが鉛玉で体重を増やさないようにするのはアンタが引き連れてるそこのご自慢の護衛の役割だし、取引や交渉にアタシが出張するのも一切なしだ」

「オツケー、了解了解」

「それからもう一つ」

言葉を区切り、ドス黒く澱んだ血の気配を帯びた隻眼で以って伊丹の顔を見据える。

「もしこの街の肥溜めを勝手に引っ掻き回してアタシまで糞を引っ被りそうになったり、報酬の払いを金じやなく鉛玉で払おうなんて考えてるんなら、その時はアタシがアンタの体重を鉛玉で増やしてやるから。」

——分かったね？」

1人や2人手にかけた程度では醸し出せない、濃い血の臭いが滲む本気の殺気を叩きつけての脅し文句を、しかし目の前の冴えないサラリーマンにしか見えない男はあっさりを受け流して。

「それは勿論。裏切るのも裏切られるのもしんどいしめんどくさいですし、何より俺も平和に問題なく仕事が片付けば良いなあって、常日頃から考えてますから」

それどころかしみじみと……或いは溜息すら聞こえてきそうな、とつつつっても実感の籠ったうんざりした声色で、伊丹はハツキリと言り返した。

それが聞こえたらしい。運転席と助手席の日本人の兵士は顔を見合わせると忍び笑いを漏らしたのだった。

「それで、アンタ達はまず何処を目指してんのか教えてくれなきゃアタシも道案内のしようがないんだけど？」

「おっとそうそう。それじゃあまずは——この街で美術品の買い取りとかやってるお店ってあるかな？　顔が広いと尚良いんだけど」

「おや、これは珍しいお客様だ。今日もモディボに御用事ですか？」

店の主はそう言つて客を出迎えた。

名はイザック。褐色肌に長髪、オーダーメイド仕立てのスーツを隙無く着こなす、上流階級の出と言われても違和感を感じない伊達男だ。

店内も身なり整う主に相応しく、下劣な悪党が跳梁跋扈する悪徳の都ではなく欧州のブランド街に構えていても通用するであろう、大小様々なアンティークが整然と並ぶシックな店構えである。

これにはルマジュールに連れられて入店した伊丹も思わず感嘆の声を発してしまった。日本語で。その手には小型のアタッシュケース。

店内へ足を踏み入れたのは伊丹とルマジュールだけで、店の入り口前には髭面のイギリス人が立って通りに不審な動きが無いか目を光らせている。

通りに居た地元住民からしてみれば店の前に装甲車を停めて兵隊に護らせている伊丹達こそがとびっきりの不審者なのはご愛敬。

「おおっええ。こういうお店入るの俺初めてだよ」

お上りさんじみた反応の伊丹を、不機嫌な表情のルマジュールが立てた親指で示した。

「安心しな、とつくの昔に黒い肌のデカブツ狩りは店仕舞いだ。今のアタシの立場位どつかで聞きつけてんだろうが。だから其処のデカブツが伸ばしてる腕を引っ込めさせな」

隻眼が、イザツクの傍に控えるアフリカ系の大男をジロリと見据えた。

「承知しておりますとも。モデイボ、彼女の言う通りに」  
「はいマスター」

モデイボと呼ばれた男は主の声に従い、カウンターの裏に立て掛けていたショットガンへ密かに伸ばしていた右手を引っ込めた。だがルマジュールに対する警戒までは解こうとしない。

ここまでのやり取りだけでルマジュールとこの骨董店の経営陣の間に好ましからざる出来事があったと見抜くには十分だったが、伊丹は敢えて気付かなかったフリをした。当事者でもない人物が古傷をほじくり返そうとするのは下の下である。

「では当店を御入用なのはそちらのお客様ですか。お客様、本日はどういった用向きで？」

「実は買い取って欲しい品物があるんだ」

そう言つて伊丹は店のカウンターにアタッシュケースを乗せた。ロック解除。開いて中身がイザツクへ見えるようケースを180度ターン。

途端に店主の目が大きく開かれ、天井の照明から反射した輝きが僅かに彼の顔を照らした。

「おおっ」

「この手の美術品にはあまり詳しくないんだけど、何でも古代ローマ時代に純金で作られた物らしいよ」

スポンジの内張りで保護された中身は黄金に輝くブレスレットであった。

幅は5センチを超える。金の煌めきだけでなく、波形の紋様が刻まれた中心部には透き通った緑の宝石——エメラルドが埋め込まれていた。混ざり気を感じさせない金と緑が混ざり合った輝きはとても轟惑的だ。

その惹きつけんばかりの魅力は、厳めしい顔つきで控えていたルマジュールとモディボも思わず前のめりになって覗き込んできた程であった。

「いやはやこれはこれは……」

驚嘆も露わに伊達男はまず素早く白手袋を取り出して装着、慎重な手つきで中身を取り出す。

鉄の比重は約7・8。金の比重は19以上。同サイズの塊で比較した場合、純金の重量は鉄の2倍以上となる。

取り上げたイザツクの手首にブレスレットの外観以上の重みがかかる。無論たったこれだけで純金製であると証明された訳ではない。それでも含有率によって重量が変動するのを踏まえ重さだけで判断するならば、伊丹の申告通り純金に匹敵する重みだ。

「仰られた通り古代ローマ時代に近いデザインではありますが、ふむ。一般的な同年代の品に刻まれている紋様に差異も見受けられます」  
(そりや異世界で作られた物だもんねえ)

口には出していないので当然伊丹の心の声がイザツクに届く筈も

なく。

何度かブレスレットをひっくり返し全体を入念に観察し終えたと、イザツクは次にループを取り出して宝石の鑑定にかかった。

エメラルドは基本的に色が濃く、かつ透明度が高い石ほど価値が高い。その点で言えばブレスレットに埋め込まれた宝石は非常に高品質で、かつ石のサイズも大きい。ブレスレットから外した石単体だけでもかなりの価値が着くに違いない。

それがこれだけの量の黄金と組み合わせられているともなれば、美術品としての価値は更に跳ね上がり――

「このロアナプラでここまでの品物をお目にかかるのは初めての経験ですよ」

ループを外し、ブレスレットを取り出した時以上に慎重な手つきでケースの中に戻したイザツクは、アスリートのスーパープレイを目の当たりにした解説者の如く首を横に振り、満足げに嘆息した。

「つきましては――」

提案を切り出そうとした古物商を遮るように、弛んだ笑みを張り付けながら伊丹はおもむろにこう切り出した。

「この品を今、この場で、現金で買い取って貰う事は出来るかな？」

イザツクの方が一瞬、揺れた。

「即金、ですか。宜しければ私どもが仲介人となりまして、より高い価

値を見出してくれるだろう買取先を御紹介させて頂こうと、そう提案させて頂くおつもりだったのですが。

無論、仲介料は頂くつもりではありましたがね」

「お気遣いは有難いけど、こちらとしちやなるべく早急に現金を揃えておきたい事情があつてねえ。ほら、時間はお金じゃ買えないってよく言うでしょ？」

「……」

「……」

カウンター上の空間で視線と視線がぶつかり合った。

目撃した多くの女性が見惚れるだろう柔らかな笑顔と、多くの人が一目見ただけで脱力しそうな腑抜けた笑顔、同じ笑みでも対極的な印象を抱かせる表情を浮かべたイザックと伊丹はしばしそのまま見つめ合い。

「分かりました。お客様ののご要望通りに。モデイボ、奥の金庫からこれだけ持ってきてくれたまえ」

「承知しましたマスター」

幾つかの桁が並んだ数字を走り書きしたメモを巨躯の黒人へイザックは手渡した。

モデイボが店の奥へ消えて数分後、戻ってきた彼が押す、これまた店の雰囲気に対応しいアンティーク調のカートには幾つもの札束が積みまわっていた。

50ドル札分だけで十数万、100ドル札分の札束も加えれば軽く数倍の額となるだろう。

100ドル札と50ドル札だけで構成された札束の山に、ルマジュールですら一瞬呆気にとられた位だ。然るべき手順を踏めば額は更に跳ね上がるというのだから、金は在るところには山のように唸っているのだなと彼女は思い知らされた。

「これだけの値段を付けさせて頂きましたが、ご満足頂けましたか？」  
「いやあ悪いねえ無理な注文しちやつて。ゴメン爺さん、お金入れる  
ケース持つて来てくれるー？」

黄金とエメラルドの腕輪はイザツクの手へ。札束はプライスが  
持つてきた別のアタツシケースに放り込まれて伊丹の手へ。

札束を2つ3つ適当に拾い出し、金に不審な点が無いかチェックす  
る伊丹だが、その様子は殆ど形だけといった風情。すぐに無造作に札  
束をケースに詰め込み始めた。

その最中、安堵半分困窮半々の愚痴といった風を装って、更に伊丹  
はこんな事を言い放つのだった。

「でも参ったよ。他にもこういう品物が幾つも手元に有るんだけど現  
金の手持ちは少なくてさ。」

こうやって一々買い取って貰ってお金に換えてたら今度は時間が  
かかるばかりだし、折角この街に来たんだから余所じや中々手に入  
らない品物も取引したいんだけど、いつその事物々交換で取引してく  
れる相手が見つかればこつちとしては有難いんだけどねえ。

——店長さん、何か良い案ないかな？



Knockin' on Warfare Gate  
e3

こうなる事は予想がついていた。

「今日の事は聞いているぞルマジュール。イイ金づるを見つけたそうじゃないか」

魔都ロアナプラ。世界中の名だたる悪党が集結するこの港湾都市を実質的に支配しているのは3つのマフィアだ。

チャイニーズマフィア——トライアド三合会。ロアナプラでの本拠地はケープルテレビ会社の熱河電影公司。

イタリアンマフィア——コーサ・ノストラ。ロアナプラでの本拠地は表の顔ヴィスコンティ・フーズ。

ロシアンマフィア——ホテル・モスクワ。ロアナプラでの本拠地は表の顔ブーゲンビリア貿易。

過去にはコロンビアカルテルもロアナプラの顔役に含まれていたらしいがルマジュールがロアナプラ入りする以前にはほぼ壊滅したという。冗談みたいな話だが主犯は南米からやってきたメイドで、その暴れっぷりはロアナプラの住人の間で『メイド』がNGワード扱いされる程だったそうだがルマジュールにはどうでもいい。

かつてフランスの民兵組織 市民行動サービス S.A.C. の鉄砲玉だったルマジュール

は、今はホテル・モスクワの鉄砲玉として飼われている身だった。

今日の前で葉巻を啜え、高級品の革張りの椅子に身を預けている金髪の女こそホテル・モスクワの首領——バラライカ。

率いていた部下ごとマフィア入りしたアフガン帰りの元ソ連軍空挺部隊指揮官に呼び出されたルマジュールは、今日体験した出来事を洗いざらい報告している最中である。

「護衛を引き連れて装甲車でやってきた東洋人の客人は、貴様のロアナプラ観光の案内に幾ら払ってくれたのかしら？」

「……今日の分の手間賃で1000ドル。明日以降も付き合ってくれるなら1週間に付き1万ドル払うって言われた」

「ほう、中々のお大尽のようね。良いだろう、しばらくはその客人の要望通りこの街のガイドをしてやれ。貴様の取り分をネコババするつもりはないから安心しろ」

ふう、とバラライカは葉巻を口元から離し、紫煙を吐き出す。刺激的な硝煙とは対極の甘い煙がルマジュールとバラライカの間広がった。

「——で、そいつらはこの街の秩序を波立てそう？　包み隠す事無く、貴様がその者達に感じた事を話せ。正直にだぞ」

薄い紫煙のベール越しに、顔の右半分に火傷痕が刻まれていても尚、伶俐な美貌をバラライカはよく研がれた銃剣のように鋭くさせ、狙撃銃の銃口を思わせる冷たい眼光でもってルマジュールを見据えた。

ルマジュールが報告に虚偽や余計な修飾を少しでも混入させたならば、ナイフや銃の餌食になるよりもずっと酷い目に遭わせてやろうと、その表情が雄弁に語っている。

元よりルマジュールもそんなつもりは更々なかった。だから伊丹達を見て、接して、共に行動して感じた事を率直にぶちまけてやる。

「分からない。だが伊丹って名乗ったそいつが事を荒立てずに用事を済ませたがっているのは本心だろうね」

「その用事とやら。貴様は聞かされているのか？」

「仕事でこの街に来たってそいつは言ってたよ。自営業なのか誰かの下で働いてるのかまでは聞いてないね。けど連中は恐らく取引がしたくてこの街に来たんだとアタシは読んでる」

「根拠は？」

「イザックとかいういけ好かない古物商の店で店主に尋ねてたんだよ。金じゃなく現物同士での取引をしてくれる相手を探してるってな」

「現物……それはどんな代物だ」

「文字通りのお宝だよ。そいつが古物商に持ち込んだのは宝石が埋め込まれた金のブレスレットだった。」

大手競売会社  
「サザビーズミリオンドラに持ち込んで鑑定書付きでオークションにかけりゃ100万ドルの値が着けられてもおかしくないような代物さ。そいつは幾つも抱えてるって、自慢げに語ってたよ」

「成程ね。どうやら客人方はピラミッドの隠し宝物庫で一山当てた山師の類のようだな」

「武器か、薬か、それ以外かは知らないけど、とにかくそいつらは取引をしたがつてる。これは間違いないだろうね」

バラライカは灰皿に置いた葉巻を再び口元へ運び、紫煙を口の中で転がしながら思考を巡らせた。

「……実際の目標がどうあれ、そいつらが商談を当面の目的としているのは分かった。ならば仮に仮想敵として判定した場合の脅威度はどうだ」

質問を耳にした瞬間、ルマジュールの隻眼もまた鋭利なものとなした。

「……あの野郎が引き連れていた護衛は4人。2人はアタシを雇ったヤツと同じ多分日本人、イギリス人らしいのが1人、最後の1人はロシア人だった」

「護衛どもの質は」

「間違いなくアイツらはれっきとした兵隊だ。」

それも訓練で撃つてこないのしか相手をしてこなかった新兵紛いなんかじゃない。鉄火場に送り込まれては機械みたいに敵のドタマをブチ抜くような任務を何度も繰り返してきたような連中に違いないねえ。

SACでアタシ達を鉄砲玉として使い物になるようDGSSEが送り込んできた元GINだかの教官もあんな感じだったよ。国家憲兵特殊部隊

あの中でも特に別格だったのがイギリス人だ。そいつに銃口を向けられた時なんか例え1マイル離れてようがワンショットで額に風穴を拵えてきやがる、そんな錯覚まで見せられちゃった位だ。

それからロシア人の方も日本人の護衛よりは間違いなく格上だ。こいつは勘だがな」

だが、トルマジュールは真っ向からマフィアの女頭目を見据えた上で続ける。

「あの連中の中で一等ヤバいのは護衛のヤツらなんかじゃない、伊丹とか名乗ったあの男自身だ」

ここまで微動だにしていなかったバラライカの眉が、ピクリと反応した。

「ほお、ならばその根拠を述べてみせろ」

「……具体的に言葉に出来るようなもんじゃねえ。根拠なんてハッキリ言っちゃまえばアタシの勘だ。」

けどな、くだらないお国の為のドブ攫いをやらされてる間に散々獲物の血を嗅ぎつけてきたそいつが、ずっと喚き立ててるんだよ」

ルマジユールが銃を突きつけた時に覗き込んだあの時の伊丹の目。

当時はバラライカ達アフガン帰還兵が冷徹な兵士としての本性を表に出した時によく似ていると思った。

今は違った。

アフガン帰還兵の亡霊なんて可愛いレベルじゃない。アレはもつと、もつと、もつと、もつと、ステイブ・キングに出てくる恐怖の怪物よりもずっと悍ましく、空虚で、そして恐ろしい存在だ。

ロアナプラの住民が眼窩に嵌め込んでいるのが死者の目なら、あれは———その手で幾万の死者を積み上げた果てに宿した死神の目だった。

数多の死を濃縮した果てに出来上がった人が本能的に忌むべき何かを、ルマジユールはあの瞬間の伊丹の瞳の中に確かに見出したのだ。

「アンタ達は捨てられた野犬の皮を被った軍用犬の群れなのかもしれないけどね。」

だったらあの伊丹とかいうヤツは呑気な駄犬のフリをした、決して目覚めさせちゃならないジエヴォーダンの獣だ」

ルマジユールが去るのと入れ違いに、厳めしい顔つきを斜めに縦断

する傷の持ち主である副官のボリスがバラライカの執務室へと入室した。

「軍曹、報告を」

葉巻を吹かしたままバラライカは促した。背中に鉄の芯が通っているかのような見事な直立不動の姿勢を取ってから、手元の書類を見下ろしてボリスは口を開いた。

「ハッ、対象Aはサンカン・パレス・ホテルに到着後、2組に別れ行動。護衛対象と思しきスーツ姿の東洋人と護衛のイギリス人および東洋人1名はそのままホテル内へと入り、こちらをA1と呼称しますが、そのままフロントで飛び込みのチェックインを行いセミスイートの宿泊代金を前払いで1週間分支払った事までは確認が取れておりません。

その際、泊まる人数の割に荷物が不自然に多く、ホテルの『ポーター』《荷物運び》には触らせなかつた点を踏まえますと、他人に触らせたくない類の荷物が相当量室内に持ち込まれていると推測されます」

突如街に現れた謎の装甲車を乗り回す武装集団の情報は当然ながら即座にホテル・モスクワの下へと届けられ、その異様さから即座に配下による監視が実施されていた。

「残りの護衛達はどうした」

「もう1人の東洋人の護衛とロシア人は―こちらはA2と呼称―送迎に使われた装甲車に乗車後、A1をホテルに残しその場から走り去りました」

「手元に残す護衛は2人だけとは中々豪胆じゃない。それとも2人だけで戦力は充分とでも考えているのかしらね。

「離脱したA2の行き先は確認出来たのか」

「それが、A2を乗せた装甲車が街を出て東南方向へ向かう途中まで

は追跡出来たのですが……」

歯切れ悪くボリスは言い淀む。

「不測の事態が？」

「は……尾行を行っていた班はA2から距離を置いて尾行を行っていたのですが、途中から別勢力の車両が新たに尾行に加わったとの事」

「何処の勢力の手の者だ？」

「警察署長ワトサツプの部下共です」

「成程。連中もカネの匂いを嗅ぎつけたのか、それとも己の尻を焼く火種となるのか見極めようとしたのだろうか」

「きつとそうでしょう。ワトサツプの部下が乗ったパトカーは我が方の尾行班と対象A2の間に割り込む形で尾行を開始。

異常が発生したのは、A2を乗せた車両がそのまま街を抜け東南方向へのハイウェイに出てから2キロ地点に差し掛かったタイミングでした」

「異常——とはなんだ」

「狙撃です」

バラライカの肩が僅かに震え、鋭利に細められた眼光がボリスを捉える。

「威力と発砲音から推定50口径<sup>12.7ミリ</sup>クラスの対物ライフル、当時の周囲の地形から発砲炎の位置から半マイル<sup>800メートル</sup>前後の長距離狙撃<sup>ロングレンジスナイプ</sup>と推測されるとの報告です。1発で車両の急所を撃ち抜く見事な狙撃だった、と」

「ワトサツプの手の者に被害は？」

「肝を潰されたパトカーの乗員がズボン<sup>ズボン</sup>を台無しにしたのを除けば人的被害は確認されておりません。

対向車は無く、追跡対象が直線にもかかわらず不自然に速度を落とすのに合わせてパトカーも減速したタイミングでの狙撃だった事か

ら、A2と狙撃者が連携を取った上での行動だったのは間違いないでしょう。

尾行班はこの出来事を踏まえワトサップの部下の二の舞を避けるべく尾行を中止したとの事です」

「尾行班の判断は正解だ。折角のパトカーをお釈迦にされたワトサップはカンカンだろうが、手加減して貰った幸運をヤツらが自覚するかは怪しいものだな、軍曹」

「私も同意見です、大尉殿」

背もたれに体重を預け、紫煙を薫らせ天井を見上げるバラライカ。短い時間、思案に耽る。

脳裏に再生されるルマジュールの証言。ボリスから伝えられた尾行班からの報告。

「成程、兵隊だ。確かに連中は兵隊だ

それも装備も練度も規律も整った優秀な兵隊どもだ」

かつての兵隊の亡霊としての名残が疼くのをバラライカは感じた。

同時にロシアンマフィアの長としてのバラライカは突如現れた外部からの闖入者への警戒と、彼らが齎すリスクと利益が如何なるものか算盤を弾きながら、今後の対応方針をボリスへ命じる。

「ホテルに逗留中のA1への監視を強化しろ。引き続きルマジュールにも対象との接触を継続させる。

街の外から入ってくる新参者のチェックも厳にするようホテルモスクワ参加の者共へ伝えろ。相手は恐らく想定以上の戦力を配備している可能性が高い。

それに追跡対象が味方を残して街を離れた上にわざわざ狙撃班まで街の外へ通じるルートへ配置していたという事は、郊外に何らかの活動拠点を設置している可能性が極めて高いと考えるべきだ」

「こういう時、軍で航空部隊に空からの偵察を頼めた頃が恋しくなり



ますな」

「全くだな軍曹。今では部隊を動かす度に方々の耳目を気にせねばならん」

「ところで大尉殿、そろそろ連絡会の時間です。参りましょう」  
「分かった、車を回させろ」

それにしても————アフガンの亡霊である我々をも超えるおとぎ話の怪物、か。

「そのイタミとやら……興味<sup>キョウミ</sup>が湧<sup>ユ</sup>いたぞ」

バラライカの口元が、狂犬じみた笑みに歪んだ。

Knockin' on Warfare Gate  
e 4

日が沈んだ頃合い。

悪徳の街で一等の高級ホテルの客室には不釣り合いに武骨な無線機がテーブルの上に鎮座していた。

伊丹は無線機の前まで椅子を引き摺ってくるどサリと腰を落とす。身体を脱力させ気が抜けきった溜息を盛大に吐き出した。

その姿は核戦争を阻止し方にも及ぶ異世界の兵士を殲滅させた元特殊部隊の英雄には程遠く、だらしなく着崩れされたスーツと相まってへとへとになって安アパートに帰り着いた仕事終わりの安サラリーマンにしか見えない風情である。

だがまだ今日すべき事は終わっていない事を思い出し、背筋を伸ばし直すと大型のブリーフケースに入れて持ち込んだ広帯域多目的無線機の電源を入れた。

トランシーバー型の携帯用2型よりも大きく、その分出力も大きい背負い式の携帯用1型だ。指定された周波数に合わせ、ヘッドセットを被り、通話ボタンを押し込む。

「カルデアへ。こちらアベンジャー。定時連絡を行う。感送れ」  
『アベンジャー、こちらカルデア、感良し』

伊丹達——自衛隊が用いる野外通信システムはこの街が出てくる原作の時代設定西暦2000年頃よりも後の時代2010年前半に開発された存在である。

この時代ではまだ実用化されていないタブレット端末ともネットワーク構築された野外通信システムは、当然ながら無線通話1つとってもデジタル変換による暗号化を施してやり取りを行うが、未来技術

によって内容の解読は防いでも電波の傍受自体はこの時代の無線機でも可能だろう。

だから伊丹とコールサイン・カルデア……特地派遣部隊から抽出されたこの世界に於いての現地駐留部隊司令部は決して決して技術格差に胡坐をかこうとはせず、コードネームを用い、会話も端的なやりとりに、少しでも傍受や正体の露呈を減らすべく努める。

無論ながら部屋の清掃も完了済みである。盗聴器対策

「カルデア、こちらが送ったパッケージは受け取ったか」

『アベンジャーへ。パッケージは確認済みだ。第1段階が成功したと判断し、当初の計画に従い第2段階へ移行する。こちらも味方と合流後、追加の商品を受け取り予定通り活動を継続せよ』

「了解したカルデア。こちらも予定通りこのまま活動を行います」

『各目標の調達の手筈が整うまで定時報告以外の通信は最低限のものとする。頼んだぞアベンジャー。感おわり』

司令部からの電波が途切れる。伊丹も無線機の電源を切った。大きく万歳して今日1日の疲れをほぐす。

「上は何だった?」

「このまま計画通り活動を継続しろだったさ」

伊丹の護衛として残った2人の内の1人である剣崎が持ち込んだ荷物を整理する手を止めずに尋ねた。

彼の足元には広げた防水布の上に何丁もの銃と弾薬、戦闘用装備一式が並べられている。どれが何個用意してあるのかを一目見下ろしただけで確認出来るよう、等間隔で几帳面に配置された光景は兵隊としての優秀さの表れだ。

剣崎が並べた装備……今回の作戦に伊丹達が持ち込んだ物資の半分近くを武器と弾薬が占めていた。

チエックイン前に別れまた明日合流予定のユーリ達も、今回の作戦に必要な不可欠な重要物資以外にも追加の武器弾薬を複数持つてくる事になっている。

勿論理由はある。

まず今回の作戦は人里離れた秘境や荒野ではなく文明在る地球の都市部―法と倫理よりも金と銃弾が幅を利かせるとしても文明は文明だ―での活動だ。

この時点で標準的な作戦時の個人装備、その中でも特に嵩張るポンチョスリーピングギアレーションや寝具や糧食といった野営道具は必要ない。

文明人らしく普通に適当な店に入つて水と食料を購入し、適当な宿を借りてまともなベッドで眠りにつけば良い。今回の任務ではそれが許されるのだから。

逆に野営道具分のゆとりを埋めるように多く持ち込んだのは武器とその運用に必須の弾薬類だ。武器の種類も携行性重視から、限定的ながら装甲兵器にも対抗できる代物まで多種多様。

ロアナプラの世紀末っぷりはこの作戦に関わる自衛隊側の人員全てに知れ渡っている。

国民的とまではいかないが、それでも原作は複数回アニメ化され、伊丹達が生きていた時代でも連載が続いていた人気作だ。

当然伊丹や倉田も履修済み。彼ら以外にも特に取り残された隊員には『門』崩壊の段階で掲載済みの最新話を紙媒体・電子書籍版問わず所有していた者が存在したし、中にはアニメ版を自前の趣味用PCにダウンロードして持ち込んでいた猛者すら居た。

彼らオタ自衛官によって齎された原作は当然の如く参考資料として上に提供され、結果狭間を含む幕僚幹部は全員原作履修済みの称号を開放済みである。

それはともかくマフィアからテロリスト、大国のスパイまで入り乱れて血と銃弾がたつぷり飛び交う街が舞台とあっちゃ、何時ドンパチに巻き込まれてもおかしくはなく。

時には米軍特殊部隊 v s それを追いかける女テロリスト v s 捨て駒のゴロツキ集団 v s 南米の武装勢力 v s 兵隊帰りのマフィア v s 主人公勢力が入り乱れての一大市街戦すら勃発するような世界観なのだ。一旦事が起きようものなら、身を護るにもどれだけの鉛玉が必要か分かつたもんじやない訳で……

ついでに何故か（と首を捻ったのは伊丹のみなのだが）満場一致で作戦参加を命ぜられた伊丹は、海外時代どころか自衛隊に復帰してからも、火力不足に弾不足で何度死にそうな目に遭ったか分からない身の上だったのもあり。

『人間飲まず食わずでも数日間は死なないけど、戦場じゃ飢え死ぬよりも先に武器や弾が無かつたらあつという間に殺られちゃうから……』

と、本人にとっては切実な意見の下、火力偏重の装備編成と相成つたのだった。

この度現地での実働に回されたプライス達も伊丹の具申に賛同した。剣崎達特戦群も箱根の山中で、プライスとユーリに至っては伊丹と同じ戦場で火力不足の辛さは散々味わったのだから当然と言えた。

その他には先程伊丹が使った通信機材、部屋の掃除に使った盗聴器発見器、資金調達用に用意した特産美術品の一部を部屋に持ち込んでいる。

それから、札束の小山。

「とにかくにもまず最初の課題だった街での活動費が何事も無く確保出来たのはありがたいや」

美術商イザックに売って得た代金は3分の2を司令部に帰還するユーリともう1人の特戦群隊員に預け、残り3分の1は伊丹達の現地での活動費だ。3割だけでも自衛官としての給与数年分に相当する。

特地から持ち込んだ美術品の出所はピニヤである。ゾルザル排除以降も余計な策謀を企みかねない地方の諸国へ睨みを利かせるべく、ピニヤの依頼で時折自衛隊は小規模な戦力を派遣していた。

その報酬の一部をロアナプラでの活動費用の確保に当てる事になった訳だ。このような回りくどいやり方を行わなければならないのにも理由がある。

「基地にあった現金が使えたら良かったがな」

「仕方ないよ。基地に有ったお金の殆どがこの時代にはまだ存在してないんだから、それじゃあ両替のしようがないさ」

2004年、日本銀行は紙幣はE号券と呼称される、当時最新の偽造防止技術を駆使した新たな世代の紙幣の発行を開始した。

1000円札・5000円札・1万円札、主要3種類の紙幣が一斉に更新されたその一方で先代、通称D号券と呼ばれる1984年に発行が始まった旧世代の紙幣は交換・回収を開始。発行も2007年には停止した。

E号券の流通開始から10年以上が経過した伊丹達の時代には、日本に流通する紙幣の大半がE号券に置き換わり、回収された旧紙幣は再流通しないよう粉々に裁断された上で破棄あるいはリサイクル紙に生まれ変わっている。

さてここで問題。

未来の紙幣を過去に持ち込んだ場合、その価値は幾らになる？

「あれこそまさしく『ケツを拭く紙にもなりやしねえ』ってヤツだねえ」

ドル札の小さな山を眺めながら伊丹は苦笑した。  
つまりはそういう事だった。

日本円を発行する日本銀行が価値を保証しているから紙幣は金として使えるのだ。

まだ新紙幣が出回っていない時代に持ち込んでもせいぜいが出来が良いおままごと用のオモチヤ止まりでしかない。当然両替商が受け付けてくれる筈もない。

特地とこの世界が繋がり、無人偵察機を飛ばしての情報収集によって出現した先がフィクションの世界と把握した上で世間に存在を秘匿した上で極秘裏に作戦活動を行うと決定した司令部が、作戦開始前に時代設定のズレが齎す貨幣問題へ幕僚幹部達が思い至れたのは僥倖だった（指摘されるまで気付かなかった幹部曰く、同じ地球なのだから普通に使えるだろうと思いついてしまったらしい）。

世界が違おうとも貨幣制度が定着している限り金は有るに越した事はないし、金が有ってもそれが使える金でなければやっぱり何も出来ない——

その真理と世知辛さに、TF141が壊滅して国のバックアップが受け入れられなくなってしまうからは傭兵紛いの仕事で糊口を凌いだ頃を思い出して遠い目になる伊丹だ。

「この世界の時代設定だと金の価格が俺らの時代の頃よりもずっと安  
いって聞いてたから少し不安だったけど、思ったより高く買って貰え  
ていやあ良かった良かった」

「そうなのか？」

「俺の部下に財テクが趣味のヤツが居てね。今津さんからも教えられ

ただ、第3次大戦の影響もあって金の価値が一気に上がったのはここ10年15年の事らしいよ」

「兵隊一筋で生きてきた俺には縁の無い話だな」

「海外でマカロフを追う資金稼ぎしてた頃に金を運ぶ護衛の仕事とかもしたなあ」

「おしゃべりは程々にしておけ。俺はホテル周辺の偵察に行ってくる」

剣崎と同じく装備点検を行いながらも雑談に加わっていないが、プライスが腰を上げた。

今のプライスは昼間と違いVIPを護るPMC民間軍事企業のオペレーター社員よろしくあからさまに武装した状態を解いてはいるが、よく観察してみれば上着の下に大型拳銃を突っ込んで携行しているのが分かる。ホテルのスートルームにもかかわらず、ブッシュハットは相変わらず頭に乗ったままだが。

剣崎と、2人のようにも目に見えて武装はしていないが伊丹も同様だ。伊丹はグロック18、剣崎はSFP9を携行。

2人は外から見えないよう携行する場合はウエストホルスター派ドキャリーだった。

マガジンポーチは腰の後ろ、ズボンのポケットにも予備マガジンを持ち歩き、銃だけでなくナイフも携行している。採用品の銃剣ではなく私物のより使い勝手が良いコンバットナイフだ。

それぞれ安スーツと大仰な戦闘用装備を脱ぐとバックパッカー風の格好腰もあり、通常の任務で装着し慣れたレッグホルスター大ではなくウエストホルスター元を使って上着の裾に隠し銃を帯びる姿は、任務中の特殊部隊というよりも私服刑事を思わせる風情を漂わせる。

周辺偵察に出るとプライスが告げると剣崎も続いて立ち上がった。

「じゃあ俺も同行するから伊丹は留守番よろしく」

軽い口調で言われた伊丹は椅子の上でズルツと体を傾けた。



「いやいや、俺一応護衛対象だからね？　護衛が護衛対象置いてくつてどーなのよ」

「護衛なんかいらないだろ。何たって死んでも死なない不死身の炎龍殺しの英雄様なんだからな」

「炎龍を仕留めたのはそっちの爺さんだから！　俺が倒したわけじゃないから！」

からかう口調の剣崎へプライスを指差しながら伊丹は腕を振り回して反論。呆れた顔でそのやりとりを眺めるプライス。

「それに俺だってこの目で周辺の確認はしておきたいんだからな。航空写真や車の中から表通りを走って回った位じゃ足りないしね」

如何に無人偵察機の性能が向上しても、数千メートル上から地上を見下ろすだけでは手に入らない情報はいとまがない。山岳地帯なら地下坑道、ジャングルなら大きく張り出した枝葉が折り重なって生み出される天然のカーテンという風に。

この手の入り組んだ市街地の場合は建物から張り出した屋根、それから路地裏に面する建造物の勝手口や窓などだ。隣接する建物から建物へ、空からの監視が届かない屋内を通ってしまえば航空機型の偵察機から逃れるのは容易となる。

実際、建物の中を通って追っ手を振り切るのは伊丹達も海外時代に何度か使った手だった。

……一方、追っ手は伊丹達が逃げ込んだ建物群ごと吹き飛ばす事にした。涙目になって必死に逃げる羽目になった当時の伊丹だった。

「だがこの手の偵察は基本2人一組だろ。そこの大尉殿クラスの凄腕ともなれば大丈夫なのかもしれないが、土地勘が無い作戦地域で単独行動するのは流石にリスクは高いぜ」

「そうだな。よし、んじやこうしよつか」

伊丹も椅子から立ち上がると、パンと両手を打ち合わせて提案した。

「荷物は部屋に置いて、念の為泥棒対策をしてから3人一緒に偵察に行くとしよう。ササツとここいら周辺を回ってさっさと部屋に戻ってくれば大丈夫でしょ」

それから2時間後、伊丹達は銃撃戦の真っ只中に居た。

「……………どうしてこうなった!?!」

Knockin' on Warfare Gate  
e5

〈2時間前〉

部屋に置いた荷物に防犯対策を施すと、伊丹達は徒歩でホテルの外へ繰り出した。

プライスと剣崎は大判の書籍やタブレット端末も簡単に入りそうな、大型のメッセンジャーバッグを斜め掛けに背負っている。

原作内に於いてロアナプラで一等豪華なホテルと称されたサンカ  
ン・パレス・ホテルが存在する立地とだけあつてか、ホテル周辺の区  
画は毎日撃ち合いと人死と違法取引が繰り返される悪徳の大鍋とは  
思えぬ整い具合だ。

如何にも観光客向けの店が並び、軒先を連ねる建物の窓はどれも割  
れたまま放置されているなんて事も無く、信号は動いているし街灯は  
ちゃんと表通りを照らしていて、標識や看板に至っては銃を持った暇  
人どもによって穴だらけにもされていない。

まるで何処にでもある、まともな東南アジアの観光地と大差無い光  
景だった。

それでも此処は悪徳の都。

真つ当な街並みや雰囲気を装っていても、薄皮一枚めくれば大岩の  
下の虫の群れ宜しく、多くの悪党が獲物を求めて蠢いている。

この街の地図（無人偵察機の航空写真ではなく、ホテルのフロントで手に入れたちゃんとした物だ）を手にした伊丹が、プライスと剣崎と共に通りを歩き始めてから数分と経っていない頃だった。

おもむろに横合いから伊丹達の進行方向を横切る形で早足に歩いてきた男が、伊丹とぶつかりそうになった。

「おおつと危ない」

これを伊丹は急ブレーキをかける事で寸前での衝突を回避。

そのまま何事も無く歩き去ろうとしたら、

「デメエどこ見て歩いてやがるー！」

口から発泡を飛ばしながら男が右手を伸ばし、伊丹の胸ぐらへと掴みかかってきた。

プライスと剣崎の目元がほんの僅かに細まり、絡んできたチンピラを追い払おうと前に出ようとする——が、それを伊丹が後ろ手に回した手で制止させた。

「どうもすみませんねえ。初めての土地なもんですから周りの景色に気を取られちゃってまして」

安スーツの胸元を掴みかかれながらペコペコと謝罪する伊丹。ほぼ密着状態なせいで、伊丹に絡むチンピラの左半身は伊丹の体が邪魔になってプライスと剣崎からは見えない構図だ。

「けっ、今度から気を付けるんだな」

絡んできた時の勢いから一転、チンピラは伊丹の胸ぐらからあつさ

り手を放すと、伊丹の横を通り抜けようとして……

「アバーツ!」

……伊丹とチンピラの間で突如小規模な落雷めいた閃光と破裂音が瞬き、奇声というか悲鳴を上げたチンピラは直立不動の姿勢になったかと思うと路上にバタンとぶっ倒れてしまった。

それを間近で見た筈の伊丹は特に驚いた様子はなく、代わりに目元には呆れを浮かべつつ口元は引き攣らせるという奇妙な表情で、KO状態のチンピラを見下ろした。

チンピラはというと泡を吹き、陸に打ち上げられて死にかけの魚介類みたいに痙攣を繰り返しており、プライスと剣崎から死角に至っては左手の指先など火と雷を同時に浴びてしまったかのように焦げて爛れた惨状と化してすらいる。

成り行きを見守っていたプライスと剣崎は戸惑い混じりの驚きに目を瞬かせた。

「あーあーあー、やっぱりスリ目当てだったかー」

「オイオイ伊丹よ。今のつてもしかしてアレか?」

「そ。今回の任務前にテユカとレレイとロウリイが用意してくれた御守りが発動したみたい」

伊丹は上着の右ポケットから小さな布袋を2人へ見えるように取り出した。

見た目とデザインは日本の御守りに近い。だが表面に縫い込まれているのは、日本語ではなく特地の複雑な紋様だった。布袋の中には魔法細工にも使われる水晶の破片が封じ込まれている。

当然、よくある神社で売っているような土産物扱いの御守りとは全くの別物である。

平たく言えば<sup>ロウリイ</sup>巫神の呪詛と<sup>レレイ</sup>魔導師の魔法と<sup>テユカ</sup>エルフの精霊魔法が念入りに込められたマジ物の魔導具なのだ。

ちなみにデザイン案はアルヌスに残って子育て真っ只中の栗林（現地住民の間では栗林姓が定着してしまっている）ので日本帰還までは元の姓を継続）だ。安産祈願の御守りを参考にしたそう。

「愛されてるねえお前さん」

「いやああはは……」

愉快そうにやつく剣崎へ後頭部を搔きながら伊丹は苦笑で誤魔化した。

複数用意して貰ったこれを、伊丹はスリやかっぱらいに狙われそうなポケットや財布に仕込んでおいた。当然プライスと剣崎にも配つてある。

トラブルが発生した時に伊丹を守ろうとした仲間に対して誤作動を起こさないよう、服を掴まれた程度では反応しないよう設定はしてある。御守りの効果が発動するのは盗人等が悪意を以って持ち物を盗み取ろうとポケット内へ侵入を試みた場合に限られるが、発動した時の効果は凄まじい。

むしろ、というか明らかにオーバーキルなレベルだった。これで携帯している伊丹自身には何の害も及ぼさないのだから便利なものだ。

これと同種の防犯装置を部屋に纏めて置いてきた荷物にも仕掛けがある。

こちらは御守り型よりも一回り大きいお札に近いデザインで、車一台分ぐらいのサイズまでカバーできる範囲型だ。効果範囲の拡大に比例して発動時に不届き者へ襲いかかる呪詛やら魔法やらも強化されているとの事。

……御守り型でこれなら、部屋の荷物に手を出した泥棒がいたら哀れ爆発四散してネギト口めいたものとなってしまうっちゃうのでは？

伊丹は恐れ戦いた。

「さっさとこの場を離れるぞ。今はどうやら……少しばかり目立つたからな」

プライスの言う通り、今の騒ぎを聞きつけた多くの野次馬が、伊丹達とその足元でピクピクと痙攣する哀れなスリの間に見線を行ったり来たりさせていた。

尤も野次馬の半数は伊丹達が周囲を見回すなり焦った表情で顔を逸らしたり、そそくさと立ち去るそぶりを見せていたが。

伊丹達をカモと思つて狙っていたスリの同類だろう。もし先に動いていたらあそこに転がる哀れなマヌケは自分だったと恐れ戦いているのがありありと感じ取れた。

(ま、しばらくの間此処で活動する事を考えると、今のが噂として広がってくれた方がありがたいっちゃありがたいか)

「で、ここに転がつてる哀れな泥棒は放つといていいのか?」

「良いんじゃない? 悪所街と一緒にこの住民が処理してくれるでしょ」

「分かっちゃいたけどよ伊丹、お前さん普段はやる気ないオタク感丸出しなのに、冷めてる時はとことん冷めてるよなあ」

「今回のこの人の場合は自業自得だからねえ」

アルカイツクスマイルの下で冷めた思考を巡らせながら、伊丹達もその場から悠々と歩き去った。

そして放置されたスリは伊丹の予想通り、周囲の野次馬ハイエナによって適切に処理されたのだった。

〈1時間前〉

逃走ルートに使えそうな細い路地を頭に叩き込みつつ数ブロックも歩くと街の雰囲気は一変した。

如何にもな観光客向けの土産物屋やレストランからガラリと変わり、今やけばけばしいネオンサインを掲げた店ばかりが並ぶ歓楽街の真っ只中へと、伊丹達は足を踏み入れていた。

観光客目当てのホテル周辺を餌場とする盗人連中が路地裏や物陰で目立たないよう息を潜めて獲物を待ち受けるドブネズミなら、歓楽街に屯している連中は飢えた野犬だった。

男も居る。女も居る。どちらも大なり小なり欲望の光で目をぎらつかせていた。

明らかにこの街にやってきたばかりなのが丸分かりの、冴えない顔をした東洋人こと伊丹を獲物と見定めた目だった。そんな目で伊丹達を見ない者も居るには居るが、大抵は地面に座り込んだ酔っ払いかトリップ中の中毒者だ。

後者の殆どは肌を露出させた格好で艶やかさをアピールして回っている。売春婦なのは明らかだった。そんな女達の近くで目を光らせている強面はポン引きか。

「ねえお兄さん達。私と楽しい時間を過ごしてかない？」

「生憎だけど悪いねえ、そういうのは嫁で満足してるし、子供も生まれただばっかりなんだ俺」

欲望と剣呑が濃密に入り混じった周囲の気配を感じ取りながら、しかし伊丹達は平然と歩みを進めていく。

伊丹と剣崎は適当に相手をしてはあっさりを受け流し、プライスだけは如何にも気難しい頑固爺の気配を振りまいて近付かせないという違いはあれど、荒んだ空気への動揺はちつとも見られないし纏わりついてくる売春婦のあしらい方も手慣れたもの。



何故かと理由を聞かれたならば、主に伊丹と剣崎はこう答えるだろう。

「だって、悪所街と比べたらずっと大人しいし（な）」

文明差のせいで滅多に風呂に入らない者特有の体臭、それを誤魔化す為の過剰な香水の匂い、処理されない汚物や臓物の臭いがミックスされた悪所街一帯に漂う強烈な臭気。

堂々と路上で売り買いされる奴隷の存在に、下着どころか服も纏わず姿を晒し、路地や開けっ放しにされた売春宿の部屋から喘ぎ声を響かせる様々通帯・亜人問わずな人種の売春婦。

ゴミと一緒に死体が転がって何日も放置されているならまだマシで、カウンターの裏に切り落とした5本指の手足を無造作に転がしたま何食わぬ顔で謎の肉を売りつける肉屋なんかも悪所街では珍しくない。

住民も住民で獣系から虫系まで様々な亜人のゴロツキが悪所街には集まっていた。肉食獣そのもののあの雰囲気、あの眼光、そして悪所街のあの雰囲気を知り、そして馴染んでしまえば誰だって肝も据わろうというもの。

あそこと比べれば混沌としたロアナプラの歓楽街も、煌びやかなネオンが目にも毒な点を除けば嗅覚的にも聴覚的にもずっと大人しく伊丹達には感じられた。だから気分も落ち着いていられた。

同じスラムの定義も土地世界や文明の差異で圧倒的に違いが出るといふ、分かり易い具体例であった。

「お前さんの場合は嫁さんどころか年端もいかない女の子から姐さん女房のエルフや神様まで愛人にしてるんだ、そりゃ娼婦ぐらいじゃ興味湧かねえよな」

「うっせ！ 剣崎だって聞いてるぞ。ミザリイって翼人のお姉さんと

最近良い仲間だったって?」

「それに関しちや機密事項だ——おい伊丹」

女達の誘惑を上手くあしらっている今度は男達が動く番だ。

伊丹達を前後から挟み込むように、派手なアロハや汚れたシャツを着た如何にも凶相の集団が行く手を遮ろうとする。

男達の多くはズボンのベルト部分に安物の拳銃を挟んでいたりと、既に剥き身のナイフを握っていた。あからさまな追い剥ぎ共だ。

勿論、伊丹達も気付いている。連中が行動を始める前から一際強い剣呑な殺気を追い剥ぎ達から感じ取っていたのだ。

「俺が前に出る」

「後ろは任せろ」

剣崎が伊丹の前へ移動しプライスは後方へ。

斜め掛けに背負っていたメッセンジャーバッグの収納部を胸元へ持つていき、中へと手を突っ込みながらフラップを開いた。中身が追い剥ぎ共へとよく見えるように。

前後から迫っていた集団が一斉に動きを止めた。全員の顔に精神的動揺による脂汗が浮かんでいた。

「……………」

追い剥ぎ連中は無言で道を譲った。空いた道を伊丹達は警戒を緩めぬまま、堂々と通過していった。

この一部始終をすわ修羅場かと見物する気満々だった売春婦やポン引き達は、予想外の展開に顔を見合わせて首をかしげたのだった。

そんな伊丹達だったが、中には彼らの方から回避を試みる相手も存在した。

「おっと2人ともストップ」

「今度は何だ。また追いつきが検問張って重機関銃乗つけた武装車両テクニカルで待ち構えてたのか？」

「似たようなもんさ。地元警察だよ」

伊丹が曲がろうとした角の先にロアナプラ市警のパトカーが停まっていた。

それだけならともかく、問題はパトカーの持ち主である警官が、ポン引きかそれとも薬の売人かは知らないが明らかにカタギではない男から紙幣の束を取り上げている点。

一瞬だけ角から覗いたプライスがそれを見て不快気に鼻を鳴らした。

伊丹達からロアナプラの警察はこういうものかと事前に原作知識を知らされていたつもりだが、改めて見せつけられると酸いも甘いも噛み分けた老兵であってもやはり思う所はある様子。

「どうやら熱心に仕事中的のようだな」

「ユーリ達を付け回してたパトカーの事もあるし、路地を通ってやり過ごそうか」

司令部と無線交信を行った際に別行動したユーリ達がパトカーに尾行され、前哨監視線配置の隊員がパトカーを潰した事も伊丹は報告を受けていた。

接触を避けるべく一行は裏路地へ。ペンライトで地図を確認した

伊丹はある事に気付く。

「何だよ、この路地ホテルで貰った地図には載ってないじゃないか」

観光客向けの縮尺が大雑把な地図では細い裏路地の存在が省略されてしまっている事など珍しくない。それにホテルで手に入れた方の地図は大雑把ではあっても、通りやランドマークの名前は現地の言語と英語が併記されているから十分役には立っている。

観光客向け地図をしまい、航空写真をベースにした方の地図を取り出して改めて現在地を確認。

こう来て此処を曲がったから今の地点は……そう呟きながら航空写真上を伊丹の指が滑る。

「この路地はしばらく一本道が続いて海岸線の道路近くに出るみたいだ。そこを抜けたらUターンして今日はホテルに戻ろうか」

裏通りともなると街灯の類は無いに等しい。暗い小道を早足に進み、時折野犬じみた鋭い気配が向けられるのを感じると荷物の中身を見せつけてのガンつけで威圧して追い払いながら、結構な距離を歩く事しばし。

伊丹達はヤシの木と読めないせいで内容が分からない広告看板が並ぶ、広い幹線道路へと辿り着いた。歓楽街に漂っていた退廃のごった煮じみた臭いから一転、南国版の草藪が発する何処か甘ったるい緑臭さと、海から流れてくる潮の香りが入り混じった空気が伊丹達の全身を撫でる。

「ふう、やっと出れた。ここらで何か目印になりそうなものは……」

伊丹は独りごちながらぐるりと周囲を見回して——不意に固まった。

現在位置から8時方向、派手なネオンの看板を掲げた、古さを感じさせる面構えの割に壁面の状態は妙に真新しい、3階建ての長方形の建物が伊丹の目に飛び込んできた。

駐車場代わりの店の前の空間には既に何台もの車が無造作に停められている。

看板に描かれた店の名前は——『YELLOW FLAG』

——銃撃戦に巻き込まれる45分前の出来事だ。

Knockin' on Warfare Gate  
e6

〈45分前〉

気付いたら、地雷原のど真ん中に入り込んでしまっていたかのよう  
な心持ちだった。

「おおう」

正しく原作そのままの建物の前に立っている事を遅ればせながら  
自覚した伊丹の口から思わず奇声が漏れた。

傑作の聖地へはるばるやってきた熱烈なファン宜しく感動を覚え  
る反面、原作に於けるイエローフラッグの立ち位置ドンパチ被害担当を思い出した伊丹  
は口元を引き攣らせる。

そうでなくても伊丹自身、本来はここへ訪れるつもりなどこれっぽ  
ちも無かったのだ。原作内で土地や通りの名称は登場しても具体的  
な街一帯の地図は描かれていなかった事、ここまで来るのに使った精  
緻な航空写真も住所や建物の詳細な名前までは判別出来なかった事  
が重なった結果だった。

伊丹もオタクとしては聖地巡礼に理解はあるし興味もあるが、それ  
が原作内で起こるトラブルの大半がこの店の発端で、しかもトラブル  
の延長で定期的に店が焦土と化するような場所となると話は別なわけ  
で。

「見覚えのある店だな」

実は司令部同様、任務前にきっちり原作履修済みの——いかにもな古強者の老兵が、真剣な顔で漫画の単行本を熟読する姿は中々にシユールだった——プライスが看板を見上げながら呟いた。剣崎もそれに同意した。

「なあ伊丹よ。この店って確か原作だと——」

「ストップ皆まで言わないでくれ言いたい事は分かってるから。よし2人共転進して元来た道に戻るぞー」

妙に早口で且つ平坦な口調で回れ右する伊丹。  
が。

「げっ」

店の前を通る幹線道路を、街方面から伊丹達の方へ走って来る見覚えのある車両に気付いた伊丹は呻き声を上げた。

それはまぎれもなくヤ……ではなく、ゴロツキから金を巻き上げていた汚職警官のパトカーだった。舌打ちも漏れそうになる。

「マズいな」

距離的にはまだ遠い。だがイエローフラッグのネオンや街灯の下へのこのこと出てきてしまった伊丹達の人影を捉えるには十分な近さではある。

其処に誰かが居る、と存在を認識された状態からの急な動きは人に強い印象を残す。このまま慌てて先程の裏路地へ戻ろうと試みれば、それは不審な動きとしてパトカーの警官達の目を惹くだろう。

ならばこの状況で最も自然な行動は何かといえば——

「こうなったら酒場にやってきた人間らしくこのまま店に入ってやり

過ごそう」

「そうした方が良さそうだ」

酒盛りに期待を弾ませて入店する3人組といったていを装いながら伊丹はイエローフラッグの入り口をくぐった。

それが功を奏したのか、パトカーはそのままイエローフラッグの前を通過して走り去ったのだった。

伊丹達が足を踏み入れるなり視線の集中砲火を浴びた。

店内の様子を視界に収めた伊丹は、即座に前言撤回して店の外に戻りたくなった。

(うわあ分かっちゃいたけどおっかねえ)

ある原作キャラ曰く悪の吹き溜まりだったか。

まさしく的を射た評価だと納得したくなる、そんなおっかない顔や雰囲気やポンポンと漂わせる先客で店内は犇めいていた。白人、黒人、アジア系、南米系、中東系、ユダヤ系、まるで地球に存在する人種の見本市だ。

しかもほぼ全員が脇やテーブルの上に物騒な武器を手元に置いた上で今店に入ってきたばかりの伊丹達を注視しているのだから、居心地の悪さは一入ひとしほである。

(こういう場所苦手なんだけどなあ、俺。いやこの店に入って隠れようって言ったのも俺だけ)



……民兵から正規軍の機甲部隊に大国諜報機関の非合法部隊、果ては異世界の万の軍勢まで向こうに回して生き延びるところか壊滅させてきた存在がこの程度のチンピラ程度にビビるなよ。そう言いたげな剣崎からの視線には気付かなかつたふりをした。

入口に立ち尽くしていても事態は解決しない。はあ、と伊丹は溜息ひとつ。覚悟を決め、開き直って店内を見渡しながら足を進める。

丸テーブルの席はどれも埋まっている。入り口から見て真正面、奥のカウンター席だけ空いているようだ。必然、周囲の客からの視線を浴びながら店のど真ん中を突っ切らねばならない。

四方八方から興味と威嚇の視線に晒されてもプライスの表情は微動だにしない。剣崎はうつすらと挑戦的な笑みを浮かべながら、伊丹の後に続く。

酒瓶やグラス片手の客達の目に伊丹達はどうか映っているのだろうか？

くたびれた着こなしのスーツ姿をした冴えないカタギにしか見えない東洋人。歳を喰ってはいるが、まるで使い込まれた銃剣を思わせる古強者の気配を隠さない髭面の白人。スーツの男と同じ東洋系だが纏う雰囲気は老兵に近い、細身ながら鍛え抜かれた体つきの青年。

外から来た人物なのは間違いないだろう。纏っている匂いがどう見ても外側の人間のそれだ。

悪徳の街に相応しい悪人には見えない。白人とスーツを着ていない東洋人は大きめのリュックを肩にかけてはいるが、バックパッカーとも思えない。安旅を続ける観光客ならもつと草臥れているし、盛り場に来たならもつと少し浮かれた雰囲気をしているだろうに。

雰囲気と立ち振る舞いからして兵隊軍人関係だろうか？ そんな2人をしよぼくれたスーツの東洋人が引き連れている。

結論——金で雇った護衛を引き連れる外から来た3流ビジネススマン。最終的に客の男達はそう推測するに至った。

彼らの推測はほぼ的を得ていた。伊丹達は確かにそのような役柄を上から与えられ、このロアナプラへと送り込まれたのだから。ただし、客達が訝えないビジネスマンと判断した存在伊丹こそ事が荒立った時最も敵に回してはならない危険人物本人は否定である点までは、荒事を稼業にする男達も流石に見抜く事は出来なかつたのだが。

「注文は」

カウンター前の椅子に腰を下ろすなり、客商売の人間とは思えない位に不愛想な声が伊丹達に問いかけた。

「えーつとそうだねえ。とりあえず生……じゃなくてビールで」

「俺もビールをくれ」

「スタウトを。ポイントで頼む。それからフィッシュ&チップスを」

日本人と英国紳士全開のオーダーに対してバーテンことバオは鼻で笑う仕草を見せた。

現地では初の生原作キャラを前に密かににテンションが上がる伊丹だったが、顔に出すまいと必死に努力する。

椅子に腰かける際に足がカウンターに触れた。単なる木板にしては妙に重く硬い足応えを感じた。

同じくカウンターの異様な頑丈さを感じ取った剣崎が声に出さず、隣に座った伊丹に対し眉を持ち上げて小さく驚きを示した。伊丹は小さく肩を竦める事で答えた。

(アニメじゃ50口径も耐えられる装甲板が仕込んであるって言うってたなあ)

いざという時はカウンターの裏に隠れよう。伊丹は密かに決意した。

「生憎そんなしやれたツマミなんぞどこじや出してねえよ。そんなに食いたきやロンドンの下町にでも行きな」

「……………」

数十秒後、たつぷり汗をかいた小型のビール瓶が2本と、ビールというよりコーラか濃く煮出した豆茶を思わせる色合いのスタウトが入ったグラスがカウンターに置かれた。ビールの銘柄はシンハーという地元タでは一般的な銘柄だ。

伊丹とその左右にそれぞれ腰かけた剣崎とプライスが各々注文した酒を手取る。全員利き手は空けておく。

「んじやまとりあえず乾杯といこうか——乾杯」

「チアーズ乾杯」

ビール瓶とグラスが澄んだ音を立ててぶつかり合い、3人は中身を一齐に呷った。

銀座との『門』が消失してから久方ぶりに飲む地球の酒とだけあって、然程酒を嗜まない伊丹ですら美味そうに異国の酒を喉へ流し込んでいく。

勿論、アルコールが一気に回らないよう調節するのは忘れない。場に溶け込む為に酒を口にしてはいるが一応今も任務中なのだから。

満足げな唸りを耳が拾う。中身を半分ほど飲み干した伊丹が顔を向けてみると、彼よりもハイペースで焦げ茶色の酒を飲み干したプラスチックが空になったパイントグラスをカウンターの上へ戻すところだった。

ちなみに1パイントは英国規格で568ミリである。それをプラスチックは一息に飲み干したどころか、

「マスター、おかわりだ」

即座に追加注文を行うプライスの眉尻は普段よりも心持ち下に垂れてすらいた。よっぽど故郷の酒を飲めた事が嬉しい様子。

（日本から特地に持ち込んでたお酒ってほぼ日本のお酒ばかりだったもんなあ）

ウイスキーやら日本酒やら、酒の種類自体はビール以外にも幾種類かアルヌスの酒場や協力者の商人に卸したりしていたのだが、スタウトの様な国外産の酒は検疫の兼ね合いもあつて殆ど持ち込まれていなかった。

一応日本国内生産のスタウトも存在はしているのだが、試してみた英国紳士曰くイギリス産とは微妙に違うとかなんとか。

ロシア人のユーリとニコライもウォッカに関しては同様の意見を述べている。

普段は厳めしく眉根を寄せたプライスが目尻を緩ませるという滅多に見られない姿に伊丹もニヤニヤと口元を緩ませていると、2杯目を待っている間に伊丹からの視線に気付いて首を傾げたプライスと視線がぶつかった。瞬時にプライスの顔が何時もの仏頂面に戻った。

「……何か言いたい事でも？」

「いつやあべつつにいく？」

ユーリとニコライにも見せてやりたかった。時と場所が許せばスマホで撮つてたのに……等と伊丹は内心ちよつと残念に思う。

そんな事を考えていると、不意に人が近付いてくる気配を伊丹は背中を感じ取った。プライスと剣崎も同様だ。

規模は5〜6人。カウンターの店主パオへの注文ではなさそうだ。針で突かれるような、自分達を注視している独特の感覚がする。

(どうする?)

(相手の対応待ちで、でもなるべく穏便に済ませる方向で。そっちもどうしようもなくなつた時以外大人しくしてくれよ?)

(了解了解)

アイコンタクトで方針を決定。ビール瓶とグラスを手に酒を楽しむポーズを取つたまま、相手が声をかけてくるまで気付かないフリをする。

「楽しんでいる所を邪魔するがちよいと俺達も混ぜてもらえるかな、お兄さんがた」

「へっ?」

声を掛けられてようやく気付いたといった態度で伊丹は振り返つた。

お客さんはノーネクタイのスーツで統一した白人の団体だった。着崩している者も多いが、スーツ自体の仕立ては店内の他の客と比べると1ランクは高そうに思える。

TF141時代にかつて言葉を交わした―その数週間後に彼らは死んだ―欧州圏出身の戦友達との記憶を参考に、人種的特徴と言語英語に含まれる発音の訛りから彼らはイタリア系と伊丹は推測。

当然ながら全員が銃を隠し持っているのも、立ち振る舞いのシルエットや微妙なバランスの崩れ具合から伊丹は見抜いていた。

「いやな、昼間に大層な車に乗ったアジア人のビジネスマンが商談相手を探してこの街にやってきたって聞きつけたんだが、そいつはもしかしてアンタらの事じゃねえかと思って声を掛けさせてもらったんだが、違うかい?」

「ああ。それなら自分達の事で合ってますけど」

集團のボス格だろう、代表して話しかけてきた白ルーツの男が伊丹とプライスの間に体を割り込ませた。プライスと剣崎の利き手が、席に着いてからも背負ったままだったバッグの収納部へとさりげなく近付いた。

白スーツの男の手が馴れ馴れしく伊丹の肩に回され、にこやかさのすぐ下に御馳走を前に舌なめずりする野犬じみた欲望が隠し切れていない下卑た笑顔と共に、男はもう片方の手で以って名刺を差し出してきた。

名刺には英語・イタリア語・タイ語で以ってこう書いてある——  
—グイスコンティ・フーズ。

間近で覗き込む格好になった白スーツの男の瞳が宿す感情から、伊丹の事を護衛だけは立派な生つちよろいカモだと見くびっているのがハッキリと見て取れた。

「俺達の店組織は食い物以外にもウオルマートも真つ青なぐらい色んな商品を抱つてるんだが、どうだい？

是非アンタらの取引候補としてアンタらが何を欲しくて何で支払つてくれるのか、酒飲みついでに具体的な内容を俺達に聞かせちゃあくれないか？」

ジャックポット  
大当たり。

伊丹は素直に名刺を受け取ると、にこやかに笑い返しながら言った。

それは海老で大鯛を釣り上げる事に見事成功した釣り人を彷彿とさせる勝利の笑みだった。

「勿論喜んで。マスター！ この人達全員にこっち持ちで一杯ご馳走してあげて。何なら瓶びんごとでも良いよー！」

〈5分前〉

その常連客の男女がイエローフラッグを訪れて何時ものカウンター席へ向かうと、見覚えのある顔ぶれがやけに騒がしくしながらカウンターの前で酒をカツ喰らっていた。

「——だから、な？ 故郷の味は同じ故郷で仕入れた材料以外じゃダメなんだって！ アンタも分かるだろ？」

「分かります分かります。料理人やってた俺の部下古田も、現地特の食材で故郷の味を再現できないか何度も試してましたけど、中々思うような味に再現出来なくて苦労してますもん」

「そう、そうなんだよ！ その点俺達の店は違う！ 故郷シチリアの食材を直輸入して調理するのもイタリアから連れてきた本場の料理人だ！」

そこいらの屋台の安飯なんかメじゃねえ、この街で本物のイタリア料理を食べるのは俺達ヴィスコンティ・フーズの店だけなのさ！ そうだろお前ら！」

『Certo』  
その通り！

「ベニーノ達のヤツ、妙にご機嫌じゃねえか。おいバオ、どうしたんだよアイツら」

ホットパンツに黒のタンクトップ、女豹のように均整が取れたプロポーションを強調する服装に右肩のトライバルタトゥーと両脇のホ

ルスターにぶら下げた2丁拳銃が合わさり、危険な色気を醸し出す女ガンマンが気安い口調で店主に尋ねた。

「外からこの街に取引相手を探してきたとかいうビジネスマンが来ててな。そいつに連中が絡みに行ったら、払いは自分持ちで好きに飲んでいいってベニーノ達に酒を振る舞ってからずつとあんな調子よ」  
「へえ、そいつは物好きなお大尽も居たもんだぜ」

バオは女ガンマンの連れである男にも話を向けた。彼は白のワイシャツにネクタイという、ロアナプラではほぼ見かけない日本のサラリーマン式の着こなしをしている。

「その外から来たお客だけどなロック、どうやらそいつ、お前さんと同じ日本人らしいぜ」

「そうなのか？」

ロック、と呼ばれた白シャツネクタイの青年は驚いた顔で酒盛り中のイタリア人集団へ視線をやった。

イタリアの家庭料理について熱弁を振るうシチリア・マフィアの向こう側にチラリと見えた顔はロックよりも幾らか年上のようなだったが間違いない、日本人だ。

以前働いていた総合商社時代取引先の都合で足を運んだ3流企業、そこで見かけた窓際部署の社員を思い出す、冴えないサラリーマンの見本のような顔をしていた。

「聞いた話じゃ今ニホンは不景気らしいが、ニホン人はそんなのお構いなしにどんな土地にでも商売しにやって来るよなあ。お前もそう思うだろ、ロック？」

「ノーコメントだ、レヴィ」

言いながらグラスのウイスキーを呷って余計な質問をシャットア



ウトした時だ。

「あん？ 何の音だありや？」

「車の音だろ」

店の外から車のエンジンやブレーキの制動音が店内まで聞こえてきた。

店の前は幹線道路が走っているし、イエローフラッグの利用客は基本飲酒運転なんて当たり前だ。酔っ払った余り運転をミスったり必要も無く急制動を掛けたりとやらかす運転手も然程珍しくはない。

「いやそうなんだけどよ。何か嫌な気配が……」

ロックと同じくウイスキーを口元に運んでいたレヴィが目を細めた。

直後だった。突然の叫び声が店中に響き渡った。有無を言わせぬ緊迫した警告の叫び。

声の出所はイタリア人に囲まれていた、ロックが冴えないサラリーマンと評したあの日本人の男だった。

「全員今すぐ伏せろ！」

——次の瞬間、イエローフラッグが吹き飛んだ。

奢った酒で今や立派な酔いどれと化したイタリアンマフィア<sup>シチリアンマフィア</sup>に取り囲まれてなお、伊丹の感覚は店の前での異変を敏感に察知していた。

それは伊丹耀司個人が持つ逃走に特化した素質と、追いつ追われつしながら世界を股にかけての激戦を幾重にも繰り返した経験値が掛け合わさった果てに生まれた、自身や周囲へ危害を及ぼす存在へ対する一種の超感覚とも言えた。

駐車場に使われているイエローフラッグ前の空間から聞こえてくる、車が勢い良く走り込んでくる駆動音。強くブレーキを踏んで急制動を掛けた時の耳障りなスキル音とタイヤが地面を削る音。

反射的に、だがさりげなく、伊丹は首を巡らせて入口の方へ視線を向ける。

ライトを消さずエンジンもかけたままの車から飛び出す運転手の姿が窓から見えた。

一般市民からゴロツキまで、この街を訪れてから見かけた様々な住民とも違う身なりをしていた。

街中に不釣り合いなジャングル迷彩服。顔を隠すように巻かれたアフガンストール<sup>アフガンストール</sup>。スリングでぶら下げたAK47。そんな輩が尻に帆掛けてその場から逃げ出していく。

その姿を認識した瞬間、伊丹の背筋を電撃が貫き、体中が瞬時に泡立った。目を見開き、口の中は瞬時に水気を失い、血液中にアドレナリンが爆発的に迸るのを伊丹は知覚した。

戦場で何度も鍛えられ研ぎ澄まされた生存本能が伊丹の体の主導

権を瞬時に奪い取り、その場での最適解を導き出し、即座に実行に移す。

すなわち——周囲へ警告を発すると同時に少しでも爆心地から遠ざかり、頑丈で手近な遮蔽物の陰に伏せる事。

「全員今すぐ伏せろ！」

叫びながら伊丹は椅子を蹴り、目の前のバーカウンター上へ身を投げ出した。

同時に彼の手はすぐ目の前に居た白スーツのイタリア人ことベニーノの胸ぐらを引っ掴んでいて、伊丹の肉体諸共イタリア人もまたカウンター裏へ投げ込まれる格好となった。

やはりと言うべきだろう、伊丹の警告に瞬時に反応したのはプライスと剣崎だ。

2人も表情を一変させると手にしていた酒を放り出してカウンター上を転がり、内側へ落ちるとそのまま床に伏せた状態で耳を塞ぎ、口を開けて身構える。爆発の圧力と衝撃波による体内への影響を最小限に抑える為の対ショック姿勢。

先んじて隠れた3人は、十数メートルはあるだろうカウンターの端で酒を飲んでいた若い男女の客も彼らに続いて（正確には、ホットパンツ姿の女が夏ルックのサラリーマン風の男を無理矢理引きずり込む形で）カウンター裏に隠れた事までは気付かなかった。

彼ら以外に酒場に居た客の大半は伊丹の警告への反応が遅れたか、警告の意味する所すら理解出来なかった。その中にはベニーノの取り巻きも含まれていた。

——伊丹の警告からきっかり3秒後、イエローフラッグの店の

前で爆発が起きた。  
大爆発だった。

爆発はまず店の正面入り口と道路に面する側の全ての窓を粉碎した。

超音速の爆風とそれに乗って飛散した建築物の破片がイエローフラッグの店内を一瞬で蹂躪した。男女問わず全ての席に居た客が餌食となり、特に窓や入口近くの席に布陣していた者に至っては人としての原形すら失った。

衝撃波はカウンター裏に逃げ込んだ伊丹達にも襲い掛かった。

カウンターに仕込まれた装甲板越しに、まるで見えない巨人からボール代わりに蹴飛ばされたかのような衝撃が全身を貫く。カウンター上の空間を爆風と即席の榴散弾と化したガラスや木材の破片が通過し、棚に並べられた何百本という酒瓶が一斉に砕け、酒瓶の破片が伏せた伊丹達へ雹の嵐が如く降り注いだ。

急激な気圧変化に晒された鼓膜が痛む。口の中が埃っぽくイガイガとする。装甲板越しに伝播した衝撃波で全身が痺れたように痛んだ。

それでも伊丹とその仲間達はモロに巻き込まれた他の客達と違い、五体満足で爆発を凌ぐ事に成功していた。

「爺さんセイバー剣崎無事か!？」

「ああ、どうにかな」

「こっちも無事だ。だが酒が台無しだ」

若干耳が馬鹿になった影響で吠えるように伊丹が安否を訊ねると、

返事はすぐに返ってきた。3人とも耳を押さえてふらつきそうになる頭を少しでもシャンとさせようとしきりに頭を振った。

「何なんだ今の爆発は」

「多分自動車爆弾だ。店の前に車を停めて逃げ出してく奴が見えたよ」

「み、耳が……頭が……体中痛えよおママン」

「あ、良かった生きてた」

伊丹が咄嗟にカウンター裏へ投げ込んだベニーノも生きていた。両耳ごと頭を押さえて呻いているが死にはしないだろう。多分。

流石にベニーノの取り巻きがどうなったのまでは分からない。真っ先に危険を察知した伊丹でも、文字通り目の前に居た白スーツのイタリア人を庇うので精一杯だったのだ。

カウンターを挟んだ向こう側に倒れている筈だが、呻き声や身動きする音といった生存を示す兆候は伝わってこない。

カウンターの奥の方では、バオも頭をふらつかせつつ体を起こそうとしているのが見えた。

こちらは最初からカウンター内に居たお陰で爆発の被害を免れたようだ——尤も五体満足なバオの体とは正反対に、彼の大事な店は無惨な廃墟も同然の有様と化してしまったが。

爆発の残響が消える頃になると、打って変わって店内のあちらこちらから上がる苦悶の呻きが聞こえてきた。その大部分がF<sup>放送禁止用語</sup>単語なのに伊丹は土地柄を感じた。

「ドンパチの舞台にやよく使われてる店とは聞いてたが、爆弾テロの標的にまでされるなんざ聞いてないぜ伊丹よ」

「奇遇だね、俺も今知ったところだよ」

「自動車爆弾を置いていった運転手は見なかったのか？」

「それがさ聞いてくれよ爺さん——」

疑問を発したプライスへ伊丹が返そうとした言葉は連続した破裂音と悲鳴によつて断ち切られた。

入り口……元入り口があつた方向から複数の足音と気配。カチャカチャガシヤガシヤという、兵隊なら腐る程聞いてきた金属音もセツトだ。

伊丹は中腰になると、そつと目元の高さをカウンターの上まで引き上げた。

あまりの爆発の威力に消滅した扉や窓があつた空間からズカズカと店内に踏み込んでくる人影が、同じく爆発で砕け散つた店の照明の代わりに外から差し込む月光を背に浮かび上がっていた。

その数、最低でも10名以上。店の外にも複数のシルエツト。エンジン音も増えていたので爆発直後に車で乗りつけてきたのだろう。

勿論全員が武装していた。AKを筆頭に旧ソ連系の銃火器を装備しているだけでなく、クーフィーヤを顔に巻き付けている点も共通していた。

そして店内へ侵入してきた男達の1人が高らかにこう叫んだのを伊丹達はハツキリと耳にしたのだつた。

「アッラーフアクバル神は偉大なり！ 墮落した不信神者共に予言者の裁きを！」

「うわあ」

—— どうやら俺達はベツタバタな宗教テロに巻き込まれたらしい——

—— そう理解した伊丹達の口から漏れた呻き声は、それはそれは心底げんなりした響きを帯びていた。

現実逃避したくなつたが現実はノンストップだ。

店内のそこかしこで銃声が轟く度に呻き声が1つ、また1つと消えていく。店内の客もほぼ全員拳銃等で武装していた筈だが、自動車爆弾のショックが甚大過ぎた。事態を把握して抵抗に動くまで回復するよりも早く、客達は処刑同然に殺されていった。

犠牲者が増える度、銃声の出所とカウンターとの距離も着実に縮んでいく。

実行犯ことイスラム過激派の襲撃者どもの目的は間違いなく店内にいる客全員の皆殺しだ。ジュエノサイド

自動車爆弾だけに飽き足らず、相当規模の戦力を投入して1人1人処刑して回るとは、作戦を立てた首謀者はこのよっぽどイエローフラッグとその利用客が気に入らないらしい。

「で、どうするよ」

「どうするもこうするも、ただジツと殺されるのを待つわけにいかないでしょ」

1度目を瞑り、溜息を吐き出してから再び瞼を開いた伊丹の眼光が酷く冷たいものへと変貌した。

冴えないサラリーマン風から敵対者にとっての死神へ。

伊丹の変化が意味する所を理解したプライスと剣崎も表情と気配を鍛え抜かれた特殊部隊員へと切り替えると、ずっと背負っていたリュックへ手を突っ込み、中身を掴みだす。

息を潜めながらカウンター裏に常備しているショットガンを手にしたところだったバオが、プライスと剣崎が取り出した代物を見るなり目を丸くした。

「おい、何だあそりゃ?」

プライスの手にはSIG・MCXラトラーが。

劍崎の手にはH&K・MP7が握られていた。

どちらもドット<sup>光学照準器</sup>サイトに小型のフォアグリップと最低限ながらカスタマイズもされている。リュックの別ポケットに収納していたサイレンサーも取り出して、プライスと劍崎はそれぞれの銃口に捻じ込んだ。

MP7は2000年頃に初期型がドイツ軍に採用されたばかり、MCXに至っては2015年に発表される、この<sup>世界</sup>時代には未だ存在しない文字通りの未来銃だ。

未来の技術と素材と研究が導き出した新時代の武器は、ともすれば陳腐なSFで宇宙人が使う光線銃よろしく、武器が身近な過去の時代の人々ほど奇異なデザインに映るのだろう。

「お前のも借りるぞ」

「あっちよつと待てオイ!？」

「イタミ、お前はこれを使え」

一瞬呆然としたバオの手からプライスはショットガンを取り上げると、そのまま伊丹に押し付けた。

護衛対象としてのアピールの為に伊丹だけ長物を隠し持つ為のバッグを持ち歩けず、携帯武器は拳銃とナイフだけだった彼にとつてこれは有難い。

「レミントンのM1100か。悪くないね」

固定式ストックのフルサイズモデルショットガンで、ポンプアクション特有のチューブ式マガジンが銃口近くまで延びている場合装弾数は8発。年季が入っているがしっかりと整備されているのが触っただけで伝わってくる。

交戦距離が短い屋内戦で正しく使えば、散弾をばら撒くショットガンは下手なアサルトライフルよりも有効だ。



「コイツも持っていいけ」

続いて形状が違う2種類の鉄の筒も1つずつ受け取る。

スタングレネード スモークグレネード  
閃光手榴弾と発煙弾だ。

個人防衛火器

PDWと同じくバッグに入れて携行していたものである。特にスタングレネードは店内の照明が破壊され外からの月明かりが頼りの薄暗いこの場では覷面な効果が期待出来た。

「スタンで目を潰してから2人は制圧射撃。その間に俺が回り込んで横から叩くから、そつから先はアドリブを効かせながら一気に前線を押し上げて、敵戦力を排除もしくは撃退の方向でよろしく」

カウンターへ迫る殺気の壁は一層距離を狭めている。  
潮時だ。

「そんじゃあま、俺達も状況を開始しようか」

伊丹が告げる。MCXラトラーとMP7の安全装置が外され、初弾が装填される音が返答だった。

「スタンバイ……」

仲間へギリギリ聞こえる音量で合図を口ずさみながら、伊丹はカウンターの手端へ。

「スタンバイ……」

プライスと剣崎は右手に銃を握りつつ、左手に持ったスタングレネードの点火レバーを固定したまま安全ピンを引き抜く。

最早個々の気配と殺意が感じ取れるまでに敵集団は伊丹達へ迫っていた。対照的に伊丹達は限りなく気配を消して、敵の動きを窺う。

カウンターを包囲した殺気が一気に膨れ上がった。  
察知し、反応し、先に行動に映ったのは伊丹達が先だった。

「GO!!」

伊丹の号令を受け、カウンター裏に隠れたままプライスと剣崎が下手投げにスタングレネードを投じた。

点火レバーが弾ける。撃針が雷管を叩き、通常の手榴弾よりも起爆までが短縮された信管を作動させる。

破壊よりも人体への影響に特化した閃光と轟音がイエローフラッグの店内を瞬間的に塗り潰した。

——— 攻守が切り替わる。

狩る物が狩られる側へ。異界の神にすら認められた戦場の神狼が牙を剥く。

会合の後は何時も大なり小なり雰囲気張り詰めさせている。

だが今回に限っては、ホテルモスクワの首領であり我らが指揮官でもあるバラライカが纏う気配の剣呑さは殊更だと、彼女の副官として付き従うボリスは思案する。

それも先程まで行われていた連絡会——ホテルモスクワ・三合イタリアンマフィア会・コーサノストラ・南米カルテル、ロアナプラを仕切る主要組織の長が直接顔を合わせての会合。

その場で流れた内容を考えれば当然だとも思った。副官として連絡会に同席したボリスですら、告げられた情報を聞かされた瞬間は己の表情が僅かながらにでも強張るのを自覚したのだから。

この度の連絡会が開かれた元々の議題は最近ロアナプラに出回るようになった麻薬について。

麻薬の存在が問題なのではない。問題なのはホテルモスクワも、三合会も、イタリア人もラテン系も心当たりのない、各組織への手回しを無視してばら撒いている存在が問題なのだ。

それも混ぜ物だらけの低級品がグラム単位だったならばまだしも、キロ単位で高純度の上物が、末端のそのまた末端に過ぎない売人の——それも複数人——手元に出回っているとかなれば、それは最早大問題と言えるだろう。

需要と供給のバランスが整っていてこそ市場は安定した利益を商品と商う組織へ齎してくれるのであり、過剰な供給は市場を混乱させ

商い元が本来得る筈の利益を損なうだけなのだから。

何者かがバラ撒いた麻薬によつて既に各組織にも損失が生じつつある。

『早速だが三合会の方で探りを入れてみたんだが、我々を介さずに勝手に麻薬売買薬屋を始めた連中の商品の出所が判明した』

真つ先にそう切り出したのは三合会ロアナプラ支部を仕切る大哥哥チャン・ウアイサンたる張維新だつた。

耳の早さと情報の出所を訝しんだコーサノストラ代表のロニー・ザ・ジョーズが耳障りなジョーク交じりに訝しむ一幕があつたが、記憶する価値もないと脳裏から切り捨て、張が齎した情報を再生する。

張は、バラライカを名指しした上でこう告げたのだ。

『アフガニスタンだよ、バラライカ。』

我々黄金夜会を介する事無く今この街に流れ込んでいる麻薬は黄金の三日月地帯、砂と荒野とムジャヒディン聖の国で生産された代物なのさ』

アフガニスタン。

ホテルモスクワ……否、バラライカやボリス達アフガン帰還兵にとつての因縁の地。軍を追われ破落戸に堕ちても尚、彼女達の魂を縛り続けるかつての戦場。

アフガニスタン、パキスタン、イラン、それぞれの国境が接する地域は黄金の三日月地帯と称される、ミャンマー奥地はメコン川沿いに広がる悪名高い黄金の三角地帯に匹敵する麻薬密造の一大地域だ。

出所を聞かされた当初、バラライカが真つ先に極寒の視線を向けた先はロニーだった。

アフガニスタン産の麻薬の半分以上は周辺国で消費され、残りの主な消費先は欧州だ。欧州に出回る麻薬の大半をアフガニスタン産が占めるとされている。

陸路・海路を経て運ばれたアフガン産の麻薬を扱う欧州系組織は数多い。その中にはロシアンマフィアは勿論、イタリアンマフィアも含まれていた。(一方、黄金の三角地帯産麻薬は三合会が取り扱っている)。

特にロニー達シチリアマフィアは最近になってイスラム系住民が大半を占めるアルバニア・マフィアとも関係を深めている。その事をバラライカも把握していたが故の反応だった。

だがバラライカの反応を見た張は首を横に振って彼女を止めに入る。

『おっと、早合点しなさんな火傷顔。フライフェイス 生憎この件に関しちやロニー達はシロだ。』

でなけりや間抜け面晒してノコノコ会合になんか出席しちやいないさ。だろう?』

『当つたり前だろうが張。高級な品物つてのはそれに釣り合う格の間が捌いてこそ相応の値札が着くつてもんだ。』

誰とも知れねえ、商品とテメエの糞との見分けもつかないようなチンピラにアタツシケース一杯の上物を進呈するなんざ、それこそシベリアの田舎でウオツカ漬けになるだけじゃ飽き足らず辺鄙な砂漠でアヘンにも漬かつてきたそのロシア人共の方がやりかねないつてのが俺の意見だが、その姐さんはどう思うよ?』

アフガニスタン侵攻以後、地元の利とアメリカから新型SAMと携帯式対空兵器といった最新兵器の支援を受けたムジャヒディン相手の終わらぬ戦いに疲弊したアフガン帰還兵の中には、現地産のアヘンに手を出してしまい麻薬中毒者として撤退以降も苦しむ者も少なからず出現した。

その中にはバラライカの部下だった者も、いた。  
今はもう、いない。バラライカ自ら囚われた魂を解放してやった。

『……………中々面白い意見じゃないか。なあ、ロニー』

『よせロニー。折角人が潔白だと言ってやってるんだから無闇に煽らないでくれ』

ともかく、と話を進めようと試みる張。

『売人共から聞き出した話じゃあ、ブツを流した連中はこの街に以前からシノギを置く主だった中東系組織の構成員とも違うアラブ人を引き連れていたそうだ。』

ま、尤もそいつらは自分のオフクロの顔と尻の区別もつかないような連中ばかりだから、どこまで当てになるかは怪しいもんだが…………』

一旦区切り、顔を上げた張は更なる弁舌を振るっていく。

『ただ近頃はフィリピンやインドネシアに多く存在するイスラム信者の中でも物騒な連中が集まって作った過激派組織が大分きな臭くなっている。』

特にムジャヒディン上がり<sup>ムジャヒディン</sup>が結成したアブ・サヤフ<sup>アブ・サヤフ</sup>なんぞは98年に当局によって指導者を失ってから、本来の主張だったイスラム社会の独立運動から身代金目当ての誘拐や強盗稼業に精を出すゴロツキ共になりつつある有様だ』

『民衆の解放なんて大義を掲げた者共が実際にはそこいらの犯罪者以上のロクデナシだった事など珍しくないのは歴史が証明している。』

コロンビア革命軍<sup>コロンビア革命軍</sup>の連中が組んでいたFARCも、その収入源は誘拐の身代金とコカイン畑の番犬よ』

『ま、もっと遡れば国そのものがアヘン畑を運営してあっちこっちに売り捌いてた時代だってあったわけだからな。酒と一緒に麻薬<sup>ヤク</sup>も人間の歴史とは切っても切り離せない、長年のお友達というわけさ』

『張よ、歴史の講釈はここまでにして話を戻してくれねえか？ 俺達は立派な大人のビジネスマンだ、エレメンタリー小学校のガキじゃない』

『失敬ロニー、確かにその通りだ。』

ともかくフィリピンに独自のイスラム派の聖地を生み出そうと活動していたアブ・サヤフは指導者を失って以降、構成員の多くは別組織に鞍替えし、残りの連中も大儀を失った犯罪者の集団になり果てた。

だが、テロリスト時代のネットワーク自体まで失ったわけじゃない。』

グラスに注いだ酒を呷り、舌と喉を潤す張。

『麻薬取引を活動の主体に切り替えた連中が頼ったのが、亡き指導者が過去に加わり組織立ち上げの後ろ盾にもなってくれたムジャヒディンだかタリバンだかを名乗るアフガニスタンの聖戦士どもだ。』

それ以上の詳しい情報はまだ調べ切れていないが、連中見た目はターバン頭の民兵揃いではあるが中には他国の王族や石油王の跡取りといった金もコネもある狂信者も加わっていたのが厄介なところだね』

『ハッ！ 俺には理解出来ないね。物好きな連中も居たもんだ』

『チェ・ゲバラの御同類みたいなもんさ。ともかくアブ・サヤフの設立者のようにアフガンで聖戦士の仲間入りをしたそいつらはやがてソ連軍撤退後、母国に戻った連中の多くが自前の組織の旗揚げや構築したコネクションを使って志を共にする同胞達の支援を始めた。』

武器・資金・人員・情報——そのネットワークは急速に拡大を続けている。地続きのヨーロッパや以前からイスラム教徒が多かったここ東南アジアどころか、海の向こうのアメリカ美国にまで浸透しつつあるらしいが……流石にこれは今は関係無いな。

要点はだ。今回我々の目を掻い潜ってアフガン産のヤクをこの街に持ち込んだ最有力容疑者は街の外からやってきた聖戦主義者どもって事になる』

真正面からバラライカとロニーを……いや、バラライカを確りと見据えながら、話を締めくくりに入った。

『我々連絡会は連携を取りながら仁義を通さず市場を荒らす外部勢力に対し然るべき対応を取る——』

宜しいかな、御二方？』

『ごっちはオーケイだ。張、おめえの話に乗ってやる。』

コーサノストラ  
ウチのルートはコーラン狂いの連中が捌いてるのは違う真つ当な卸元から仕入れてるんだ。パレルモとバチカンとマリア様には俺達の商売の邪魔をしてきたターバン野郎の首を献上してやらなきやな』

『珍しくやる気を見せてくれて嬉しいよ。バラライカ、アンタもそれで良いな？』

『……ええ。だが分かっていると思うが——』

『我々是我々のやり方でやらせてもらう、だろ？ 今回は相手が相手だ、この街ごと燃やし尽くそうとするんでもなければやり方は任せよう。オタクならそいつらの相手も手慣れたものだろうからな』

『だが気を付けろ。そいつらはもしかすると、こちらが想定している以上に物騒なやり方で噛みついてくるかもしれないぞ？』

車の防弾ガラスへ顔を向けたバラライカは外の街並みを眺めているように見えるが、実際の彼女の瞳はもつと遠い場所……砂塵の過去



へ向けられているのだとボリスには手に取るように理解出来た。

わざわざ指摘するような野暮などせず、黙って控えているとボリスの胸元で不意に電子音が鳴り響いた。音の出所、折り畳み式の携帯電話を取り出す。

「私だ——何だと？ 詳しい状況は………分かった。大尉殿には私から伝えておく。引き続き情報収集を」

電話を切る。顔を上げると上官の瞳が窓の外からボリスへと対象を転じていた。

「喫緊の事態でも起きたのか軍曹」

「市警の無線の監視班からの連絡です。約15分前、イエローフラッグ前にて自動車爆弾が爆発後、複数名の武装集団によって店に居た客達が襲撃されたそうです。例によって店主は無傷で生存が確認されているようですが」

「毎度の事だ。バオには同情するがな……しかし、自動車爆弾か。あの酒場にしては珍しいな。襲撃犯についての情報は？」

「は。バオの証言によれば襲撃犯の規模は最低でも20名以上。うち半数以上が爆発を生き延びた客の反撃を受け死亡、駆け付けた市警も死体を確認しておりますので正しい情報かと。

ただその襲撃者の死体なのですが、ある共通した特徴が見受けられているようです」

「特徴？」

「はい」

右額から左顎にかけて斜めに走る傷跡が目立つ厳めしい顔をより険しく歪ませながら、ボリスは上官へ報告する。

「襲撃者どもは全員頭部にクーフィーヤを巻き付けて顔を隠しており、バオによれば自動車爆弾を起爆後、襲撃者は『神は偉大なり』と

叫びながら店内へ踏み込んで銃を撃ち始めた——と」  
「……………」

バラライカの目元もまたボリスと同じように、或いはボリスよりも更に険しく、冷え冷えとした鋭さを湛える程に細められた。

連絡会でアフガン産の麻薬が議題に上がった直後にこれだ。イエローフラッグでの出来事をこの街の恒例行事、と流すにしては些かキナ臭過ぎた。

更にボリスはこうも付け加える。

「また現場検証中の官警からの報告では、襲撃犯の死体の中には中東系も複数含まれている、とも」

「…………今走っている場所からイエローフラッグは然程離れていなかったな」

「我々もイエローフラッグへ？」

「バオからより詳しい情報を聞き出しておきたい。たまには私自らバオに顔を見せておいても損はないでしょうし、ね？」

「ばっ、びっ、みみみミスバラライカ!？」

焦土と化した店の前や店内の惨状と比較して、奇妙な程原形を保っているカウンターの上面にて火が点いた煙草を銜えながら黄昏ていたイエローフラッグの店主たるバオは、調度品や酒瓶や人の残骸を乗り越えて近付いてくるバラライカの姿を捉えるなり裏返った悲鳴を上げた。

器用にも腰掛けた体勢のまま、カウンターの上で数センチばかり跳び上がるというリアクションのおまけつきである。

張やロニー、それからラグーンの連中といった極一部を除けば、バラライカの姿を前にした住民は大概パンツの中にデカイ物を今にも産み出しかねない姿を晒してしまう。

稼業と評判上仕方ないとはいえよくもまあここまで恐れてくれるものだ。バラライカの口元に薄い苦笑が浮かんだ。

「きよきよきよ今日は一体どういった御用事で!？」

「そこまで畏まらなくてもいいわよバオ。たまたま近くを通りがかつたから、ついでにちよつと話を聞きに来ただけだもの」

「そ、そうかい」

最初はガチガチに背筋を伸ばして固まっていたバオだったが、バラライカがそういうとすぐに肩の力を抜き、安堵の溜息を紫煙と共に吐き出した。

「今回も災難だったわねバオ。これで店が吹き飛んだのは何回目かしら？」

「もう数えたくもねえよ。一体どこに店の修理代請求すりやいいんだよチキシヨウ」

ガツクリと肩を落としながら愚痴るバオ。

これが他のならず者や街の住民なら、未だ体中からあらゆる液体を垂れ流さんばかりに震えあがっているだろう。

元南ベトナム軍人としてベトナム戦争を生き延び、ゴロツキ御用達の酒場の店主になってからも事あるごとに銃撃戦に巻き込まれては悪態を吐きつつ五体満足で生き延びてきたのは伊達ではない。そんなバオの金玉はそこいらの裏稼業よりも格段にデカかった。

「んで、聞きたい話ってのはやつぱり襲ってきたターバン連中の事についてですかい？」

「話が早いのは好きよ、バオ。それ以外にも幾つか聞いて起きた事も出来たけど、ね」

僅かに緩んだ表情を鋭いものへと引き締め直したバラライカは振り返り、改めて店内を見回す。

修羅場の跡地と化した店内は窓の全てを失って尚、潮風に混じって血と火薬の臭いが色濃く漂っていた。

そんな中をロアナプラ市警の警官達が現場写真を撮ったり、現場に残された死体を調べている。店の外も相当数の警官が動員され、大々的な規制線も張られていた。

……一見らしく警察としての業務に励んでいるが、実際には大雑把に記録だけは取ったら資料はそのまま倉庫送りにされた挙句、捜査本部すら立ち上げずさっさと未解決事件扱いで捜査は終了となるのが

オチだろうが。

何故ならこの街の警官達も立派な悪党であり、その主な業務は法と正義の執行ではなく余所へ知られないよう街の犯罪を隠蔽し、賄賂で自分達の財布を膨らませる事なのだから。

こうした現場の保全や証拠集めを行っているのも、街を仕切る各組織へおイタをやらかした馬鹿野郎への手掛かりを売りつける為だ。

今回の襲撃でもコーサノストラといった組織の構成員に被害が出ている。ロアナプラでは組織に何らかの被害が生じた場合に限れば、むしろ警官よりも犯罪者の方が事件解決に熱心なのは何の皮肉か。

それでもパトウムワン国家警察庁にロアナプラの実態を知られないようにするのには役立つていたし、最近市警に導入されたネットワークインフラも色々利用価値がある。

ともかく事件現場と化したイエローフラッグはこの店にしては非常に珍しく、今やゴロツキの代わりに多くの制服警官が死体の間を右往左往している有様だ。

バラライカは近くに転がる死体を検視中の制服警官の肩越しに見下ろす。

客ではなく、襲撃犯の死体だ。派手なアロハだの着崩したスーツだのではなく戦闘服姿にクーフイーヤを顔に巻き付けているから一目で見分けがつく。頭巾で隠れた額部分が血で染まっていた。

警官がクーフイーヤに手をかけて剥ぎ取れば、現れた顔は若い中東系だった。額にぼつかりと開いた50センチ硬貨大の穴……

いや違う。バラライカは目を細めた。  
2つだった。

高速の銃弾が2発、極めて正確に集弾した事で破壊された着弾部に1つの大きな穴が生じているように見えたのだ。

死体に刻まれた弾痕はその2つだけ——しかも1体だけではない。

他に転がっている死体、それも頭巾を頭に巻いた聖戦士もどきに限  
り、頭部や胴体の致命部バイタルパートのみを正確に撃ち抜かれたモノが幾つも、店  
内だけでなく店の外にも転がっているのだ。

偶然の産物ではない。とびつきりのプロフェッショナルの仕事だ。

「まず聞かせて欲しいのは襲撃当時の状況と何が起きたのかよ。我々  
の知りたい事に貴方がちゃんと答えてくれたら、今回の店の修理費は  
こちらで引き受けてあげても構わないわ」

「そいつはありがてえ。別に誰からも隠し立てしろとも言われてねえ  
し、アンタになら遠慮なく喋らせて—もらうさ」

言いながらバオはカウンターの内側に手を突っ込み、奇跡的に生き  
残っていた酒瓶とグラスを引っ張り出すと手酌で中身を呷った。

本来は氷や水で割って飲む類の酒を彼は咽る事無く一気に流し込  
んだ。酒の力を借りなければやってられない気分なのは容易に察し  
が付く。

酒精混じりの吐息を深く漏らしてから、バオは新しい煙草を取り出  
しつつ当時の出来事を語り始める。

「ありやあらグーンの水兵共が店にやってきてから数分と経たずに起  
きやがったんだが——……」

〈約30分前〉

スタングレネードが炸裂した。

視覚と聴覚を麻痺させる閃光と轟音がイエローフラッグの店内を塗り潰した。予め身構えていた伊丹達は、爆音の合間から店内へ踏み込んだ聖戦士達の悲鳴を感じ取った。

『GO!』

伊丹の合図を受けたプライスと剣崎が、それぞれの獲物を構えて素早くカウンター裏から立ち上がった。

伸ばしたストックを肩付け。銃を支える両腕に籠める力は強過ぎず、インファイトスタイルのボクサーの様に脇を閉め、照準具と銃口が完全に地面と平行になる様に射撃体勢。

スタングレネードの直撃を食らい顔を押しさえて悶絶するターバン頭の男達。照準はのたうつ頭。ドットサイトの光点が頭部に重なる瞬間、引き金に添えられた指が自動的に銃本体を揺らさぬ必要最低限の力で絞られる。

発砲。ダブルタップ。弾丸がサイレンサーによって延ばされた銃口から、排莖口からは役目を終えた薬莖が飛び出し、狙い通りに命中し、破壊された頭部から生命の血潮が散る。その一部始終がまるでスローモーションのように2人の兵士の目に映る。

押し殺された銃声も彼らには妙にゆっくりと間延びして聞こえていた。

身体は何千回と重ねた訓練と幾度もの実戦によって刻み込まれた経験通りに動き続ける。急所に2発、確実に息の根を止める為の射撃を実行しては次の標的<sup>敵</sup>を狙い、撃つ。これを繰り返す。

5秒近く経った頃、プライスと剣崎の時間間隔は急速に元の速度へと復帰した。

たった5秒。それだけの間に2人は10人近い聖戦士を射殺していた。

店内に突入した聖戦士の大半が何が起きたか分からない間に死ん

だ。

だが全員がやられた訳ではなかった。突入口である店の元入口、スタングレネードの爆心地から遠い位置に居た数名は距離による威力減衰で動揺の効果が薄れるのが早かったのもあり、先を進んでいた仲間が水の中でシャンパンを抜いたような音が鳴ったかと思うとバタバタ倒れていくのに気付くと、慌てて近くの柱や引っ繰り返ったテールの陰へと逃げ込んだ。

咄嗟の行動だったがそこまでは正解だった。  
だが。

『ちよつとゴメンよー！』

『のわあ!?!』

スタングレネードの炸裂と同時に、寸での所をやはりカウンター裏に逃げ込み自動車爆弾から生き延びていた男女の頭上を跨いでカウンターを抜け出し、壁沿いに聖戦士の側面へ回り込んでいた3人目の存在を彼らは見落としていた。

伊丹は無警告でショットガンをぶつ放した。

借り物のセミオートショットガンが火を噴く。接近戦で連射される散弾の嵐は下手なフルオートの火力をも上回る。

伊丹は4発発砲。プライストと剣崎に応戦しようとしていた聖戦士の死体が新たに4体。最高の戦果だ。

『あqwse d r f t g y f u j i h a i ー！』

『うおつとー！』

側面から殺気。早口に伊丹には理解出来ない喚き声を発しながら、新たに窓を飛び越えて聖戦士がAKを撃ちながら乱入してきた。

伊丹は斜め前に転がった。接敵した距離があまりに近かったので、乱射されるAKの銃身の下を潜り抜ける形になった。

頭上を何発もの銃弾が通過していく衝撃波を伊丹は感じた。聖戦士から見て右隣へ転がった伊丹へ振り向けられるAK。



『悪いがアラビア語はサツパリなんだ!』

転がった勢いに乗って勢い良く起き上がった伊丹もレミントン・M 1100の銃口を振った。

ただし、狙った先はAKの銃口に対してだ。

鋭く、コンパクトな円を描く軌道で下から上へ。自衛隊員の誰もが訓練課程で仕込まれる銃剣道のテクニツクの応用。

銃身同士がぶつかり合ったかと思うと吸いつくように離れないショットガンの銃口に振り回されるがまま、AKの銃口は射手の意思を無視してあらぬ方向へと誘導され、発射された残りの銃弾はボロボロの床や天井に新たな弾痕を刻んでやがて沈黙した。聖戦士が驚きに目を見開く。

流れるような動きで踏み込んだ伊丹が続いて繰り出した、教範通りのストックの一撃が無防備な顔を砕いた。

クーフイーヤごと顔を真っ赤に染めた聖戦士の体が、飛び越えたばかりの窓の残骸を超えて外へと逆戻りした。

殴り倒した聖戦士を見送った伊丹の瞳が店の外の様子を捉える。

自動車爆弾が生み出したクレーターや店に来た客の足だっただろう車両の残骸を挟み、店の前を走る幹線道路上に停車した複数台の車両の前に未だ10名近い聖戦士が並んでいるのが見えた。中にはAKのみならず、車載型の機関銃を店へ向けている者すら複数存在している。

その中の1人と伊丹の目が合った。

『やっべ』  
『?????』

これは伊丹にも理解出来た——『撃て』だ。

咄嗟に窓と窓の間の壁へ滑り込み、身を低くする。

一斉射撃が始まったのはその直後だった。伊丹の頭の上を更なる銃弾の雨が絶え間なく通過していく。窓の残骸が最早原形無き窓の破片へと砕け散っていった。

そんな状況下で伊丹はこう思った。

（敵さん達、最低限訓練は詰んでいるみたいだけど練度はまだまだみたいだな）

半ば床に横たわった姿勢で、1メートル近く上の空間を通り過ぎていく機関銃の曳光弾の軌跡を観察しながらの感想だった。

ぶつ放すのに意識を割かれ過ぎ、連射の反動制御と照準の修正が間に合っていない。冷静さを保てていない、新兵や経験不足の兵によく見られるミスだ。そのミスのお陰で伊丹は命拾いしていた。

——まあこの程度、装甲車や戦闘への機関砲や、ロケット弾と迫撃砲弾の雨あられに比べればまだ可愛いものだ。

『スモーク！』

店内側から聞き慣れた声があった。

白い尾を曳いた鉄の筒が店の外へと転がり、そこから大量の白煙が広がっていく。カウンターを出て前線を押し上げに移ったプライスが投じたスモークグレネードだった。

伊丹も老兵に続いて彼からM1100と共に手渡されたスモークグレネードのピンを抜き、窓から投じる。白煙の濃度と反比例し、的を見失った聖戦士達の銃撃が次第に薄れていく。

『無事か？ 伊丹よう』

『何とか生きてるよ、セイバー<sup>剣崎</sup>』

新たに破片を被って安スーツを汚した以外は無傷だった伊丹は、剣崎の呼びかけに軽い口調で返した。

『煙が俺達を隠している間に押し込むぞ』  
『オツケーイ』

最早窓枠すら失った空間から、MCXラトラーを構えた姿勢で店の外へ出ていくプライスに伊丹も続く。

本性を露わにした兵士達の姿が白煙の中に消えていく。再び生じるサイレンサー越しの銃声とショットガンの砲声。パシユトー語の悲鳴が上がっては途切れる。

エンジンの唸り声が上がったかと思うと急速に遠ざかって行った。潮風が白煙を散らす頃には、店の前に立っている者——生きている者は伊丹とプライスと剣崎の3人だけだった。聖戦士が乗ってきた車が1台消え、残りは乗ってきた者達が全滅した為に道路上に打ち捨てられていた。

『チツ、1台逃したか』

仕留めた死体に囲まれながら老兵が舌打ちするのを、啞然呆然とした顔でカウンター裏から頭だけ覗かせていたバオは耳にした。

終わってみれば伊丹達が反撃に移ってから3分と過ぎていなかった。

その一部始終を、バオは最前列で余す事無く目の当たりにしたのである。

Knockin' on Warfare Gate  
e10

——語り終えたバオはグラスの残りの酒を一息に飲み干すと、もう1度大きく酒臭い息を絞り出した。

「ここまでが俺が見た一部始終になる。」

いきなり店がオクラホマの連邦ビルかザイールのアメリカ大使館みたいになぶつ飛んだかと思っただかと思っただか、カウンターでイタリヤ人に絡まれてた一見客が次の瞬間にはイラン大使館に乗り込んで人質を取り返してきた連中に早変わりしてあつという間にターバン野郎どもを皆殺しにしちまったときたもんだ。

メイド絡みの時も大概だったが、どうして俺の店にはいかれた連中しか集まらねえのかねえ……」

愚痴りながら追加の酒をグラスに注ごうと酒瓶を傾けるバオ。瓶からは数敵の雫しか零れなかった。ガツクリとバオの肩が落ちた。

当時の証言を聞き終えたバラライカはお構いなしに詳細な情報を求め尋問に移った。

「幾つか質問するわよバオ。まず襲撃者どもを撃退した一見客の特徴について教えて頂戴」

「数は3人。イギリス系と東洋系が2人、どっちも日本人みたいだったな。1人がスーツを着てて、残りの2人は旅行客みたいな格好をしてたが、店に入ってきた時の立ち振る舞いはスーツを着てる奴の護衛って印象だったぜ」

「顔や年齢などの特徴も教えて」

「あの中で一番歳を喰ったのはイギリス人だったな。入ってくるなリスタウトとフィツシュ&チップスなんぞ頼んできやがったからありや間違いないイギリス人だ。」

髭面で、酒を飲み始めてからもずっと不愛想に眉間に皺を寄せてやがったよ。店ん中に入ってもブツシュハットを被ったままだったのは、ありやハゲでも隠してたのかねえ？」

「ヤポンスキー日本人2人は？」

「スーツの野郎も護衛の方も髪は短かったな。護衛は鷹みたいに目が鋭くて、イギリス人もそうだったんだがシンビハーを飲みながら、ずっと背負ってたリュックを手放さないで監視カメラみたいルに店の客の動きに目を光らせてやがったぜ」

元軍人でゴロツキ相手の酒場を長年続けながら数十回に渡るドンパチを今まで生き延びてきたバオの観察眼は並大抵ではない。

接客をこなしながらも、バオもまた注意対象と判断した客への用心は怠っていなかったという訳だ。

……それでも限界はあるのだが。

「でもって3人目のスーツを着てた日本人についてなんだが……」

そこで不意にバオは閉口した。どう言ったらいいものか、表現に悩んでいる素振りだった。

「最初の印象は、この街に最初に来た頃のラグーン商会のロツクみてえなとつぽい場違いな兄ちゃんみたいな感じだったな。

確か護衛みたいな2人から『イタミ』とか呼ばれてたぜ」

バオが出した名前に、バラライカの眉がほんの僅かに揺れた。

「どつからどう見ても街の外から来たカタギ、それも何時上司から解雇通知を渡されてもおかしくなさそうな3流のセールスマンみたいな雰囲気よ。」

そんな奴がいきなり店に入ってきたもんだから周囲からは浮いてやがったぜ。実際そいつをカモだと思つたロニーの所の人間が真つ先に絡みにかかつてたしな。

おまけに絡まれた方も間拔けな顔してビビり倒すどころか、嬉々としてタダ酒を振る舞い始めるときやがった。そんな時はカタギの割にや妙に肝つ玉が据わつてるのか、それとも底抜けのお人好しとしか思わなかつたんだが……」

だけどな、と顔を上げたバオは、ロアナプラでは泣く子も黙るロシアンマフィアの女首魁を怖れを感じさせぬ真摯な表情で以つて見据えた。

「自動車爆弾に真つ先に気付いたのはそのスーツの兄ちゃんだったし、誰よりも、護衛役の2人よりも早く警告を飛ばして爆発前に目の前に居たロニーの所の人間ごとカウンターに隠れたのもそいつだった。」

何より印象に残つてるのは、今そこら中に転がってる宗教狂いのアホンダラ連中が店の中に雪崩れ込んできて、息がある客共をご丁寧にとどめを刺して回り始めた時にそいつが浮かべた目だ」

「目、だど？」

バラライカの肩が微かに揺れた。何処か擲揄うようできて実際は確認に近い、妙に確信が籠もった問いかけを、彼女はバオへと投げかけた。

「もしかしてそれは、まるで死神の様な目をしていなかった？」

見開かれた目が、バオの返答だった。

「ああそうだ。それこそ最後の審判の死神の空つぽな眼窩の中に目ん玉が嵌め込まれてたら、まさにあんな目をしてたんじゃねえかってぐらいに怖気が走る目になりやがった。

その結果がこれだよ。そいつありユックから見た事も無い銃を引つ張り出した護衛共々、俺のショットガンを使って俺の店を吹き飛ばした馬鹿タレ共をあっという間に皆殺しにしちまいやがったのさ。あの2丁拳銃トゥーハンドですら出遅れちまった位の早業よ。

……なあミス・バラライカ。つかぬ事を訊ねさせてもらうが、もしかしてアンタもそいつら事何か知ってるのかい？」

バオもまた、確信を秘めた確認をバラライカへと投じた。

例えば爆発前にカウンター内に放り込まれて命拾いしたイタリアンファイアの構成員であるベニーノだって、何らかの情報を持った上で3人組へちよつかいをかけていたではないか。

昼間は店の準備をしていたバオの下に情報が届いていなかっただけで、件の3人組は昼の時点で既に住民の話題となる何らかを行っていた。それは既にバラライカやベニーノといった多数の構成員や情報源を抱える大手組織の人間も把握していた——そうバオは推測したのだ。

バラライカは誤魔化さず、正直に教えてやる事にした。

「少々目立つ真似をしていたから噂になっていたというだけで、我々も彼らについての情報は殆ど把握していないわ。彼らが今回の騒ぎに関わっていた事も今知ったのなもの。

だが成程、確かにこれは見事なまでに優秀な兵士共のやり方だ」

聖戦士共の死体の多くは、バオのショットガンを使ったと思われるものの以外は急所への2発を除き傷はほぼ最小限のものばかり。

完全武装した10名以上のテロリスト相手に、ロアナプラでこれだけ綺麗な仕事を実行できる住民は限りなく少ないだろう。バラライ

カの部下ですら、ここまで徹底できるかどうか。

また店内の床には死体やそこから零れたモノだけでなく、発射済みの空薬莖などもまた大量に散乱している。その中には安全ピンと点火レバーが外れ本体に炸裂の名残の煤が纏わりついた、使用済みのスタングレネードも存在していた。

白線チョークで枠取られた聖戦士どもの死体を含めたそれらの痕跡を眺めれば、バラライカの脳裏には3人組がどのように反撃へ転じたのかが目に浮かぶ。

(カウンターを包囲しつつあった聖戦士の一団が回避できないタイミングまで十分に引き付けたところで目を潰し、護衛2人が前衛を掃討後バオのショットガンを持ったもう1人が側面へ回り込んで後衛を潰し、互いを援護し合いながら相手が体勢を立て直す前に迅速に前線を押し上げ一気呵成に殲滅——といったところか)

教範のお手本のような手際だ。加えて正確なダブルタップにスタングレネード——単なる兵隊ではない、それこそ特殊部隊クラスなければお目に掛からない組み合わせと、それぞれの効力を最大限まで引き出す巧みな技能。

「成程——成程」

葉巻を取り出し口下へ運ぶ。すかさず流れるようにライターを差し出したボリスが葉巻へ火を点ける。

その際持ち上げられた右手によって覆い隠される塩梅になったバラライカの口元が、獲物を前にした肉食獣の笑みを作った事に気付いたのは、傍らに立つボリスだけだった。



「それからこいつは手掛かりになるか分かんないんだがよ」

おもむろに給仕服のポケットを漁ったバオが何かを取り出した。ボリスが前に出てバオがボリスの出した手に何かを落とす。危険ではないと判断したボリスがバラライカの傍へ戻りそれを見せる。

「薬莖だった。2種類の空薬莖。」

バラライカもそれを摘み上げてしげしげと眺めた。そして眉を顰めた。

危険ではないが、異様な代物だった。

「4. 6×30に……300AAC・BLACKOUTだと？」

「そのような弾種は自分も聞いた事ありませんが……」

薬莖の底部に掘られた刻印を読み上げながら訝しむバラライカとボリスに、バオも首肯で以って彼女の困惑に同意を示した。

薬莖の刻印は口径と弾種を判別する為に必ず刻まれるものだが、2種類の銃弾に刻まれた弾種は全く聞き覚えが無かった。

「そいつは護衛の2人が使ってた銃の薬莖だ。弾薬もそうだが連中が使ってた銃も初めて見る代物だったぜ。」

護衛の日本人が使ってたのはウージーよかミニウージーに似ちやいたが、アレよりもずっとスマートでMP5みたいな伸び縮みするストックまで内蔵してて、おまけに小型のスコープまで取り付けてやがった。

使ってる弾はその小さい方だ。マガジンもウージーやイングラムみたいに真つすぐじゃなくてMP5とかのマガジンみたいに少し曲がってたな。

撃ってるのを近くで見た限りじゃ、精度や反動もウージーやイングラムなんぞとは比べ物にならない位上等そうだったのは覚えてるぜ」「だろっな」

ウージーやイングラムよりもずっと射撃精度に優れた、特殊部隊御用達のMP5クラスでなければあれ程着弾が狭いダブルタップなど不可能だ。

「イギリス人の方はあれだ、オリンピックアームズが出してたM16のピストルモデルとMP5KのPDWモデルがヤツて出来た子供みたいな代物だよ。そっちもしつかりスコープドットサイトとフォアグリップをくっつけてあつたな。

とにかくどつちの銃もストックを縮めてりやリュックに入れて持ち歩ける位小さいくせして、性能は俺が見てきたどんな銃よりもピカ一ときたもんだ。ターミネーターやエイリアンに出てきた未来銃もあれにや形無しよ。

しかもアイツら、ご丁寧にサイレンサーにスタングレネードに発煙手榴弾スモークまで持ち込んでやがったときたもんだ。連中俺の店の事68年のケサンかテトとでも勘違いしてやがったんじゃねえだろうな？」

「あら、この有様を見る限りでは彼らの備えは間違っていないかったように思えるけれど？」

改めて周囲を見回した。店内には死体と瓦礫の山、店の前には車爆弾が生み出したクレーターとそれに巻き込まれた客の車の残骸。死体は店の外に転がっている。

「だよなあ、チクシヨウ」

またしてもバオの肩が盛大に落ちた。だが「あ」と小さく声を漏らしてすぐに顔を上げた。

「すまねえ。さつき3人組がターバン野郎どもを皆殺しにしたって言っちゃまったが訂正させてくれ。1台だけ逃げた車がいたのを忘れてたぜ」

これは聞き逃せない情報だった。

「ほう？ 車種と逃げた者の顔は見たのか？」

「遠かったからそこまではな。けど走り去る直前に撃たれて車の中で悲鳴を上げたのが聞こえたから、少なくとも逃げたヤツの1人は手負いだと思うぞ」

「分かった。情報提供感謝するぞ、バオ。修理費の見積もりは後日こちらへ送ってくれ。行くぞ軍曹」

「はっ」

この場に立つ理由が無くなったと背を向けて立ち去ろうとするバラライカとボリス。

「おっと、それから言っとく事がもう1つあったんだった」

遠ざかる背中へバオが更に声を張り上げた事で、2人は足を止めた。

「話の3人組、腕はとんでもねえが、それ以外はキリストさんも真つ青の甘ちゃんだぜ」

「ほう、それはどうしてかしら？」

「イカレポンチどもを連中のお望み通りアツラーの下に送りつけてやってから、あの3人が次に何を始めたと思う？」

客の中でまだ息のあった連中や上の娼館に居た娼婦どもの救助作

業を始めやがったのさ。

ワトサツプロアナブアラ市警の所の連中がサイレン鳴らして店の前に駆け込んできた時にや、何時の間にか姿を消しちまってたが、な」

「闇医者に網を張らせる。中東系か、或いはイスラム系の特徴を持つ銃で撃たれた怪我人が運ばれてきたらこちらへ報告するよう手筈を整えさせる」

リムジンの車内へ戻るなり、バラライカはボリスへとそう命じた。

「分かりました。すぐにやらせます」

「それと軍曹、サンカン・パレス・ホテルに付けていた例の連中への監視班から報告は？」

「先程確認を取った所、3人がホテルを出た為尾行したものの途中で巻かれてしまった、と。報告が遅れてしまい申し訳ありません」

「構わん。向こうもホテルに入った時点で尾行が付いている事を想定して動いていたのだとしても私は驚かんよ」

「やはりバオが言っていた3人組は例の？」  
「間違いあるまい。ルマジジュールからの報告とも特徴が一致している」

「……やはり以前の米アメリカンスキー国人のような、他国政府の名を受けた作戦活動中の不正規部隊なのでは？」

ボリスの指摘をバラライカは被りを振って否定する。

「真つ当な国の飼いだにしてはあまりにもちぐはぐ過ぎる。

米国人共もメイドロベルタが捕捉し、噛みついてこの街の表側へ引きずり出すまでは寸前まで我々にも存在を悟らせなかった。

国家の猟犬として汚れ仕事を手掛けるとはそういう事だ」

「……では連中は一体何者なのでしょうね」

「さあな。どちらにせよヤクをバラ撒いていた聖戦主義者ジハーディストども程鬱陶しくはないが、さりとて放置も出来まい。

仮に件の3人組の目的が当人の主張通り取り引きなのだとしても、彼らの武力は向いた先によってはこの街の天秤を大きく揺さぶりかねないと想定すべきだ。

監視は継続させろ。今度は見失わぬよう、監視班に伝えておけ」

「了解です」

「……………」

「……………」

「……………だが」

「はい」

「死神の目をしたその男どもはきつと、この街には不釣り合いな善人の集まりなのだろうな」

バラライカはそう、眩いたのだった。

Knockin' on Warfare Gate  
e11

「あー酷い目に遭った」

行きよりも物理的に煤けたスーツの上着を小脇に抱えながら伊丹はぼやいた。

装甲仕様のバーカウンターに隠れて凌いだとはいえ、自動車爆弾の爆発を食らったり吹き飛んだ破片が降り注いだりといった目に遭えば当然ながら衣類も只では済まされずに決まっている。

肘の上まで捲られたワイシャツの端には埃と硝煙の煤だけでなく血痕も僅かながら付着していた。襲撃者の返り血ではなく、当時まだ息があった客の手当てや酒場の2階に軒を借りている娼館の人間の救助を行った名残だった。

重要任務を任された身である以上、聖戦士を気取る虐殺者どもを追い払った後は、本来伊丹達もまたすぐに現場を去るのが潜入工作員としては正しい行動だっただろう。

だが兵士であり自衛隊員としての己が否を告げた。

いくらゴロツキや娼婦といった裏通りの住民ばかりであっても、罪を犯した結果の因果応報ならともかく。

不条理な災害じみた出来事に巻き込まれた結果傷つき苦しんでいるのを見捨ててさっさと去ってしまうのは、何だかんだで伊丹の中にもきっちり根付いている自衛隊の本分に背く気がして腰の据わりが悪く……

それ以上にどう言ったものか、自分の帰りを特地で待っていてくれる大事な彼女達や、生まれてきたばかりの子供に顔向けできない、そんな気がしたのだ。

「これも親になるって事なのかねえ」

「何か言ったか？」

「なあに、ただの独り言だよ」

そんな訳で伊丹は事態を知ったロアナプラ市警のパトカーのサイレン音が聞こえるまで、プライスと剣崎共々生存者の手当てや娼館の従業員と客の安全確保に当たった次第である。

幸いにも娼館部分は施設としての被害はともかく、人的被害は酒場側と比べ格段に少なかった。怪我人や耳が馬鹿になったと訴える者は少なからずいたが死者は居なかっただけ酒場よりは格段にマシと言える。

救助作業中にマダム・フロラと名乗った娼館の経営者より聞いた話曰く、下の店が事あるごとに破壊されてはその度娼館もとばっちりを喰うものだから、独自に被害を軽減しやすい構造へと補強と改築を施していたのだとか。

「部屋に戻ったら酒場での一件を司令部に伝えといた方が良いでしょうなあ」

行きとは対照的に伊丹達へ絡んでくる破落徒めいた輩は出てこなかった。

伊丹が上着を脱いでいるせいで腰に挿した拳銃が衆目に晒されているのもあるだろう。

それ以上に濃密な爆薬と硝煙と戦闘のストレスで溢れ出たアドレナリンの残滓、極めつけに人を殺した直後の者だけが放てる血生臭い気配をポンポンと漂わせているのが何よりの原因だった。一応イエローフラッグから抜け出した後、途中でミネラルウォーターを調達して頭から被ったり血や硝煙で汚れた手を洗ったりもしたのだがその程度では不十分だった。

この衛生粋の住民程その手の気配に敏感だ。特にただの人殺しならともかく、訓練と実戦の積み重ねの果てに形成された伊丹達のそれ



は、露骨に威圧的ではなくせに重厚で研ぎ澄まされた不気味な威圧感を帯びていた。

伊丹よりも余程凶悪な顔つきの男どもが触らぬ神に祟りなしとばかりに、そそくさと道を空けていく。特地の悪所街で見慣れた反応がロアナプラでも再現されていた。伊丹と剣崎は思わず苦笑した。

サンカン・パレス・ホテルが見えてきた。流石にここまで着たら露骨に銃を見せない方が良いだろうと、伊丹は上着を着直す。

「ああっお客様！ 戻ってこられましたか！」

フロントに現れた伊丹達を、受付カウンターに居たホテルの従業員は視界に収めるなり早足に近付いて声をかけてきた。

声はやや上ずっていて、額には冷や汗が浮かんでいるのを伊丹達は見て取った。周囲に視線を巡らせると既に深夜なものにもかかわらず、他の従業員の様子もどこか慌ただしい。

嫌な予感がした。

何処かでエレベーターの到着を示すベルの音が鳴った。

「えっと、俺達が居ない間に何かあったんですか？」

「申し訳ございません。実は——……」

伊丹の背後を運搬対象に乗せたストレッチャーと、白衣を着た数名の救急隊員が賑やかに通り過ぎていった——

「うわっちやあ〜……こいつはまた」

今日の寢床であり、ロアナプラに滞在中の拠点として明日以降も利用する筈だったセミスイートの客室の前で、伊丹はついつい驚嘆が混じった呆れの声を発してしまった。

剣崎も「オイオイ」と言いたげに目を丸くしているし、プライスも伊丹程露骨ではないが表情に籠められた感情は似たようなものだ。

何故なら——3人が泊まる部屋の扉が無くなっていたからである。

具体的にはホテルの格調に合わせた分厚い木製の扉が蝶番ごと引き千切れる形で、部屋の入り口から1メートルは離れた廊下に落ちていた。まるで室内で爆発が起きて爆風で吹き飛ばされたかのように。だが扉を失った入り口から室内を覗いてみれば、中の様子は伊丹達が出かける直前と全く同じ状態を保っていて、一切荒れた様子は見られない。インテリアに飾られた生け花の花びら1つですら床に落ちていない位だ。

「伊丹よお、これってやっぱりアレのせいだよな？」

「それしかないんじゃないのお」

投げやりに答えながら、伊丹は入口の対角直線状に積んだ荷物の山へと近付くと、山の最上段に貼られたお札を無造作に剥がした。

ホテルによれば事の経緯はこうだ。

伊丹達が外出してしばらくした後、この部屋に空き巣が忍び込んだのだという。

街で最上級に格調高いホテルとはいえ、ホテルに出入りする人物全ても相応しい存在とは限らない。

空き巣は観光客狙いの常習犯だった。複数の観光客向け高級ホテルの従業員を買収し、従業員の制服のみならずマスターキーですら複製して犯行を重ねる筋金入り。そんな空き巣がこの晩の標的に選ん

だのが伊丹達の部屋だったという訳だ。

空き巣の獲物を見定める盗人としての勘は確かだったと言って良い。実際伊丹達の部屋に置かれた幾つかのアタッシュケースには換金して調達したばかりの数十万ドル分の現金や高価な美術品・重火器が詰まっていたのだから。

そして空き巣は侵入してすぐさま扉を閉めて鍵もかけ直すと、ご丁寧に積み上げられた荷物の山へと手を伸ばし――

異世界の巫神ロウリイと魔導師レレイとエルフテユカ合作の魔法式防犯装置が正常に発動した。

直撃を食らった空き巣は呪詛と魔法と精霊の力で一瞬でボロ雑巾の如き有様と化しながらものの見事にぶっ飛んだ。

廊下に設置された監視カメラには荒い画質ながら、空き巣が伊丹達の部屋に入った10秒後には閉めたばかりの扉を薙ぎ倒し、それでも止まらず反対側の廊下の壁にぶつかり跳ね返ってようやく止まる一部始終が記録されていたとか。

当然ホテル側も事態を把握し、騒動となった。慌てて駆け付けた本物の従業員まで不用意に荷物に触れようとせずに済んだ点は不幸中の幸いか。

とはいえ窃盗犯は従業員に扮し、複製したマスターキーを所持して侵入した上――駆け付けた本物の従業員に発見された時点で虫の息だったが――現行犯で捕まったのもあり、立場として厳しいのは完全にホテルの方だ。

実態はどうあれ街一番の高級ホテルとしての立場を汚したくないし、監視カメラに残された証拠映像は明らかに超常現象の類ときている。あんな現象を起こせるだけでなく、そもそも飛び込みで料金を気前良く纏めて現金で払ってくれるような上客の機嫌を損ねたくはない。

『当ホテルの警備上の不備によりお客様に不快な思いをさせてしまいましたお詫びとしまして、料金は前金でお支払い頂いた金額のまま、お部屋の方を最上級のスイートルームへのご案内させて頂きます』

そういう事になった。

だが部屋を移るといふ事は持ち込んだ大荷物も移さなければならぬという事でもある。最初のチェックイン時銃火器・無線・電子機器もそうだったのだが、多数持ち込んだ他人銃火器に触られたくない重量無線・電子機器の嵩む荷物をまた伊丹達自らの手で運び直さねばならないのだ。

こと突然の鉄火場に遭遇して少しばかり草臥れて帰り着いた直後にこれである。あからさまにげんなりとした顔で、大きく息を吐く伊丹であった。

「あくめんどくせ〜……」

「愚痴つてないでさつきと片付けて運び出すぞ」

痴る伊丹の尻をプライスが叩きながら、ホテルから借りた運搬用大型カート大型銃器に荷物を積み上げていく3人。

1丁につき最低でも3キロ以上はある長物大型銃器にフル装弾でマガジン1個につき500グラム前後となる弾薬を予備分含め1000発単位。大口径ライフル弾も阻止する代償に重量が10キロ越えの防弾プレート大型銃器を備えた戦闘ベスト。

本体重量6キロ弱の広帯域多目的無線機携帯用1型といった各種通信機材に数十万ドル分の現金に換金用の美術品等々も加われば、大型のタンクス大型銃器ほどもある運搬カートの積載量ギリギリまで聳え立つ荷物のジェンガの出来上がりだ。総重量は伊丹の体重を軽く超えるだろう。

チェックインの時はユーリともう1人特戦群Sの仲間が一緒だったので、まだ負担が分散されたのだが。

「爺さんも剣崎も、崩れないようちゃんと支えてくれよー」

「お前だつてどっかにぶつけてホテルに弁償なんて事にならないようにしろよ?」

新たにホテルが用意したスイートルームは上の階だ。  
男3人、えつちらおつちらとエレベーター前までクソ重たいカートを押ししていく。

気分は引越し屋か配送業者だ。尤も軍隊とは警備に土木に医療に輸送に人材派遣に衣食住の提供まで網羅する、云わば一種の超多角国営企業そのものなのだから間違つてはいない。

アンティーク時計の様に針が階数を示すレトロなエレベーターがチン、と到着を知らせた。

扉が開いていく。

「あ」

「ん？」

エレベーターには先客が居た。

遅いチエックインといった風情の、トランクに旅行用バッグを携えたビジネスマン風の白人男性が2人。

片方は細身でもう1人は少しふくよか、どちらも伊丹と剣崎より一回りは年上だろうがプライスよりは若いだろう。髪型は極端に刈り込んだクルーカット。

「すみません、ちょっと場所空けてもらえませんか？」

「構わんよ」

操作盤の前に立っていた細身の白人が『開』<sup>OPEN</sup>のボタンを押しながら体を端へと寄せた。ふくよかなもう1人の白人も箱の反対側で彼に倣う。

伊丹達と荷物を載せた3人は白人の2人の間へ割り込む形でエレベーター内へ。

鋼鉄の箱の中へ伊丹達が踏み入れた刹那、白人達は微かに目つきを鋭くし、互いの目を見交わした。

伊丹達もまた彼らの気配の変化を察知していた。

扉が閉まる。過積載気味の大型カートのせいで、エレベーター内を若干の圧迫感が広がった。

「……………」  
「……………」  
「……………」  
「……………」  
「……………」

目的の階までの数秒間が妙に長く感じた。ベルが鳴り、扉が開く。

「お先にどうぞ」

「どうもすみませんね。ありがとうございます」

細身の男性に促されて、まず伊丹達が先に出た。荷物を3人がかりで運ぶ伊丹達に続いて2人の白人もエレベーターを降りた。

「……………」  
「……………」

目的の部屋の前で伊丹達の足が止まる。

同時に背後から追ってくるカーペット越しの足音も止まった。

2人の白人が泊まる部屋は、伊丹達が宛がわれた部屋の向かい側の部屋だった。

「……………」

何とも言えない微妙な雰囲気や間を漂わせながら、2組の宿泊客はさっさと鍵を開け、スイートルームの中へと消えていく。

鍵を閉めた伊丹はゆっくりと振り返ってプライスと剣崎を見た。

2人もまた伊丹と全く同じ事を考えている、そんな顔をしていた。

「……さっきの2人、見覚えあるよね」

確認の問いかけだった。案の定、プライスと剣崎も頷いた。

「今のクルーカットの2人。あれは確か——」

「シエーン。さっきのB-52の絨毯爆撃のド真ん中から戻ってきた  
ような連中——」

「分かってるさレイ。あの3人は間違いなく私達の同類だ」

Knockin' on Warfare Gate  
e12

〈2日目〉

丑三つ時を過ぎても尚ネオン煌めく悪徳と狂乱の街ロアナプラも、街の外へ向かって15分も走れば風景は一転、喧騒に満ちた中心部とはうって変わって文明の存在すらも怪しく思えるような緑の土地が広がっている。

山肌には鬱蒼とした東南アジア特有のジャングルが広がり、かと思えば唐突に見渡す限りの平原に出くわす、そんな土地だ。店らしい店は見当たらないどころか民家もまばらで、21世紀を迎えようという現代文明らしい存在といえば主要な道路沿いに延々と連なる電信柱程度。

—— 『門』が出現したのはそんな人里離れた山間部に位置する森と平原の境界近くだった。最も近い民家から数キロは離れていた事もあって、ロアナプラの住民は誰1人『門』の出現には気付かなかった。

出現位置からやや離れた森の中に、舗装されてはいないが大型トラックがギリギリ通過できる幅の、そこから街へと繋がる道路へ出られる山道が存在していた事も、『門』から出てきた者達……

すなわち、今回出現した『門』の制作者である自衛隊特地残留部隊にとつては大いに幸いであった。



出現した『門』のサイズは縦横6メートルと、最初に銀座と特地を繋いだ帝国製『門』の半分以下のサイズ。

通過する為の空間は4メートル弱四方と、装甲車両クラスが1台ギリギリ通過出来る程度の幅だ。

何故当初の『門』よりも二回りも小型なのかと言えば、

『最初から1発勝負で前みたいな規模の『門』を作る前に、まずは今の設計で問題なく使えるか実験用に小さい『門』を作って実験してみた方が良いと思うんですけどねえ。いきなり本番つてのも失敗して暴走するフラグっぽいですし』

こんな尤もな意見を某二尉が呟き、それを耳にした狭間達トップも同意してしまったからであった。

以前、魔法装置としての『門』を建造する前に行われた穿門法の発動実験では、WW3が勃発しなかった世界線のアルヌスという平行世界に繋がってしまった。

平行世界の自分達から齎された情報には、閉門時に『門』が暴走した影響で別の世界から狂暴な蟲獣が複数体出現し苦戦した記録も含まれていた。これもまた『門』の建設に慎重論が唱えられた一因となった。

元の世界へ帰還する為の道筋にあまりに手探りな部分が多い以上、資源を割いてでも実証実験を重ねて安全性と確実性を求めるべきという判断が下されたのも当然の帰結と言えよう。

実験用に従来よりも小型化して設計したお陰で、森の中に出現してしまった『門』を豊かな植生の木々が周囲や航空機の目からギリギリ隠してくれる塩梅に収まってくれたのも、自衛隊側にとっては望外の幸運だった。

『……………ぐすん』

『わーっ!? 違うんだレレイ、決してレレイを信頼していないとかそういうつもりじゃないんだ!』

『なーかしたなーかしたー、シーノーにー言っつてやるー』  
『テユカもロウリイも煽らないでくれえ！』

……なお上の発言がバツチリ『門』再開通計画プロジェクトリーダーである魔導師の少女の下にも伝わった結果、涙目で拗ねてしまった少女の機嫌が回復するまで発言者である某二尉は三日三晩、搦め手から四十八手まで駆使して少女の機嫌取りに奔走しなければならなかったのかなんとか。

それでも、平行世界の次は創作物の世界に『門』が繋がってしまった事を考えると、某二尉の危惧は間違っていないかった。

日本の植生とは違う森の中へと『門』が開き、大気組成の安全性を確認した上で運用可能距離や活動時間の長さの割に運搬と運用の容易さに優れたスキヤン無人偵察機イーグル改と運用人員を派遣し、航空画像で周辺の地理を把握中明らかに現代地球に近い発展をした都市部を発見し喜びに沸き――

直後、ズームアップした地名を示す看板に描かれた内容からこの世界が元の地球ではなく、創作物の世界だと気付いた時、司令部に集まっていた自衛官達は当然ながら揃って困惑した。

狭間ら幕僚幹部は、当時真っ先に創作物の世界と認識した某二尉を執拗に問い質した。

その作品では時代設定が元の世界より10年以上前である事、舞台となるその港町は犯罪者が街を支配し、あらゆる悪徳が蔓延る現代のソドムとゴモラでありそこで起きた犯罪はまず街の支配者達によって隠蔽される事、作品の主人公もまたその街で裏稼業を営む犯罪者達である事……

街の住民達に我々と『門』の存在が発覚する前に早急にこの世界から撤退すべきではないか――このような意見が幕僚幹部の間で

広まろうとした時、おもむろに眼鏡をかけた神経質そうな幕僚の1人である二尉がこう提案したのである。

『むしろ折角別世界の地球、それもどれだけ跡を濁したって誰にも文句が言われない悪徳の都がすぐ目の前にあるのです。

いっその事、我々もとことんこの街を利用してしまっってはどうかでしょう？』

この度、ロアナプラにおける作戦活動の本拠地である前線基地は、森の一部を最低限の範囲で切り開き平原部と接続した上で設けられた。

と言ってもアルヌスの様に土壤から掘り返し、コンクリートで固めたトーチカと一体化した防壁を構築する等といった大々的な土木作業は行っていない。

避難民用の難民キャンプ向けに銀座元の世界から大量に持ち込み、今もアルヌスに多数眠っているプレハブ式の建物すら建てなかつた。

最低限地面を均してから宿営用・業務用天幕テントを幾つも配置するといふテント村方式だ。設営だけでなく撤収する際の手間や痕跡も最低限で済むし偽装も容易。実戦想定の野外演習や短期間の災害派遣で幾度となく設営してきたので、今回作戦に派遣された自衛隊員達も手慣れたものである。

升目状に等間隔に設営され、屋根部分に対赤外線処理が施された偽装ネットを被せられたテントの群れの中、同じく偽装処置がされた『門』に最も近い業務用天幕内に作戦司令所は設置されていた。

司令所の設備も市ヶ谷の防衛省地下やアルヌス駐屯地のそれと比べれば、即時設営・撤収のし易さを重視した質素なものだ。

折り畳み式の机とパイプ椅子が向かい合わせに配置され、机上には特地派遣部隊向け通信ネットワークと繋がったタフブックがズラりと並ぶ。

天幕の最奥には大型スクリーン、両際の壁部分にはホワイトボード。その白い板面の大部分は作戦地域の航空写真、現地調達した地図の拡大写真、先んじて作戦活動中の潜入部隊から齎された情報の書き込みで埋まっている。照明と各種電子機器の電源は天幕外の発電機頼りだ。

「予定外の要素はあったが当面の実弾は調達出来た。ここから先が本番だ」

今回の作戦発案者として現地司令部での任を任せられた神経質な印象の二尉が、作戦の進捗状況が記入されたホワイトボードの前でギリと眼鏡のレンズを反射させながら呟いた。

外からは何台もの車両の駆動音が響きつつあった。

平原部は特地から持ち込んだ車両用のスペースに使っている。

既に輸送車両を中心に数十台もの自衛隊車両が展開した上で、天幕と同じく現地の植生に溶け込むように偽装が施されていたが、出番が巡ってきた一部の車両はその偽装を解き、命じられた任務を果たすべく前線基地を出発するのであった。

其処は変哲もない片田舎のガソリンスタンドだった。

燃料補給と車関係のサービスのサービステーションに特化した日本のガソリンスタンドと違い、海外のガソリンスタンドの殆どは敷地内にコンビニも併設されている。大手卸売のチェーン店ですらない個人経営の場合は雑貨

店だ。

店名を示す看板は外れかけ、ポンプや店舗の壁の塗装も剥がれて錆びた地肌を晒しているような、経営者のやる気が一目で伝わってくる、そんな店。最大の売り物である筈の燃料価格ですら掲げていない有様だ。

その日も店主である老人は雑貨店のカウンターに両足を乗せてポルノ雑誌を読みふけていた。

店主の1日の大半はポルノ雑誌がカウンター上に設置したテレビを見て過ごして終わる——この日もそうなる筈だった。

店の前に車が止まり、扉に取り付けた壊れかけのベルが中途半端な音で来客を知らせても、店主は足を下ろして姿勢を正すどころか雑誌から視線を外して一瞥すらしなかった。

複数の足音がカウンターの前で止まる。

「すまない店主。この店の燃料価格を教えて欲しいのだが」

丁寧な口調の客に対し、店主は拙い発音ながら英語で答えてやった。

こんな辺鄙な店を利用する客は大抵ニューヨークも真つ青な人種のサラダボウルであるロアナプラを目指して世界中からやってきた流れ者である。そんな連中を相手にしている内に自然と学んだものだったので、発音も滅茶苦茶だがどうにか通じた。

提示した価格は相場の5割増しだ。バンコクから出ている長距離バスならともかく、自前の足ではるばるタイの端っこまで走ってきたのならば燃料に余裕はあるまい。

客の燃料事情を先読みして阿漕な商売をしている辺り、街中に居を構えていなくともこの店主もまた立派な悪徳の都に相応しい住民と言える。

「こっつから街まで他に燃料を売ってる店は一軒もねえよ。ここで買いか、街まで歩いていくか。好きな方を選びな」

足元を見て横柄な態度を取る店主に、話しかけた客は機嫌を損ねた様子もなく同行する仲間へと耳打ちした。

英語とも、タイ語とも、中国語とも、ロシア語とも、イタリア語とも、ドイツ語やスペイン語やアラビア語とも違った。店主には耳馴染みのない言語日本語だった。

耳打ちされた別の客が懐に手を入れて取り出したのは電卓だ。手早く数字を打ち込んで何事かを計算。最初に店主と対応した男に短く囁き返す。

小さく頷いた男は手にしていたアタッシュケースをカウンターの上乘せた。そこでようやく、店主は雑誌から目を離して初めて客の姿を観察した。

客は、どちらもスーツ姿の東洋人だった。

チンピラと呼ぶには荒んでいない。マフィアの構成員にしては暴力の気配が薄い。麻薬中毒者やサイコパス特有の破滅的な雰囲気は皆無。その癖カタギにしては背筋が伸び過ぎている、何処かちぐはぐな印象。

客がケースの中身を取り出して店主の前に置いた。

店主は目を見開いた。

札束だった。

1ドルでも10ドルでも100バーツでもない。1000ドル札の束が複数積まれていた。

ノミ屋の賭けで大勝ちした日でもお目に掛かった事がないような大金を前にして目を白黒させ、札束と視線を行ったり来たりさせながら見上げてくる店主に東洋人の客――

自衛隊特遣部隊の情報収集・工作担当第二科所属の隊員はさらに  
りところ告げたのである。

「この金で店に保管されている燃料を全て我々に売って貰えないだろ  
うか」

その言葉が合図だったかのように日本語のプレート類を外して最  
低限所属を隠蔽した3トン半燃料タンク車が複数台、店の前へと進入  
してきたのだった……

Knockin' on Warfare Gate  
e13

『慧眼だったわねルマジュール。例のイタミという日本人ヤボンスキー、貴女の見立て通りの死神だったみたいよ？』

朝一番にボスバラライカからかかってきた電話にて昨夜イエローフラッグでの顛末を教えられたルマジュールは、朝から憂鬱な溜息を吐きたい心境だった。

なんでも昨日ルマジュールを雇った伊丹何某一行は何を考えたのか、ロアナプラで最高級のホテルを抜け出したかと思うと街で最も早くでもない連中が集まる酒場にふらりと乗り込み、案の定銃撃戦に巻き込まれた彼らは撃つてきた連中を皆殺しにし、自分達は無傷で悠々とホテルに帰還したのだという。

さもありません、その仕事ぶりはたまたま近場に居たので事が済んだ後の現場を視察したバラライカ……あのバラライカが賞賛の言葉を述べた程で。

声を殺し、自分からトラブルに飛び込む真似をした馬鹿伊丹達とそんな厄ネタに手を出した馬鹿聖戦士の双方を罵るルマジュールである。

『忠告だけはしてあげるわ。今この街にはここをカブールかカンダハルと勘違いしたアラブ人共が新たな聖戦を始めようとしているの。』

黄金夜会はこの街の秩序と均衡に混乱を齎す聖戦狂いのムジャヒディン崩れどもを狩りだし、撃滅する事で方針が一致した。

……まあ私の推測が正しければ例の日本人どもと行動を共にしている限りは貴様の生命は保障されるだろうが、我々の戦争に貴様達が巻き込まれても我々は貴様達の安全は一切考慮しない。



——精々流れ弾に気をつけながら、上手く客人を誘導してみせる事だな』

改めて、ルマジュールの口から沈鬱な空気が漏れた。

ともかく仕事の時間だ。1日1000ドル、1週間専属で1万ドルの誘惑はやはり振り払いきれない。サンカン・パレス・ホテルを指す。

雇い主は既にフロントでルマジュールを待っていた。彼女は周囲を見回す。昨日よりも伊丹の周りに居た面子が少なかった。

「昨日一緒に居た残りの護衛は？」

「彼らとはあの後別行動でね。もうすぐ迎えに来てくれる筈だよ」

「……足は昨日と同じか？」

「昨日の時点ではそのつもりだったんだけどねえ」

「あん？」

含みのある発言にルマジュールが眉根を寄せて先を促すと、やれやれと言いたげに眉尻を下げた伊丹が続ける。

「どーも今のこの街って話で聞いてた以上に物騒な雰囲気だからさ。だからその分の備えも増やす事にしたんだ」

遠くからそこいらの乗用車より重たいエンジン音が近付いてくる。それに耳を傾けたルマジュールは違和感を覚えた——音が重なっている？

ホテル前の通りに首を振り向けて音が近付いてくる方向を凝視したルマジュールの隻眼が、大きく見開かれた。

発生源である車両がホテル前で停まる頃には咄然と顎も落ちていた。近くの通行人や伊丹達と同じくフロントに屯していた他の宿泊客に従業員も似たようなものだった。

「何だありやあ？」

異形の車両であった。

昨日伊丹達と乗ったブッシュユマスター装甲車より更に縦も奥行きもスケールアップした車体でタイヤの数も6輪に増えている。

モスグリーンの車体表面はうっすらとしたひっかき傷に多く覆われているが、装甲板の強度自体もまたブッシュユマスターより厚く頑強に思える。

ルマジュールの観察眼は実際正しく、ブッシュユマスターの装甲がNATOが定めた兵器規格の1つであるSTANAG4569でレベル1相当に対し、この6輪の装甲車はレベル4。東側の14・5ミリ徹甲弾すら阻むにとどまらず、爆薬量8キロ以下の対戦車地雷が真下で爆発しても乗員の生命を護る対爆能力も持つ。

運転席―助手席真上の屋根にはKPV・14・5ミリ重機関銃の遠隔操作式銃塔。  
RWS。後部の兵員区画上にも乗員が身を乗り出して発砲出来る銃座が在る。

従来存在しないこの車両限定の特徴として、車体前部のバンパーに分厚い楔形ブレードが溶接されていた。20トンを超える装輪装甲車でも重量級の車体による突撃と合わされば大抵のバリケードや車両、建造物ですら突破可能であると実戦でも証明されている点については流石のルマジュールでも知る由はない。

その名をウラル・タイフーン装甲車。開発開始は2010年頃と、ブッシュユマスター同様にコレもまた未来の兵器である。

タイフーン装甲車の乗員は運転手と助手席にナビゲーター役、機銃操作パネルがある座席に火力担当がそれぞれ1名ずつ。

加えて後部区画に緊急時の護衛要員が班相当乗り込む。護衛要員は剣崎同様、伊丹の元同僚である特戦群から抽出した、悪所街で自衛

隊の恐ろしさを知らしめてきた面子揃い。

彼らは伊丹の護衛であると同時に、追加で運搬してきた街での商談に使う高価な品物を護る番人でもあった。

タイフーンの後ろにはルマジュールも見覚えのあるブッシュマスターが続いていたが、更にブッシュマスターの後ろに彼女の知らない車両が増えていた。

オシユコシユ・M―ATV。ブッシュマスターよりもやや小柄だがこちらにも立派な装甲車。

元は自衛隊の制式採用ではなく、特地向自衛隊が派遣されて以降にWW3の早期終結で多くの余剰兵器を抱えた米軍から打診を受けて急遽導入した供与品だ。本来の歴史ではアフガニスタン戦争―ソ連ではなく、アメリカが911テロの報復に派兵した2001年以降の方―に於いて厳しい地形と気候に対応すべく、2009年から米軍が運用を開始する。

こちらのM―ATVもまた通常とは違う改修が施されており、差異に気付いた伊丹が声を発した。

「あれ？…こっちのATVってこんな砲塔乗つけてたっけ？」

M―ATVもRWSを搭載可能だが、伊丹の目の前にある車両は彼の疑問の声の通り、単なる銃座を超えた大型の砲塔に近い存在が屋根の大部分を埋めていた。

カメラ付きの砲塔から長く伸びる砲身と銃口回りの形状は自衛隊採用のM2重機関銃のそれではないから別の兵器だろう。砲塔自体も仕上げは丁寧ではあるが、どこことなく手作り感が漂うデザインをしている。

疑問に答えたのはM―ATVの運転席から顔を覗かせた運転手だ。伊丹も非常に慣れた顔だった。

他の面子もそうだが、部下が最早非番の日でも着ている陸自の迷彩服ではなく、私服の上に通常防弾チョッキの上から装着する弾入れなど各種ポーチを備えたベルトキットを身に着け、腰や太腿に拳銃用ホ

ルスターを巻き付けた軽装のPMCオペレーターを彷彿とさせるスタイルで作戦に参加している姿というのは、伊丹から見ても中々に新鮮な感覚だった。

「ちーっすお待たせしました隊長。驚いたっすか、コレ<sup>車両</sup>」

「何だ倉田かよ。お前も来たのか。それにしてもどしたのコレ。載ってんの50口径<sup>M2重機関銃</sup>じゃなくてKPVだろ。どっから持ってきたんだ？」

<sup>ルマジュール</sup>部外者が居る手前、声を殺して倉田とやり取りを交わす伊丹。

「ジゼルが壊したBTRあったっすよね。無傷な方の車両の部品取り用にバラしたやつ。」

ATVの方は前々からヒマしてた整備の連中が半分趣味と暇潰しに現地改修案考えてて、50口径よりもっと重武装に出来ないか考えてたら、降ろした後ほったらかしにしたアレ<sup>KPV</sup>を思い出したんでこの際だから載つけてみたって話らしいっす」

「それは分かったけど、砲塔に積んでるの機銃だけじゃないだろアレ」

やる気が無いように見えて中々に目ざとい（でなければいち早く危険を察知して逃げ出せない）伊丹は、KPVの隣に別の機銃が仕込まれているのを見抜いていた。妙に寸詰まりな砲身とは対照的に、弾丸が通過する砲腔はKPVよりもずっと大きい。

「同軸で40ミリ自動でキ弾銃も搭載してるんで、ドラゴンには敵わなくても対人なら火力も充分っすよ」

「一応言っとくけど、ここは流れ弾気にしなくていい特地じゃなくて地球の市街地だからな？ 民間人が居る建物に誤射とか止めてくれよ？」

「分かってますって。遠隔砲塔の試射も向こうでちゃんと済ませて感覚は掴んできたっすから」

「街の地理もちやんと頭に叩き込んできただろうな」

「そつちも一応、航空写真で車列が通行出来そうな広さの道は一通り叩き込んできました」

「ならばよしー」

倉田の下から離れると、伊丹は両手を叩いて「それじゃあ出発しよつか。目的地や経路は移動しながら無線で指示するから回旋は空けとくように」と他の面子に合図を飛ばす。

伊丹が乗るのは昨日に続いてブッシュマスターだ。

「おはよう伊丹。昨日はあれからトラブルに巻き込まれたんだって？」

「おはようさんユーリ。いやあおかげさまで寝不足だよ。はあ」

兵員区画から身を乗り出したユーリの手を借りた剣崎、プライスに続いて伊丹が後部ハッチから乗り込むと、最後に朝から頭痛が痛いと言いたげに額に手を当てたルマジュールが車内へ入った。伊丹の向かいの席へと腰を下ろす。

車体が高い軍用装甲車では標準装備の昇降用タラップが格納され、対爆仕様の扉が閉ざされ、車列が移動を開始する。

「……それで、今日のアンタらの目的地は？」

ルマジュールが訊ねると、伊丹は胸ポケットへと手を差し込んで紙片を取り出し、彼女の方へと差し出した。

受け取ったルマジュールの目が細まる。少し汚れて皺のよったそれは名刺だった。

「昨日、たまたまこの街で手広く商品を取り扱っている大店おわたなで働いている人とお知り合いになってね。

アポは取れてないんだけど、まずは其処から商談に回ってみようか

と考えてるんだ」

「彼らはシユワルツコフ大将とでも繋がりがああるんじゃないだろうな。どう思う、レイ」

「オールド・アイアンサイズ第1機甲師団でもあんな代物は持ってませんよ少佐」

コーヒーが入ったカップ片手に、真に呆れかえった表情でホテル前の様子を見下ろしていた少佐と呼ばれた男が副官へ訊ねると、レイと呼ばれた男もコーヒーカップ片手に肩を竦めてみせた。

シエーン・J・キヤクストン陸軍少佐は走り去って行く装甲車の車列を見送り終えると、ホテルの最上階から一望出来るロアナプラの街並み全体へと視線を移す。

彼とレイことレイモンド・マクドウガル大尉を含めた部下……リタイア済みの者も含めあの夜を生きて乗り越えた者にとって、ロアナプラという街は悪夢そのものだった。思い出したくなくても夜ごと勝手に脳裏に蘇るような、最悪の類の記憶も同然だった。

キヤクストンもレイも2度と来るまいと固く心に決めた筈だった。なのにまた、こうして再びロアナプラの土を踏んでしまった。

何故か？ 2人は未だ合衆国に忠誠を誓う軍人であり、それが新たな任務だったからだ。

前回この土地を舞台にした任務は失敗。作戦に参加した部下達の半分以上が戦死。生き残った者も配置換えか除隊を選び、キヤクスト

ンが率いていた不正規戦特殊部隊である第56施設任務大隊は散り散りとなった。

指揮官だったキャクストンは陸軍訓練校の教官職——明らかな左遷だった。

統合参謀本部の閑職ですらなかったが、キャクストンはそれを受け入れた。

不名誉除隊という最悪の処分ではなかったし、切った張ったに疲れた50過ぎのロートルに相応しいではないか？

ならば大つぴらに口外は出来なくとも、未来の若き兵士達にこんな己の二の舞を踏ませぬよう正しく鍛え、正しく教育していこうと、気持ちを新たに新米教官としての職務を全うし始めたばかりだったのに——

今度は高級スーツに身を固めたビジネスマンの身分を与えられた上で、再び悪徳の都へやって来てしまった。しかも相棒とたった2人だけでだ。

「今度の任務を主導しているのはフォート・ミードではなくラングレ——だそうだな」

「今ほどの情報機関も予算が削減されてるそうですが流石はCIA、NSAよりも気前が良い。東南アジアの片田舎とはいえホテルのスイートなんて初めて泊まりましたよ」

「前はバックパッカーに扮して安ホテルに潜伏した結果がサイゴンやモガディシユも形無しの市街地戦だ。二の舞は踏みたくないう事だろう。この街でもお上品なこの区画で、またあの時の様な戦力を配置しようとしたら間違いなく前回以上に目立つからな」

「尤もさつき出ていった連中以上に目立つとなると早々思いつきませんがね」

「違いない——そろそろだな」

腕時計を見やる。秒針と長針が頂点の『0』で重なり合った瞬間、扉をノックする音が響く。女の声。

「ラングレーからの使いです」

キヤクストーンとレイはアイコンタクトを交わし、スーツの下に隠し持った拳銃に手を添えながらキヤクストーンが扉へ近付いた。いざという時に備え、遮蔽物に体の大部分を隠せるポジションについたレイは援護の構えを取る。

覗き穴でノックの主を確認したキヤクストーンは警戒を解かぬまま、扉の鍵を外して来客を招き入れた。

金髪をシニヨンに纏め、洒落たデザインの眼鏡をかけた如何にもなキヤリアウーマン風の美女だった。とりあえず礼儀として手を差し出し、握手を交わす。

美女の手を握った瞬間、キヤクストーンはウォールストリートの重役相手に愛人を兼ねた個人秘書として雇われていてもおかしくない美貌を放つ目の前の相手が、美貌どころか腕つぶしにも優れた現場ケースオフイサー職員であると確信を持った。深紅のマニキュアで偽装されてはいても何万回となく銃に触れ続けた者特有の指先のタコは誤魔化しようがない。

「シエーン・キヤクストーン少佐及びレイモンド・マクドウガル大尉ですね」

「こちらの自己紹介は必要なさそうだな。我々は君の事を何と呼べば良いのかね？」



「——エダ、とお呼び下さい」

Knockin' on Warfare Gate  
e14

ヴィスコンティ・フーズを異様な雰囲気包んでいた。

ロアナプラを仕切る大御所の一角たるイタリアンマフィアの本拠地の前に見慣れぬ、車体から痛そうなのを通り越して喰らったら最後バラバラに吹き飛んでしまいそうな機関砲を生やした装甲車が3台も―特に巨大な車両に至ってはマッドマックスも顔負けの改造トラック―停まっているのだから当然であろう。

無力（無害、ではない）なロアナプラ市民である通行人の尽くが足早に店の前を離れるか、後頭部に汗を浮かべつつ怖々と曲がり角から顔を覗かせて様子を窺うといった反応を見せている有様だ。その中にはパトロール中だったロアナプラ市警の警官も混じっているのだからさもありなん。

中にはどこかの組織のヒモ付きだろう、携帯電話を取り出して何処かへと連絡を取っている者もいる。

時折長く太い砲身が突き出た銃座が、銃手の姿が見当たらないにもかかわらず、それこそ周囲を警戒する警備兵を思わせる動きで通り周辺に銃口を振り向ける。

野次馬は自分達が居る方向へ銃口が動く度、頭を引っ込めてはおそるおそる覗かせてを繰り返す。そんな奇妙な光景がしばらくの間続

く。  
部外者でこれなのだから、当事者である彼らイタリアンマフィアを襲った緊張と困惑は如何なるものか。

当然ながらいきなり店の前に完全武装の装甲車が3両も出現した時、彼らは心底ぶったまげた。

入り口に配置されていたその日の用心棒役を務める構成員など、銃を抜くどころか仲間への報告すらも頭から吹き飛んで忘我に任せるがまま立ち尽くしてしまった位だ。食事を楽しんでいた客や従業員も似たようなものである。

荒事や撃ち合いには慣れてはいたし、一定以上の兵力を持つ組織の中には4WDに機関銃を乗せたテクニカルを運用しているとはいえず……一般車両の改造車なんぞとは桁が違う、戦車と見間違えそうな砲台付き装甲車の出現は未知クラスに衝撃的だったらしい。

彼にとつての幸運は装甲車に乗ってきた面々がイタリアンマフィアとドンパチするつもりなど皆無だった事。

真ん中の車両から降りてきたスーツ姿の冴えないビジネスマン風の東洋人——伊丹がアタツシユケース片手に入店した。

来客を知らせるドアチャイムの鈴の音が耳朶を打つに至り、ようやく用心棒の思考が再起動を果たす。

盛大に顔も声も引き攣らせた構成員の叫びが奇妙な静寂に包まれたレストランの空気を破った。

「な、何だテメェ!!?」

伊丹は腑抜けた愛想笑いを浮かべて、アタツシユケースを持たない方の手を懐に入れた。

伊丹の行動に用心棒の手も上着の下に伸びた。脇の下の拳銃を握り締めたところで用心棒の動きが止まった。

何時の間にかアサルトライフルの銃口を下にしつつ、だが瞬時に持ち上げて用心棒を無力化出来るよう、適度に肩の力を抜いた上で身構えたSWATも真つ青の装備で固めた男達が伊丹の背後に出現して、目を見た者を石へ変えるメデューサもかくやな眼光で用心棒を射貫いていたからだ。

伊丹の手が懐から抜ける。彼の手に握られていたのは用心棒が予想した武器ではなかった。名刺だった。

しかもそれは、ヴィスコンティ・フーズの人間が持ち歩いている名刺だった。

「アポも無しにすいませんね。先日この店で働かれておられるという方から御取引きのお誘いを頂きまして、実際に商談について話し合いをさせて頂きたく参った者なんですが……」

ロアナプラでは絶滅危惧種クラスの馬鹿丁寧に遜った挨拶を行う伊丹の後ろで、ルマジジュールが前途多難と云わんばかりに大きな溜息を吐くのだった。

「ルマジジュールつつつたか、テメエ、レザボアドッグス気取りの雌犬どもを売って火傷顔フライフェイスの飼い犬になったかと思えばまた鞍替えでもしやがったのか？」

伊丹に続いてルマジジュールが執務室に姿を現したのを捉えるなり、部屋の主であるロニーの口から容赦ない毒舌が飛び出した。

伊丹側は護衛の面子を部屋の外に残して執務室には伊丹とルマジジュールの2人のみ。

ロニーの方は10名以上の配下がロニーの周囲を固め、一部は伊丹とルマジジュールの背後に控えている。

分かっただけはいたがあからさまに警戒の構えだった。昨晚イエローフラッグで起きた襲撃によって複数の犠牲者が発生し、組織が緊張状態に陥った所へこれなのだから無理もあるまい。

「アタシは街のガイドに雇われただけ。アタシが取引や交渉に一切関わるつもりはないよ。」

バラライカも承知してるし、何だったらアタシを墓穴に引きずり込もうとしたらそうなる前に額に穴を開けてやる、そこまでコイツは承知すくだよ」

「そうかい、そうなればいいな」

「ボス、この客はこんなものを持っていました。昨日の夜にベニーノから渡されたと言っています」

ロニーが含みを込めて返したタイミングで、取り巻きの1人が伊丹が所持していたヴィスコンティ・フーズの名刺をロニーへ渡す。

自分の組織の名刺に目を落としたロニーの眉が僅かに皺を作った。

「本当か、ベニーノ」

とても静かな声だった。ロニーの斜め後ろに控えていた、頭に包帯を巻いた部下の1人が目に見えて体を強張らせ、顔中に脂汗を浮かばせ始める。

尋ねられたベニーノは唇を震わせながら、何とか腹に力を入れてボスの質問に答えた。

昨晚イエローフラッグで遭遇した騒動の顛末はベニーノもこのアジトに帰ってからとつくに洗いざらい話してしまっていたし、何より呑まれて何も言えずにただ立ち尽くしていたらそれこそボスの機嫌を損ねたらどんな目に遭わされてしまうのか、そちらの方が恐ろしかった。

「いい、イエスボス。確かに昨日、イエローフラッグで声をかけたこの客人に店の名刺を渡しました」

「成程。つまりこの東洋人————テメエ、国は何処だ。中国？ 台湾？ 日本？」

「生まれは日本です」

「この日本人が爆弾好きのターバン野郎に殺されかけたお前を救った  
ガーディアンエンジェル  
守護天使様つてえワケか。」

こいつはめでてえ。感謝するぜ。何ならハグして歓迎会を開いて  
やりたいところだが、生憎今は忙しい上にお祝い用のキャンドルが品  
切れなもんでな。そいつはまた今度、だ」

「いやあお構いなく」

軽口を叩きながらもロニーの灰色の脳細胞は猛烈に稼働を行って  
いる。

当時の顛末の一部始終を目撃したベニーノの話が全て正しいなら  
ば。

この伊丹 なにかし某が真っ先に自動車爆弾に気付き、いち早く仲間共々カ  
ウンターに隠れて爆発を生き延び、あまつさえ一転反撃に移ってたつ  
た3人で武器も兵力も何倍も上回る襲撃者をほぼ皆殺しにした本人  
だそうだが。

(デカイ車に乗って街に現れて値打ち物の美術品を売りに持ち込んだ  
事も耳に入れちゃあいたが、戦車モドキが3台に増えてるなんざ聞いて  
ねえぞ)

ロアナプラ支部を任されてそう長いわけではないが、こうも堂々と  
軍隊クラスの装甲車を転がして真正面から乗り込んでくるような規  
格外の馬鹿を相手にするのは、流石のロニーも初めてだった。

これが殴り込みなら、シンプルに暴力で以って応じればいいだけの  
話で済んだのだが。

「それで？ 大層なオモチャと兵隊を引き連れて俺のオフィスに乗り  
込んできた理由を教えちゃくれねえか」

「そりゃあ勿論、商談がしたくて来たんですよ」

「……………あー……………本気で言ってるのか？」

「勿論本気ですとも」

まさかとは思ったが。伊丹や部下の前でなければ、頭痛を堪えて額に手を当てている所だ。同じく伊丹の発言を耳にしたロニーの部下達も困惑を露わにしている。

突然店に押し掛け、怯える店主に暴力をあからさまにチラつかせ、ビビった所へ甘い言葉を囁いて取引やら業務提携を持ち掛ける。

そうして口当たりの良い様々な名目の下にみかじめ料をせしめる。

とどのつまりマフィアの常套手段をそっくりそのままやられているのだ。

ふざけんじゃねえ、とお気に入りのデスクに拳を振り下ろして怒鳴りつけてやりたいのをロニーはグツと呑み込む。

部下の方は我慢出来なかったようだ。

「ふざけんじゃねえ！ 兵隊引き連れてイタリア国家憲兵隊カラビニエリでも持ってないような戦車で乗り込んできといて、はいそうですかとそのまま商売の話なんざ出来るワケねえだろ！」

「いやあでも本当なんですって。本当はこちらとしてもここまで大袈裟に護衛を揃えるつもりはなかったんですけど、ほら昨晚も爆弾騒ぎがあつたでしょ？」

滞在中にまたあいつた事に遭遇するかもしれない訳ですし、上と相談して、大事を取って護衛を増やす事にしたんですよ。すいませんねお騒がせしちゃって」

剣呑な男達の怒声にこれっぽちも縮み上がる風でもなく、伊丹はへ

ラヘラとした笑みを崩さなかった。

もつと危険で血生臭い存在に相対し慣れた者特有の凶太さだった。ざわめく部下どもに苛立ちを押し殺しながら、ロニーは冷静に現状や伊丹の発言内容を分析する。

(この野郎には上がいる。そいつらは昨日今日の間、連絡を受けてすぐに追加の兵隊を装甲車付きで送り込めると来てやがる)

これだけの戦力を街の噂の『う』にすら上がらぬ間にこのロアナプラヘ持ち込んで秘匿するなど至難の業だ。最低でも黄金夜会の面子クラスの組織力が必要になる。

(昨日ワトサップの手下共がこの野郎の仲間が乗った装甲車を尾行たら街の外でパトカーを潰されたって話だったな)

総合するとこうなる。

伊丹が言う上の人間、つまり本隊は街の外で伊丹と連絡が取れる距離にて陣を構えている。そいつらは最低でも装甲車を複数台に積み荷である兵隊を気軽に送り込めるだけの戦力を有している。

具体的な兵隊の頭数は不明だが保有火力は軍隊クラス。兵隊個人の戦力としては——特殊部隊クラスの能力が最低でも3名。力が抜ける笑みを張り付けた、一見ふざけた目の前の男こそその中の1人に含まれる。

もしこの場が鉄火場と化したならば部屋の外や店の外で待つ伊丹の護衛が一斉に突入してくるのだろう。

(厄介だ。この場の頭数は俺らが上でも兵隊1人1人の強さと火力はおそらく連中の方が間違いなく上だ)

ロニー配下のイタリアンマフィアはロアナプラ支部の本拠地であるヴィスコンティ・フーズ以外にも散らばっているし、武器だってロ



ケツト砲クラスをも何丁も揃えてはいるが、瞬間的な火力は伊丹達の方が完全に上だ。

おまけに不意を突かれたせいでよりにもよって本拠地の中心まで入り込ませてしまったのが痛い。

撃退態勢が整い、散らばった構成員が集結する前に、合図を受けた伊丹の護衛達と店の外に停まった装甲車に搭載された大砲が、ヴィスコンティ・フーズを瓦礫の山に変えてしまう方が速いだろう。

それにロニー・ザ・シャークを若くしてイタリアンマフィアの幹部まで引つ張り上げた才能——血と金の臭いをサメの如く敏感に嗅ぎ付ける嗅覚がこう囁いているのだ。

(もしこの場を御破算にしたとして、コイツ1人すらこの場で殺れる気がしないのはどういいう冗談だ?)

ロニーが感じ取った伊丹の放つ血の臭い、或いは死の臭いはあまりにも濃かった。

濃密過ぎて感じ取ったロニーの嗅覚が麻痺してしまう程に。

たった3人でAKと爆弾で武装したアラブ人十数人を皆殺しとかそういう範疇を超えていた。

護衛よりも、大砲付きの装甲車よりも、目の前に立つたった1人の日本人こそが最も危険だと、無自覚ながらロニーの本能は見抜いていたのである。

ロニーは考えた。

考えた。

そして。

「……俺らと商売をしたけりやまずそっちの品物から見せやがれ」

「ボス!？」

「黙れナルテイゾ。俺のオフィスで商談をするかしないか、決めるのは全て俺だ」

ロニーの言葉に、伊丹は笑みを深めながら手にしたアタッシュケースを持ち上げたのだった。

ブラックマーケット  
裏市場に於いて売買の支払いに使われるのは現金のみとは限らない。

武器の代金を麻薬で支払う事もあれば金塊、宝石、美術品、石油、株券、土地、果ては何処からか攫ってきた臓器売買用献体哀れな人間の場合もある。

地元の顔役が外部の組織に対し、今後生じる利益から一定の上がり  
を頂戴する代わりに市場参入の便宜を図るといった、直接的に物品を  
やり取りしない形での取引も珍しくはない。作中年代最近では現金を使わな  
い電子送金を犯罪者も活用しつつある。

要は売り物に釣り合う価値があり、売り手と買い手のニーズが一致  
するならば、あらゆる物品が取引対象として扱われる。表の流通市場  
を遙かに上回る自由度こそがブラックマーケットの最大の特徴であ  
り、同時にともすれば表以上の莫大な経済を生み出す理由なのだ。

だからこそ、品物の価値と代金が正しく釣り合うかどうかは表以上  
に重要視される。

たった1度の取引が御破算になったせいで血で血を洗う大規模な  
抗争のきっかけとなってしまう事など裏社会では珍しくない。

幅広く裏の商いをする一定以上の組織ともなれば、単純な金銭以外  
の形での取引も珍しくなく、その場合重用されるのは現金よりも嵩張  
らず、サイズに比して高価値であるような品物。

故に、違法な品と知りながらも取引分の商品相応の価値があるかど  
うかの査定を行う専門プロフェッショナル家もまた犯罪者の間では重宝される。

麻薬ならば混ぜ物や偽物ではないか薬品検査を行う薬学者が。

美術品ならば名画や骨董品に見せかけた贋作か否かを知識と鑑定眼で以って見抜く<sup>キュレーター</sup>学芸員が。

そして宝石ならば、今ロニーや伊丹達の前でルーペを手にしきりに唸り続ける宝石鑑定士といった塩梅に。

「おお……」

「まさかこんな……」

「<sup>マンマ・ミリア</sup>信じられない……！」

「マンマ・ミリアって本当に言うの初めて聞いたぜ」

驚きと感心が入り混じる伊丹の呟きはとても小さい音量だったが為に、幸いにもロニーや彼の部下達の耳朶を刺激せずに済んだ。

先程から独り練り返し驚嘆の呻き声を発しているのはヴィスコンティ・フーズお抱えの鑑定人だ。

執務室に集まるイタリアンマフィアの構成員の中でも特に年かきの初老の男性。白人であるのも踏まえると現地採用ではなく本<sup>イタリア</sup>国から連れてきた人材なのかもしれない。

鑑定士は顔を上げては嘆息を吐き吐き脂汗を滲ませた顔を左右に振っている。

この反応に伊丹は既視感を抱いた。炎龍討伐後の停職処分という名の連休期間に、ヤオから報酬として渡された特大ダイヤモンドの原石を鑑定して貰いに訪れた銀座の宝石商で目撃したものとそっくりだった。

つまりは伊丹が質草として持ち込んだ品物もそういう代物である。

やがて震える手でルーペを外した鑑定士は、まるで不安視された前評判から一転世界史に残る完成度の傑作を鑑賞し終えた評論家のように、驚きとそれを上回る興奮に満ちた吐息を大きく吐き出した。

「長年、表でも裏でもありとあらゆる品を鑑定してきましたが……よもや極東の片隅で、このような奇跡の産物に出会えるとは」

鑑定士が恭しい手つきでアタツシユケースへ戻したのは紅い原石  
ルビーだ。

掘り出した際以外に手が加えられていない隆起した形状に反比例する、鮮血のように紅いと同時に見つめているとそのまま吸い込まれてしそうな、深い透明感を湛えた美しい色合い。

未加工でありながらそのまま有名美術館に飾られても違和感が無い程の輝きを放つ宝石——そのサイズは赤ん坊の握り拳程。

「最高級のピジョンブラッドに匹敵する品質、それも輝きを高める為の加熱処理といった人の手が全く加えられていない状態でこの美しさ。サイズも重量もこれまで流通してきたルビーの中でも間違いない最大級です」

発色を高める加熱処理が行われたルビーと人の手が加えられる必要を持たぬ程に美しい輝きを最初から放つ非加熱ルビー、価値と希少性どちらも後者の方が圧倒的に高い。加熱処理の有無はシルクインクルージョンと呼ばれる針状の内包物が存在するかどうかで判別出来る。

そんな代物が10カラット<sup>1</sup>や100カラット<sup>2</sup>ではきかない規模で目の前に存在しているのだから、担当する鑑定士の目が夢見心地に近い熱に浮かされたような眼差しとかがしているのも仕方ないのだろう。

無様を晒す鑑定士の目を覚まさせようとするかのようにピシヤリとロニーが鋭い声を発した。

「能書きはいい————値札をつけるとしたらどれぐらいになるのか  
教えろ」

ハツと我に返った鑑定士はハンカチを取り出して額の汗を拭きながら「そうですね……」と考え込む素振り。

(何年か前だかにミャンマー産で20だか25カラットだかの非処理のルビーがオークションにかけられた時は10億円だかの値が付いたってニュースで見たなあ)

直立不動でぼんやり記憶を掘り起こす伊丹を余所に、ロニーの下へ近付いた鑑定士がボスの耳元へ口を寄せた。

「……………」

鋭利な目つきを僅かに、だが周囲からも分かる位に見開いたロニーが鑑定士の顔を見返した。

鑑定士は新たな汗を浮かべながらも大真面目に頷きを返した。どうやらマフィアの親玉の度肝を少なからず跳び上がらせるだけの価値があると鑑定士は判断したと見える。

予想通りの反応なので持ち込んだ伊丹は平然とした顔だ。耳打ちした内容を拾ったらしいロニーの取り巻きの一部は、そんな伊丹を得体の知れない幽霊を見るような目で見つめ始めている。

まあ伊丹の場合は上には上人間の頭脳のダイヤ原石がある、何だったら一時期は所有砕いて戦友に分け与えたもしていたからというのが大きいのだが。

実の所、巨大ルビー原石の出所は炎龍討伐報酬の超巨大ダイヤと同じだった。

すなわちダークエルフ。

そもそも件のダイヤ原石を彼女達が何処で見つけたのかというと、シユワルツの森のすぐ近くに存在する鉱脈からだった。それも特地

の文明レベル、素手や原始的な採掘道具で容易に採掘出来てしまう程の大鉱脈が。

ダイヤだけではない。異世界特有の現象、或いは冥府が存在するとされる地下空間の主として崇め奉られるハーデーの気まぐれによるものか。炎龍討伐によって故郷へ帰還を果たしたダークエルフに行した自衛隊の調査により、ルビーやサファイアといった複数種の寶石・貴金属類の鉱脈の存在も発覚したのである。

残留部隊の資金源に鉱山経営が加わった瞬間だった。

無論、鉱山の開発はシユワルツに住まうダークエルフ達の生活環境へ影響を齎さない範疇に留めている。

そもそも地球との『門』が失われたせいで大規模な開発に必要な重機類を自衛隊は所持していないし、現地へ運ぶ手段も極めて限られているのだから。現地民の手を借りての人力か、ヘリで運べるサイズの小型シヨベルボイを使っての地道な採掘が今の彼らの限界だった。

むしろ素人の手仕事レベルで子供の握り拳サイズのルビーや人の頭程もあるダイヤの原石が見つかるような鉱脈がこうも地表近くに同時に存在している現実には、第二科を筆頭に天然資源にそれなりの知識を持つ一部の幕僚が引つ繰り返ったとか目を回したとかなんとか。

余談だが、特地に於いて地下資源は先にも述べた通り冥府の主ハーデーが齎す物とされている関係上、アドバイザーロックスの指導を受けた自衛隊は採掘された資源や上がった利益の一部をジゼル経由でハーデーを祀るベルナーゴ神殿へ支払っていたりする。

これを怠ったり、下手にゴネたら最後、文字通りの神罰が下りかねないのが特地の恐ろしい部分であった。

どうせなので伊丹は追い打ちをかける事にした。混乱している敵は最大火力で以って叩けるだけ叩け、教範にもそう記載されている。

「ちなみに今回持ち込んだそれは手付金にして、正式な取引成立後に

は更に同等の品を2つ、代金としてお渡しさせて頂きます」

鑑定士は卒倒した。

白目を剥いた鑑定士は即座に部屋から運び出された。

伊丹は胸の内で手を合わせた。ナムアミダブツ！

「オーケイ。テメエの売りたい物は分かっただし商売相手としてどれだけの値打ちがあるかもよく分かった」

次の質問だ。そつちが、俺達に求める品は何だ？」

そう訊ねるロニーは最初よりも心なしか肩が落ちているように伊丹には見えた。

「外で待たせている部下を呼びたいのですが宜しいですか？」  
「構わねえがくれつぐれも変な真似をさせんじやねえぞ」

合図を受けて入室してきたのはプライスだ。大量の弾薬と破片・発煙・閃光各種手榴弾が揺れるチェストリグを羽織った護衛モードの老兵は、数十もの剣呑な眼光を浴びても平然とした様子で堂々と伊丹の元まで歩み寄る。

「爺さん、例の目録を」

「これだな」

アサルトライフル用のマガジンポーチよりも大ぶりな、救命キット等を収めるのに使う多目的ポーチからプライスが取り出したのは2つ折りにした紙束だった。



A4サイズで数十ページ分。もしかすると100枚を超えるかもしれない厚さ。

「持ってこいアマディオ」

プライスから伊丹へ、伊丹からアマディオと呼ばれた中年の構成員を経てロニーの手元へ。

受け取ったロニーが書類へ目を落とす。英語で延々と項目が綴られている。1枚目、2枚目、3枚目。

5枚目の最後の行まで目を通したところでロニーが顔を上げた。矯正器具が嵌った歯を剥き出しにした彼の目が怪訝そうに伊丹を見据えた。

「オイ何だこのリストは？」

「ウォルマートに負けない品揃えが自慢だと名刺を頂いた方から伺いましたので、お言葉に甘えさせて頂く事にしました」

伊丹はにこやかに言ってやった。伊丹の返答を聞いたロニーの顔がぐるりとベニーノへと向けられた。

今度ばかりはベニーノは体中気持ち悪い汗を流しながら、直立不動で黙りこくる以外の反応しか出来ないのだった。

グイスコンティ・フーズの片隅に存在する小部屋の主は、入ってきた同僚の足音を聞いて真新しい液晶ディスプレイから顔を上げた。

「フォーアイズ眼鏡女、ボスから特急の仕事だ。このリストの商品を取り扱ってる

街中の店を洗いざらいリストアップしとけ」

部屋の主はイタリアンマフィア・ロアナプラ支部の表の顔である  
ヴィスコンティ・フーズ直属の構成員としては珍しい女性だった。

それも中国人の若い女だ。ショートカットに黒ぶち眼鏡の外見と、  
まだ着慣れないノーネクタイのスーツと相まって、その見た目はマ  
フィアの構成員というよりも会社に入社したての新入社員と言われ  
た方がよっぽど納得出来る。

業務用デスクに放り投げられたリストの束へ目をやった彼女は、リ  
ストの厚みと大量に羅列された品目に目をひん剥いた。

「ちよつと！　これだけの量を一人でやれっていうつもり!？」

「うっせえこつちだつてこれから動ける奴全員でウチの息がかかつて  
る店を回らなきゃいけねえんだ！」

今やつてる仕事は後回しにして先にこつちを特急で片付ける。い  
いか超特急でだぞー！」

語彙も荒ければ足音も荒く書類を持ってきた構成員は部屋から飛  
び出していった。

突然の来客で男どもが何やら騒いでるのは彼女の下にも伝わって  
来ていたが、一体何事だったのやら。銃を片手にしていた持つてはい  
なかつたから硝煙臭い事態ではなさそうだが。

「注文通りの機材を用意してくれるのは有難いけど、この手<sup>P</sup>に明<sup>C</sup>るい  
人手も増やしてくれないかしらね」

ブツブツ漏らしながらリストを手取る。延々と箇条書きに並ぶ  
細々とした文字にげんなりしながらも、一通り目を通す。

ページをめくる内にレンズの向こうの目が少しずつ細められてい  
く。

「なあにこれ、普通の品物ばかりじゃない」

上は食料から下は建築資材まで、あらゆる種別のあらゆる品目がりストに羅列されていた。

そこいらの市場に行けば簡単に手に入る野菜と果物があるかと思えば、幾つかページをめくると（非合法を含む）医者しか使わないような薬品名が記載されていて、別の項目に目を通すと製品名は書かれていない代わりに、何々トントラック用のパーツだとかどのグレードのエンジンオイルだとか条件だけ妙に詳細に指定された品目もあつたりする。

少なくとも一目通した限りでは、わざわざ悪徳の都の犯罪組織に発注するような内容とは思えない。それこそ弾薬も含め正規の各種販売店へ発注した方がよっぽど簡単だろうに。

「……んんっ？」

何度か繰り返し目を通していている間に眼鏡をかけた女は違和感に気付いた。

女は元軍人だった。中国人民解放軍に創設されたばかりのインターネットを用いた電子戦部隊の元スパイ。

ある任務でロアナプラへ派遣され、罊に嵌り、上官から見捨てられ、紆余曲折あつて身の安全を守る為にイタリアンマフィアへ身を寄せた。

今の彼女の立場は元職場で培ったスキルを活かした帳簿係だ。ネット上で様々な名義や迂回路を使い分けてイタリアンマフィアの汚れた金を綺麗な金になるまで洗う。存外話が分かる上司のお陰で意外と快適に働いている。

そんな彼女だからこそリストの違和感に真つ先に気付く事が出来た。

もしくは既視感。

品目、書類の形式、ぼかされてはいるが所々妙に詳細に明記された要求仕様――

「所々誤魔化してはあるけどこれ、軍が業者に発注する時に出す調達仕様書じゃない。

しかもこの規模って旅団相当……いえ、建築素材の発注も含まれているという事は要塞でも作ろうって訳……？」

元軍人で人的・電子的に集めた情報とその動きを読むスパイだったフオン・イツファイ馮亦菲だからこそすぐに気付けた。

塵も積もれば山となる。注文書全ての品を用意するのに必要な予算は膨大な金額となるのは間違いない。

ボスであるロニーは利益が確実に得られる絵図と算段を重要視するタイプだ。そしてヴィスコンティ・フーズ内の構成員がてんやわんやになっているという事はつまり、リスト通りの品を揃えれば膨大な利益が転がり込んでくるとロニーが確信し、取引を結んだという事だろう。

もしかすると既に手付金もリストを持ち込んだ取引相手から受け取ったのかもしれない。人手を総動員するに足るだけの額を。

それとも受け取らされたのか。

「これをボスに伝えて水を差すか否か、それが問題ね」

ともかくまずは与えられた仕事を済ませてからにしよう。最低限求められた仕事をこなしておかなければ、忠告を伝えるどころかこっちがボスから警告を物理的に与えられかねない。

フォンはリストを手に、電子の海へと繰り出すのだった。

「でも今回の調達でやっと物資不足が何とかかなりそうで、やー良かったっすね隊長」

「いや、完全には無理だからな？」

担当する車両から降りてきた倉田が発した呑気な発言を、兵員区画の座席に座った伊丹はバツサリと切つて捨てた。

「げ。マジすか？」

「当たり前だろ。教育課程でも教えられただろそこら辺。俺らが偵察隊の任務やってた時もどれだけ大荷物用意しなきゃいけなかったのか、忘れたのか？」

例えば現場で活動する歩兵が1日に摂取すべきと定められているエネルギー量は約3000キロカロリー。フリーストライなどの保存技術が発達しても食事の軽量化には限界がある。

最低でも2リットルから3リットルの水分補給。兵隊1人につき1日の飲食分だけで5キロ近くなる。低く見積もつてこの数字だ。

食事だけではない。炊事、洗濯、使用機材の洗浄——水は様々な用途にも求められる。これらを含めた場合に必要な水の量は1日で10キロにも達する。衛生面を考えると削る事も難しい。

それらを運ぶ輸送手段、車両や航空機が消費する燃料はそれ以上だ。燃料分も込みで計算すると、現代に於いて前線の兵隊を1人養う為に必要な物資の総重量は何と100キロにも及ぶ。基地の稼働に不可欠な電力を生み出す発電機にも燃料が必須だ。

戦闘が任務である歩兵には武器と弾薬も必要となる。

樹脂の多用によつて軽量化が進んでも尚、火器というものは歩兵用のライフルでも軽く3キロ越え、ロケット砲などの銃火器ともなれば10キロ越えもザラ。それらの輸送も同時に行えば消費される燃料の桁も更に跳ね上がる。

現在悪所街事務所などの人員を含め特地に取り残された自衛隊員は3000名弱。

水と食料だけで30トンもの物資が毎日消費されていく計算だ。帝国を掌握したピニヤ、レイ・テユカ・ロウリイを筆頭とした現地住民の協力を得て現地の食材を日々調達してはいるが余裕はなく、燃料や医薬品などに至つては特地での調達も不可能だ。

その上『門』崩壊前後に発生したゾルザル派工作員の大規模同時攻撃によつて多大な被害を受けたアルヌス駐屯地の復旧及び麓の街の復興に多大な資源と機材の投入を強いられ、酷使せざるをえなかった輸送車両や重機類の整備用機材や交換部品も払底寸前。

水と並んで衛生管理に不可欠な、特地では高級品の部類だが地球ならそこいらのコンビニで容易に手に入る石鹼や洗剤等の衛生用品も、衛生面が極めて悪い特地であるが故にその消費は激しい。

特地に取り残された自衛隊はあらゆる備蓄の底が見えつつあった。だからこそこの今回の作戦だった。

「日本政府が最初に特地に俺ら<sup>自衛隊</sup>を派遣した時だつて需品科と輸送科、民間の流通業者も全国から総動員して何週間もかけてようやく補給体制を整える事が出来たんだ。

日本つていうインフラが整つた国でそれなんだぞ？ 裏で世界中に根を張つてゐるつていつても、マフィア一つ程度じゃ掻き集めるにも当然限界はあるさ。

だから今回調達を依頼した分は国から普段受けてた補給分よりも量も種類もかなり削つてあるんだつてさ。特地で補給出来ない、地球でしか用意出来ない品中心なんだと」

「あー。燃料とか弾薬とか？ 車の予備部品や医薬品の備蓄も大分ヤ

バいつて、俺も需品科の同期から聞いた覚えあるっす」

車両の予備部品はこの世界の年代に出回る民生品の中から、特地側に存在する自衛隊車両と規格が一致するパーツを中心に発注が予定されている。

航空機関係のパーツ類は流石に特殊な為、今回ロニーに依頼した中には含まれていない。

『門』が崩壊した時のドタバタで負傷者続出な上に診療施設も襲われて、設備とかなり被害受けてたからなあ」

部下兼嫁を助けるべく向かった診療施設の現場を目の当たりにしている伊丹は、当時を思い出してしみじみと呟いた。

医薬品の中には凍結血漿やワクチンといった、嚴重な温度管理が求められる物も多い。

それらを保存する冷凍庫や保管庫がダーによる破壊行為によって荒らされたり、配線を破壊されて温度管理が保たれず使用できぬまま失われてしまうという被害も少なからず発生していたのだった。

燃料に関しては止むにやまれぬ事情だったとはいえ、伊丹も窮状の一端を担ってしまっている。

——ノヴァ6の起爆に巻き込んだ方に及ぶ帝国兵の亡骸。直後の大雨によって無毒化が進んだとはいえ、生物兵器に汚染された大量の死体を焼却するのに大量の燃料が投じられたからだ。

その後の<sup>キングスレイヤー作戦</sup>皇宮強襲作戦に於いても大量の機甲兵器を動員し、比例して燃料の消費も跳ね上がった。

この影響で特地残留部隊では現在、特に燃料消費が激しいヘリや空自の航空機部隊が大幅に活動制限を受ける羽目に陥っている。

活動に投入するにしても今や1度に1機か2機が精々、しかも燃料



制限付き。そんな有様なのでヘリ主体の第4戦闘団を仕切る健軍一佐や神子田・久里浜の空自パイロット組はやきもきしてたりしてなかったり。

今頃は前線暗号名：カルデア司令部の輸送科組が無人機の偵察画像で見つけた郊外のガソリンスタンドに向いては、同行した第二科が昨日伊丹が調達した札束で店主の頬を引つ叩いて根こそぎ買い漁り、『門』からアルヌスへ運び込んでいる頃合いか。

ロニーの所に依頼した品々の引き渡し完了するまでの間、店主達に協力を依頼して今後スタンドに補給される分の燃料も自衛隊が買い占める契約も締結済みだ。ただその分の支払いに使う現金も伊丹達が追加で調達する必要がある。

今度の作戦では稼働率を落としていた輸送車両も大盤振る舞いで投入されている。

とはいえ自衛隊の車両を異国で走らせるのは必要最低限に止めておきたいという上の判断により、結果街で活動する伊丹達に今回与えられたのが海外製アメリカ製 ロシア製 オーストラリア製で統一されたこれらの車両であった。

各国の諜報員も屯するロシアプラで見える者が見れば一目で判ってしまう自衛隊車両よりも、いつその時代では未だ開発されていない車両を走らせた方がまだ誤魔化しが効くと、司令部の幕僚らは判断したのである。

「幸い『門』の再開通の目途は立ちつつあるわけだし、最低限正式な『門』が完成するまでの期間を持ち堪えられるだけの物資を調達出来ればそれで御の字なんだよ」

「マジっすか。俺、久々にコメが食えると思っすっげー楽しみにしてたんすけど!?!」

「コメについては特地にも一応あったじゃん」

「向こうのと日本のとじゃ全然違うんすよ！ あと味噌と醤油も!」

「気持ち分かるけどさあ……あ、でも確か注文票の中にあっただ味噌と醤油」

「やったぜ」

倉田、渾身のガッツポーズ。気持ちは分からんでもない、と伊丹も苦笑。

味噌と醤油は司令部のお偉いさん方も真面目な顔で調達量を相談し合う程の重要物資として扱われていた。

「弾薬類もさっきのマフィアの人達に頼んだんすか？」

「いやそっちは他の品の調達だけで手一杯だから業者に話は通しておくんて俺達の方で直接交渉してくれだつて」

「業者って……あああそこっすか」

原作履修済みのオタク2人の脳裏に浮かんだのは、グロックやらデザートイーグルやらM60機関銃をぶっ放すシスターと牧師見習いが居る教会であった。

「そう、あそこ。今日中に連絡はしておいてくれるそうだから、俺達が伺うのは明日以降になるかねえ。今度の相手はいきなり押しかけての交渉はあまり通じ無さそうだし」

「でも大丈夫っすかね。あそこって確か原作じゃCIAの——」

「背に腹は代えられないでしょ。文字通り軍隊を賄えるだけの弾薬なんて街の密売人程度じゃあまず無理だ」

「ですよー。そっちも上手くいけば取引出来たら良いですなー」

「そうだなあ」

「昼飯買ってきたぞー」

ユーリの声に伊丹と倉田が車の陰から顔を覗かせてみれば、大きな紙袋を抱えたロシア人とルマジュールが通りの向こうからやって来

るのが見えた。

昼飯を待っていた護衛役の隊員達もぞろぞろと降車して待ち構える。ファーストフード店前に並ぶ装甲車の列と完全武装の男達を、例によって店員も他の客もおっかなびっくりといった体で遠巻きに眺めていた。

「待ってました！」

「飲み物は皆コーラで良かったか？」

「久々の文明の味なんだ、皆文句はないさ」

いそいそと紙袋の中身とストロー付きの紙コップを受け取る隊員達。

包装紙を剥くと日本基準よりも一回りは大きいハン<sup>ワッ</sup>バー<sup>パー</sup>が顔を覗かせた。焼き立ての肉と野菜とチーズに、特地では今や貴重品である化学調味料たっぷりソースが混然となった匂いが途端に溢れ出し、一斉に涎が湧いた隊員達は反射的に喉を鳴らす。

誰が合図するともなく男達は一斉にハンバーガーへかぶりついた。しばし咀嚼。ゴクリと呑み込む。

その様子を愉しそうに緩く笑いながら見守っていた伊丹が悪戯っぽく聞いた。ユーリも自分の分を取り出しながら微笑ましげにしている。

「感想は？」

「……文明の味がするっす」

倉田がホロリと涙を浮かべ、他の隊員達も揃って首肯した。

そんな光景を見せられたルマジュールは、ダイエツトコークのストローを銜えながら怪訝そうに首を傾げたのだった。

「次に案内して欲しい場所は決まってるのかよ？」

「そうだねえ、今度は服屋をお願い出来るかな。出来れば古着でもいいからまとめ買いが出来る所が良いなあ」

昼食を取り終えた伊丹達は次に古着屋で地元住民が好むラフなデザインの衣類を100名分ばかり購入し。

男物の派手なアロハシャツやら洗いざらしのズボンやらを雑多にまとめて放り込んだ袋が装甲車へ運び込まれていく様子を横目に見ていた伊丹はふとある用事を思い出し、何故か仲間達へ聞かせまいとするかのようにルマジュールに小声で尋ねた。

「すまないけどこの街で……」

耳打ちされた内容に、ルマジュールが見せた反応は「はあ？」と言いたげに思い切り顔を歪める事だった。

「……アタシが知ってる店で良いなら構わないけど」

「よろしく頼みます！」

伊丹は両手を合わせてルマジュールを拝んだ。

購入した古着を積み終わり、装甲車の車列が移動を再開する。

「次はどういう店に行くんだ、伊丹」

ブッシュユマスターの助手席に乗り込んだ剣崎が質問すると、伊丹は少しきまりが悪そうに頭を掻いた。

「それなんだけど、次はちよつと私用で寄りたい店があつてね。悪いけど皆もちよつと付き合ってくれないかなあ」

「おいおい良いのかよ。今も任務中だろ一応」

「わーかつてるって。でも此処ロアナブラに居る時じゃないと買えない物を頼まれちゃっててさあ。皆には悪いけどちよつと付き合ってくれよ、なっ」

『俺は別に構わないっすけど寄りたい店って何なんです？ あ、アニメシヨップなら是非俺も同行を……』

『調子に乗るな馬鹿』

『あ痛っ』

無線越しに助手席の仲間から小突かれる音と倉田の呻き声が聞こえ、やり取りを聞いていた他の隊員達の笑い声が通信回線に響く。

「――で、寄りたい店がここか」

到着した店の前に立ったプライスの声には大いなる呆れと、少しばかりの冷たさが籠められていた。

案内人であるルマジュールの隻眼から放たれる視線も似たようなもので、2人の声と視線を浴びた伊丹は居心地悪げに苦笑いを浮かべる事しか出来ない。

その店が何を売りにしているのかは、道路に面するウィンドウ内に設置されたマネキンを見れば一目瞭然だった。

そこは女物の下着屋であった。それもけばけばしいネオンが並ぶ街角に立って報酬と引き換えに一時の快楽を与えてくれるお仕事の女性が着ているような品物も堂々と展示している類の店だった。

「いやそのあはは、実は志乃が前々からブラのサイズが合わなくなっちゃったってボヤいててさ。しばらくは我慢して使ってたらしいんだけど、ついこないだホックがどうとう耐え切れずに壊れちゃったらしくてね」

「え、嘘でしょ。まだ成長してるんすか!?! あれで!?!」

一時期同じ隊だったので栗林の胸囲の戦闘力をよく知る倉田は驚きの声を上げた。

「志乃って誰だよ」

そのすぐ横でルマジュールが白けた顔で誰に向けるまでもなく疑問を呟いた。彼女の問いをプライスが拾った。

「<sup>伊丹</sup>コイツの嫁だ」

「所持持ちだったのか……」

「それも2人目だ」

「おまけにバツイチかよ」

どんな奇特な女がこんな間抜けの皮を被った化け物とデキたんだか、というのがルマジュールの率直な感想だった。

嫁以外にも異世界の魔法少女にエルフにダークエルフに本物の神様と実質一夫多妻関係を結んでいる事など、想像のしようがなかった。

「とにかくすぐに戻るから待っててくんない？ ああでも流石にここだとお店に迷惑だから、其処の角の所に車を移動させといてくれ」

ヴィスコンティ・フーズの時は示威目的だったから敢えてそうしたが、流石に伊丹も女物の下着屋の前に仰々しい装甲車の群れを屯させるのは如何なものかと感じるだけの気遣いはあった。

「で、誰が伊丹に付いてく？」

「……」

護衛要員の間には沈黙が広がった。

伊丹が護衛対象と設定されている以上、1人だけ行かせるのは（例え本人がこの中の誰よりもキルスコア直接殺害数が高い半不死身の死神であったとしても）問題だが、さりとて非常時でもないのにあの空間へ男だけが入っていくのは何だかなあと彼らが躊躇ってしまうのも仕方のない事ではあった。

微妙な空気を破ったのは手を掲げた倉田だった。

「んじゃ俺が隊長に付いてくつすよ」

第3偵察隊時代からの付き合いである倉田は派遣部隊の中でも若手かつケモノーだが、炎龍との初遭遇戦を筆頭に第2次アルヌス攻防戦や皇宮強襲作戦にも何だかんだで最前線で参加し。

帝国掌握後も混乱する特地での反抗勢力討伐作戦で場数を重ねるなど、栗林や富田には及ばずとも若さの割に場慣れした、充分に猛者と呼べるだけの経験と胆力を持つ隊員なのである。

でなければ今回の護衛部隊にも選抜はされてしまい。

「おう、頼むわ倉田。でも装備目立たないのに換えてけよ。TPOはわきまえないとな」

「ういつす」

特戦群組が所持していたMP7と中身をMP7用のマガジンに入れ替えた弾薬ポーチの上から、古着屋で調達したばかりの衣類の中から適当に選んだ派手な柄のアロハシャツを羽織って隠す。海外規格のサイズは日本人からしてみれば大柄なので丁度良かった。

店へ案内したルマジュールも同行する。

「この際だから俺もペルシアへのお土産此処で買ってって良いっすかね?」

「別に構わないけどちゃんと自腹で買えよ? 俺だってそのつもりなんだからな」

「分かっていますって」

3人の姿が下着店の中に消えると、装甲車も移動を開始した。と言っても数十メートルと走らずに角を曲がった所ですぐにまた停車し、伊丹達がいよいよ物々を終えるのを待つ。

車列が下着店の前から去ってから十数秒後。

「さーて次は其処の下着屋寄るねー」

「……まだ寄るのか……」

「……シエンふお、ア、の、買い・モノ・は……いつも・なが・い……」  
「ロットンは私の世話なてる極潰したから家主の私の荷物持ちする義務当然よ。ソーヤーはゴスこだわるなら下着ももどこだわるいいね」

チャイナドレスの美女と黒コートの青年とゴспанクファツションの女性が連れだって下着店に入っていくのを、隊員達は見逃してしまっただった。



然程広くない店内へ足を踏み入れた伊丹と倉田を極彩色が出迎えた。

昼間にもかかわらず薄暗い店内を赤・青・黄・緑・紫・白・黒・銀・金とあらゆる色の下着が棚とハンガーラックとマネキンを彩っている光景は、血と硝煙と泥に慣れてしまった兵士2人でもつい尻込みしてしまいたくなるような独特の迫力を放っていた。

「うおおっ。こういう店入るの俺初めてだぜ。何っーか凄い場所だな……」

「俺もっすよ。つかぬ質問ですけど隊長は前の嫁さんと一緒に下着買いに行ったりとかは……?」

「梨紗のヤツはユ○クロかしま○らで済ませてた口だからこういう専門店とかは全然無縁で——」

ぐるりと店内を見回していた伊丹と倉田の視線が示し合わせたかのようにある一点で止まる。

その区画には外側に向かってシリコン製の御立派なモノを生やしたストラップ付のパンツが何種類も陳列されていた。

日本の真つ当な衣類専門店ではまず見かけない類の下着(?)だった。無意識に尻に寒気を覚えた伊丹と倉田は見なかった事にした。

店の面構えで何となく察していたつもりだったが、案の定単なる下着屋だけでなく大人向けの玩具やあれやこれやも取り扱っている店だったらしい。

「あらあ、貴女確か前にレヴィと一緒に来た子よねえ？　新しい下着をお探しい？」

店員か、他の店員の姿が無いのでもしかすると店主かもしれない。カウンターに立つ30がらみのラテン系の女性がルマジュールへ声をかけた。

日本人の基準だと少し肉付きが多く感じるが、それでも十分以上に魅力的なメリハリの利いた肢体を上はチューブトップ、下は豊かな太腿と尻肉に隠れてしまいそうな位大胆にカットしたホットパンツで最低限隠している。

露出の激しい格好を堂々と着こなす様子やどこか必要以上に艶っぽい雰囲気から察するに、性病や薬物中毒にかかって破滅する事無く金を貯め続け、遂に自分の城を手に入れて第2の人生を始めた元商売女なのかもしれない。

少なくとも大きめのアロハの下からMP7と戦闘用装備のシルエットを僅かに浮かび上がらせた倉田を、チラリと一瞥しただけで表情は全く変えなかった辺り、やはり彼女も悪徳の都の住民という事か。

「客はアタシじゃないよ。こっちの野郎2人。自分の女への土産が買いたいんだってさ」

「あら〜そうなのお？　恋人？　奥さん？　それとも愛人？　どんなプレイに着的物をお求めかしらあ〜？」

緩い口調に反して身動きする度に揺れて激しく自己主張する胸と腰回りがとても目に毒だった。

付け加えるなら、下着屋で働いているにもかかわらず（というのは語弊があるかもしれないが）女性はノーブラだった。

何となく、伊丹の脳裏に谷間もへそも股ぐらも丸だしな改造白ゴス神官服モードのジゼルが存在が蘇った。いかん惑わされるなど己を

叱咤しつつ、希望の品をラテン系店主へ告げる。

「そのですね、嫁が子供を産んで今授乳中なんですけど、そういう女性向けの下着ってどんなのがあるもんなんですかね？」

「母乳プレイ用ねえ。勿論そういうプレイ用の下着も揃えてるわよお。」

「いや母乳プレイで」

脱力のあまり腰砕けになりそうな伊丹であった。薄い本でも時たま見かけるプレイではあったが、生憎伊丹の琴線や性癖からは外れていた。

母乳というのは赤く見える原因となる赤血球が含まれていないのを除けば実際は血液に近い成分（そもそも母乳自体は血液が原料）であり、大人が飲んでみるとあまり美味しいものではないらしいと雑学で知っていた点も大きかったり。

「奥さんの胸のサイズはどれぐらい分かるかしらあ？」

「幾つだったかな、以前は92って言ったのは覚えてるんですけど」

胸が成長して以前のブラが壊れてしまった事は聞いていても、肝心な現在のバストが如何程か栗林に聞いておくのを伊丹は失念してしまっていた。

「んく分からないかあ。ならあ、旦那さんは奥さんの最近の写真は持ってたら見せてくれない？」

「あ、写真なら持ってます」

言って、伊丹ははがきサイズの写真を懐から取り出した。ルマジュールとラテン系店主、何故か倉田も頭を突き合わせてその写真を覗き込む。

カメラ付き携帯電話が登場して早四半世紀近く、今や写真アルバムは携帯の画像フォルダに取って代わられ紙の写真も急速に廃れつつあつても、大事な思い出として残したい記録だけは、伊丹は写真が趣味の部下（笹川）に頼んで残すよう心掛けている。

データのみだと携帯端末が壊れてしまったらその時点で閲覧出来なくなってしまう。

ならばクラウドにバックアップしておけばいい、なんて今時の意見への反証はロシア軍のアメリカ東海岸侵攻中に発生した核ミサイルの高高度爆発が齎したEMPによる電子インフラ崩壊という形で現実化してしまった。

高度な対EMP防護が施されていた一部を除き、米政府機関を筆頭に東海岸へ設置されていたデータサーバーは、膨大な電子記録共々ただの金属線とシリコン製の残骸の山へなり果てた。東海岸とそれ以外の地方にデータセンターを構えていた企業・機関の明暗は文字通り天国と地獄に分かれた。

そもそも、ネット上に溢れる最前線の兵士が記録したという動画像の多さに錯覚しがちだが、作戦活動中に私物の個人用端末を最前線へ持ち込むのは機密保持の観点からも規則違反だ。

軍や情報機関クラスなら携帯のGPSから所在を把握する事など容易い。テロ組織がSNSに写真を投稿したら背景から所在を特定されて軍隊が爆撃機を送りこんだ、なんて事例もあるのが今の時代である。

ただの紙の写真ならそんなリスクはない。携帯端末の精密な回路を故障させる過酷な環境下でも、小さな紙1枚に綴られた記録は残り続けてくれる——たとえ悪意ある者が真実を隠蔽し、偽の歴史を刻もうと試みようとも。

伊丹の手元には何度も折り畳まれ、擦り切れかけても尚捨てずに残し続けている写真がある。

ソープ、ゴースト、ローチ、TF141の隊員達——今は亡き

戦友と共にプライスと肩を並べて撮った写真。

箱根―大島空港で勃発した戦闘後の情報公開で隠蔽されてきたF141の活動が世界中を駆け巡るまでは、この小さな紙切れだけが戦友達が確かに存在した証拠だった。

最近ではプライスとユーリとニコライ、野本達備兵組、そこに加えて栗林と特地女性陣4名との写真も増えつつある。

伊丹が取り出した写真は栗林が伊丹の子供を出産後、退院した直後に撮影した物だった。

2人してOD色のシャツ姿の伊丹と栗林が映っている。伊丹は右手で小さな赤子を抱き、反対側の左腕に満面の笑みの栗林が抱き着いてピースサインをしている、そんな写真。

(やっぱり兵隊上がりかよ。日本人ならやっぱ自衛隊なんだろうけど)

写真の服装に対するルマジュールの心中での呟きはさておき、話題の焦点はやはり伊丹と共に映る栗林である。

「あらあらあらあ、貴方の奥n o v i aさん凄いモノを持つてるのねえ〜」

「何喰って育ったらこのタツ身パ長でこんな乳長に育つんだ？」

「すっげ、隊長の腕が完全に谷間に埋もれて見えないっす」

上からラテン系店主、ルマジュール、倉田だ。150センチ足らずの身長に反比例する栗林の胸部装甲の豊かさは海外基準でも衝撃的な様子。

伸縮性の高いTシャツなだけに隆起が激しい栗林のスタイルが―際強調されている格好だ。胸側の布地が引っ張られ過ぎて裾が足り

ず、妊娠して尚ほのかに脂肪が乗った程度にとどまった細い腰元や臍がチラ見しているのがチャームポイント。

「そおね〜。このバストサイズならあー……」

目測でおおよそのサイズを把握したラテン系店主はデニムの布地が食い込んで誘うような色気が強調された尻を揺らしながら、ハンガーラックを漁る事しばし。

「こんなのはどおかしらあ〜？」

そう言つて差し出された下着を見て伊丹は一言。

「あの、普通の下着で良いんですけど」

スケスケだった。フリフリだった。大事な所が隠れていなかった。一言で言えばエロ下着の類だった。縁取りにフリルがふんだんに使われてはいるが布地は明らかに透けてしまいうぐらいに薄く、普通真っ先に隠すべき胸の先端や下腹部の中央部の布地がくり貫かれているといった塩梅だった。

伊丹も詳しい知識を持つていないが、普通の授乳用ブラとというのはカップを簡単にずらせたりホックを簡単に着脱出来るようにした物であつて、最初から敏感な部分が露出してしまっているのはそもそも下着の役割を果たしているのだろうか？　グェrボブ伊丹は訝しんだ。

「え〜？　この街の女は皆こんな感じの下着を愛用してるわよお〜？」

店主の発言に思わず伊丹と倉田の視線がルマジュールへ吸い寄せられた。隻眼黒スーツの女の額にぶつとい青筋が浮かんだ。

「そんなの履いてるのは商売女ぐらいだつての。それからその野郎2人、今度んな目でアタシを見たらその節穴の目ン玉の代わりに鉛玉で穴拵えてやるからね？」

「申し訳ありませんっ！」

男2人は腰を90度まで曲げて謝罪した。どこぞの天狗面も賞賛しそうな素早い判断であった。

「でも、旦那様はこういうのを着てみた奥さんとか見たくないかしら〜？」

「……………」

ちなみにこれまで栗林が愛用していた下着は緑の迷彩柄という色気もへったくれもないハーフカップブラである。

伊丹は栗林の裸身を思い浮かべた。妊娠中は彼女とはご無沙汰だったが、簡単に脳裏で再現出来る程度には記憶に焼き付いている。

次に笑顔のラテン系店主が掲げる下着を目に焼き付けて、脳内で栗林の裸身と重ね合わせる——頭部にマグナム弾が直撃したかのような錯覚。

無意識に悩まし気な唸り声を伊丹は発してしまっていた。同人誌即売会で大ファンの作家の薄い本が目の前に2種類あってどちらかしか入手出来ない、そんな選択を強いられているかのようにだった。

「おっこれペルシアさん気に入りそう。すんませーんこれ包んでもらえるっすかー！」

「お買い上げありがとうございます」

一方倉田は即決で布地少な目の紐水着を確保した。

悩む伊丹の背後でガラガラとドアチャイムの鳴る音。

その音によって思考が途切れた伊丹は新たに店の扉を潜った客へと顔を向けた。

少し暗い店内に慣れた目と外の明るさが逆光となって詳細を捉えるのに少しばかり時間がかかったが、女・女・男の3人組であるのはシルエツトで判別出来た。

やがて目が順応していくに従い、3人組の客の詳しい様子が認識出来るようになっていく。それは倉田も同様だ。

両者が客の正体を悟ったのはほぼ同時だった。倉田が早口に伊丹へ小声で囁く。

「隊長あの3人って」

「皆まで言わなくても分かっているよ。原作キャラだからってジロジロ見るんじゃないぞ」

「ハァイ!?! 元気してるねー? 景気はどうよー?」

刃物の扱いを得意とする本省人の荒事屋、シエンホアが独特の言葉遣いで気さくにラテン系店主と挨拶を交わした。スリットが深いロング丈のチャイナドレスから覗く美脚が眩しい。

彼女に続いて入店してきたのは、小柄なゴスペルク系女性ながら大型のチェーンソーで人間を解体するのを生業とする人工声帯ユーザーの掃除屋ソーヤー。最後にサングラスにロングコートに銀のアクセサリーという中<sup>中二病世代</sup>高生が好みそうなファツションを山の様に抱えられた買物袋で台無しにしている色男ことロットン・ザ・ウィザードが姿を現した。

「あ、シエンホアの姐さん」

「おうルマジュールもこの店来てたね。珍しいか」

「アタシは仕事つす。街の外から来た客のガイドに雇われたもんで」



ルマジュールがその声を上げたのを伊丹の耳が拾った。伊丹と倉田は今知ったのだが、彼女もまたシエンホアの知り合いだったらしい。

シエンホア達もルマジュールの方へと意識を向け、自然と3人もルマジュールの近くに居た伊丹と倉田の姿を認識し――

シエンホアという女は如何なる鉄火場でも化粧と爪の手入れを欠かさぬ中華美人であるが、その本質は銃を持つ獲物の命を愛用の柳葉刀や飛刀投げナイフで刈り取り、些細な一挙一動のミスが死を招く殺し合いの場へ敢えて不安定なピンヒールを履いて挑む事を鍛錬の一環として自ら強いる程の武人だ。

ソーヤーは人体専門の掃除屋として死者だけでなく抵抗する者も抵抗出来なくされた者も等しく愛用のチェーンソーで只の肉の塊へ変えてきた。また（ロアナプラでは珍しくないが）向精神薬を常用する重度の躁鬱気質持ちでもある。

時に様々な形で死と密接に触れてきた者でも極一部にしか備わらない超感覚というものがある。

前者は幾度も命のやり取りを交わし、殺し、生き延びては功夫クンフを積み重ねる武人として養われた観察眼と第六感が。

後者はあらゆる死と向き合う続ける内に自然と備えるようになった死の気配に対するセンサー、或いは精神のバランスを崩し現実という世界から頭のアンテナが僅かにずれてしまったが故の、常人には見えない彼女にしか見えないナニかを認識するようになった眼を持ち合わせていた。



Knockin' on Warfare Gate  
e18

熱河電影公司。

その正体はロアナプラを仕切る大組織の1つである香港マフィアの表の顔である。

ケーブルテレビの本社を名乗ってはいるが、ロアナプラに居を構えているこの場所で行われている業務は当然ながら真つ当というには程遠い。

犯罪組織の拠点というよりもそれこそ表向きの肩書通り大企業の本社ビルか、はたまた南国の有名リゾートホテルと見間違えてもおかしくない見事な面構えの、ロアナプラでも珍しい高層建築物でも一等立派なそのビルこそ、三合会ロアナプラ支部を仕切る張維新チャン・ウエイサンの根城。

そこは同時に、彼へ有象無象の刺客を近付けない為の要塞でもあった。

最上階のペントハウス。屋内プールすら備え悪徳の都を余すところなく一望出来る其処から、愛煙するジタンを吹かしながら今日も部屋の主たる張は腹心である彪ピウからの報告を受け取る。

「大兄、昨日から装甲車を乗り回して街を走り回っていた例の日本人リーベンレンが午前にはヴィスコンティ・フーズに出入りしていたのはお伝えしましたよね」

「ああ。1台だった装甲車が3台に増えて引き連れてる兵隊も3倍に

増えてたって話だろ？ あれから新しい情報が？」

「それすら自体に関しては途中でファーストフード店で買い込んだハンバーガーにかぶりついた後、市場で古着を買い込んでた位ですね。

ですが連中が出ていった後のヴィスコンティ・フーズの方でデカイ動きがあつたと報告が入ってます」

張は片眉を持ち上げる事で話題に興味を示した。

「ほう？ どういう動きだ？ 多国籍軍も真つ青の兵隊と機甲部隊を揃えた日本人と手を組んで戦争の準備でも始めたのか？」

「それが……ロアナプラ中の真つ当な品物を扱ってる問屋に電話をかけまくって発注を行ってるらしいんです」

「真つ当な……何だって？」

「ですから、食料品や医薬品に重機や車まで、ロアナプラここ以外の街でも合法的な商品を取り扱ってる業者に手当たり次第に発注を行ってるんです。それも大量に」

「そりゃ本当か」

「本当です。なんせ出所は注文を受けた当の業者で働いてる人間からですから。しかも立て続けに何軒もですからね。電話じや飽き足らずヴィスコンティ・フーズの構成員が直接総出で駆けずり回ってるって話も入って来てますよ」

普段はカタギの仕事に就いているが、賞金首や不審な人の動きを組織へ伝えて小遣い稼ぎに勤しむタレコミ屋はこの街に五万と存在した。

「ロニーの奴はショッピングモールでも始めるつもりなのかね」

「或いはショッピングモールを始めるのは日本人の方か」

「ま、可能性が高いのはそっちの方だろうな。」

それにしてもわざわざ自分達で業者に依頼して調達する方が時間も手間賃もかからんだろうに、そもそもこの街じゃなくてバンコクの

市場を利用すれば品質も価格も適正な商品をもつと簡単に仕入れられるのは分かりきつてる筈……

いや逆だな。普通の市場を利用出来ないからこの街で調達する事にしたのか？」

高級革のソファに身を預け、足の低いテーブル上へ無造作に足を投げ出しながら、上着を脱いだ張は思考を巡らせる。

思案に耽るその表情はしかしどこか気が抜けたような、困惑しているのが傍に控える彪からも見て取れた。

「……今は後回しにしても良さそうだな。だがまだ昨日の今日だ、例の日本人への監視は継続するよう手配をしておけ」

「分かりました。ホテル・モスクワロシア人共も監視を付けているようですが」

「好きにさせておけ。ロニーには災難だが、こっちの商売に影響するような真似をしない限りは静観で構わん」

その時、部屋に備え付けられた内線電話の呼び出し音が呼び出し音を奏でた。彪が電話を取る。

「俺だ、どうした——何だつて？ 分かった、人を集めろ。誰も入れられないよう全ての出入り口を固めるんだ」

彪の表情が険しく歪み、口から飛び出した指示も只ならぬ内容であつた。

こういう時の凶報は相場が決まっているものだ。張も立ち上がり、ソファアに無造作に投げ出していた愛用の黒コートを羽織り直す。

「敵か？」

「下の正面ロビーからです。スカーフで顔を隠した兵隊どもで満載になった車が複数、この建物を取り囲んでいると報告が」

「例の聖戦士共か。前みたいに事務所をヨルダンまで吹っ飛ばされる

のは御免なんだがな。

自動車爆弾に警戒するよう部下達に伝えろ。もし突っ込んでくる車があつたら武器庫からR P Gを引つ張り出してきてもいいから敷地内に飛び込まれる前に潰させろ。でなきや昨日のイエローフラッグに続いて今度は俺達が連中の大好きな自動車爆弾で月までかつ飛ばされる羽目になりかねん」

「下に伝えます。この部屋まで上がるルートも防御を固めさせますか？」

「最低限で構わん。敵をこの建物に入れないように防御を固める方を優先させろ」

彪が再び内線電話で指示を飛ばすのを横目に張は愛用のホルスターを腰へと巻き付けた。

特注の2丁拳銃用ホルスター。龍のレリーフを刻んだ特注のベレッタ76・自動拳銃が2丁、鈍い輝きを放っている。

「ヒズボラの時は水漏れのせいでラグーンの事務所まで吹き飛ばされちまつたし、今回はあまり好かないが穴倉に籠って事態を凌ぎたいところだが——？」

戦闘準備を整え、独りごちていた張だったが。

おもむろに地上20階オーバーの高さで広がる窓の外の風景へ目をやったかと思うと、サングラスに隠れた目を細めながらポツリ、と呟いた。

「参ったな」

「大兄？」

「彪、どうやら奴ら、俺達が考えていた以上に物騒だったようだぞ？」

次の瞬間、突如として猛烈な強風と爆音がペントハウス中を震わせた。

——数分前。

「——止すんだ、シエンホア」

「ちよつタンマストップ！ ストップ！ 皆武器を下ろすんだ！」

全員の動きを止めさせたのは武器を抜いたシエンホアの前に立ち塞がる形で翻ったロングコートと、伊丹が放った制止の叫び声だった。

両者のちようど中間に立つ格好だった伊丹と、シエンホアの前に割り込んだロツトンがそれぞれに手を突き出して止めに掛かる。

真つ先に応じたのは伊丹の部下であり護衛である倉田だ。緊張と疑問が半々といった表情をしながら、抜くと同時に外していたMP7の安全装置<sup>セレクト</sup>を射撃不能の『×』の位置へ戻した。ルマジュールもフランス語の悪態を吐きながらホルスターより抜きかけた拳銃の安全装置を掛け直す。

次にソーヤーの体軀が跳ねたかと思うと、彼女はロツトンの服に顔を強く押し付けてガタガタと震え出す。

まるで伊丹の姿を微塵とも視界に入れまいとするかのように。

一瞬で顔は蒼褪め全身も総毛立ち、暗い廊下でお化けに遭遇した子供よりも恐れ戦いているのが伊丹側にも手に取るように伝わってくる。

「そこどくね、ロットン」

「……落ち着くんだシエンホア。君らしくもない」

シエンホアの方は細面の美貌をきつく強張らせたまま、怯え切ったソーヤーとは逆に伊丹から一瞬たりとも目を離すまいという構えで臨戦態勢を解こうとしない。

「君とソーヤーが彼伊丹に何を視たのかは分からないけど——彼は、敵じゃあないよ」

ズレてもいないサングラスを片手で押し上げながらロットンは説得を試みる。

泰然とした態度と充分美形に含まれる顔立ちと相まって、その姿は中々様になっていた——両手がパンパンに膨らんだ買い物袋で塞がっていないければの話だが。

ついでにカツコつけてサングラスを持ち上げた拍子に、買い物袋のてっぺんに積まれていたオレンジが零れ落ちて下着の森の中に消えていった。ロットンは気付かなかったフリをした。

そこから数メートル離れた地点では、倉田が上官にジトーつとした視線を浴びせていた。

「隊長、もしかして俺達と合流するまでの間に彼女達にも何かやかしちやったりしたんすかあ?」

「してねえよ! 今この瞬間が初対面だよ! 人をトラブルメーカーみたいに言うんじゃないよ!」

心からの叫びだった。

部下の反応は思いつきり小馬鹿にした表情であった。

「ええー? ほんとにぎぐるかあ?」



「よし倉田よお前さんには上官への正しい態度について教育し直してやろうじゃないか。くのつ、くのつ！」

「ギヤーツすみません今のは流石に謝罪しましたからギブギブツ！」

ギヤグシナリオ中の燕返し使いそつくりの舐めた態度を取った代償にヘッドロックを掛けられ、今度は倉田の悲鳴が店内に響く。

それが耳に入って毒気を抜かれたらしい。ようやくシエンホアは正気に戻った。

己の醜態に苦虫を口いっぱいに噛み潰した表情で得物を下ろすも、視線は鋭く伊丹を追いかけ続けている。彼女の頬にも汗が浮かんで伝い落ちていった。ソーヤーはやはりロットンにしがみついて震えたまままだ。

「わかたね……ハア、すまなかたねロットン、無様な姿見せてしまったます」

「……気にしていない。でも殺意を向けられた訳でも金を貰って殺せと言われた訳でもない相手にアレはどうかと思う

それに……命の果し合いを交わす場所とするには、下着屋ここは少しばかり僕の性には合わなくて落ち着かない」

そう漏らすロットンのサングラスの下の瞳は、明色から暗色まで色とりどり且つ色々と過激な下着の数々を捉えては気まずげに逸らされていったのだった。

「出くわすなりいきなりヤツ刃物ハ抜くなんて勘弁してくださいよ、シエンホアの姐さん。肝が冷えちまうにも程がある」

伊丹と倉田が始めた漫才を無視し、ルマジュールはシエンホア達の下へ近付いてくるなり開口一番文句を放った。彼女の額にも少な

らず冷や汗が滲んでいた。

「ゴメンネー謝謝、つい過剰反応してしまたよ。迷惑かけてしまてホント申し訳ないですだよ」

神妙な態度で謝意を示すシエンホアに対するルマジジュールの反応は、疲労感の滲む溜息だった。

「いや、まあ、姐さんのあの反応も何となく気持ちには分かりますけどね」

「……そんなにか？」

首を傾げるロットンとまだ彼にしがみついたままのソーヤーを、ギリとルマジジュールの隻眼が射貫いた。

「ところでこの女術みたいな優男とゴス女は姐さんの知り合いっすか？」

「……僕の名はロットン・ザ・ウイザード。人呼んで——」

「私の家で世話してる穀潰します」

「……………」

バツサリと遮られたロットンはそのまま黙り込んでしまった。

「ロットンに抱き着てるがソーヤー言うます。この街で掃除屋してりますから処分したい死体あるなら彼女に依頼するいいネ」

「コイツがスカ？」

ルマジジュールの祖国日本基準で見ても明らかにカースト下層の根暗ないじめられっ子ポジにしか見えない、怯え切った若きゴスパンク女を見下ろす彼女の目は胡乱気だ。

「見た目によりませんですけどこう見えてこの街で手広くやてるやり

手ね。仕事の腕と評判は確かよ」

「そう言うならまあ覚えときます」

「……にしてもアレ、何者ですだよ？」

シエンホアの視線が再び伊丹へと向けられる。視線の先ではラテン系店主に包んでもらった商品を伊丹が受け取るところだった(ちなみに店主は一触即発の危機が突如勃発した時、素早くカウンターの下に頭を引っ込めて安全を確保していた)。

愛想笑いを張り付けて受け取るその姿は一見、お気に入り商売女へのプレゼントを買いに来ただらしない流のビジネスマンにしか映らない。

なのに、恐ろしい。背筋が泡立つ。背中の柳葉刀を握って安心したい、感情ではなく本能から齎された衝動に再び襲われる。

認めたくはないが、シエンホアは己を暴挙とへ駆り立ててている衝動の正体が恐怖心であると認めざるをえなかった。

人虎？ 最早そんな表現も生温い。シエンホアは己が積んだ武錬と命のやり取りで育んだ自身の直感を信じた。

あの男は誰よりも——自分や、二挺拳銃トウハンや、もしかすると世話になっっている三合会の張大老や莫欺科ホテルモスクワ・大飯店の女首領よりも、ずっとずっと。

ずっとずっと多くの血を飲み干し、死を振りまき、敵対するもの尽くを屍山血河に沈めてきた死の化身の怪物———そのような認識を抱いてしまったのである。

(また視線を感じるんすけど隊長やっぱり何かやらかしたでしよ絶対)

(だから俺は無実だつーの)

「そんなの、むしろアタシが教えて欲しいですよ」

「……僕には死と断罪の女神の加護を受けている以外は、普通の人間にしか見えないのだが」

(ギクツ)

ロツトンの何時もの痛い戯言は無視した。  
彼女達からは伊丹と倉田の背中しか見えなかったのも、ロツトンの  
眩きを聞いた2人が冷や汗を浮かべて口元を引き攣らせた事につい  
ては全く気付けなかったのだった。

不意に店内に電子的なメロディが鳴り渡る。

発生源はシェンホアがチャイナドレスの上に着込んだ上着の中  
だった。未だ伊丹への警戒の視線を切らないまま携帯電話―アンテ  
ナが生えていて折り畳み出来ず液晶画面も小さい、スマートフォンに  
慣れ切ってしまった伊丹と倉田視点では非常に古めかしく見える―  
を取り出す。

「もしもし？」

中国語はさっぱりだがこれ英語までの話発音方とはうって変わって綺麗  
な発音だなあ、と伊丹はぼんやり思った。

そう思っていられたのも短い間だった。電話相手の声に耳を傾け  
ていたシェンホアの表情が、先程以上に険しく強張っていったから  
だ。

「何ですって？ 今から向かいます 我接下来去去那里――ロツトン！ 急用出来たね！ ソー

ヤーの事任すよ！」  
「何……？」

そうしてロットンが聞き返そうと振り向いた頃には、激しく揺れてガラガラと騒々しく響くドアチャイムの音色を残して、シエンホアは下着屋から飛び出して行ってしまったのだった。

伊丹達もロットン達同様、突然のシエンホアの離脱をポカンと見送るばかりだ。

「何かあつたんすかねえ?」

「だろうねえ。あの様子だと大分差し迫ったトラブルでも起きたんじゃないの」

呑気に伊丹と倉田が駄弁っていると、今度は2人の胸元から電子音が鳴った。僅かなノイズ混じりの単信号。

こちらは部隊共用の携帯無線機からだ。ベルトで固定したポーチに収めた携帯無線機に繋がったプレストークスイッチと一体型スピーカーマイクを、伊丹も倉田も上着のラインや襟元で隠す形で着用している。

スピーカーは指向性で着用者以外に（限度はあるが）音が周囲へ漏れにくくなっている優れ物。イヤホンやヘッドセットとは違い耳に着用しなくても使えるタイプなので、他者に見られても不審がられにくい利点がある。

『ブラボー6からアベンジャーへ』

ブラボー6はプライスのコールサインだ。プレストークスイッチを操作して応じる伊丹。

「こちらアベンジャー。どしたん、何かあつたの?」

『上空に展開中のUAVが街の上空に未確認機を発見したが、この街で普段へりは飛んでいるものなのか?』

街郊外に仮設基地を設営した自衛隊は陸上車両だけでなく中型の無人偵察機であるスキャンイーグルの改良型をアルヌスから持ち込んでいる。

スキャンイーグル改は自衛隊が特地に派遣された初期から投入されていた装備の1つ。

全長1.55メートル、組み立て式の翼が全幅で3メートル強と比較的小型で攻撃兵装を搭載できるパイロッドは無いが、1度の飛行可能時間は24時間超と非常に長い。

トラックで運搬可能なカタパルトを使用する事で滑走路を確保する必要もなく運用可能な点も評価され、特地派遣や今回の任務に抜擢されたのである。防衛装備庁の開発・研究部門の手が加えられた各種センサーのお陰で数千メートル上空からでも地上の動きを高彩度で把握可能だ。

「ちよつと待ってくれ——ひとつ尋ねたいんだけど、この街ってヘリコプターとか普段から飛んでたりするものなのかな？」

「へり……？ いや、僕がこの街に根を下ろしてからはこの街の空をへりが飛んでいる姿を1度も見ていないが」

「警察は？ この街の市警もへりは配備されてない？」

ロットンは首を横に振った。ソーヤーの方はまだ話を聞ける状態ではないので放っておく。

——きな臭い流れだ。

「ブラボー6へ。答えはノーだ。へりの種類と行き先は分かるか」

『少なくとも民間機じゃあない。ありやガンシッ<sup>武装</sup>ッ<sup>へり</sup>だ。我々の方に向かってきている訳ではないようだが』

「マジすか」

同じ通信を聞いていた倉田が呻くのが聞こえた——ああ俺も同意見だよ。伊丹も口には出さず部下に同意した。

「合流だ爺さん。車をこっちに回してくれ」

『とつくに向かわせたよ』

プライスの声の直後に店の前へ大型車両が急停車した時特有の重々しいブレーキ音が聞こえてきた。出入口へ向かう伊丹と倉田にルマジュールが続く。

店を出て路上を踏んだ瞬間、遠雷に似た爆発音が遠方から聞こえてきた。

伊丹が、倉田が、ルマジュールが、車外へと顔を覗かせていたプライスや他の隊員達が顔を上げると……ロアナプラで一等目立つビルが炎上しているのが見えた。

Knockin' on Warfare Gate  
e19

そのヘリの機種はMi-8といった。

旧ソ連製の大型輸送ヘリコプターだが、葉巻型の機体側面から突き出した懸架用短翼へ兵装を据え付ける事で対地攻撃にも対応可能だ。

実際ロアナプラ上空を悠然と飛ぶMi-8は23ミリ機関砲を内蔵したガンポッドと小さな羽を生やした金属製の巨大な樽状の物体を左右に搭載。それ以外にもベルトリンク式の機関銃を構える機銃手が時には補給物資、またある時は完全武装の兵士と無機物から生物まで運ぶ為に存在する輸送区画で己の出番が来るのを待ち構えている。

機体は元々パキスタン軍に配備されていた機体だ。

ヘリの持ち主がパキスタンなら、パイロットもまたパキスタン製だった。機体ごと引き抜かれたのだ。以前は国と軍の為に飛んでいたが、今は聖戦という新たな大義の為に飛んでいる。

眼下を通り過ぎていく海面が途切れ陸上に移り変わると、今回の目標である施設はすぐに見えてきた。

東南アジアの港町で一等目立つ豪華な高層ビル。しかも屋上プール付き。

こんな贅沢な物件の持ち主は何と東洋人のゴロツキなのだという。パキスタンの貧しい田舎の生まれで食う為に入隊した経歴の持ち主であるパイロットは墮落した不信神者がこのような贅沢を許されている今の世界の不平等を嘆き、だからこそ敬虔な聖戦士である我々が裁きを下さのだと決意を新たにす。

『目標を確認』



無線機能内蔵のヘルメットを被ったパイロットがウルドゥー語で  
パキスタンの公用語  
以って機銃手へ伝えた。エンジンを動かしている最中の機内は絶え  
間なく轟音が頭上から伝わってくるせいで通信機器が不可欠だ。

高度を落とし飛行速度を緩めながら目標との距離を更に縮めてい  
く。

攻撃対象は建物の最上階。火力の最大効率を狙おうと機体を最上  
階と水平になる高度へと調節した。発射された砲弾がフロアを横断  
し弾道上のあらゆる存在を貫く事を目的とした射線だ。

目標へ意識と視線をキャノピーの向こうへ集中させると、サングラ  
スをかけた黒服の男の姿が窓越しに見えた。

確か作戦開始前のブリーフィングで顔写真を見せられたこのビル  
の持ち主、つまりゴロツキ共の親玉だ。部下らしき別の黒服が泡を喰  
いながら親玉を引き摺って部屋の奥へと消える。建物の周囲でも似  
たような格好の有象無象がへりを指差して右往左往している気配も  
感じた。

パイロットはせせら笑いを隠そうともしなかった。チンピラの集  
まり程度、完全武装のへり相手に何が出来るというのか。

握り締めた操縦桿の上部に備え付けられたパネルを親指で弾く。  
現れた押し込み式の火器発射ボタンへ親指を添えた。

『攻撃を開始する』

ボタンを押し込むと同時に、機体の両側面で巨大な炎の花が瞬き、駆  
動するエンジンとは別種の振動が機体全体を震わせた。

パイロットが見ている前でプールを備えたビルの最上階が次々と  
粉碎されていった。

最高の気分だった。

張にとってへりに襲われるのはこれが初めてではない。

1 回目は93年の11月——あの時の事は忘れられようがない。兵隊崩れのロシア人共を率いるあの戦争狂と一大抗争を繰り広げる最中、あの日張は4発の9ミリ弾を食らわされ、危うくこの世からおさらばしかけたのだから。

「何度も経験したくはないもんだな全く！」

慌てふためく彪に促されて部屋の奥にある廊下へと飛び込んだ張のボヤキは、砲声と破壊音の合唱にあつさり掻き消された。

まるで張の周囲でカテゴリー6の嵐が荒れ狂っているかのような有様だった。へりの機銃が放つ砲弾は窓ガラスと部屋の調度品と室内を区切る壁を粉碎しても微塵も威力を緩める事無く、張と彪の頭上を衝撃波を伴いながら次々と通過しては更にその先にある物体の尽くを碎き壊していく。

その中には部屋の外で待機していた張の護衛も含まれていた。壁を貫通した砲弾、或いは粉碎された拍子に超高速で飛散した壁や調度品の破片をモロに浴びた黒服の男達は、次々と原形を留めぬ血肉の残骸と化して瓦礫の仲間入りを果たす。

以前、仕事の話中にロケット砲を撃ち込まれた時もここまでは酷くなかった。彪共々に粉塵混じりの床を舐めながら、張は溜息を吐いた。

流石に愛銃の22口径で相手をするには辛い相手だ。

「大兄<sup>アニキ</sup>！ こっちはです！」

へりの弾幕から生き残った張の部下が廊下の奥で叫ぶ。張が逃げ込むのを待ち侘びているかのように、分厚いコンクリートに囲まれた非常階段の扉が口を開けていた。

エレベーターは反対側でそこまで辿り着くには死の嵐のド真ん中を突っ切らねばならない。選択などあろう筈がなかった。

「階段を使うのも久しぶりだな。走るぞ彪！」

「りよ、了解です！」

同時に立ち上がり走る。随分と風通しが良くなった廊下を駆け抜ける2人を横薙ぎの砲弾が追いかける。

頭から非常階段へ飛び込んだ2人の背後に23ミリ砲弾が着弾。灰色の破片と粉塵を引つ被って随分とスーツにコートを汚しはしたものの、張も彪も奇跡的に無傷だ。

溜息ひとつ漏らし、全身に被った破片を払いつつ張が振り返れば、お気に入りのソファや酒やプールを揃えていた、つい先程まで彼が過ごしていた筈の最上階は最早存在していなかった。今やまともな壁すら残らぬ瓦礫の山だけが広がっていた。

「やれやれ、いつそ建物ごとリフォームした方が手っ取り早いなこりや」

「大兄、ここからどうしますんで？」

「まずは下に降りて戦力を纏めるぞ」

即答だった。たった今まで人間がバラバラになる威力の砲弾を雨あられと浴びせかけられていたとは思えぬ落ち着いた声を発しながら、自ら宣言通り真っ先に非常階段を下り始める張。慌てて彪と他の黒服も追いかける。

「今襲ってきたへりはデカイ大砲を積んではいるがおりや輸送へりだ。AKを抱えた一個小隊位なら楽に運べるだろうよ」

「——挟み撃ち？」

「おそらくはな。手下には可能な限り外を飛ぶへりに姿を見られないよう徹底しろ。自分の肉でタルタルステーキを拵えたくはないだろ

？

街に出ている手下やウチの世話三合会になつて荒事屋に連絡は入れたんだつたな？ 外からの援軍が駆け付けるまでアラモごっこだ。閉じ籠つて嵐を凌ぐのはいささか性に合わないがね」

言いながらも足を止める事無く、早くも数階分を下つた時だった。張達が居る空間全体が不気味に振動した。頭上からの振動だ。反射的に男達は上を見上げる。

「今のは何——」

突如、真つ赤な閃光が張達の頭上で輝いた。急激な気圧変化。熱波。男達の全身を衝撃波が叩く。非常階段内を突風が駆け抜けて張のコートが翻る。

気が付くと、張は打ちっぱなしのコンクリートの壁に体を預けてしやがみ込んでいた。

酷い耳鳴りがして肌は妙にひりつき、酷く乾いた目をサングラスの奥で何度か瞬かせ、何度か被りを振る。先程まで感じられなかった油臭さが非常階段内に充満している。

それでも男達の中で真つ先に我を取り戻して立ち上がったのは張だ。続いて彪も痛い程の耳鳴りに襲われた様子で耳を押さえながら怒鳴り声を発した。

「今度は何だ!？」

頭上を見上げた彪は絶句した。

最上階の扉が在った空間から紅蓮の炎が非常階段内へ向かつて噴き出しているのがハッキリと見て取れた。

最上階部分だけでなくその下層にも火は達している。さつさと張が下り始めたのを追いかけていなかったら爆発と炎に巻き込まれていたかもしれない。炎だけでなく、油臭い黒煙もどんどん非常階段内

へ流れ込みつつある。

「そういえばさっきのヘリ、機銃以外にも何かぶら下げていたな」

正体は航空爆弾。格納容器の中身はたつぷりのナパーム弾だ。

ヘリからの銃撃で散々風通しが良くなった所にこれである。あれだけの破壊だ、消火設備も当てにしない方が良さだろう。

数百リットルもの燃料を一齐にぶちまけて点火したようなものだ。ビル風を受けた炎は酸素をどんどん取り込んで延焼していくに違いない——ビル全体が焼き落ちてもおかしくない位に。

「……訂正だ彪。連中、火が点いたバースデーケーキのキャンドル宜しく俺達を建物ごと焼き討ちにするつもりらしいぞ」

最上階への機銃掃射からの爆発、いや空爆は地上にも大きな混乱を齎した。

当然ながらヘリの接近を聞きつけて外へ飛び出していた三合会の構成員は、各々武器を上空のMi-8へ向けて迎撃を試みる。だが彼らが持つ武器は拳銃やサブマシンガンと、軍用ヘリを撃ち落とすにはいささか火力が足りない。

ならば、と構成員が次に持ち出したのは対戦車ロケット砲 RPG7だ。ソマリアで米軍のヘリも撃墜した実績を持つこれならば。

発射機を肩に乗せ、筒先を頭上へと掲げたその時、爆風に巻き込まれないよう高度を上げたヘリコプターからナパーム爆弾が投下された。

ロアナプラ中から目撃できる程の規模の巨大な紅蓮のキノコ雲が

三合会ロアナプラ支部の屋上で咲いた。

決定的瞬間を目撃したロアナプラの住民は『ダイハード』のクライマックス――作目――のようだったと後に口を揃えて語った。あの映画の舞台はクリスマススイブの真夜中で、こちらは夏季の真昼間なのだが。

火球は最上階だけでなくその下の階も呑み込んだ。張の予想通り、機関砲弾で少なからずダメージを負った床はナパーム爆弾の起爆で生じた急激な圧力と熱に耐え切れず、床を突き破り下階を侵し、また一部の炎と煙はエレベーターシャフト内にも侵入を果たす。

建物中で火災警報が鳴り響いた。

地上の三合会構成員も爆撃の被害を受ける羽目になっていた。吹き飛び炎に覆われた瓦礫が、撒き散らされた燃え盛る油脂（増粘剤を添加してちよつとやそつとじや消火出来ないよう加工）が、頭上から黒服の男達に降り注ぐと、強面の男達も堪らず悲鳴を上げて逃げ惑った。

黒煙が三合会ロアナプラ支部を覆っていく。

黄金夜会の一面の本拠地に対する前代未聞の攻撃を野次馬ことロアナプラの近隣住民は遠巻きに眺めるばかり。

一方で今や燃え盛る巨大ビルへじりじりと迫る集団も存在していた。ジープや乗用車に分乗し、クーファイヤーと戦闘服とAKで統一された聖戦士の集団。存在に気付いた野次馬達は整然と3ブロックばかり後退した。

三合会ロアナプラ支部を包囲し終えた数十名のテロリストの本隊はビル正面の駐車場前へ更に距離を詰めていく。

散乱した瓦礫や炎から立ち上る黒煙のせいで正面入り口への見通しはかなり悪い。無線機を持った聖戦士がヘリの乗組員に上空から偵察出来ないか要請するが、炎と黒煙のみならず今や巨大なマツチと化したビルの周囲を渦巻く不安定な気流のせいで接近出来ないのが難しいとパイロットに返され上空偵察は断念。

炎の弾ける音に混じり、猛烈に空吹かしされるエンジンの咆哮が煙の中で生じた。

黒塗りの高級車が煙を突き破って聖戦士達の目の前に飛び出してきた。1台だけではない、2台3台と続く。

この状況で護衛車両付きで脱出しようとする対象は最高位の者以外に考えられない。

『撃<sup>???</sup>てー!』

号令を受けて一斉に火を噴く聖戦士達のAK。アサルトライフルだけでなく車両に据え付けられたRPKやRPDといった軽機関銃も銃火に加わる。

次々と窓ガラスや車体に穴を穿たれたセダンの1台が街路樹に突っ込んで動かなくなるが、他よりもグレードが高いと一目で判別出来る高級車は火花を散らしながらも貫通を許さない。窓ガラスを含め防弾処理がされた特別車両なのは明らかだ。

高級車と生き残った複数のセダンは決してスピードを緩める事無く駐車場と、展開していた聖戦士の集団の中心を突っ切った。

行く手を阻もうと聖戦士側の乗用車が進路に立ち塞がる。乗用車の後部側に高級車がぶつかると、乗用車の方があっさりと弾き飛ばされ引っ繰り返った。装甲分だけ重量が増した防弾車両の突撃を止めるにはもつと大型の車両でなければ難しい。

『追いかけるー! 逃がすなー!』

聖戦士達も乗ってきた車両に分乗して黒塗りの車列を追跡開始する。ヘリコプターも追跡に加わり、爆音が燃え盛る建物から遠ざかっていく。

——それから数十秒後。

「敵は囷に喰いつきました。今こちらに車を回しています」

携帯電話を手にした彪が張へと伝えた。

単純な手だ。地上に集まっていた構成員の人手を割いてわざと目立つ車とルートで囷の車列を出発させ、ビルを包囲していた敵の目を引き剥がしてからこっそり裏口から逃げ出す。軍隊上がりの火傷顔フライフェイスマンぐらい練度と統率が高ければ通じない子供騙しの手だが、それ以外の相手なら案外使える。

「油断するなよ彪。今回の敵のやり口は俺ですら少々驚かされた位だ」

「勿論です。避難先の事務所には機甲部隊でも撃退出来るだけの兵隊と武器を集めて防御を固めると既に命じてあります」

金さえ出せばフリーのゴロツキでもロケット砲程度簡単に調達できるのがこの街だ。ロアナブラ彪の台詞は比喩ではない。

トレードマークのコートの懐を探った張は、ここまでのドタバタでクシャクシャになった煙草を取り出して銜えた。慣れた動作で素早く彪がライターを取り出して張の口元へ。煙草から立ち上った紫煙の臭いはすぐに鼻を突く油が燃える悪臭に紛れて消えた。

裏口前に彪が呼んだ車が停まった。囷に出ていったものと同型の防弾仕様車。囷の車列よりは少ないが護衛が乗った車両も付く。

高級車の後部座席のドアが開き、張と彪が滑り込むと高級車はすぐに走り出した。

車に乗り込むなり、一緒に脱出した他の構成員が張り詰めさせていた気配があからさまに緩んだ。だが張と彪は未だ気配を研ぎ澄ませ続ける。



「気持ちには分かるが気を抜くのはまだ早いぞ。こういう時一番難しいのは撤退なんだ」

「も、申し訳ありません大兄」

「最後まで周囲に目を光らせ続けろ。相手はアフガンでバラライカみたいな戦争屋どもを散々苦しめた拳銃、撤退にまで追い込んだ生粋の聖戦狂い共だ。

まったくヒズボラの時といい、あの手の連中はどうにも……」

不意に車の音が別の爆音に塗り潰された。

車列の前方にM i i 8がいきなり舞い降り、機体側面を向ける。開け放たれた側面ドアに腰を下ろし、落下防止のベルトを留めた機銃手が構えるPKM機関銃が、行く手を遮られて急停止した張の乗る高級車へと振り向けられた。

「やはりそう甘くないか！」

「戻れ戻れバックだバック！」

張が呻き、彪が叫ぶ。車の向きはそのままに、バックヘギアを叩き込まれた車列が後方へ急加速を始める。

高級車の後ろに付いていたセダンに乗った三合会の構成員が窓を開け、上半身を乗り出してヘリに向かって反撃しようとした時、後ろから接近してくる別のエンジン音に気付いて振り返ると、通りの中心を1台だけ疾走するオフロードバイクの姿を捉えた。かなりの速度だ。

張もまた、後続車両の窓ガラス越しに突撃してくるバイクの姿を捉えていた。

ドライバーの顔はクーパーで隠されていたが唯一覗く目は異様に血走っていた。複数の収納ポケットがどれも内側からパンパンに膨らんだ上、コードが張り巡らされたベストを着用している。

——おいおい冗談だろう？

「彪！ 今すぐ伏せろ！」

言いながら張もまた両手を塞ぎ、後部座席に身を投げ出す。後続車両の構成員が恐怖に目を見開きながら拳銃を乱射。何発かがバイクとドライバーに着弾するが止まらない。セダンとバイクが激突する。

——バイクドライバーの自爆ベストが起動した瞬間、張は世界が引つ繰り返るのを感じた。

浮遊感。反転。衝撃。轟音。

張が乗った車ごと今や世界が上下逆さまと化していた。座席が床で天井が床。彪も張と同じように床となった車体の天井で引つ繰り返って呻き声を上げている。

「な、何が起きたんだ……？」

「聖戦狂いお得意の攻撃だよ彪。自爆攻撃さ」

奇跡的に煙草とサングラスは無事だがそれ以外はひどい有様だ。高級車は完全に引つ繰り返り、あらゆる内装品が車内に散乱している。

それでも自爆攻撃の直撃を受けたセダンに乗っていた構成員よりはずっとマシだった。高級車のすぐ後ろに付いていたセダンは原形を留めぬ有様と化して炎上していた。乗っていた構成員諸共。

この車が防弾仕様でなければ張や彪が受けた被害ももっと酷かったのは間違いない。飛散した車かバイクの部品だろう、鉄片が防弾ガ

ラスに幾つも突き刺さってはいたが貫通までは許していないのがその証拠だ。

「事務所の次は車までお釈迦か。全く厄日だな、堪らんよ、つと！」

歪んだドアを蹴り開け這い出る張。先頭のセダンの様子に目を向ければ、AKよりも大威力の7.62ミリR弾の集中砲火を受けたエンジン部が既に火を噴いており、既に使い物にならないのは明らかだった。

自爆バイクが走ってきた方の通りを聖戦士を満載した車列が出現し、道路が封鎖される。伏せていた予備戦力か、囷を追いかけていた部隊がヘリからの連絡を受けて戻ってきたのかまでの判別は付かない。ヘリが飛んでいる側の通りにも聖戦士の車列が現れていた。

前門のヘリ、後門の聖戦士。

そんな中でも張維新は不敵な笑みを消さない。

「なるほどなるほど、そこまでして俺をダンスパーティーに招待したいようだな？」

愉しげに笑いながら、愛用の双銃——天帝双龍を引き抜く。

ここまでの鉄火場に引きずり出されたのも、ここまで本気に殺しにかかって相手も久方ぶりだ。彪やおっ死んでしまった部下達には悪いが、張はこの状況をたまたまなく愉快に感じている。

生死のオツズは後者に大分偏ってしまっているようだが、だったらそれはそれで構わない。今この状況を楽しめば良いだけの話——  
張維新はそれが出来る、出来てしまう男だった。

「それじゃあいい加減、俺も踊らせてもらうとするか！」

「駄目です待って下さい大兄!？」

彪の制止の声を振り払い、自ら高級車の陰から飛び出した張は露払

いにまずはM i — 8が飛んでいる側の通りへ天帝双龍を振り向け、聖戦士達もまたAKの引き金に指を添え。

——張が見ている前でヘリコプターが爆発した。

空中で燃え盛るヘリ。吊り糸を唐突に断ち切られた展示物の様に垂直落下した大型ヘリの残骸が、下に屯していた聖戦士とバリケード代わりの車両を押し潰す。

「……………おおっとう？」

これには張も虚を突かれたのかそんな声が漏れる。

次いで金属がひしやげ、引き裂かれ、弾き飛ばされる激しい音が響き渡る。張の視線も音の出所へ向く。

巨大な楔形のブレードを備えた装甲車がヘリと車のバリケードの残骸を突破し、張の下へ向かって来るところだった。

Knockin' on Warfare Gate  
e20

——張が燃え盛る熱河電影公司ビルから脱出する数分前に交わされたある無線の通信記録。

『つまり今襲撃を受けているのはこの街ロアナブラにおける三合会の本拠地という事なんだな?』

「そういう事みたいだねえ柳田さん。それで、どうします?」

『おいおい、独断専行が十八番のお前さんが俺に指示を仰ぐなんざ、明日の天気は核ミサイルでも降ってくるんじゃないだろうな』

「あのねえ、柳田さんは俺の事何だと思ってるんです? あとそれ、洒落にしちや悪趣味過ぎますよ」

『……真面目な話、今の戦力で襲撃者に対応は可能なのか?』

「イエスカノーで答えるならイエスかな。ヘリが1機にテクニカル相手なら、まあ何とかなるでしょ」

『んじや前線司令部の総責任者としてお前さんに命令だ。正体不明の武装集団より襲撃を受けている地元勢力へ即刻救援に向かい、責任者への接触もしくは救出を試みよう』

「命令を復唱する。アベンジャーはこれより正体不明の武装集団より襲撃を受けている地元勢力への救援と現地責任者との接触か救出を試みる——柳田さんにしちや思い切ったじゃないの」

『抜かせ。何が目的かも話を通じるかもわからないテロ屋に商談を持ち掛ける予定だった相手を排除されちや俺達の目的にも支障が出るんだよ。』

それにあの街の人間にこちらの実力を宣伝するいい機会でもあるからな。

ああいう手合いの相手はお前さんの得意分野だろ？ 無駄口叩いてないでさっさと向かうこつた』

『接敵まで30秒！』

装甲車の車列が悪徳の街を疾走する。

揺れるブッシュユマスターの車内でタブレット端末を手にした伊丹は、無人機からの中継を経由して脱出を凶った張の車両が自爆バイクによって横転する一部始終を目撃した。

1キロ以上もの上空から記録を続ける無人機が足が止まった三合会車列の前後を聖戦士を満載した複数の車両が封鎖し、武装ヘリまでも降下してくる様子が克明に映し出される端末を手に無線で指示を飛ばす伊丹を、同乗したルマジュールは横目に観察する。

(空からリアルタイムの中継映像が見れる端末なんざどれだけのスペックなんだよ)

つつい目を惹かれているのは、伊丹が扱う端末が彼女が知る代物から大いにかき離れているからだ。ずっと大型で、ボタンらしいボタンもなく、タッチパネル方式でありながら専用のタッチペンも必要なく直感的に操作でき、にもかかわらずそこいらのテレビよりもずっと高画質の画面が表示しているのは偵察衛星か偵察機か、ともかくとても滑らかに描写されたロアナプラの航空映像である。

個々の機能に特化しているならまだしも、複数の機能をA4ノートサイズに凝縮してここまでのハイスペック。

そんな代物を目の前で見せつけられたとなれば、その手の知識が門外漢の輩でも興味を持つてしまっても仕方のない事で――

伊丹から見て正面の座席に収まっていたロットンもまた身を乗り出し、伊丹の手元を覗き込んだ。

「……このサイズでウチのテレビよりずっと画質が綺麗だ。どこのメーカーの製品なのだろう」

「すまないけどこれは非売品なんですよ」

「……そうか。残念だ」

苦笑しながら伊丹に告げられたロットンの肩がしよぼんと落ちた。心底残念そうだった。

その隣ではソーヤーが相変わらず膝を抱えて縮こまった状態で座席に収まっている。

気が付いたらこの2人まで（というか、ロットンが自閉モードのソーヤーお車に押し込む形で）ちゃっかり装甲車の座席に乗り込んでいたのである。義を見てせざるはどうしたらこうたらとロットンが言っていた気がするが、ルマジユールの目にはどう考えてもこの2人はお荷物にしか見えなかった。

おまけに伊丹やプライスや他に乗り込んでる面子はといえば、平然とこの変人2人の存在を受け入れていると来ている。

まるでこの手の愉快的な連中が同席するのは日常茶飯事といった風情だ。ルマジユールは頭が痛くなった。

「見えてきたぞー！」

助手席の剣崎が声を上げた。車列は既に車内からでも聖戦士による封鎖線が肉眼で確認できる距離まで到達していた。

「勝本、LAMでへりを撃ち落とせ！ ブロープはどっちでもいいから今度はちゃんと狙って撃てよ！」

『分かっていますよ隊長！』

上部ハッチを押し開け、先頭を走るタイフーン装甲車の屋根から第3偵察隊時代からの伊丹の部下であり、特地に取り残された自衛隊員の1人である勝本三曹が車外へと身を乗り出す。

彼の右肩にはLAMことパンツァー個人携帯対戦車弾ファウスト3。これで以って彼は（ロウリーのフォローの賜物とはいえ）炎龍の左腕を吹き飛ばしてみせた。

今回は荒れた未整地ではなく舗装された直線道路なのであの時よりもずつと狙い易い。人に向かって撃つ抵抗感も特地での実戦を重ねた今ではずつと薄い。

それでも発射時のバックブラストを気にしてチラリと後方を確認してしまうのは自衛隊員としての性か。

後続を走るブッシュマスターの運転手は言われるまでもなくきつちり車間を開けていたのでバックブラストの危険圏外である。

『撃ちます！』

宣言通り勝本はあの時の様な無様な撃ち方を再現しなかった。

LAMの発射機後方から高熱のガスと反動相殺用のカウンターマスが噴き出し、前方の弾頭は射出直後にロケットモーターへ点火、急加速。

高速で飛翔した弾頭は勝本の照準通りバリケード上空でホバリングしていたMi-8の側面へ直撃した。

文字通り空飛ぶ戦車クラスの装甲を持つ異世界の炎龍から左腕を奪ったその威力は容易く大型へりの横つ腹を吹き飛ばし、高熱の爆風がエンジンとタンク内の燃料へと引火し、機体を紅蓮の火球へと変える。

ローターが生み出す浮力を失った残骸はあっけなく落下。燃え盛



る残骸がバリケードを聖戦士ごと押し潰す。

「減速するな！ そのまま突破してVIPの安全を確保するぞ！」

伊丹の意を汲んだタイフーンの運転手がアクセルを全開にし、今や区別無く周囲を焼く炎の壁と化したバリケードへぐんぐんと迫るのを見て取った勝本が「やっべ」と慌てて車内へと引っ込む。

20トンを超える鋼鉄の破城槌と化したタイフーンが燃え盛る封鎖線と激突した。

爆発と高熱で脆くなった大型ヘリの巨体は楔形のブレードによって真ん中から引き裂かれ、急速に炎に包まれつつあった車両はブレードに触れるなりあっさり引つ繰り返りながら弾き飛ばされた。タイフーンの車体が完全に通過した頃には、後続の装甲車も楽に通過出来るだけの通り道が切り開かれていた。

味方のヘリが突然爆発して頭の上から降ってきて、何とか押し潰される事も燃える燃料の雨を浴びる事からも逃れられたと思つたら直後に謎の装甲車にあっさりバリケードを目の前で突破され、それでも轢かれずに済んだ幸運な聖戦士の一部は続いて突破を試みようとする2台の車両を認識すると、半ば反射的に手にしたままのAKを近づいてくる車に向かって乱射した。

64式小銃にも使われる7.62ミリNATO弾の貫通を防ぐブッシュマスターの装甲はAKの銃弾を弾き、防弾ガラスの一部に蜘蛛の巣上の亀裂を刻むに止める。

3台目、ブッシュマスターの後ろに続いて燃え盛るバリケードを通過したM—ATVの無人砲塔が回転し、砲塔から延びた大小2つの筒先が聖戦士達へと向いた。

BTR—80から移し替えられたKPV重機関銃が咆哮を放つ。14.5ミリという生半可な装甲も貫通する大口径弾が直撃した聖戦士の頭部は紅の霧となって消滅した。

同軸に配置されたグレネードランチャーが放つ40ミリてき弾も射撃に加わる。1発1発が手榴弾並みの威力と殺傷範囲を持つ炸裂

弾の破片が聖戦士の肉体をズタズタに引き裂く。

3台の装甲車は横転した三合会の車両の盾となる形で停車する。しつかりと踏ん張らなければ座席から振り落とされそうになるほどの急制動だ。

そうして仲間達と同じく本格的な戦闘に応じた武装を整えた伊丹は、ブッシュユマスターの後部ハッチを蹴り開け、鉄火場に踏み込むのだった。

異形の大型装甲車が文字通りヘリの残骸ごと聖戦士どものバリエードを突き破ったのを皮切りに、更に2台の装甲車が張の前に出現した。

合わせて3両の装甲車は盛大なスキール音を響かせつつ、張達へ向けて放たれる聖戦士達からの銃撃をその分厚い車体で以って遮断する格好で急停止する。

1台目と3台目の装甲車上部に搭載された重機関銃が瞬く間に聖戦士達を蹂躪していく。

重機関銃クラスともなれば民間車両に機銃を載せたテクニカル程度、エンジンブロック部にでも身を隠さない限り遮蔽物としての役目など薄紙1枚程度に過ぎない。車体の後ろに布陣していた筈の聖戦士達の肉体が悉く碎かれ、抉られ、切り裂かれ、次々に狂信者から魂無き肉片へ変貌を遂げていった。

もう誰にも迷惑を掛けなくなったという意味ではむしろ素晴らしい変化、否、進化と言っているのではないだろうか？ 益体もないそんな感想が、ここまで散々彼らの砲火に晒され続けた張の脳裏に浮か

ぶ。

「まあああいう死に方はしたくないもんだ」

一転現在進行形で殲滅されつつある聖戦士の死に様に、張が独りごちていると2番目に突入してきた装甲車の後部ハッチが開いた。

——最初に姿を現した人物を見据えた瞬間、ヘリの空爆にも自爆攻撃を受けても浮かぶ事のなかった冷や汗が一滴、張のこめかみから流れ落ちた事を彼自身を除き誰も気付かなかった。

迷彩服に弾で満杯の戦闘ベストを着た屈強な兵士を満載しているのが似合ういかにもな装甲車からまず出てきたのは、野暮つたい安物のスーツにこれまた野暮つたい顔立ちの東洋人の男である。

腕に抱えるは安月給のビジネススマン然とした見た目に似合わぬゴツいライフル。機関部と銃口それに装着されたマガジンの形状からM14系列のようだが、ストックから銃身周りにかけて木製だった部分<sup>分</sup>が鋼鉄と樹脂製を置き換えられているのを筆頭に、銃の大部分が張の知るソレとは大きく<sup>2</sup>かけ離<sup>3</sup>れている<sup>誕生</sup>。張が初めて見る代物の銃を、スーツの男は長年の相棒の様にピタリと構えていた。

腰には大の男がぶら下がっても軽々支えてくれそうな幅広のベルト。ライフル用と拳銃用の弾薬ポーチ、ナイフケース、利き腕側に拳銃用ホルスターといった戦闘に必要な諸々一式が邪魔にならない配置で提げられている。

突如現れて聖戦士から守る様に布陣した装甲車の一団に虚を突かれた三合会の構成員が反射的に身構えたが、他の装甲車からも次々と完全武装の男達が降車してくると中途半端な構えでその身を硬直させた。

こちらもまた——2名ほど白人が混ざっていたが——大部分が東洋人だ。スーツの男と比べてこっちは迷彩服を着ていなくとも纏った雰囲気とこなれた銃の扱い方から分かり易く軍人関係と分かる。それもかなりの練度だ。

彪を含め、彼らの顔には張とは比べ物にならない緊張の汗がたつぷ

りと浮かぶ。

プライス、ユーリ、剣崎ら護衛部隊はあからさまに警戒する三合会構成員を一瞥してから、すぐに意識を聖戦士達の方へ移して殲滅に加勢した。

きつちり装甲車を盾にし、敵への露出を最小限にした射撃姿勢を取って交代で応射を繰り返す。

軍用の装甲車は聖戦士からの銃撃から悠々とプライス達を保護し、逆に彼らが放つ正確無比な射撃はただでさえ重機関銃の掃射で戦力も盾となる車両も破壊された聖戦士達の数を更に減らしていく。時折銃撃に限界を迎えた聖戦士側の車両の爆発音が轟き、巻き込まれた者があげた悲鳴が混じる。

そんな中で安スーツの男……伊丹は張の下へ近付いて素早く彼に上から下まで視線を走らせると相手を崩した。

「三合会の張さんですね？　ご無事なようで何よりです」

発した英語のイントネーションの癖から日本人だろうと張は見当をつけた。

「生憎リムジンサー<sup>モ</sup>ビスを依頼した覚えはないんだが現状が現状だから単刀直入に尋ねさせてもらうぞ——おたくらは何者だ？」

「通りすがりの騎兵隊……で、今は受け入れて貰えませんかね？」

サングラスの下の瞳を細める張。伊丹は笑みを崩さない。

——次の瞬間、銃を持つ2人の手が閃いた。

『――注意！ 北西方向の路地より敵の別動隊が接近中！』  
「居たぞ不信神者共だ！」

装甲車の壁がない方向に位置する路地から10名近い聖戦士が姿を現した瞬間、7.62ミリNATO弾と22口径ロングライフル弾の発射音がスカーフ頭の戦士達へ襲いかかった。

2丁拳銃が奏でるフルオートを思わせる連続発射音。2発おきに区切られた極めて速いセミオートのダブルタップが轟くこと複数回。たった数秒、たった2人の男によって聖戦士の小集団は1発も発射する事無く、路地裏に溢れた自らの血の海に沈んだ。

生き残った三合会構成員や護衛部隊が事態に気付いて援護に加わる頃には既に事が終わっていた程の早業。

構成員は啞然となり、見事な仕事ぶりを見せられた剣崎が愉快気に短く口笛を吹いた。

生存者や新手はないと確信した伊丹はM14EBR、張は両手のベレッタM76、銃口から硝煙たなびく3丁の銃を下ろすと改めて向き直った。

(マジかぁ。こつちと違って上空から監視してる味方から警告された訳でもないのにあの早撃ち。しかも2丁拳銃であれだけ正確に撃てるって流石原作でも凄腕のガンマンなだけあるわ)

伊丹は伊丹で、張に撃たれた死体がどれも胴体のバイタルパートや頭部を射貫かれているのを見て戦慄した。

幾ら反動が少ない小口径でも左右同時に急所を正確に当てるとな

れば極めて難しい。戦闘での非常時に伊丹も何度か2丁拳銃を実行した事があるので、尚更難易度とそれを容易く実行した張の腕前が理解できてしまう。

そうこうしている間に次第に銃声は減っていき、やがて銃声の出所が装甲車近辺のみとなるに至り、三合会構成員と護衛部隊もまた発砲を止めた。

装甲車のエンジン音を除けば、今や聞こえてくるのは炎上する車両やへりから発せられるパチパチという音だけだ。

『カルデアよりアベンジャーへ。武装集団側の全ての攻撃対象の沈黙を確認した。健在の標的は残っていない。繰り返す、健在の標的は既に存在していない』

無人機で周辺を監視中の司令部からも報告が来たが、プライス達は新しいフル装填のマガジンと交換し、未だ警戒を緩めない。

張に並び立つ伊丹だけはM14系統（正確には前身のM1ガーランドより引き継がれた）特有の、トリガーガード前部に配置された安全装置を操作して銃を下ろし、敵意が無い事を改めて強調した。

山場を越えた安堵に再びにへらと気が抜ける笑みを作った伊丹を見据え続ける張の表情は真剣なままだ。

「とりあえず邪魔者は居なくなつたようですので、改めてお話の場を何処かに設けたいと思つてるんですが大丈夫ですかね？」

「話し合い、話し合いときたか」

張の視線が周囲を一瞥する。

兵の頭数は向こうが上、火力も上、もつと大事な兵隊の練度もこちらが劣っているのは明らかかな上に、本拠地を空爆しここまで執拗に追い詰めてきた聖戦士共を赤子の手をひねるよりもあっさりと鎧袖一触した正体不明の兵士達の強さを見せつけられ、生き残った張の配下の大半が吞まれているのが見て取れた。

(まいったな。ここまで相手の風下に立たなきやならない立場に回つたのは何年ぶりかね)

そして張もまた両手の愛銃をホルスターに戻すと、襟元を正して張りつめた表情を一転、楽し気で期待に満ちた笑みを形作つた。

「自慢の酒の一杯ぐらいは奢りたかつたんだが、生憎ついさつき事務所を焼け出されてしまった身なもんでね。

身を寄せる予定だった場所にそちらの口に合う銘柄が有るかは怪しいが、茶の一杯ぐらいは出せるだろう。その時で構わないかな、街の外からの客人さん？」

「ええ勿論構いませんよ。そちらの行き先まで送りますよ。どうぞ乗って下さい」

伊丹が手で装甲車へ促すと、入れ替わりに彪が張に囁く。

「大兄、本当にこいつらを受け入れるんですか？」

「連中の目的がどうあれ、俺達が聖戦狂い共が俺達を放り込もうと掘った墓穴からこの兵隊連れの日本人に助けられたのは事実だ。ここで余計なお世話と噛みついたって何の得もねえよ」

此処に至り大上段に構えた態度を取るなど百害あつて一利なし。マフィアというのはビジネスマンなのだ。一文の得にもならない選択を張は嫌う。

それに事情や思惑は分からずとも、目の前の安スーツの男とその仲間が張の危地を救つた恩人であるのは紛れもない事実。

借りを返さず、手を振り払い後ろ足をクソを引っかける真似など道理が通らないし、何より金義潘の白紙扇とまで呼び称される張維新の矜持が許さない。

「ここまで流れちまった以上はこの状況を楽しめよ、彪」

張は無事だった煙草を口に銜えると、引つ繰り返った高級車の車体で燻ぶる炎へ顔を近付け、火を灯す。

「案外あの客人も、フライフェイス火傷顔と同じぐらい俺達を楽しませてくれるかもしれないぞ」

紫煙を薫らせながら、張はそう言つて不敵な笑みを腹心に見せつけたのだった――

「で、お前さん方は何がどうしてそんな愉快な事になつてるんだ？」

「……シートベルトをしていなくて、座席から振り落とされたんだ」↑  
1人筋肉ドライバー状態

「……………」↑膝を抱えたままルマジュールの頭を尻に敷いている  
「テメエスカシ野郎後で絶対ぶつ殺す……………」↑2人の下敷き

ブツシユマスターの乗員区画で珍妙なオブジェと化した見覚えのある面子に出くわし、笑いを噛み殺す張であった。



三合会の事務所―建物の規模はロアナプラでは熱河電影公司ビルに次ぐ―は異様な空気を孕みつつ、最大級の厳戒態勢にあった。

ロアナプラにおける三合会最大の拠点であった熱河電影公司ビルがヘリコプターと多数の聖戦士による襲撃を受け、ビルの大部分が焼失し構成員にも多数の被害が発生したとなれば当然である。

事務所の周囲数ブロックの主要道路は三合会の車両と重武装した構成員によるバリケードと検問が構築され完全封鎖。機関銃が据え付けられるに止まらず、付近の建物の屋上へロケット砲を担いだ構成員も配置される徹底ぶり。

封鎖線内に住まいを持つ無関係の住民はシャッターや窓を閉め切り、家の近くでドンパチが起きて流れ弾やら流れロケット弾やらが飛んでこない事を神に祈りつつ、嵐が過ぎ去るまで閉じ籠る事を事実上強制されている状態だ。

焼け出され避難途中だった支部長の張を載せた車列も襲撃されたという未確認情報が入ってきた時に至っては、ホテル・モスクワとの一大抗争を繰り広げていた時代に匹敵する混乱と狂奔に支配される寸前まで場の空気は緊迫したものの、事務所の戦力総出で張の搜索に飛び出す直前に当の張が姿を現したお陰で未遂に済んでいる。

張を届けたのが謎の装甲車の車列でなければ、事務所を包む空気はもう少しマシなものだっただろう。

張が事前に電話連絡していなければ（幸運にも自爆攻撃で車が横転したにもかかわらず携帯電話は無事だった）逸った構成員が張を乗せていると気付かずに車列へロケット弾を撃ち込んでいてもおかしくない、それ程までに今の三合会は極めて張り詰めた緊張状態に支配さ

れている。

外で監視と警戒に当たる構成員を観察している者が存在するならば、すぐさま黒服の男達がしきりに事務所の前に並ぶ3台の装甲車へ意識を吸い寄せられている事に気付いただろう。

それは午前中にヴィスコンティ・フーズ前で展開された光景の焼き直しだった。ただし場の雰囲気はあちらよりも格段に剣呑ではあったが。

そんな物々しい気配の中で、原因の一端を担う男達が事務所でも最奥に位置する一室で対談を行っていた――

「では商談成立だ」

へりの空爆を受け、自慢のペントハウス諸共支部を焼き出され、果てに自爆攻撃を受けて派手に乗っていた車をひっくり返されるといふ体験をしてきたばかりとは思えない上機嫌さで、張は伊丹へと手を差し出した。

伊丹もまた微笑みを浮かべながら張の手を握りシエイクハンドを交わす。腕が伸ばされた事でコートを脱ぎ黒ネクタイに糊が効いたワイシャツ姿の張の袖口からは、腕にしっかりと巻かれた包帯が見え隠れする。

機銃掃射・空爆・自爆攻撃と立て続けの猛攻に晒されたとあって、張が愛用するコートも破片と粉塵でボロボロに汚れてしまった。これには自他共に認める伊達男たる張も残念そうに眉を落とした。

それでも張自身はあちらこちらに軽度の火傷と擦過傷を負っただけで命に関わる重い怪我は皆無だった辺り、悪徳の都有数の顔役はガ

ンマンとしての腕や算盤勘定の巧さだけではなく、天運や悪運と呼ばれる類の単なる努力では得られない天賦の才も持ち合わせているのかもしれない。

伊丹の手を離れた張は表情をバツが悪そうに口元をひん曲げたものに変えると頭を搔く。

「と言つてもオタクなら分かっちゃいると思うが、情けない事にこっちは事務所をバレンシアの火祭りよりも派手に燃やされちまつたばかりなもんでな。」

そのの処理やら後始末やらもあるし、そちらが注文した品物の数と規模も規模だ。無論最大限努力はさせてもらうが、全て納入し終えるまでに少しばかり時間がかかるかもしれない点については理解してくれよ?」

「そちらの事情は理解しています。用意出来た分から段階的に納入という形でもこちらとしては構いませんよ。こちらとしても1度に受け取れる量には限りがありますから」

「すまんな、折角の客人に世話ばかり掛けさせてしまつて」

「いえいえお気になさらず」

—— 余裕たつぷりだな。

愛想の良い笑みの仮面の下で伊丹の態度をどこまでも冷徹に分析しながら、執務机の上に置かれた小ぶりのアタッシュケースの存在を張は意識せざるをえなかつた。

中身は商談を求めてロアナプラへやってきたという伊丹が用意した注文の手付金————テニスボールに匹敵するサイズのエメラルド。

それは未加工という触れ込みの段階でもそのまま美術品として扱つても良い位に、透明度・濃度・輝き・内包物と価値を左右するあらゆる要素が極めて高水準という、神の奇跡以外ではまず生み出せないような、そんな代物である。

鑑定した三合会お抱えの専門家がこのエメラルドを前にした瞬間、

まず目を限界まで見開き、次に目の前の代物が幻覚でないか何度も目を瞬かせ、今にも崩れそうな雪の人形を扱うような繊細さで取り上げて手に掛かった重みからようやく現実の物体と確信するに至り。

ルーペで詳細な鑑定を進めていくにつれて鑑定士の薄くなった額に浮かぶ脂汗の量はどんどん増していき、最後に震える手で二トログリセリンがたつぷり詰まった瓶を相手にしているかの如きゆつくりとした動作で以ってエメラルドをアタッシュケースの中へと戻すという有様だった辺り、手付け金と称されてあっさり差し出されたこの緑色の宝石の潜在的価値が容易に推し量れるというもの。

何せ張ですらアタッシュケースを開けてお披露目された瞬間には息を呑んで彪共々見惚れてしまった位だ——へりから機銃掃射を受けた時でさえ、一瞬たりともブルって固まる事が無かったあの張維新が、だ！

(ピラミッドが始皇帝の墓の宝物庫から出てきたようなお宝をゴロツキ相手の取引に持ち出した上にあっさり手付けとして渡しておきなからこの態度、か)

これ1個だけでも適切に捌けば、派手な松明と化した熱河電影公司ビルを再建しても尚莫大なお釣りが出る位の価値はあるに違いない。それだけではない。全ての商品の引き渡し完了次第、手付けと同等品質の宝石を更に複数個、代金として支払うとまで伊丹は告げたのだ。

果たして最終的な取引代金がどれだけ膨れ上がるのか、脳裏で算盤を弾いた張は軽く眩暈がしそうだ。香港の本部もそこたまぶったまげるのが容易に目に浮かぶ。

加えて向こうは武装車両とヘリコプターすら持ち出す聖戦狂いどもを鎧袖一触する武力も持ち合わせているときている。

強いて挙げるなら軍隊崩れのロシア人達ホテル・モスクワに近い雰囲気だが……あそこほど暴の気けをあからさまに漂わせていない代わりに、冷徹なまでに突き詰めた武の気配というものを、張は伊丹達が持つ兵器やそれを

操る男達から感じ取っている。

どちらにせよ張から見た伊丹何某の正体が未だ計り知れない点を差し引いても取引を結ぶ……結ばざるを得ない、それだけの利益に張は屈する他無かった。

(イアン・フレミングやクライブ・カッスラーの作品に出てくる秘密組織じゃあないが、いやはや何とも分からん連中だね全く)

ちなみに同じくそれ1つで下手な国家予算に匹敵するかもしれない逸品をもつと用意出来ると聞かされた彪は「冗談だろ」と現実味の薄い呻き声を発したし、張以上に価値が理解出来てしまった鑑定士に至っては白目を剥いてぶっ倒れた。

ふとある事に思い至った張は意識して軽い口調に努めながら「これもまた普段から飄逸な彼にしては珍しい振舞いだった―伊丹に確認を行う。」

「ところでちよいと確認しておきたいんだがミスターイタミ。アンタこういう代物を他の所……ロニーの所にも持ち込んで俺達と似たような取引を持ち掛けたりしたんじゃないか？」

「あ、やっぱ分かります？ でもヴェイスコンティ・フーズさんに支払う分の宝石は今回張さんの方へ支払う分とは別の種類の石ですから、相場価格に大した影響は出ないと思えますよ」

ここまで底が知れない相手ってのも初めてだな。それが張が抱いた偽らざる伊丹への評価だった。

商売相手としても――人殺しとしても。

その隣の部屋では、腕組みをしたシエンホアが化粧によって鋭利さが強調された目を胡乱気なものにして、ソファアーに腰を下ろしたロットンとソーヤーを睨みつけていた。

張への救援へと向かう為に置いて行った筈の同居人が、何故か救援対象だった張と一緒に謎の装甲車軍団に乗って事務所に現れればそりゃ詰問の1つや2つしたくなるのが人情というものだろう。

「なして店に置いてったソーヤーとロットンが張の旦那と一緒にココ居るね」

「……成り行きだ」

気障っぽくサングラスに手を添えたロットンが端的に答えれば、

「……ロットン・が・私ごと・首を・突っ込んで・こうな・た……」

鬱モードから現世に復帰したソーヤーが正直にぶっちゃけ、

「今回の雇い主が三合会のボスを助けに介入すると決めてアタシはそれに同行しただけです。あとそのカツコつけた馬鹿グラサンのドジに巻き込まれて危うく安サンドイッチのハムみたくペシヤンコに潰されそうになりました。何でこんなのとツルんでるんですシエンホアの姐さん？」

「色々あたのよ。ま、ロットン馬鹿なのは何時もの事ねー」

「……………」

同じくソファアーでくつろぎながらうんざりした顔でルマジュールが文句を言えば、シエンホアの言葉の刃によって一刀両断されてしまう。ロットンが。

奥への扉が開き、話し合っていた張と伊丹が姿を現すと、シエンホ

アは素早く姿勢を正し、ルマジュールも立ち上がった。

「お前達も立ち上がるねバカチン！」

「痛いじゃないか」

ソフアーに腰掛けたままのロットンとソーヤーの首根っこをこめかみに井桁を浮かべたシエンホアが引っぱり上げて無理矢理立たせた。

ロットンにはゲンコツのオマケ付きである。まるで生意気な子供に苦勞する母親のようだった。

「取引の経過報告は定期的にこちらから連絡させて頂こう。取り次ぎ先はサンカン・パレス・ホテルのまま構わなかったかな？」

「基本的にこの街に居る間は其処に滞在している予定ですので、それでよろしくお願いします。こちら側から連絡を取りたい場合はどちらにお掛けすればよろしいのか、そちらの連絡先も教えて頂けますかね？」

「勿論。後で今後の連絡先を伝えよう」

どうやら両者は何らかの取引も交わす事で同意を済ませたようだ。

丁々発止の睨み合い脅し合い時々殺し合いを混じえた商談などザラなロアナプラでは珍しい、見た限りにこやかな雰囲気伊丹と張の間に広がっている。

……その後ろ、開いた扉から白目を剥いたオッサンが黒服の男達に抱えられて運ばれて行く光景に関しては見なかった事にした。イタリアンマフィア相手の商談の場に同席していたルマジュールだけが原因を察せた。

ソーヤーの方は、張と共に部屋から出てきた伊丹を捉えるなりシエンホアとロットンの後ろに隠れた。話せるまでに回復しても、伊丹自体への恐怖は薄らいでいない様子。

シエンホアですら三合会の首領の前であるにも関わらず、いやだか

らこそか、少なからず口元を強張らせて伊丹の一挙一動に目を光らせている。これには流石の伊丹も苦笑いだ。

「……2人とも。さつきも思ったんだが、君達は何故そこまで彼に対し身構えているのだろうか」

1人通常運転のロットンが不思議そうに首を傾げた。

それに対する返答はシエンホアとソーヤーのみならず、ルマジユールやまさかの張すら加わつての呆れ顔であった。

「それ本気で言ってるねロットン？」

ダメだコイツと言わんばかりに脱力するシエンホア。

「あのー、ちょっといいですかね」

だがそこへロットンの側に回って声を上げた人物が居た。シエンホアとソーヤーからの警戒対象者である当の伊丹である。

「話に割り込んじやつてすみません。でも自分としましても、今日会ったばかりのそこのおふたりにですね、そこまで警戒されちゃうような心当たりがないんですけれど、理由を教えてください出来ません？」

「こちらも心底不思議そうな伊丹の疑問に対して、暴力の都の住民達は。

「……………」

「？」

「いや何ですかその反応」



ロツトンを除き、まるで口にする事も憚られる怪奇な外見の化け物が突然流暢な発音のクイーンズイングリッシュで詩を誦んじ始めたのを目撃したかのような顔で伊丹を見た。

「……張大哥のお客様、不躰な質問わかってるけど正直に答えて欲しいね」

これから尋常な強敵相手に決闘を挑むような顔つきのシエンホアが伊丹へ問いかける。

「答えられる範囲でなら構いませんけど」

「貴方、これまで何人その手で息の根止めてきたか覚えてますね？」

この街では珍しくない類の話題だ。

俺はこれまで何人殺したただの、今日は何人撃つただの、己を誇示しようとして大仰に声高く言い触らす者も居れば、酒飲み話の話題として気軽に振られる場合もしよっちゅうだ。

シエンホアの問いかけはどちらでもなかった。

本気で知りたがっている者特有の強い光が瞳に宿り、伊丹を射貫いて離さない。この世界には呼び寄せていない、御留守番中の亜神の少女を伊丹は思い出した。

「そうだなあ……大体これぐらいですかね」

茶化したら逆効果だと判断した伊丹は、少し考え込んだ様子でひいふうみいよおと指折り数え始めると、最終的に5本の指を立てた。

「……5人？」

「アホかよ桁が1つは足りねえだろ」

「……50・どころか・500・でも・たり・ない・ワ……」

「彪よ、お前さんはどう思う？」

「ノーコメントで。俺程度では計り知れる相手じゃなさそうですか  
ら」

「オイオイノリが悪いぞ彪。ま、俺も同じ意見だがな。」

さて、5人に50人に500人以上と若い衆が予想を出したところでクリス・タラントから正解の発表タイムだ。解答を頂けるかな、御客人」

伊丹は、まるで本日の釣果を家族へ伝える不愛想な釣り人のようなそっけなさで、事も無げに。

「5桁です」

「……もう1度言ってくれないか？」

「最低でも5桁。自分で数えた訳じゃないですけど、上が取った集計ではそれぐらい殺してるみたいですね、俺って」

大した事でもないと言いたげに、あっさりとそう答えたのだ。

「泰山府君を気取った事はあったが、あちら伊丹さんは正真正銘の太歳星君だったわけだ」

伊丹達が事務所から去った後の部屋で、彪が注いだ酒を傾けながら

張は独りごちた。

「ああ全く、俺やシエンホアみたいなこの街ロアナブラの住人があの男の前に立つと落ち着かなくなるのも道理だよ。」

どこからどう見ても外表の世界の人間の癖に、この街裏社会の誰よりも血と死の気配を纏わりつかせている存在なんて初めてお目に掛かったんだから、な」

心底恐ろしく、だけど愉快なものを見たとばかりに、楽しげな含み笑いを漏らす。

昨晚イエローフラッグで起きた襲撃事件の調査結果は張の下にも届いていた。襲撃者を殲滅したのがイギリス人と東洋人の護衛を引き連れた、安スーツ姿の日本人であるというバオの証言も含めて。

「さて、やつこさんが太歳星君ときたら、眠っていた太歳星君にちよつかいをかけた聖戦狂い共にはどんな祟りが降りかかるのか——俺達は観客席から楽しませてもらおうとするか」

そう呟いて、張はもう一口、美味そうに酒を飲み干すのだった。

Knockin' on Warfare Gate  
e22

——熱河電影公司ビルが過去最大の襲撃を受けた日の別の場所にて。

スラムの一面に似つかわしくない高級車の一団がある建物の前で停まると、普段はゴロを巻くチンピラからどこにでもいる露天商まで老若男女問わず近隣住民の姿が消えた。

まずAKを携えた屈強なロシア人が車を降り、安全と判断すると前後を護られたリムジンのドアを叩く。施錠が内側から解除されると、ボリスを引き連れたバラライカが降り立ち、一目でまともな手入れがされていないと判る数階建てのビルを見上げた。

「密告があったのはここか」

「はい大尉。夜明け前に銃で撃たれた中東系の男が運ばれてきたと」

ボリスの報告を聞きながらバラライカは部下を引き連れビルの中へ。

ビルはエレベーターが無く、照明が切れかかって薄暗い階段を隠す事無く一行は上っていく。不規則に点滅する中で、バラライカは薄汚れた段や壁の所々に真新しい血痕がこびりついているのを目敏く捉えた。

「その患者が我々が探している手の者という何らかの確証は？」

「密告によれば怪我人を運び込んだ人間も中東系だったとの事。服を着替えてはいましたが、連中の乗ってきた車が当時現場から1台だけ

逃走した車両と目撃証言が一致しております」

「足を変える手間を惜しんだのが失敗だったな。砂塵の地では砂塵の地なりの、市街地では市街地なりのやり方が在ると連中は知らなかったらしいな」

「大尉、そもそもこのような展開自体が連中の想定外の範囲外だったのではないかと。運び込んできた者達も怪我人を押し付けるとそのまま大慌てで走り去っていったそうです」

やがてある階の、ある部屋の前でバラライカ達は歩みを止める。真新しい血痕もまたこの扉の前まで続いていた。

AKの安全装置を解除し、何時不測の事態が起きても即座に対応出来る構えを取った男達を代表し、ボリスが扉を叩く。

すぐに扉が開き、白衣を着た中年の男が顔を見せた。彼はロアナプラに多く存在する闇医者の一入だった。

「来たか。患者は奥だ」

そう言つて奥を指差す闇医者への声は助けを求めてやってきた人々を癒し守る医療者としてではなく、商品をどれだけ高く売りつけられるかだけを求める商売人としての口調だった。

「丁度良いタイミングだったな。もうすぐ麻酔が切れて目覚める所だよ」

招き入れられた部屋の奥、真つ当な病院の様な高価な機材が殆ど無く、消毒薬や抗生物質を収める保管棚と検査台以外にはベッドぐらいしかないような空間。

その中でも一番奥に位置するベッドに、右胸をガーゼと包帯で覆われた若い男が横たわり、浅い寝息を立てていた。

亡霊としてではなく生者、旧ソ連軍スペツナズ第318後方攪乱旅団第11支隊の兵士だった頃に腐る程スコープ越しに直視してきた

アフガニスタン人であるのは間違いなかった。

「運び込まれた時は出血を止めるのにこんなのを傷口に当てていたよ」

闇医者が差し出した膿盆には、鉄錆色に濡れた格子模様の布。

血を吸った特徴的な柄の布はクーファイヤだ。イエローフラッグで死んでいた聖戦士共もまたクーファイヤで顔を隠していた。

ここまでの証拠があるならば褒賞を与えるに足る。バラライカが顎をしゃくると、ボリスが封筒を闇医者へ手渡した。中身である100ドル札の束を一瞥して医者は満足げに頷いた。

バラライカは気付かずに未だ眠る若い怪我人へと近付いていくと、おもむろに手を伸ばした。

マニキュアが塗られた彼女の指先が、躊躇いなく包帯とガーゼごと縫合されたばかりの傷口へと突き込まれた。

激痛に覚醒し、悲鳴を上げて跳ね起きようとした中東系の若者の体はしかし、女とは思えぬ鋼鉄の如き強度で傷口を抉り続けるバラライカの手を押さえ付けられ、動けない。

悲鳴もまた、ベッドを取り囲むロシア人達から突きつけられるAKの銃列と、世にも悍ましい獣の如き笑みを浮かべるバラライカを極至近距離で覗き込んだ事ですぐに干上がった。

「おはよう。早速だけど、色々話して欲しい事が有るの。素直に話してくれるのならば早くアッラーの御許に送って下さいと懇願する時間が短くて済むぞ?」

纏わりつく熱気で目を覚ます。

「暑っ……」

その眩きは自然とずっと昔に捨てた母国の言葉で零れ落ちた。安っぽいブラインドから差し込む日光の角度と強さから既に陽がかなり高くまで昇った時間帯らしい。

中古のベッドから身を起こした途端に頭の中で特大サイズの鐘が盛大に鳴っているかのような頭痛に襲われて男——ロツクは呻き声を上げて頭を押さえる。

体に触れるシーツの感触から、己が下着の1つも付けていない素っ裸である事に遅まきながら気付いた。

少し揺らしただけでグワングワンと痛む頭を抱えながら、こんな状況下に置かれてしまった原因を少しでも思い出そうと周囲を見回す。

見覚えのある室内。自分の部屋なのだから当然だ。

生まれ持った性分から定期的に整理と掃除を行っている筈の室内は空になったビール缶と酒瓶で荒れ果てている。テーブルやソファーに転がっている数量からして自宅のストックを丸々飲み干してしまったと察し、二日酔いとは別の理由でロツクは顔をしかめた。テーブル上の灰皿も結構な数の吸い殻が溜まっている。

視線を下へ。ベッドの下の床に酒で汚れた愛用のワイシャツとネクタイにスラックスが皺くちやで転がっていた。

それから、ロツクの物ではない服も。

尻の大部分が見える位大胆にカットされたホットパンツと黒のタンクトップ。ついでに色気の無さを布地面積の少なさで補うデザインの下着。枕元のコート掛けには銀色に輝くベレッタのカスタムを収めた2丁拳銃用ホルスターが引っかけられている。

頭に添えていない方の手が柔らかく、温かく、少し湿った感触を探

り当てた。振り返る。

右肩がトライバルタトゥーで覆われた全裸の女が同じベッドの反対側を占領していた。

同僚であり相棒でありロックにとつての銃であるレヴィが穏やかな寝息を立てていたのを視界に収めるに至り、ようやくロックの思考と記憶が完全な起動を果たした。

「そつか、昨日はイエローフラッグで襲われて飲めなかったから飲み直すぞつて、レヴィがウチに押し掛けてきたんだつて」

イエローフラッグで最初の一杯を飲み干す前に、禁酒法時代の取締官も顔負けに酒を憎んでいるアツラー狂いのターバン頭共に邪魔をされたのだ。

勿論酒はバオの店ごとおじゃんとなり、しかもその邪魔してきた連中をレヴィがお返しに鉛玉をプレゼントするよりも先に他の客があつという間に片付けてしまったものだから、短気な女ガンマンは避けの邪魔をされた上危うく月まで吹っ飛ばされかけた事への恨みつらみのぶつけどころを失ってしまい、そのストレスは行動を共にしていたロックの家へ半ば無理矢理押しかけての飲み直しによつて解消する事となり……

結果、ロックの自室は閉め切つて籠つた熱気だけでなく、汗とアルコールと煙草と男女のあれやこれやの残滓の饅えた臭いが入り混じった異臭が充満しているという惨状だ。

「臭いが染みつかなきやいいけどなあ」

ぼやきながら窓を開けて換気を行う。生々しい異臭の代わりに、外



の喧騒と生温い空気がロックの肌を嬲った。

最初はどつちがきつかけだったかは忘れたが、何も纏わず同じベッドで目覚める事に殆ど恥ずかしさを覚えなくなった程度には回数を重ねている。

それにしても、とロックは思う。

「こうして見ると寝顔は可愛いんだよなあ、寝顔は」

普段の三白眼や、エダに絡まれた時や鉄火場で銃をぶつ放している時の凶相と比べると、レヴィの寝顔はあどけなさを感じる位に穏やかである。

こうして間近で拝む機会に恵まれる度、ロアナプラに溢れている商売女がけばけばしい化粧で強調しているそれとはまた違う意味でレヴィは美貌の持ち主であると、ロックは再確認している。

悪徳の都でも名うての女ガンマンとしての荒々しさが薄れた、純粹で無防備な女としての貌を独占している事に対する、ちよつとした満足感と自尊心も頭を擡げる辺りは雄としての宿痾か。

そつと眠るレヴィの頬に軽い口づけを落としてから、ロックは全身に纏わりついた汗とアルコールを洗い落としにシャワールームへ入っていった。

首にバスタオルを引っ掛け替えの下着を履いてロックがシャワールームから出ると、壁の電話が鳴っていた。

ロックが電話に出る。外からの喧騒に呼び出しの電子音がかなり立てても尚、レヴィは未だ目覚めていなかった。

ヤケ酒も入つての鬱憤晴らしたのもあって、夜明け近くまで続

いた交わりは女ガンマンも相応に疲弊する程度には激しかったのだ。

「はい、もしもし?」

『ロックか! 無事か!? レヴィは一緒か!』

開口一番そう訊ねてきた電話の人物はロックとレヴィの雇用主であるダッチだった。

レヴィに負けず劣らず荒事慣れした、知的でタフで屈強な変人である黒人の声は珍しく切羽詰まった響きを帯びていた。

引つ掛かる物を覚えながらもロックはダッチの質問に答えてやる。レヴィとの関係もとつくに知られているので隠す事ではない。

「レヴィとは昨日からずっと一緒に今もまだ寝てるよ。昨晚は少し派手なトラブルに巻き込まれはしたけど、僕も彼女も特に怪我なんかはしてないよ。何かあったのかい?」

『無事か。ならいい。だがそうか、お前達もか……』

無意識に、受話器を握る手に力が増した。

『聞けロック——昨晚お前達と別れた後、俺とベニーは襲撃を受けた』  
「何だって?」

昨晚は仕事を終わると特に用事がなかったロックとレヴィは飲みに出かけ、ダッチと情報処理担当のハッカーであるベニーは機材メンテナンスの為に仕事道具の魚雷艇に残った筈だった。

『船をドックに入れてからしばらくした頃だ。魚雷管のチェックをしていたら見慣れない車が数台ドックに入ってきたんで俺が様子を窺っていると、車から降りてきたのは頭にターバンを巻いて顔を隠した男どもだった。』

で、連中は俺の存在に気付いた途端、アッラーの名前を叫びながら

持ってたAKを問答無用でこっちへぶつ放してきたもんだから、俺は船の舳いを解いて操縦室へ飛び込むと即座にその場からトンスラした訳だ』

「ダッチの方は無事だったのか!？」

『船体に幾つか穴が開きはしたが、俺の体に新しい穴は増えちやいな  
いから安心しろ。魚雷管も空だった事を神様に感謝だ。』

ベニーもそんな時は船の奥のアイツ専用の空間に籠ってたから弾を食らったりはしてないが、俺がいきなり船を走らせたもんだから柵に頭をぶつけてタンコブが出来たって愚痴ってたぜ。被害はそれくらい  
いっちゃそれくらいだな』

その後魚雷艇を沖合までかつ飛ばし海上まで追っ手が来ない事を確認し終えると、すぐさまロックとレヴィが行った筈のイエローフラッグへ連絡を試みたのだという。

だが繋がらなかった。当然だ。ダッチが電話を掛けた時間帯にはとつくに店の電話も電話線もカテゴリー5の竜巻が直撃したよりも酷い有様になったお陰で断線していたのだから。

ロックの自宅にも掛けたが、その時はその時で腹を立てたレヴィを宥めながらの帰路の途中だったものだからやはり電話は繋がらず。

タイミングの悪さが重なり、今になってようやくこうして話せたというのが事の顛末である。現在魚雷艇はロアナプラの街を一望出来る距離の海上で様子見しているのだという。

『問題は、だ』

かちりと金属音。電話の向こうで火打ち石が擦れる音。深く吸っては吐き出すのが聞こえ、ダッチが紫煙を薫らせている姿が容易にロックの脳裏に描き出される。

ダッチが口に出すより早く、ロックの口が動く。

「襲撃者の正体と目的」

『その通り』

「ダツチ、俺達が居たイエローフラッグを……」

違うな、イエローフラッグに居た俺とレヴィを襲ってきた連中もバオの店を吹き飛ばし、生き残った客をアツラーの名前を唱えながら処刑して回る。そんな連中だったよ」

僅かな沈黙。

『……という事は、だ』

「俺達ラグーンのメンバーを狙っている勢力が存在して、そいつらはおそらくイスラム系のヤバイ連中な可能性が高い」

『だろうな。ここまであからさまな聖戦狂いアピールをされるとなると他に俺達に恨みを持つ連中の偽装って可能性もなくもないが、基本的にこの街の人間は正直者の集まりだ。』

余程の事情がない限り、まどろっこしい誤魔化しはせず堂々と殺しに来るヤツらばかりだ。それこそバラライカや張の旦那が良い例だぜ』

「俺とレヴィを狙って襲ってきた連中は兵力だけでもかなりの物だった。武装車両<sup>テクニカル</sup>だけじゃない、自動車爆弾でイエローフラッグごとブツ飛ばしてくるような連中だ」

『こっちはさっさと船で逃げ出して正解だったぜ。また乾ドックを焼き討ちされるなんざ真っ平御免だからな』

「ともかく相手はそれだけの資産を費やしてまで俺達を殺したがる位に俺達を恨んでいる、そう考えて良いだろう」

『恨みは方々買っちゃいるが、砂漠の預言者絡みの連中で心当たりがあるとしたら——』

既に遠い記憶。事務所にRPGをブチ込み、カミカゼ仕様のモーターボートでロック達を追い回し、あまつさえロックはその連中に一度は拉致さえされ、それでも彼らが求めてやまなかった文書<sup>荷物</sup>は他でもないラグーン商会と三合会の逃がし屋の手によって超大国の情報員<sup>エージェント</sup>

に引き渡されてしまった。

「ヒズボラ」

『だな。手間と時間をかけて連中が計画したハイキングを台無しにしちまった上に、東南アジア界隈の連中の同盟者のキャンプまで1つ潰しちまったんだ。』

そりゃ円月刀で100回俺達の首を斬り落としてもまだ収まらない程度には恨みを持っててもおかしかねえな』

「そういえば最近、新顔の中東系が黄金夜会に話を通さずかなりの量のクスリをバラ撒いてるって話も聞いているけど、あれも連中が関わっているんじゃないか」

『かもしれない。大層なお題目を掲げて大使館やマーケットを吹き飛ばしてる連中の資金源が麻薬カルテルの真似事なんて汚れ仕事なのもよくある話だ』

ロツクはそこでラグーン商会以外にもヒズボラの復讐対象となる人物の存在に思い至った。

「あの1件には三合会も深く関わってる。張さんに一応知らせておいた方が良いかな?」

『念の為情報は流しておいた方が良いだろう。連中がどこまでやる気なのかまでは分からないが——』

その時、遠雷に似た長く尾を引く爆発音が窓から飛び込んできた。窓ガラスがビリビリと震え、路上から通行人の驚きと混乱の悲鳴が上がる。

「何だカチコミか!？」

午睡を貪っていたレヴィもこれには飛び起きた。

NYのスラムも霞む悪徳の都で長く生き延びてきただけに、銃声の類や剣呑な気配に対してはロックよりもずつと鋭い。何も隠す物を身に着けていない女豹の如き肢体がベッド上で跳ね起き、ノータイムでコート掛けに吊るしてあった愛銃へ飛びつく姿は、直前まで熟睡していたとは思えない。

「いや、今の爆発は遠いぞー！」

ロックもまた余程切羽詰まっていない状況であれば、銃声や爆発音の響き具合から危険度を判別する位の技能は習得していた。

パンツ一丁のロックと銃以外には下着すら纏っていないレヴィは同時に窓へと飛びつき、身を乗り出して外を見回すと、ロアナプラでも特に高いビルの1つから紅蓮のキノコ雲が立ち上っているのが見えた。盛大に炎上するビルの屋上から急速に離れていく影もだ。

方角と建物の特徴から、出所である高層建築物がどういう場所であるか思い至った瞬間、ロックの顔が真っ青になった。

「最悪だダッチ。三合会の事務所がナカトミビル<sup>『ダイハード』</sup>みたいな吹っ飛んだ!」

『ああ、ここからでも見えてるよ』

電話口のダッチの声も、今まで以上に張りつめて硬い。

「連中本気も本気、下手すりゃこの街ごと吹き飛ばしてでもあの件に

関わった俺達を狩り出すまで、連中は止まるつもりがないのかもしれないぞ」

——己の発言が正鵠を射ていたなど、当時のダッチは思いもよ  
らなかつたのだ。

港町であるロアナプラには水路も多く存在している。

水路に面する建造物の大部分は倉庫や工場、もしくはその成れの果ての廃墟だ。第2次大戦中の日本軍によって建てられた年代物もあれば、建築から10年も経っていないものまで混在している。

港に近く設備も整っている地帯は主に大手組織が取り仕切り、中小組織は船の出入りが激しい主要航路から離れた水路沿いの、最早正式な所有者も分からないような建物に勝手に居座りアジトとして利用しているのが現状だ。

ロアナプラという世界中からありとあらゆる悪徳を引き寄せるソドムの都では、ホテル・モスクワ、三合会、ヴィスコンティ・フーズ等の大手が黄金夜会という話し合いの場を設けて均衡を維持する一方、裏稼業に身を置く有象無象による抗争は後を絶たない。

特に小型のボートで運び込んだ様々な品物の水揚げ場、もしくは拉致した敵対組織のチンピラを沖合で漁礁に仕立てるにはうつつつけの場所であるこれら何十もの建物はシノギに飢えた者達にとって垂涎の存在であり、建物を巡る争奪戦は常時過熱状態にあった。

それもあつて、この水路地帯は四六時中死体が量産されるロアナプラでも特に必然的に人の入れ替わりが極めて激しい。

倉庫の住民が1週間後には死体となって水路に放り出されて別の住民の物になった、そんな展開もここでは決して珍しくない。



そんな点在する建物群の中でも比較的規模が大きい倉庫の1つ。倉庫に隣接する棧橋を武装した歩哨が監視していた。棧橋には全長20メートルほどの舢舨が停泊している。

AKを抱え戦闘服を着た歩哨はやがて棧橋の端に辿り着く。しばし水路の奥に目を凝らし、濃い青緑色に輝く水上から不審な船が近付いてきていないか見回すと、歩哨は回れ右をして陸地側へ向かおうとし――

海中から棧橋の陰に浮上してきたシェーン・J・キヤクストン少佐が、サイレンサー装着の拳銃で歩哨の頭部を撃ち抜いた。

瞬時に脳からの指令が停止した歩哨の肉体は棒立ちとなり、次の瞬間棧橋の端から海面へ向かって倒れ込む。

歩哨の死体が海面に触れる刹那、2本の腕が海面から突き出して死体1人分の重量を受け止めた。海面から10センチばかり上で支えられた死体がゆっくりと高度を落とし、やがて波の音に掻き消される程の僅かな音を残して海中へと消えた。

静かに処理を終えた死体と入れ替わりに、レイモンド・マクドウガル大尉の顔が水面から現れる。

キヤクストンとレイは各々分担した方向へ短い時間レーダーの如く感覚を研ぎ澄まさせた。他に歩哨の姿や気配なはし。気付かれた様子も、ない。

アイコンタクトを交わすと、まずキヤクストンが棧橋上へ自らの体を引っ張り上げた。水中マスクにシュノーケル、海の色に溶け込みやすいデザインのウェットスーツの上に必要最低限の潜入用装備を着用した姿が露わになる。

キヤクストンが銃を構えて警戒しつつ続いてレイも海中から棧橋の上へ。こちらも同様の姿だ。防水性のホルスターから彼もサイレンサー付きの拳銃を抜いた。

2人が手にしているのはH&K社のMK23。ソーコムピストルとも呼ばれる通り、特殊作戦軍SOCOMが現米軍主流のベレッタ・M9自動拳銃以上の特殊部隊が持つに相応しい武器を求めたOHWS計画攻撃型拳銃火器システムが生み出した拳銃だ。

お偉方肝入りの作品と言えれば聞こえはいいが、実際に使う現場の兵士からしてみれば45口径の複列弾倉ダブルカラムなのを差し引いても、様々な機能を持たせたはいいがこれまた嵩張る専用モジュールの存在もあり、サイドアームの癖にM9や信頼性からキャクストンのように未だ愛用する者も多いコルトのM1911より大柄でずっと重いこの銃は評判が悪い。

それでも精度と耐久性は本物であり、亜音速の45ACP弾に銃と同じく特殊作戦向けに開発されたサイレンサーを組み合わせたこの銃は今2人が行っている隠密潜入を大いに発揮しているのは、先程の歩哨によって証明されていた。

「久しぶりのコンビだが潜入が気付かれる前に素早く済ませるぞ、レイ」

「ゴソ泥の真似をするならもっと相応しい時間帯にしたいものですがね。こんな真昼間にこの格好じゃありオのカーニバルの踊り子みたいに目立ちますよ」

「仕方ないだろう。時間がないんだ」

一見ゆっくり、だが1つ1つの動作の繋ぎ目が極めて少ない滑らかな足取りで2人の兵士が棧橋を進む。

ゆっくりはスムーズ、スムーズは早い。焦った動きは無駄を生み、無駄な音を出し、無駄な時間を費やす。体から滴る水滴以外に2人が立てる物音は限りなく小さかった。

唯一露出した頭部の濡れた肌を、海側から吹く季節風が煽る。

「思っていたよりも警備が薄い。畏の可能性は？」

「分らん。主だった兵が出払っているだけの可能性もある。警戒は怠るんじゃないぞ」

棧橋と艇を繋ぐ短いタラップを上がる。

艇は自力で航行する為の動力部を持たない代わりに貨物を搭載す

る容量に特化した云わば浮かぶ荷車だ。水面上に覗いている部分の  
高さは低い、内部空間は水面下のかかなり深い部分まで貨物用の空間  
が占めており外見以上に内部容積は大きい。

舩の上にも歩哨が居た。舩の上部と棧橋は高低差が有り、棧橋が船  
体に隠れて死角となっていたので、仲間が殺された事にその歩哨は気  
付いていなかった。胴体に2発、近付いて頭にとどめの1発を撃ち込  
んで先に行った仲間の下へ合流させてやる。

倉庫周辺の歩哨が棧橋側の異変に気付いた様子はない。今度は海  
に放棄せず、船上で排除した歩哨の死体を倉庫側から見えない死角へ  
と運び込んだ。

その舩は船上に上がって間近まで近付いて見るとおかしな特徴が  
あった。

穀物や鉱物を積む際に開閉する貨物用の大型ハッチが溶接され、正  
しい舩としての役割が果たせなくなっている。その上でコンクリー  
トでより強固に固められ、完全な密封状態にされている。

「シェーン、アレを」

レイが顎をしゃくれば、コンクリートに覆われたハッチの片隅に真  
新しい換気ダクトが生えていた。これも本来備えていた設備には到  
底思えない。

その舩には貨物用だけでなく、積み下ろし時に作業員が下層部へ安  
全に出入りする為のものだろう小型ハッチもあった。長年の潮風を  
浴びて錆や塗装の剥げが目立つこちらは最初から存在していたもの  
だろう。

そつと小型ハッチに手を掛ける。外見の汚さの割には蝶番は小さ  
な軋みを上げるにとどまり、予想よりもあつさりとハッチが持ち上  
がった。

簡素な鉄パイプ製の梯子がまっすぐ薄暗い船内へと伸びていた。

「船内を調査するぞ。私が先に行く」

「気をつけてくださいよ。此処からじゃ満足な援護なんて出来そうにありませんからね」

貨物用ハッチを封印する分厚いコンクリートの蓋の陰にレイを残し、やはり必要最低限の物音で梯子を滑り終えたキャクストンは、MK23のトリガーガード前に装着した専用モジュールを操作して内蔵されたフラッシュライトの電源を入れた。

梯子を下りてすぐ目の前に分厚い鋼鉄の扉が鎮座している。丸窓から奥を覗く。更にその奥に同様の扉。

「エアロックか」

空調機能は稼働していないが二重の扉は問題なく開いた。

2重の扉を潜る際、扉と扉の中間に置かれた小さな台に電気工事の検査器具に似た機材が数個積んであるのにキャクストンは気付いた。彼の眉間の皺が険しさを増した。

船内の大部分を占める空間へと足を踏み入れる。

銃口下のライトが放つ光が、照明が灯されていない空間を限定的に照らし出した。広さはバスケットボールのコートより少し狭い程度。ゆっくりとライトを振り向ける。

空間の多くを占めているのは簡素な2段式ベッドに山積みになされた段ボール箱。中身は大量の保存食と飲料水。別の箱には携帯用トイレ。

頑丈な化学繊維を用いたフード付きの防護服とガスマスクの交換用フィルターがぎっしりと詰まった段ボール箱もまた数箱存在した。

ライトを振り向ける。黒地の布に白文字でアラビア語を描いた旗が壁面に掲げられていた。国防総省時代の資料で見た事が有る——  
——アブ・サヤフの旗。

ライトを振り向ける。唐突に全裸の巨乳美女の姿が浮かび上がった。よく見てみればただのヌードモデルのピンナップポスターだ。

ポルノ雑誌も何冊かポスターの下に積まれていた。こちらは口ア

ナプラに来てから現地調達したのだろう。卑猥なポーズをした美女の写真の威力は世界共通らしい。

ライトを振り向ける。床に絨毯が敷いてあった。絨毯の上にはコンパスも置かれているが普通のコンパスではない。イスラム教徒が祈りを捧げるメッカの方角を世界中の何処に居ても把握するのに用いるキブラコンパスと呼ばれる代物だ。

ライトを振り向ける。天井へ延びるダクトの根元に大型の空気ろ過システムが据え付けられていた。位置的に船上で見つけたダクトに繋がっているのは間違いない。

ライトを振り向ける。粗末なデスクの上に、コーランと並んでファイルが置かれていた。

タイトルは『イブリース計画』。アラビア語と英語で併記されている。

ページをめくる。こちらは英語だけだったのでキヤクストンにも内容を理解出来たのは幸いだった。

キヤクストンの額を海水ではない別の水滴が伝い落ちていった。

「連中、本気か」

その呻き声には、かつて米軍最精鋭の秘密部隊を率いていた歴戦の兵士ですら抑え難い畏れで震えていた。

防水機能付きの小型カメラでファイルの中身を一枚残らず撮影した。訓練キャンプの兵士達の宿舎にも似た内装を施された空間をくまなくライトで照らして回り、これ以上の手掛かりは見つからないと判断すると痕跡を消し、レイと合流しに梯子へ戻る。

「情報は？」

「計画表は記録に収めたが事態は深刻だぞレイ。」

この解はシエルターだ。エアロックに換気システム、放射能防護服にガイガーカウンター。ベッドと食料の量からして1個分隊が2週間はここで不自由なく凌げるだろう」

「……CIAが得た情報は正しかったようですね」

「だが本命はあの中にはなかった。あるとすれば——」  
「倉庫を調べましょう」

2人の兵士の意識が隣接する倉庫へと向けられたその時、当の倉庫の方角で突然銃声が響き渡った。

キヤクストンとレイの体が長年の経験によって反射的に動く。船上で身を屈め遮蔽物を確保。最小限の露出で周囲を警戒。

立て続けに聞こえてくる銃声の大半はAKだ。複数の言語による叫び声も飛び交っている。耳を傾けたキヤクストンが拾ったのは英語、アラビア語、タガログ語の怒号と悲鳴。

それから、先に聞こえてきた悲鳴と毛色が違う鋭いロシア語も。雑多な言語が入り混じる怒号はその数をどんどん減らしていく。

「一体何が起きてるっていうんだ？」

「どうやら地元勢力がああ倉庫の主を襲撃しているようだ。存在を悟られる前に我々は退却するぞ——」

そこまで相方へ告げたところで、キヤクストンの鋭い視線が倉庫から水路の方へと転じた。彼の素振り、波間と銃声と断末魔に混じって水路の出口側から近付いてくる音の存在を知覚したレイの表情も険しさを増す。

海からも何者かがこちらへ迫っている。急速に。

「マズいなレイ。聞こえるか？」

「ええ聞こえています。逃げ道を塞がれましたね」

ゾディアックとも呼ばれる硬式の大形ゴムボートが数台、武装した兵士達を乗せて海側から水路内へ突入してきた。

今から艇の上から海中に飛び込んで逃げ込もうにも間違はなく目撃されてしまう。酸素ボンベなど長時間海中に潜伏できる装備があればまだしも、速度と隠密性優先の軽装備では海中に潜っても隠れるのは極僅か。間違いなくそう遠くない海面に浮上した所で血に飢えたサメかシャチよろしくボートに追いつかれるのがオチだ。

警戒の視線を向けていたキヤクストンとレイの目が不意に見開かれた。

ゾディアックに乗った男達には統一された特徴があった。誰もが屈強なスラブ系で、AK74や空挺仕様のAK74UといったAKシリーズで武装し、ロシア軍の……旧ソ連空挺軍の戦闘服に身を包んでいた。

キヤクストンとレイの脳裏でこの悪徳と亡者の街で遭遇したあの悪夢の夜が否応無しにフラッシュバックされた。

まさか、彼女達なのか。

身を潜めた2人のアメリカ人が愕然としている間にも事態は動き続ける。

倉庫の扉が開いてクローフィーヤを巻いた聖戦士が飛び出してきた。キヤクストンとレイが隠れている棧橋の方へ必死の形相で走る彼らの背後に、やはりソ連軍の戦闘服姿の兵士達が出現したかと思うと、容赦なく聖戦士の無防備な背中へと5・45ミリ弾を撃ち込んだ。

鮮血を散らしながらある聖戦士はそのまま棧橋上に崩れ落ち、慣性と被弾の衝撃で身を振りながら水路へ転落して派手な水しぶきを上げた。背後からの凶弾から生き延びた幸運な者もいたが、水上で待ち構えている旧ソ連軍の集団に気付くと絶望の表情を浮かべた次の瞬間には背後から撃たれた仲間の数倍もの穴を拵えて息絶えた。

やがて銃声は途絶え、代わりにゾディアックから降り立った兵士の軍靴が次々と棧橋を踏む音がキヤクストンとレイの下まで聞こえてくる。

「クソツ、どうするんだシエーン。このままじゃ首まで糞の沼に漬かったまま墓標が立てられる羽目になるぞ！」

レイの言葉はキヤクストンに届いてはいた。

彼の視線と意識は相棒ではなく別の方向へと注がれていた。

聖戦士が逃げ出し、次に旧ソ連の兵隊を吐き出した倉庫の扉から続いて姿を現した人物へ。

戦闘服の代わりに旧ソ連軍将校向けのコートをスーツの上から羽織った、火傷痕が生々しい美女に。

本能的な確信だった。

キヤクストン最大の罪の象徴、最終的にグレイフォックスを壊滅近くまで追い込んだ女中という名の猟犬に最初に遭遇したあの時、キヤクストンとその部下をその場から無傷で撤退する助けとなった旧ソ連軍の亡霊という名の守護天使。

見事な技量、見事な指揮を執ってみせたジエーン・ドウ名無しの女の女指揮官についてキヤクストンが知るのは無線越しに聞いた声だけであり、直接顔を見た訳ではない。

にもかかわらず、キヤクストンはコートの女こそ件のジエーン・ドウであると一目見ただけで確信した。

聖戦士を排除する旧ソ連軍の兵士達の練度もまた見事なものだ。そんな彼らに囲まれて1人将校用コートを纏って立つ女が指揮官、最低でも上の立場に属する事など自明の理だった。何より纏う気配が違った。

同時にキヤクストンの思考を、先程解の内部で目を通したファイル



の中身が通り過ぎていった。  
様々な意味で最早時間は残されていない。

「レイ、頼みがある」

キヤクストンは思いついた行動案をレイへ語った。

キヤクストンの予想通り、レイは小声で悪態を吐くと、押し殺しても尚緊迫した声で以って反対を表明した。

「馬鹿言えシエーン！ そんな事をしたって無事で済む保証も、お前の予想が正しい保証も全く無いんだぞ!？」

「レイ、最早状況は俺達が内々に処理出来る範疇から逸脱しているんだ。俺達や俺達の祖国だけじゃない、彼女やこの街に関わる人間、そして今やこの街そのものが導火線に火が点いた爆弾の上に立つ当事者なんだ」

だからこそそれが突破口になるのだと、キヤクストンは語った。

「頼んだぞ、レイ」

副官が制止するよりも早くキヤクストンは小型カメラを彼に押し付けると、即座に行動に移った。

——立ち上がるとバラライカと彼女の部下達に見える場所まで歩いていき、堂々とその姿を見せつけたのだ。

ラグーン商会の雇用主と社員達が合流を果たしたのは水平線の向こう側へ陽が隠れた頃合いだった。

八つ当たりで焼き討ちされる事もなく、壁に幾つかの穴を増やした程度の被害で済んだ（無論、物騒な置き土産も無いか確認済）乾ドックで互いの無事を確かめ合い、現在魚雷艇のキャビンで現状把握と今後の対応に向けた話し合いに勤しんでいる。

乾ドック内の事務所を使わないのは再度襲撃を受けた場合に備え、またスタコラサツサと海上へ退避する為だ。

「旦那と三合会御自慢のペントハウスが『タワーリング・インフェルノ』も真つ青なキャンプファイヤーにされてたのは湾からもよく見物出来たけれど、街の方はその後動きとかはあったのかい？ 海上からだと流石に限界があつてね」

ユダヤ系白人のベニーが街に残っていたロックとレヴィへ訊ねた。ラグーン商会において彼のポジションはハッカー兼情報処理担当。しかし海上からアクセス可能な電子的情報収集手段とその範囲は限られてしまい、現状で最も新鮮かつ正確な情報を手に入れられる手段こそ現地滞在者による口伝だった。ベニーに続いてダッチも発現する。

「まずは張の旦那は無事だったのか教えてくれ。イエスカノーかで俺達の立場や街の煮え具合が大分変わってきちまう」

「張さんについては何とか無事らしいよ。別の事務所に自分の足で

入っていくのも目撃されている。

ただ当然だけど三合会はどこもかしこも厳戒態勢だ。街中を三合会の黒服が走り回ってるよ」

「そりゃあ良かったぜ。いくら張さんでも72年のハノイ並みに爆撃されちゃあ良かったぜ。って思っちゃまう位にや酷かったからな」

「だけど以前のヒズボラの時もそうだったけど流石張さんだ。今回も2丁拳銃を撃ちまくりながら冷や汗の1つもかかずに対処してみせたんじゃないかな」

「いや、それがどーも今回はかなりヤバかったらしいぜ」

軽く笑いながらのベニーの発言を否定したのは、水密扉に寄りかかりながら愛用の拳銃を弄んでいたレヴィだ。ロックも領き同意を示す。

「レヴィの言う通りなんだダッチ。炎上するビルから脱出した張さんの車も襲撃されて当時はかなり不味い状況だったらしい。相手はへりすらも持ち出していたからね」

「だけど張さんはちゃんと三合会の事務所に避難したんだろう？」

「だったら襲撃は受けたけど三合会の救援が間に合ったか、或いは張さんが自力で撃退して事務所まで歩いて避難したとか……」

「それがどうにもおかしいというか、ややこしい展開というのかな……」

「妙に口を濁すなロック。今は時間が惜しい。さっさと続きを話してくれ」

「騎兵隊だよダッチ。いきなりどっからともなく騎兵隊が現れて張の旦那を助け出したんだと。」

三合会でも、ホテル・モスクワでも、ロニーやコロンビアの連中でも市警でもない、街の外から来た連中が一切合切薙ぎ払って張の旦那を地獄の窯から華麗に助け出したんだとよ」

告げられた内容に、ダッチは火が点いたアメリカンスピリットを銜

えて黙り込んだ。

タフで知的で変人なこの黒人がたつた今教えられた内容を脳内で咀嚼し、分析しているのが手に取るように伝わってくる。

「その騎兵隊の具体的な特徴と、そいつらが街の外の人間だと判る理由は何だ？」

「俺とレヴィが直接見た訳じゃないし仕事で夜まで街を離れていたから僕達は気付いていなかったけど、昨日から街中を装甲車で走り回ってる連中が居たんだよ、ダッチ。

彼らは自分達を『街の外から取引をしたくてやってきた』と言い触らしていて、実際に昨日は古物商のイザツクの店に出向いてその場で結構な額の取引を交わしてる。

更に今日の午前中にはヴィスコンティ・フーズにしばらく滞在して去っていくのを近所の住民が目撃している。その直後からロアナプラ中の問屋にヴィスコンティ・フーズから注文の電話が殺到したって話だ。ロニーがその装甲車の主と取引を結んだのは間違いないと思う」

「情報の精度は確かなのか？」

「二大事と判断して即リッチー・リロイに電話を入れたからね。彼の情報ならまず信用していいだろう」

リッチー・ヘインサイド・ツーリスト・リロイは玉石混合の情報屋界限でもかなりの上澄みだ。納得の吐息がダッチの鼻から漏れた。

ロツクの説明をレヴィが引き継ぐ。

「でもって装甲車をリムジン代わりに乗り回してるってえその連中の特徴なんだが……兵隊なんだとよ」

「兵隊？　もしかしてそれ、文字通りの意味での兵隊かい？」

「そういう事らしいぜベニー。迷彩服は着ちやいないがどっからどう見ても現役にしか見えないバチカンやバツキングダム宮殿の近衛兵並みに背筋がシャンとした野郎どもが、弾で膨らんだチヨツキ防弾ベストに

スベックオブス  
特殊部隊しか持たないようなライフルを抱えて雁首揃えてんだと。  
それが兵隊ソルジャーじゃなけりや他に何て呼べば良いのか教えて欲しいね。  
ついでに言つとくと昨日の時点でせいづらの車は1台きりだった  
のが今日になって3台に増えてたらしいぜ。それもでつかい砲塔付  
きにマッドマックスも形無しの装甲トラックがだとよ」  
「そんな連中なら張の旦那を地獄の窟から助け出すのも確かに楽勝か  
もな。

だが単なる兵隊の集まりがイザックやロニー相手にあつさり商売  
に持ち込めるとは思えねえ。兵隊を仕切る上役が一緒の筈だ。そい  
つに関しちやどうだ？」

するとレヴィがニヤニヤとした笑みを浮かべた。彼女の視線は  
ロックの方へと向いている。

「それがだ傑作だぜダッチ。兵隊どものボスは何とスーツを着てネク  
タイを締めた日本人なんだとさ」

「……そいつはまた」

レヴィの説明を聞いたダッチの視線もまた自然にロックへと吸い  
寄せられた。ベニーも同様である。

同僚3人から一斉に視線を浴びた、日本人かつホワイトカラーの装  
いがトレードマークであるロックは先程から考え込む素振りを見せ  
ていたが、自分が注目の的になっている事に気付くとたじろいだ様子  
で口元を引き攣らせた。

「な、何だよ？」

「いや何、もしかすると誰かさんの知り合いなのかとつい思つちまっ  
たもんでな」

「違うに決まつてるだろう——でも、いや、だけど、もしかすると近  
かず遠からずかもしれないぞ」

「え、そうなのかい？ 誰か心当たりでも？」

「レヴィ、昨日イエローフラッグでバオに注文を頼んだ時の事、覚えてるかい？」

尋ねられたレヴィは嫌な事を思い出したと言わんばかりに犬歯を剥き出しにして鼻息を荒くする。

「忘れられねえに決まってるクソツタレ。糞ターバン野郎どものせいでアタシはジャックダニエルの最初の一杯を飲み干す前に爆竹を仕込まれた缶詰よろしく吹っ飛ばされかけたんだよロック」

「その直前の事だよレヴィ。ロニーの所のベニーノ達に酒を奢ってたっていうビジネスマンの——」

「あの時の野郎か！」

「何だ何だ話が俺には読めんぞ」

「僕もだよ」

別行動をしていたのでダッチとベニーノは昨晚イエローフラッグで起きた襲撃の詳しい顛末を知らなかったのだ。

現場で一部始終を見届けた証人であるロックとレヴィは自分達が直面した事件の詳細を語ってやった。

冴えないサラリーマンにしか見えなかった日本人が真つ先に自動車爆弾に気付いて連れとベニーノ共々バーカウスター裏に避難し、聖戦士の団体が爆弾によって風通しが良くなった店内に突入して生存者の処刑を始めると、レヴィが自慢の2丁拳銃で反撃に出るよりも先に件のサラリーマンがどこからともなく見た事もない銃を取り出した連れと見事なコンビネーションで聖戦士に反撃し、極めて素早く殲滅に追い込んだ事——

「タイミングが被ってアタシも閃光手榴弾の巻き添えを食らった拳句、効果が抜けた頃にや弾を御馳走してやる筈だったターバン野郎どもはアタシが1発も撃つ前に揃いも揃ってアツラーの御許送りにされちまったときたもんだ。昨晚は本当に散々だったぜ」

その分のフラストレーションの犠牲になったのがロツクの自宅の酒とタバコの在庫、汗とそれ以外の体液に塗れて異臭を放つベッドのシーツという訳だ。

ともかく特徴だけなら件の兵隊を引き連れ張を窮地から救ったスーツ姿の日本人とレヴィとロツクがイエローフラッグで目撃した人物は一致している。興味深いといった風情でダッチは髭に覆われた顎を撫でた。

「昨日2人がイエローフラッグで出くわしたその日本人がロツクの推測通り、張の旦那をターバン頭共から助けた騎兵隊を率いているボスと同一人物だとしてだ。」

——お前からから見てその日本人はどれぐらいヤバそうだ？」

「真つ向からツラ突き合わせた訳でもねえし、バオの店でドンパチが終わった頃にやまともな酒が残ってるかも怪しい有様だったんでアタシとロツクはさつさと退散しちまったから大して言える事はねえんだが、それでも構わねえか？」

「それでいい。遠慮なく教えてくれ」

「あの野郎も兵隊だ。そいつは間違いねえ。身のこなしや構えだけじゃねえ、閃光弾を使ったやり口に味方との連携の仕方は姐御バラライカやメイドの時のクソツタレ米軍どもと同じ軍隊仕込みのそれだ」

「僕もレヴィと同意見だよダッチ。リッチー・リロイが集めた情報には市警の現場報告書も含まれていたんだけど、彼らが斃した相手の死体の多くは頭部か胴体の急所に2発ずつ撃ち込まれてたそうだよ。そんなやり方は——」

「警察か軍の特殊部隊、そういうこったな」

ダッチの発言を区切りにしばしの間、空間を沈黙が支配した。

ラグーン商会一行の思考は一致していた——その日本人達は



「一体何者だ？」

「……話が脱線しちゃってたな。本題に入ろう」

いつの間にか根元近くまで灰と化していた煙草の吸いさしを握り潰して、ダッチが口を開いた。

「俺達と三合会を襲った連中の特徴と関係性から判断した限りじゃ、襲ってきた連中の正体は十中八九以前愉快なハイキング表目当てにやり合ったヒズボラとそいつらに關係するテロ屋どもと考えていいだろう。」

俺達が関わってきた中でターバン巻いてAK片手にコーランを唱えて爆弾の贈り物をしてくるような輩なんぞ他に思い浮かばんなら

「するとバドワイザーの缶を片手に参加していたベニーが口を挟んだ。」

「でもさダッチ、気になったんだけどヒズボラやその關係者にしてはちよつとおかしい気がするんだ」

「と言つと……」

「距離と規模の問題だよ。兵隊そのものは密航なり偽造パスポートなりで送り込めるとしても、ヘリコプターみたいな大物まで何千キロも彼方の本拠地レバノンからわざわざこのロアナプラに投入するなんて流石に手間と金が掛かり過ぎてると思うんだ。」

あっちこっちに繋がりがあつて言つてもあくまでテロ組織であつて軍隊じゃないんだ。普段からイスラエル相手にドンパチやつてるヒズボラにはそこまでの余裕が有るのかな？

前回ヒズボラと組んでたつていうアブ・サヤフもネットで調査してみたら、最近指導者を失つた影響で以前より急激に勢力を減らしているそうだし、どうもそこらへんが僕の中で引つ掛かつてね」

「なもん復讐がしたくて頭にカツカキてるヤツが気にするもんかよ。どつかのメイドなんざたつた1人でアンクルサムにたつた1人の戦争を仕掛けてやがつたじゃねえか。こつちを殺しに来やがる相手の事情なんて気にするだけ無駄だつてえの」

手をプラプラと揺らしてレヴィが反論するが、ベニーの意見に思う所を感じたロックは口元に手を当てて考え込む。

「ベニーの疑問は尤もだ。ヘリ以外にも武装車両テクニカルもかなりの台数が使われたみたいだし、それらを合わせて考えると今回俺達や三合会を襲つた戦力はかなりの規模と言つていい。

それだけの装備を用意するには相応の金が必要。ついでにそれらを整備や保管しておく為の場所もだ」

「テクニカルは市内か郊外の人居ない適当な場所に隠しておけるけどヘリコプターは流石に目立つからね。街の何処かに隠しておくのはまず無理だと思ふよ」

「だとしたら街の外の山か森の中か……もしくは海上か」

「E.O社のハインドに追いかけて回された時は後で調べてみたら、連中が所有してた偽装貨物船から飛んできたみたいだよ」

「連中の資金問題に興味はないが噂の場所が何処にあるのかは良い疑問だぜ。血の復讐目当ての聖戦狂い共にこつちが血の報復を仕掛けるにやそれが不可欠だからな」

「問題はそれをどうやって見つけるかだが——」

突然、通信機が呼び出し音を奏でた。ダッチがヘッドセットを取り

上げる。

「こちらラグーン。現在急用に付き依頼は……ああアンタか……何だと？ ……今海上に居るから少々時間をくれ。ああ頼む」  
「ダッチ、誰からだい？」

通信を終えてヘッドセットを外すなり、ダッチの手は魚雷艇のスロットルレバーへと伸びていた。

一気にフルスロットル。急な揺れと慣性がロック達を襲う。

「もう一人の当事者である三合会からだ。向こうも今回の件に関して今すぐ俺達と話し合いたい事が有るから来てくれだよ」

どうやら張はよっぽど急いでいるらしかった。

「お待ちしておりました。車をご用意してあります」

ごく丁寧に送迎用の車まで用意されているなど滅多にない事だ。

自前の車でもトウクトウクでもない、隅から隅まで手入れされたセダンに乗せられた運び屋一行は、外を流れる風景を眺めている間に違和感に気付く。

「なあレヴィ、気付いてるか」

「わーってる。この車が向かってるのは三合会の事務所じゃねえ」

やがて辿り着いた先がロアナプラで最も高級なホテルであるサン

カン・パレス・ホテルだ。

此処のスイートならまあ張の旦那の寝床には相応しいだろう……等と考えていられたのは最初の間だけで。

ホテル前で車から降りた彼らはフロントに立っていた武装した男達を視界に捉えるなり目を白黒させざるをえなかった。

「あのさダッチ、僕達を呼び出したのは三合会だよね？」

「ああその筈なんだが」

「だったら何で遊撃隊ウイットニキもこの場所に居るんだい!？」

そう、黒ずくめのスーツの中国系だけでなく、ある程度ロアナプラに身を置いていれば即座にバラライカ直属と分かる鋭い気配のロシア人達までもが嚴重にフロントを警護していたのだ。

こうなると目的地の部屋でラグーン商会を待っているのは張だけではないのだろう。案内の下、エレベーターに乗り込み目的の階で降りる。

「……は？」

「おおっとこれはまた……」

「冗談だろオイ」

「オイオイオイ、コイツは一体全体どうなってやがるんだ？」

そうしてスイートルームに案内された運び屋達を出迎えた光景は、  
またもや彼らの予想を覆す代物だった。

「——久しぶりだな。君達とまた会う事になるとは私も予想していなかったよ」

米<sup>米</sup>国<sup>国</sup>軍<sup>軍</sup>人<sup>人</sup>が、  
張<sup>中</sup>とバ<sup>中</sup>ラ<sup>国</sup>シ<sup>人</sup>ア<sup>人</sup>カと並んで待ち構えていたのである。

Knockin' on Warfare Gate  
e25

——時間は午前に遡る。

「ソロモン・ハキマン。フィリピンを中心に活動する麻薬組織のボスです」

エダと名乗ったCIAの現地ケースオフィサー工員が顔写真付きの書類をスイートルームのテーブルに滑らせた。キヤクストンが書類を取り上げ、レイが後ろから覗き込む。

写っているのは暴力に長けた者特有の鋭く荒んだ目つきの中年男性。顔には刃物によるものだろう片頬を斜めに過ぎる傷跡。同年代の適正体重から40ポンド20キロ弱は多いだろう体格だが、それは単なる肥満だけでなく鍛えられて肥大した筋肉の賜物と一目で判る、太く筋繊維の隆起がハッキリとした二の腕と首周りの肉付き。

「組織そのものは現地の同系統の組織において上位に分類される規模と資金力ではありますが、我が国に対する商品の輸出や現地に在留するアメリカ国民を標的とした誘拐等の行為といったビジネスを展開していかなかった点から、我々CIAの間ではノーマークだった人物です」  
「だった、という事は君達が目を付ける何らかの動きをこの男が見せたという事か」

それが自分達がまたこの悪夢の街に送り込まれた事と何の関係が？ キヤクストンとレイの表情は雄弁に内心の疑問を露わにしてい

た。

フィリピンの何処かの土地ならともかくここはフィリピンから1000キロ以上は離れたロアナプラ。海路で繋がっているとはいっても幾らなんでも遠過ぎる。

「3週間前、パキスタンの軍統合情報局内の情報提供者から組織及び国内のとある政府機関内に勤める一部の職員に不審な動きが見られるとの情報提供を我々は受けました」

またいきなり話が飛んだものだ。パキスタンはロアナプラから見てフィリピンとは正反対の土地だし、距離もフィリピンよりずっと離れている。これにはキャクストンとレイの眉根も訝しそうに寄せられる。

「更に同時期、アフガニスタンで活動するムジャヒディンの中でも反米・反西洋路線を掲げる過激派が合衆国に対する攻撃を目論んでいるという情報を現地協力者がキャッチしました」

冷戦終結以降、コンピュータや偵察衛星といったハイテク手段を駆使した電子的諜報路線へ鞍替えした情報機関はその反動として人的諜報に活用してきた現場要員を次々と切り捨てたのは有名な話だが、それでも無情なりストラの嵐を生き延びた者により最低限の情報網は生き残っていたらしい。

「ISIは79年のソ連軍によるアフガニスタン侵攻を境に当時反共産勢力を掲げていたムジャヒディンに対し訓練教官の派遣や武器の供給といった支援を実施した過去から、紛争が終結し支援先をタリバンへと鞍替えして以降も一部のISI関係者はムジャヒディンと密接な関係を維持しています」

当時のCIAもムジャヒディンへの支援に加担した———それ

について、エダは口にしなかった。

「調査の結果、ハキマンが組織の収入を洗<sup>マネーロンダリング</sup> 浄する為のダミー会社の口座からムジャヒディンの支援者とされる人物、そこから更に經由して一部の I S I 関係者及びパキスタン内の政府職員へ多額の入金が情報提供以前より複数回行われていた事が判明しました。

そして彼らに回った資金の一部の終着点がここ、ロアナプラになります」

「すまない。疑問なんだがフィリピンの麻薬業者と遠く離れたアフガンの聖戦主義者がどういう接点から繋がりを持ったというんだ？」

レイが疑問を呈するが、キヤクストンの方は思い当たる節があった素振りを見せた。

「アブ・サヤフか」

「そう。アブ・サヤフの創設者であるアブドラガク・ジャンジャラーニは、ソ連軍のアフガニスタン侵攻に対抗すべくアフガニスタン国外からムジャヒディンに参加した外国人義勇兵でした。

祖国に帰国後、キリスト教徒主体のフィリピンからイスラム社会の独立を掲げて1991年に結成されたのがアブ・サヤフ。

そしてアブ・サヤフが最盛期を迎えた当時、ハキマンには大学でイスラム教学を専攻する1人息子が存在しました」

「——おいまさか」

「はい。大学で出会った導師<sup>イマーム</sup>に感化されたハキマンの1人息子は父親の説得を振り切り大学を中退、アブ・サヤフの一員に加わったのです」

理想を夢見、熱い情熱に胸を焦がす若者が冒険に身を投じる話は古今東西珍しくない。

——かつての自分、陸軍に入隊したまだ髭も生え揃わない頃のキヤクストンの様。

それがハキマンの息子の場合は聖戦と独立を掲げるテロリスト



だったというだけの話。

「成程、可愛い息子の為に父親は息子が所属する組織のスポンサーになったという訳か」

「残念ですがマクドウガル大尉、貴方の推測は事実から大きくかけ離れています。」

キヤクストン少佐、資料の6ページ目を」

言われた通り書類をめくる。ソロモン・ハキマンを20歳若くして50ポンドばかり減らしたような若者の写真。

その隣に並ぶのは、ジャングルの中で穴だらけにされた上で黒焦げになったジープと、車体と同じぐらい念入りに焼けた乗員の死体。

「98年にザイルで起きたアメリカ大使館爆破事件は覚えておられますか？」

「ああ覚えている。ホワイトハウスのお偉いさん方が報復に巡航ミサイルトマホークを撃ち込んだのはいいが、よりにもよってアルカイダの訓練キャンプと間違えて赤ん坊のミルクを作る工場を爆撃したんだっとな」

「あれも現地の情報を集める人員を軽視した結果の悪い例ってやつですかね。それで？」

「件の事件はアルカイダの関与がメディアによって強調されましたが、その実態は他にもヒズボラといった複数のイスラム系過激派組織が連帯したアメリカに対する連続攻撃の始まりに過ぎませんでした。」

しかし彼らが用意した計画表は紆余曲折を経てある組織の手へ渡ります。この街を牛耳る組織の1つであり、我々とビジネス上の関わりを持つ、犯罪者達へと」

「……」

「計画表の奪還を担当したのはヒズボラ。一方我々と取引したこの街の犯罪組織の首領は書類を運び屋に託し、運び屋は海路でロアナプラを脱出後受け渡し場所へと向かいました。」

指定した受け渡し場所は——アブ・サヤフ鎮圧の為に現地軍が設置した特殊作戦キャンプ。

ヒズボラもまた現地のアブ・サヤフ司令官に協力を要請し運び屋を襲撃するも、最終的に書類は我々の手へと運ばれ、運び屋の反撃を受けたアブ・サヤフは多くの兵力を失う結果に」

「……おいまさか」

「そう、運び屋によって殺害されたアブ・サヤフの戦闘員にはハキマンの1人息子も含まれていたのです。

つまりハキマンはこの街の犯罪者と彼らを動かしたアメリカ政府に、ひいては書類が持ち込まれたこの街そのものに、たった1人の家族を奪われた形になります」

ハキマンが大きな被害を受けて凋落を始めたアブ・サヤフの元ムジャヒディンに接触したのはそれからだという。

それが何を意味しているのか。キヤクストンもレイも、そしてエダも、言葉に出さずとも正しく理解していた。

——怒れる父親が、息子の死に関わる存在全てに復讐しようとしているのだ。

「……追うべき人物とその動機については理解出来た。ハキマンが

どのよう<sup>ハ</sup>な手段<sup>ダ</sup>で我が国へ攻撃を行おうとしているのかは把握出来ているのか?」

「どのようなやり方<sup>カ</sup>はまだ判明しておりません。しかし何を<sup>カ</sup>使うのかについては判明しています」

CIA 作員の碧眼が、フレームレスの眼鏡の奥で鋭く細められる。

淡々と情報を紡いでいた声が僅かに重苦しさを増したのは祖国へ危害を加えようと企む輩への不快感からか、それとも続けてこれから語られる内容の深刻さ故か。

そしてエダは告げた。

「アフガニスタンのムジャヒディン経由でハキマンからの送金を受け取ったのは、パキスタンの原子力委員会に所属する技術者です」

キヤクストンとレイの血相もまた変わった。思わず立ち上がり、身を乗り出す。

「まさか、向こうは核を手に入れたのか!？」

1998年5月28日、パキスタンはラースコー丘陵における地下核実験の成功を国民に発表した。

アメリカ・旧ソ連・イギリス・フランス・中国・インドに続く、事実上の核兵器保有国家に名を連ねた瞬間だった。

旧ソ連崩壊の混乱により兵器転用可能な核物質に留まらず、小型の物はスーツケースサイズの核爆弾、大型は大陸間<sup>I</sup>弾道<sup>B</sup>弾<sup>M</sup>搭載用の核弾頭に至るまで多くの核兵器がブラックマーケットに流出、或いは極秘

裏に配備されていた物が行方知らずになったとされているが、かつてのソ連や西側の核保有国と比して政情不安定なパキスタンからの核流出もまた危惧されている。

緊迫したキヤクストンの疑問——エダの回答は。

「その問いに対する答えは正確な意味ではN.Oであり、同時にある意味ではY.e.sと言えます」

次のページを、とエダは促した。

「長年隣国インドと緊張状態にあるパキスタンにとって兵力差を補える核兵器は貴重な切り札であり、直接の取り扱いに参与出来る人間は軍部及び原子力委員会に所属している者でも限られています。

また金の流れを調査したところ、ハキマンからの金を受け取ったのは核兵器の取り扱いを担当する部署の人間ではなく、パキスタンに存在する原子力発電所の運用に参与する部署の人間でした」

パキスタンにおける電気供給の大半を担っているのは石油・天然ガス・石炭を燃料とする火力発電所だが、僅かながら原子力発電所もパキスタンには存在している。

63年にアメリカから実験炉を購入したのをきっかけに72年12月にはパキスタン南部のカラチに多国籍企業の手によって建設された原発1号機が稼働開始。

核兵器の開発と原発の存在は密接な関係がある。原子力発電の燃料となる核燃料を作り出す過程、また使用済み核燃料を再利用する為のサイクルの過程で行われるウランの精製・濃縮工程は、容易に核兵器の開発にも転用出来るからだ。

「当然我々諜報機関や国際原子力機関は核兵器への転用を危惧し、監視と警戒を行ってきました。

だがそれは向こうも織り込み済みだったのでしよう。連中が買収

したのは主に核燃料の材料となるウラン・プルトニウムといった放射性物質を調達する部署や使用済み核燃料から発生する高レベル廃棄物の管理を担当する部署の人間だと判明したのがつい最近の事」

だからこそ発覚が遅れた。

核兵器という驚異的な大量破壊兵器<sup>W</sup>の幻影に目を惹きつけられた結果、死角から漏れ出した放射性物質という毒の存在に気付くのが遅れた。

放射性物質は単体では半径数キロを焦土と化し、何百万もの人間を一瞬で焼き尽くす事は出来ないが、土地を何百何千何万年もの間生きとし生けるものの存在を許さない死の荒野<sup>ノーマンズランド</sup>に変える事が出来る。

むしろやり方さえ工夫すれば、静かに、密かに、使われた側が気が付いた頃には最早手遅れな段階まで核兵器よりも甚大な被害を齎す事が可能だろう。

毒で生命を殺すには目立つ光も、熱も、音も必要ないのだから。

エダは其処で言葉を区切ると、おもむろに胸元と同じぐらい豊かな曲線を描くタイトスカートから煙草を引っ張り出した。

吸わなければやってられない、と言いたげに。

「……我々がこの事態を察知した頃には、高レベル放射能を発する放射性物質や核廃棄物があるべき場所からかなりの量が消えています。

それだけでなく、ISIのムジャヒディン支援派を経由してパキスタン軍の兵器も横流しされた形跡が、逆にムジャヒディン側からはアフガニスタン製の麻薬がハキマンの組織へと引き渡された痕跡が見つかっております。

それら流出した品々を追跡した結果、判明した行き先こそが――

――

殆ど吸われていない煙草が卓上の大きなガラス製灰皿へと押し付けられた。

くしやりと潰れて折れ曲がってしまうぐらい強く、まるで地図に小さな旗竿を突き立てるが如く。

「——ロアナブラ此処、という訳です」

Knockin' on Warfare Gate  
e26

「——とまあ、此処までが事の経緯な訳だ」

話が終わった時、ロアナプラ有数のスイートルームは今や異様な沈黙によって支配されていた。

聞かされた側たるラグーン商会側の表情など筆舌に尽くしがたい。例えるならば自分達が今にも破裂しそうな糞の爆弾の真下に立っている事に今更ながら気付いてしまったかのような、そんな顔だ。

しかもその糞は1度ぶちまけられたら最後、人類が滅ぶ瞬間まで延々と毒をバラ撒き続ける災厄そのものときている。

たつぷりとした沈黙を経て最初に口を開いたのは年の功というべきか、ラグーン商会の頭領たるダッチであった。

「つまり何か？ そのソロモン某とやらは若気の至りで聖戦サークルに加わった挙句おっ死んじまった息子の仇討ちの為だけにとびつきビッグシットりの糞の塊を用意してこの街にバラ撒こうとしてる、そういう話なのかい、張さんよ」

「簡潔にまとめるとそういう事になるな。でもってやつこさんが用意したプレゼント交換会の主賓があの件ヒスボラ文書の当事者であった我々三合会とオタクらラグーン商会って事になる」

「……この街で禄を食むようになってから色んな商品を見て来たり運んだりしてきたが、コイツは極めつけだぜ」

頭痛薬が欲しいと言わんばかりにダッチは額に手を当てて天を仰いだ。無機質な天井が見下ろすだけだった。

「あははははは、今からジエーンに連絡して終わりを迎えられる瞬間まで君と過ごしたいって言ったら彼女は来てくれるかなあ？」

乾き切った笑いを漏らして現実逃避気味にのたまうベニーの顔からは生気が失われていた。放射能で生殖機能を失う前に種を残したいという考えは生物学的本能の現われと言えるのだろうか？

「いやいやまさかこれって僕か？ 僕のせいなのか？ いやいや違うだろアレは逃げる為にレヴィとシエンホアさんがやったんであってだけどああなったのはそもそも僕がアイツらに捕まってレヴィ達が連中を殺したのも僕を助ける為であってうあああああああああ」

頭を抱えてブツブツ呻いていたロツクはというと、最終的にその場にしゃがむと海老ぞりになって悶え始める。大の大人としては非常に見苦しいリアクションであった。

「ハジキだの機関銃だの日本刀サムライソードに戦闘ヘリだの、アタシらを殺す為に色んな奴が色んな得物を持ち出してきたが、核爆弾ってのはアタシも初めてだなあ」

紅一点のレヴィに至っては心底呆れかえった感想を漏らすのみ。得物の規模が一気に飛躍し過ぎて現実味が湧いていないだけなのかもしれない。

「核爆弾じゃないぞレヴィ。正確には放射性物質と放射性廃棄物だ」  
「けどよ張の旦那、そいつを浴びたら蟻やらタコやらを巨大化させちまったり科学者を緑の巨人に変身させちまうようなけつたいな毒をバラ撒くって意味じゃどっちも同じだろ」

「アメコミやレイ・ハリーハウゼンは嫌いじゃあないが、コイツは正真正銘現実且つ喫緊の早急に対処せざるをえない問題って事は肝に銘



じてくれ。

だからこそそのお2人さんもこうしてこの場に立ち会ってるんだからな」

「そう、そこだけ張の旦那」

レヴィが指差した先にはキヤクストンが立っている。バラライカと一緒に、だ。

「どうして姐御直々にこの街から御見送りして永久出禁にされた筈のスターズ・アンド・ストライプス星条旗の兵隊野郎が、よりにもよって姐御と一緒に此処に居やがるんだ？」

「それはだなレヴィ——」

「私がある場所での調査中に偶然遭遇した彼女とその部下達に協力を依頼したからだ」

張が答えるよりも早く、キヤクストン自らレヴィの質問に回答を行った。

それに対するレヴィの反応は、

「マジかよ」

であった。有り体に言つて、その瞬間のキヤクストンを見るレヴィの眼差しは正気を疑うそれであった。

キヤクストンは続ける。彼自身の保身の為に弁明するのではなく、そうするに値すると考えたからこそ賭けに出たのだと、無言を貫くバラライカ達の名誉を護る為に。

「あの日の彼女達の見事な戦いぶりは今も私の目に焼き付いている。

あの悪夢の夜で唯一良き点を挙げるとするならば、それは彼女とその部下達が砲火を交えぬ友軍であった事だ。

だからこそ今回の案件には彼女達の力を借りなければ、私の祖国と

君達、そしてこの街が見舞われようとしている恐ろしき厄災を阻止するのは困難だろうと私は確信している。これは上からの命令ではなく私の独断だよ」

「そういう事だ。残念ながら猟犬メイドから無事生き延びたこの軍人さんが我々この街の無頼漢に協力を要請しなきゃいけない程に、そしてレヴィ、お前さんが考えているよりも事態はずっと切迫している」

備え付けのテーブルに張が書類の束をレヴィ達へと滑らせた。四者四様の態度を見せていた運び屋一行は身を寄せ合い、書類の内容を覗き込む。

『イブリース計画』、アラビア語と英語併用でタイトルが書かれていた。

イブリース——イスラム教においては樂園を追放された復讐に、アダムとその妻に禁断の果実を口にするよう唆した墮天使を指す。

「連中がパキスタンから調達した放射性物質はソロモンが所有するカーン会社所属の貨物船によって海上ルートで運ばれている最中だ。船は既にアラビア湾を抜けベンガル湾、マラッカ海峡を経由しロアナプラ近海まで辿り着いたら海上で積み荷の一部を下ろす予定になっている。

さてそこで問題なのが、だ」

言葉を区切った張の声色が、これから死刑判決を下す裁判長の如く張りつめたもの変わった。

自らが銃火の真っ只中に晒されても飄々とした態度を崩さない筈の張のこの変化こそ、事態がどれだけ差し迫っているのかの現われだと、彼をよく知る者ほど否応なしに理解させられた。

「そこにいるアメリカの兵隊さんが聖戦士共の罫に設置された核シールドから入手した計画表によれば、海上での放射性物質の引き渡し

が行われる予定時刻は明日の夜明け前。

予定表ではそれから1時間後には『戦果確認の為、現地に滞在予定の兵員は必ずシエルターに全員収容し予定された日数が経過するまで待機せよ』と書いてある。

それ以降、この街に関する内容は一切書かれていない。ただの1文字もだ」

そして張が発した言葉は、文字通りロアナプラに対して下された死刑宣告そのものだったのだ。

「つまり明日の日の出を迎えた時、連中はこの街を悪徳の都から死者の都に変えちまうつもりなのさ」

「張さん、今日はこれでお暇させてもらっていいか？ 家財道具を纏める時間が欲しいんだが」

珍しく、非常に珍しく剃り上げた黒壇の額に冷や汗を浮かばせながらさそうのたまうダッチだが、張の真顔は1ミリたりともピクリとも動かなかった。

「生憎だがダッチ、答えはNOだ。お互いこの件の元凶そのものである以上は最後まで付き合うってのが道理ってもんだらう？」  
「でも……」体僕達は何をすれば」

ロックもメイドの件の時の啖呵が嘘のように、ダッチの10倍は顔

中に冷や汗を浮かばせてあからさまに狼狽えるばかりだ。事のスケールが大き過ぎて受け止め切れていないと見える。

「運び屋にやらせる仕事といえは決まってるだろう？ 荷物を運んでもらうのさ」

「荷物、というのはつまり——」

「私ともう1人の部下と彼女、バラライカ、そして彼女の部下達だ」遊撃隊

キヤクストンが堂々と宣言した。

彼の隣に並び立つバラライカは肩に羽織ったミリタリーコートの下で腕を組んだまま、先程から無言を貫いている。ロックにはそれが、内側から漏れ出そうになる何かを堪えているかのように映った。そこへ現実逃避から復帰したベニーが口を挟む。

「ちよつと待ってくれ。私ともう1人の部下って事は、アメリカ側の戦力はたったの2人だけなのかい？ 以前一緒に連れてきた仲間の生き残りや新しい部下は、まさか連れてきていないのか!？」

「元々我々の今回の任務は情報収集の一環に過ぎなかったんだ。前回この街で作戦を行った時の混乱と生じた被害は母国で大いに問題視され、第56施設任務大隊は解散させられた。」

私も訓練校の教官に島流しされた所をこの街での活動経験があるという理由で任務に就けられた。今はその程度の立場でしかないのだよ。事態がここまで進行しているとは、私も上も予想外だったのさ」

「栄枯衰退、たった1度のヘマでどん底まで転げ落ちるなんてのはよくある話だ。尤もそいつは今の俺達にも言える事なんだが……」

「今の私は若い部下達を犠牲にして生き残ってしまった拳句、完全に消え去る事も出来ず中途半端に軍にしがみついている年寄りに過ぎんよ。それでも軍人として果たすべき任務は最後までやり通してみせるとも」

「じゃ、じゃあ救援は？ 近くの米軍基地から増援を呼べないのか!？」

「残念ながら不可能だ。我が国アメリカとこの街が存在する国は同盟関係を結んではいないが、大規模な軍や今回の任務に最適な特殊部隊を駐留させた米軍基地は存在していないのだよ。」

仮に近場をこの地域を担当するインド太平洋軍USINDOPACOMの艦隊が通りがかつていたとしても、97年のアジア通貨危機以来我が国と関係が冷え込み、つい先日親米政権も倒れてしまった今のこの国の領海で艦隊を動かすのは政治的に極めて難しい……というのが今回我々を送り込んだCIAの担当官の言い分だ」

インド太平洋軍の司令部はハワイなので今から送り込んできても到底間に合うまい。

張としてもロアナプラの鼻先でよりにもよってアメリカの艦隊が動き回るような展開は、街の機密性を維持するという点において心から勘弁願いたいところだ。

「物も物だ。嚴重な防護機構フェイルセーフを備えている核弾頭と比べて放射性物質の容器は損壊による汚染のリスクを鑑みた方が良さだろう」

「つまりアメリカお得意のトマホークやハーブーンや魚雷による撃沈は以ての外。となると残された手段となれば——」

「——生身の兵隊が直接乗り込んでの確保」

ダッチが漏らした考えをロックの声が引き継いだ。

それに対するキャクストンの反応は、首を縦に振っての肯定だった。

「ま、それ以外にクソをバラ撒かせずに済ませる手立ては思い浮かばねえわな」

「なーんでえ、とどのつまり自分だけじゃ手も足も銃も足りないから姐御に泣きついて兵隊を借りようってハラなだけかよ。アホクセえ」

「ちよつ、レヴィー！」

「否定はしないとも。彼女の言い分は全くの事実なのだからね」

女ガンマンの痛烈な皮肉を、キヤクストンはほろ苦い笑みで正面から受け止めたのだった……

Knockin' on Warfare Gate  
e27

「方針が決まった所で具体的な作戦内容を詰めていこうか。兵隊さん、集めた情報を見せてくれ」

「現地のCIA担当官が用意してくれた資料だ。口外は慎んでもらえると助かる」

張がパチン、と指を鳴らすとキャクストンが携えていた茶封筒の中身をテーブル上に広げた。

偵察衛星による高高度からの写真。貨物船の仕様書らしき書類。放射性物質と核廃棄物の格納容器の仕様書。見慣れぬ何らかの大型構造体の青写真。

イブリース作戦の情報を入手して四半時間も経っていない点を踏まえれば、むしろ短時間でこれだけの資料を用意してみせたCIA所属の某の手腕を褒めるべきだろう。

ロツクの脳裏にサングラスをかけた修道女の姿が一瞬通り過ぎたが、この場で口に出しても何の得もないのは明らかなので黙ってテーブルに身を乗り出すに止めた。

「作戦目標はこの街ロアナブラから約75海里キロの海上に存在するこの施設だ」

キャクストンの指が示したのは巨人用のジャングルジムを水に浮かべ、その上に箱型の施設やクレーンに乗せたような構造物の写真だ。

少しばかり海やエネルギー業界に知識を持つ者であればすぐに理解するだろうその施設の正体は——海上石油プラント。

周囲の視線は水に浮かぶ巨大構造物へと集中していた為に、写真を見た瞬間ロツクの目が見開かれた事に気付いた者は居なかった。

「海底採掘用の半潜水式プラットフォーム。数年前にタイの国営事業として日本のアサヒ重工との共同プロジェクトによって建造された、移動可能な海洋掘削施設だ」

だが続けてキャクストンが告げた名詞に今度はラグーン的面子全員が反応を見せた。

「何だか今どつかで聞き覚えのある名前が出てきたな」

「アサヒ重工ってあれだよ、ロツクが僕らの仲間になる前に所属してた——」

「ロツクとコイツが持ってたディスクを纏めて処分しようとかアタシらに戦争屋を送り込んできたホワイトカラーの親玉共じゃねえか」

口々に呟いたダッチとベニーとレヴィの視線がロツクへと注がれると、元旭日重工のいちサラリーマンであったロツクの顔に過去を思い返す者特有の眼差しを伴うシニカルな笑みが浮かんだ。

「その石油プラントについては僕もよく知ってるよ。何せ僕があの日レヴィ達が襲った船に乗ってたのは、ボルネオを経由して建造途中だった海上石油プラントの視察を行う為だったんだから」

「へえ、お前さんがこの街に身を置くようになった経緯は大雑把に耳に挟んじやいたが、コイツは中々因果を感じる展開じゃあないか」

これには張も愉快気に口元を歪め、そこにキャクストンが続けてこ  
う付け足す。

「ちなみにだが少し前の金融危機によりアサヒ重工が経営危機に陥った為プロジェクトは中断、少し前から施設の稼働は停止して放置状態



になっていたそうだ」

それを聞いた瞬間、元サラリーマンは人目も憚らず盛大にガッツポーズを取った。

「ザマア見やがれクソ上司ども！ なあにが『重役全員葬儀には出席しよう』だ、今度はテメエの葬式でも上げろってんだ！」

自分を切り捨てた会社の現状を聞いたロツクは、珍しく口汚さ全開で快哉を発したのだった。

閑話休題。

咳払いをして参加者の意識を集め直したキャクストンが説明を再開する。

「おほん。先程放置状態にあると説明した石油プラントだが、こちらは1時間程前に撮影されたばかりの偵察衛星KH11が捉えた画像だ」

引き延ばされた白黒画像。件の偵察衛星が最新型の無線通信による画像受信可能なタイプかつ、周回軌道のタイミングがたまたま東南アジア上空に差し掛かった時だったという幸運に見舞われなければ、こちらも迅速に用意出来なかっただろう。

衛星軌道の高度から見下ろした石油プラントのサイズは縦横100メートル弱。海上部分の土台となるデッキ上に大型の櫓、クレーン、ヘリパッドが対角線上に2ヶ所、大型コンテナを積み上げたような居住区等が設置されているのが判別出来る。

それから各所に点在する、黒い染みの様な人影も。ご丁寧に赤いペ

ンで丸で囲ってある。

2つあるヘリパッドの内の片方には葉巻型の形状をした大型ヘリコプターの機影も存在した。

「武装した正体不明の人影が複数。おそらくソロモンの手の者の者の歩哨だ。石油プラントは既に敵の掌握下に置かれているとみるべきだ」

そこで、これまで黙りこくっていたバラライカもとうとう口を開いて呉越同舟の作戦会議に参加を果たした。

「……ヘリパッド上の機体は旧ソ連のMi<sup>ヒッ</sup>8<sup>プ</sup>ね。この機体を使っている軍はこの辺りではベトナムかラオスぐらいでタイではどの軍隊も運用していない。

この機体の航続距離なら十分海上からロアナプラ間を往復できる。張の罅を空爆した機体もこの海上プラントから飛んできたとみて間違いない」

「想定される敵の兵力は？」

「石油プラントに最低でも1個小隊の戦力は配置されていると見ていいだろう。更にここに合流予定の貨物船に乗り込んでいる分も加わる事になるな」

「こちら側の戦力はどうなってるんですか？」

「現時点では私と副官のシエーン、それからミス・バラライカと彼女の部下が1個小隊参加する予定だ」

ヒュウ、とダッチが短い口笛の音色を奏でた。

「バラライカ直々に遊撃隊<sup>ヴァイツトニキ</sup>を率いて殴り込みとなりや船の1隻や2隻どころか艦隊丸ごと制圧出来るぜ」

「殴り込むならアタシも頭数に入れてくれよ姐御。イエローフラッグごとアタシのケツを吹き飛ばそうとしやがった借りを連中にきっちり返させてやんねえと気がすまねえ」

レヴィが飢えた狼の様に鋭利な歯を剥き出しにし、手の平に拳を打ち付けて戦意を示すが、バラライカはレヴィのその様子を冷たく見やるばかりだ。

「生憎だがダッチ、懸念すべき脅威は他にも在るのだよ」

「残念ながら彼女の言う通りだ。こちらの写真も見てくれ」

バラライカに同意しながらキヤクストンが別の写真を見せる。海上に浮かぶ船の画像。

ラグーン商會が運用する魚雷艇の倍はある船体。排水量は300トン近くあるだろう。魚雷艇のように魚雷管は見当たらない代わりにもつと物騒な、ラグーン商會の船が喰らえば1発でお陀仏になる事請け合いの速射砲塔を船体前部に搭載しているのが見て取れた。

——それは紛う事なき軍艦だった。

「我が軍が昔運用していたアシユビル級をベースにタイ海軍がコピーしたPSSM-5型哨戒艇だ。多用途哨戒艦

武装は船体前方に76ミリ速射砲、後部に40ミリ機関砲ほか重機関銃も複数配置されている。無論対水上艦艇用レーダーもだ。石油プラントから約10キロの海上周辺に停泊している」

全部砲塔をより高性能の速射砲に換装した後期型や、最初にアシユビル級の同型を導入し対艦ミサイルすらも搭載させた韓国軍の白鷗型ミサイル艇と比べればまだ大人しいのだが、今の彼らには何の慰めにもならない。

軍艦を避けて海上プラントへアップローチを試みても、旧式とはいえず軍用の水上レーダーであれば上陸前に魚雷艇の接近を探知し、プラント上の兵隊達に警告の無線が届くであろう。

「この船を指揮している艦長は我々密輸に携わる大手の間では有名な人物でな。お国から任せられた船を使つて副業に勤しんでる勤勉な軍人つてやつさ」

皮肉気な口調で語られる張の解説に、祖国への忠誠と正義に忠実な信念の軍人であるキャクストンの眉根が僅かながら不快そうに歪んだ。

「金さえ積めばご自慢の大砲と国軍の看板を盾に海上での取引現場に余計な客が近付かないよう睨みを利かせる、いわば大型のドーベルマン並みに役立つ番犬つてヤツさ。どうやら今回はソロモンとやらに雇われて石油プラント周辺の警備に就いてるらしいな。」

カネはかかるが、そこいらの海賊程度にや軍艦相手に真つ向から襲いかかろうなんて度胸も武器もそうそう持ち合わせちやいない。だもんだから桁も規模もデカイ取引や品物の載せ替えを人目に付かずやりたい時に重宝されてた連中だ」

「俺達の船魚雷艇なら話は別だがな」

「茶化するなよダツチ。それにお前さんならコイツが本当に厄介な点も分かつてるんだらう？」

この金で動く海の番犬が特に厄介なのは、やってる事はともかく所属自体は正真正銘現役の軍人と軍艦である事。

何より今回最も重要なのは、よりにもよってロアナプラから石油プラントへアップローチする航路上に正真正銘の軍艦であるコイツが立ち塞がっている、この一点だ。」

つまり下手に排除を試みようものならば彼らの上……すなわち一  
国の軍隊そのものを敵に回しかねない。

立場としては第2次メイド騒乱におけるキヤクストン達クレイフォックスに近い。秘密部隊とはいえ作戦行動中の現役の軍人（しかも所属はよりにもよって世界最強の星条旗だ）がもしロアナプラ内で第3者の手に掛かって戦死したとなれば大規模な国家権力による介入を招き、この悪徳の都の繁栄に終止符が打たれる可能性が極めて高かった。

故に張達黄金夜会は街の存続の為、狐達に爆弾で吹き飛ばされた主様の復讐に燃えるメイドロベルタからキヤクストンらを逃がすべく組織の垣根を越えて尽力した。殺し合うならここではない場所でやってくれ、そういう訳だ。

密輸事業の円滑性の観点から張やバラライカといった大手組織の多くはロアナプラ周辺各国の軍にも鼻薬を利かせてはいるが、それにも限界もある。

「その船が所属している司令部のに居る張さんのお友達に御注進を立てるなり、CIAの方から神託を下して引っ込めさせる事は出来ないのかい？」

「残念だが無理だ。番犬どもとそいつらが籍を置いてる司令部のオペレーターがグルでな、副業中はオペレーターが船の位置や航行記録を誤魔化して周囲に情報が漏れないようにして船の方も余計な情報が漏れないよう無線封鎖しているんだと。」

連中が無線封鎖を解いて司令部から事の真相を聞かされる頃には、怒れる父親とその兵隊どもはロアナプラに贈るプレゼントを配りに動く段階に入っちゃまってるだろうよ」

「つまり我々がソロモンを排除しヤツが計画した街に対する放射性物質の散布を阻止する為には、この拝金主義者共が指揮する軍艦を乗組員ごと撃沈する以外の形で先に排除しなければならぬという事よ、ダッチ」

現役の軍艦とその乗組員に物理的被害や多数の犠牲者が発生しよ  
うものなら、国家権力の中でも鼻薬が利かない面倒な連中がロアナプラに介入するリスクが再発しかねない。そうならば放射能汚染を阻

止出来ても街の存続が危うくなるのは変わらぬ無意味なのだ。

目前に迫った地獄か、未来に訪れる破滅か。

二律背反の選択をこの街の住人達は迫られていた。

この場で唯一ロアナプラの住民でないキヤクストンは黙ってダツチ達の選択を見守るにとどめる。任務が終わればこの街から消える身である彼に口を挟める権利はない。

「……別に私としては金の亡者共の船を中身ごと岩礁に変えてしまってもそれはそれで構わんのだがな」

「オイオイ勘弁してくれ。俺だって本当だったら自慢のペントハウスごとキャンプファイヤーをしてくれたターバン頭共に与してるあの船も沈めてやりたいところを堪えてるんだ。時間がないってのに誘惑で余計な時間を割かせさないでくれよ」

「軍艦相手じゃあそこいらの貨物船みたく鼻先に1発ぶち込んでホルドアップ、なんて訳にはいかねえからなあ。まったくクソ面倒な」

「今回はレヴィ、お前さんに同感だがクソみたいな問題を解決する為に別のクソツタレなトラブルを増やす訳にもいかねえのさ」

「要はミス・バラライカの兵隊とそこに居る合衆国の軍人さんが核物質を運んでくる貨物船と石油プラントを制圧する邪魔をさせないようになれば良いんだろ？」

「だったら水中で動ける誰かに潜水工<sup>フロッグマン</sup>作員をやってもらって軍艦のスクリューなりに細工をして動きを封じるってのはどうだろう？」

「ダメだ。艦艇の位置からでは石油プラント周辺も主砲の射程圏内に含まれてしまう。」

何も知らない艦艇の乗組員が砲撃を開始して放射性廃棄物の容器が破壊されてしまうリスクは可能な限り排除しておきたい。動きを封じるだけでは不十分だ。主砲のスクリューだけでなく火器管制なりそれらを運用する要員なりも無力化しておくべきだ」

「艦も沈めず乗組員もしなせず軍艦を完全に無力化……できるのかそんなの？」

ロツクの困り果てた声色の眩きは、この場に集まった面々の心中を代弁していた。

「もし仮に何の不測の事態もなく軍艦を制圧出来たとしても、やるだけやって見張りも付けず放置という訳にもいかんだろうしな。」

バラライカの所以外に軍隊相手でも戦<sup>や</sup>れる度胸を持った、モーゼも真つ青な奇跡を起こせる手段も頭数も兼ね備えた腕っこきなんざ、流石にウチの組織でもすぐに用意は——」

そこまで滑らかに動いていた張の舌が唐突に止まった。

——いや待てよ？

口元に手を当てて黙り込み、考え込む素振りを見せたかと思うと、おもむろに張はソファアールから立ち上がる。

「何か案が浮かんだのかミスター張？」

「案なんて大層なもんじゃないさ少佐。」

こいつはそう……しくじったら最悪聖戦狂いの手にかかる前に破壊を迎えるかもしれない特大の爆弾だが、上手くすれば全ての面倒事を一気に終わらせられるかもしれないジョーカーに心当たりがある。それを手札に引き込めるかどうかチョイとばかり試してみようと思つてね」

そのまま張は無造作にスイートルームの扉を開けて廊下へと出てしまった。慌ててラグーン商会やキャクストンも張の後を追う。

「世界の終わりが目の前に迫って来てるって最中に悲壮な顔を浮かべて神様にお祈りしながら、ただ審判の時を迎えるまで待つってのは性に合わなくてね。何もしないで全てを失うのが解ってるなら、いっそ一発逆転の大当たりジャックポットを狙って手持ちのチップを賭けてみるのもまた一興さ」

それに、と付け加える張の口元は、まるで今から行われるサーカスの開幕を楽しみに待ち侘びる子供のように笑っていた。

「予想が正しければ俺達の様な無頼漢ギャングスタよりも、多分アンタやバラライカソルジャーみたいなのが連中の事を気に入るんじゃないか？」

そして張はすぐに足を止めると――――キヤクストンの部屋の向かい側にある部屋の扉を叩いたのである。



Knockin' on Warfare Gate  
e28

『アベンジャー、その報告は本当の事なのか？』

野外通信システムにより前線司令部と繋がった広帯域多目的無線機の回線越しに、驚愕と困惑に襲われて目頭を押さえる柳田の姿が伊丹には見えるようだった。

真つ先にその情報をロアナプラの権力者から知らされた伊丹もまた似たような心持ちなのだからさもありなん。

「俺もこれはマジモンのネタだと思えますよ。イエローフラッグや三合会を襲った武装集団とも特徴は一致していて状況証拠どころか物証も揃ってますし、仮に向こうが渡してきた証拠品がこちらとの取引を無効にする為にしつらえた偽の物だとしても、たったの数時間でテロの計画書や偽造した衛星写真をでっち上げるには流石に無理があると思いますけどね」

『だからってお前、核物質を使ったテロが数時間後に起きますっていきなり言われてもだな……』

「ありえないなんてありえないんですよ柳田さん。そもそもこの場所漫画の舞台や俺達の存在異世界からの来訪者自体がありえない存在なの、忘れてませんか？」

ぐうの音が出ないとばかりの長い沈黙が、しばしばヘッドセットから流れるのだった。

どうしてこんなやりとりを伊丹と柳田が交わさねばならない事態となっているのかといえば、

『いやあスマン！ アンタらとの取引は履行出来なくなっちゃった！  
何せ明日の朝にはこの街ごと俺達はお陀仏になっちゃまうもんでな  
！』

伊丹達の逗留先の戸を叩いて押しかけてきた取引相手こと三合会の張が、やけっぱちじみた笑いを伴いながらいきなりそんな事をのたまってきたからであった。

しかも『イブリース計画』なる書類やら衛星写真やら首謀者の調査報告者といった諸々のおまけ付きで、だ。

だしぬけに取引の打ち切りとその理由と証拠の品々を立て続けに押し付けられた伊丹はまずポカンとなり、次いで張から告げられた理由と証拠書類に目を通して思わず「うわあ」と呻いてから「上と相談します……」と中座すると、そのまま隣の部屋で前線司令部へと即座に緊急連絡を取って——今に至る。

何やらおつかかないロシアアンマフィアやら数時間前に見かけたばかりの黒服やらがこのサンカン・パレス・ホテルに集まって厳戒態勢を敷いている事自体は伊丹達も察知していたので、いざという時に備え緊急避難の準備を彼らも整えてはいたのだが、流石にこんな爆弾案件が持ち込まれるのは予想外にも程があり。

伊丹も柳田も（そしてとつくにこの情報が伝わっているだろうアルヌスの総司令部も）混乱と困惑に見舞われつつ、こうして対応に悩ませているのが現状だ。

ついでに（昼間の柳田さんの台詞はフラグだったな）とも伊丹は思っていたり思わなかったり。

渡された情報は全て携帯端末の撮影データという形で前線司令部にも既に送信済みだ

やがて重く深い溜息が1つ無線回線から聞こえてきたかと思うと、声をやや張り詰めさせた柳田が質問を発した。

『で、この爆弾案件を持ち込んだ張氏は今どうしてる？』

伊丹が部屋を隔てる扉の前に立つユーリ（昨晚から立て続けに発生した戦闘を理由に警備要員も増員された）をチラリと見やると、坊主頭のロシア人は首を縦に振った。

「今も隣の部屋で俺が戻ってくるのを待ってます」

『わざわざテロの情報は一切合切の証拠を持ち込んでまで俺達に知らせたのはどういう魂胆だと、お前さんは思ってる？』

「事態の解決に我々の力を借りたい、ってか巻き込みたいって所なんじゃないですか？ こいつは流石にマフィアや運び屋が何とかするには少々厳しい事態ですからね」

『そんな所だろうよ』

自分達だけでは荷が重い、と判断した結果の行動なのは間違いない。

確かに占拠された石油プラントや放射性物質を輸送してくる貨物船に配置された歩兵戦力だけならまだしも本物の軍艦も相手にせねばならないとなると、如何な原作有数の大物マフィアであっても——武力的にも、背景的にも——分が悪いのは明らかだ。

それこそこの状況で最も求められているのは支援態勢を含め専門的な訓練を積んだ正規軍クラスの戦力であり……まさしく伊丹達がそれに該当しているのである。評判だとか印象だとか権威だとか投げ捨てても藁に縋りたいあちらの事情も理解は出来る。

伊丹は頭を掻き、十数キロ離れた山林内の前線司令部内の柳田も今となっては貴重な整髪料で整えた筈の髪をグシャグシャと掻き回した。

最早無線傍受による情報漏洩を警戒し交信内容は最小限にという

当初の方針を投げ捨てて柳田は語る。

状況は最早符号や婉曲な言い回しを駆使して無駄な時間を浪費出来る段階ではなかった。時間があまりにも限られている。あまりにも。

『そもそも今回の作戦は、たまたま表沙汰にならない方法で我々が求める物資を調達できる土地に『門』が繋がり、たまたま我々のような存在が堂々と動いても現地住民の方から必要以上に情報が外へ漏れないよう動いてくれると判明している場所だからこそ、上も作戦を許可してくれたようなもんなんだ。

分かるか？ 俺やお前さん達が今この場所世界で活動しているのは単なる偶然の産物に過ぎないんだ』

柳田の語り口は、まるで自分自身に言い聞かせているかのようにも伊丹の耳には聞こえた。

『俺達は何の因果かたまたまこの土地に足を踏み入れてしまったストレンジヤー異郷者に過ぎやしないのさ。

大体その街の住民は上から下まで殺し合いながら犯罪に加担している連中なんだろう？ 西部劇や時代劇の主人公みたいに我々が助けてやるだけの価値が街の連中には本当にあるのか？ 本国からの補給が耐えている現状、投入した貴重な資材や資金や戦力を放射能汚染で使用不能になるリスクを背負うだけのリターンは果たしてあるのか？

人道を重んじた方針を取らなかつたとしても、それを声高に批判する野党議員も国際世論も特地の時とは違って今の我々には無縁の存在なんだ。さつさと尻を捲つたつて誰からも文句は言われないと、俺は思うがね』

「かもしれませんねえ。まあでも引つ掻き回した分の後始末位はした方が良いんじゃないかとは思いますが。ほら、何でもかんでもやらかしたままほつたらかして気分的にすつきりしないでしょ？」

敢えて伊丹はとぼけた口調で相槌を打った。

再び、柳田は無言。腕を組み、天を仰ぐ。モスグリーンのテントの布地しか見えなかった。

『……張氏から渡された情報。仮にお前さんが作戦計画を組むとしたら、情報の精度と量は動くに足りえそうか?』

「この世界の今の技術レベルや情報の伝達速度を考えると、現段階じゃこれ以上は望めないと思いますよ。ウチらの装備を追加で持ち込んで運用すれば、事前の情報も作戦自体の難易度もまた変わってくるのは間違いないですけどねえ」

『もう1つ質問に答えろ——この案件、伊丹耀司個人としてなら、お前さんはどうしていた?』

「……………そうだなあ。もうこの事を知らされたのが間に合わないと確信出来ちゃうようなタイミングだったら、少しでも巻き添えを食らう前にさっさと部下と一緒に尻尾巻いて特地へ逃げ込んで、そこで話は終わらせてたでしょうね」

茫漠とした伊丹の眩きは、ともすれば深く考えずに発した無責任な言葉の様に傍からは聞こえたかもしれない。

しかし柳田は伊丹の声の奥底に籠められた確固たる意志と覚悟を正しく感じ取っていた。

「でも、そうはならなかった。ならなかったんですよ、柳田さん」

それは最近柳田も聞いた事があるような、目にした事があるようなフレーズで。

「親が子の復讐をしたい気持ちは俺だつて少しは理解出来ますしこの街がロクでもない場所なのも事実だとは思いますが、そのソロモンつてヤツがやろうとしている事はあまりにも何も知らない人間を犠牲にし過ぎる。」

そして事態はまだ阻ポイント・オフ・ノーリターン 止 不能点を迎えちゃいない。

見捨ててさっさと逃げ帰るのが一番こちらの被害が少なく済むんだとしても、まだやれる事をやれる時間が残されている以上、話はこのでお終いと打ち切る気には俺はならないんですよ。

少なくとも、まだ今は」

「……伊丹」

「何です柳田さん」

「お前さんそれ、原作の台詞のパクリだら分かってんだぞ」

「あ、やっぱバレます?」

「全くお前さんつてやつはつくづく……」

また息を吐く声がヘッドセット越しに伊丹の耳朵を打つ。

だが今度のそれは云わば役者や選手が本番に挑む直前に発するような、覚悟の気配を帯びたものだった。

『狭間司令達を説得して化学装備を含めた追加の装備と人員の派遣を俺から具申してやる。でテロ計画阻止に必要なモノもこつちでリストアップしといてやるから追加の要望があるならすぐにこつちに伝えろ。』

また連絡するからお前さんはそれまでの間その張某の話し相手でもして今後の為に少しでも情報を集めてくれ。必要なら、戦力の現地

調達も視野に入れとけよ』

「了解。」

……柳田さんから見ても、この世界は動くだけの価値があったのかい？」

『残念ながらな。今後も特地で我々が生存圏を維持し続ける為に必要不可欠な物資を大量調達出来るチャンスがまた巡って来るなんて都合の良い希望的観測、俺は持ち合わせちゃいないんだ。』

取引代金の宝石を採掘するのだってタダじゃないからな。この街に来てから消費した弾薬と燃料分も含めて元も取れないままハイサヨナラじゃ、今回の作戦を立てた俺の今後の出世にも響いちまうよ』

「やれやれ柳田さんらしいよ」

苦笑しながらヘッドセットを外した伊丹は、どこかホツとした様子のユーリを電話番号に残し、張を待たせた部屋へと戻るのだった。

かちやり、と小さな音を立てて湯気が立ち上るティーカップが張の前に置かれた。

「上手く淹れられたかは自信がないっすけど、良かったらどうぞ」

日本人丸出しの少しつたない発音の英語ながらも張を持って成してくれたのは、派手でサイズが合っていないアロハシャツを着た青年だ。

わざわざ適正サイズよりもひと回りは大きいのを纏っている理由は、特殊部隊が着用しているような予備弾薬で膨らんだ戦闘ベストを誤

魔化す為らしい。テーブルにティーカップを置く時、MP5サブマシンガン用に近い細身の湾曲したマガジンの尻がマガジンポーチ上部に均等に並んでいるのが、ビビッド柄の合わせ目の間から覗き見えた。

「押しかけ客にわざわざ気を遣って来てすまんね。この街じゃそういう気配りが出来る人間が少なくてなあ。すまないな若いの」  
「いやあお気遣いなく」

照れた様子で笑いながら青年はすぐに下がっていった。

張の鼻屑目に見ても青年はとても若く、年相応の軽さを漂わせる人物だった。

今この室内に集まる者達でも最年少なのは間違いない。目に宿している光も若者の——表外の世界の若者だけが持てる、希望に満ちた輝かしい未来を疑わない陽性の輝きだ。同年代のロアナプラの住民で同種の目をしている者は皆無に近い。仮に存在していても大抵はアッパー系昂揚をキメてハイな幻覚を見ている時ぐらいか。

精々がまだ大学生程度の年齢だろうが、いささか軽薄さが滲んदैいてもその背筋は若さに似合わず一本芯の通ったピンとしたもので、青い気配のすぐ下にそこいらのチンピラでは決して纏えぬ、硝煙と戦場の気配を隠しているのを張は敏感に嗅ぎ取っていた。

青年こと倉田は間違はなく兵士であり、彼だけでなく客である張を除きこの部屋に居る男達全員が兵隊だった。彼らの戦いぶりが如何に苛烈で精練されているのか、張は聖戦士の集団から救助された際にその目で焼き付けていた。

(だからこそあの1件に巻き込む事が出来れば話も大分違ってくるんだが、さあて)

紅茶に口を付ける。紅茶とティーセットは一等豪華な部屋に泊まって金を落としてくれる宿泊客へのサービスとしてホテルが用意



した備え付けだ。ホテルが用意した茶葉は紅茶素人の倉田が淹れても飲めるだけの味を提供してくれた。

「失礼、お待たせしました」

張が紅茶を堪能していると一旦隣の部屋に引つ込んだ伊丹が戻ってきた。仮にもロアナプラ有数（或いは唯一）の高級ホテルのスートルームだけに防音もしっかりしていて、上の人間と連絡を取っていた彼がどのようなやりとりをしたのかまでは張には分からない。

表情からどのようなやりとりと決断が下されたのか察そうにも、日本人お得意のアルカイツクスマイルのせいでさして読み取れなかった。

「隊長も紅茶飲みます?」

「おう倉田頼むわ」

「俺にも一杯くれ」

窓際で外を警戒していたプライスも紅茶を注文した。流石英国人と剣崎が愉快そうに含み笑いを漏らした。

久しぶりのティータイムに舌鼓を打つ英国紳士を横目に柳田との会話で乾いた喉を倉田が新たに淹れた紅茶で潤した伊丹は、ティーカップをテーブルに置くと表情を真剣なものに変えて僅かに身を張る方へ乗り出した。

「時間が限られてるみたいなので単刀直入に尋ねますけど……これだけの情報を我々に差し出した貴方の望みは何なんです?」

そら来たぞ。

口元が吊り上がりそうになるのを抑え込み、張は困り果てた風を装いながらありのままに望みを語る。実際困り事なのは事実なので演じるのは容易かった。

「ありのままを言ってしまったえばこの件に関してオタクらの助力を願いたい、というのが我々の考えだ」

「我々、ですか」

「そもそもこの情報は別口で動いていた他の組織C I Aから持ち込まれた代物でね。

で、そいつらもまたこの一件を極めて憂慮しているんだが、俺達の組織はほんの数時間前に街1番のアジトごとバーベキューにされかけてその始末だけでも一大事な上に彼らも彼らで実際に事態解決に現場で働いてくれるだけの人手が足りてないというのが1番の問題な訳だ」

「だから代わりにこちらの戦力で足りない人出を埋めたい。そういう事ですか」

「無論手を貸してくれた分の対価は払わせてもらおう。そちらと交わした取引分の商品には色を付けさせてもらうし、そちらがこの街で滞在中にかかった費用は全部三合会に請求書を回してくれて構わない。他にもこの街の店で仕入れたい物や余所の組織と取引を希望するのであれば、荒事は抜きにしてくれさえすれば三合会が仲介役として繋ぎを取る事も約束しよう。勿論手数料はロハだ。

尤もこれらはこの街が明日を超える事が出来ればの話になっまうがねてしまうがねうがね」

至れり尽くせりの大盤振る舞い。

この街に現れて2日足らず、初顔合わせから半日も経っていない相手に、空手形に過ぎないとはいえこれだけ優遇する条件を提示するのは張も初めてだ。

それだけの価値はがあると、伊丹達の実力を目の当たりにした張は確信信していた。

「……外から来たばかりのポツと出の自分達をえらく買ってくれてるんですね」

照れるというよりは戸惑った様子で苦笑した伊丹に、張は続けてこう告げてやった。

「オタクらがこの街に根付くつもりならこちらとしても少しは得がある条件にしていたらどうかね。コイツはいわば外からのお客様限定のサービスみたいなもんさ」

張は、この何処かの大国の軍隊に現役で所属している秘密部隊と言われても納得してしまうだろう奇妙な集団は自分達やヴェロツキオとの取引が完了したらさっさと街から消え去るのだろうと確信に近い推測を抱いていた。

新興勢力としてこの街に参入するつもりであるのなら、地元組織の弱体化により利権の空白が生じる絶好の機会である張の暗殺を見逃せば良かった筈だ。

魔法の様にロアナプラまで重武装の装甲車を複数台持ち込む手管と優れた暴力装置と国家予算級の商品を調達出来るだけの資本力を抱えているなら、そもそも正当な対価を支払っての取引ではなく、最初から武力闘争に持ち込んでいれば、抗争を伊丹達の圧倒的有利に持ち込めていたのは間違いない。

裏で聖戦主義者と組んでいる？ 馬鹿を言え、それなら張を助ける為に同士討ちをした事になるし、そもそも最初からロアナプラが壊滅する事が分かっているながら、商品引き渡しは長期に渡る事が目に見える取引を持ち掛ける訳ないだろうに。

伊丹達が持つ武力も、彼らが持ち込んだ商品も、この街の天秤を大きく揺さぶるには十分過ぎるものだ。

だが天秤の均衡を崩す要素が一時的なものであり、最終的に均衡が元に戻ると分かっているのなら話は違う。

些か以上に目立つ点はさておき、相手が礼儀を尽くしこちらの忠言に耳を傾けて誠実に疑問にも答えてくれる善人であつた命の恩人とも

なれば、少しばかり甘い顔をしたくなるのも人情というものだ。

そしてそのような連中だからこそ、今張達とロアナプラを襲う大問題の切り札になってくれるのではないかと、こうして張は賭けに出たのだ。

張がこの世で一等嫌いなのは偽善だ。

だからこそ相手の善なる心を利用して物事の解決を試みる事も、張は躊躇わない。

「とはいえ出会ったばかりの命の恩人であるアンタらを無理難題に巻き込まなきゃならん事に關しちや、俺のなけなしの良心も申し訳なさで恥じ入るばかりだよ」

「まあタイミングが悪かった、って事で割り切る事にしておきますよ。むしろ少しでもタイミングがズレていたら、最初の取り引きすら交わせるような状況じゃあなかつたでしょうからね」

「かもな……さっきオタクが言った通り時間の猶予は然程残されちやいない。そちらの方針を教えてくださいな」

「方針ですか。そうですね、こちらにも基本的には上から命令を受けて動いてる身ですから、上からの返答が来ないと——」

先程伊丹が出入りした隣の部屋との扉がおもむろに開いた。

坊主頭のロシア人が顔を覗かせると、彼は親指を上へ向けて突き立てた拳を伊丹と張がよく見えるように掲げた。

「上からの通信が来たぞ。GOサインだ！」

賭けに勝った、と今度こそ張の口元が男臭く笑みを描いた。

向かいのスイートルームに入ってしまったら後、戻ってきた張が連れてきた彼曰くの助っ人とやらは、ロックが想像していたようなロシア人の裏町で長く生きてきた古強者のイメージとは真反対の身なりをしていた。

「こちらが今回の案件に助っ人として加わってくれる事になったミスター・伊丹とその愉快な仲間達だ。外から来たばかりの人物だから皆は直接の面識が無い人物ではあるが、彼らの立場と実力はこの俺が保証しよう」

「ど、どうもー。いきなりで何ですけど今回はよろしくお願いしますね。アハ、アハハ」

安っぽいスーツに、アルカイックスマイルと呼ぶにはいささか脱力気味の笑い顔で頭を掻きながら、空笑いを漏らしてペコリと頭を下げるその姿。

ロックは一瞬、己が岡島六郎に戻ったかのような錯覚を覚えた。イタミ——伊丹と紹介された日本人は何というか、悪徳の都のホテルのスイートルームにて香港マフィアの首領から紹介に預かるよりも、新宿辺りの赤提灯で酔っ払った中年上司からの絡み酒の対処に四苦八苦している姿の方がよっぽど似合っていると思ってしまうくらいには冴えない雰囲気を持ち主だったからだ。

イエローフラッグで聖戦士から襲撃を受けた晩にチラリと見かけた顔と同一人物なのは間違いない。

だが仕事の売り上げや契約数よりも如何に効率良くサボって定時

退社するかを重要視する三流サラリーマンを彷彿とさせる今の伊丹の姿を見ていると、昨晚目撃した光景も実は見間違いだっただけではないかと錯覚しそうになってくる。

尤もただの日本の安サラリーマンが当たり前のように硝煙と銃のオイルと迷彩ペイント用の顔料の匂いが今にも漂ってきそうな、根っからの兵隊にしか見えない屈強な男達を伴っている筈もない。

内2人、鷹か剣を思わせる鋭利な気配の日本人と、この場で最も年嵩だろろう髭面に室内でもブッシュユハットを外そうとしないイギリス系男性も微かに見覚えがあった。やはりあの晩酒場で聖戦主義者の団体を瞬く間に殲滅した3人組なのは記憶違いではなさそうだ。

それでもこうして並び立たれると落差というかミスマッチ感甚だしい。

それ程までにロックの目から見た伊丹という人物は、悪徳と鉄火の都には全く相応しくない普通の日本的一般人としか映らなかつたのだ。

どう反応したものが分からずにロックが立ち尽くしていると、脇腹を誰かに突かれる感触。

軽く肘打ちを食らわされてきたベニーがロックに耳打ちした。

「ねえロック。もしかして彼らが昨日イエローフラッグで君とレヴィが遭遇したっていう人達だったりするのかい？」

「その通りだよベニー。確かにイエローフラッグを襲ったソロモンの手下達をたつた3人であつさりと片付けたのは彼らで間違いない」

「……何ていうか、後ろに居る護衛っぽい人達は納得出来るけど、イタミって張さんが呼んだ人はそこまで腕っぷしに自信があるようには見えないけどねえ。ああでも何となーく僕と気が合いそうな感じはするかな？」

海外産オタクの嗅覚は伊丹から同類の気配を察知した模様。

ともかくベニーの感覚でも伊丹という人物は、鉄火場には不似合いな外の世界の平凡な一般人に見える様子だ。

「なあレヴィ——」

だったらと相棒の女ガンマンに意識を移したロックは気付いた。

レヴィは三白眼を見開いて固まっていた。凍りついていると言っても良い。まるでいきなりブギーマンに出くわした驚きのあまり、あらゆる反応を忘れてしまった子供のようだった。

驚きなのはレヴィだけでなく、あのダッチでさえも呆然とした姿を晒している事だ。

それどころか2人は伊丹に視線を釘付けにしたまま、額にじつとりと冷や汗すら浮かばせていた。ラグーンのメンバーでも飛び切りクールなこの2人が、だ。

「レヴィ!? ダッチ!? どうしたんだよ大丈夫かい!？」

「……ロック。それからベニー。お前さん方は分からないのか?」

一瞬で口の中が干上がったらしい。掠れた声をダッチが漏らす中、少し離れた位置に立っていたキヤクストンもまた鋭く目を細めて伊丹達を捉え、それから、

「やはり彼ら、か」

と、それだけ呟くと目を閉じる。最早成り行きのまま全てを受け入れる覚悟をした者の態度だった。

そして最後の1人——



「……………」

ラグーンや米軍とは違い唯一無表情を貫いて佇んでいたバラライカは、おもむろにハイヒールを履いた足を1歩踏み出した。1歩また1歩と伊丹との距離を縮めていく。

バラライカの行動に護衛役のプライスや剣崎達が身構えるが、伊丹が振り向かずに手だけ挙げて仲間達を制した。

距離が詰まる。伊丹は動かない。

更に詰まる。伊丹はやはり動かない。

手を伸ばせば伊丹に届く距離まで近付いても、バラライカは歩みを止めなかった。

伊丹もまたその場に留まり続けはしたが、態度はといえば明らかに腰が引けた様子で顔も困惑でどことなく引き攣り気味だ。

(現実に見てみると原作以上に美人だけどすっげえおつかねえ！でもこの状況で流石に逃げるのは不味いだろうしなあ)

顔の右半分を火傷の古傷が覆っていても尚壮絶なまでの美貌を持つ女がおつかない気配プンプンで近付いてきて平然としていられる男が居るだろうか？

否、居ない。きっとそうに違いないと、誰に向けての弁明か定かではない考えを巡らせる伊丹は半ば現実逃避気味だ。ロウリイとかテユカとかレレイとか栗林とか黒川とか、怒ったらおつかない女性というのは伊丹の周囲にも多かったが、彼女達の大半はどちらかといえば可愛らしい顔立ちという点もあり、バラライカが醸し出すそれは伊丹も慣れていない類の威圧感だったのだ。

ようやくバラライカが足を止めた時、彼女と伊丹との距離は鼻先が触れ合いそうな程の近さまで縮んでいた。彼女が愛煙する葉巻と、硝煙と、脂が乗った女としての体臭がミックスした残り香が、伊丹の鼻先を擦った。

バラライカも微かに鼻を鳴らす。自らの手で銃を扱う者特有の肌



も呆然と眺めるばかりだ。永遠に続くかと思われたバラライカの哄笑もやがて少しずつ収まっていく。

ラグーンの一行は更なる驚くべき光景を目の当たりにする形になった——バラライカの目の端に光るものが浮かんでいたのだ。あのバラライカの目に、だ！

「成程、成程。ああ張、確かに貴様の言った通りだ。彼ら、いいや彼は確かに私好みの存在だとも」

「……気に入って頂けたようで光栄です」

様々な理由からくる戸惑いを多分に含んだ微妙な愛想笑いを浮かべる伊丹の姿に、目尻に浮かんだ水滴を指で拭うバラライカの喉から再び含み笑いが漏れた。ご馳走で満腹になつて上機嫌の肉食獣を彷彿とさせる笑い声だった。

「なあ張さんよ。アンタが連れてきた助っ人とかいうこの御客人方は一体何者なんだ？」

一気に機嫌を良くしたバラライカと対照的に、シリアスな気配を全身から発しながら疑問を投げかけるのはダツチだ。

今にも腰にぶら下げた銃へ手が伸びる3歩手前といったレベルまで神経を張り詰めさせている。レヴィに至っては2歩どころか1歩半といった塩梅の剣呑さだ。伊丹から見ただ2人の態度は、下着屋で突発的遭遇をした時はシェンホアを彷彿とさせた。

(俺って此処の人達住民からしたらそんなにおっかなく見えるのかなあ?)

(知らんし興味も無い)

思わず目線でプライスに尋ねてみるが、老兵の返事はにべもなかった。伊丹は泣きたくなかった。

「端的に言えば取引相手兼恩人ってヤツさ。おまけにマザー・テレサや仏様も真っ青のとびつきりのお人好しと来てる。まっ少なくとも練度と兵力に装備の優秀さ、ついでに人柄も俺が保証しよう」

「……信用して良いんだな？」

「あのなあダッチ。俺が保証すると言ったんだ。今は押し問答をしている時間も惜しいんだ。分かったな？」

三合会ロアナプラ支部の頭目に相応しい、眼前に突きつけられた銃口が如く重々しく冷たい威圧感を言葉に乗せる張と、それを浴びせられたダッチの視線がそれぞれ着用するサングラス越しにしばしの間ぶつかり合う。

小さく息を吐いて折れたのはダッチの方だ。

「分かったよ、張さんが責任を持つってんなら俺達も受け入れるさ」

「それでいい。バラライカとミスター・キャクストンも構わないな？」  
「構わないわ。少なくともその3人の腕に関しては私もイエローフラッグでの件でバオから話は聞いてるもの」

微笑みすら湛えてバラライカは即座に同意した。張とバラライカの視線がキャクストンへと向く。

「……確認をしておきたい。ミスター・イタミ、貴官或いは君の部下達で探掘施設奪還GOPPLAT及び船MIO/船VBS臨Sの訓練か実戦での経験は？」

作戦に従事する人員が特殊状況下での専門的訓練を履修しているか否か、この点だけで作戦の難易度と成功率は飛躍的に激変する。

この場限りとはいえ戦場で共闘する相手だ。伊丹はキャクストンからの質問をはぐらかさずに答えた。

「えーっと、俺とこの場に居ない面子を含めて以前の部隊で特殊作戦群船舶臨検

の訓練は他の部隊と合同で何度か。爺ブライズさんも確か前Sの部隊Aで臨検Sを実戦で経験済みで、俺の方は採掘施設の方も実戦で1度だけ」

「実戦で？」

「ええ、実戦で」

「……分かった。私は合衆国陸軍のシエーン・J・キヤクストン少佐だ。短い間の付き合いになるだろうが、貴官らの協力に感謝する」

「いえいえこちらこそ」

「自己紹介は終わったかな？」

——よろしい。それでは大まかではあるが聖戦主義者連中が準備しているサプライズパーティーを阻止する為の計画もミスター・イタミの上司達が立ててくれた。ここから先は現場に居る我々の意見を聞きながら内容を詰めていく手筈になっているから、さっさと作戦会議を進めるとしよう」

張の音頭の下、各陣営の代表者が頭を突き合わせてのミーティングが始まるのだった。

サンカン・パレス・ホテルのロビーの正面入り口とエレベーター、双方を視認出来る地点に在る柱に背を預けながらルマジュールは佇んでいた。

一見両耳に填めたイヤホンから音楽に没頭して耳を傾けているようにしか見えないが、同時に感覚は研ぎ澄まされており、危険な気配を感じ取れば即座に懐の銃を抜けるようにしている。

現在のロビーはサブマシンガンやアサルトライフルを剥き身でこれ見よがしに携えた中国人とロシア人が宿泊客やホテルの従業員よりも多く集結して厳戒態勢を敷いている有様であるのだが、ついほんの四半日前にあの三合会の支部がへりからの空爆によって街の何処からでも目撃出来る規模のキャンプファイヤーにされるといってもない大事件が起きたばかりなのだから、完全武装で警戒しても尚気を緩められる筈がなかった。

ルマジュールがホテル・モスクワの構成員と合流したのは半ば偶然だ。

伊丹達が張との取引を終え、ホテルの客室に帰還し、その日の日当を受け取ってそのまま帰ろうとルマジュールがホテルから出たと思ったら、突然黒い車の車列が正門前に集結してさつき別れた張が今度はバラライカも加えて向こうの方から姿を現したので、流石のルマジュールも面を食らう他無かった。

エレベーターの扉が開く気配を察知したルマジュールの隻眼がそちらを捉える。

ロアナプラを仕切る三合会とロシアンマフィアそれぞれの親玉が、私服を着ているがどこからどう見ても叩き上げの兵隊であるアメリカ人に腕つぶしと評判ではロアナプラ随一の運び屋4人組。

それからおまけに平凡過ぎて物騒な暴力稼業の集団の中では逆に浮きに浮いた、冴えないビジネスマン風の日本人を引き連れる格好でエレベーターから降り立ち、ルマジュールの目前を通過しようとする。別のエレベーターが到着するとそこから伊丹達の部下を吐き出した。

「ルマジュールは私と来い」

「イエス、ママ」

バラライカの命を受けイヤホンを耳から引っこ抜くと一団に合流し、張と並んで先頭を行くバラライカの斜め後ろに付いた。一瞬だけ日本の女性歌手によるロックソングがイヤホンから漏れ聞こえた。

2勢力の頭目がホテルの外へ向かうに従い武装した大量の男達も動く。乗ってきた黒塗りの車に分乗し、バラライカと張は中でも一際高級な車両に分かれて乗り込む。

全員が乗り終えるとすぐに車列は動き出した。伊丹達も自前の装甲車に乗り込んで後に続く。

何台もの黒塗りの車両と装甲車のコンボイが向かう先は港だ。

ルマジュールは本来は乗る事が許されないだろうバラライカ専用の送迎車、その後部座席にボリスとバラライカに挟まれる形で収まっていた。

小柄な体躯のルマジュールに対し元軍人らしいしつかりとした体つきの2人、しかもサンドイッチしてくる相手はロシアンマフィアとその副官である。中々に肩身が狭かった。

今からでも昼間の様に伊丹達の装甲車か、何だったらここより狭くても構わないから姉貴分達の乗っている車に今からでも移りたい気分だった。ルマジュールはこのおっかない女首領に好きかって扱われても文句が言えない鉄砲玉な立場な訳で、今の彼女に出来るのはバラライカとボリスの勘気に触れないよう置物に徹する以外に選択肢が無いのが悲しい現実である。

……そう、思っていたのだが。

「ルマジュール」

「……何です？」

「あの、イタミという男についてだが」

後部ドアに片肘を置き、軽く握った拳に頬を当てた体勢で、ルマジュールを一瞥しないままバラライカは言葉を紡ぐ。

その声は平坦で、彼女が何を考えてどんな思いを抱いているのか、このやり取りだけではまだ判別出来ない。

「最初に貴様が金蔓を掴まえたと聞いて呼び出した時、貴様は私にイタミという男は『決して目覚めさせてはならないジエヴオーダンの獣だ』……と。そう言っていたな」

「ええ、アタシは確かにアンタにそう忠告したよ」

肯定を示すと、半ば隠されたバラライカの口元から、獣が喉を鳴らす音に似た含み笑いが漏れた。

ルマジュールから見えたもう半分のバラライカの口元は、心底愉快そうに唇の端が吊り上がっていた。

「ああ、まさに貴様が言った通りの——いや、予想以上の相手だったとも」

「大尉殿？」

バラライカの態度に異質なものを感じ取ったボリスが声をかける。

「いや、な、軍曹。国も忠義も捨てた亡国の兵隊の成れ果てと化して尚現世に留まる様になって早幾年、よもやあのような狂気そのものの産物とお目に掛かれるとは私も想像だにしていなかったものでな。少しばかり昂っているようだ。」

何時の間にか張とも関係を構築していた事に関しては私も驚かさ



れたよ」

「後ろの装甲車に乗った東洋人の男の事、ですか？」

「気をつけるよ軍曹。あの男の見た目と態度に油断すると……」

「違うな。ヤツはあの見た目と振舞いだからこそ畏怖すべき、極めて異質な怪物なのだ」

バラライカが断言するとボリスの喉がゴクリと音を立てて動き、顔を斜めに横断する創傷が恐ろし気な強面の副官は視線を反射的に車列の最後尾付近を走る装甲車へと向けた。

「大尉の様に間近で捉えた訳ではありません。一目見た限りあの男は明らかに街の外の堅気の人間と自分は判断しました。」

……ですが自分は同時にヒトの形をした別の存在、お伽話の幽霊か怪物のような、恐ろしい気配を自分はあの男に感じてしまったのです」

「貴様のその感覚は正しいぞ軍曹。アレは我々やこの街の人間の様な、戦場という銃火と敵味方から流れた血の産湯に浸り過ぎて戻れなくなった者や腐った臓物の掃き溜めでしか生きていけない亡者に近い人間にほど恐怖と狂気を齎すアイギスの鏡のようなものだ」

滔々と語るバラライカの声はとても、とても愉しそうで、とても熱を帯びていて、とびつきりのクリスマスプレゼントを前にした子供を思わせる期待感にも満ちていて。

「間近であのイタミという男と対面して分かった事がある。」

あの男は間違いなく我々アフガンの亡霊やアメリカ人キヤクストンと同じか、或いはそれを凌ぐ火薬と血と屍に魂を染め上げられた兵隊の中の兵隊だ。

にもかかわらず、あの男の佇まいは入隊したての新兵よりも兵隊らしさに劣り、確固たる信念の下に戦場に身を置き続け汚濁に墮ちる事無く栄光を手にしたアメリカ人とも違う、糞溜めや死者の墳墓に頭の

先まで浸らねば纏えぬ死の芳香を魂に纏わりつかせていながら、あの男の目は日向を畏れぬ生者としての光を宿しているときている。  
ああ、まったく」

——その声の奥底に在ったのは、とても、とても、どうしようもない程の羨望感だった。

「アレはな軍曹。チエルノボシグ黒い神の化身と成り果てて尚、普通の人間としての有り様を狂気的な程に己が儘に保ち続けてきた、正真正銘の化け物だよ」

「ぶうえくちくしよーい!!」

車内を震わせる騒々しい駆動音を一瞬塗り潰す程に盛大なくしやみが伊丹から飛び出した。

「ずっと……誰かが俺の噂でもしてんのかな……じゃあまず今回の件に対する狭間司令からの方針を皆に伝えておくぞ。」

『今回の作戦に対し特地域内で採用した現地協力者の投入は許可出来ない』だってさ」

自衛隊の通信システムによる双方向回線を用い、他の車両に分乗している隊員を含めた仲間達へ伊丹がサンカン・パレス・ホテルを出発する前に司令部から受け取った通信内容を伝えると、複数の嘆息が入り混じった「了解」という返答が伊丹の耳朵を打った。

彼らの返答はあからさまに残念そうではあったが、同時に諦めと納得の感情も含んだ、どこか複雑な声色だった。

『向<sup>特</sup>こう<sup>地</sup>の魔法やロウリイが参加してくれたら百人力だったんすけどねえ』

伊丹の元直接の部下且つオタク仲間という立場から、階級に厳しい隊内に在って伊丹相手だといささか気安過ぎる態度を取る倉田が、護衛部隊全員が耳を傾けている通信回線なのもお構いなしに司令部が下した決定へ愚痴を発す。

伊丹も伊丹で内心同意はしつつも部下を嗜めた。

「気持ちには分かるけど仕方ないさ。彼女達は皆特地の案件に関する協力者であってまた別の世界であるこの街の事で関わらせるのはお門違いだからね」

言いながら伊丹は背伸びをし、万歳した両腕をそのまま頭の後ろに持っていて後頭部の後ろで手を組む。

「それに俺達が今使ってる銃や今乗ってる車みたいなこの街に持ち込んだ装備はこの世界でもあと10年か15年したら開発される、云わばこの世界の時代に存在する品物の延長線上に位置する代物だから、まだそこまでの違和感や不信感をこの街の人達からは抱かれずに済んでる訳だ。

自分達が理解出来る、許容出来る範疇の存在な訳だからな」

伊丹が愛用するM14EBRも、今乗っているタイフーン装甲車や

倉田が運転するM—ATVも、これから更に数年から十数年を経た時代のニーズに合わせて改良及び発展によって誕生した代物であつて、原形となつた銃器・兵器はこの世界の設定年代の時点で既に存在している。

ロアナプラ上空を徘徊する無人偵察機やそこからの情報をリアルタイムで受け取るタブレット端末の類も、90年代後半には原形となるタッチパネル式のPDA携帯情報端末が既に販売されていたし、無人機に至つてはWW2第2次大戦どころかWW1第1次大戦の段階で概念自体は誕生していた。

つまり過剰発達した未来アイテムに怪訝な顔はされつつも、この世界の住民が理解し受け入れる土台自体は最初から構築されていたのだ。

「でもそこにいきなり魔法だとかエルフだとか神様みたいなファンタジー全開の存在を放り込んでみる。もしこの街を住民ごと壊滅させる計画を無事阻止出来たとしても、今度は特地の事を今回の1件に関わつたこの世界の関係者に説明しなきゃならなくなるんだぞ？」

倉田あ。お前がその関係者への説明役とその他諸々の始末をやつてくれるっていうんなら、司令部にレイ達への増援要請を具申しても構わないんだけど、代わりにやってくれんのお前？」

『うわあ勘弁して下さいよ。どう考えても面倒な展開待つたなしじゃないっすかあ』

心底嫌そうな若い部下の声が回線を震わせ、誰かの忍び笑いがそこに加わつた。

「そういうこつた。別の世界線であつても同じ地球産の装備だからまだ誤魔化しは利くけど、正真正銘ファンタジーな異世界の存在を下手に見せられちゃ、今協力してくれる原作キャラだつてどう反応するか分かつたもんじゃないぞ。」

理解出来ない存在を前にすると受け入れるよりも排除しようとする。人間つてのはそういう存在なんだよ、倉田。上もそう考えたんだ

ろうさ」

場所が装甲車の車内でなければ休憩中のサラリーマンにしか見えない様子とは裏腹に、伊丹の口から語られる文言は限りなくドライだ。

が、そこに茶々を入れる者も居た。ニヤニヤ笑いを顔に貼り付けた剣崎だ。

「その割には嬢ちゃん手製の御守りはしっかり活用してたじゃないか。ええっ伊丹よお？」

「それはそれこれはこれ！」

……つてつもりじゃないけど、アレはまだ誤魔化しが効くからともかく、魔法少女やエルフが呪文唱えて魔法使ったり、撃たれてもすぐに再生するゴスロリ着た神様があの男よりもデカくて重たいハルバード振り回すの見られちゃ誤魔化しようがないでしょーが」

「お前に読まされた原作とやらの内容通りならさして問題なさそうな気もするがな」

「爺さんまでそんな事言わないでくれよお。大体この決定を下したのは俺じゃなくて狭間陸将達だから！俺にばかり言わないでくれえの」

プライスにまで指摘を受けた伊丹の口から泣き言と溜息が零れ落ちる。

「まあ俺としてもよっほど差し迫ってるんでもなければ、可愛い嫁さん達や世話になってる連中を彼女達にとっては無関係な住民の為に危険な場所へ引つ張り出して被曝させるかもしれない作戦に参加させたいとは思っちゃいないよ」

『それは俺も隊長に同意っす。もしペルシアさんが似たような事案に巻き込まれたら俺でも抗議しますよ』

「狭間司令達も特地の住民を戦力として投入する事は認めなかった

が、特地派遣部隊として保有する戦力に関しては使える物はどれでも使っていていいって許可が下りた。司令部も使える物は何でも使う方向で作戦計画を立案してるよ」

「まだ詳しく聞かされていないんだが、司令部が立てた作戦の具体的なプランは？」

ユーリの疑問は護衛部隊に加わっている隊員達全員の意見の代弁でもあった。

「それなんだけどね、張さんから渡された情報じゃ今回襲撃する敵の合流地点付近を金で雇われた地元海軍の軍艦が警備してるそうなんだけど……」

今伊丹達が運用している改造装甲車を手掛けた整備部隊のみならず、武器科・航空科・通信科といった武器と電子技術に明るく（かつ物資不足と活動縮小により無聊を困っていた）腕に覚えがある各方面の隊員達が寄ってたかって拵えた特地<sup>魔改造</sup>改修装備の中から役立ちそうな代物を今作戦に投入するという。

「で、軍艦を無力化しても使わずに放置するのも勿体ないって話になってるね」

特知用改修装備を用いた作戦計画を立案し、且つ先日アルヌスにて大々的に繰り広げられた一大イベントの音頭を取った人物でもある、陸上自衛隊所属が大半を占めていた特地派遣部隊に於いて1%に満たない別組織の所属……

伊丹とは別方向で掴みどころがない変人と評判のとある佐官が説明した奇想天外な作戦計画を思い返しながら、回線の先で楽しそうに笑顔を浮かべていただろう上官を真似て、伊丹もまた悪戯っぽく口元を歪めて仲間達へところ言い放つ。

「——『どうせなのでこの船、我々が有難く使わせてもらいましょう。だつてさ』」

Knockin' on Warfare Gate  
e31

しつちやかめつちやかな事態にはいい加減慣れているつもりだ。だ。

中央情報局

CIAに入局して最初の赴任地である中米でクソツタレだった先輩局員の嫉妬と逆恨みを買ったのが運の尽き。バルカン半島でも、国内での任務でも、気が付いたらトラブルに巻き込まれて肥溜めに頭から突っ込む羽目になった。

上からも同僚からも睨まれながら流れに流され、やがて送り込まれたのは東南アジアの田舎町の皮を被ったソドムとゴモラとヨハネスブルクを足して割らずに拵えたかのような、退廃と暴力の悪徳の都口アナプラ。

其処でも厄介事にしよつちゆう巻き込まれたり巻き込んだりしながらも、教会のシスターと街の悪党に銃火器を流す武器商人という表裏の顔を使い分け、裏の更に裏の顔を隠しながら上手い具合に仕事をこなしてきたつもりだ。

……ああ、だが、しかし、流石に今回の件に関しては。

「FUBARだねえ、全く」

Fucked Up Beyond All Reachability  
手の施しようがないぐらいしつちやかめつちやか。

何せ母国に迫る核テロという魔の手を、偉大な白頭鷲アメリカが誇る特殊部隊の精鋭達でも同盟国の軍隊でもなく、よりにもよって悪徳の街の無



頼・漢・と・ポ・ツ・と・出・な・正・体・不・明・の・武・装・集・団・に・よ・る・阻・止・に・託・さ・ね・ば・な・ら・ない・の・だ・か・ら・悪・徳・の・街・の・無・頼・漢・と・ポ・ツ・と・出・な・正・体・不・明・の・武・装・集・団・に・よ・る・阻・止・に・託・さ・ね・ば・な・ら・ない・の・だ・か・ら。

武器屋の更に裏の顔——CIAの現場担当官としてロアナプケースオフィサーラの海沿いの倉庫街に潜んだエダは気怠い吐息を漏らした。

倉庫街を見渡せる比較的高層の建造物に陣取ったエダの視線の先には乾ドック付きの倉庫。

数百メートルは離れている。夜闇も重なり、これだけ距離があれば暗視スコープでも発見は困難だ。

既に深夜近い時刻にもかかわらず件の建物——ラグーン商会の乾ドック前には何台もの車両が停まっており、その中には小型戦車と見間違う重武装の装甲車すらも複数含まれている。建物の周りだけでなく乾ドックへ通じる主だった道も三合会とホテル・モスクワによる検問が敷かれている。

夜間対応の高感度フィルムを突っ込み、小さなロケットランチャーを思わせる特大の高倍率ズームレンズ（そこいらのチンピラが持つ銃よりも何十倍も高価）を取り付けたカメラを覗き込めば、多数の車両灯が照らしているのもあり忙しなく建物の周りを行き交う人種も判別出来るようになった。

多くはロシア人に中国人、後者に似ているようで微妙に人種的差異を持つ日本人とこちらも様々。

意外な事にこの中で最も重武装なのは日本人である。装甲車も連中の乗り物だ。

「M4のカスタムに、M14の改造型に、ありゃあ無人砲塔か？ それにオイオイMP7なんて発表されたばかりのピツカピカな代物だろ。何であんなもんを日本人が持ってやがんだい？」

引き締まった臀部と大きく突き出した胸元を、キャミソールに白のミニデニムスカートで包んだブロード美女から漏れる独り言は、蓮っ葉ながら深刻な重苦しさを帯びていた。

本国から調査として先んじて送り込まれた実働要員、キャクストン少佐とマクドウガル大尉が潜入したヒズボラのアジトで、別ルートから情報を手に入れたホテル・モスクワと偶然鉢合わせた——どんな業界でもままある事態だ。それはまだ良い。

解に偽装した核シエルターで入手したテロの計画書から事態が予想以上に切迫していると判断したキャクストン少佐が、独断でホテル・モスクワに取引と同盟を持ち掛けた——時にはアドリブも必要な場合もある。これもまあ置いておく。

テロ首謀者の標的である三合会にも事態を伝え更に共闘を要請——そもそも以前アメリカ大使館爆破テロから始まる筈だったイラム過激派の連続テロ計画表を、たまたま入手した三合会がCIAに売っぱらったのが今回の原因なのだから三合会も完全に当事者だ。これもある意味当然の判断だろう。

自分達もアメリカ側も戦力が足りないかと判断した三合会は外部の人間で作戦に必要な戦力の穴埋めを決断——これも仕方ない。理解は出来る。

それがよりにもよって正体も所属も武器の出所も不明、だが一装備も練度も米軍より優れた謎の武装集団となると話は別で——

結果、エダはリップオフ教会で衛星回線を使い本国の上司へ報告を行いながら事の顛末を見守るところか、重く嵩張る監視用機材を抱えてえつちらおつちら高所へ上がり、現場で夜のサービス残業にも勤しまねばならなくなったのだ。

「動き方と態度は間違いなく正規の兵隊のそれ。日本人ならJ S D F 自衛隊なんだろうけど、頑なに海外派遣を拒んだ拳銃、兵に持たせる武器も拳銃と小銃しか認めなかったお花畑揃いの日本政府や防衛庁が送り込んだにしちやあ物騒過ぎるし、おまけに場慣れもしてやがるときてる。

日本人中心の部隊の中に2人だけ混ざってる2人の白人は……軍事顧問かねえ？ ロシア人とイギリス人って辺り何だかしつくりこないけど」

可能性としては、日本政府と防衛庁の反米勢力が海外における独自の活動圏構築に送り込んだ非合法部隊が妥当か。

東南アジアで活動する日本人の非合法部隊といえばまず思い浮かぶのはかのSR班だが、それにしても装備があまりに先進的、かつ投入している戦力も活動内容も派手に過ぎるのが、エダの癪に障った。

———ここまで来ると完全に秘密工作の範疇を超えている。最早これは、完全に軍事活動のそれではないか。

「連中の指揮官はあのスーツを着てるヤツよねえ」

額の上に押し上げたサングラスの位置を修正しつつ僅かに超望遠レンズを動かす。

ウォール街やワシントンDCに放り込んだらあまりの冴えなさにむしろ浮いてしまいそうな、安物のスーツと間の抜けた顔立ちをした雑誌サイズの電子端末に目を落とす東洋人の男に焦点を合わせ。

目が合った。

「つつつつつ?!?!?!」

飛び出しそうになった驚きの悲鳴をエダは寸でのところまで呑み込んだ。

じつとりと蒸すような潮風を浴びて湿っていた全身に別種の冷たい汗が浮かんだ。

「いやいやありえないだろ」

見られた、いや見えている？

落ち着け。夜の、それも照明に照らされた中に居る相手側から暗所に潜むエダの姿を捉えるのはもつと近い距離でも難しい。それが数百メートルも離れているとなれば尚更――

自分に言い聞かせ、驚愕で仰け反った拍子に離してしまったカメラをエダは再び覗き込み。

「あっコレ完っ全にバレてるわ」

件のスーツの東洋人がしつかりカメラ目線で気の抜ける笑顔をエダへ向けて、あまつさえ手を振ってすらいるのを認識するに至り、エダも笑うしかなかった。諦観の笑みだった。

「……下手にちよっかいをかけるのは厳禁だねこりや」

シスター・ヨランダにも刺激しない方が良くと忠告しておかないと。

そう心に誓いながら、エダはそそくさと撤収の準備に入るのであった。

『カルデアよりアベンジャーへ。監視者は撤退を開始した。上空より周辺警戒を継続する』

「了解カルデア。情報ありがとね」

ラグーン商会の乾ドック上空を旋回する無人偵察機スキャンイーグル改から受信した映像を映していた情報端末を伊丹は専用の携帯ポーチへ仕舞い直した。

何という事はない。伊丹がエダの存在に気付いたのは単に周辺警戒中だった無人機が搭載した夜間運用も可能な監視用赤外線IRセンサーによって発見し、伊丹へと伝えたからである。対赤外線擬装を用意しなかったのがエダの敗因だった。

どうやら普段から空の目偵察衛星で監視はし慣れていても、自分が空から監視されるのは想定外だったらしい。

『見逃して良かったのかよ伊丹』

「班編成ならともかく単独行動だったからね。それにこっちに敵意があるならでっかいカメラじゃなくて狙撃用のライフルを持って来てるでしょ。ありや多分商売のネタ狙いの情報屋だと思うよ」

三合会やホテル・モスクワの構成員共々警備に当たりつつ、伊丹と司令部とのやりとりを拾っていた剣崎の意見に伊丹が返事をしたところで、こちらへと近付いてくる車の音が聞こえてきた。同時に再び司令部からの報告。

『友軍車両が間もなく到着。受け入れ準備を整えられたし』

少し経つとエンジン音が近付いてくる。自衛隊員には耳慣れた73式大型トラックの唸り声が複数。

加えてそれよりもやや大人しい小型トラックパジェロの方の73式も混じっている。どの車両の車体も自衛隊所属を示す日本語や桜紋のペイントマークを塗り潰してはいるが、モスグリーンの塗装自体までは手間の問題でそのままなので見る者が見れば軍の配備車両と一目でバレてしまうがそこはご愛敬。

乾ドック前に停車した73式大型トラックから次々と自衛隊員が

―ただし最低限所属を誤魔化す為、劍崎や倉田同様自前か昼間に伊丹達が街で調達した私服姿―降りてきて、今回の作戦に必要な機材を乾ドックへと運び込み始める。

停まった大型トラックの1台は荷台が幌無しで、防水カバーで掛けられた大型の荷物を積んでいた。

パジエロも停車すると、そちらに乗っていた人物は少し視線を彷徨わせて伊丹を見つけるや、ゆったりとした足取りで近付いていく。

「どうもどうも。今回はよろしくお願いしますね」

「いえいえ。こちらこそ世話になります」

江田島五郎二等海佐は柔和に見えるが、ちよつとだけ胡散臭さを感じさせる微笑みを浮かべて伊丹と挨拶を交わした。

自衛官としての形式ばった敬礼までは行わない。規模や内容はどうあれ一応秘密作戦という建前なのだから、衆目がある中であからさまな答礼を交わすのはご法度なのだ。

付け加えるなら仮に最前線で上官に対し下手に敬礼や鯨張った対応を行ってしまうと、潜伏している狙撃手に誰が指揮官かを把握され狙撃の最優先目標として暗殺されるリスクが発生してしまうという部分もある。伊丹もそう教え込まれてきたし、現実に実行もしてきた。

当然ながら江田島も、特地の駐屯地でいつも着ている海上自衛隊の白い制服ではなく、白のズボンに伊丹達が昼間ロアナプラの市場で仕入れてきた派手な古着のアロハシャツだ。

叩き上げで陸将まで上り詰めた狭間や戦鬪団の健軍一佐と用賀二佐のように巖の様な威厳や頑健さからは薄い、有名企業の管理職といった方が似合う風貌なのもあり、今の江田島はパツと見南国へ旅行に来たばかりの何処にでもいる観光客のおじさんという表現がしっくりくる。

それでも自衛隊ならではの刃物と見間違わんばかりにパリッと折り目正しく糊とアイロンが効いたズボン、そして微かに彼から漂う潮

の気配は、江田島が自衛官であり海の男である事の証明だった。

裏社会の男達に加え新たに自衛隊の団体も出現し、更に賑やかになった乾ドックを見回した江田島はおもむろに深々と鼻から息を吸い込むと、とても満足そうな吐息をこれまた長々と漏らした。

「潮と油の臭いが入り混じったこの空気……いやはや実に素晴らしい。あちらの澄み切った潮の香りも良いものですが、やはり私も現代人である訳ですから、こういう海の方に馴染んでしまっているのですねえ。」

これだけで私自ら作戦に加わる事を陸将がたに立候補した甲斐があるものというものです」

冗談とも本気ともつかない戯れ言を述べる江田島だが、勿論真面目な理由が存在した。

陸上自衛隊・特遣部隊（の残留戦力）に於いて偵察用ボート以上の船舶を運用した経験を持つ人間が江田島以外に該当しなかったからである。

そもそも自衛隊の特遣当初は近場に海が存在するかも不明瞭だったという点から、空爆や航空偵察といった役割を求められた航空自衛隊と違って海上自衛隊の出る幕は無いと当時は考えられていたのだ。実際現在に至るまで特遣部隊が経験した作戦活動はほぼ陸上に限定され、水上での活動といえば河川か湖程度に過ぎない。

江田島が特遣入りしたのも日本政府が外交使節団を派遣するのに同道しての形であり、講和の進展によって特地の海洋事情を調査できる目途——もしくは余裕——が若干生じた事でようやく認められた初の海自からの人員も江田島及び彼の副官である下士官の2名のみという、陸自や空自と比べてしまおうと何とも肩身が狭い立場なのが特地における海自の現実であった。

「ああ、海外から戻ってきた人が故郷に戻って来るとホッとするようなもんですね。俺もその気持ちはよくよく分かります。俺も日本によろやく帰り着いた時は我慢出来ずに涙が出ましたもん」

世界中の戦場を放浪させられた身の上である伊丹の領きはそれはそれは実感に満ち溢れていた。

それからチラリと江田島の背後、幌無し73式の荷台に積まれた存在へ視線を向けた。丁度カバーを外し、固定用ロックを外した積み荷を隊員が数人がかりで慎重に下ろし始めている。

「あれが無線で言ってた今回の作戦の切り札ですか」

「その通りです。東日本大震災311での教訓から、地上局から遠距離での操作能力と重量が嵩む観測機器を搭載可能なペイロード能力に重点を置いて開発された製品ですね。

元々は機甲戦力や徒歩での調査も困難な山岳部や火山地帯での調査用にメーカーから多数調達して特地へと持ち込まれた代物となります」

遠隔操縦観測システム  
「FFOSよりは小さいですね」

「原型は民間用の農薬散布に使われるラジコンですから。こちらはあちら程あれやこれやと機能も詰め込まれておりませんからねえ。

ですが運用にトラック数台分の機材が必要なあちらと比べますと、運搬用にトラック1台と地上局用に高機動車クラスの車両が1台あれば十分なこちらの方が小回りには優れていますし、ペイロードもベースが広範な農薬散布用という事で余裕がありましたから。

そこを手元に有る資源を活用しての戦力強化を求めた司令部と、暇を持て余していた方々の思惑が一致した結果、この機体に目を付けたという形になりますねえ。今回これを操縦するオペレーターも初期からテスト飛行を担当して運用に習熟した隊員を連れてきましたから安心して下さい」

「それにしても江田島さんはこの機体について詳しいんですか？」



「特地入りする以前に少々。以前乗っていた船で教育番組の撮影クルーが火山島の調査にこのモデルを船上から運用しているのを拝見したので、興味を持っていたのですよ」

『検問を通過した車両がこちらへ向かっている。三合会かホテル・モスクワかはこちらからでは不明』

三合会の方だった。乾ドックへ向かう途中で一旦別れた張が降りるなり伊丹の下へやってくる。

「待たせたようだな。そちらがミスター・イタミが言っていた船長さんで宜しいのかな？」

「江田島とお呼び下さいミスター・張。この度は急な要請をお願いしてしまい……」

「気にしないでくれ。そもそも今回の案件にオタクらを引つ張り込んだのはこつちだからな。これぐらいは軽いもんさ」

張と一緒に現れた別の車から十数名の男達が降りてくる。全員現地の住民で、長年大なり小なり潮風と日の光に晒されてきた海の男という点で共通していた。

「ご希望通り、かつてここらの軍に所属して軍艦に乗り込んでいた経験がある連中を連れてきた。」

機関科から兵装を担当してたヤツまで一通り揃ってるし、人間性について……まあそこら辺はお察しだが、殆どが今も密輸船に乗ったり海賊もどきをやってたりしてる現役の船乗りばかりだから腕は確かだ。

仕事に閑しちやアンタらの指示に必ず従うよう俺の方からよおく  
言い聞かせてあるから安心してくれ」

「彼らを運ぶ船の手配もお願ひした筈ですがそちらは？」

「そつちも今こちらへ向かつてる。もうすぐ着く頃だ」

更に別の車両。こちらから姿を現したのは旧ソ連軍空挺団の戦闘  
服に身を包んだ、完全武装のロシア人達。

空挺服を纏う一団には、バラライカも含まれていた。

「戦争狂どもも満を持して御到着か」

愉快そうに嘯く張の声。

—— 作戦開始が近付いていた。

Knockin' on Warfare Gate  
e32

地球が丸い事など誰だって知っている。

だからこの星は土<sup>地</sup>でできた玉<sup>球</sup>と呼ばれるのだ。

球形であるが故に地球上に立つ人間のちっぽけな視点の高さでは一見真っ平らな土地或いは水面上であっても、一定以上の距離を超えると地形に遮られて向こう側が見えなくなる。その距離は人が水上或いは地上から何メートルの高さに位置しているかで変動する。

空との境目が溶け合う境界線を地上では地平線、水上ならば水平線と呼ぶ。

人が水上から0メートルの高さに立っている場合の水平線は約4キロ。

大地から100キロ以上も離れた海上となれば全周見回しても見えるのは海面と空ばかりとなる。

そんなロアナプラから約75海里のタイ沖海上に1隻の軍艦が停泊していた。

全長50メートル、幅7メートル、排水量250トン越えのPSM M-5型哨戒艇——のタイ海軍によるコピー版。

一国の海軍が保有する艦艇の中では小型に分類されるがそれでも立派な軍艦だ。76ミリ速射砲と40ミリ機関砲をそれぞれ船体の前後に搭載し、50名程の乗組員によって運用される。

この船は海軍司令部の命令を受けて活動しているのではない。

哨戒艇の主な役回りは領海内で遭難船の救援や不法に活動する密輸船や海賊船の搜索・警戒・摘発だが、この船を与えられた艦長とその部下達は本来の役割とは真逆のアルバイトに哨戒艇を利用する事にした

すなわち、海上での犯罪行為を見逃し、無関係な一般船舶や血と金

を嗅ぎつけた海のハイエナどもを現場から追い払う、汚れた金目当ての番犬という新たな役割に軍艦を用いたのだ。当然、司令部には黙って、だ。

雨季を迎えた東南アジアの海は風が吹いてもなお蒸し暑い。

鋼鉄製の船体の内側で唸り声と共に熱を発する船舶用水上レーダーのディスプレイといった熱源が集中する艦橋ともなれば尚更だ。これがアメリカ辺りの最新鋭艦であれば爽やかな冷気を齎してくれるエアコンも最新モデルを完備しているのだろうが、建造から20年近く経つこの船でよりにもよって真つ先に壊れた機材こそが艦橋のエアコンであった。

そのせいで操船に必要な情報を齎す航行機器やレーダーディスプレイの前で今夜の当直を押し付けられた乗員は揃って半袖の軍服の襟元を大きく緩め、汚い独り言を漏らしては己の不運を呪った。

デリケートな電子機器を潮気や不意の浸水から保護する為に海上活動中は本来閉じられていなければならぬ艦橋の水密戸を開け放つだけでは足りず、卓上に置かれた小型扇風機の強さを最大にして少しでも涼を得ようと彼らは試みる。

特に電力の消費の大きさに比例して相応の熱も帯びるレーダーの担当官に至っては、乱暴な扱いは厳禁のディスプレイに両足を筐体に乗せるどころか温くなってもまだ水滴が浮かぶビールの小瓶を何本も並べ、だらしなく椅子の背もたれにもたれ掛かりながらしきりに団扇を仰ぐ始末。

そんな彼ら当直員の姿は、真面目で厳格な軍人らしさからは限りなく程遠いものなのは間違いなかった。

「チツ、クソ暑いぜ。艦長の野郎、何時になったら艦橋の空調の修理を手配してくれるんだか」

今回当直員達が退屈しのぎの話題に選んだのは、今頃哨戒艇唯一の個人空間である艦長室でぐっすり夢の中に居るだろうこの船の艦長への愚痴だった。

「噂じや艦長、司令部に修理の予算を申請しておいて実際にや業者を手配しないで自分の懐にそっくり呑んじまってるって話だぜ？」  
「ふざけやがってあの守銭奴野郎。ただでさえ副業で稼いだ俺達の取り分も渋ってやがるくせによお」

タオルで汗を拭いながら、レーダー担当官が新たなビールを飲もうと卓上に手を伸ばした時だ。

チカリ、とディスプレイに灯る光点。

「ああん？」

怪訝そうな声を発しながらレーダー担当官は卓上から足を下ろすと顔を画面に寄せた。

船舶情報を発しない正体不明の船を水上レーダーが捉えたのだ。ディスプレイ上に表示されるレーダーの搜索範囲設定を変更。突然出現した謎の船を除けば、レーダーの索敵範囲に捉えられる存在は今回の副業の依頼人が取引場所として一時的に借り上げた海上石油プラットフォームしか存在しない。

航跡を見る限りでは哨戒艇のやや斜め後ろへ向かう形で接近するコースを取っている。反応は小さく、速度は速い。高速艇の類だろう。

レーダー担当官の手がビール瓶ではなく備え付けの受話器を取り、艦尾方面の監視を担当する見張り員<sup>ワッ</sup>を呼び出した。

コール音が2度、3度、4度と繰り返しなり、10に達しようかというタイミングでようやく繋がる。妙に舌つたらずな男の声を耳が拾うなり、レーダー担当官のこめかみに青筋が浮かんだ。

『ああん？ もしもしいく？』

「テムエまた監視中にハッパキメてやがったな!? 今度やったら魚の臓物に漬け込んでからサメの群れの中に放り込むぞ!」

『わあかったよお。そんな怒鳴るなつてえ』

「アホが。それより方位100、約2海里先にこつちへ近付くレーダーが捉えたから、さつさとテムエのハッパ漬けの頭より高い双眼鏡でさつさと確認しやがれ!」

『へーへー……ああダメだわこれえ。今日は雲が多いせいでゼーんぜん暗くて見えやしねえぜ。船の種類は分かんねえの?』

「航行情報は出しちやいねえ。反応は小さくて速度は速え。かなりかつ飛ばしてやがる。こつちとの距離は縮んじやいるが、このままなら交差しねえでそのまま後ろを抜けてくコースだ」

『どうせラグーンの連中みたいなどつかの運び屋の船だろ。連中のこつた、航行灯も消しちまつてるだろうし今必要なのは骨董品の双眼鏡じゃなくて暗視装置だよ』

見張り員の意見も尤もだったので、レーダー担当官はそれ以上騒ぐ事はなく受話器を卓上に戻した。

先程自身が言った通り、高速艇の光点は哨戒艇の後方1海里強の位置まで接近した後、そのまま遠ざかろうというコースを維持している。

「艦長を起こして知らせるか?」

操舵コンソールを担当する仲間からの確認にレーダー担当官は――  
――首を横に振り、卓上に再び両足を乗せてだらしなく背もたれに体を預けた。

「誰がするかよ。敵襲でもねえのに夜中に叩き起こしたせいで不興買って、ただでさえ少ない取り分を更に持ってかれるなんざ真つ平御

免だ」

興味を失い担当官はレーダーディスプレイから目を離す。

哨戒艇の真後ろに到達した高速艇が2キロの感覚を維持しつつ徐々に速度を落としていた事を、レーダー担当官は見落としてしまった。

それだけではない。

「んあ?」

「今度は何だよ」

「……いや、何でもねえ。ただの誤作動だろ」

対空レーダーのディスプレイにもごく小さな反応が一瞬だけ生じた事を、レーダー担当官は見過ごしてしまったのだ。

ブツリと途切れた艦内電話の受話器をぼんやりとした目で元の場所に戻した艦尾甲板上の見張り員は、艦内から持ってきたパイプ椅子へと腰を下ろし直すと、後部砲塔根元の段差に無造作に置いた灰皿で燻ぶっていた大麻煙草を改めて堪能し始めた。

甲板上で小さくタバコの火が瞬いては、甘ったるい紫煙と潮気の入り混じった奇妙な臭いが風に吹かれて掻き消されていく。

最早到底見張り員としての役割など到底果たせそうにない蕩けきった目で、真っ暗な海をぼんやりと眺めながら、吹き付ける潮風と船体にぶつかる波の音に揺られていた時だった。

「んああん? 誰だあゝこんな夜中に芝刈りなんてしてんなあ?」

それは何か激しく空気を叩いて掻き乱すような音と、哨戒艇のガスタービンエンジンを一気に出力全開にした時の回転音が一緒くたになったような音だった。

ヘリコプターのようなプロペラを持つ航空機の駆動音に近くはあるが、何メートルものプロペラが高速回転している音よりと比べるとかなり大人しい。

見張り員はトロンとした目を細めて首を巡らせる。相変わらず黒い海面と闇夜の空ばかりが広がったままだ。雨季に入ったとあつて空には雲も多く星明りも多くが遮られている。

……音は聞こえど姿は見えず。そもそもヘリコプターが接近しているなら、見張り員の耳が接近音を拾うよりずっと前に対空レーダーが探知していなければならぬ。だが艦橋の当直員から報告はない。つまりはそういう事なのだろう、と甘ったるい煙で目も頭も蕩けた見張り員はパイプ椅子にだらしなく身を預け直した。

その間にも何かの駆動音は次第に接近しているのだがそんな事お構いなしといった態度だ。

大体、あのロアナプラの悪党も手出しを控える軍艦を襲おうなんて馬鹿が一体何処にいる？

「報告がねえくんなら問題らいよなあ〜」

最早呂律も怪しくなるぐらいトリップした見張り員は半分以上灰になったマリファアナタバコの煙を深く吸い込むと、頭部が隠れてしまふ程の甘い煙を顔中の穴という穴から噴き出させた。

——にわかにか赤い光線が2本、煙の中に浮かび上がった。

「あ——？」



グズグズに蕩けた思考が僅かに息を吹き返し、焦点を合わせて赤い光線を目で追いかけると、光線は艦尾方向の真つ暗な海上から伸びているのを視界に捉える。

何だあれは、と目を凝らす。その時星と月の灯りを隠していた上空の雲がにわかにはぐれ、夜の海上を柔らかな光が少しばかり照らし出した。

マリファナ漬けになった見張り員の頭が、ようやく哨戒艇のほんの数メートル後方に浮かんでいる物体を認識した。

僅かな星明りが戻っても尚暗い夜の海上では大まかな形状しか認識出来なかったが、それでも上部で何かを高速回転させて宙に浮かぶ流線形に近いシルエットが確かにそこには在った。2本の紅い光線の出所は宙に浮かぶシルエットの両側面からだった。

「んだあありや……」

宙に浮かぶ物体は細かく空中で揺れて姿勢の微調整を繰り返し、その度に光線も右へ左へと揺れる。

その光線の照射先は見張り員の胴体だった。2本の光線が揺れる度、見張り員の胴体の表面に浮かんだ光点も併せて動いた。

自身の体へと据えられた光線の照準に目を落とした見張り員の、マリファナの効果で手当たり次第に鍋に放り込まれてグチャグチャにかき混ぜられたシチューの具材よろしくグチャグチャになった思考と記憶の中で不意に浮上したのは、出航数日前に兵舎のテレビで見た人間狩りの宇宙人を巡る映画と人類抹殺を目論む殺人マシーンが登場するとあるSF映画だ。

此処に至りとうとう見張り員の意識が異常を認識した。それでもマリファナに炙られた思考が弾き出した結論と彼の口から飛び出した内容は明らかに錯乱していたのだが。

「う、宇宙人が送り込んだ殺人ロボットだああああ!?!」

次の瞬間、紅い光線——可視光モードのレーザーサイトに平行して延びる銃口から発射された銃弾が次々と見張り員の胴体に命中。見張り員は激痛にのたうち回りながら後部甲板に崩れ落ちる羽目になったのである。

「今何か変な声が聞こえなかったか？」

「あん？ 何も聞こえねえけど」

「それに声以外にもさっきから妙に変な音が外から——」

レーダー担当官が首を傾げて開けっ放しの水密扉へ目を向けた時、煙の尾を引いた何かがかなりの飛翔速度で艦橋内へと飛び込んできた。更にもう1つ、2つと続く。

飛び込んできた缶状の物体は艦橋の床でバウンドすると更に大量の白煙を放出し、後に続いて放り込まれた物体も同様だった為、狭い艦橋はあっという間に煙に包まれた。

ただの煙ではないと、艦橋に居た者達はすぐに理解させられた。目と鼻にタバスコをブチ撒けられたかのような苦痛を彼らは味わう羽目になったのだ。

「ぶえっほげほげホっ!!」

「さ、催涙弾じゃねえか!?!」

目と鼻と喉を襲う刺すような苦痛に堪らず艦橋に居た者は全員外の通路へと転げ出た。

残念ながら艦橋を離れる前に、メーデーや艦内に警報を鳴らす余裕や冷静さを保っていた者は一人としていなかった。

艦橋を離れた当直の乗組員達は言う言うの体でレーダーマスト根元のデツキへと何とか逃れると、必死に目元を擦って涙で滲む視界から復活しようと試みる。

そんな彼らに更なる追撃が襲いかかった。

強烈な炭酸飲料の蓋を一斉に開けたかのような連続した音が頭上から生じ、同時に催涙ガスの効果から抜け切れず苦しむ乗組員達の体中を衝撃と激痛が次々と襲った。骨や内臓に響いて倒れ伏し、動けなくなる位の威力だった。

「な、何が起きてやがんだ……」

化学物質の反応のみならず、骨にヒビか折れていてもおかしくないような苦痛のせいで耐え切れず涙を浮かべながら、デツキ上に転がって呻く事しか出来ない有様になったレーダー担当官は、歪む視界の中で微かな月明りを背負って宙を舞う何かを見つけた。

上部で回転するローターに流線型の機体。両側面から延びた短翼<sup>スタブウイング</sup>には、ドラムマガジンとグレネードランチャーと照準用のレーザーサイトを取り付け付けた大型のライフルを搭載。

更にもう1機、こちらは左右の短翼にアサルトライフルではなく6連発の歩兵用グレネードランチャーが搭載され、遠隔操作で発射する為の機構が引き金周りに追加されていた。

有り体に言ってしまうえば武装を乗せた超大型のラジコン<sup>ドロー</sup>ヘリにしか見えない機体が2機、哨戒艇の周囲を飛び回りながら苦痛に呻く乗組員達を見下ろしていたのである。

信じられないと、愕然とレーダー担当官は唸り声を発する事しか出来なかった。

「あんなオモチャにやられたってのかよ……!?!」

ラジコンヘリの音に混じり、高速で水上を滑走する船のエンジン音も急速に接近しつつあった……

Knockin' on Warfare Gate  
e333

——90分前。

もし今回の案件に無関係な街の住民が居合わせたら  
陸上金メダマイケル・ジョンソントばりの速さで逃げ出すだろうな、とロックが  
思ってしまうような光景が今、ラグーン商会の乾ドック2階の倉庫兼  
事務所に広がっている。

右に目を向ければ、全員が―あのバラライカも含めて―旧ソ連空挺  
軍の戦闘服で一部の隙無く固めた完全武装のバラライカと遊撃隊ヴァイソトニキ  
とホテル・モスクワの姿。

ただでさえ普段のスーツでもおっかないバラライカだが、かつて所  
属していたという軍隊時代の戦闘服に青いベレー帽、その上に唯一普  
段のレディーススーツ姿から引き継いだアーミーコートを羽織って  
仁王立ちするその佇まいは、見ているだけで肌にドライアイスが押し  
当てられたような錯覚を覚えさせる恐ろしい程に冷徹な戦意を漂わ  
せている。

視線を左にずらすと、事務所備え付けの安物のソファ―に腰を下ろ  
している張と彼の後ろに控える三合会構成員の姿。

ホテル・モスクワが放つ気配に当てられてか少なからず顔が強張っ  
ている黒服に囲まれながら、ただ1人だけ優雅に足を組んで佇む張の  
泰然自若とした振舞いは、流石軍隊上がりのロシアンマフィアに武と  
政両面で真っ向から対抗出来る三合会頭目の面目躍如といったここ  
ろか。

三合会構成員の後ろでは、張達が連れてきたというロアナプラの船

乗り達が肩身狭そうに必死に息と気配を消しているのがロックの視界に入った。いきなり呼び出しを食らったと思ったら、張のみならず戦争を始める準備万端のホテル・モスクワと同じ空間に身を置かなければならなくなった彼らに、ロックとしては素直に同情する事ぐらいしか出来そうにない。

更に視線をずらすと次に目に入ったのはロアナプラでは滅多に見かけない日本人の集団だ。悪徳の街に突然現れた日本人ばかりの武装集団。2人だけ、イギリス人とロシア人だという白人も混じっている。

彼らは乾ドック内外で今も機材搬入といった作業をしている私服姿の仲間達とは違い、濃緑が主体の迷彩模様をした手足の先まで皮膚が露出しないようにする為の奇妙な全身着を纏い、頭を覆うフードだけ下ろした格好で待機していた。

東南アジアの熱帯地方でこんな格好をしていたらあつという間に汗だくになりそうなものだが、慣れているのか単に忍耐強いだけなのか、額にやや汗を浮かばせながらも愚痴や悪態の1つも吐かず耐えている。

(そういえば東京の地下鉄で起きた毒ガスを使ったテロ事件で警察だか自衛隊だかがあんなの着て作業してたの、昔テレビで見た事あるなあ)

仕事柄、兵器類に関して最低限の知識を身に着けたロックではあったが、伊丹の仲間達が着ている迷彩柄の全身スーツがNBC戦核・生物・化学で用いられる個人用防護装備だと見抜くにはまだ少しばかり専門知識が足りていなかった。

ロックから見て集団の最も外側の位置、自衛隊組に混じる形でキャクストンとレイの米軍組もまた個人用防護装備を纏っていた。

これは伊丹達が提案して貸与した予備の装備だ。何せ物が物だ、万が一に備え出来る限りの対策はしておきたい。

ホテル・モスクワ組にも同じ提案をしたが、彼女達の方はNBC装

備の貸与を拒否した。

ぶつつけ本番で不慣れな装備に我々の戦争を煩わされたくはない、何より亡霊である我々は今更被曝程度で寿命を縮める事も全く恐れではない、というのがバラライカの言い分だった。

「我々の物より性能が良さそうだな」<sup>米軍</sup>

「オムツまでついて作戦完了までトイレを我慢しないでいいのは有難いですね」

等と感想を言い合うキャクストンとレイを含め、個人用防護装備を纏った男達もテフロンとポリ塩化ビニルと高密度ポリエチレン繊維不織布を織り合わせたスーツの上から戦闘用ベストを装着し、各々が扱う武器のチェックを繰り返している。

米軍の2人が扱う銃はキャクストンがキャリングハンドルを取り外しドットサイトを装着したM4カービン。

前回ロアナプラに訪れた時はスコープ付きのM21ライフルを使っていたレイも、今回予定された戦場が海上施設での近く中距離戦と想定されている事から重く嵩張る大口徑ライフルではなく、キャクストンと同じ取り回ししやすいM4を使うようだ。

ロアナプラに犇めく有象無象玉石混合の悪党どもの中には銃のカスタマイズに余念がない者も少なくないーラグーンの2丁拳銃ことレヴィの愛銃も、世界に2丁しかないカスタムモデルだが、スコープではない光学サイトなんて洒落たアイテムを搭載した銃はロアナプラではまず見かけない。

理由は単純、ロアナプラに大量に出回る無名のメーカーの安物銃よりもむしろこの手の光学サイトの方がずっとずっと高級品だからだ。余程の物好きでもない限りちゃんと撃てて当たる銃と弾代さえ手に入ったならば、メーカーのカタログを取り寄せる前に洒か女か賭け事かはたまたクスリに消費してしまうのがロアナプラの住民という、何とも享樂的な存在なのである。

「見るよロック。日本人どもが持つてる銃、どれもこれもまるでスターウォーズかエイリアン2に出てきてもおかしくない様な銃ばかりだぜ」

そんな中で、キャクストンとレイの装備というのは然程銃に興味がないロックも物珍しそうに眺めてしまう程度には貴重な品だったが、彼らと並ぶ日本人の団体が持つ銃はその上を行っている事に、ロックはレヴィに肘打ちされた事で気付いた。

米軍の2人の銃はあくまで極一部だけの小手先な改造に留まっている一方、日本人兵士の集団が持つ銃は本隊の上下だけでなく、側面にも付属品を取り付ける為の枠レルが銃全体に調和する形で取り付けてあるのだ。単なる改造ではない、まるで最初からそう設計されているかのよう。

そんな銃が1丁だとか1種類だけとか、そういう範疇ではない。アサルトライフルからサブマシンガン、ショットガンと種類も豊富な彼らの装備だが、あらゆる種類の銃器が同様の思想の下に設計されていると一目で理解出来てしまう代物ばかりだった。

SFに片足を突っ込んでいそうな品々を日本人達は自らの分身の様に手慣れた様子で扱っていた。

「米軍の特殊部隊に与えられるような装備よりも更に上に行く、日本人ばかりの兵士の集団かあ……一体彼らは何者なんだろう」

ハッキリ言おう。とんでもなく怪しい。

怪しくはあるが、張がこの喫緊の事態を解決してくれる助っ人として頼るだけの集まりではある。ロックはそんな感想を抱いた——  
—少なくとも、見かけに限ればの話だが。

見かけだけではなく中身も伴って欲しい、と密かに祈る。何せロアナプラが言葉通りの意味で滅びるかには彼らに掛かっているのだから。

バラライカ達も彼ら謎の日本人兵士の団体には大いに興味を惹か



れている様子であり、熱い観察の視線を彼らへ注いでいる。

だがその中に、彼らの指揮官である筈の伊丹の姿は見当たらない。

1階に通じる扉が開き、室内に集まった面々の意識が一斉にそちらへと向いた。

「お集まりの皆さん、お待ちせしてしまい申し訳ありません」

入ってきたのはロックが岡島六郎だった頃の職場に居ても違和感が無さそうな風貌の眼鏡をかけた中年男性。

続いてサンカン・パレス・ホテルで顔合わせした日本人兵隊集団の長である伊丹も姿を現したが、その装いは安スーツから一変していた。

ロックも、レヴィも、同じく部屋に集められていたダッチもベニーも目を瞬かせた。

「レーザーブラスターと来たらお次はストームトルーパーのお出ましかよ」

「俺にははどちらかといえばアイアンマンに見えるぜ」

「僕はSF系よりも、むしろダンジョン&ドラゴンズの戦士のイラストにあんな風なデザインがあつたのを思い出したよ」

「……アメコミの主役や悪役であんな感じの衣装を着てるキャラを見た気がする」

四者四様の感想が思い浮かぶような、平たく言うとバイク用のレーシングスーツにプロテクターを追加して更に要所要所を覆う形で細かい装甲片を鱗の様に貼り合わせたような赤と黒の奇妙なスーツを着込み、その上に弾薬を詰め込んだ戦闘ベストを着用した姿だった。スリングで武器を背負い、小脇には髑髏をデザインしたヘルメットを抱えている。

薬中とサイコパスと口より先に銃弾をお見舞いしてくるゴロツキで賑わい、そんな男ども相手にメイドやチャイナドレスの女武侠、

チェーンソーを振り回すゴスロリが纏めて輪切りとミンチと前衛芸術を量産する光景を何度も目撃し、時にはニンジャ以外の表現が見つからない奇怪な人物に拉致されてしまった経験すらあるロックではあるが。

かのようなSFだかファンタジーだかよく分からないデザインの、コスプレという表現で済ませるには異様な迫力を纏った鎧甲冑紛いに身を固めて鉄火場に挑もうという人物を目の当たりにしたのは、今回が初めてだった。

ロック以外のロアナプラの住民も似たり寄つたりの感想を抱いたらしく、伊丹を見る彼らの多くが珍妙な存在に出くわしたその視線だ。

だがよく見てみれば、龍の鱗を思わせる赤黒の装甲はロアナプラに来てから見慣れた独特のくすみを帯びている——何千発もの硝煙に晒され続けた銃身のそれ。

実際に鉄火場で使われた実戦証明済みの装備なのは見る者が見れば分かる。

「中々洒落た勝負服じゃないか、ミスター・イタミ」

「いやああははは、お褒め頂きどうも」

張の揶揄に近い贅辞に、愛想笑いを浮かべて後頭部を搔く以外に気の利いた反応が出てこなかった伊丹である。

鎧姿の伊丹が迷彩柄の化学戦装備の集団に合流すると、にわかには本人達の間でぎわめきが生じた。

「そいつまで持ち出してお前さんに使わせるとは、上もマジでマジの本気って事か」

「今回の一件に絡んでる物がモノだしねえ。使える物は何でも使って構わない分きっちり働けて上のが考えが聞こえてきそうだよ」

そんな日本語の呟きをロックの耳は拾った。

中年男性と伊丹に続き、ノートパソコンとプロジェクターと大型スクリーンを抱えた日本人が部屋に入ってくると、彼らは手際良く集められた者達に良く見える配置で以って設置を行った。

「それではこの場に集まって頂いた方の一部は大まかながら既に把握されているとは思いますが、改めて今回の作戦の説明を立案者であるこの私、江田島がこの場を借りて説明させて頂きます」

江田島と名乗った中年男性は展開されたスクリーンを背に、ロアナプラを代表する犯罪組織の2大勢力の頭目が発する視線に全くたじろぐ様子もなく、集まった彼らへと説明を開始する。

「今回の作戦は2つの段階に分けられます」

スクリーンにロアナプラ近海の海上プラントと、やや離れた位置に浮かぶ哨戒艇の偵察衛星写真が映し出される。

「まず第1段階。ソロモン某の手の者により占拠された海上プラント、この敵拠点へ接近する船舶ならびに航空機をレーダーで監視している哨戒艇の無力化を行います」

スクリーンの画像がPSSM―5型哨戒艇の画像と青写真に切り替わる。

「具体的には我々が用意した秘密兵器と乗り込み要員を乗せたラグー

ン商会さんの魚雷艇が哨戒艇へアプローチを実行。

この際、大きく回り込んだコースを取り哨戒艇の後方を抜けてロアナプラへ帰還する体に偽装し、有効範囲内に哨戒艇を収めましたら持ち込んだ秘密兵器を発進。外部への通信手段とリーダー員が存在する艦橋及び見張り員の一時的な無力化を行います。

そこからは時間との勝負になりますね。艦橋に詰めていた当直員が混乱し外部への救援要請もリーダーによる監視も行えなくなっている間に素早く魚雷艇は哨戒艇へと接舷し、乗り込み要員を哨戒艇へと乗船させ休息中の残りの乗組員を拘束する必要があります」

秘密兵器、と述べた瞬間の江田島の声はどことなく愉し気な震えを帯びていた。

江田島の視線が張率いる三合会（と、彼らが連れてきた船乗り）へと向く。

「拘束した哨戒艇の乗組員はリーダーの範囲外で待機して頂く三合会さんの好意により手配して頂きましたポートへと移送。

入れ替わりにこれまた三合会さんに手配して頂きました元軍艦乗りの皆さんには、本来の乗組員に代わりまして哨戒艇の操船を担当して頂きます」

「なあちよつといいか？」

「構いませんよ、ミスター・ダッチ。何でしょう？」

「その哨戒艇を無力化する秘密兵器とやらについてなんですが、具体的にはどういった代物なんだ？」

聞いている限りじゃ未来からやって来たシユワルツエネツガーそつくりの殺人ロボットでも連れてくるような口ぶりなんだが、運ぶのは俺達の魚雷艇だ。運ぶ荷に関して最低限の情報は提供しておきたい所なんだがな」

ター○ネーターな話題の下りで自衛隊組が一斉に伊丹を見やり、伊丹が「こつち見んな」な表情になったのは余談である。

近くに居てその反応に気付いたキャクストンとレイは首を傾げた。異世界で伊丹が成したキングスレイヤーたつた人の軍隊ごっこ作戦を知らなければ当然の反応と言えた。

「無論お答えしましょう。と言いましてもミスター・ダッチの発言は実の所当たらずとも遠からず、といったところでしょうか」

次にスクリーンに映し出されたのは、一般的なヘリコプターよりは格段に小さいが、それでも全長だけで大の大人を超えるサイズの特大のラジコンヘリに歩兵用の銃火器をポン付けしたとしか表現出来ない機体だった。

ハンターキラー？ とやはり殺人ロボットが暴れる映画に出てくる未来兵器の名前を疑問符付きで呟いたのはベニーだったか。

「観測用無人ヘリコプターに銃火器を搭載した武装ドローン。これが2機に操縦用の機材一式と運用要員及び制圧用の乗り込み要員が、作戦の第1段階の時点でラグーン商会の皆さんに運んで頂く荷物となります」

続いて作戦の第2段階についての説明も行われ、作戦に参加する者達の具体的な役割分担と幾つかの質問を経て作戦会議は終わりを迎える。

語るべき事を語り終えた江田島は背筋を伸ばし、作戦参加者達を改めて睥睨した。

その態度と纏う雰囲気から、江田島が今回の作戦指揮官として派遣されるに相応しいだけの教練と経験を積み重ねてきた現役かそれに近い立場の軍役経験者であると、やはり過去もしくは現在において同類であったバラライカやキャクストンは認識したのだった。

「それでは皆さん——状況を開始しましょう」

Knockin' on Warfare Gate  
e34

——そして現在のタイ沖。

「……こりや驚きだ」

魚雷艇の船内で最初にそう感嘆の呻き声を漏らしたのはベニーだった。

「ああ。僕も全く同じ感想だよベニー」

その隣に控えていたロックもまた首を横に振り、同僚の言葉に心からの同意を示す。

「いやはや参ったね。僕が齒の矯正具を付けてたティーンの頃に起きた湾岸戦争がゲーム戦争だなんて呼ばれてた記憶が有るけど、CNNはこれこそを本物のゲーム戦争と呼ぶべきだと僕は思うね」

魚雷艇の艦首甲板の下に位置する、ぎゅうぎゅうに詰め込めば歩兵の1個小隊程度ならば収納出来るかもしれない位の広さの簡易ベッド付きの乗員用スペースは、自衛隊が持ち込んだ様々な機材によって今や急ごしらえの小さな移動作戦指令室に変貌していた。

折り畳み式の机の上は頑丈な防護ケース入りのラップトップと通信機材で埋め尽くされ、机だけでなく壁際の簡易ベッド上の一部も同

様の機材によって占領されている。

特に目立つのは机の中心に設置された、ベビーベッド並みの大型画面でありながら厚み自体はポルノ雑誌を2冊重ねた程度であり、でありながらシラミの目玉ですらくつきり判別出来てしまえそうない鮮明な画質を映し出す大型液晶モニターだ。

それらから延びる通信ケーブルは乗員用スペース内の機材同士を繋ぐに止まらず、開放状態の水密扉を抜けて部屋の外のみならず上部ハッチも超えて甲板上へと続いている。

机上のラップトップ1台ごとに、ラフな私服姿で一応身分を誤魔化した情報科所属の自衛隊員達が着いている。

ピンと背筋を伸ばしたまま画面を注視する情報科隊員達のすぐ背後に控えるのは今回の作戦の総指揮を執る江田島。彼もまた視野を広く取って情報端末の画面内に映る情報に目を光らせていた。

江田島の両斜め後ろにはバラライカとキャクストンとレイも控え、3人もまたモニターを得物を睨む猟犬の目つきで注視している。

モニターの画面は複数のウィンドウで区切られ、それぞれが別々の視点による映像を中継していた。

「こういうの前に映画で見た事あるよ。ほら、ショーン・コネリーとニコラス・ケイジが共演してた——」

『ザ・ロック』だね。エド・ハリスがアルカトラズ島を占拠するやつ。丁度イギリス人の古強者もあそこに混じってるしピッタリだ」

日本人の兵士はウェアラブルカメラだのアクションカムだのと呼んでいたか。

ただし哨戒艇を目指してゴムボートで接近中の兵隊が身に着けたカメラから送信されてくる暗視モードの映像は映画のそれよりもずっとずっと彩度が高く、ボートと波がぶつかる度に撥ねる水滴も見分けられそうだ。

机を挟んだ向かい側にも自衛隊員が2名居る。彼らもまた画面を注視しているのだが、彼らが見ている画面というのはラップトップ型



の情報端末ではない。

運び込んだ積み荷と乗客で一気に狭さを増した乗員用スペースに、技術者としてはどれもこれも興味を惹かれる代物ばかりを見せられて我慢出来ず興味に誘われるがまま専用の仕事部屋から抜け出したベニーと、これはマズいと思いつつもベニーと同じく興味に負けたロックがベッド側に居る2人の隊員を視界に捉えた時、ロックとベニーは思わず嘔き出しそうになってしまった。

それはまるで、アメコミの登場人物である目からビームを発射する突然変異の超人が能力を抑え込む為に装着する分厚いゴーグルのようだった。

おまけにその手にはどう見てもゲーム用にしか見えないコントローラー。奇妙だが人類工学に基づいた曲線を多用したコントローラーには無理矢理後付けしたとしか見えないスイッチが追加されている。

ゴーグルとコントローラーには甲板上から延ばされてきた通信ケーブルが接続されている。

些か奇妙な姿を前にロックとベニーが怪訝な表情をしていられたのも、ラップトップの画面に映される内容を理解するまでの事だった。

「レイダー各隊。こちらシャドウボウダー<sup>魚雷艇</sup>。甲板上及び艦橋内に変化なし。そのまま接近を継続せよ」

ゴーグルを装着した隊員がヘッドセットで簡潔に報告。

ラップトップの画面には、そしてゴーグルの内部では、攻略対象である哨戒艇へと高速で接近する3隻のゴムボートの姿が空中からの視点で以って映し出されていた。

FPV<sup>一人称視点</sup>ゴーグルを装着した隊員は、現在哨戒艇の周囲をゆっくりと巡回する武装ドローンのパイロットである。

ゴーグルとコントローラーに繋がるケーブルの終点は、数キロもの操作可能距離を実現する為に魚雷艇の甲板へ急遽据え付けられたド

ローン操縦用の通信アンテナだ。ローンのカメラから送られてくる映像を受信すると同時、パイロットが操作するコントローラーからの命令をドローンに伝える役割を持つ。

魚雷艇の甲板から出撃したドローンはまず夜闇に隠れつつ、対空レーダーを海面から僅か1メートル前後という超低空で掻い潜り哨戒艇へ接近。

夜間撮影も対応する高性能カメラの目で哨戒艇の見張り員や艦橋の様子を把握すると、すぐさま攻撃を開始する。

ドローン攻撃と同時に此処まで機材と一緒に運ばれてきた日本人・ロシア人混成の乗っ取り部隊があらかじめ準備しておいたゴムボートを海上に下ろし、哨戒艇へアプローチを行う……これが江田島が考案した作戦の第1段階だ。

『レイダー1、接舷完了』

『レイダー2、接舷』

『レイダー3、これより乗船を開始する』

ガスマスクを装着した兵士達を乗せた3台のゴムボートが哨戒艇の船体にピタリと張り付くように停止すると、事前の打ち合わせ予め組み立てておいた乗り込み用ハシゴを持ち上げた。

ハシゴの上部には頑丈なフックが固定されていて、哨戒艇の甲板の縁や落下防止の手すりに引っ掛けるのに使う。全長が10メートル程度のゴムボートで何十倍何百倍もの排水量を持つ艦艇へ乗り込む為の必須装備だ。

時間との勝負だ。数メートルばかり頭上にある哨戒艇の甲板へ乗り込み要員である兵士達が次々とよじ登っていく。

2キロ離れた魚雷艇で一連の動きを見守るキャクストンとレイがほんの微かに感心の吐息を漏らした。

梯子を使って別の船に乗り込むのは一見簡単そうに見えるが、重装備で不規則な波に揺らされながらとなると難易度はかなりのものがあり、ある程度慣れていなければ命の危険もある。おまけに彼らは自分達のドローンが撃ち込んだ催涙弾で自爆しないよう視界が制限されるガスマスクを装着しているともなれば尚更である。

これだけの動きで彼ら謎の異世界の自衛隊員日本人兵士集団の練度の高さを2人のアメリカ人は理解せざるをえなかった。彼らと比べ反応は薄いものの、それはバラライカも同様だ。

『こちらアベンジャー伊丹。レイダー1は艦橋へ向かう。セイバーとランサーとアサシンは第1デッキ上の乗組員の拘束をしてくれ』

レイダー1を率いる分隊長は伊丹だ。

レイダー2をプライスが、レイダー3をユーリが指揮している。豊富にも程がある実戦経験を踏まえ満場一致の配役。

1つのボートに6〜7名が分乗している。半数が特殊作戦群や西部方面普通科連隊W A Rといった海上作戦に長けた部隊の出身者、残り半数はバラライカの部下で編成されているが、レイダー1にだけ張が連れてきた地元出身者も混じっていた。

大型ディスプレイの画面に分割表示されているウェアラブルカメラは各分隊の指揮官からのものだ。

伊丹率いるレイダー1は艦首側から哨戒艇へと乗船。彼らは艦橋の制圧を担当する。

催涙ガスで艦橋から追い出され、武装ドローンの銃撃も浴びた乗組員達の有様はあざに出血に顔中から垂れ流した体液で酷いものだった。にもかかわらず、死んでいる者は皆無だった。

銃撃した武装ドローン——短翼に積んだH&K・HK417ラ

イフルに装填されていた弾薬が皇宮襲撃作戦にも使ったプラスチックス製の訓練弾だったお陰だ。流血や骨にヒビが入っているらしい者も居るが、頭部に直撃弾を食らったらしい者は見当たらないので命に別状はあるまい。

セイバー<sup>剣崎</sup>達は呻く乗組員達を足で俯せにひっくり返すと、手早く彼らの両手首を強化プラスチック製のジップタイで拘束していった。

迷彩柄の化学防護服と旧ソ連軍の戦闘服の集団の中で異彩を放つ、異世界製装甲服姿の伊丹が艦橋に突入してまず行ったのはドローンが撃ち込んだ催涙弾の始末だった。

未だ刺激性の煙を放つグレネードランチャー用の弾頭を見つけると、無造作に海面へ抛り捨てた。すると開け放たれた水密扉から吹き込む潮風によって、見る見るうちに艦橋内に広がる催涙ガスの靄が薄れていく。

艦橋の空気が入れ替わるまでの間、下層へ通じるハッチを覗いて他の乗組員が異変を察知していないか、耳を澄ませて様子を窺う。

侵入がバレた時特有の、巣を突かれた蜂達が一気に殺気立つ時に似た気配は伝わってこなかった。

一方ロシア人と地元住民は薄暗い艦橋内の至る所に設置された計器類に目を走らせーバラライカの部下達は場所柄故か、操船とはいかなくとも最低限船の計器を読むだけの知識も持っていたー異常な反応を見せている計器が無い事を確認すると、伊丹の肩を叩いてから親指を立てた。

『レイダー1は艦橋を確保した。レイダー2とレイダー3、そちらは配置に就いたか?』

レイ<sup>アップ</sup>ライ<sup>ス</sup>2とレイ<sup>ユー</sup>ライ<sup>リ</sup>3は艦尾左右からのアプローチで乗船を果たしていた。

右舷と左舷に展開した隊員達の内、半数はスリングで吊っていた銃

器を構え、残り半数は銃器ではなく戦闘用ベストのポーチに収めた手投げ弾を取り出し、安全ピンの輪に指を引っかけて状態で合図を待つ。工具や銃剣を使って通風孔の蓋をこじ開ける隊員も居る。

ただし彼ら乗っ取り部隊の装備もまた武装ドローン同様、非致死性の弾薬で統一していた。

メインウェポンはゴム弾や布製のお手玉弾を装填したショットガンだし、これから投げ込もうとしているのは閃光音響手榴弾スタングレネードや手投げ用の催涙弾である。中には暴徒鎮圧用に特地派遣部隊へ導入された強化ポリカーボネート製の小型盾を左腕に装着した隊員も混ざっている。

『レイダー2、準備完了』

『レイダー3、こちらも配置に就いた』

分隊の指揮を執る戦友からの連絡を受けた伊丹は一旦深呼吸をすると、おもむろにゆっくりと顔を護るガスマスクを上へと押し上げた。

鼻をひくつかせる。鼻腔や目の表面がチクチクと若干苛まれるものの、不幸な乗組員のように盛大に悶える程強烈な刺激ではない。

艦橋内の催涙ガスは既にガスマスク無しでも耐えられる範囲にまで薄まっていた事をその身を以て確認した伊丹は、地元住民の姿を探すと彼に手ぶりで合図を送る。

それを受けた地元住民もまず恐る恐るガスマスクを外し、少しばかり咳き込んでから、計器の隣に鎮座していた大型の受話器を手にとって近くのボタンを操作し、それから計器類の中でも異彩を放つ大型の赤いボタンに手を添えた。

伊丹は地元住民に対し大きく頷いてから再びガスマスクを装着し直すと無線機の送信ボタンを押し、乗り込み部隊全員へ合図を発した。

「目覚ましドツキリの時間だ」

次の瞬間、隊員達は取り付いた水密扉を一瞬だけ押し上げて生じた隙間や、船内へ繋がる通風孔へ一斉に様々な種類の鉄の筒を投げ込んだ。その中には艦橋から下層に通じるハッチへピンが抜かれた鉄の筒を放り入れた伊丹も含まれた。

すぐさま水密扉を閉め直した1.5秒後、真つ先に炸裂したのは最も点火秒数が短い閃光音響弾だ。

艦内各所から一斉に投げ込まれ、中国式の爆竹よろしく立て続けに炸裂した閃光音響弾は密閉空間内で起爆だったが為に、特徴的な一瞬の閃光は外へと殆ど漏れなかったものの、下手な銃声よりも強烈な轟音は哨戒艇全体をビリビリと震わせた。隊員達は軍用ブーツの分厚い靴底越しに電気の痺れにも似た振動を感じた程だった。

哨戒艇の乗組員達は文字通り寝床や自分の持ち場から飛び上がった。

鼓膜に痛みを覚える程の轟音が哨戒艇内で反響する中、次に乗組員達を襲ったのは非常時を知らせる耳障りなベルの音。

『弾薬庫で火災発生！　総員持ち場を離れ退艦せよ！　繰り返す！  
弾薬庫で火災発生！』

船の警報装置を作動させた元軍艦乗りの地元住民が現地の言葉で受話器へとがなり立てた。

眠りから叩き起こされた乗組員は素直にその放送を信じ込んでしまった。複数個の閃光音響弾の一斉爆発の時点でただ事ではないのは間違いなく、おまけに船内には刺激性を持つ大量の煙が早くも広がりつつあったのが説得力を補強した。

「船が燃えてやがるぞ!」

航行中の火災は船乗りが最も恐れる事態のトップに立つ。周囲100キロに陸地という名の逃げ場が存在しない海上で起きたとなれ

ば尚更だ。

船ぐるみで悪徳に携わるような者達だ。ダメージコントロールの概念、自分の船を助けようなどという気概など、誰も持ち合わせていなかった。

それでも哨戒艇の構造が体に沁みついた乗組員達は咳き込み、涙と鼻水を流し、半ば窒息寸前になりながらも、どうにかこうにか船外へ出る水密扉まで辿り着くと、這う這うの体で甲板へと這い出た。

そんな満身創痍の乗組員達へ乗り込み部隊の隊員達は手荒く歓迎した。

次々と甲板に引き摺り倒しては乗組員の両手首にジップタイというプレゼントを無理矢理受け取らせて回る。

艦長を含め、事態を彼らが認識する頃には、P S M M—5型哨戒艇の規定乗員数である約50名の乗組員全員が拘束され、乗っ取り部隊の監視下に置かれていた。

死傷者はいない。負傷者もせいぜい脱出時にぶついたり擦りむいたりした軽傷者ばかりだ。付け加えるなら全員が目と鼻と喉の痛みを訴えているが、不徳な副業に勤しんだ結果の自業自得なので放置である。

「何なんだよコイツらはよお……」

「馬鹿野郎、ここいらであんな装備してる連中なんざホテル・モスクワしかないだろ！」

いち早く催涙弾の効果が収まり、ある程度視覚が復活した乗組員の目と声は明確な恐怖で揺れている。

迷彩装備に完全武装の謎の集団もさる事ながら、この界限で旧ソ連軍の戦闘服といえは真っ先に連想されるのはあのホテル・モスクワだ。

ロアナプラ周辺で裏の生業をしている者でバラライカと遊撃隊の恐ろしさを理解していない者はモグリ以下の自殺志願者も同然である。当然哨戒艇の乗組員も例外ではなく、その事を悟った乗組員は自

分達の何がロシア人の逆鱗に触れたのかと震えあがった。

拘束した乗組員の監視はレイダー3が担当。レイダー2はまだ船内に残っている乗組員達が居ないかの捜索を行いつつ、船内中の水密扉と窓を開け放って換気を行っていく。

小型盾を装備した隊員をフロントマンに立たせ、狭い通路をクリアリングしていく手並みは重装備にもかかわらず淀みない。プライスのアクションカム経由で経過を見守るバラライカとキヤクストン、行動を共にする遊撃隊メンバーは自衛隊組の練度の高さを改めて見せつけられた。

レイダー1は最重要区画である艦橋をせねばならないので、哨戒艇内の捜索はレイダー2に任せた。

万が一異変を察知した外部―例えば哨戒艇の雇い主である、15キロ離れた石油プラントを占拠中の聖戦士等―から無線呼びかけを受けた時、すぐに対応出来る様にといい理由もある。

『こちらレイダー2。船内はクリアだ』

『了解レイダー2。船舶無線は静かなままだよ。この船の商売相手が異変に気付いた様子はなさそうだね』

『ならば乗員の入れ替えだな』

「では作戦を第2段階へ移行します。待機してもらっているミスター・張を呼び出して下さい」

魚雷艇では張に集めてもらった元海軍の船乗り達までは乗せきれないので、同じく三合会に用意を依頼した人員輸送用の船に乗った彼らには哨戒艇のレーダーの範囲外で待機させている。

拘束した本来の乗組員は臨時募集の船乗り達と入れ替わりで三合会の船に移し替えられる予定だ。



こうして哨戒艇は誰にも気付かれる事無く、無頼漢と自衛隊によつて拿捕されたのである。

哨戒艇からの人員乗せ換えは暗夜の下で行われた。

強過ぎる光源を使ったせいで海上石油プラント側に異変を察知されるリスクを避けたかったからだ。

三合会が用意した船員を乗せた、同じく三合会が用意した船は哨戒艇の半分程の全長である小型貨物船だった。クレーン付きで甲板中央のハッチから船倉の積み荷を直接吊り上げて運び出せる。甲板上を武装した何人も三合会の黒服が立っていた。

貨物船と横並びにここまで乗り込み部隊と武装ドローンを運んできたラグーン商会の魚雷艇も近付いてくる。

艦橋部のデッキに出た伊丹が赤外線IRライトを点滅させれば、魚雷艇と貨物船は哨戒艇を挟み込む形で左右に分かれた。どちらの船にも暗視装置を装備した自衛隊員が乗り込んでいた。

灯された作業用照明は必要最低限に留められていたがこの手の闇夜での操船に慣れているのだろう。魚雷艇のダッチに貨物船の船長と乗組員は滑らか且つ慎重に哨戒艇の隣へ船を寄せると、すぐさま魚雷艇と哨戒艇、哨戒艇と貨物船の間の空間を何本ものやい綱が飛び交い、船同士を繋ぐ。

続いてラツタルも掛けられるや、まず魚雷艇の移動司令室から抜けしてきた江田島が哨戒艇へと乗り移った。

その反対側では哨戒艇から貨物船へと水兵服と士官服姿の本来の哨戒艇の乗組員が、後ろからはソ連空挺軍姿の兵隊に小突かれ、前からは三合会の構成員に急かさねながらすごと下船していく。

外のハシゴを上って艦橋までやって来た江田島を伊丹は目礼で迎えた。最初にラグーン商会の乾ドックへ姿を現した時とは違い、階級

章といった立場を示す徽章の類を一切合切除いた半袖開襟の海上自衛隊3種夏服へ装いを変えているのは海自の船乗りとしての矜持からか。

「ようこそ江田島さん。今からコイツが江田島さんが指揮する船になります」

「ご苦労様です。こちらの要望で貴方達に骨を折って頂いてしまいましたね。今度はこちらが働きで返す番です」

「江田島さん位の立場になると、この手の船を指揮するのは久しぶりなんじゃないですか？」

「そうですねえ。肩の線が増えるにつれて海の上艦ではなく海の中潜水艦で過ごす方が長くなってしまいましたから、初心を思い出して力戦奮闘させて頂きますよ」

おもむろに江田島は艦橋を見回した。中に飛び込んできた催涙弾に乗組員が燻り出された際の混乱で、艦橋の床には海図やら書類やらポルノ雑誌やらが散乱していた。

中には空になったビールの缶と瓶まで何本も転がっているのを捉えた江田島は、彼にしては珍しくほんの僅かに憤懣やるかたないと言いたげに溜息を吐いて肩を落とすと、

「その前にまずこの場を片付けましょう。前の持ち主達は船乗りの鉄則である整理整頓というものを忘れてしまっていたようですから」

江田島と伊丹が操船に必要な書類を整理し、嗜好品の類は尽くゴミ箱に放り込んでいく間、接舷し合った3艘の各所でも活発な動きが生じていた。

貨物船のハッチが開き、露わになった船倉へクレーンから垂れ下がったワイヤーが下ろされていくと、先端のフックと積み荷である小型コンテナへと掛けられ、ゆっくりとコンテナを引っ張り上げていく。

小型コンテナは先程まで拘束された乗組員が集められていた、哨戒艇後部の40ミリ単装機関砲塔とデッキの間の甲板部へと慎重に降ろされた。すると先んじて乗り込んでいた自衛隊員がコンテナからフックを外し、クレーンを操るオペレーターへ切り離し完了の合図を送ると、コンテナの扉を開けた。

コンテナの中身は幾つもの大型の防護ケース。それらを運び出した自衛隊員はケースの中身も外へ取り出し、手慣れた様子で甲板上で組み立て始めた。ケースに入っていた機材の一部は更に上部のデッキにも運ばれていく。

数十分後、船舶無線用のアンテナと水上レーダーを備えた哨戒艇のマストには、外装に直付けする形で新たなアンテナが出現していた。積み荷だけでなく人員も哨戒艇へ移っていく。現地住民、ロシア人、日本人。人種も立場も多種に渡る。

その中にはルマジュールも含まれていた。哨戒艇へ乗り移る人々の中で黒スーツを纏っているのは彼女だけだった。

旧式の哨戒艇に似つかわしくない使い込まれた、だが明らかに場違い過ぎる程の最新技術が詰め込まれていると見て取れる機材の搬入光景を小柄な拳銃使いが足を止めて眺めていると、おもむろにその首へ腕が巻き付いた。

腕の主がレヴィイと分かると、狩りの前の狼を思わせる鋭い目つきだったルマジュールの気配は目に見えて和らいだ。

ロアナプラでは新顔の部類に入るルマジュールにとってレヴィイは様々な意味での恩人である。説得され、命を救われ、この街についてのあれやこれやも仕込んでくれた女ガンマンの先達をルマジュールは姐ねえさんと呼び慕っている。

「よう。なあに黄昏てやがんだ」

「あつ、姐さん。それにロックの兄さんも」

「やあルマジュール。陸じや急いで出港の準備を整えなきやいけなくて挨拶してなかったからね」

「こつちこそ姐さんとロックさんの所に挨拶に行けなくて申し訳ないっす」

暗いせいか、ルマジュールのトレードマークである黒スーツが普段とは少し違うようにロックは感じた。

「気にすんな。それよか聞いたぜえルマジュール、このオモチャの兵隊トイ・ツルジャイどもとツルんで仕事してたんだって？ 一体全体どうやってこんなG I ジョーも真つ青の連中を引っかけたんだ？」

レヴィとロックの視線がルマジュールと同じく、テキパキと作業をこなす自衛隊員へと向いた。

姉貴分の問いにルマジュールは何とも言えない表情を浮かべながら革手袋に包まれた指先で頬を搔く。

「引っかけた引っかけられたってレベルじゃないっすよ。街を歩いてたらとぼけたツラした街の外から来たお上りさん丸出しの安リーマンに絡まれて、そのまま気が付きや装甲車に乗せられて街の案内役やらされる羽目になってたんす」

「仕事貰えたんなら良かったじゃねえか。いきなり車に引きずり込まれて下の穴に粗末なモノ突っ込まれた挙句、額額に新しい穴増額やして路地裏に捨てられておしまいよりや100倍上等だぜ」

「確かに払いは良いっすけど、それ以上に厄介事の塊なんすよお。姐さん達だつてとつくに気付いてっしょ？」

「それは……まあうん、分かるよ。彼らの戦力も装備も統率も何もかもおかしい事はね」

哨戒艇に運び込まれる機材やそれらを各所に設置し組み立ててい

く隊員、また先程まで哨戒艇鹵獲作戦に参加していた兵士達を視界に収めながら、ロックもルマジュールの意見に同意する。

戦闘用の化学防護装備だという迷彩柄の化学服を着た男達は、甲板の片隅で水浴びの真っ最中だった。水と圧縮空気のタンクを背負った別の兵士が、手にしたノズルから噴き出す水を順番に迷彩スーツへ浴びせて回っている。

何をしているかといえば哨戒艇の乗組員制圧に使った催涙ガスの残滓を洗い流しているのだという。

化学防護装備を着ていない者が防護装備の表面に残った薬剤で被害を受けてしまうのを防ぐ為だ。ガス等の化学兵器が使われた戦場に於ける必須の作業である。対ガス訓練に慣れた自衛隊員達により、同様の作業は催涙弾が投げ込まれた区画を中心に哨戒艇のあちこちでも行われていた。

ベニーも唸る程の尋常ではないスペックを誇る通信機器。

ハリウッドのSF映画が現実になったかのような空飛ぶ武装ロボット。

如何に油断し切っていたとはいえ、現役の軍艦を短時間で鹵獲してしまう極めて練度の高い兵士の集団。

それらのどれもこれもが、メイド共々ロアナプラの裏社会を混乱の渦に叩き込んだ米軍特殊部隊を率いていた指揮官すら驚嘆させる代物揃いときている。

あの米軍の人間ですら、だ——世界一の軍事大国の現役軍人が、ずば抜けた技術と練度によって成り立った集団であるという点以外に何も分からないと断定した、正体不明の組織。

よくもまあホテル・モスクワ 三合会バラライカと張は、こんな何処からやって来てどうやってロアナプラに突如現れたのか分からない、怪しいにも程がある連中と手を組めたものだ。

おまけに両者とも妙に謎の秘密部隊を率いている指揮官らしい、

ロックの目から見ても冴えないサラリーマン風の男を妙に気に入っている様子を見せている。

しかも彼らはロシア人とイギリス人が1人ずつ混じっているのを除けば、全員が日本人なのだ。同郷である筈のロックとルマジュールだからこそ、その衝撃は他のロアナプラの住民よりも一際大きい。

レヴィも同じ疑問を抱いていたようだ。

「ロックよお、あの連中お前ん所の国から来た兵隊だろ。二ホンの軍隊って皆コイツらみたいなサンダーバードの主人公もビツクリのオモチャ使って余所の軍隊にもお構いなしにケンカ吹っ掛けるような特攻野郎Aチームの集まりだったりすんのか？」

「そんなわけないだろ！ どちらかと言えば近いのはあの作品に出てくる救助隊の方だよ」

自衛隊という組織に関してロックの脳裏に思い浮かぶのは、日本を離れる前に西の大都市で起きた巨大地震や首都で発生したカルト集団の地下鉄テロでの救助活動の様子をブラウン管越しに眺めた記憶だ。懸命に崩落した建物から要救助者を探し出し、その場で懸命な救命行為を行う迷彩服姿の自衛隊員は何度もテレビに流されたものである。

逆に言えば、当時一般に流れる具体的な自衛隊の活動内容といえはその程度にとどまっていた。国防の楯としての自衛隊の役割と働きがクローズアップされ日本国民に周知されるようになるには、原作当時の年代 今から更に四半世紀近い時間が必要だった。

少なくとも伊丹達が持ち込んだ装備の数々はロックとルマジュールが母国に居た頃見た自衛隊の活動映像には登場した事が無い装備ばかりだ——大半が未来で開発された機材ばかりなのだからそれも当然である。

「他だと……戦国自衛隊？」

「アタシの中じゃゴジラのやられ役っすね」

「何だつて？」

「いや今のは忘れてくれ。そもそもの話、僕もそこまで自衛隊について詳しいワケじゃないけど、日本の自衛隊は正確には軍隊じゃなかった筈だ」

「ハア？ 冗談だろ。迷彩服着て銃持って戦車乗り回してんだぞ。どっからどう見ても立派な軍隊アーミーじゃねえか」

「そりゃそうだけど、日本という国は憲法9条という法律で他の国と戦う為の軍隊を持ってはいけないしその権利も持たない、だったかな？ とにかくそういう法律が日本には在るんだ」

ロツクが教えた内容に対してレヴィが見せた反応は、開いた口が塞がらないと言わんばかりに目をでんぐり返すというものだった。

「んだよその法律バツツツつかじゃねえか？ NY市警のマツポから散々やっちゃいけないリスト聞かされちゃきたが、弾まないピクルスを売っちゃいけない決まり以上にアホみたいな法律なんざ初めて聞いたぜ」

「そういうお国柄なんすよ姐さん。日本ってのはそういう国なんです」

「そうだ。その筈……なんだけど」

じれったそうにロツクは頭を掻きむしった。

ロツクからしてみればあまりにも彼ら伊丹達についての情報が足りない……という表現は語弊がある。

むしろ逆だ。具体的な立場や所属は決して明言しようとしなが、それ以外の部分はむしろあけっぴろげと言ってもいいだろう。

武力、手札、スタンスを遠慮なく誇示しているものだから、情報過



多のあまりロックは伊丹達の正体を図りかねていたのだった……

Knockin' on Warfare Gate  
e36

——異世界を経由して来訪した第3次大戦後の未来の自衛隊という、逝きつくところまで脳ミソがぶっ飛んだジャンキーの妄言よりも突飛な答えに今のロックが辿り着ける筈もなく。

「そういえば僕からもレヴィに聞きたい事があるんだけど」

話題の矛先を謎の日本人部隊からレヴィへと無理矢理に転換する。

「サンカン・パレス・ホテルで最初に彼らの指揮官らしいミスター・伊丹と顔合わせをした時、何でレヴィとダッチはあんなに身構えたんだい?」

「いやいや、気付いてないんすかロックさん」

真つ先に正気を疑うような声を放ったのはレヴィではなくルマジュールだ。

最低限の灯りの中で驚きに隻眼を見開いている。音楽が好きと自称しているながらマイケル・ジャクソンを知らないと聞かされたかのような目だった。

「そう言っつてやんなルマジュール。このホワイトカラーは姐御や張の旦那のご機嫌を買える位にやよく回るオツムと舌のお陰で生き延びちやいるが、アタシの知る限りコイツ自身はテメエの手でつて意味に限っちゃ相手の血と臓物で汚した事が無い、真正正銘のバージンなや」

「……逃<sup>エスケープ</sup>亡袋の件といい、ロックさんつてそんなんでよく今までこん

な街で生きてこれたつすね。いやマジで」

「わ、悪かったな。荒っぽい事は苦手だし、銃撃戦の時は何時もレヴィに頼りっぱなしなのは僕だって自覚してるから、レヴィにはいつも感謝だってしてるさ。」

「だけどそれが僕の質問に関係あるのかよお？」

「ありもあり、大有りなんだよロック」

レヴィの目がにわかにならなくなった。

海上に広がる闇夜よりも昏い気配が彼女の瞳に宿る——人殺しの目。

「銃だろうが、ナイフだろうが、野球のバットだろうが、何だったら素手だろうが得物は何だっていいし、相手もチンピラだろうが聖人だろうが誰だっていい。」

肝要なのはテメエ自身の手で殺した相手の血を浴びた事があるかどうかだ」

ホットパンツのポケットを探り、クシヤクシヤになったタバコの紙箱から振り出した中身を口に挟む。小さな小さなオレンジ色の灯りが新たに1つ、夜の闇の中に点る。

「1度テメエが殺った人間の血の臭いを嗅いじまうとな、最初は分からなくても次第に判別がつくようになるんだよ。」

目の前に立ってる野郎が同類の人殺しかそうじゃないのか、慣れてくりやたかが2人か3人殺った程度の小物かそれとも血の伯爵夫人エリザベス・バートリも顔負けの血の海にどっぷり浸かってきたシリアルキラナーなのかどうか、つてのを麻薬犬宜しく鼻が勝手に覚えちまうんだ」

ダッチも。

バラライカも。

張も。

あの猟犬メイドも。

ルーマニアからやって来た血まみれの双子も。

かれこれ2度もロアナプラに送り込まれる羽目になった例の米軍も。

悪徳の都から死の都に変貌する瀬戸際に置かれたロアナプラの住民も。

誰よりもレヴィ自身も。

みんな、みんな、みんな、血と臓物と昏い墓穴の奥底から滲み出るかのような死の臭いを漂わせているのだと彼女は語る。

……逆に言えば、ロツクやベニーは（ついでにズツコケグラサン野郎ことロツトンも）今まで直接血で手を汚すような真似はせずに済ませてきた人間だからこそ、伊丹の異様さを見抜けなかったのだとも。

「その臭いってのは1度浴びちまったからにはどれだけ洗い流そうとしても決して落ちねえ。最高級のシルクに挽肉たつぷりのミートソースをぶちまけたようなもんだ。」

おまけに当然の事だがぶちまけられた量が多ければ多い程、浸された時間が長けりゃ長いだけそいつの魂の奥まで穢れよごれと臭いが染みついちまって、そこに在るだけで腐ったドリアンよりもポンポン臭いをバラ撒くようになってしまいうもんなのだよ」

ならば。

あのバラライカと張に一目置かせ、血と硝煙に満ちた路地裏で何十何百もの風穴を拵えてきたレヴィですら初めて死体を目の当たりにした幼子の様に凍りつかせたあの伊丹という男は。

「NYの路地裏から始まってこの糞の掃き溜めみたいな街に辿り着いてから、殺人鬼シリアルキラーから元兵隊エクスミリタリーの殺し屋まで、血反吐のシャワーを頭か

ら浴びてドライヤーの代わりに硝煙でヘアブローをかけてるような連中まで散々拜んできたけどな……」

長口舌から一転、ボソボソと押し殺すようにゆっくりと言葉を紡ぎ、やがて断言という形で放たれた言葉に含まれた感情は、敵愾心の皮を被った畏れであると見抜けてしまったロックは言葉を失ってしまった。

「アタシ達が薄っ暗い墳墓から出てきた死者の国の骸骨なら、あのイタミって野郎は死者の国を丸ごと呑み込んでまだまだ足りねえ程の屍と亡霊の気配を纏わりつかせた死神そのものだ」

鉄塊の様に重たく冷たい声で断言するレヴィに、ロックはごくりと唾を飲み込んだ。

「レヴィがそこまで言う程なのか……」

「だがよロック。イタミとかいう野郎がヤベエのは1人で黙示録の騎士4人まとめて兼任出来そうな墳墓の主の臭いを纏わりつかせやがるからってだけじゃねえ」

「他にも在るっていうのかい!?!」

悲鳴じみた驚きの声を発するロックへ見せつけるように、レヴィはタバコを挟んだ方の手の親指を立てるとトントンと目を叩いた。

「目だよ、ロック。血とはらわたの臭いってのはそいつが付けてる目ン玉にも滲んじまうもんなんだが——……」

心持勢い良くレヴィは紫煙を吐き出した。

脳裏に蘇ったサンカン・パレス・ホテルでの最初の対面時に抱いた感情を振り払おうとするかのような仕草だった。

「あの野郎が一番イカレてるのはな、この街の誰よりも血の気配を纏わりつかせてやがる癖して、あの時ホテルの部屋に集まった誰よりもカタギにしか見えない目とツラをしてやがったのさ。」

このクソツタレな街の歩く死人どもに誰よりも死に近い気配をしておきながら、あの野郎自身は街の外の生者そっくりの目をしてやがるときたもんだ。

「これがイカレてるんじゃないや何だってんだ？」

「……ホテルでの顔合わせが終わった後バラライカさんと話したんすけど、あの人も同じような事を言ってたっすよ。」

アタシらみたいなの血だまりの中でしか生きられないような連中ほど、それを前にしたら恐怖で狂っちゃまうような化け物そのものだ、つてね」

「そんなバケモン相手に感謝祭のプレゼント交換会で一等賞を当てたガキよりも嬉しそうな顔をした姐御もとびっきりの狂人だな。」

「……今の言葉、ぜってえ姐御達の耳に入れんじゃないぞ」

吐き捨てて、レヴィは吸い止しのタバコを暗い海へと投げ捨てたのだった。

魚雷艇に乗っていた情報科の隊員達も先程迄使っていた機材を抱えて哨戒艇へと乗り移った。より大型で内部スペースにゆとりがあ

る哨戒艇へと司令部を移すのである。

動き回っているのは自衛隊員だけではない。バラライカの部下達も荷物の移動や配線の設置に手を貸し、張が集めた船乗り達はこれから自分達が扱う哨戒艇の各機関の点検に余念がない。

後者に関しては張直々に釘を刺されたのみならず、ロアナプラーおつかない女ことバラライカまでもが直接出張つてあの絶対零度の眼差しで彼らの働きぶりに目を光らせているという要因が大半を占めていたからなのだが。

だから問題が発覚し、江田島へとそれが伝えられるまでの時間も極めて迅速であった。

「主砲の弾薬が無い、ですつて?」

思わぬ報告に対する江田島の声には困惑の響きが色濃く含まれていた。

「ええそうでさミスター・エダジマ。さつき見たところ、3インチ砲の弾薬庫に置いてある予備砲弾が本来積んでなきやいけない量の半分もありやしやせんでしたぜ」

訛りが強い伝法な口調で、元海軍の大砲屋だった船乗りは語った。

「この辺りで活動する軍の艦艇は規定数以下の弾薬量で作戦行動するのは認められているのですか?」

「ここいらじゃあ珍しかねえですぜ。補給部で弾薬発注を担当する書類屋が、船の責任者と発注先の担当者とグルんなって書類にや実際の補給分より嵩増しした弾薬代を書き込んでその差額をテメエの懐に呑じまったり、武器屋に捌く伝手がある艦長と乗組員が使わない砲弾を売っぱらっちゃったりなんてえ話はね」

訳知り顔でそう解説してくる元軍艦乗りに―或いは彼自身、その手

の不正をやっていた口なのかもしれない——江田島は彼にしては珍しく眉間に皺を寄せ、頭痛に襲われたかのように手を当てた。

堂々とそのような不正が横行している様を語られた上、江田島達はこれからその砲弾を何発も必要としているというのに、よもやこのような形でとばっちりを食らう羽目になるとは……

そんな江田島の内心が、同座する伊丹も手に取るように分かるようだ。伊丹自身も乾いた笑みを引き攣らせて「マジかあ」と天を仰ぎたい心境である。

「こうなりますと乗り込み部隊発進時に行う砲撃支援は本来の予定より限定的にせざるをえません」

「流石に今から76ミリ砲弾の手配と輸送は間に合いそうにないですもんねえ」

特地派遣部隊に護衛艦隊が配備されていない以上、『門』経由の調達も不可能である。

「どうやら旦那方の所はよっぽどお上品だったようで」

泣く子も黙る三合会の親玉が細心の配慮を払い、あのバラライカと肩を並べて第3次大戦をおっぱじめようという、何者かはサツパリ不明だが只者ではないのは間違いない兵隊達を仕切っている人物がこうも分かり易く困惑している様に、堪らずといった風情で元大砲屋の船乗りは下品に顔を歪めた。煙草のヤニで黄色く汚れた歯が剥き出しになった。

「艦後部の40ミリ砲の方はどうなのですか？」

「そっちも似たようなもんでさ。大砲よりも使い勝手が良い重機関銃の方はたっぷり保管してありましたぜ」

日本ではない文化圏の住人らしく、元大砲屋は両手を肩の高さまで



上げて大袈裟に肩を竦めた。江田島の口から小さい溜息が漏れた。

単なる佐官では異世界への派遣任務という前代未聞の命を選出される筈もなく、狭間や各戦闘団の指揮官に負けず劣らぬ優れた能力と経歴の持ち主だろう江田島も、ギンバイとかそういうレベルではない不正（それも艦の上から下まで真つ黒ときた）に直面するのは初めてだったのだ。

そりやそうだろうなあ、と江田島の珍しい反応を横目に見ながら苦笑いする伊丹である。

自衛隊だって不正が存在しないとは口が裂けても言えない。幸い伊丹が現場に直面した事はないが、悪質ないじめやセクハラ案件は度々世間を騒がせているし、表沙汰になった案件は氷山の一角に過ぎないだろうとも察している。

が、それらはあくまで個人もしくは小規模な集団の範疇の周囲の目を盗んでの行為であり、よもや艦の乗員全体がグルになって犯罪の片棒を担ぐという事例は自衛隊でも類を見ない。

伊丹が一時期戦場を駆け巡ったアフリカは世界でも屈指の貧困蔓延る発展途上国が集合していたから、土地柄上その手の不正など全く珍しくなかったから、この手の話題には耐性があった。

それどころか当時は伊丹達も脛に疵を持つ立場だった関係でまともな補給ルートを持っていなかった為、逆にそうして流れてきた横流し品（及び、それらを調達してきたニコライ）には多分に世話になった身ですらある。故に江田島ほど困惑を表に出す事無く伊丹は悠然としていられた。

「こういう時は逆に考えるんですよ江田島さん。『1発も撃つ弾がないよりはずっと良い』ってね」

江田島の肩を軽く叩いて気遣う伊丹であった……

乗員と積荷の載せ替えが終わると三合会の貨物船は去っていった。

哨戒艇の鹵獲はあくまで下拵えの前哨戦に過ぎず、特攻部隊によるロアナプラ壊滅を賭けた作戦はこれからが本番だ。貨物船と再び合流するのは最重要アイテムの文字通り放射能のゴミから拵えられたダーティボムの回収に成功した後になる。

ラグーン商会の魚雷艇もこの後の本番に参加する為に、哨戒艇の船体側面へとほぼ密着する形で停泊状態を維持していた。

こうしておけば復讐心とクスリでイカれに怒れた父親ことソロモン何某率いる聖戦士どもが海上レーダーなりを運用していても、魚雷艇は倍以上の全長を有する哨戒艇に遮られるので向こうから見えるのは哨戒艇ただ1隻のみ。今のラグーン商会はいわば魚雷艇の姿をした透明人間という訳だ。

そんな魚雷艇の乗組員であるロックは自分達の船に戻らず現在も哨戒艇上に居た。

本番となる作戦は夜明け頃にロアナプラへ使用予定のダーティボムを積んだソロモン配下の密輸用貨物船が聖戦士が無断で居座った海上プラントに合流したタイミングで同時に叩く計画だ。

その際、無頼漢と運び屋とソ連軍の亡霊と米軍の現役軍人と日本人ばかりの謎の武装集団という、呉越同舟と例えるのも烏滸がましい混合部隊は役割毎に4つの集団に分かれる編成を取る。

まず海上プラントを担当する歩兵部隊。コールサインはアルファ。伊丹指揮下の自衛隊員中心で編成されている中にキヤクストンとレイの米軍組が混じる形だ。ゾディアックに分譲して目標施設へとアプローチを行う。

次に貨物船を担当する歩兵部隊。こちらのコールサインはブラ

ボー。バラライカ率いる遊撃隊主体に武装集団からイギリス人とロシア人他、自衛隊員も数名が加わる。

ブラボーを貨物船まで運ぶのがラグーン商会の役回りだ。これまでの運び屋稼業で刻んできた最速記録を塗り替えんばかりに一等かつ飛ばしてバラライカ達を送り届けた後は、貨物船とプラントの周りを駆け巡って遊撃して回る予定。コールサインもそのままラグーンだ。

最後に哨戒艇。魚雷艇からより大型なこの船へ移転した移動指揮所はシャドウボーダーのコールサインそのままに、情報収集のみならずより大規模な火力支援を担当する手筈となっている。

不良軍人から取り上げたこの船は、同時に作戦の成否を左右する重要な役割も演じる予定だった。

本番開始まであと1時間程といった時分か。漆黒の水平線は未だ明るみそうにない。

哨戒艇に乗る者達は今も忙しく作戦準備に動き回る者達と、後部甲板に集まって待機している者達に二別されていた。

前者は哨戒艇の操船を担当する船乗りや情報管制等を担当する後方支援要員である。

哨戒艇の乗っ取りにも使い、この後の本番でも欠かせないゴムボートを改めて点検している者が居れば、哨戒艇備え付けの兵装で潮風を浴びて所々表面に錆が目立つM2重機関銃の動作確認に余念が無い者も居る。

その多くが例の武装集団に属する日本人であり、ロアナプラに屯する規律のきの字と無縁な十把一絡げの荒くれ者とは真反対の、キビキビと規律だった作業工程と背筋の伸びた彼らの物腰はやはり統制の整った軍人のそれだと、横目で観察していたロックは改めて確信していた。

「しかしこれだけの装備を時間もなかったらどうにもよくもまあ」

哨戒艇に移動した支援要員の日本人達も、万が一この後の作戦中に核廃棄物の容器が破損した場合の汚染に備え、今は哨戒艇乗り込み部隊が着込んでいたのと同じ迷彩柄の化学防護服を纏っている。

意外というか、気前が良いというか。この異様な日本人武装集団はご丁寧にも三合会に集めさせた現地徴用の船乗り達の方まで防護服を用意していた。

よくもまあ化学防護服などというこの国の軍隊でも数を揃えるのに手間がかかりそうな代物をこの短時間で、それも自分達の方だけでなく他人の方までこれだけの数をどこから持ってきたのやらと、疑問も驚嘆も尽きない。

彼らの分はのっぺりとした鼠色をしていて、日本人達が主に着ている迷彩柄の方と比べると野暮ったさを感じさせたが、汚染に対する防御力に差は殆ど無いという。

この作戦が三合会とホテル・モスクワが総力を挙げての共同戦線を張らなければならぬ程の厄ネタであるのとつくの昔に理解していた賢明な彼ら船乗り達は、日本人達の申し出を2つ返事で受け入れた。

初めて着た化学防護服の風通りの悪さ(毒ガスや汚染物質の粒子も通さない為の装備なのだから当然だ)に船乗り達は早くも辟易した様子で、船乗り達は悪態を吐きながらしきりに額や首筋に浮かんだ汗を拭う姿が目立つ。

ロックは以前ケーブルテレビで見た、猛毒のウイルスだか化学兵器が流出したとかいうプロットのハリウッド映画を思い出した。軍艦のあちこちで迷彩柄と鼠色の防護服姿の男達が動き回る光景は、汚染された田舎町を軍が隔離する場面を彷彿とさせた。

実は防護服提供の申し出はラグーン商会も受けているが、彼らは彼らなりの理由から申し出を辞退していた。

『もし仮に俺達がここにくたばる運命だとしたら、まず猛毒のクソじやなくキャビンに飛び込んできた銃弾だか砲弾だかのせいでそうなるのが先だろうよ。ならそんな御大層なスーツの世話にならなくても大差はないさ。気持ちだけ受け取っとくぜ』

『僕もダッチと同意見だね。死刑場グリインマイルへの道を往かなきゃならないなら普段通りのお気に入りの格好で往く主義なんだ。

そもそも要はそのスーツの世話になるような事態になる前に終わらせてしまえば良いだけの話なんだからね。そうだろう？』

『ああん？ 誰が着るかよんな極厚コンドームのお化けみたいなもん。動きが鈍っちゃう。

それとも何か？ アタシがどこぞのですだよみたいのにドレス着て厚化粧しなきゃ鉄火場に飛び込めないようなヤツに見えるってのか、おお？』

『待って待って、彼らは善意で申し出てくれてるんだから噛み付くくなつてばレヴィ。

……え、僕？ 申し出は有難いですけど、放射能よりも着慣れていないモノを着ているせいで咄嗟に逃げたり隠れるのが遅れてしまう方が僕には死活問題ですので……ええ、はい、すみません』

そうそう。装備といえば日本人達がロアナプラの悪党どもの為に用意してくれた装備は、ラジコンの物騒な化け物みたいな代物や対放射線汚染の他にも色々な物があった。

喧嘩腰な態度を見せたレヴィも、今頃は日本人達が貸してくれる事になったおもちやの具合を鼻歌でも奏でながら確かめている最中だろう。

前部甲板の方で自衛隊員が槍投げのようなフォームを取っているのをロツクの視界が拾った。

軽く助走をつけて、翼の端から端まで子供の背丈ほどもある特大の

ブーメラン状の物体が隊員の手から投げられる。

海上へと投げられた存在——未来では2011年に運用が開始されるJUXS—S1と呼称される全翼機型の偵察ドローンはバイブレードの振動を思わせる動作音を発しながらふわりと高度を上げ、夜の虚空へとあつという間に姿を消した。

宇宙服モドキから剣呑過ぎるラジコンまで、まるで物騒な兵隊向けにカリカチュアされたオモチャトイザラス専門店みたいだなと、ロツクは彼らに感嘆させられてばかりだ。

「本当に何者なんだろうな、彼らは」

思わずそんな言葉が口から漏れてしまう程に。

本番に備えての用意に動き回る者達とは対照的に、あまり動きを見せず後部甲板に集結している男達は貨物船と海上プラントに乗り込む戦闘要員だ。

身に着けていく装備と武器に不具合が無いか、装備品に抜けが無いか確認を終えた彼らは仲間内で雑談に興じて緊張を和らげたり、その場に腰を下ろして静かにその時を待っている。

ロツクの視線が後部甲板の最奥に立つ2人の人影へと吸い寄せられた。

片や愛用のミリタリーコートの下を高級ブランドのレディーススーツから遊撃隊の部下達と同じ旧ソ連空挺部隊の戦闘服へと装いを変え、金の星の帽章が縫い付けられた青のベレー帽に生気の薄いブルンドの髪を押し込んだバラライカ。

片や日本人達と同じく森林迷彩の化学防護装備の上から各種弾薬と個人装備を多数収納した戦闘ベストを装着し、腰にガスマスクをぶら下げた確かプライスという名前のイギリス人。

暗い海上かつ若干距離があるせいもあってロツクの位置からでは2人が何を話しているのか、そもそも会話をしているのかそれとも無言で佇んでいるだけなのかすらの判別すらつかなかった。

しかし性別の差はあれど、見るからに過酷な戦場を戦い抜いた古強者の気配を振りまく2人が並び立っているのである。

それだけで生命の存在を許さぬ絶対零度の真空空間じみた領域が形成されているようで、イギリス人の仲間の日本人兵士達やバラライカの部下の遊撃隊は遠巻きに成り行きを見守る事しか出来ずにいるらしい。あの副官ボリスですら、だ。

興味を惹かれはしたが。流石にそんなおつかない空間へ物見有山しに近付く度胸はロツクは持っていなかった。詮索屋の自覚はあったが蛮勇を犯すつもりはない。

視線を後部甲板から外してぐるりと哨戒艇の船上を改めて見回した。

今度は薄闇の中でオレンジ色の小さな光が灯つたのをロツクの瞳孔が捉えた。

後部甲板から1段上の高さに位置するブリッジの裏手、レーダーマストの根元で1人一服していたのは伊丹だった。マスト周りでの作業は終わっているのか彼の周囲には人が居ない。

ロツクにとっては艦尾方面で佇むソ連軍の亡霊と髭面の老兵よりは、ずっと気圧されや気後れを感じさせない人物だ。

「物は試しに当たって砕けてみる、か？」

己に言い聞かせるように嘯いて、ロツクは伊丹が佇んでいる場所へと上がる為のハシゴへと歩み寄る。

ラグーン号の甲板に居たレヴィは伊丹の下へ向かい話しかける  
ロツクの姿を発見し、あのバカの悪い癖が出たと云わんばかりに肺の  
中身を大きく吐き出し、額を押さえて夜空を仰いだのだった。

——そしてロアナプラは夜明けを迎え。

「江田島二佐。目標A海上プラントに接近中の貨物船をUAVが発見しました。船  
体の特徴と表記された船名から情報にあった目標Bに間違いありま  
せん」

「分かりました。全要員へ通達をお願いします——これより第2段階  
の状況を開始します」

悪徳の都の存続を賭けた戦いが今、始まる。



国内情勢の変化と共同運営していた日本の大企業が経営難に陥った事で稼働が停止し、タイ沖にて放置状態にあった筈の海上石油プラットフォームは、数日前から招かれざる剣呑な男達の拠点として本来とは別の役割を与えられていた。

海上に浮かぶ四方形の鋼鉄の城が稼働していた頃、プラットフォームの運営を総括する責任者用の個室として宛がわれていた部屋。

ソロモン・ハキマンは窓も扉も閉め切りだったその部屋の中心にて、肥満体に見せかけて同世代の平均よりもずっと太い筋繊維に覆われた大柄な体軀を丸め、ひたすらに組んだ手へ額を押し当てた姿勢のまま動かずにいた。

まるで熱心に神へ祈るかの様に。

或いは深く懺悔する罪人の様に。

実際の所ソロモン・ハキマンという男は心底神を憎む金と暴力の信奉者であり、罪人ではあつても犯した罪は神への懺悔ではなく、司法関係者への鼻薬か鉛玉で解決出来るものと信じ実際にその通りにしてきた悪徳の体現者であつた。

部屋にはソロモンを取り囲むように何十本もの蠟燭が立てられ、彼が首を垂れる先に置かれた台にもまた何本もの蠟燭と、花束と、酒瓶と、幾つもの写真立てが祀られている。

そこに特定の宗教の象徴アイコンとなる像や祭具は存在しなかったが、独特の厳かな雰囲気と恭しく祀られた写真というそれらを傍から見た誰

もがそれを墓標だと認識するだろう。

写真立ての中に移っているのはどれも同じ人間……ソロモンと彼の息子だった。

分厚い掌に抱えられた、生まれた直後の赤ん坊の写真。生誕1歳を祝うパーティーに招いた当時の部下や愛人と一緒に取った集合写真。息子が小学生程度の頃、別荘でのバカンス中に記録した写真。最も新しい写真は息子がフィリピン有数の名門大学に見事入学した時に撮影した時のものだ。

息子がおかしくなってしまったのはこの頃からだ。もっと具体的に言えば、息子が大学の専攻にイスラム教を選んではまってから。

国教が仏教かイスラム教の2つに大別される東南アジア各国に取り囲まれる中でフィリピンは唯一カトリックが主体のキリスト教国家である。

最初は母国では少数派だからこそイスラム教に興味を持ったのだと、入学直後の食事の場で息子は語っていた。

父親であるソロモンも当初は息子の専攻に然程監視をしようとはしなかった。暴力だけでなく算盤にもそれなり以上の才能を持ち合わせていたソロモンだったが、幼少よりイスラムで育ちそのまま裏社会をのし上がってきた彼は学び舎とも学問とも無縁の人生を歩んできたからだ。

若かりし頃のソロモンには学校に通う為の金も社会的身分も持っていないかった。彼の息子はそのどちらも持ち合わせていた。

自分には出来なかった事を息子に味わわせまいと、たつぷりと寄付金を積んで息子を大学へ送り出したソロモンの行いは、嘘偽りない父親としての愛情の発露には違いなかった。

だからソロモンは知らなかったのだ――

大学という空間が若さが生み出す情熱と、体力と、無邪気な浅慮さに満ち溢れた学生に目を付けた勧誘役《リクルーター》が跋扈する、過激派の温床と成り果てていた事など。

例えば西ドイツでは西側資本主義への反感を持った学生と当時冷戦全盛期の東側諜報機関が結びつき、後にドイツ赤軍を名乗った過激派学生は1998年に解散するまで大企業から政府機関に至るまで襲撃や有力者の誘拐を繰り返し、多大な犠牲者を齎した。

日本では警官隊と幾多もの武装衝突を繰り返した全学共闘会議に関与した新左翼の若者達がやがて日本赤軍を結成した。分裂や内部粛清を繰り返しながらも、東側諸国や中東過激派と連携した日本赤軍構成員はハイジャック・爆弾テロ・籠城事件を引き起こし、日本のみならず世界中をも震撼させた。

アフガニスタンを仕切るタリバンも、元々は進行してきた旧ソ連軍を退けた聖戦士ムジャヒディンに感化されたイスラム学校の学生達が発端となった勢力であり——ソロモンの一人息子が入学した大学で出会ったイスラム教の導師イマームこそ、当時はアブ・サヤフの勧誘役を務めていた元タリバンであった。

裏社会を生きる間に犯罪組織の運営に求められる知識と技能に関しては自然と身に着けてはいた。

かのような人種・国・宗教などといった主義主張を振りかざす者達については無知同然だった。

ソロモンの組織はセンデロ・ルミノソやコロンビア革命軍のように思想をお題目に掲げて犯罪で金を稼いだりはしない、純粋な営利団体としての側面が強かった。ドル札とペソ紙幣に描かれている人物の名前程度は知っていてもレーニンや毛沢東の名前はスラムでは聞いた事が無かったし、興味も全く持たなかった——それがスラムで何の役に立つ？

アッラーについての認識も似たようなものだ。イエスとマリアの名前は知っていた。ソロモンの組織にオイタをした愚か者が命乞いをする時に大抵はその名を唱えていたから嫌でも覚えていたのだ。

気付いた時にはもう遅かった。大事な息子はソロモンには理解出来ない主義主張を、熱に浮かれた目で唱えるようになってしまった。従順なイスラムの民は今こそ西洋が持ち込んだキリスト主義の軛から解き放たれなくてはならない？ 父さんもアツラーの為の聖戦に加わるべきだ？

お前は何を言ってるんだ？ アツラーに祈りを捧げたら金貨が空から降ってくる？ でもいうのか？

暴力こそが神だ。金こそが神だ。権力こそが神だ。スラムからここまで成り上がった手段と原動力こそがソロモンにとっての神だ。父と息子が断裂するのは必然だった。

しばらくして、息子は父親の前から姿を消し。

次に消息を掴んだ時には、完全にアブ・サヤフの構成員としてバシランにて政府軍との戦いに身を投じていて。

そして—— 息子は死んだ。殺されたのだ。

フィリピン政府に重要犯罪者として指名手配されている立場上、政府機関に更なる介入の理由を与えぬ為に下手に息子を戦場から連れ戻す人手を動かせず懊悩していた矢先、バシランで大規模な戦闘が起きたと買収した現地兵士から情報が流れて来た瞬間、ソロモンは激しい胸騒ぎに襲われた。

予感の中し、現地軍は放棄された訓練キャンプや現地軍の基地に通じる道路で多数の戦闘員の死体を発見し……その中にソロモンの息子の死体も在った。

まず嘆き悲しんだ。天を仰いで涙を流し、慟哭の嗚咽を誰憚る事無く漏らした。

そこに邪魔者は等しく惨たらしく排除してきた無慈悲な犯罪組織

の首領としての姿はなく、善良な人々と同じように、突然の悲劇に打ちのめされた一人の親としての姿だけがあった。

息子の写真を見返してはまだ偏った宗教観という毒に浸かる前の思い出を反芻し、その度に押し寄せる絶望をラム酒で無理矢理飲み下し、手下達の困惑を余所にやるせなさを酒瓶を叩きつけ砕く事で誤魔化す日々を何日も、何日も続け。

何十本目かの酒瓶をラツパ飲みしながら散らばった家族写真を探っていた指先が触れたのは、検視台に乗せられた息子の亡骸の写真。

検視結果では炎上し引っくり返った車両に閉じ込められ、生きながらゆっくりと焼かれて息絶えたという。

かつてのソロモンと同じスラムに屯する飢えに飢えた野良犬のような目をした貧困層の同年代とは正反対の、明るい希望と生気に溢れた顔は半ば炭化するまで無惨に焼け爛れ、高熱によって変質した眼球は何も映していなかった。

気が付くと、酒瓶は投げ付けられるよりも前にソロモンの手の中で砕けてしまっていた。

破片で傷付いた拳の中から赤い血が滴り落ちる。息子はもう、血を流す事も出来ない。

——息子は何故死んでしまった？

——誰かに殺されたからだ。

子供を失った事で死んでしまった父親の魂の一部を別のモノが埋めた。

それは復讐心と呼ばれる劇薬だった。

悲しみの次にソロモンが抱いたのは怒り、否、怒りを通り越した憎

悪だった。

家族を奪われた男がすべき事は決まっている、血の報復だ。

フィリピンの裏社会を牛耳る影響力を余すところなく活用して情報を集めた。買収したフィリピン軍と警察、果ては情報機関の狗も脅し、或いは糸目を付けず金を払って当時の情勢を調べさせた。

そしてソロモンは息子を死に至らしめた者達の正体と経緯を遂に知ったのだ。

——当時アブ・サヤフを含むイスラム過激派が総力を挙げて実行しようとしていた連続テロの計画表を、かの悪名高き犯罪都市ロアナプラの三合会を入手してしまった事。

それがCIAへと売りつけられ、魚雷艇を駆使する運び屋が配達に雇われた事。

争奪戦の最中、計画書奪還に戦闘員だった息子も送り込まれ……運び屋に撃退され戦死した事まで、当時その場に居たアブ・サヤフの元構成員を見つけ出せたお陰で明らかになった。

「ラグーン……三合会……ロアナプラ……そしてアメリカ」

ひとつひとつ、魂へ刻み付ける様に息子の死に関わった存在を口にする。

ラグーン商会？ 国を股にかける華僑ども？ 悪党達の楽園？

世界一の超大国？

「誰だろうと許してたまるか……っ！」

そんなの知った事か。

何者であつても俺の息子を奪った存在に報いを受けさせる。  
どんな手段を取つてでも。

魂は復讐心に焼き尽くされた。

だが復讐すべき対象が組織や街に収まらず国一つ滅ぼすには、フィリピン周辺には組織の手が深く浸透している反面東南アジアから外

との繋がりが薄い己の手札だけでは足りないかと正しく見積もる程度の冷静さも残っていた。

人でも、資金も、武器も、コネクションも、何もかも。ならばそれを持つている人物に繋ぎを取ればいい。

ソロモンは元構成員を仲介役にアブ・サヤフという組織の設立者のバックボーン……ムジャヒディンと世界中に散らばったイスラム過激派ネットワークに接触を試みた。

そしてソロモンは息子の命が奪われるに至った一連の騒動に深く関わる、革命闘士を名乗る日本人と引き合わされ――

Knockin' on Warfare Gate  
e38

「ボス。パキスタンからの船が到着しました。日本人がボスと至急話  
したいと言ってます」

部屋の外で護衛に立っていた部下がソロモンに呼びかけた。海上  
プラントに配置された戦力の多くを占めているのはソロモンが集め  
た者達だ。

ソロモン独自の考えとして、身を護る為の備えに糸目をつけるべき  
ではないという方針を取っている。チンピラ時代に買ったばかり  
だった格安サタデーナイトスベンヤルの粗悪拳銃が1発も撃つ前に壊れてしまい、仕方なく生  
まれ持った優れた体格任せに襲ってきた相手を壊れた拳銃で殴り殺  
さねばならなくなった苦い経験から得た教訓だった。

復讐に全霊を傾ける以前から、抗争相手に限らずフィリピン軍にも  
対抗出来るだけの装備を片っ端から掻き集めていた。中には軍や警  
察でもほとんどお目に掛からない独自の装備も手先が器用な職人に  
ソロモンの分も含めてオーダーメイドで用意させ、直属の護衛に運用  
させている。

臨時の墓標を離れて外へと出る。水平線を照らし始めたばかりの  
朝焼けが瞳孔に突き刺さってソロモンは目を細めた。

掘削技術者の代わりにソロモンが用意した手下と幾何かの聖戦主  
義者が居座った海上プラントは、貨物船の到着によって早朝にもかか  
わらず喧騒が訪れていた。

補給船から海上プラントへ積み荷を移す為の大型クレーンが唸り  
を上げ、吊り下げられたコンテナや機材を脇や背中に銃を提げた男達  
が誘導を行う。放棄された海上構造物に滞在する為の生活物資以外



に、火気厳禁の注意書きが掛かれた武器弾薬の箱や航空燃料用のドラム缶があちこちに積まれている。

海面から数十メートルの高さに位置する通路を歩いていると、潮気と鉄の入り混じった臭いがソロモンの鼻を擦った。

頭を落下防止の柵の外へと向ければ、鋼鉄の大型構造物を支えらる程巨大な浮力タンクのほんの目と鼻の先に錨を下ろした貨物船が目に入る。

全長100メートル強の中型貨物船。露天でコンテナ積みも可能な観音開き式の甲板を備えたタイプで、今は海上プラントへ積み荷を移す為にその機構が展開され、内部船倉の様子が高所に居るソロモンから見下ろす事が出来た。

貨物船と海上プラントの周りでは何台もの小型のモーターボートがまるで獲物を包囲するサメの集団の様に海面を走り回っている。どれも武装した数人の戦士を乗せたモーターボートの群れは実際にはその逆で、積み荷の移し替えで身動きが取れない貨物船を守っているに過ぎない。

貨物船上の各部にもAKだのRPKだの軽機関銃RPGだのを抱えた1個小隊を超える規模の物騒な男どもが水平線の向こうに警戒の視線を向け、あるいは始まったばかりの移し替え作業を見守っていた。

そちらは主にクワイヤーを頭に巻き付けた戦闘服という姿で一されており、イスラム過激派の聖戦士の所属である事を示している。

かのような厳戒態勢と小規模な陸上競技なら行えそうなだけのスペースを持つ船倉に反して、中に置かれていた積み荷はたった数個のコンテナだけだった。

だがこれこそが、ここまでの嚴重な警備を敷くに値するに相応しいだけの重要性を持つ代物である事はソロモンも理解はしていた。

「ヤツは何処に居る?」

「食堂でボスを待っています……ボス、ヤツは自分の兵隊を引き連れていきます」

負の感情を押し殺している事がありありと滲む声でソロモンが問うと、部下も警戒を隠さぬ声色で告げた。

貨物船の方では船倉内へと垂らされた会場プラント側クレーンのワイヤーが、作業員の手によって念入りにコンテナへと掛けられている最中だった。

固定完了の合図を受けたクレーン操作のオペレーターが移動を開始する。ゆつくりとコンテナが船倉の床から離れると、見た目以上の重量があるらしいコンテナのせいでギシリとワイヤーは軋み声をあげた。

「来たな」

ソロモンを待ち構えていた日本人が発した声もまた穏やかならざる響きを帯びていた。

大きく後退したM字型の生え際といい、前が留められていない戦闘服から突き出た腹といい、一見似合わない仮装をした冴えない中年太りの男だが、細められた白目から漂う眼光はソロモンとはまた別種の血みどろな鉄火場を生き抜いてきた者達にしか放てない冷酷さを帯びている。

虚偽を一切認めぬ口調で以って護衛を引き連れた日本人は問い質した。

「お前さん、勝手に此処やあの街に置いた戦力を動かしたな？」

ソロモンの返答は舌打ちだった。言葉を交わす事も忌々しいと雄弁に語る剣呑な目を日本人へと向けるばかり。

「お前さんは俺達がレバノンやアフガニスタンから呼び寄せてロアナブラに潜伏させていた戦力どころか、よりにもよってパキスタン軍の同志から入手した貴重な散布用のヘリまで勝手に投入して街で暴れさせたそうじゃないか。」

その結果が何だ、兵隊の殆どが返り討ちに遭いヘリまで撃墜された挙句、散布の有効性を確認する為のシエルターまで街のヤクザどもに見つかって作戦計画書も一切合切が連中に渡っちまっただと散布の有効性を確認する為のシエルターまで街のヤクザどもに見つかって作戦計画書も一切合切が連中に渡っちまっただと？」

失策だ。幼稚園に通う子供でも理解出来る無用の大失敗だ。

「大方自分の息子を殺した仇を自分で縊り殺したくて仕方がない余り、計画実行まで待ちきれなかったって辺りか？」

家族の——日本人の口からその単語が出た瞬間、ソロモンのこめかみが痙攣した。

凶星か。頭痛を堪える様に細い眉根を歪め、眉間を揉んだ日本人の口から重い溜息が漏れる。

(ヘタに下手人の具体的な情報を教えちまったのは失敗だったか)

同時にこうも思う。俺という奴は復讐に燃える父親とはとことん相性が悪いみたいだ、と。

「今回運んできた積み荷が此処に届いて計画通り散布に成功すれば、お前さんの息子を殺したあの街の人間は数日の間に放射能の毒に犯されて悶え苦しみながらくたばってただろう。世界中からロクデナシが集まるイカれた掃き溜めの街ごと、な。」

だが辛抱し切れなかった結果がこのザマだ。今頃俺達の計画書を見つけたヤクザどもは火事に追い立てられたネズミ宜しく街から逃

げ出す傍ら、以前宜しくアメ帝に白紙の小切手を切らせる算段を弾いてる——」

途中で日本人は考え込む素振りを見せると、以前の苦い経験から別の推測を付け足した。

「それとも今、この瞬間、ケンカどころか絶滅戦争を吹っ掛けてきた俺達を逆に殲滅しようとかこっちに向かってきてる真っ最中かもな」

「だったら望むところだ。今度こそ息子が味わった苦痛の1000倍を与え、どれだけ罪深い事をしたのか俺自身の手でヤツらに教え込んでやる」

闇より昏く、マグマよりも煮え滾る憎悪でソロモンの瞳が輝きを発する。

危険な光だった。この土地で失ったかっつての同志も同じ輝きを……復讐の炎を宿し、最後は制御出来ずに危うく多くの同胞を半ば道連れに導く形で自らを焼き尽くした。

だから日本人——志を共にする者達からはタケナカと呼ばれる聖戦士を率いる指揮官は、首を横に振る。

「論外だ。今の俺達がしなきゃいけないのはこの場所での用事を済ませた後、どうやってアメ帝とその飼いだどもの目から逃れた上で今後にも計画を継続するか、それとも引き返すかを早急に決める事だ」

「計画は続行だ。あの街の野良犬どもを雇ったアメリカ人どもも同罪だ！ ヤツらにも報いを受けさせる、絶対に、絶対にだ！」

「……こっちが用意したアフガン産の麻薬を自前の売買ルートを持つお前さんが、ロアナプラ以外の方々でも捌いてくれたお陰でヘリや放射線物質を手に入れられるだけの金を調達出来たのは事実だし、同じルートを使って街の連中の目を掻い潜って兵隊やシェルターを立てる為の資材を直前まで気付かれずにあの街へ運び込めたのもお前さんの働きがあつてこそだ。」

だがな、それとこれとは話が別だ。

ソロモンさんよ、アンタが勝手に動いたせいで無駄死にしたのはオタクがフィリピンから呼んだ自前の部下じゃないんだ。大義の為の戦いに俺達が集め、もし計画発動前にこちらの存在に感づいたあの街の犯罪者どもが武力闘争を仕掛けてきた場合の備えとして置いていた我々の闘士だったんだ。

それをアンタの暴走で——」

「何が正義だ！　大義なんてクソツ喰らえだ!!」

次の瞬間、激情を弾けさせながらソロモンがタケナカに跳びかかった。タケナカが連れていた護衛が反応出来ない位の身のこなしと剣幕であった。

さながら猛牛宜しくソロモンの巨体がタケナカへと襲い掛かり、放置されたテーブルを撥ね飛ばしながらソロモンが掴みかかった勢いに押され、タケナカの背中が食堂の壁へと激突する。

腕も太ければ指も太い麻薬王の両手が使い古された戦闘服の胸ぐらを鷲掴みにしながら絞り上げると、タケナカが履く戦闘靴が地面から10センチばかり浮き上がった。背中与襲った衝撃と喉元を襲う圧迫感にタケナカの口から呻きが漏れる。

遅ればせながらタケナカの護衛が慌てて提げていたAKの銃口をソロモンへ突きつけようと身構え、タケナカ側の動きを阻止しようとソロモン側の人間も武器を持ちあげた。

破局への連鎖反応を寸でのところで止めたのは、締め上げられ続けながらも声を張り上げたタケナカだった。

「止せ！　銃を下ろせ！」

「し、しかし司令官」

「命令だ、いいから銃を下ろせ！ 俺は大丈夫だ！」

息苦しさに眉根を歪めながらもタケナカが繰り返すと、渋々といった様子ながらも聖戦士達はAKを下ろす。それを見てソロモンの部下も持ち上がりかけだった銃口ををゆっくりを下へ向け直した。

「お前達余所者がほざいた大義とやらのせいで只の学生だった俺の息子はおかしくなった拳句、どことも知れないジャングルの中でアメリカが雇ったチンピラの手で焼け死んだんだ！」

浅黒い肌をドス黒く染め、歯を浮き出しに吼えるソロモンの顔は、狂った獣以外の形容詞が見つからない表情をしていた。

「本当なら貴様達もこの手で生きたまま手足を引き千切って上と下の穴に詰め込んでやりたい所だがな、それを我慢して手を貸してやっているんだ。

いいか、2度と俺の前で大義だの聖戦だの2度とクソっ下らない単語を出してみる。生きたまま手足をいだ上で火にかけて、あの日死んだ息子が受けた焼け死ぬ苦しみを貴様にもたつぷりと味あわせでやる！ 分かったか!!」

タケナカは、己が同じ失敗を繰り返した事を悟った。

自らの手で同志と想っていた仲間を撃たざるをえなくなった時もタケナカは大義を口にし、そして説得は失敗したのだ。

全く俺ってヤツは——そう自覚してしまうと、自然とソロモンに抵抗する気力が手足から抜け落ちていった。

「……分かったよ。すまなかったな、謝るよ。オタクは息子さんの復讐の為だけに俺達に手を貸す。そういう関係だったな」

文字通り人生に疲れ切った中年男性にしか見えない雰囲気になったタケナカが詫びると、幾分冷静さを取り戻したソロモンの手がタケナカの胸元から離れた。戦闘靴の底が床と感動の再会を果たした。タケナカとソロモンの間だけでなく、両者が伴った護衛達の間にも広がっていた一触即発の空気が僅かながら緩んだその時、食堂の扉が激しく叩かれた。

入ってきたのはタケナカ側、クローフィーヤを頭に巻いた聖戦士。

「司令官。至急来て頂けますか！」

採掘塔を除くと海上プラントで最も高い階層までタケナカとソロモンを案内してくるなり、戦闘員は双眼鏡をタケナカへと手渡した。

「あちらです。あの方角、我々が番犬に雇った拝金主義者の船がこちらへと近付いてきています。船からは煙が上がっています」

「何だつてえ？」

訝しげにタケナカが指差された方角へ双眼鏡を向けてみれば、確かに乗員区画のハッチ等から上部構造物の大部分を覆い隠さんばかりの白煙に覆われた船……金で雇った汚職軍人が乗る近隣海軍の哨戒艇が海上プラントの方へと、ゆっくりとした速度で接近しつつある。海上プラント側から見て哨戒艇の接近コースは、艦体の側面をゆっくりと見せつける様に緩い弧を描く機動だ。

「無線の呼びかけには応じてるのか？」

「はっ。艦内で火災が発生した為こちらに救援を求めているようなの

ですが、火災の影響で電波状態が悪化しているのか雑音が酷く、おまけに向こうは錯乱もしているようで途中から英語ではなく現地言葉で捲くし立てているせいで殆ど聞き取れない状態です」

実際戦闘員が手にした無線機は日本人のタケナカには母国語よりも耳馴染んだアラビア語や英語、ソロモンの母国語であるフィリピン語でもない言語タイ語を機関銃宜しく口早に喚き続けていた。

「やれやれ、何時だって異文化交流の最大の壁は言語の違いって訳だな」

首を横に振りながら、タケナカは再び双眼鏡を覗き込んだ。

潮風が吹き、一瞬哨戒艇を覆う煙が薄れた拍子に臆気ながら上部構造物の詳細が見て取れた。

人影が見えた。消火活動かそれとも逃げ出す準備をしている乗組員かと思つたが、南国の船乗りにしてはやけに物々しい格好をしていたような――

タケナカの脳裏で本能的な警鐘が激しく鳴った。哨戒艇の船体を改めて観察し直す。

双眼鏡の焦点を哨戒艇の前半分へと合わせ直した時だった。

タケナカが目撃したのは哨戒艇の前部甲板に搭載された76ミリ速射砲の砲塔が稼働し、砲口が海上プラントへと向けられ、突きつけられた筒先が煙と閃光を放ったまさにその瞬間だった。

「全員伏せろ!!!」



—— 衝撃波が、海上プラントを揺さぶった。

Knockin' on Warfare Gate  
e39

海上自衛隊でも多数の艦艇に採用されているオート・メラール76ミリ速射砲が最初の標的に定めたのは、操縦系統が集中する貨物船の船橋であつた。

「対水上戦闘始め！ 目標、貨物船船橋！ 流れ弾がプラントへ当たらないよう注意！」

やはり哨戒艇の艦橋で手にした双眼鏡を覗き込んだ臨時艦長の江田島が（英語で）号令を発すると、現地民の船員が命令を復唱。射撃用レーダーからの情報を受け取った砲手が狙いを定めるのに合わせ、お椀状の砲塔が小刻みに上下左右へと振られる。

「ぶっ放すぞー！」

荒くれ者らしい言い方で声を上げながら砲手が主砲を発射した。

1秒間に1発以上の連射速度で5メートル弱の砲身先端から閃光と大量の発射ガスが噴き出しては、1メートルはあろうかという長さの空薬莖がずるりと砲塔の根元から甲板へと排出されるといいう工程が繰り返される。

現役時代からブランクがあるであろうにもかかわらず、砲手を務める現地民の腕は見事なモノだった。

狙い変わらず発射した全ての76ミリ砲弾が貨物船の船橋周辺に着弾。手持ちの消火器ほどもあるサイズの砲弾に充填された炸薬が直撃の度に威力を発揮し、一瞬で原形を留めぬまでに船橋を粉碎した。

当然、船橋に居た人々も諸共に。

「ハツハアたまんねえぜ！」

「月までかつ飛ばしてやったぜベイビー！」

艦橋の船員達が次々と快哉を上げる中、江田島だけは神妙な表情を強めた。

「これが我々の交戦規定という軀から解き放たれた戦場BLACK OPSというものですか」

警告も武装解除も降伏勧告も命じなければ、自衛行動という名目の為に敵から先に撃たせて部下を危険に晒す事もない、一方的な無警告の攻撃。

文明レベル単位で戦時国際法の概念が通用しない特地の帝国軍や武装勢力を相手にしているのとは話が違う。

異なる世界線だと理解し認識していても、今居る場所世界が国際刑事裁判所が存在する地球である事には違いないからこそ、海上自衛官としてのキャリアで1度たりとも実行してこなかった問答無用で砲撃を行い人命を奪ったという事実にならざる江田島は心のざわめきを覚えてしまう。

(いえ、実戦の場で自分の身可愛さに思い煩うのは今この場では相応しくありませんね)

砲火の火蓋は切られた。たった今江田島が、彼自身の決断で攻撃命令を下したのだ。

後で悔悟するのだとしても、まずはこの作戦を成功させ、核テロを今や実行寸前のテロリスト達を阻止しなければそれどころではない。

江田島は内心をこれ以上露とも漏らす事無く艦橋で仁王立ちになりながら、計器盤上に置いたタブレット端末へと視線を下ろした。

端末の画面には海上プラント上空に飛ばした無人偵察機から送られてくる映像が表示されている。

無人機が撮影した映像は専用のプログラムと情報科隊員達の手によってフィルタが掛けられ、海上プラントと貨物船周辺に展開する脅威目標——武装した敵戦闘員や敵の海上戦力にピンを立て、優先的に排除すべき標的を江田島達に教えてくれるのだ。

あとは片つ端からそれらを排除していき、海上プラントと貨物船を制圧する為に送り込まれる兵士達の道を切り開くのが江田島達の役割であった。

「おっばじまったぞダッチ！」

『ああ聞こえたとも。出陣の号砲だ。』

全員しつかり捕まってる！ビッグウエンズデーに突っ込むぜ、振り落とされるんじゃないぞ！』

レヴィの呼びかけに荒々しい声を上げてダッチがスロットルレバーを一気に奥まで倒すと、ふた回りは大きい哨戒艇の船体へピタリと張り付くように並走していた魚雷艇が、換装されたウォータージェット推進に押し出される形で哨戒艇の陰から勢いよく飛び出した。

次いで魚雷艇の尻で激しく泡立つ水流を引つ被りながらも、兵隊を満載した2台のゾディアックが魚雷艇には劣るものの急加速しながら哨戒艇を追い抜き、魚雷艇の功績を追いかけた。魚雷艇にも魚雷管を遮蔽物代わりに遊撃隊とプライスとユーリといった多数の兵士達が甲板にしがみついている。

魚雷艇の艦首では被せられた防水布が猛烈な向かい風を浴びてバタバタと暴れていた。

もし貨物船のレーダーが生きていたならば哨戒艇の反応から新たに3つの反応が分裂したかのように表示されただろう。

確実に主砲を命中させられる距離へと到達するまで哨戒艇と反応が一体化する程大小の船が接近し合った状態で、且つ海上プラントと貨物船側の人間からは哨戒艇の船体に遮られて魚雷艇とゴムボートが目視されない位置取りをキープし続けるのは、操艦する江田島やダッチだけでなく運ばれる兵士達にとっても神経が磨り減る思いだった。

それが今ようやく報われようとしていた。

敵、聖戦士達やソロモンの部下達の反応も速い。魚雷艇とゴムボートが突然出現し、貨物船と海上プラントとの距離を急速に狭めていると判断するや、モーターボートに機銃と兵士を乗せた警備艇が一斉に接近を阻止すべく野犬の群れの様に動き始めた。

当然ながら襲撃側も上空で滞空中の無人機から送られる映像によって把握している。

「レヴィー！ 敵の警備艇が1時方向から2、2時方向から3、11時方向から5だ！」

魚雷艇艦尾寄りのかつては機銃座だったハッチに体を押し込んでヘッドセット経由で報告するロックの手には、自衛隊が特別に貸与したタブレット端末が抱えられていた。

「あいよロック！ 鉛玉の雨でたつぷりお出迎えしてやるよ！」

その声と共に、艦首部分ではためていた防水布の塊が戒めから解き放たれて空に舞い上がった。

防水布の下でその時を待っていたレヴィーが、寧猛な笑みを浮かべて甲板上にその姿を晒した。

普段とは違い音量カット機能を兼ね備えたヘッドセット——これも自衛隊が貸した物——を装着した彼女が居る位置、現役時代には37ミリ機関砲が設置されていた其処には新たななる機銃が据え付けられている。

——M134ミニガン。

1発の威力では37ミリ砲弾には到底敵わない代わりに高速回転する6本の銃身から毎分数千発という圧倒的速度で7・62ミリ弾をバラ撒く。

元々は特遣部隊のヘリ部隊がドアガンとして用いていた兵器だが、陸上車両や小型艦艇の機銃として運用される場合も珍しくない。

今回の作戦に辺りへりから降ろされ特遣から持ち込まれたソレは自衛隊の手により魚雷艇の甲板に設置された代物であった。銃手を護る為の防弾版も追加されている。

急速に縮まる警備艇との距離を見計らったレヴィの手がボタン式のトリガーを押し込んだ。

速過ぎる発射速度のあまり、機銃というよりも小さな龍が火を噴いたかのような発射炎が生じた。5発に1発の割合で装填された曳光弾も発射間隔が短過ぎて殆ど切れ目が見えず、可視化された弾道のそれは銃弾ではなくレーザーのそれに近かった。

一瞬で放たれた数百発の7・62ミリNATO弾が先頭の警備艇を縦に切り裂いた。

元が機銃と兵隊を乗せた以外は民間仕様のモーターボートだ。ラグリーン商会の魚雷艇の様に一部でも装甲を施している訳でもない。瞬時に乗っていた聖戦士諸共穴だらけにされ、燃料系に曳光弾を受けた警備艇は爆発炎上する。

「ハツハア！ サイツコウにご機嫌なベイビーだぜえ！」

ロアナプラでも滅多にお目に掛かれない（出回ってないとは言っていない）兵器の火力にレヴィのテンションも最高潮だ。

6連銃身の筒先を振り、続いて貨物船方向から向かつてくる警備艇を更に1隻、宣言通り鉛玉の雨でズタズタに引き裂く。最早雨を超えた銃弾の嵐とでも呼ぶべき火力だ。

代償となる甚大な弾薬消費への対策として、レヴィの足元には給弾ガイドでミニガン本体と接続された特大の弾薬箱と動力源となる小型バッテリーが固定されており、早くもその周囲には排出された空薬莖と分離したベルトリンクの小山が形成されていく。

レヴィが掃射した方向とは別方角、海上プラント方向からも警備艇の小集団が接近しようとしていた。

乗っている戦闘員がAKや機関銃を一斉に発砲。互いに高速で海面を疾走する船上からの銃撃だ。放たれた弾の大半は大きく的を外したが、それでも超音速の銃弾が至近を通過していく衝撃波の音が時折魚雷艇とゾディアックに伏せる兵士達の鼓膜を震えさせる。

相対距離が迫るにつれ彼らの耳が拾う飛翔音も頻度を増しつつあった次の瞬間、後方から飛んできた何か魚雷艇の頭上を超高速で通過したかと思うと、小集団の鼻先の海面が突然爆発した。

哨戒艇の76ミリ砲の着弾だった。毎分60発前後の間隔で砲弾を放つ速射砲は、目標を最初に潰した貨物船の艦橋から制圧部隊の援護へと切り替えたのだ。

銃弾が海面を叩いた時に生じる飛沫が小魚が跳ねた時のそれなら、海面に突入した76ミリ砲弾はシャチかはたまたクジラか。

1発目は直撃しなかった。2発目は至近弾だった。爆炎を伴った水柱はそれだけでもモーターボートを呑み込みかねない規模だった。

3発目が直撃弾となった。

先頭のモーターボートのほぼ真下で炸裂した事で船体の後ろ半分が戦闘員ごと消滅。前半分は巻き上がった爆風と水柱によって何メートルも上へと吹き飛ばされ、粉碎された船体と乗員の破片を撒き散らしながら魚雷艇とゾディアックの頭上を飛び越えていった。加えて1隻が爆発的に持ち上がった海面に押されて横転した。

残りの警備艇は頭上から滝のように降ってくる海水と派手に散った仲間の末路に、泡を喰って散り散りにUターンする。

「ヒュウ！ 独立記念日の花火も形無しだぜ！」

「こちらブラボー<sup>B P a B</sup>指揮官。砲撃支援に感謝する！」

レヴィが快哉を叫び、ブラボートの大半を占める遊撃隊の長としてバラライカが哨戒艇へ律義に感謝を述べた。

バラライカから通信を受け取った江田島はこう思った——これが海自の船で乗員も自衛隊員であれば、最大船速でドリフトしながらでも初弾から直撃させられたのですが。

それから操舵手に急速回頭を命じた。敵側に横つ腹を晒す形になるが、こうする事で艦尾側の40ミリ機関砲も貨物船と海上プラントを射界に収められるようになる。

敵陣との距離が詰まれば詰まるほど、当然ながら迎撃も激しさを増していく。事態を把握した2つの目標からも反撃が飛び始めた。

警備艇に積まれていた火器といえませいぜいアサルトライフルや軽機関銃に過ぎなかったが、海上プラントと貨物船から飛んでくる反撃の火力はその比ではない。

前者2つにとどまらず、防護力を上げた改造魚雷艇でも直撃すればタダでは済まない重機関銃に、AKシリーズと並ぶ民兵愛用のRP Gが何条もの煙の尾を引いて魚雷艇とゾディアックめがけ飛び交い始めた。

対戦車ロケット砲

高速で疾駆する船上の兵士達は、切り裂かれる波濤とは別の水飛沫を浴びるようになった。浅い角度で船体へ着弾した弾丸があらぬ方向へ跳弾したかと思えば、海面にぶつかって起爆したロケット弾の破



片がミニガンの防弾版にぶつかって甲高い音を奏で、驚いたレヴィが頭を引っ込める事も起きた。

「覚悟はしてたけど何だこれ！ 何だよこれえ!? こんなに酷いなんて聞いてないよ俺え！」

『船体に当たる音が僕のところまで聞こえてくるよ。いやはや上空の偵察機からこっちに届いてる映像も凄いで。火線と射撃陣地の数の多さはまるでノルマンデイノルマンディ並みだ！』

「ロックもベニーも余計な泣き言くつちやべってないでさつさとアタイが次に撃つ獲物を探しな！」

警備艇から貨物船の射撃陣地へ、レヴィが狙いを転じようとするよりも先に旋回を終えた哨戒艇の40ミリ機関砲が新たに火を噴いた。

76ミリ速射砲よりもサイズは小さくとも機関砲の威力は歩兵が持てる小火器とは一線を画す。同じ40ミリでもグレネードランチャー用の40ミリ榴弾と機関砲の40ミリ砲弾ではタバコとサインペン並みのサイズ差だ。サイズが違えば威力も別物と化す。

すなわち、40ミリ砲弾の破壊力は据え付けられた重火器ごと聖戦士や彼らに加担する犯罪組織の戦闘員を原型を残さず撃破するには十分という事だ。

76ミリでは流石に威力が過剰過ぎて貨物船と海上プラントへ必要以上の損害を与えかねない。その代わりと言わんばかりに40ミリ砲弾が敵陣の各部を次々と耕していった。

そのたびに1つ、また1つと、その場にいた哀れな犠牲者ごと制圧部隊を妨害する射撃陣地は消滅した。

「アフガニスタンに居た頃を思い出しますね大尉！ 砲撃支援を受けながらの突入作戦なんて何時以来でしょうか！」

激しく上下左右に揺さぶられながらその光景を注視していたボリスの口元に笑みが浮かんだ。

まるで賑やかで楽し気な出し物を前にした、瞳も輝く子供のような笑み。

悪徳の街の中でこのような彼女の姿をお目にかかった者など皆無であろう。副官と同じように潮水で濡れた髪と旧ソ連軍空挺服を体に張り付かせながら、しかしやはり彼と同じようにバラライカも微笑んだ。

稚氣と狂氣が同居した、心底楽し気な笑顔だった。

「3234高地の戦い以来だぞボリス！ アフガン撤退が近付いてからはヘリからの航空支援も我が隊には中々与えられなかったからな！」

「そもそもアフガンに海は無かったですから、艦砲射撃に援護される事自体初めての事では!？」

「その通りだ上等兵！ この歳になって未だに捨てられる処女が私に残っていたとは！ 人生とは分かんものだ！」

「心より同意いたします！」

バラライカとボリスだけではなかった。

遊撃隊の全員が等しく、同様の笑みを浮かべていた。それどころかアトラクションを楽しむ子供達みたいに揃って笑い声すら上げた位だ。

これだ。

これを我々は求めていたのだ。

纏わりつくのは銃の中にまで入り込むような砂塵ではない。ベタバタとした海水だ。

ここはアフガニスタンではない。何千キロも遠く離れた東南アジア

アの海の上だ。

背中を任せているのは旧ソ連軍自慢の砲兵部隊ではない。怪しさの塊しかない謎の日本人達と現地調達したたった1隻の哨戒艇だ。

——ああ、それでも。それでも同じなのだ。

隣には戦友。後ろには大砲。目前には敵。砲弾が飛び交い砲声がオーケストラを奏でその度に死体が生まれる中で高まりきった殺気と戦意を全方位から浴びせかけられながらただひたすらに突き進む。

悪徳の街で明け暮れた抗争では物足りなかった空気が、刺激が、要素が、アフガニスタンに揃っていたモノがこの場には満ち溢れている。

バラライカは。

ボリスは。

遊撃隊は。

スペツナズ第318後方攪乱旅団第11支隊の亡霊達は今この瞬間確かに実感したのだ。

戻ってきたのだと。

——懐かしき戦場へと。

Knockin' on Warfare Gate  
e40

貨物船まであと数十秒で迫り着くという距離まで近付いた所で、魚雷艇とゾディアックは当初の予定通り二手に分かれた。

目標との距離が近付けば近付くだけ迎撃の銃火は苛烈さを増す。生き残りの機銃座だけでなく拳銃からアサルトライフルまで、手当たり次第に銃を取った貨物船の乗組員が船べりから身を乗り出して撃つてくるようになったのだ。

何発かがミニガンの防弾板にぶつかり、甲高い音を立てて跳ね返った。

「しやらくせえ！ こいつでも喰らってな！」

数発分の銃弾の仕返しにレヴィが取り付いたミニガンから数百倍のライフル弾が吐き出された。

レーザーじみた曳光弾とその数倍の不可視の通常弾による弾幕が船べりに集結した乗組員達を舐めた。弾雨をモロに浴びた乗組員のミンチが量産され、幸いにも弾雨から逃れた者は慌てて体を引っ込める。

哨戒艇と魚雷艇からの砲火に混乱が続く貨物船の乗組員は眼下の海上に意識を割かれるあまり、頭上からも接近しつつある存在に気付く事が出来なかった。

『ブラボーヘジガバチーより通達。これより乗船への支援行動を行う』

貨物船の頭上に改造された大型ラジコンヘリが出現していた。

数時間前の哨戒艇制圧にも投入された武装ドローンだ。哨戒艇が砲撃を開始するよりも前に密かに貨物船と海上プラントからの目を掻い潜る様に発進させておいたのである。

短翼に搭載された連発式グレネードランチャーが発射された。発射されたのは哨戒艇制圧に使った催涙弾ではなく、化学反応で大量の白煙を展開する通常の発煙弾だ。所々砲撃で掘り返された貨物船の甲板が煙で覆われていく。

加えて乗船地点から引き離すべく機銃代わりのHK417が火を噴いた。非殺傷の制圧を目的としていた哨戒艇の時とは違い今度は実弾だ。威嚇目的も兼ねた曳光弾である。強調された火線に追い立てられた乗組員は慌てて逃げていった。

煙の展開に合わせる形で魚雷艇は貨物船の下へと到達した。ダツチの操船によって尻を振りながら急減速し、貨物船の船体にへばりつくようにして魚雷艇は停止する。甲板上の兵士達が手を伸ばせば鏑が目立つ船体に触れられる程の近さだった。

「流石ね。相変わらずダツチは良い腕をしている」

これにはバラライカも賞賛の言葉を囁いた程だ。

「ロープ用意！」

ボリスの指示に数名の遊撃隊員と同乗していた自衛隊員が機材を構えた。

それは遊戯用の水鉄砲をミリタリー調にデザインし直したような見た目をしていた。銃らしき機構に大型の筒が取り付けてあり、銃口に当たる部分からは鋼鉄製のフックが突き出ている。

正体は数百キロの荷重にも耐えるロープ付きフックを圧縮空気ですくへと射出するラインランチャーだ。救助隊や海上保安庁でも似たような装備を運用しているが、これは軍事作戦用にカスタマイズされた代物だった。

周囲で轟く砲声や銃声と比べれば小動物の屁のような発射音が生じると、射出されたフックはあっさりビルの数階分はある高さ位置する貨物船の船べりを超えて白煙の中に消えた。

一緒に延びていったロープを手繰り寄せれば落下防止の柵や構造物にフックが掛かったしつかりとした手応えを確認。

次に兵士達が用意したのは腰に提げていた大型辞書サイズの四角い物体だ。遠目からでは照明部分の代わりにモーターとギアが取り付けられた大型の懐中電灯にも見えなくもない。

先陣を切る乗り込み要員がギア部分に貨物船から垂れ下がるロープを挟み合わせる。腰に巻いた頑丈な戦闘用ベルトへ取り付けてあるカラビナと接続し準備完了。

「出番だルマジュール。貴様が先陣を切れ」

「言われずともアンタらの鉄砲玉って役割は忘れちゃいないよ」

その中にはルマジュールも含まれていた。旧ソ連空挺軍装と化学戦用防護服自衛隊員の集団の中で、長丁場対策に大量の拳銃用予備マガジンがぶら下がった戦闘用ベルトが追加されているのを除けば独りスーツ姿を貫く頭一つ分以上小柄な彼女の存在は極めて浮いていた。

「マスクを着ける。こちらブラボー、貨物船への乗り込みを開始」

グリップ部分の作動ボタンを押し込むと内蔵された小型高出力ながら静粛性も備えたモーターが唸り、ロープにがちりと噛み合わせたギアを回転させる。

ロープに接続するだけで重装備の兵士を機械の力で引き上げる昇降装置によってルマジュールを含めた最初の乗り込み要員達の体が、腕力頼りのそれよりも何倍もの速度でみるみる貨物船の船体を昇っていた。

海面から10メートルは上にあつた甲板まで10秒とかからなかった。装甲車や武装ドローンを筆頭に特地から持ち込まれた数々

の未来装備同様、この機材を使用するにあたりルマジュールを除けば先陣を切った兵士達は当然持ち込んだ張本人たる自衛隊員他、プライスとユーリが務めている。

「007にでもなった気分だよ」

嘆息の呟きを漏らしながらあつという間にルマジュールの体も甲板上へ運ばれていく。

昇降装置からカラビナを切り離し自由の身になると同時に、ルマジュールはミツチエル・アームズのシグネチアシリーズ45口径拳銃の銃口を巡らせ警戒態勢。ほんの数日前に伊丹へ突きつけたジェリコはバックアップとして別に携行している。

プライスのメインアームはSAS時代でも愛用していた銃の一つであるサイレンサー装備のMP5。サイドアームは自動拳銃最大クラスのデザートイーグル。

背中にはドアや障害物をこじ開けるフリーガンツールを背負う。これは特大のバールにピッケルを合体させたような代物で、消防隊や救助隊にも採用されている道具だ。

ユーリは45口径弾を分間1000発以上の速度で高速連射するクリス・ベクター。サイレンサーにドットサイト、フラッシュライトとフォアグリップを装着。サイドアームは45口径モデルのHK・USP。フリーガンツールよりも更に過激な<sup>マスターキー</sup>万能鍵にも使えるショットモデルのベネリM4ショットガンも持ち歩く。プライスもユーリも船内での接近戦を重視したチョイス。

プライスとユーリが伴う自衛隊員は特戦群から借りたHK416を装備。

続いてバラライカと遊撃隊が昇降装置を使って乗船を果たした。旧ソ連軍上がりの彼らは当然、AK74やカービンモデルのAKS74UといったAKシリーズで統一されている。

「便利なモノだ。アフガンに居た頃にこの道具があれば作戦の幅をよ

り広げる事が出来ただろうに」

軽々と嵩張る戦闘装備一式ごと引っぱり上げられたバラライカもまた、そのような感想を口にするのだった。

乗り込み要員が全員昇ってくるまで警戒に当たっていたプライスは、背後で金属同士がぶつかる音を聞いて銃口を振った。

自分達が打ち上げたのとは別のフックが新たに落下防止用の手すりに引っ掛けられていた。

最後の遊撃隊員が手すりを乗り越えてくるのに数秒遅れ、重装備の兵士達とは真逆の露出激しい格好にホルスターを両の脇からぶら下げただけという出で立ち女ガンマンが、軽々と手すりを飛び越えながら貨物船上に降り立つ。

銃口を外す代わり、プライスはガスマスク越しに剣呑な視線で突然現れたレヴィを見据えた。

「貴様を乗り込み要員に加えた覚えはないぞ」

「アタシにガンつけんじゃねえよオールドマンご老人。そもそも聖戦狂いのターバン野郎と連中以上に怒りでイカれた麻薬業者薬屋オヤジに最初にケンカを売られたのはアタシ達なんだよ。」

バオの店ごとケツを吹っ飛ばされそうになったケジメはテメエの手でやらせてもらわなきゃ気がすまねえんだよ。

安心しな。アンタらの動きにはきっちり合わせてやる。連中のド頭タタに風穴開ける前に姐御に撃たれるのも御免だからな」

「……」

意識をバラライカへ向ける。ガスマスクで判り辛くともプライスの考えが読み取れたバラライカは、冷徹な小隊指揮官としての思考で



以って厳かな肯定を示した。

「彼女の腕は我々が保証しよう。仮に足を引つ張るようであればルマジュールごと背中から撃ってもらって構わんぞ」

「俺の仲間には味方の背中を撃つヘマは居らん」

プライスは断言した。その言葉を聞いた、プライス達に同行する少数の自衛隊員達はただでさえ感じていたプレッシャーに更なる重みが増すのを確かに感じて泣きたくなつた。

——今更だけど、何で俺達別の地球で世界の命運を賭けた作戦に参加してゐるんだろうな？

「俺達の部隊はブリッジとエンジン部の確保だ。バラライカ大尉、積み荷の確保は任せるぞ」

時間が惜しい。端的に担当する目標をレヴィイへ告げると、プライスとバラライカはそれぞれ部下と飛び入りの助っ人<sup>レヴィイ</sup>を連れて部隊を展開するのであつた。

——貨物船に接舷した魚雷艇から防護服姿と旧ソ連軍の格好をした兵隊達に混じり、タンクトップにホットパンツ姿の女ガンマンというタケナカから教えられた息子の仇である運び屋の特徴と一致する存在が貨物船に強行乗り込みを行うのを認識した瞬間、ソロモンの意識は憤怒と復讐心の炎に全てを塗り潰された。

「全員完全武装で貨物船へ向かえ！俺の一張羅も今すぐ持ってこい！」

「おい待——」

猛牛も真つ青の勢いで去っていくソロモンをタケナカは制止しようとして……最後まで言い切る前にその声は力を失った。

人生も資産も手にした何もかもを復讐心の竈に投げ込んだ怒れる親という存在を止められる言葉など、自分には持ち合わせていないと自覚してしまったからだ。

去って行ったソロモンへ向けて伸ばしかけた手で頭を乱暴に搔き毟ってから、タケナカは無力な中年から歴戦の闘士に思考を切り替え、瞬時に決断を下した。

「貨物船で運んできた核物質は荷揚げ済みだったな!？」

「その通りです司令官！ 本日港町に散布予定だった分は既に施設上へ運んであります！」

「よし。だったら今すぐへりに運んで出発させろ！ 起爆装置の取り付けは運んでる途中でやらせちまえ！」

その分金もかかりはしたが、念の為パキスタンの同志から予備機も調達しておいて正解だった。

「敵の船に向かって撃ってる連中は引っ込めさせろ。俺達が核物質を持ってしていると相手が把握してるなら必要以上に砲撃をしてはくるまい。アチラさんも自分達の攻撃で核の保管容器を壊したかないだろうからな。」

敵の本命は核物質を確保する為の歩兵だ。今すぐにもこのプラントにも乗り込んでくるぞ。

兵力の半分は敵の迎撃に回して残りは核物質の積み込み作業とへの発進準備に専念させる。あの積み荷は見た目以上に重量があるから人手が要るからな。今大事なのはへりが出発するまで時間稼ぎだ！」

口早に聖戦士達へ指示を飛ばしながらタケナカも愛用のブローニング・ハイパワーを抜いて初弾を装填した時だった。

部下に命じて封鎖させようと意識を向けた下層からの階段から、突然赤と黒を纏った人影が飛び出してきた。

文字通りの意味で。

ドスン、と金属製のコンテナに着地する音が砲火と喧騒の中で妙にハッキリとその場に響き渡る。

赤と黒の装甲で全身を覆い髑髏を模った兜を装着した人型の存在。戦国時代の武者の様にも、中世時代の騎士の様にも見えるが、手にしているのは長剣でも刀でもなく最先端のデザインをした銃火器である。

それはタケナカや海千山千の聖戦士達が初めて直面する類の存在だった。

「何だあ、ありやあ？」

見間違えでなければ。

あの存在は下の階からコンテナ上まで何メートルもの高さを飛び越えて現れなかったか？

呆気にとられるタケナカと聖戦士達へ、赤黒の鎧姿の存在は躊躇いなく銃口を向けた。

タケナカの意識が現実へと帰還した。叫ぶ。

「敵だ！」

プリント上でも銃撃戦が勃発した。

Knockin' on Warfare Gate  
e 4 1

チーム・ブラボーが貨物船に乗り込みを開始するのと同じ頃――

海上プラント制圧を担当するチーム・アルファを乗せた少数のゾディアックもまた目標の足元へと到達を果たしていた。

半潜水式プラットフォームの最たる特徴である、上部構造物の土台部分と同等の長さを持つ超特大の浮力タンクに設けられた足場へと伊丹の乗るゾディアックが接舷。

揺れるボート上で素早く立ち上がると、見た目の重装備とは裏腹にするりと伊丹は足場に飛び乗った。

プレートアーマー板金鎧を彷彿とさせる伊丹の装甲戦闘服だが、メイン装甲である炎龍の鱗は重機関銃すら貫通を許さない強度を持ちながら比重は鉄よりも軽いので見た目以上に身軽に動けるのである。ヘルメット込みの全身装備ながら胴体部分のみを防護する<sup>大口径ライフル徹甲弾</sup>グレードIVクラスのパニアーマーと同程度の重量といったところか。

またファンタジー素材で作られ<sup>キングスレイヤー</sup>皇宮強襲作戦で圧倒的性能を帝都中に知らしめたこの装甲戦闘服は、一世一代のお披露目以降も主にアルヌスの職人や伊丹の現地嫁達によって更なる改良が施されている。

主に脚部と腰部、そこから背骨をなぞる様に外付けのフレームと叫ぶべきパーツが追加されている。フレームの素材はやはり特産の極めて剛性が高く、にもかかわらずこれまた極めて軽量の鋼材だ。何でも素材のレア度で言えば炎龍の鱗と同レベルに貴重なレアメタル

らしい。

ゾディアックから足場に降りたのは伊丹だけだ。

他のメンバーにトラブルが発生した訳ではない。最初から作戦で決められていた事だった。

「それじゃあ2分後にまた会おうぜアベンジャー。精々上で待ち構えている連中を引っ掻き回してやりな！」

「へいへい。そつちこそちゃんと言時間通りに上陸してくれよセイバー」

軽口を交わした後、伊丹を残して剣崎やキヤクストーンを乗せたゾディアックは足場から離れていく。

2分後に残りのチームアルファは別の場所から海上プラントへ上陸する予定だ。上陸予定地点へと混沌の最中を掻い潜る様にゾディアックを向かわせる剣崎達自衛隊員。

そんな中、初期型のM4ライフルを抱えながら波に揺られていたレイが我慢出来ないといった様子で抗議の声を発した。

「やっぱりわからん。彼一人だけ送り込んで囚にするのが作戦？」

本当にそれで大丈夫なのか!? この頭上で待ち構えているのは武装ヘリや核物質すらも揃え中東で実戦経験を積んだ重武装のテロリスト集団なんだぞ!？」

「私にも判らないな。ミスター・イタミが只者ではないのはこちらも何となく理解出来てはいるが、流石にこれは彼を捨て駒にしたとは思えないのだが」

剣崎達の態度が納得出来ないという態度を隠さないキヤクストーンとレイに対し、剣崎達が見せた反応はニヤリと口元を歪める事であった。

それは心からの信頼と少しばかりの憧憬が込められた、男臭い笑みだった。

「捨て駒？ ハッ、オタクらはあの野郎を知らないからそりや勘違い  
しちまうよな」

「勘違いだつて？」

「戦場でのアイツは捨て駒で終わるようなタマじゃない。それどころ  
か敵に回しちまおうもんなら相手がたとえ機甲兵器を揃えようが万  
の軍勢で取り囲もうがドラゴンを引き連れて喉けられようが最後は  
アイツに戦力差をひっくり返されて負ける羽目になっちまう。

「正真正銘のジョーカーなのさ、あの男はな」

「にしても最近はどういう役回りばかりやらされてるよなあ。あー  
やだやだ、同人誌を読みながらサボってた頃が懐かしいよ、もう」

取り残された伊丹は、愚痴りながら手にした銃の安全装置を解除し  
た。

今回持ち込んだのはH&K・M27IARである。平たく説明する  
なら特殊作戦軍にも採用されているHK416アサルトライフルの  
銃身を肉厚の延長型に取り換え、精度向上と長時間の連続射撃に耐え  
うるよう改良した支援火力重視モデルだ。

銃の役割としてはHK416のような自動小銃よりも（これも自衛  
隊で採用されている）ミニ軽機関銃のような分隊支援火器に近い。  
使用弾薬もHK416と同じ5.56ミリNATO弾を使用する。

デカく重く大量の弾丸をバラ撒く大容量の火力が売りなベルトリ  
ンク式機関銃とは正反対の、軽量さがもたらす機動力と高精度の銃撃

でついで敵を制圧するというコンセプトからこの銃は生み出された。それもあり基本的にM27IARは倍率付きスコープを搭載しての運用が標準だ。ただし伊丹のM27IARが機関部上部に取り付けていたのは単なるスコープではなく熱探知型の赤外線サーマルスコープだった。更にその上へ接近戦向けのマイクロドットサイトも追加してあるので肉眼での射撃ももちろん可能。

ベルトリンク式軽機関銃と比べての欠点としては、自動小銃の延長線上で設計された存在から装弾数が少ない従来通りのマガジン式である点が在る。

それを補う為に伊丹が持つM27IARには100発装填のドラムマガジンが装着してあった。装甲戦闘服の胴体面に並ぶチェストリグの弾薬ポーチに収められている予備マガジンも従来の30発用ではない、装填部から下が通常よりもひと回り太くなった60連発大容量マガジンで統一されている。これによって射撃可能時間の短さと装填回数増大を補うのだ。

他にHK416と違いを述べるならば銃剣用の着券装置が追加、いや復活している点か。伊丹もまた今回は不意の遭遇格闘戦対策に64式銃剣を装着し、姿勢安定のフォアグリップも銃身下部に追加して運用を行う。

背中にもスリングで武器を携帯していた。こちらはショットガンのケルテック・KSG。

世にも珍しいチューブ式マガジンが横2列並んだブルパップ型ポンプアクション機構を搭載した散弾銃の先駆けとなった事もあり、大々的な軍や法執行機関への採用は無くとも銃の知名度は高い。前述の構造によって短銃身モデル並みの短い全長ながら従来のポンプアクション式散弾銃を大きく上回る14連発の装弾数を持つ。

ショットガン用の弾薬は今回左太股に配置した大型ポーチに詰め込んで持ち歩く。元々はガスマスク用のポーチだが、別に入れる物はガスマスクに限定しなくてもいいのである。中に仕切りがあるので複数種の弾丸を持ち歩く事も出来た。

大部分は鹿などの大型獣用——人間も含む——バックショット12ゲージ散弾だ。貨



物船を担当するユーリと同じくマスターキー代わりのスラック<sup>粒</sup>弾も所持している。そして別の散弾用弾薬ポーチには念の為に伊丹が持ちこんだ特別な弾薬が収められていた。

——尚これらの銃器は自衛隊でも特殊作戦群でも導入されていない、例によつて閉門前に伊丹の関<sup>戦</sup>係者<sup>友</sup>より送られてきていた彼の私物という名の員数外装備である。

特地派遣部隊全体でここまで個人の私物が活用される事になるとは、送り主の某傭兵大学生もこれには予想外だったであろう。

「んじゃま行くとしますか」

独りごちてから、伊丹は上層へ上がる階段へ向き合おうと軽く膝を曲げ、体の重心を心持ち下へ落として身構える体勢を取った。

意識するのは足の裏、普段は意識しないような部分の筋肉をピンポイントに動かす。そんなイメージを伴いながら、伊丹は決定的な単語を唱えた。

「——ブースト！」

次の瞬間である。

全身装甲の戦闘服と武器弾薬諸々で目方3割以上は重量が増している筈の伊丹の体が、一瞬で何メートルもの高さへと飛んだ。

地面を蹴って跳んだのではない。装甲服の足底部分から爆発的に発生した推進力による飛躍。

踊り場の手すりを超える高さまで到達した伊丹が姿勢と向きを瞬時に微調整した上で再び「ブースト！」と短く発すると、今度は背中から発生した噴射が伊丹の体を斜め上へ向けて射出し、更に途中の踊り場を飛び越える形で吹き抜けになった中間層へと一瞬で到達を果

たした。

中間層の足場へ着地。噴射の慣性の名残に背を押されるがまま早足に数歩駆ける間に素早く見回し、より上の階層への通路を見つけると発動ワードを唱えれば、再度伊丹の体が見えない力に押されて飛ぶ。途中にある通路の手すりや放置された機材といった障害物などその上をひとつ飛びだ。

通路の途中には本来海上プラントの作業員が利用するのであっただろう部屋の扉が在った。

突然扉が開き、数名の武装した男達が通路へ出てきた。丁度伊丹の進路上へ立ち塞がる形である。

本来は海上プラントへの制圧に下から上がってくる伊丹達を迎撃しようという魂胆だったのだろう。彼らの誤算は伊丹がよりにもよって単騎で、しかも何と階段を使わず飛んできたので、男達が予想していたよりずっと早く彼らの敵がこの階層へ到達してきた事だった。

S Fかファンタジーの登場人物にしか見えない赤と黒の装甲で全身を纏った存在が、彼らめがけて砲弾よろしく宙を飛んで突っ込んでくるなど、もっと予想していなかった筈だ。

「飛び入り失礼するよ！」

伊丹の発言は文字通りそのままの意味だった。

瞬時の判断と訓練による反射でM27IARのグリップをしつかりと握り締めながら腰溜め気味に体の前へ突き出し、そのまま伊丹は驚愕に目を見開く先頭の男めがけてノーブレーキで飛び込んだ。

装着した銃剣によって強化樹脂と鋼鉄製の槍と化したライフルが男の胸部へ突き刺さる。伊丹自身の体重に猛烈な加速が加わった事で刀身が柄の部分へ達する程に深々と埋まり、64式銃剣が元々長い刀身だったのもあって鋭利な切っ先が肋骨ごと心臓と重要な血管を貫いた上で背中から飛び出す。

串刺しにされた男の背後には更に数名の男達が続いていた。不意

を突かれてまだ構えられてはいなくとも、AKや旧式のM16などで武装している危険な敵に変わりはない。

伊丹は躊躇いなく男に突き刺したままのM27IARを発砲した。貫通力が高い5.56ミリ弾は容易く即死した男の死体を貫き、後続の男達にも命中した。銃口も男の死体に密着していたせいで発射音は重くくぐもっていた。

腕力ではなく、体全体の捻りが生み出す力を使ってライフルを振り、刺突と射撃で胴体が血まみれの男の死体から引き抜くと、滑らかな動きでストックを肩付けし、接近戦用の小型ドットサイトを使って照準を行い改めて他の敵のバイタルパートへ弾丸を叩き込んだ。相手に反撃を許さない早業だった。

伊丹のすぐ真横に位置する部屋にはまだ通路に出てきていなかった敵が残っていた。

「不信者め！  
??????」

伊丹に理解出来ない悪態を喚きながら拳銃を引き抜いて伊丹に向けている。

銃を払いのけるには微妙に離れ過ぎていて、ライフルを向けて撃つのは間に合わないタイミング。だが、

「ブースト！」

瞬間的に背中ของあまり自覚して動かさない部分の筋肉を意識する感覚をイメージしながら発動。

それに反応するのは炎龍の鱗の装甲服へ追加された、名刺大の水晶板に特地の魔法プログラムの言語が精緻に刻まれた呪符である。

原理と構造はテユカとレイとロウリイが伊丹の為に用意した盗人対策の呪符と同じだ。

ただしこちらの開発にロウリイは関わっておらず、主にレイが魔法術式のプログラムを構築し、アルヌス在住の魔法的要素に関する細

工が得意なドワーフの手で呪符が作成された。

エルフが用いる精霊の力を借りて発動する精霊魔法の術式も組み込む事で、大気中の精霊の力を自動的に吸収して魔法発動に必要なエネルギーを供給する作動方式となり繰り返し返しの発動も可能となった。これはレイのような長年に渡り魔導の研究と鍛錬を積んだ才能持ち者でなくとも、発動イメージのコツさえ掴めば短期間の訓練期間で済ませられるという副次的効果も齎した。

噴射の反動で本来装着者へ襲い掛かる負荷は新たに外付けしたフレームに組み込み、直接装着者の肉体へ伝わらない構造にした事で最小限に抑えている。

背部だけでなく足底部にも呪符が組み込みである。魔法は発動時のイメージが反映され易いのもあって噴射の出力や方向をある程度装着者で制御可能だ。

伊丹の思考と発動ワードを読み取った呪符は人間大の重量物を容易く射出してしまえる程の推進力を放出する魔法を発動する——  
—これこそが伊丹が手にした人外の機動力の正体だった。

ちなみにこのような機能が開発されたのは、『門』の研究の息抜きに伊丹がレイを誘って鑑賞した作品の中に天才科学者が空飛ぶ装甲スーツを作ってテロリストに戦いを挑む映画が大きく関わっているのかもしれない、そうではないのかもしれない。

実戦運用に必要な訓練もこの世界へ試作型『門』が繋がる以前からテストターを強制させられた繰り返し行っていたので、運用する伊丹の方も慣れたものだ。

「うう、幼稚園の時のトラウマが」

……へりや飛行機に乗っているのでもない生身の状態で勢い良く宙高く飛び上がる度、主に股間辺りへ急激な重力加速度の変化を覚えるその都度、生来の高所恐怖症が頭をもたげそうになる彼の心境を除

きさえすればの話だが。

色々あつて過去のトラウマを嫁達に告白した直後からしばらくの間、トラウマ治療と称して嫁達との営みに少々倒錯的なプレイが加わったのも、きつと関係のない話題である。

魔法エネルギーの噴射により伊丹は再び人間砲弾へと変貌する。

常識を超えた瞬間機動に敵が撃った拳銃の弾丸は的を外す。逆に砲弾と化した伊丹の体は敵に真正面から直撃した。

けたたましい激突音を発して伊丹諸共に敵の肉体は背後にあつたロツカーへ大きくめり込んだ。ロツカー自体が激しくひしゃげる程の衝撃だ。相手の体から歯や骨が何本も砕ける感触を伊丹も確かに感じた。

血反吐を吐いて崩れ落ちる敵に、きつちりとどめの銃弾を頭にお見舞いしてから部屋を飛び出し、改めて上を目指す。

飛んで、跳ねて、舞い上がって。

『アベンジャー、その階段を上がつた先が敵戦力が集結している最上層部だ』

『セイバーだ。予定の上陸地点で待機中。後はお前さんの合図待ちだ』

そうして仲間の無線を受け取りながら、伊丹はタケナカ達の前へ姿

を現したのだ。

Knockin' on Warfare Gate  
e42

突然コンテナ上に出現した赤黒の存在は、シルエットとしてはス  
マートだがそれでも全体的に厳つい全身鎧姿からは意外な程身軽な  
動作でその場から飛び降り、聖戦士達の一斉射撃を逃れてみせた。

「敵は単独だ！ 制圧射撃で頭を押さえながら包囲して数の差で押し  
潰せ！」

タケナカの指示を受けて聖戦士が攻勢に動いた。特にアツラーへ  
の信仰心と西側諸国への憎悪に篤い、殉教的精神に満ち溢れた何人か  
のアラビア人がAKを乱射しながら突っ込んでいく。

赤黒の鎧の男——伊丹の動きはタケナカ達の予想よりもずつ  
と速かった。

周囲を掠めていく大量の銃弾に思わず「うへっ!」などと小さく悲  
鳴を漏らしながらも——歩兵用の弾丸程度、炎龍の鱗は掠り傷も満足に  
付けられずに弾いてみせると分かってはいても、それはそれとして  
おっかないものはおっかないのだ——

飛び降りて火線から逃れた伊丹は出力を抑えたブーストを発動さ  
せて滑るように側面へ移動。放置された採掘機材やパイプが積まれ  
た一画へ身を隠し、聖戦士が敷こうとした包囲網の更に外側へ既に逃  
れていたのである。

僅かに体を斜めに傾けて露出させ、M27IARの銃身側面を遮蔽  
物へ押し付けながら伊丹は発砲した。部分的に銃本体が固定された  
事で精度と安定性が増した射撃が聖戦士からは予想外の方向から襲  
来し、真っ先に突っ込んできた殉教者志願の男どもを望み通りに次々  
と撃ち倒す。

聖戦士達から引いた位置且つ高所に陣取ったタケナカは、先陣が成す術もなくいきなり射殺されたのを見て取るや、伊丹が既に別の場所から射撃を行っていると素早く見抜く事が出来た。

「ヤツは既に移動しているぞ！ おい機関銃持ってこい！ あそこの位置に向かって射撃を加え続けて援護してやれ！」

RPDやRPKといった機関銃も加わり、降り注いだ大量の弾丸が採掘機材とパイプを穿ち、削り、大量の火花と破片が伊丹の周囲で舞う。

「まったく何度体験しても堪えないよなあ、こういうの！」

ボヤキながらも銃を撃つ手は止まらない。ウンザリとした口調とは裏腹に伊丹の体は全自動の機械の如く的確な射撃を繰り返す。

尤もそれは聖戦士達が遮蔽物越しに拳大の物体を山なりに投げ始めるまでの間だったが。

その中の1個がたまたまフルフェイスヘルメットに覆われた伊丹の頭部に当たり、鈍い音と小突かれるのに似た衝撃を齎した。

「あ痛て——やっべ」

足元に転がる卵型をした鉄製の球体。AK系統と同じく旧ソ連で開発されたRPD—5・破片手榴弾に在るべき筈の安全レバーは、無い。

精度重視の短連射ではなく、ともかく怯ませる事を優先した長い連射を繰り返しながら、ブーストの存在も忘れて自前の脚で伊丹が採掘機材から飛び出した1.5秒後、手榴弾が爆発した。

飛散した破片の大部分は採掘機材とパイプが受け止めてくれた——が、一拍の間を置いて今度は採掘機材自体が紅蓮の炎と共に爆発した。その採掘資材は燃料を使用して稼働する代物であり、完全に



燃料が抜かれずに放置されていたせいで可燃性ガスが溜まっていたのが原因だった。

「ぬおわあー!?!」

予想外の規模の爆発に背中を叩かれた伊丹は声を発して体勢を崩す。聖戦士達にとっては絶好の機会。

やはり殉教精神逞しい聖戦士の1人が伊丹に向かって突撃し、至近距離からAKをマガジン1本分長々と撃ち放った。

距離が近かった事もありマガジンの半分近い7.62ミリ・ロシアンショット弾が伊丹に着弾した。

確りと直撃した証である火花と弾ける破片が伊丹の上半身を中心に何度も生じ、その度に細かく彼の体は細かく揺さぶられ……

だが倒れない。血の1滴すら流れない。

それどころか低レベルのボディアーマーなら容易く貫通するライフル弾が1発たりとも鎧を貫通せしめていない事を間近で見せつけられた聖戦士は、ファティークから覗く両目を愕然と見開きながら慌てて新しいマガジンを装填しようと試みる。

ガチャガチャと騒々しく撃ち切ったマガジンを外したところで伊丹の伸ばした手がサツとAKを奪い取った。

聖戦士が顔を上げた。適度に煤けて迫力が増した骸骨ペイントの仮面が目の前にあった。聖戦士はしめやかに絶望して哀れっぽくアツラーへの祈りを唱えた。

「これ驚かされたお返しね」

熱が残る銃身を握って伊丹は片手でフルスイングした。上から下へ、野球のバットというよりも解体工事中の作業員がハンマーを振るうのに近い軌道だった。

聖戦士の頭部とAKの木製ストックが纏めて砕けた。敵と判断した存在に伊丹はとことん手加減無用であった。

伊丹の方も貫通はしなくとも命中した場所を中心に痺れるような鈍痛を覚えてはいたが、痛みはすぐに引いていった。それが戦闘の興奮で分泌されたアドレナリンの効果かロウリイの眷属としての再生能力によるものか区別はつかなかったが今は気にしない事にした。

「そろそろ時間だと思っただけど」

使い物にならなくなったAKを投げ捨てて伊丹はM27IARの射撃を再開。感覚で弾切れが近いと察知し、随分と軽くなった100連ドラムマガジンを捨てると大部分が挿入口よりも太い60連マガジンに交換しておく。

その様子をM1-8が止められたヘリコプターデッキまで移動を終えていたタケナカは一部始終目撃していた。

「運び屋のあんちゃんはどうっからかスーパーマンでも連れて来たってえのかア？」

こうなったらロケット<sup>R</sup>弾<sup>P</sup>を使わせるのも止む無しか。タケナカがそう思案した時、突然彼の視界に白が広がる。

どこからともなく発生した煙が採掘機材と軍需物資が乱雑に並ぶ上層デッキを急速に覆い隠そうとしていく。聖戦士達の視界も奪われ、銃声が減る代わりに静かな困惑と混乱が広がっていく。指揮官に随伴していた護衛達も忙しなく銃口を振り向けた。

「発煙弾……う？」

不意にタケナカは頭上でポン、と乾いた破裂音が生じたのを聞いた。咄嗟に見上げる。

明らかに始めた空に大型のラジコンヘリにしか見えない機影が浮かんでいた。ラジコンヘリから小さな煙の尾を曳いて落下した40ミリグレネードランチャー用の発煙弾がまた1発、上層デッキの一面に

落ちて白い闇を生み出した。

タケナカの灰色の脳細胞に電撃が走った。白煙の中に吞まれてしまった部下達へ向けて大声で警告する。

「さっきの奴は陽動だ！ 敵の本隊が——」

唐突にタケナカの目の前に居た護衛の頭部が半壊した。

タケナカの周囲にも次々と銃弾が飛来し、足場や手すりや資材ケースに着弾して火花と破片を散らす。咄嗟にヘリパッドへ上がる金属製のタラップの陰に身を投げ出さなかったら、タケナカもまた護衛と同じ末路を辿っていたのは間違いない。

「チツ。体格の割に意外と良い反応するじゃないか」

頑丈な遮蔽物へ逃れた事で白色の人影が見えなくなると、熱探知型スコープを覗き込んだ剣崎は小さく舌を打った。

伊丹と分かれてきつかり2分後、剣崎達もまた銃声が交わされ始めた海上プラントへの上陸を開始した。

単独行動させられた伊丹の様に律義に階段を上ってきたのではない。貨物船制圧班と同じく、ラインランチャーと昇降装置を使って海上プラントの外壁部を上がって来たのだ。

狙い通り海上プラントに居座る聖戦士達は異世界産の魔法式強化外骨格を装備した伊丹に意識を割かれ、本来彼らへ警告を発する警備艇も今や大半が哨戒艇からの砲撃支援で失われた事もあり、大胆なアプローチで直接上層デッキまで辿り着いた剣崎達の接近は察知されなかった。

そこにタイミングを合わせて投下されたのが改造武装ドローンによる煙幕の展開だ。聖戦士の頭上から満遍なく投下された発煙弾は

設計通り内蔵の化学薬品により大量の煙を発生させ、渦中にいる者達の視認可能距離を大幅に奪っていた。

勿論それは剣崎達の計画通りである。

この世界の時代よりも四半世紀近い技術格差と選りすぐりの特殊部隊員の練度が、頭数の差を極限まで0へと近づけてくれる。

今の状況で特に重要なのは前者だ。

剣崎達を使うライフルには全て対象の熱を可視化するタイプのスコープが装着されている。暗視装置の一種に含まれるが使用用途は夜間だけでなく、煙が充満している空間といった肉眼では不可視のベールであろうとその向こう側を見通す事も実現してくれるのだ。

『凄いですねこの赤外線スコープ。我が軍で採用されたばかりの代物よりずっと小型軽量なのに解像度が段違いだ！ 映画の人間狩りに来た宇宙人が使っていたのだからここまでじゃなかったですよ』

作戦開始前に用意された装備を試してみたレイのこの評価が全てだった。

ヘルメットや直接頭部への装着が必要なヘッドマウント方式とは違い、銃本体に搭載するスコープ方式にはガスマスクで顔を覆っていても使用に支障が出ないという利点がある。

剣崎達は白煙の中の聖戦士達が放つ体温を識別して敵を視る事が出来るが、赤外線スコープを持たない聖戦士達側から煙の外側に居る剣崎達を察知する事は出来ない。

故に繰り広げられたのは対等な戦闘ではなく一方的な排除。

HK416等の剣崎達が使っている銃の方にはサイレンサーも取り付けてある。これは銃声だけでなく目立つ発砲炎も軽減する効果もあつた。

ただでさえ煙で視界を奪われている聖戦士からしてみれば最悪の組み合わせである。

そうして聖戦士達は煙の中で訳も分からず、何が起きたかも理解出来ないまま次々と頭部か胸部の即死部位バイタルエリアを正確に射貫かれて次々と射殺されていったのだった。

難を逃れたタケナカは革命闘士として培った分析能力をフル回転させた。

銃声らしい銃声は聞こえなかった。さっきのジャック・カービー作家の作品から出てきたような格好の敵が使っていた銃にサイレンサーの類は装着されていなかったのは確認済みだ。

ついさっき護衛の命を奪いタケナカにも襲い掛かった銃弾。着弾による血飛沫の跳び方からも全身鎧の敵ではなく、全くの別方向から撃たれたものなのは間違いない。

加えて煙の中でも的確に最小限の射撃で聖戦士達に致命傷を齎す新手の攻勢は、明らかに煙幕越しにタケナカ達を認識する何らかの手段を用いているとしか考えられなかった。

明らかに無頼の犯罪者とはかけ離れた装備に戦術に練度。あまりにも先鋭的過ぎる武器の数々。

「連中どう考えてもあの街の無頼漢じゃねえ、飛び切り腕っこきの特殊部隊じゃねえかありやあ！」

タケナカは天を仰いだ。すぐ頭の近くでタラップを掠めた銃弾が火花を散らしたので身を縮め直さなければならなかった。

次第に数を減らす同志達の反撃の銃声に逸る胸中を思考から切り離し、僅かな時間タケナカは分析に没頭する。

この状況でタケナカ側にとって最大の敵は発煙弾が生み出す煙による極度の視界の制限だ。

解決策はすぐに思い浮かんだ。鉄火場と化しても尚変わらず海上プラントに流れ続ける潮風が齎してくれた。

頭上に位置するヘリパッド上に伏せてどうにか難を逃れている部下達へ叫ぶ。元々貨物船から核物質をプラントへ移したらすぐにヘリでロアナプラ上空まで運ぶつもりだったので、乗員含めヘリの離陸準備は既に完了していた。

「今すぐヘリのローターをぶん回させて離陸させろ！ 最大出力でだ！」

すぐにM I—8のターボシャフトエンジンが甲高い駆動音を轟かせ始めた。

出力の増大に併せて一際高い音域へと向かう吸気音の中にやがて虫の羽音に似た空を叩く音が混じり始める。動力の伝達を受けて20メートル超の回転翼が少しずつ加速しながら回転を始めた音だった。

高速回転するメインローターは同時に潮風よりもずっと強烈な旋風を発生させた。竜巻の瞬間風速にも匹敵する強風だ。

砂利に車の窓程度なら砕いてしまう程の加速度を与えてしまう規模のダウンウオッシュは発煙弾の煙を容易く吹き飛ばした。

伊丹や剣崎達を隠していた白いベールが一瞬で奪われ、それによってタケナカ達は敵の新手の姿を初めて視認した。

ガスマスクに手足の指から頭の先まですっぽり覆う森林迷彩の防護服。明らかに何らかの汚染物質の存在を前提とした装備だ。

「マズいぞー！」

「敵はあそこにいるぞー！」

当初から大きく数を減らしながらも、殺すべき敵を目視した聖戦士達は奮い立った。一斉に反撃の銃火を浴びせる。

剣崎達の反応も素早い。M I—8のエンジン音を認識した段階で

既に今後の展開を予測し、各々敵側の銃弾の貫通を許さない金属製の機材やコンクリートの構造物に駆け込んで遮蔽を確保していたので、被弾した者は1人もいなかった。

「今のは……日本語だと?」

敵が仲間に発した警告を微かに耳に拾ったタケナカは一瞬虚を突かれた様子を見せたが、すぐに目の前の鉄火場へと意識を向け直す。

人手を失い過ぎた。今や2方向から迫る敵を抑え込むのに足りるかどうかの兵力しか残っていない。重量物である貨物をへりまで運び込むだけの人ではこれ以上割けそうになかった。

それでもまだ手はある。

「あっちのターミネーター紛いの鎧男はRPGや重機関銃を使ってでも構わないからとにかく足止めを専念しろ！」

俺は貨物に向かう! ヘリは俺の真上でホバリングしながら航空支援だ!」

タケナカがタラップの陰から飛び出すのと、ターボシャフトエンジンの唸りが最高潮を迎え、とうとうヘリパッドからM1-8のランディングギアが離れたのは同時だった。

伊丹は熱探知スコープの上部に追加したマイクロドットサイトで以ってM27IARの照準をタケナカに合わせ——引き金を絞り切る直前、浮き上がったMi-8が獲物を見据えた猛禽類の如く自分を見据えているのに気付いた。

予備機としてタケナカ達がパキスタン軍から調達したMi-8もまた、ロアナプラで三合会のビルを蹂躪した機体と同じく懸架用短翼<sup>スタブウイング</sup>へ兵器を装備したガンシップモデルだった。

主武装は23ミリ機関砲を内蔵したガンポッド。

「それは……反則でしょ」

並大抵の装甲車両を容易く撃破する23ミリ砲弾が伊丹へ襲い掛かった。上層デッキの床が置かれた物資や機材ごと粉碎されて次々と小さなクレーターは刻まれていった。

20ミリ以上の砲弾ともなれば発射される弾頭内には高性能爆薬が充填されるので、直撃は免れても至近で着弾すれば内蔵の爆薬がその破壊的エネルギーを解放し、その際に生じる衝撃波や飛散した破片でも生身の人間の命を奪うか重傷を負わせるには威力は充分だ。

「ぶ、ブーストお！」

横っ飛びに跳躍発動。炎龍の鱗は航空機関砲すらも貫通は許さないが、それでも人間が喰らえば粉碎どころか消滅レベルの砲弾の直撃を食らうのは真っ平御免だった。

一瞬で何メートルも横方向に移動した伊丹は機関砲の射線からの回避には成功した。

伊丹の横を通過した砲弾が着弾した先。彼の側からは見えなかったが、砲弾が命中した木箱の表面にはこのような警告文が刻まれていた。

——爆発物！火気厳禁！

本来の機関砲弾よりも何倍もの爆発が生じた。手榴弾と採掘機材に残った可燃性ガスが齎したそれよりも遥かに強烈な威力だった。

今度はブーストではなく爆風により、彼の意志が介在しない状態で伊丹の体が床と水平に飛んだ。瞬間的に伊丹は後頭部に両手を回して出来る限り体を丸め込んだ。訓練ではなく実戦で体に自然と染みつけた反射的動作だった。

次の瞬間、伊丹は背中から落下防止の柵に激突した。



海側に向かつて柵が大きく傾きひしゃげる程の衝撃。下に落ちず上方向へ跳ね上がっていたらそのまま数十メートル下の海面へ消えていただろう。あまりの衝撃に伊丹の意識が瞬間的に暗転した。

「アベンジャードアウン！」

剣崎達もタケナカを撃とうと試みるも、こちらは生き残りの聖戦士達の反撃やM i - 8の側面ドアに陣取った機銃手が剣崎達よりも高所から機関銃の弾丸を降らせてきたが為に失敗した。

賭けに勝ったタケナカは貨物船から移したばかりのコンテナに飛びついた。

扉のロックを解き力を込めて扉を引く。普通のコンテナの扉よりもずつと重い手応え。扉からコンテナの内壁全体に至るまで張られた分厚い鉛板がその理由だった。

コンテナの中身はドラム缶だった。大人1人がすっぽり収まるサイズで円柱型の本体が長方形型の鋼鉄のフレームで補強されている。それが4本、一纏めに固定されている。

姿を現した4本のドラム缶全てに丸を取り囲む3つの台形というマークが禍々しく描かれていた。

全身を強打して一時的に気絶していた伊丹は、胸元から生じた耳障りな雑音で意識を取り戻した。

世界が回る感覚と激しい耳鳴りのせいで、雑音の出所が何なのか、それが何を意味しているのかを理解するまで数瞬の時間がかかった。

同じ音は剣崎やキャクストン達も聞いていた。プラント制圧と貨物船制圧を担当する隊員の全員が今回身に着けているある装備が音の出所だった。

——それはガイガーカウンターといった。

伊丹とタケナカが無線機を手にして友軍へと呼びかけたのは、奇し

くも同じタイミングだった。

「こちらアベンジャー、ガイガーカウンターに反応有り！ 核物質の存在を確認した！」

繰り返す、核物質の存在を確認した！」

「ヘリコプター、聞こえるか。今すぐ牽吊用のロープを投げ下ろせ。」

起爆装置はこちらで直接核物質の容器に取り付けるから、作業が完了次第このまま直接ロアナプラまで運んで予定通りの高度から投下を  
行え。

今この瞬間こそ俺達が仲間の無念を晴らす正念場だぞ！ 総員気を引き締めろ！」

Knockin' on Warfare Gate  
e 43

奇襲制圧は速度こそが肝要だ。

敵が状況把握を済ませ迎撃態勢を整えるよりも出来る限り早く奥深くへ切り込み、慌てふためく雑兵を刈り取り、心臓部に刃を突き立ててこれ以上の抵抗力を奪う。

船舶にとってブリッジが頭脳なら動力部は心臓。貨物船を担当するブラボーチームの内、これらの制圧を任されたのが自衛隊から抽出した隊員を率いるプライスとユーリだった。そこに現地陣営の助っ人であるルマジュールに加え、その場の飛び入りでレヴィも参加している。

船内通路への突入に真つ先に斬り込んだのは後者の2人だった。

レヴィは2丁拳銃トウハンドの異名の由来であるステンレス製ベレッタのロングスライドカスタム、通称ソードカトラスを両手に。

ルマジュールは45口径モデルのシグナチュア・シリーズをコンパクトな構えで通路に照準。

通路にはうっすらと煙が漂っていた。開幕に艦砲射撃で吹き飛ばされた上階のブリッジから流れてきたのだろうか。

「死角に注意しろ！」

「言われなくても分かってるよ」

後ろに続くプライスの警告にレヴィが吐き捨てた瞬間、戦闘服にクフィールを顔に巻いた中東系の男が飛び出してきた。手にはAK。

『敵——』

さっぱり意味不明な言語で叫び声を発し終える前にレヴィとルマジュールの銃が吠えた。9ミリパラベラム弾と、45ACP弾に次々と胸部と腹部を穿たれた敵戦闘員が自分の血に沈む。

それが合図となつたかのように、通路の前方や途中の小部屋から一斉に新たな敵戦闘員や銃を握りしめた手が出現した。

『撃ち殺せ！』

AKや拳銃が一斉に火を噴く。敵の火線は多いが正確とは言えない。鋼鉄の床や壁を走る剥き出しのパイプに銃弾が当たってそこから火花が散つたが、どれもが的を外してレヴィやプライス達の周囲を通り過ぎていった。

——このアツラーの御遣い気取りどもは腰が据わっていない。身を低くして的確を縮めたレヴィの口元に獣の笑みが浮かぶ。

「どこ狙ってやがる、銃ってのはこうやって撃つんだよ！」

ソードカトラスが立て続けに吠える。2丁拳銃を操るレヴィの射撃スタイルは軍や警察の教本からかけ離れたものにもかかわらず、荒々しい構えながら彼女が放つ弾丸は次々と的を捉えていく。後ろで見ていたプライスにはそれが不思議だった。

彼女とは違い普通に両手で1丁の拳銃を扱うルマジュールの方は、C・A・Rシステムと呼ばれる接近戦に特化した射撃法に近いスタイルだ。こちらにもまた正確に標的を射貫き、数を減らしていく。

ガチン、と3丁の拳銃が同時に音を立ててスライドを交代させたまま沈黙した。

「リロード！」

「カバー！」

間髪入れず声を掛け合い、前衛と後衛が入れ替わった。

2人の得物はプライスがMP5、ユーリがクリス・ベクター。女性陣の拳銃とは違いどちらもサイレンサーを取り付けている。

本物の銃というよりも極端に出力を上げた改造エアガンのそれに似た、抑制された銃声。高速の短連射を繰り返しながらプライスとユーリは前進。戦線を押し上げ、敵側の銃火が加速度的に減少していく。

イギリス人とロシア人が瞬く間に拵えた死体に目をやったレヴィイは思わず口笛を吹いてしまった。

どれもこれも頭部や胴体の中心部、それも全ての弾痕が拳大に纏められていたからだ。サブマシンガン特有の連射速度と2人の見事な反動制御が組み合わさった賜物だ。しかも照準から射撃までの速度も極めて短い。

「まるでとにかく速く正確に撃つようプログラムされた銃座ですね」

ルマジュールも新しいマガジンを装填しながら、まるで初めて真のプロフェッショナルの仕事を目の当たりにした一般兵の気分で嘆息してしまう程の技量だ。

これを身軽な格好どころか、ハロウインの幽霊の仮想じみた防護服にガスマスクまでつけた上でこなしているのだからまたとんでもない。おまけにどちらもルマジュールの父親でもおかしくない歳でこれなのだから。

イギリス人とロシア人の後に続く自衛隊員が2人の背中を守る。撃ち倒した敵戦闘員の傍らを通り過ぎる間際、頭部へ1発お見舞いしてきたつちりととどめを刺しておく事も忘れない。

死体を量産しながら船内を進む彼らはそれほど時間を掛けず上下へ向かう階段に到達した。

「俺達はブリッジの確保に向かう。2人付いてこい。残りはエンジンルームの制圧に向かえ」

「姐さん、私達はどつちにします?」

「まだ撃ち足りねえ。上に居た連中の大体は艦砲射撃でカツ飛んじまっただろうから、まだまだお楽しみが残ってそうなのは下の方だな」

「りよーかいつす。んじや私も姐さんとおんなじで」

更に部隊を分け、プライスとユーリは自衛隊員を引き連れて上への階段に足をかけた。

レヴィの予想は正しかった。待ち伏せを警戒し、危険な気配を感じる場所ではスタングレネードを予め投げ込みつつ進んだプライス達が遭遇した戦闘可能な敵兵は片手に足りる数だった。

一層、また一層とブリッジに近付くにつれ、煙は濃くなり通路に転がる死体も増えていく。

やがてブリッジ——今やブリッジの残骸と呼ぶべきに到達した。

「クリア」

「クリアと言えばクリアではあるな。ここに無事なものなど何も残っちゃいない」

かつては貨物船の制御を担う場所だった空間は、一目でその役目を果たせないと見て取れる有様と化していた。

操船装置から通信設備まであらゆる機材が複数発直撃した砲弾が解放した破壊力により、完全に原形を失った鉄屑へと果てている——そこに居た不運な人間ごと。

高性能爆薬がたつぷり詰まった、直撃すれば小型船程度なら一撃で爆散させられる76ミリ砲弾を立て続けに受けたのだ。着弾した部分から最早鋼鉄の外壁ごとブリッジに面する全ての窓が消滅してし

まったお陰で、ブリッジだった空間は靦面に見晴らしも風通しも良く  
なっていました。

きつと彼らの多くは何が起きたのかも分からぬまま、超音速の爆風  
か砲弾の破片でバラバラに吹き飛んで即死したに違いない。

……それでも一応、首や胴体が半ばから無くなっていない、四肢が  
まだくつついている者については念の為頭部を撃って回っておいた。  
数秒後には息絶えるのだとしても、引き金を引くだけの余力や手榴弾  
を起爆させられる可能性は削っておいてしかるべきだ。

設備ごと消失してしまっただとなれば兵員を残して確保し続ける事  
すら不要だろう。

艦尾よりに位置し、今や過剰な程見晴らしが良くなった元ブリッジ  
からは貨物船の甲板がほぼ一望出来た。

核物質を運んできたこの貨物船は甲板上の巨大な観音扉方式の  
ハッチが展開される事で船体の大部分を占める船倉が露出し、クレー  
ンを使って貨物の積み下ろしを行う仕組みだ。

プライス達は海上プラントに寄り添う形で停泊しての積み下ろし  
作業中のタイミングを狙って奇襲をかけた。結果、全開のまま操作さ  
れなかった船首よりの船倉のハッチよりバラライカ達遊撃隊が相互  
に火力支援を行い、頭上から船倉内の敵にAKの雨を浴びせつつ、  
ロープを使って船倉内へと次々に突入していくのがハッキリと見え  
た。

遠目からでも見事な戦闘行動を取っているのが伝わってくる。装  
備は（プライス達が元々居た時代を考えれば当然のだが）時代遅れ  
でも個々の練度は勿論、特殊部隊の始祖と呼ばれる英国SASを長年  
率いてきたプライスも思わず唸り声が漏れそうになる位極めて優れ  
ているのが隊員間のチームワークだった。指揮官によって完璧に統  
率された1つの『個』としての群体の見本をプライスは目の当たりに  
していた。

加えて士気の高さも尋常ではない。仮に敵として相対していたな  
らば、未来装備（一部ファンタジー要素含む）の性能差をフルに活用  
して本格的に対応される前に押し潰す事が出来なければ我々であつ

てもかなり手古摺らされただろうと、プライスは冷徹な分析の下にそう結論付けた。

それはユーリも同様の考えだったようだ。

「兵隊もそれを率いる指揮官も、どちらもとても優秀だ。こんな場末の港町のマフィアをさせておくには勿体なさ過ぎる、そう思うよ」  
「違いない。だが生憎世の中つてのは優秀な兵士程貧乏くじを引かされるものだ」

「俺達のように、か？」

「そんなところだ……む？」

眼下の光景を睥睨していたプライスは変化に気付く。

——海上プラントのクレーンが可動し、吊り下げられたコンテナが貨物船上に向けて下ろされようとしていた。

クレーンが動いている事はプライス以外の兵隊達も察知していた。部下達が船倉内へとロープ降下していくのを援護していたバラライカとボリスの頭上をワイヤーとフックで吊られたコンテナが通過していく。ブリッジが存在する船尾構造物と遊撃隊が突入しつつある船首側船倉の中間に下ろそうとしているのは明らかだ。

「大尉殿！」

「分かっている軍曹。十中八九プラント側から増援を送り込もうという腹だろう」



コンテナは20<sup>約6メートル</sup>フィートクラスの中型コンテナ。1個小隊程なら収納出来るサイズだ。

「コンテナを撃て！ カラシニコフの弾なら容易く中身まで通る！」  
バラライカの命令を受けて随伴していた遊撃隊がAKを発砲した。  
薄い鉄板で構成されたコンテナの表面で火花が散り、彼女の言葉通り次々と穴が穿たれていく。

同時にコンテナ両端に備え付けられたドアが内側から開け放たれた。開口部に立つ人型のシルエットに、絶好の機会だと火線が集中した。5・45ミリと7・62ミリ口径のライフル弾が立て続けに着弾する度に人影が細かく震えた。

瞬間、射撃を命じたバラライカが真っ先に背筋を貫く悪寒に襲われた。それはアフガンの荒涼とした渓谷地帯で敵の待ち伏せを受けた時に何度も味わってきた、久方ぶりに覚えた感覚だった。

「射撃待て！ 総員警戒を厳にせよ！」

指揮官の声を聞き逃す者など遊撃隊にはいない。すぐに射撃が止まりマガジンを交換。次の指示と状況の変化に備える。

コンテナ内から姿を現した影は確かに人のシルエットではあったが、同時に普通からはかけ離れていた。極度の肥満体系を思わせる輪郭がやがて未だ水平線近くに位置する陽光を浴びて詳細が明らかとなった。

自衛隊員達が纏う化学防護装備よりも一回り以上分厚い防護繊維を用い、更に表面へ装甲板を追加した改造対爆スーツ。チタンと極厚の防弾ガラスを組み合わせたバイザー付きの、バラライカ達からしてみれば見慣れた顔面まで防護する旧ソ連軍の防弾ヘルメット。大量の弾薬類と手には大口径のM60E3・ベルト給弾式機関銃。

バラライカ達が放った銃撃が全身を覆う過剰なまでの防弾装備によって無効化されたのは明白だった。

もしプライスとユーリ、そして伊丹がそれを目の当たりしたならば、血相を変え警告の意味を込めてその名を叫んでいたであろう。

——  
重火力装甲兵と。

特注の一張羅に着替えて仁王立ちになったソロモン・ハキマンは機関銃を持っていない手をポーチへ突っ込んだ。

本来弾薬を収める為のポーチの1つは直接無造作に詰め込まれた白い粉末で膨らんでいた。驚掴みにした粉を顔へ持つていくと思いきり鼻から吸い込む。ただでさえ憤怒と憎悪で血走っていたソロモンの目が、瞬時に効果を発揮した高純度のアッパー系麻薬によって一層狂気を帯びた。

彼が入ったコンテナには配下の麻薬組織の中でも選りすぐりの精鋭も乗っている。改造対爆スーツを着たソロモン程ではないが旧ソ連軍の横流し品であるチタン製ボディアーマーを筆頭に手足も防弾繊維製の戦闘服で保護し、これもやはり旧ソ連製のRPD軽機関銃で武装。

コンテナに満載した生半可な火力では通用しない重武装の部下を率い、リミッターを無理矢理解除された臂力で以って何キロもある銃火器を枯れ枝よろしく振り回しながら息子の仇を求める怒れる父親は絶叫した。

「俺の！ 息子を！ 殺した奴はどこだ！！！！」

遊撃隊の火力を遥かに超越する弾幕がバラライカ達へと降り注いだ――

Knockin' on Warfare Gate  
e44

聖戦士のヘリコプターは10メートル程の高度でホバリングすると、ゆっくりとタケナカの頭上へと移動した。

葉巻型の機体底部が開くと、機内の乗員が内蔵のウィンチと接続された吊り下げ用のロープをタケナカの下へ投げ落とす。

聖戦士を指揮する古強者の革命闘士の目には、それがまるで地獄に垂らされた蜘蛛の糸のように見えた。

実際タケナカの今の環境は地獄みたいな有様だった。時間と資金を掛けて集めた兵力も物資も瞬く間に失われ、せっかく築き上げた海上基地は炎に包まれた墓標と化しつつあり、許されざる大国と因縁の悪徳の都を一举に墓標へ変える計画はたった1日で完全に破綻を迎える瀬戸際にある。

「けどまだだ、まだ生きている限り終わっちゃいない……！」

降りてきたロープのフックを核物質が収まったドラム缶の保護フレーム部分へと掛ける。4本1セットで纏められた容器の中心部へ取り付ける形だ。ガチリと脱着防止の留め金が閉じる音と手応えに、自然とタケナカの口元が歪んだ。

赤と黒の装甲服の兵士を囷に攻め込んでいた敵の本隊は、タケナカの護衛の生き残りとホバリングするヘリからの掃射でこれ以上は攻めあぐねている様だ。部下達の奮戦を無駄には出来ない。

核物質のドラム缶は吊り下げ用ロープが垂れる底部ハッチよりも大きい為、核物質を散布する重要な爆薬の設置は今この場で済ませる必要があった。

周囲を見回せば戦闘に巻き込まれて誘爆せずに生き残った爆発物はすぐに見つかった。プラスチック爆薬に起爆用信管、それ自体が紐状の爆薬である導爆線デトコードと無線式遠隔爆破装置。銃声と機関砲の轟音をBGMに素早く作業をこなす。

数十秒かけてタケナカは頑丈な格納容器を破壊するのに事足りる量の爆薬を何重にもデトコードを巻き付け束ね、遠隔起爆装置と接続した一式を格納容器とフレームの隙間に押し込み設置を終えた。

後は起爆用リモコンから信号を送信すれば信管が秒間数千メートルで燃焼するデトコードを点火させ、デトコードの炸裂が本命のプラスチック爆薬を誘爆させて頑丈な格納容器に致命的な破壊を齎し、同時に空中で起爆させる事で生じた爆風が悪党の街全体へ拡散させる役割を果たすのだ。

「いざ機体を上昇させろ！ このままロアナプラへ向かわせるんだ！」

起爆用リモコンをしっかりと戦闘服の胸ポケットへ押し込み、格納容器の上に飛び乗ったタケナカは吊り下げ用ロープを何度か引いてヘリの乗員へ合図を送った。機体底部に空いた穴からタケナカの作業を見守っていた乗員がパイロットに合図を送る。

パイロットがエンジンの出力を上げると積み荷の重さできつくロープが張った。ギリギリと軋みながらもやがて格納容器が地面から離れる独特の震えが靴底越しに伝わってきた。

1メートル、3メートル、5メートル……視線の位置はヘリパッドの高さを越え、タケナカは今や空の住人となった。

足場である格納容器が右へ左へ不安定に回り始めたので、慌ててタケナカはロープへ改めてしがみつくのと、ロープが伸びる穴から機内へ乗り込む為に両手両足を使ってよじ登り始めた。

まるで本当に地獄から地上へ戻る為に蜘蛛の糸をよじ登るカンダタになった気分だ———実際にはこれから地獄を生み出そうとしている立場なのに。皮肉な構図にタケナカは思わず苦笑した。

貨物船に残したもう1つの核物質については自前の手勢を引き連れて乗り込んだソロモンに任せだが、もう1つの目標だった北米大陸は最早諦めるしかないだろう。

ソロモンや奮戦してくれていた生き残りの護衛達も含め仲間を捨て駒に残していく形にはなってしまうが、核物質をばらまくダーティボムの起爆を阻止されてしまったのはここまでの全ての犠牲が無駄になっってしまうのだから仕方ないと、タケナカは己に言い聞かせる。

——ああ、イブラハの時もこんな気分だった。

「すまないな、だが今度こそは——」

その時だった。

突然、足元の格納容器が不自然に揺れた。

輸送へりに吊られた核物質が海上プラント上から飛び去って行くまでもう数秒のゆとりも残っていなかった。

必死に足を動かしながら伊丹はシエラレオネでの戦闘を思い出していた。

あの時とシチュエーションは奇妙なまでに似通っていた。目の前で飛び去って行くMi-8、運ばれていく荷物、その正体は化学兵器で自分やプライス達が間に合わなかったせいで欧州の主要都市が屍の山が転がる地獄と化した。

——だが今度はあの時とは違う！

「間に合ええ！ ブーストっ!!」

ほんの数メートルされど数メートル。常人の跳躍力では届かない高度から更に現在進行形で上昇中である格納容器だが、異世界式魔法仕掛けの跳躍能力ならばまだ射程内。

積まれた資材を蹴り、最大出力をイメージして作動させたブーストで押し上げられた伊丹の肉体は格納容器に手が届く高さにまで達した。思い切り手を伸ばす。

指先が格納容器のフレームをしつかりと掴んだ。遅れて胴体が格納容器の側面へ思い切りぶつかる。衝撃で無理矢理空気が肺から叩き出され、手が緩みそうになるがぐつと我慢。

もう一方の手で背中から脇にスリングで吊るしていたケルテック・KSGのグリップを握り締めると格納容器上へ振り上げた。

SF映画の小道具じみた外観のKSGだが、ブルパップ構造と2連式チューブマガジンという部分を除けば作動方式は昔ながらのポンプアクション式ショットガンだ。1発ごとに手動で再装填の動作が求められる。当然片手では出来ない。

つまりこれからやろうとしている事は一発勝負だった。薬室には既に12ゲージ散弾を装填済み。

ロープにしがみついた聖戦士どもの親玉——タケナカの足元へとKSGの銃口を突きつけた。

伊丹が何をしようとしているのか悟ったタケナカが血相を変えて絶叫した。

「やめろー!」

「やなこったー!」

日本語の叫びに伊丹も日本語で言い返しながら、片手1本でショットガンを発砲した。

距離が近過ぎてほぼ一塊に纏まった散弾が吊り上げ用フックとロープの接続部に着弾した。

数トンの荷重に耐える強靱なロープも、荷重で張り詰めた状態から集束した銃弾で引き裂かれてしまつては耐えられない。

ショットガンの轟音越してもハッキリと聞こえる破滅的な断裂音を発して格納容器を吊っていたロープが両断された。

次の瞬間、伊丹の体を不快な浮遊感が襲った。ロープを断たれた格納容器もろとも重力の法則に従い落下した。その時点で伊丹と格納容器はヘリパッドから更に数メートル程の高度に位置していた。

落下したのは伊丹と格納容器だけでなく、タケナカもだった。重量物の貨物が突然切り離された反動でロープが激しく暴れ、それにしがみついていたタケナカも振り落とされてしまったからだ。

「おおっふっ!?!」

「ぐおっ!?!」

重量物が激突する衝撃音。肉を打つ音が2つ。

伊丹とタケナカ、格納容器はヘリパッド上に落下した。

バランスを崩した容器に引つ張られ、ヘリパッドの建物寄りの位置に背中から落ちた伊丹は胴体を突き抜けた衝撃と苦痛に数瞬ばかり悶絶。

タケナカはヘリパッドの外縁近くに足から落下した分伊丹程のダメージではなかったものの、それでも固い地面に落ちて転がった痛みには呻きを漏らす。その拍子に胸ポケットから起爆用リモコンが地面に転がり落ちた。

リモコンがカラカラと地面を滑っていく音を拾った伊丹の目が反射的に追った。タケナカも自分の胸元から落ちたりリモコンを目で追いかけた。

それからお互いの存在に気付いた。

瞬時に苦痛を忘れて銃を構える。伊丹はKSG、タケナカは腰のベルトに挟んでいたCz75自動拳銃。

別の方向から銃弾が飛んできた。



「司令官！」

剣崎やキャクストンといった特殊部隊仕込み相手に未だ奮戦していたタケナカの護衛が、ヘリから司令官と一緒に落ちてきた敵にAKを乱射した。

一部が伊丹のヘルメットに着弾。フルフェイス仕様のヘルメットも勿論炎龍の鱗に翼竜の被膜でコーティングされあっさりと弾きはしたが衝撃はそれなりに徹る。

伊丹に気を取られた隙を見逃さなかった剣崎達の射撃でとうとう護衛は全滅した。だがそのせいで伊丹は引き金を引くのが遅れてしまった。

跳ね起きたタケナカがヘリパッド上を駆けた。片手で拳銃を乱射しながら、腹が出た中年オヤジの外見にそぐわぬ身のこなしで起爆用リモコンを拾い上げると、タケナカは何とヘリパッドから飛び降りてしまった。

飛び降り自殺には到底見えなかった。おそらくデツキ外縁部を囲む通路に飛び降りたのだろう。

一瞬追いかけようかと伊丹は考えたが、先程見たものの正体とタケナカ達の行動の意味を理解した途端、彼の優先順位は瞬時に上書きされた。

「敵の親玉が持ってたリモコンとなると相場は決まってるよな……!？」

慌てて格納容器へ目を向けた伊丹は自分の感が正しかった事を悟ると天を仰ぎたくなつたが最早それどころではない。

落下の衝撃で横倒しになった格納容器自体に破損は見られない。ガイガーカウンターも容器に近付いた影響で若干変動はあれど、急激に放射線量が高値を示したりもしていない、のだが。

「ああチクショウ」

小ぶりなドラム缶4本で1セットにされた格納容器の中心部や保護フレームの隙間に、贈呈用の羊羹そっくりな長方形の物体が数本纏めて紐状の存在にグルグル巻きにされた上で押し込まれていた。

伊丹も何度も使った事があるプラスチック爆薬と導爆線のセットだ。信管に繋がった無線式起爆装置の動作ランプが動作状態を知らせている——信号を受信すればいつでも起爆可能な状態。

破壊力も身に染みて理解していた。これだけの量なら格納容器どころか今居るヘリパッドごと吹き飛ばせる規模だ。絶望的状况に悪態が口から飛び出してしまいうのも仕方あるまい。

「おいアベンジャー無事か！」

「セイバー達は離れてろ！ 核物質に爆発物が仕掛けられて既に動作中だ！」

「マジかよ解体は可能か!？」

「多分そんな余裕もない！」

よりにもよって起爆用リモコンを手にした敵司令官を逃がしてしまったのだ。最早爆発を阻止できるか否か、解体出来るかどうかをも通り越し、起爆スイッチを押されるまであと何秒残っているかの段階に至っていた。

伊丹は格納容器に飛びついた。押し込まれていた爆薬を力任せに引き抜いた。起爆装置や信管を爆薬から取り除く、安全な解体を行うその時間すらも惜しかった。

「間に合ええええええええっ！」

台座部分の角から突出する形で配置されたヘリパッドは3方が海に面している。つまりデッキ部分に繋がる一部分を除きヘリパッドのすぐ下は海面だ。

ブーストすら用い、ハンマー投げのオリンピック代表をも上回る回転速度で遠心力を無理矢理稼いだ伊丹は腕が引き千切られそうな錯覚を覚えながら、ヘリパッドの外へと爆薬の塊を放り投げた。

「神を信じちやいない俺がまさか神<sup>ジ</sup>狂<sup>ハー</sup>い<sup>ディ</sup>の連中<sup>スト</sup>の真似事をして終わる事になるなんてなあ」

直後、自分諸共吹き飛ぶ覚悟を決めて苦笑いを浮かべたタケナカによつて、起爆用リモコンのスイッチは押された。